長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
20カ年誌

NASHIM

第１条　在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故等による被曝者の救済のため、長崎が有する被爆者治療の実績及び調査研究の成果を活用し、もって国際協力に寄与することを目的として長崎・ヒバクシャ医療国際協力会を設置する。

（長崎・ヒバクシャ医療国際協力会規約より）

現在のチェルノブイリ原子力発電所





（平成25年７月撮影）

現在のプリピャチ

（チェルノブイリ原発従業員居住地）









（平成25年７月撮影）



発 刊 の ご 挨 拶

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）が在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者等の救済を目的として、1992 年に設立されて 20 年が経ちました。

この間、チェルノブイリ・カザフスタン関係国からの医師受入研修を毎年実施し、多くの人材を育成してまいりました。またこれまでに発刊した医学教科書はチェルノブイリ原発事故で大きな被害を受けた周辺国の医科大学や病院で、医療従事者の貴重な教材として活用されています。さらには、故永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療の向上、発展に貢献のあった者を広く顕彰するため 1995 年に創設した「永井隆平和記念・長崎賞」は既に 9 回の授賞を数えております。

なお、東日本大震災に伴う福島第一原発事故に際しては、放射能に対する社会不安が生じたことから、東京においてシンポジウムを開催するなど、放射能への正しい理解を促すための啓発活動にも積極的に取り組んでまいりました。

このような当協力会の活動の実績により、2000 年に保健衛生の分野ではわが国において権威ある賞として認められている「保健文化賞」を受賞したほか、2006 年にはヒバクシャ医療を通して、わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしていることが評価され、外務大臣賞を受賞いたしました。当協力会の活動がこのように高い評価を受けるに至ったことは、このうえない喜びであります。

当協力会といたしましては、これからも、長崎大学、長崎県・市医師会、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、さらに長崎県、長崎市など各構成機関と連携を密にし、世界の放射線ヒバクシャ支援のため努力を傾注してまいる所存です。

このたび、設立以来 20 年間の活動を記録した「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 カ年誌」を発刊いたしました。これまで当協力会に対しご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様にあらためて深く感謝申し上げますとともに、今後一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成２５年１２月

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

会長　蒔 本　　恭



発 刊 に 寄 せ て

1986 年 4 月 26 日、当時のソビエト連邦（現在のウクライナ）において、チェルノブイリ原子力発電所の事故が発生しました。世界中を震撼させたこのチェルノブイリ原発事故に対し、支援活動が世界的に広がり、長崎県におきましても、長崎大学、県・市医師会、日本赤十字社長崎原爆病院、長崎県、長崎市等の関係機関が構成メンバーとなり、1992 年に「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」（NASHIM）を設立いたしました。

以来、NASHIM では 20 年間にわたり、多くの被ばく者を抱えるベラルーシ共和国、ロシア連邦、ウクライナ、カザフスタン共和国、韓国から多くの医療従事者を招聘し、被ばく者医療の研修事業を実施してまいりました。さらに、長崎から専門家を派遣しての医療技術指導、ロシア語や英語での医学教科書の出版・寄贈のほか、2011 年の福島原発事故による風評被害をなくすために東京でシンポジウムを開催するなど、幅広い活動を展開し、国内外から高い評価を受けているところであります。

県といたしましても、引き続き構成機関と力を合わせて、被爆地からの国際貢献・国際協力活動を継続するとともに、「長崎を最後の被爆地に」との願いを込めて、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現を世界に訴えてまいります。

「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 カ年誌」は、各構成機関はもちろん、NASHIM 事業にご協力いただいた関係者、関係団体の皆様の熱意あるご努力の足跡でもあります。ここに関係各位のこれまでのご労苦に深く敬意を表しますとともに、NASHIM 事業の更なる発展を祈念いたします。

平成２５年１２月

長崎県知事　中 村 法 道



発 刊 に 寄 せ て

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（ＮＡＳＨＩＭ）は、平成４年４月の設立からこのたび20周年の節目を迎えました。

この間、在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済のためにたゆまぬ活動を続けて来られ、輝かしいご功績を残して来られましたことに対し、蒔本会長をはじめ関係者の皆様に厚く敬意を表します。

さて、この20年の間には様々な出来事がありました。その中でも最も印象に残っているのは、平成23年に発生した東日本大震災です。特に福島では、福島第一原子力発電所の事故による放射線被曝が問題となり、日本国内に放射線被害に対する社会不安が急速に広がりました。

このような状況の中で、ＮＡＳＨＩＭは、東京シンポジウムを開催し、放射線に対する正しい知識の提供や風評被害をなくすための啓発活動を行うなど迅速に対応していただきました。

これも、ＮＡＳＨＩＭを構成する関係機関の皆様の献身的なご努力と、原爆被爆による被爆医療や放射線障害に関する調査研究に長年取り組んでこられた諸先輩方の輝かしい実績の賜物であると考えております。

このたび発刊される「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会20ヵ年誌」では、これまでＮＡＳＨＩＭが実施してきた様々な活動を振り返ることができます。改めまして、ＮＡＳＨＩＭを構成する関係機関の皆様方には、20年という長きにわたり、ヒバクシャ医療を通じ、国際貢献を果たされてきたことにつきまして、被爆地・長崎市の市長として、心より感謝を申し上げます。

今後とも、ＮＡＳＨＩＭの活動がヒバクシャ医療の発展・向上において、重要な役割を担い、なお一層御活躍されますことを祈念いたします。

平成２５年１２月

長崎市長　　田上　富久

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会２０カ年誌

目　　次

～現在のチェルノブイリ（写真）～

～発刊のご挨拶～　　長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
会　長　　蒔本　恭

～発刊に寄せて～　　長崎県知事　中村　法道

長崎市長　　田上　富久

１．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会設立 20 周年記念事業　・・・・・・　２頁

２．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の概要　・・・・・・・・・・・・　３５頁

３．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 カ年の歩み

（1）長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の発足まで　・・・・・・　４１頁

（2）長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 カ年の歩み　・・・・・・　４５頁

４．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の活動状況

（1）受入・派遣事業について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５０頁

・　研修生の受入事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５２頁

・　専門医師等の派遣事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６８頁

（2）在外被爆者（南米・北米）渡日治療事業　・・・・・・・・・・　７２頁

（3）普及啓発事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７５頁

（4）出版事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７８頁

（5）永井隆平和記念・長崎賞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８０頁

（6）支援委員会補助事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８５頁

５．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の受賞歴・関係資料　・・・・・　８８頁

６．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録（写真）　・・・・・　９３頁

７．機関誌ナシム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１４頁

１．長崎・ヒバクシャ医療国際協力会設立２０周年記念事業

2013年2月9日と10日の両日、長崎市内で「NASHIM設立20周年・長崎大学原研創設50周年記念合同シンポジウム」を開催しました。

［開会挨拶］
○長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長　蒔本　恭
○長崎大学学長　　片峰　茂
○長崎県知事　　中村　法道

［ナシムと原研の沿革紹介］
○長崎・ヒバクシャ医療国際協力会運営部会長　上谷　雅孝
○長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原爆後障害医療研究所長　永山　雄二

［来賓挨拶］
○環境大臣政務官　秋野　公造　様
○衆議院議員　　北村　誠吾　様
○文部科学省高等教育局医学教育課長　村田　善則　様
○厚生労働省健康局総務課原子爆弾被爆者援護対策室室長補佐　有賀　玲子様
○広島大学原爆放射線医科学研究所長　神谷　研二　様
○長崎市長　　田上　富久　様

第１日目　２月９日（土）　シンポジウム

［記念講演］
○講師　山下　俊一氏
（福島県立医科大学副学長、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授）
［記念講演］
○講師　朝長　万左男氏（日本赤十字社長崎原爆病院院長、長崎大学名誉教授）
［特別講演］
○講師　長瀧　重信氏（長崎大学名誉教授、放射線影響研究所元理事長）

［第９回永井隆平和記念・長崎賞授賞式］
○　受賞者　ミコラ・トロンコ氏（ウクライナ）

第２日目　２月10日（日）　講演及びセミナー

《原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会を実施》

20周年記念シンポジウム

【主催者等挨拶】



ナシム会長挨拶



長崎大学学長挨拶



長崎県知事挨拶



長崎市長挨拶

【講演の様子】









記念講演 I

長 崎 を 世 界 に

長崎大学名誉教授
(公財)放射線影響研究所元理事長　**長　瀧　重　信**

永山先生、ご紹介ありがとうございました。ちょっと声が枯れていて申しわけありません。

もう早速、演題に、時間の関係で入りますが、タイトルは「長崎を世界に」。これは組織委員会のほうから「こういうタイトルで話せ」という要望がございまして、それを喜んで受けた次第であります。先ほどのご紹介のほかに、ここでは長崎平和推進協会前理事長で顧問というタイトルも入れさせていただきました。

で、もともと、この「長崎を世界に」というのは、私が退官のときに医局の先生方にお送りしたところの中に書いたものであります。

で、在任期間は 80 年から 97 年までありますので、原研の 50 年の中で 17 年目から 34 年まで在籍したことになります。確か、先ほどのお話を伺っておりますと、私が学部長のときに原研の最初の改組があったと思います。その当時は、原研は医学部の中に入っておりました。それからナシムのほうはもう創立から 5 年前でありますが、ナシムができるときに医学部長として、あるいは平和推進協会の理事長として、随分努力させていただきました。

で、「長崎を世界に」のイントロダクションになりますが、ちょうど原研ができた 1962 年は、私はアメリカに留学しておりまして、帰るときに「何とか研究費が欲しい」と。そして、「昆布を大量に食べる日本人の甲状腺機能」というタイトルを申請しました。これは、絶対アメリカでは研究ができないからという理由であります。

その後研究費をもらいまして、非常に潤沢な研究費であります。それが、そのときの教授、我々のアパートにお呼びしたときの先生でありますが、ここは江口教授をはじめ、何人か長崎大学から次に研究者として行っていただきました。

で、そうして、研究費がありましたので、かなり一生懸命研究いたしました。で、研究費も潤沢ですから、日本で最初のこういうカウンターであるとか、測定器も十分に買って、研究を行いました。そして 1974 年に Handbook of Physiology のチャプターを任されまして、非常に若いときに感激したのでありますけれども、一旦、それで世界の中心に入っちゃいますと、後から後から、ずっと分担執筆を頼まれて、一番最後は 2011 年に、Oxford Textbook of Endocrinology のチャプターを頼まれまして、このときは高村教授、あるいは放影研の今泉先生と一緒に書いた次第であります。

ところが、おとといの産経新聞に「日本食の安全性、世界に発信を」というタイトルの記事が出ました。それで、1964 年に私は「昆布を大量に食べる…」というふうなことで研究費を申請したんですが、今年、産経新聞が「また世界に発信を」ということでありまして。まあ、これを出しましたのは地域特異性なもの。アメリカでできない、日本での研究

をやれば、それが非常に大きなものになる。「長崎を世界に」というイントロダクションとして、ご紹介いたしました。

長崎に来ますと、第一内科、これだけの人に歓迎されまして、歓迎かな、まあ、歓迎でしょうね、歓迎されまして。そして、ここでもう、これは研究者としてはやっていけない。管理者、教育者としての責任を感じました。

で、そこで研究をどうするかというときに、考え方は「長崎は宝の山」である。宝の山で宝島である。しかし、その中にいる人たちには価値はわかりにくい。これは、日常生活の中にあるからだ。そして、宝の中身は、だけど長崎の我々が一番よく知っているんです。ですから、宝を見つけて発表することが大切で、まあ、猫に小判とか豚に真珠にならないように。というふうなことをモットーにしまして、長崎を世界に。local を global で「グローカル（glocal）」を標語にしようと。これは鹿児島大学の井形教授とも同じ発想でありました。

で、これは退官記念のときのスライドでありますけれども、地域特異性を基盤にした研究といいますと、まず原爆がございます。で、これはその当時の Lancet であるとか、JAMA にも出しました。で、今度は富江の住民健診の B 型肝炎。これも Lancet に出ましたし、ウィルスの肝硬変、肝癌の研究も New England Journal。それから HAM の血漿交換。それから HTLV-1 のシェーグレン。まあ、それぞれの研究が、地域特異性のところをもとにしてスタートしたわけでありますけれども、もうご承知のように、それぞれのテーマでその当時研究した方々が、今、長崎大学の重鎮として活躍しておられます。私にとっては非常に嬉しいことであります。そして本日は原爆のことに関してだけお話をいたします。

いきなり中国が出てまいりましたけれども、1988 年の中国の最初の国際学会といわれていますが、ホテルも会場も限られたところにありまして、このバスで移動するだけでありますけれども、これがその当時の看板ですね。もう本当に手書きで。これがお昼のお弁当を食べている、その当時の中国の、まあ、そういう時代に呼ばれました。

これがそのヘンリー・ワーグナー。昨年亡くなりましたが、世界の核医学の先駆者でありますし、このロザリン・ヤローはノーベル賞をもらった Radioimmunoassay の先駆者であります。

それから一週間後に台湾で同じようにまた呼ばれまして、先ほどのワーグナーとヤローと私と、同じシンポジウムでしゃべりました。で、この頃は長崎におりましたので、原爆のお話をしました。ところが、この台湾もちょうど原発を開発しているとき。それから、このお 2 人もアイソトープを使って、放射性物質を使って、研究をしている先生でありますので、「そんな低線量で何が起こるか」という調子で、こういう国際学会のなかで、非常に強い言葉で非難をされました。

で、まあ、これは私の生涯の中で、長崎の原爆の被害、あるいは影響を国際的に、しかも、その疫学とかの、放射線というよりも普通の我々が読むような、JAMA であるとか New England Journal であるとか Lancet。そういうものにきちんとした格好で発表しようと。

それがひとつの、長崎にいる我々の責任であると思ったわけであります。

それで、これはいきなり、この御進講が出てまいりますけれども、ちょうどチェルノブイリについて御進講しましたときに、今の長崎の原爆の結果をお話ししましたので、その、この本の中の一部を使って、最初にお話しいたします。

で、当たり前でありますけれども、甲状腺の検査をするんだったら、正確な被ばく線量がわからないといけない。で、正確な診断がないといけない。そして、最も適当な統計的処理が必要である。これはもう当然でありますけれども、しばしば放射線の事故のときには忘れられてしまいまして、健康影響だけで線量はどっかへ行ってしまうというようなこともしばしばあります。

この 3 つが原則であるということで、現実には線量の測定は、放影研の線量。それからこの統計処理も、当時放影研におられました柴田先生に助けをいただきました。我々は正確な診断をする、スクリーニングで正確な診断をするということに力を入れました。

で、これも御進講のときにお示ししたスライドでありますけれども、超音波による甲状腺の診断というのは、日本で第 1 号の機械を長崎でつくったわけであります。このときの目的は、誰がどんな、まあ誰でもとまでは言えませんが、ある程度基礎のある人であったら誰でもが測定ができる。機械を扱える。そして、出てきたものを、あとで専門家が解釈すればいい。ということでありまして、当時はロシアでもできるものということは考えていませんでした。

それから、もうひとつ。これは、長崎の被爆者のデータを見ますと、甲状腺腫が出てきたり消えてしまったりする。それは、そのときに担当のお医者さんが、甲状腺が専門で一所懸命調べると甲状腺腫があるんですけど、その次の先生がまた、あまりまじめにやらないと甲状腺腫がない。やはり、きちんとした客観的な、ということで、超音波の機械を開発しました。

そして、最初はその西山地区に、というのは、もうご存じでしょうけども、原爆の放射線は直接、山の向こう側には行かない。しかし、黒い雨が降った地域であります。で、ここの地域の研究をしようということで、放影研も協力しましたけれども、私も町内会長のところ、隣組長全部回りまして、協力をお願いしました。それで、できあがったのがこの論文で、これは Lancet に出したものでありますけども、当然、全部で 184 名しか診断できません。

でも、これでその地域にいる方の 8 割は来られたわけでありますけれども、それで Control と比べまして、もともと予想したとおりでありますけれども、これは 300 人ぐらいの集団を調べて有意の差が出るとすれば、もともとは数パーセントの頻度があるものである。それが数倍になれば、有意の差が出るであろうという想像のもとにやって、確かに Solid nodule が有意の差が出た。しかし、ここで出たものも、このときは 9 人の中の 5 人が 10 歳以下の子どもであったということであります。

そして、これを原爆による放射線降下物で甲状腺機能結節が増加。これは原爆によるフ

ォールアウトによる最初の報告だと、喜んで報告したわけであります。

ところが、その発表、マスコミにテレビに出たときに、一緒に出たテレビで、被爆者の方が「大学の先生は、新しい病気が見つかれば研究の成果になるんだ。しかし、我々にとっては疎外される原因が増えただけである。新しい成果をもとに一緒になって、被爆者の援護をしてくれなければ、ただ、新しい病気ができたというだけでは何の意味もない」というふうなことを、テレビで言われました。非常にこれは、私自身としては、強い印象を持って受け取りました。そして、被爆者の調査研究は、科学的な事実を発見し、発見した事実が被ばく者の健康維持や福祉に役に立つという被爆者に寄り添う気持ちが調査の根本であるということを、改めて決心したわけであります。

これはJAMAに、アメリカの医学会誌に出したものでありますけれども、ここで被爆時の年齢と甲状腺癌、結節が関係がある。いずれも放射線の線量とは相関するんでありますけれども、被爆時の年齢が若いほど癌がたくさんできているということを、グラフに出しました。これは、昨年ようやく放影研のデータがまとまりまして発表されましたが、これと同じ結果であります。これは、長崎の結果をcross-sectionalに調べた結果であります。

そんなことをやっておりますうちに、今度は核医学を長崎でやることになりました。かなり、皆さんに、理事会に反対されたんですけれども、被爆地における最初の放射性物質を扱う学会である。ですから、「被爆の影響を避けるべきではない」と頑張りまして、国際シンポジウム「放射線と甲状腺」というのを企画しました。

そして、原爆は私がしゃべりまして、その当時のビキニ原水爆実験の結果、チェルノブイリは1年目になりますが、一応ヨーロッパのIAEAから来ていただいて。それから、世界の動物の放射性ヨウ素の研究。あるいはバセドウ病の治療。こういうふうなことで国際シンポジウムをやりました。

これがシンポジウムの写真で、長崎の公会堂でやっておるところでありますけれども、非常な反応がございまして、これは記者会見ですね。記者会見もやり、これはテレビで、NHKから40分間ずっと放送されたというような社会的な、長崎の我々としては、全国のテレビで40分間紹介された。非常に感激したことであります。

そういうことで、これはぜひ英語にしようということで、こういう英語の本として発表いたしました。で、この本がその後のチェルノブイリのときに、長崎に声がかかったということの大きな原因であろうと思います。

2つだけスライドをお示ししますが、これはそのときに発表になったもので、東京の羊の甲状腺の中の放射性ヨウ素の量であります。これが1954年からチェルノブイリの月までの値をずっと書いてあるんですが、東京の羊の放射性ヨウ素ですね、これは10のマイナス2乗から10のプラス4乗ですから、1万倍ですね。大気圏の核実験があるたんびに、東京の羊のヨウ素131は1万倍に増えていたということが。そのたんびに増えたり減ったり。これは、アメリカであっても、ソ連であっても、中国であっても、北半球の核の大気中の実験があれば、東京の羊の甲状腺、ヨウ素131は1万倍に増えていた。

これはもちろん人間も同じでありますから、人間もそれぐらい増えて、グローバルな影響を受けた。これがチェルノブイリの後、日にちで細かく出しておりますけれども、やはり東京も同じくらい、千倍から１万倍ぐらいヨウ素 131 が多くなっております。我々はこれだけの被ばくを既に受けているということであります。

それから、そのチェルノブイリのデータについては、1 年後でありますので、まだソ連からの情報はほとんどなくて、ヨーロッパの IAEA が計算したのでありますけれども、その長崎の発表では降下したヨウ素 131 の被ばくによって、ヨーロッパ全体で 50 人の癌が増えるだけだというのが、そのときの estimation でありました。

で、その後、情報が来ないまま時間がたちまして、1990 年から 1991 年、いわゆるグラスノスチということで、ゴルバチョフの時代に情報がどんどんと外に出てまいります。いっぱいございますけども、例えば、事故によって原発内で数千人の人が亡くなった。あるいは、放出された放射性物質で、周辺の数万人が亡くなったというふうな記事が流れている時代であります。

そのときに、非常にビジーなスライドでありますけれども、ソ連のチェルノブイリに対して、日本とチェルノブイリの間の交渉がありました。これ、赤が WHO、この緑が IAEA、外務省は黒、それから、笹川が少し薄い緑でありますけれども、この 4 つを示しただけでありますけれども、こんなにたくさんいろいろとございます。ゴルバチョフ大統領も来ましたし、シュワルナゼ外相も来て、日本とソ連の間で提携を結びました。

この、これ一々言いませんが、要するに、非常に、今の福島でどれくらいあるか分かりませんが、日本がチェルノブイリと結んだ協定、交渉にはこういうものがあります。で、そのときに、まず国を代表してということで、外務省が最初に派遣したのはこれでありますけども、放影研、放医研、それから広島大学。で、笹川記念で行きましたのは、この赤に加えまして、長崎大学の岡島先生、市丸先生。この市丸先生も、先ほどの平和賞の受賞者であります。三輪先生。それから、今日おいでになられています紀伊國先生もご一緒。。で、この笹川のプロジェクトを最初にお話しいたします。

最初の訪問は当然こんな線量計を持って、ビクビクしながら行ったわけでありますけど、これが大統領府で歓迎されているところ。こちらは、ソ連の共産党の本部であります。で、これはもう今、我々もう大っぴらになっている汚染地図でありまして、これを見せられて、ソ連の状況を説明されて、協力を依頼された。そして、これは被ばく地の病院。

今まで、福島の事故が起こるまでは、これを話してもなかなかピンとこなかったんですけども、今は被ばく地にある病院の視察と言うとすぐに分かるとおりでありますが、この病院に行って、子どもがたくさん生まれております。で、この子どもたちの母親は、自分たちの子どもが明日にでも亡くなるんじゃないかと。いつまで生きられるかと半狂乱になっている状況。このバセドウ病の患者さんも、自分の原因はチェルノブイリであると、まさにパニックの最中であります。これの背景を言いますと長くなりますから、まあそういうところで。

これは動画でありますけれど、ここだけ出しますと、外国から来た、これドイツ語でありますけども、線量計を持った外国の方が庭の中まで入り込んで、「ああ、ここも汚染している」、「お前たちは危ないから逃げろ」というふうなことをいきなり言うような状況で、まさにパニックであります。

で、これはチェルノブイリの調査で、原発の中も見せていただきました。笹川財団の膨大な研究費ということで、非常に丁寧に協力していただいたわけであります。

そして、これはソ連のアカデミーでありますけども、ここで有名な人がいっぱいいます。ちょっと省きますが、一緒になって、チェルノブイリのプロジェクトとして決めました。やはり心配をさせないために、10 歳以下の子どもを 10 万人調べましょう。被ばく地を巡回して、できるだけ多くの子どもの検診をして、そして、母親たちに「あなたのお子さんは大丈夫ですよ」ということが、このパニックを防ぐということになる。ということを話しあったわけであります。

で、方法は、先ほど言いました長崎の被爆者の調査方法で甲状腺を調べる。世界の批判に耐えられる。それから、血液疾患も原爆の被爆者と同じような方法。それからもうひとつは、日本でポピュラーになっておりますホールボディカウンターで体内のセシウムを測りましょう。これは、岡島先生がいろいろお考えになりました。

それで、張り切って帰ってきましたら、医局会議がございまして、そして、大学院の学生が交代で調査に行くという教授の命令には反対であるということでありまして。そのときは、医局の大学院の先生に交代で行ってもらおうと思っていたら、いきなり医局会議でこういうことがございまして。で、子どもが複数いて、今後子どもをつくらない医局員から行こうというふうな話になりました。

これは、野口英世ではないけれども、線量計を持って行けばどれだけ被ばくしたかというのはすぐわかるんだから、ということも大分話したんですが、当時の長崎大学の雰囲気、それから、たまたま医局ににいた方が、今でも反原発で頑張っている方が入っていまして、こういうことになった。

そういう事で和泉先生、ちょうど第一内科の甲状腺のグループは選ばれたわけです。和泉先生、山下先生、横山、難波、芦澤、ここら辺は子どもがいた。この西川先生だけは、非常に国際的な活動が好きで、大学院の学生でありましたけれども、向こうにご主人も一緒に駐在しているうちに子どもができまして、まあ、やっぱり出産は日本でと言って、帰ってきた方であります。

先ほどのプロトコールに従いまして、半年でこれを全部作りました。これは、そのバスでありまして、これが超音波の装置、先ほど長崎で作った甲状腺の超音波の機械、これは岡島先生が考えた、ホールボディカウンターであります。バスに積み込むので、鉛の場所をいろいろ考え、とにかくこのバスは数億円かかりましたが、笹川財団から調査費 50 億円という、当時からいえば、膨大なお金があるということで、なるべく理想的なものというもので、これを作って、これを赤の広場で、その後は向こうの言う被ばく地の場所を決め

て、そこにセンターを造ったわけであります。

これがそのセンターの写真でありまして、定期的に訪問し、説明会もして、これ難波君と横山君が写っておりますが、これがベラルーシの厚生大臣、こちらはウクライナの厚生大臣でありまして、非常に国としても歓迎されたものであります。

結果を 2 つだけお示ししますが、これが土の中のセシウムの量ですね。これが子どものセシウムの量です。そうすると、土壌のセシウムは増えるほど、子どものセシウムも有意に増えているということがわかりますし。今度は、一人一人のセシウムの量で言いますと、大体多くは 50Bq/kg 以下でありますけれども、500Bq っていうから、これ 30Kg としますと、15000Bq ぐらい持った子どもも 1%ぐらいはいたということであります。

これは、最初に見た時に、こんなにセシウムに汚染されていてびっくりしたんでありますけども、最近の計算で言いますと、この 500Bq の人でも 1.25mSv。

ですから、大部分は 1mSv 以下ということでありまして、ですからそれぐらいの被ばく線量であるから、このチェルノブイリではセシウムの影響がなくても、全く科学的におかしくないというレベルの被ばくであります。これは、高村先生たちが現在も行っているという意味でお知らせをしますが、これは現在でも 50Bq/kg の子どもがこちらのブリヤンスク州にはまだおられるということであります。

今までは笹川財団でありましたが、今度は WHO、IAEA。で、これが WHO のイペカという最初期の企画委員会であります。先ほどトロンコ先生がお話しになったものでありますけれど、これは、ここで WHO の企画を作りました。そして、これが、そのプログラムで会議をしている所でありますけれども。私、いつも大事にされて真ん中にいましたのは、このプログラムの 90%のお金は日本から行ったものであるからであります。

で、ここでちょっとここ遠いんで見えませんが、ここに今日のお話しになったトロンコ先生がいらっしゃいますし、ここにツィーブ先生、これもあと永井隆賞の受賞者、前のツィーブ先生、トロンコ先生であります。それから、これは、91 年ですね。IAEA が最初に調査結果を発表したわけでありまして、少なくとも将来影響がある可能性はあるけれども、現在は影響がないというのを 1991 年に出して、これはもっともな発表ですけれども、日本の報道関係から重松先生は、これの委員長だということで、非常に非難された時代でございます。

その次は日ソ、これは外務省の日ソ専門家会議でありまして、これは東京で、これは確かここのプリンスホテルの歓迎会だったと思います。で、これは長崎大学の病院で講演会。この講演の後の記者会見と言いますか、もう要は話してる間にどんどん記者の方が入って来て喋っている。非常にアクティブな時代であります。これは、次に申し上げます。

で、ここからしばらくの間は、甲状腺癌が本当に増えたのかということをお話しいたします。今日の一番メインな所はですね、これだけチェルノブイリで甲状腺癌が増えたし、福島でも増えるのではないかということが、話題になっておりますけれども、それがどうやって見つかったのか。巷に言うように、10 年も 20 年もかかって決まったというようなも

のではなくて、3 年間で我々は結論を出しました。そこの経過をお話しいたします。

その第一が、長崎大学病院なんです。これが、病院でやった専門家会議の日本の発表会なんですが、このスライドを見せられて、ベラルーシで甲状腺癌が増えているということを、長崎大学の病院の会議室で発表となった。その時は我々必ずしも先ほどのＩＡＥＡの報告とこれとを比べて、病理の先生もいたんですが、これですぐに癌ということに同意しなかった、記者会見でもあまり強調はしなかったんです。

その次の年の 9 月にネイチャー・コレスポンディンスにベラルーシの厚生大臣と甲状腺腫瘍研究所長、これがデミチックさん、これも、永井隆賞の受賞者であります。

それから、ここで、支持者としてケンブリッジの教授、イタリアのピサの教授、この２人と WHO がサポートしまして論文が出た。しかし、この時は、日本、アメリカ、それからオックスフォード大学からも Letter to the editor で非常に反論が出ました。まだまだ、議論があった所であります。

で、先ほどの論文が出ますと、これはその 1 か月後であります、9 月号の Nature に出て、10 月に、ちょうどヨーロッパ（ＥＵ）でミッションをおくるというところに。そこへ、呼ばれまして、私もミッションになりました。たまたまと言いますか、ちゃんとアレンジされていたんだと思うんですが、5、6 人のアメリカの専門家もここに参りました。そして、この患者さんを見せられました。

我々は、もうびっくりしたっていうのは、子どもの甲状腺癌っていうのは非常に珍しい。100 万人に 1 人と言われておりますので、そんなに見たことはない。それが、後から、後から、こういう患者さんを見せられまして、みんなびっくりした。そして、手術をした病歴も標本の病理も見まして、これは、あきらかに甲状腺癌である、子どもの甲状腺癌だ。

ところが、乳頭癌なのにこんなに転移しているということで、みんなびっくりしたわけですね。そして、びっくりして議論したんですが、ヨーロッパのグループはもうこれはチェルノブイリのせいにしようじゃないかということを言いました。

しかし、今度は、ロシアとアメリカ、まあ私も含めて、まだこれがチェルノブイリの事故のせいだと言うのは早すぎる。ここは、毒ガス工場もあったし云々というような事で、ここで私はこのヨーロッパのパネルメンバーに入っていたんですけれども、まあ、サインはしないということで、こちらのオブザーバーのほうに入りました。ここのライナーさんも、これも、永井隆賞をもらった方であります。で、私はこちらに入って、この人たちがサインをした。

しかし、それが本当かどうかということは、この 2 年間に毎年数回 WHO であるとか、ヨーロッパ、IAEA、こういう所で、もう常にシンポジウムがございます。いろんな場所で、長崎でもこういうシンポジウムをやりました。

で、その当時は疫学的な信頼がないといけないということで、データは国の、これはまだ患者の数でありますけれども地域の、こちらのほうはもう国全体の子どもに対してのトータルの数を出して、分子は手術で明らかになった症例としますと、明らかなインシデン

スである、インシデンスが増えているということになる。

ところが、ロシアが全然増えないんです。これは同じように被ばくしたのに、ロシアが増えないということは、他の原因もあるかもしれないということでなかなか結論が出ませんでした。

これは、長崎でやった時、これは原爆 50 週年のちょっと手前ですから、著者は私だけの名前になってますけれども。この時もベラルーシ、ウクライナで増えてるけれど、ロシアで増えてないと。だから、どうも原因はチェルノブイリらしいんだけれども、結論はできない。この時は、もう長崎の公会堂で、一人一人確か演者が十何人かいたんで、紙を渡して、「賛成か反対か書け」というふうなこともやって、誰もまだ結論は出ないという時代でありました。

で、これが、今度 10 年目に、今度オーストリアでみんな IAEA の会の時集まった時、この場所で、初めてロシアも増えたという話題が出ました。これがそのツィーブ先生で、増えたと言ったんですけれども、これも永井隆賞の受賞者。ここに今日お話しになったトロンコ先生がおられますし、これも永井隆賞の受賞者のデミチック先生もここにおられます。それから、先ほどネイチャーで言いました、ピンケラ先生、ウィリアム先生、ちょっと後ですけれども。ここで、もう本当に錯綜しておりまして、学会の発表の前の日に集まって議論する。論文の議論ではなくて、そういう格好の議論であります。

でもそれで、増えたということになりまして、どうも一人で責任取るのは嫌だというんで、これだけみんな並びました、ヨーロッパにアメリカに日本に、これがロシアのツィーブさんですね。それから、これがデミチックさん。5 人並んで甲状腺癌が確かにチェルノブイリ事故後に増えたということを宣言したのでありますけれども。それは 2 年間でこれだけの議論を出して、国際的な合意として甲状腺癌が増えたということになりました。

その 1 年後に Proceedings が出まして、同じような事が書いてありますけれども、増えた理由は、時間的、地域的な状況証拠だ、Strong circumstantial evidence で、chronological and geographical。そういう事でありまして、線量相関は全く不明であります。先ほど山下先生、きれいなスライドでヨウ素 131 の被ばく線量を出したんですけれども、この頃は全くヨウ素 131 のデータはない時代でありまして、線量関係もできない時代であります。

そして、まあ、早く転移するのは、これは、子どもだから転移するんで、放射線のせいではないということになります。これは、その当時 2 万 5 千人をベラルーシで笹川のプロジェクトでやりまして、25 人見つけましたので、これを日本の 62 年から 96 年の間に見つかった 37 人の日本の子どもの癌の患者と比べました。そうすると、やっぱり、リンパ節転移も肺転移もある、同じ、差は全くない。違いはベラルーシは 1.4 ㎝で見つかったけれど、日本は 4 ㎝で見つかった。これは、今後の福島に非常に関係のあるところだと思います。

で、先ほどは 10 年、今度 20 年目に飛びます。これで、20 周年の時は、キエフで 20 周年をやりました。やはり反核団体の方がいました。これは、オペラ座で大統領が、ここで自ら立って、ここにお偉方が並んで発表会をした。これは WHO に関係した方であります

けども。この発表は、もうただ 1 人 IAEA のバラノフ先生が全部をまとめて発表されました。

で、その後、分科会がありまして、私は座長でいたんですが、この分科会では、国際的な合意を認めるということになったんですが。そうでないグループもありまして、夜中まで、本当にいろんな議論がありました。

その中の一つは、例えば、放影研は、アメリカがプランを作ったものを、ロシアがなぜその結果を使ってチェルノブイリを研究するのかというような、そういう非常に具体的な議論まで、夜中まで、けんけんがくがくと続いたのであります。

そのまとめだけ出しますと、もうしょっちゅう出てくる絵でありますから、申し上げませんが、子どもはあるところまで増えてきて、減ってしまった。これは、子どもが被ばくしてその子どもが大人になるとなくなって、新しく生まれた子どもには、癌は起こらないという証拠として使われております。

もう一つ大事だったのは、20 年目の時には、WHO と IAEA が一緒になって、精神的な影響を非常に強調されました。精神的な影響は事故による最大の健康影響であり public health の最大の問題である。高度の不安と、説明できない医学的な訴えは続いていると。サブクリニカルの syndrome という名前で出しましたが、その数は百万人に及ぶというのがこの報告であります。少なくとも、百万人、数百万人に及ぶ精神的に自立できない精神的な障害が、この時には非常に強調されました。

で、これは、ちょうどキエフで終わった時に、終わったというんで、先ほど、お話しになったトロンコ先生とこの間長崎に来られた、放射線センターのベベシュコ所長と、会議が終わったというんで乾杯をしてるところであります。

今度は、一昨年、11 年に UNSCEAR（国連科学委員会）が報告書を出しました。これが、最新の、国際的なものでありますけれども、28 人が死亡したと、原発の中で。

それから、原発で除染作業した人たちに関しては少なくとも放射線に起因する健康影響のエビデンスはないということになりました。

それから、原発外の住民に関しては、汚染されたミルクを飲んだ子どもたちに 6 千人の甲状腺癌が出たけれども、現在まで、それ以外に一般公衆において放射線に起因する影響のエビデンスはない。これが、UNSCEAR が出した結論であります。

そして、興味がありますのは、この先ほど言いました精神的影響は、UNSCEAR は放射線の影響ではないということで一切、結論の中から取ってしまったということであります。

ここからの、福島に関しまして、一部だけお話しいたします。これは、その、福島のシミュレーションで環境研が出したものです。

これは、今、お話ししましたように原爆とチェルノブイリと、福島の個人の被ばく線量を、分かりやすくまとめたものでありまして、これは今日、秋野環境大臣政務官がいらっしゃいますが、彼の勧めもございまして、環境大臣以下の前でお話ししたところであります。

これが、その原爆ですね。原爆の場合は、5 mSv 以下は時々control という値も使っています。原爆では 100mSv 以下っていうのは、影響が確定されてないということ。それ以上に被曝した方は、これぐらい。チェルノブイリの場合は先ほどの図がありますけれども、除染作業者は大体 100mSv である。それで、フォールアウトの方は一番高線量のとこに、1986 年～2005 年まで、住んでいた、27 万人の被ばく線量は 50mSv である。

福島の場合は、これは、外部被ばくだけでありますけれども、一人一人の行動記録から、一番被ばくした地域、先行地域といっておりますけれども、その先行地域の人たちの、個人の被ばく線量を調べた結果で、すでに、もう、1 年前から公表されております。

これが、1mSv 以下が 6 割ぐらい、1mSv です。それから、5mSv までとれば、95%が 5mSv 以下の外部被ばくであるということになりました。で、5mSv、ですから、ここから、この 5mSv、みんな入っちゃう。ですから、原爆と比べると、ここに入るような外部被ばくの線量である。

それから、今度、甲状腺の被ばくにつきましては、これは、放医研がシンポジウムで、千人ぐらい直接調べた値がありまして、これが、年齢の分布で、0 歳～15 歳までで、7～8 歳の子どもを一番、調べたんですが、これが、甲状腺の被ばく線量であります。で、検出できない人がこれだけいまして、5mSv 以下 10mSv まで。15mSv。で、一番高いのが 35mSv でありまして、国際的な規約でヨウ素を投与するとか、その他の介入線量というのは、細かく見ても、50mSv。ですから、ここまでは、国際的には何もしなくていいという量でありますけども、少なくとも、福島の子どもの一番被ばくしたところにいる、子どもたちを直接測った線量はこの程度であるということであります。

これは、ベラルーシのほうでありますが、ベラルーシの調査で、2011 年に出たものでありますけれども、これが線量の分布であります。で、これを先ほどの福島を入れますと、最高がここでありますので、ほとんどここのレベルに入ってしまいます。

で、今度は、dose-response を、これは、やっぱり、11 年に今度はできてきた dose-response のカーブでありますが、ここに福島の被ばくを入れると、ここになってしまいます。これが福島の被ばくであります。これがチェルノブイリの、ベラルーシの被ばく線量と甲状腺癌の比較であります。これだけ、これが、被ばく線量であるということ。これは科学的に現在まで少なくともわかった科学的なデータであるということを、まさに政府の中枢の方にもお話させていただきました。

したがいまして、私は、昨年、書いた物でありますけれども、昨年 12 月に、「放射線の健康被害」と「災害の健康被害」、これを、やっぱり、常に分けて考えなければいけないと。チェルノブイリの時も、全てが、放射線のせいということで処理されてきたけれども、もうすでに、放射線の健康被害を逃れるために福島では 60 人の方が最初に亡くなってると。そして、今の仮設住宅にいて数百人の方が亡くなってると。一方で数十人の方が数日で亡くなり、数百人が亡くなっているのに、放射線の障害は、まだ誰も亡くなっていないし、明らかな障害はないだろうと。それなのに、放射線の被害だけを対象にして、問題にする

とこの人たちは、なぜ死んだかわからない格好で死んでしまうことになるということを申し上げました。

そして、これは、今年の 2 月の内閣の首相官邸のホームページであります。で、最近ご御存じのとおり、政権交代がございまして、政権交代の後も、先ほど、永山先生から紹介がありましてけれども、我々民主党にも貢献しましたので、どうなるかと言ってたんですが、結局今度の政権でも官邸に行くことになりました。それの、これが第 1 号ということで、官邸のホームページに出しました。

これで、タイトルは「福島の 50 年後を見据えて－日本の科学者としての責任－」ということで、我々は、もう、原爆も、チェルノブイリも、JCO もすべて経験した。それをやっぱり、頭に入れて福島を考えなきゃいけないんじゃないかということを申し上げました。

これは、今書いたことを、簡単にお話ししますと、事故に関するチェルノブイリの教訓として、事故に関するすべての情報は直ちに公表する。そして、その公表された情報から、線量から、科学的に健康被害を推定する。これは科学者の責任である。しかし、その推定をもとにしてどうするかということは、これは、被災者を中心として、全ての利害関係者が関係する。そこで、政府も加わって対策を決定する。被災者の意思を尊重しながら、これが原則であります。ということであります。

で、事故に関するすべての情報は、SPEEDI も含めて現在の、今、お話ししましたような個人線量も含めて直ちに公表すると、そして、その値に従って、我々は、放射線の健康影響の科学的な推定をする。で、その科学的な推定をもとにして、被災者と国と科学者、地方行政機関が一緒になって対策を決定するのが方法であるということをやりました。

で、先ほどの、内閣の官房のホームページの最後に「日本の立場、日本の科学者の責任」ということで書かせていただきましたけれども、これは、唯一の被爆国で原爆のデータを持っている。そして、福島に関しても、我々は十分に頑張らなきゃいけない。日本の科学者が中心的な役割を担うとして、頑張らなきゃいけない。ということでありまして、被ばく線量に基づいた放射線による健康影響を推定する。適切な対策を世界に発表する上で、中心的な役割を果たす義務がある。そして、ここで大事なことは、被災者に心を寄せつつ人間愛を持って、困難を克服していきましょうということで、長崎大学の名誉教授というタイトルを出しました。

これを書きながら、また、準備しながらですね、最初は、本当に、その、原爆の被爆者の科学的なデータを世界に発信したいということから始まりましたけれども、今、こうやって見ますと先ほどからお話がありましたように、長崎大学が当然でありますけれども、片峰学長が率先して福島の協力に参りましたし、それから、国際的にも、WHO、IAEA それぞれ、先ほどから言いましたメンバーが活躍しております。

で、実際によく中央という言葉を言いますけども、今は、もう、本当に中枢の中に、先ほど、ご挨拶いただきました秋野環境大臣政務官がおられますし、私も内閣官房の中にいて、本当に政策にお話ができるという立場で、本当にこれは、そこから始まった「長崎を

世界に」というタイトルをいただきましたけれども、現実にそうなりつつあるということを具体的な例を通じてお話させていただきました。

今後のことも話すようにという依頼がございましたが、これは、もう、ここまで育った人たちに私が何か言うことはない。今まで、こうやってきましたということだけを、ここでお話しいたしまして、お話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

記念講演Ⅱ

科学技術文明の光と影：原研と NASHIM の世界展望

福島県立医科大学副学長
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授　**山　下　俊　一**

中島正洋先生、ご紹介ありがとうございました。原研創設50周年、NASHIM 創設20周年の素晴らしいこの祝賀会において、栄えある記念講演をさせて頂きますことを、皆様に心から感謝とお礼を申し上げます。

私の話は、次に続きます大先輩の朝長万左男先生、そして恩師の長瀧重信先生のご講演の前座ということで気楽にお聞きいただければと思います。講演タイトルは仰々しいのですが、これは私が教授になって22年間、ある意味「科学技術社会の光と影」の両面での仕事を実体験してきましたので、話の流れは、原研半世紀の中の一員として、原研の過去と現状、そして未来をお話させていただきます。特に、後半には、未曾有の東京電力福島第一原発事故に遭遇し、原研から派遣された専門家がどう現場で行動し、何を学び、何を教訓として伝えるべきかを共に考えたいと思います。

1．原研の歴史背景とその活動の意義

長崎大学の原研50年の歴史の中で、最近では原爆被爆者のみならず、世界のヒバクシャに対応するために、いろんな事にチャレンジしてきました。すなわち、国際被ばく医療という新たな取組みです。この地図で示されている赤いポイントは全て原子力発電所のある場所です（スライド2）。日本のみならずアジア諸国やインド、パキスタンも原発が増設されています。先ほどお話があった文科省の21世紀 COE やグローバル COE という競争的研究資金の獲得プログラムでは、常に国際社会に裨益できるように努力をし、またその中で国際学術共同研究を推進してきました。とりわけ、科学技術の粋である原子力に対する防災と事故対応も大きなテーマであり、緊急被ばく医療への取組みと慢性放射線障害への対策にも腐心してきました。



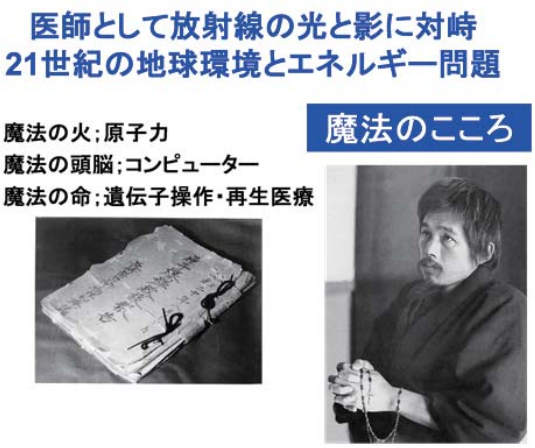
スライド 2

私自身は、人間の安全保障と海外への被ばく医療活動を展開するという役割を担い、『防人、海援隊プロジェクト』という言葉を勝手に使ってきました。それが、今回の東日本大震災によって、長崎大学の専門家が、防人とは逆方向の東北の地にある福島へ、そして海外中心の活動から国内原発事故に取組むようになったことには、非常に奇縁なものを感じます。しかし、同時にこの長崎の地にあり、世界を見渡すと、長崎の出島の窓という視点

からも、世界の原子力防災や事故対応にかかわるということは、昔の東インド会社の反対、西インド会社ではありませんが、そういう心意気、あるいは歴史認識もまた必要だということかもしれません。この20年、原研でも歴代の学長の下で国際化への対応に向けて、いろんなネットワークを作ることができました。そして、今回の東日本大震災でも長崎大学の現場力が片峰学長のリーダーシップの下で大いに生かされています。震災前の大学人としては、自由な研究や机上の教育訓練も多かったのですが、福島原発事故後の２年間を実体験して、日本人社会という世間の荒波の中で、生きた学問とは何かを自問自答する日々でもあります。日進月歩の科学技術進歩の社会にあり、その論理的思考の大切さと同時に、感性の違いや複雑な感情、さらには思想信条の違いという問題にも正面から向き合っています。その経験から、いかに『守りの科学』、例えば，放射線災害医療学や放射線防護学を地道に確立し、継承していくかということも原研の中にあり極めて重要な課題となります。

では、この科学技術社会の光と影にどう対峙をするかを考えた時、我々の活動の原点はどこにあるか言えば、まさに1945年８月９日に完膚なきまでに壊滅をした我が母校にあると言えます。核兵器開発とその後の原子力の平和利用という矛盾した現実問題にどう対応するかですが、原研50年の歴史に対して、一昨年には、学長主導で核兵器廃絶研究センターも新設されています。いずれもそのルーツは原爆被災にあります。今の福島原発事故で露呈した混乱と矛盾を考えるとき、永井隆博士がこの旧制長崎医科大学附属病院の一角で命を取りとめ、その後、彼が伝えたかった事に思いを馳せる事は、少なくとも原研に奉職する私達の心の原点と言えるかもしれません。原爆直後の原子野の一枚の写真を見ると、今回の津波の後の何も無い風景とよく似たものを想起させると思います。

このような無常とも言える不条理で矛盾に富む困難な状況の中で、生き延びた私たちの先輩の多くが、救護や復興に向けて献身的な活動をされています。その代表者の一人が永井隆博士です（スライド3）。今日会場の前に展示されていました、原子爆弾救護報告書は彼の著書の始まりとも言えます。灼熱の地獄と言われた８月９日の被爆直後に一命を取り留め、９月、10月と３カ月近くの間に診察された約200人近い方々の貴重な診療記録でもあります。永井隆博士が記録したこの報告書は、その後なかなか発見されませんでした。



スライド３

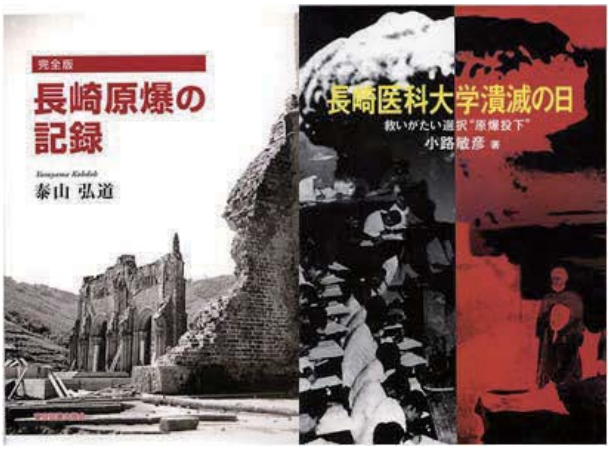
御存じのように週刊朝日が20年後に、これを見つけ出すわけですけども、この中には深い洞察が含まれています。何も無い中で書かれたこの報告書の中には、その後博士が如己堂に伏して書かれた数々の著作物の基本となることが全て書かれているように思えます。現在の原子力は、ある意味「魔法の火」だというふうに言えるかと思います。人類が手にした火は、その人類史上多くの惨禍をもたらして来ましたが、同時に大きな便益も与えて来ました。一方、20世紀には「魔法の頭脳」として我々はコンピューターを手に入れました。また、「魔法の命」として、遺伝子操作や再生医療が生命科学の分野では脚光を浴びています。これらはいずれも科学技術の進歩の恩恵によるものです。しかし、多分に負の側面もあることも事実でしょ

う。

一方、我々が生活している現実社会の混迷と矛盾の世界において、どうしても忘れてはならないものは、やはり、「魔法の心」だと感じています。今日は最後に時間がありましたら、この心の有り様の大切さについても少しお話をしたいと思います。

同じようにロビーに泰山弘道先生の本が展示されています。原爆の後、我が母校は、実は壊滅の危機どころか廃校の危機を迎えたのです。それをどのようにやって乗り越えたかという記録集です。当時の大村海軍病院の院長が書いた書物です（スライド４）。

この本がすごい所は、すでに永井隆博士が亡くなった翌年には、全部英語に翻訳をし、アメリカでの出版を目標に奔走している点です。原爆の実相をアメリカの女性らに知らせたいという強い気持ちがあったそうですが、残念ながらこれは出版されませんでした。NASHIM はその後この英語原本を発掘し、出版する機会を得ることができました。



スライド４

このように、いろんな先輩方の熱い思いが原爆被災の歴史の中に凝縮されています。もう一つ紹介する小路敏彦先生という我が先輩が書かれた本の中には、医科大学の関係者のことが取り上げられています。長崎の医療人はすべからく原爆被災を原点として、日々の医療現場で働いていることを強調しておきたいと思います。ここで、少し原爆直後のことを思い出し、原研の立ち位置を考えてみたいと思います。

「敗北を抱きしめて」というタイトルは、ジョン・ダワー氏が書いた本のタイトルですが、それよりも前になりますが､原爆投下から50年後に笹本征男氏が「米国占領下の原爆調査；原爆加害国になった日本」という本を書いています。その中に、被爆国としての当時の対応や日米合同調査に至った経緯などの内実も書かれています。ABCC は、現在の放射線影響研究所の前身ですけども、厚生省の小林六造氏が GHQ に提出した厚生省の報告書の中に、原爆傷害調査計画の必要性が提案されています。1947年12月のことですが、原子力時代を予期し、人類の福祉の保護に多大な寄与をすると考えた原爆被爆者調査、研究ということになっています。こういう広島、長崎両市の原爆被災者の固定集団に対する大規模調査が確立されたことは、日本が敗戦国であったからだというふうにも言えますが、ソ連時代のチェルノブイリ原発事故直後からの初期５年間も、原爆直後と同様に空白の期間があったと言える状況でした。すなわち、GHQ による情報統制にも似たような情報統制あるいは封鎖という冷戦構造時代を後から検証すると、災厄の直後に客観的そして再現性のあるデータを得る事が極めて難しい状況であることが分かります。

一方、この原研が創設されたのは、1962年ですから、原爆被災から15年後です。一体その間、放影研以外の大学諸機関では、原爆被爆者の臨床や基礎研究にどのように関与してきたのでしょうか。広島大学においてさえ、１年前の1961年に原医研ができたということは、それほど、日本の大学における原爆医療の関する研究体制づくりには時間がかかり、いろんな意味で混乱や窮乏が長引き、独自の

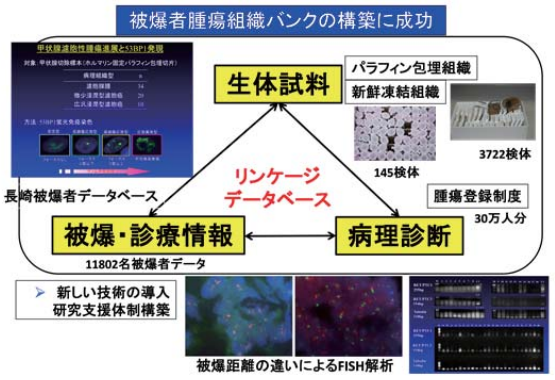
国内研究活動は困難であったのだろうと推測されます。その中で第５福竜丸事件以降、やっと原爆被爆者に関する本格的な研究が始まり、広島、長崎の両大学の原医研、原研を中心として被爆者研究が推進される事となりました。広島市と長崎市で毎年６月第一日曜日に交互に開催され、すでに50回を越えた原子爆弾後障害研究会そのものが、綿々とつながる歴史となるわけですが、本研究会もまた見直しが必要でしょう。

過去50年間、原研の施設拡充も進み2000年には全面改築され、その２年後に21世紀 COE プログラムの競争的大型研究資金を初めて獲得し、その高い評価から更に５年間のグローバル COE プログラムの獲得という経緯の中で、何を目指して活動をしてきたか、そして、今後、何を目指すのか、ということを一緒に考えていきたいと思います（スライド５）。残念ながら、これらの優れた活動実績は後継プログラムである2012年度からの新たなリーディング大学院構想には採択されず、原研に対する教育機関としての評価は低いという反面も露呈しています。



スライド５

今、この座長をして頂いている中島先生の教室、あるいはその前任の関根教授らは、被爆者の生体試料である病理組織標本や被爆者情報、病理診断をしっかりと50年間にわたり死守してきていただいています。原爆被災資料センターもそうです。まさにこういう縁の下の力持ちというような材料集め、あるいは保管とデータのリンケージ、そして新しい手技や手法を用いて病変を解析する研究手法は、貴重な生体試料を使う我々にとっては、大きな宝であり、また継続する責務があります（スライド６）。現代科学技術社会において、日々発展を遂げているこの技術をいかに応用し新知見を生み出すかが模索をされています。



スライド６

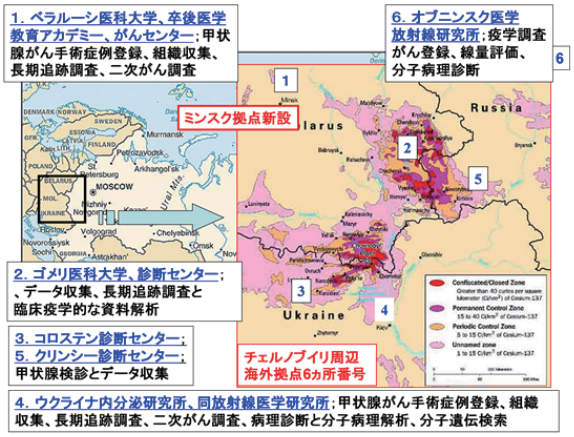
２．チェルノブイリ原発事故への関与

1986年４月26日未明ソ連時代のチェルノブイリで人類史上最悪の原発事故が起こりました。事故直後から１週間の放射性ヨウ素の空間拡散の地図からは、キエフから1,300km 離れたスウェーデンの原発４基が異常アラームを出し、欧州全体が非常事態となります。東西冷戦構造の間でしたから、チェルノブイリ周辺では何が起こったかわかりませんでした。大規模な環境放射能汚染が広がったのです。

キエフは京都と姉妹都市ですから、５月１日は丁度京都ウィークで日本人が十数名いらっしゃいました。そういう中で、大穀倉地帯は大地が汚染し、一般公衆が被ばくするわけであります。私たちはそういうことが遠い国の出来事だというふうに考えていましたが、90年以降いくつかの現地調査が

入っています。91年４月にはゴルバチョフ大統領が長崎に来ることになりました。これに合わせて、日本政府はWHOを通じて26億円の拠出をするわけですけれども、同時に、当時の日本船舶振興会の傘下にある笹川記念保健協力財団が多額の資金を出して、現地に拠点を作る為に縁の下の力持ちをされています。

すなわち、「チェルノブイリ笹川プロジェクト」という世界最大規模の科学的人道支援が91年５月に現地でスタートをします。放影研の重松逸造先生が団長で、広島大学と長崎大学が中心となり、甲状腺分野では長瀧重信教授をチーフとして調査を開始し、この広大な地域で巡回検診事業が展開されました（スライド7）。この地図は放射線セシウム137の汚染地域と現地に立ち上げた活動拠点です。この地域における検診活動をどう行うかということが協議された結果、検診バスを提供することになりました。甲状腺あるいは血液、その他、WBCすなわちホールボディーカウンターを搭載した車がこれらの拠点を中心にして回ります。



スライド７

５年間で約16万人、10年間で20万人の子どもたち、事故当時０歳から10歳の子どもたちの検診を行う事ができました。これが、今の福島にとって大きな教科書となっています。長崎大学原研はこの中核を担い、あるいは広島大学原医研とともに、この健康調査活動を行ってきました。今なお、行っています。

その結果、ベラルーシの大学、あるいはゴメリの大学、診断センター、あるいはウクライナ、そして今日受賞されたトロンコ教授が所長を務められているキエフ内分泌代謝研究所、あるいはその他、永井隆平和賞を過去受賞された方々が、この関係する拠点から輩出しています。20年以上、チェルノブイリ周辺のこういう地域で地道な仕事を継続し、冬はマイナス20度の中で暖房ガレージを活用してきました。こういう積み重ねのフィールドを、原研は有していますし、長崎大学医学部の学生をリサーチセミナーの期間に毎年ベラルーシに派遣をしています。

一方、NASHIMも1992年に長崎県と長崎市、そして長崎大学などの関係機関を中心として構築された後、長崎から発信するヒバクシャ医療の国際協力の歩みということで、着実な情報発信、あるいは人材育成、さらにはこれらの方々に対するネットワークの構築を行っています（スライド８）。

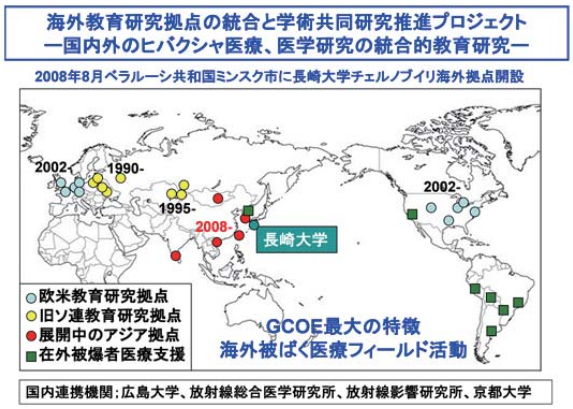


スライド８

すこし話が私自身のことになりますが、2004年の12月から２年間、長崎大学グローバルGCOEプロジェクトの一環として齋藤学長の時にジュネーブのWHOに２年間休職派遣を許されました。WHOは国連機関の一つとして唯一、保健、医療、健康に関わる機関ですが、193の国が加盟をしています。でも放射線に対する部署は非常に小さく、残念ながら種々問題を抱えています。そ

れでも2005年９月９日には、長崎大学医学部ではWHO本部で原爆展とセミナーを開催し、これを記念して八重桜50本が玄関前そして中庭に寄贈されています。ご参加頂いた当時の齋藤寛学長、兼松隆之医学部長、そして故久松シソノ氏らには心から感謝申し上げる次第です。

私自身が国際舞台で仕事が可能となった背景には、原研の国際活動の評価以外に、今日ご参加頂いています笹川記念保健協力財団理事長の紀伊國献三先生らのお力添えによるところが大であります。WHOでは丁度2007年から５年間に世界の保健医療がどのように進むかという大きな基本構想の改訂準備がなされていました。今でこそ新しくありませんが、いかに健康を開発し、健康保全を確保し、保健システムを作り、よき理解者や協力者をこの分野に獲得するかという非常にすばらしいスローガンが掲げられますけども、実情は、まさに、国連の人件費の過剰な膨らみ、重複やばらばらな国連諸機関の連携問題など、複雑な問題を内包していました。このように国際機関の諸問題の理解は、個人の能力の問題も絡み、異なる価値観の中で包括的に保健医療や被ばく医療を学ぶ場が、実は日本の国内にはありません。だからこそ、井の中の蛙に留まる事なく世界に出ていく必要がありますし、世界を知るということは、原研の立ち位置とその役割を知るということにもつながります。



スライド９

2007年から５年間、長崎大学は、21世紀COEプログラムの５年間に続き、グローバルCOEという大規模な予算をもとに、これまで培ってきた世界との連携を基礎研究と臨床共同研究を更に展開して来ました。高々10年来の本格的な国際展開ですが、原研50年の歴史から考えても私たちの役割は、たすきリレーのリレー走者の一人にしかすぎないと言えます。長年蓄積した原爆被爆医療の神髄、その経験や知識は、次の世代に引き継いでいく必要がありますが、同時に科学的基盤をしっかりと構築する必要があります。であればこそ原研やNASHIMは、放射線の健康問題、健康リスク評価や管理について、世界中にこのような学術交流協定を数多く結んで種々のプロジェクト推進して来たのです（スライド９）。なお、韓国やブラジルは在外被爆者への支援事業であり、拠点ではありません。これはNASHIMとの協働事業の一つです。すなわち、長崎大学の特徴の一つが、海外の被ばく医療フィールドにあるのです。同様な海外フィールドは熱帯医学研究所が、アジア・アフリカに拠点を構築し尽力されていますが、放射線影響研究分野においても原研が打ち立てたこの10年にわたる世界展開は意義深いものがあると言えます。

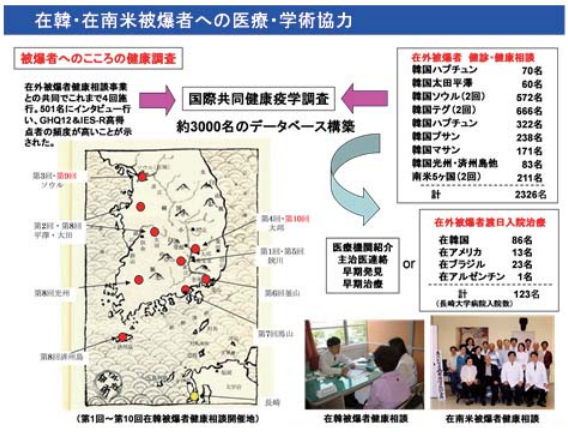
さらに、急性放射線障害あるいは慢性放射線障害、こういうガイドラインづくりにも寄与しています（スライド10）。特にWHOのREMPANという、緊急被ばく医療ネットワーク体制の一員とし



スライド10

て世界の仲間達と緊密な連携と協力関係を保持しています。

また、慢性の放射線障害対策も、これは、いろんな意味で教育と啓発事業に関わってきました。特にIAEAとは、国際社会の連携構想を作り、全身被ばく、すなわち大量被ばくではほとんど治療効果は期待できませんが、局所の場合には再生可能であるということで、局所の過剰被ばくへの対処法の開発に向けて、原研では形成外科と協力して、自家移植という本人の脂肪細胞を局所移植するということが試みられてきました。今このプロジェクト自体は頓挫していますが、再生医療の一つのツールとして、IP細胞が応用される前に、自身の脂肪細胞から幹細胞を取るということは、実はフランスが今先駆けてやっています。こういう国際競争の中でも医療面、あるいは、科学技術を応用した対応を、長崎大学としては、地道に展開してきました。



スライド12

先ほどお話しをした、在外被爆者の対応では医師派遣事業あるいは現地からの患者さんの招聘事業は、NASHIMと長崎大学との合同の事業です（スライド12）。高齢化した在外被爆者に対する対応。あるいは、長崎大学に来られた、在外被爆者の治療。これの中心的な役割を担っていたのが、今福島で移動している、前大学病院国際ヒバクシャ医療センターの大津留先生と熊谷先生の2人です。長崎大学はまさにこの被ばく医療の中心であった専門家を福島に派遣しているのです。そして、今、福島のために継続して医師等を派遣している事業の一部は、国際ヒバクシャ医療センターの宇佐先生が担ってくれています。

以上をまとめますと、長崎大学原研あるいはNASHIMが共同して行っている事業の多くは、このように多岐にわたります。多くの費用やマンパワーも必要ですが、同時に多くの方々のご理解と協力が必要でもあります。原研のみならず大学全体の力に加えて県や市、そして多くの力が必要となります。

国際機関との連携；WHO, IAEA, UNSCEAR, ICRP, HPA, NCI, EUなど



スライド13

このような国際被ばく医療活動の中で、原研が準備をしてきたことが、まさか、福島の地で活用されるということは夢想だにもしていませんでした。2011年2月の16日から18日にかけて先ほどお話をした、WHO緊急被ばく医療ネットワークであるREMPANの第13回国際会議を長崎大学で主催し、世界の被ばく医療のネットワーク構築のディレクトリーも改訂することができました（スライド13）。この会議では、原発事故の対応リハーサルもしますし、事故が起きた場合に行政がどう行動すべきか、どう前線に医師を派遣するのか、さらにヨウ素剤や内部被ばく軽減の備蓄薬はどうするのか、社会との連携はどうするのか、報道対応は、リスコミ対策は、ということが、幾重にも議論



スライド14

されたわけであります。

さらに社会学的な側面からも我々は放射線災害の対応準備をしてきました。平成21年度、22年度の２年間にかけて、グローバル COE の枠の中では、特任教授の柴田義貞先生を中心にして、放射線のリスクコミュニケーションの課題解決に向けて、個々人で異なるリスク認知をどのように理解し、適切なコミュニケーションをどうするかという論理的な議論をしてきました（スライド14）。柴田先生ご自身は希有な専門家であり、放影研から長崎大学の放射線疫学の教授として来られ、ご退職後５年間このグローバル COE で活躍頂き、奇しくも福島原発事故の後、お願いして福島医大の放射線医学健県民健康管理センターで、データベースの構築に腐心していただいています。これも、また、長崎大学からの福島復興支援の一例であります。

事故が起こる前に、長崎大学で準備してきた緊急被ばく医療の理論武装は、2011年３月11日をもって激変します。この事実は大変重要であり、大学の教育力とは、机上の空論に終始する事なく、現実の課題に真摯に対峙し、その解決に向けて専門力を如何なく発揮する事だと言えます。原研50年の歴史始まって以来の空前絶後の原発災害への取組みの経緯を詳しく述べる事は、あってはならない原発事故への備えとしても重要ですので、ここに少し詳しく述べさせて頂きます。当初は、事故直後の情報すべてがテレビ報道でしか、それも間接的な情報しか入って来きませんでした。地震の後の大津波、そして被害の状況は目を覆うばかりでありました（スライド15）。

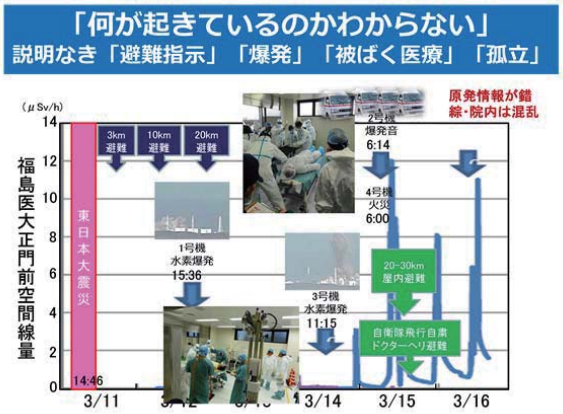


スライド15

長崎大学では、緊急被ばく医療のチームを編成し、３月13日夜には先発隊として現地へ派遣していましたので、私自身がすぐに現地に入るとは思いもしませんでした。超急性期では福島医大、福島県の対応は地震対応が第一でありました。それから、津波、原発事故対応です。ある意味で、これは複合災害ですので従来の教科書やガイドラインでは全く役に立ちません。

福島県立医大附属病院は、震災直後からトリアージセンターとして、全ての外来を中止し、DMAT を受け入れて対応しました。初期の５日間は、まさに、非常事態対応の戦場と化します。水が出ない、ガソリンがないという中で、病院機能は低下していきました。

情報が入ってこないという中で、原発事故が起こるわけです。これは、福島医大の正門の前の空間線量の値を表しています（スライド16）。３月12日。大震災があった後の翌日。３km 圏の避難の命令が出ます。その後、10km 圏。多くの方々は避難をする事ができました。１号機が水素爆発をする、12日の３時であります。その後14日、３号機が爆発をします。結果として、傷病者がこの時に運ばれてきます。その後、４号機が火災を起こし、15日にも12μSv/h という値を医大玄関前で記録します。



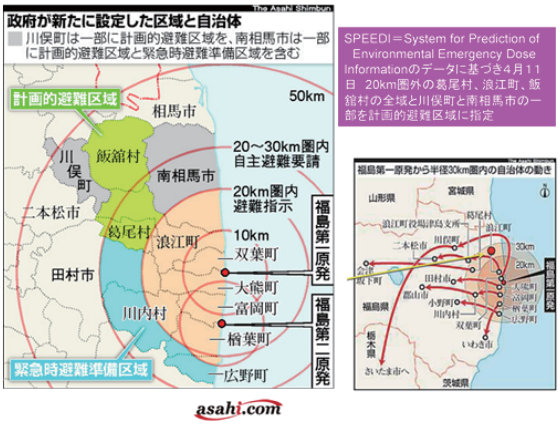
スライド16

まさに、このような状況の中で、15日には20kmから30km 圏の屋内退避という指示が出されます。本来は、危険なところから安全なところに行くのが避難です。避難した後に、再び、屋内退避ということは、普通は考えられません。しかも、それが、１か月間解除されませんでした。こういう最中で、一体何が起こったのか。傷病者は運び込まれてくる、中にいる医療関係者は浮足立つ。実際、逃げた人もいたというふうに聞きます。

何が起きているのかわからないという現場での事故直後の１週間でありました。十分な説明なき避難指示や屋内退避ですから、被ばく医療に携わったことがない医師らは原発事故というだけで浮き足立ちました。DMAT も引き揚げ、ヘリも避難区域に入れないという、孤立無援な状況に置かれるわけです。情報が錯綜し、院内が混乱する。この時に、３月15日、長崎大学が福島医大病院へ派遣をしていた大津留先生から、電話がかかってきます。大変な事が起こったと。福島市内にも放射性降下物は降り注いでいると。このままでは、60km 離れた福島医大も崩壊をする危険があるという連絡が入りました。

実際に、14日には原発のサイトの中からヘリコプターで負傷した人を連れて帰って来ています。その折、誰が救助に行くのかが大きな問題になりました。広島大学の谷川先生という救急部の教授と、長崎大学の看護師の吉田君が、急遽ヘリに同乗して無事傷病者を搬入しています。危機的な状況下の中で、福島医大の被ばく医療班の仲間達は、命を守るということを第一義的に原発震災に多くの困難を乗り越えて対応しています。一方で、原発の周辺では大変な事が起こっていました。何万人という住民の避難活動であります。どうやって避難をしたのか。放射性降下物が降り注ぐ中で、通常のスクリーニングのレベルを上げた状況の中で、小さな子どもたちや病人や高齢者も含めて避難をしています。当初、３km、10km、20km、20km から30km 圏内。そして、その後、４月中旬には計画的避難区域という指示が出されるわけであります（スライド17）。

原発事故後初期の１カ月間、私たちは現場にいて、正確な放射能汚染情報がないまま、現場を走り回ることになりました。後から振り返ると、震災関連死という方が福島県内でも多く出ています。痛恨の極みです。放射線の直接影響で、亡くなった方は１人もいませんが、高齢者や、病人、子ども達は大変な苦労、塗炭の苦しみを味わいました。雪が降る寒い中での、避難であります。SPEEDI が３月の末には出てはいましたけれども、実際の被ばく線量モニタリングのデータが地域別に出されたのは４月10日過ぎだったでしょうか。



スライド17

そういう中で、３月17日の夜７時頃に福島県立医科大学の菊池臣一理事長から私の携帯に直接電話

がありました。「すぐ福島医大に来てほしい」と。大津留先生からも連絡入っていましたので、片峰学長の許可を得て翌日伊丹経由で福島空港に飛びました。同じ甲状腺を専門とする外科医の鈴木眞一先生が迎えに来てくれ、医大に到着した折には、被ばく医療の医師に抱きつかれて泣かれました。皆不安の渦中にいました。病院の災害対策本部は、山積みのおにぎりと、疲労困憊をした執行部の先生方に呆然自失の感がありました。



スライド18

その夜、私は、福島医大の看護学部にある講義室に集った約300人近い職員に対して話をさせていただきました。アイソトープセンターの松田尚樹先生、そして高村昇先生と一緒です。「災害との出会いは必然である」、私がこういうことをいった事を言ったかどうか覚えていません。ある先生から頂いたスライドがその緊迫した状況を表しています（スライド18）。しかし、確かに「肝を据える」に似たような意味で、医療人に対して腹をくくる為に白黒をはっきりしたメッセージを発しました。



スライド19

その後、福島医大における被ばく医療班の緊急被ばく医療活動が、広島や長崎、他の大学からの派遣者とともに行われています。被ばく医療をやったことがない救急の田勢教授や放射線科の宍戸教授を中心に、いろんなところから派遣者が集っています（スライド19）。この被ばく医療の立ち上げた殊勲者は、３月14日に現地に入っていた我々のメンバーであります。自衛隊と協力をし、二次被ばく医療機関としての体制を整えてくれていました。しかし、私自身は政府から指示を受けた原子力災害の専門家チームがどんどん福島県や医大にも入って来るものとばかり思っていました。放医研や広島大学などはその責務を十二分に発揮されていましたが、広域複合災害では、指揮命令系統も混乱し、現場でのマンパワーその他戦略的な統合本部の機能が上手く果たされたのかどうか、今後の検証を待たなければなりません。

災害全体の規模や負傷者の掌握、病院の搬送など医大ですら県との情報共有がままならない中で、入れかわり立ちかわり、長崎やその他から、継続して福島へ応援に来てくれています。残念ながら、原発サイトの中では、数千人の方が働いていますし、原発事故直後からの労災の危険は続いています。しかしながら、もし何かあった時の被ばく医療体制は事故前と今でも何ら変わっていません。

福島県立医大の中では、JCO の事故の後にできた救急措置室と WBC などを有する被ばく医療棟がありました。JAEA や自衛隊も当初この被ばく医療棟を中心に活動拠点を構築しています。ドクターヘリポートもありますが、実際には、このグラウンドに自衛隊のヘリが避難者を搬入しています。これが、実際の緊急被ばく医療の際に取られた患者搬送ルートと対応状況です（スライド20）。そして、

２年後に福島医大病院はこの被ばく医療班のセンター化を果たし、放射線災害医療センターと改称され、今では種々の慢性期対応も行っています。

一方、４月初旬から福島県と福島大学が、学生や各県からの応援を動員して、自分達でガイガーカウンターを用いてこのようなマップを歩いて作ってくれました。



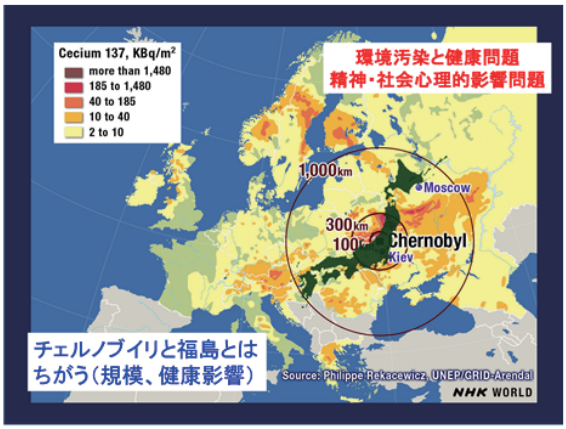
スライド20

このような非常事態の渦中で、３月18日以降、我々は現場に入り、20日以降いろんなところで、講演活動を県から頼まれて、住民相手に対応してきました。特に、これは、私と高村先生がペアで、約２カ月間で１万人近い方々の相手した時の写真です（スライド21）。同じような事を広島大学の神谷先生もアドバーザートして対応して頂き、今もして頂いています。広島、長崎両大学からの多くの方々が、そして県や市からも、多くの方々が福島へ応援に来ていただいています。



スライド21

事故直後、正確な情報がない中で、何をもって私たちはここに留まって活動する事の正統性や妥当性を判断するのでしょうか。比較できるものは広島・長崎の一回の大量被ばくの原爆被爆者のデータだけではなく、チェルノブイリ原発事故の教訓です。私個人の資格で３月22日、外国人特派員記者クラブで、英語で放射線の健康リスクの話をする機会を得て、記者からの多くの質問を受けました。４月の初めには日本財団で、その後 NHK ワールドでも話をさせていただきました（スライド22）。「一度の被ばくでの100mSv 以下では発がんリスクは証明されていない」、「一般住民は誰もそのような被ばくはしていない」、「チェルノブイリと福島は違う」などです。それは、事故が起こった原因や規模もさることながら、避難指示や食の安全管理の指示等から健康影響は被ばく線量から評価すべきだからです。しかし、両原発事故で類似しているところは、広大な地域が環境汚染し、多くの混乱と矛盾が露呈したということです。私自身の発言の真意よりも、不安や不信をかこつ報道やソーシャルネット情報が、その後優勢となり困惑させられました。これは私個人の準備不足と対応のまずさ、そして不徳のいたす点だと反省しています。いずれにせよ、真しやかな放射能汚染に対する噂話や風評、そして精神・社会心理的な影響の甚大さが、情報の氾濫と共に日本中を覆った事は皆様がよく御存知のとおりです。

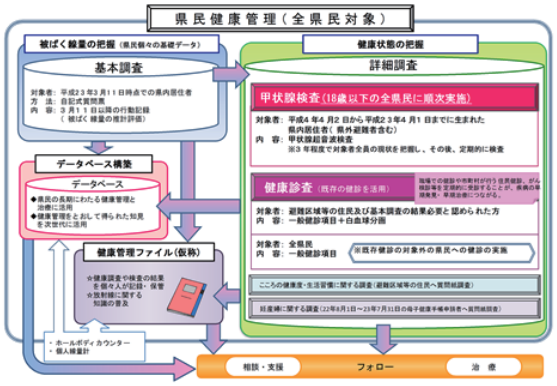


スライド22

福島県立医科大学と付属病院は、本来福島県の地域医療の砦であり、従来から地域医療の崩壊を防ぐ大学として努力されていましたが、震災以降、突然世界の表舞台に立つことになりました。先ほど来お話しをした被ばく医療班の活動もそうです。広島、長崎、あるいはオールジャパンの応援団が、震災対応にどう向き合い、放射線影響の低減や軽減・阻止にどのように対峙したかをご紹介したいと思います。

私自身は、３月19日高村先生と一緒に佐藤雄平知事に初めてお会いし、その後の県幹部の方々との話の中で、地域の放射線健康リスク管理アドバイザーを引き受けていました。しかし、緊急事態には多くの同志が必要です。菊地臣一理事長にお願いし、組織の応援を仰ぐ為に４月２日、福島医大は広島大学と長崎大学との間に学術交流協定を締結して頂きました。そして、その日に放射線影響研究連絡協議会の非公式会合を引き続き開催して頂きました。放医研や放影研などのメンバー機関が事故後３週間目に福島医大に集結し、後の県民の健康を守るという一大プロジェクの発足に向けた協力関係づくりへと大きな流れが形成されました。

その一つが県民健康管理調査事業です（スライド23）。震災から２ヶ月にならない頃から国にお願いし、県にお願いし、医大が中心となり、放医研、放影研、広島大学、長崎大学が協力して、このような全県民の事故直後から４カ月間の被ばく線量の推計という基本調査と同時に、主として避難住民を対象とした詳細調査をいくつも同時に立ち上げました。まさにゼロからの立ち上げです。しかし、これが迅速にできた理由は、福島医大が県と一体の地域医療の拠点としてあったればこそであり、同時に広島・長崎の原爆の教訓とチェルノブイリの教訓が、いち早く生かされたということが言えます。詳細は省きますが、原研の活動の真骨頂は、この数ヶ月間の嵐のような怒濤の時期に集約されているとも言えますし、その後の亜急性期から慢性期に向けての活動の評価も後世に委ねられるのでしょう。



スライド23

また、福島医大では「福島の悲劇を奇跡に変える」という歴史的な使命を果たすために、そして、世界的な責任の完遂に向けて、非常に困難な状況の中で、これもゼロから放射線関連事業の国際化に向けた新たな取り組みを始めています（スライド24）。2013年１月には約１年半にわたる、福島医大における東日本大震災活動の記録が、「いのちの最前線」として、まさに実録集として出版されました。この事に対する情報は、福島医大の復興関連のホームページから日本語でも英語でもダウンロードできます。



スライド24

次に、現在の最大の課題である県民健康管理調査事業そのものの詳細は時間の都合上から割愛しますが、原研からの支援協力が大きな力となっています。福島医大の本来あるべき地域の要という機能

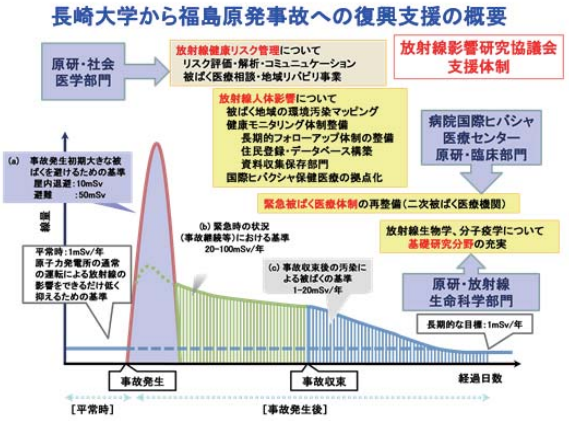
に加えて、この医大のキャパをはるかに凌駕する、ふくしま国際医療科学センター構想をどのように構築し実現するのかということが問われています。まさに走りながら考えるという最中に、この国際医療科学センターの基本構想がまとまりました（スライド25）。これから、４つの建物の基本設計が始まります。ソフト面では長崎大学からの継続した協力が不可欠でもあります。本日は、福島医大から理事であり、放射線医学県民健康管理センターの実施本部長であられる阿部正文先生が、菊地臣一理事長の名代としてこの祝賀会にご出席頂いていますが、本センターは、同時に、教育、人材育成が重要な役割を持つことになります。そして、放医研が、これから、福島に環境動態研究の支所を作ってくれる予定です。線量の評価、さらには、先端の臨床研究も含めた、いのちの見守りの各種事業が多くの関係機関からの支援と協力を受けて始まります。



スライド25

原研は、過去20年以上チェルノブイリと関わってきましたが、これからは福島に対し、どのような長期的な支援・協力ができるかというのを、大学間連携や関係省庁とも協力しつつ、臨床面のみならず基礎研究の面でも交流活動を構築し継続して行く必要があります。さらに長崎大学全体で今後、どのような構想で、この福島の重い課題とかかわるかということを真剣に議論しなければなりません。

具体的には、今、事故が発生して、年間20mSv 以上では避難地域となっていますが、これから、環境の汚染レベルは着実に下がり、個人の被ばく線量も低く安全域に防護されると思います。しかし、事故が収束するこの過程において、長く続く復興の時期に、どのような協力をするかということが、改組された原研組織の将来展望となります。その意味では、この図の時間的な経緯を加味した原研の役割を認識する必要があります（スライド26）。特に、原研の社会医学部門は重要な位置づけとなりますが、高村昇先生を中心とした川内村支援プロジェクトには大きな期待が寄せられています。同時に、病院や臨床部門、あるいは基礎研究部門が協力をして、放射線の人体影響やリスク管理、さらには緊急被ばく医療体制の見直し等を行っていかなければなりません。

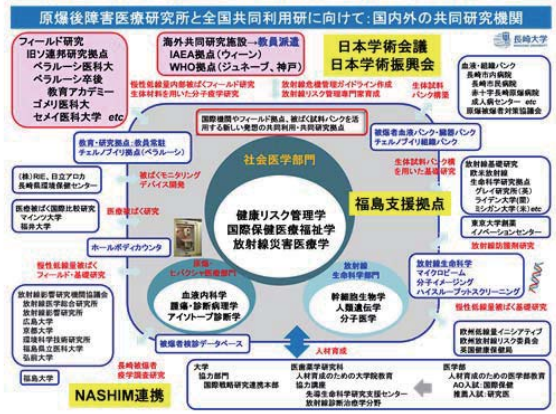


スライド26

今日、原研の沿革の中では、永山施設長が原研の歴史とその立ち位置を示されました。その中で、このような図が出たかと思います（スライド27）。長崎大学は広島大学と共に、福島にある大学との連携強化が重要となります。とりわけ医療や教育研究の面での福島県立医科大学との具体的な共同プロジェクトが必要となります。その意味では、相手大学内にも拠点が必要ですし、長崎大学にも福島支援拠点が必要だろうと言えます。

そして、NASHIM との連携も不可欠です。産学連携も。同時に、行政との連携なくしては、この

ような長期のプロジェクトは遂行できません。原研そのものが、日本学術会議や日本学術振興会などアカデミアとの協調が不可欠です。科学技術社会のこの光と影の中で、原研は改めてその使命を再認識する絶好の機会が、この50周年という祝賀会であると言えます。研究成果の社会還元を目指し、そして、原研の知と人財を生かすということが、結果的に国際連携事業を推進し、原研が世に必要とされる活路が見出されると愚考しています。



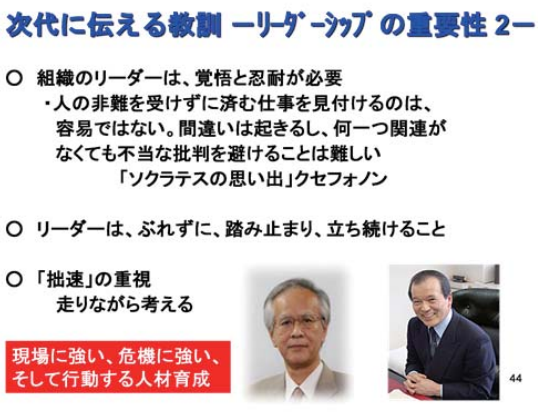
スライド27

ただ、これを支える基盤はいまだに脆弱です。予算面もしかり、あるいは、新体制づくりにおける必要業務、事務作業などの改善も避けては通れません。

以上、福島での一大事に遭遇し、とりわけ困難に遭遇した混乱の時に、多くの励ましを頂きました。お礼と感謝を兼ねて一部ご紹介したいと思います。これは、次の世代に伝える教訓として、私が頂いた言葉です。非難や中傷の嵐の中で、昨年の2011年７月15日に副学長として、福島医大に正式に移籍できたのは、片峰茂学長と菊地臣一理事長のおかげです。その中で、最も困難な時に、片峰学長からは大学としての声明文を出して頂きましたし、菊地理事長からは「倒れても膝立ちで戦う」と激励されました。弁慶の仁王立ちではありませんが、そういう言葉を頂きました。菊地理事長は整形外科医であり、「骨を拾うので、後顧の憂いなく働いて下さい」と、「骨をつなぐ」のではなく、常に温かく見守って頂きました。

何事も先んずるということは、非常に難しいものです。非常事態では後手後手の対応に迫られる場合が多く、その上、後だしじゃん拳ではありませんが、後から非難、叱責や批評を受ける事は前線で仕事をする以上覚悟しなければなりません。またいろんな情報が入り乱れます。であればこそ、一次情報にアクセスし、きちんと正しい情報を自ら入手、理解し判断する事、場合によっては情報汚染をクリーニングすることも必要です。

原研では、あるいは、広島、長崎の被ばく医療の分野では、次世代のリーダーを育成するとことが極めて重要となります。何故なら世界で唯一原爆を被災した両都市であればこその使命であり、また同じ事が福島でも唯一原発震災という複合災害を経験した医科大学であるからこその後継者育成の使命です。広島、長崎、福島の被ばく医療に関わる人材育成には、覚悟と忍耐が必要となります。いろんなことに共通することですが、「リーダーは、ぶれずに、踏み止まり、立ち続けること」だということ、そして「『拙速』を重視し、走りながら考える」という言葉は、菊池臣一理事長から頂きました。今回の大震災では、長崎と福島を橋渡しして頂いた片峰茂学長と菊地理事長が、まさ



スライド28

にこの国難の渦中で、真のリーダーであったと賞賛されます（スライド28）。

このお２人の初の出会いが、2011年３月11日震災直前の東京での会合でなければ、あのタイミングで私の福島への派遣はなかったと言えます。長崎大学は学長が強いリーダーシップを取り、「現場に強い大学、危機に強い大学、そして、行動する大学」をモットーとしています。大学の根幹をなす、構成員であるすべての人材の能力開発と育成そのものが校是です。大学とはまさに人材を育成し、社会に輩出することが使命ですし、何よりも、今後の福島復興の支援を通じて被ばく医療の分野でも人材が育成していかねばなりません。それから、国際社会に人を派遣、輩出するためにもリーダーの育成が重要となります。

最後に重ねまして、原研創立50周年、そして、NASHIM 創設20周年という祝賀会で、講演の機会を頂きましたことを、心から感謝申し上げます。今後とも、長崎から福島へのご支援をお願い申し上げまして、私の講演を終わらせていただきます。どうも、ご清聴ありがとうございました。

（追記）

「魔法の心」については、下記の詩篇を持って東北復興支援のエールとさせて頂きます。

危険から守り給えと祈るのではなく
　　危険と勇敢に立ち向かえますように
痛みが鎮まることを乞うのではなく
　　痛みに打ち克つ心を乞えますように
人生という戦場で味方をさがすのではなく
　　自分自身の力をみいだせますように
不安と恐れの下で救済を切望するのではなく
　　自由を勝ち取るために耐える心を願えますように

【タゴールの「果物採集」（石川拓治訳）】

2. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の概要

２．長崎･ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)の概要

(1) 名　　称　長崎･ヒバクシャ医療国際協力会

(NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHA’S MEDICAL CARE)

略称／NASHIM（ナシム）

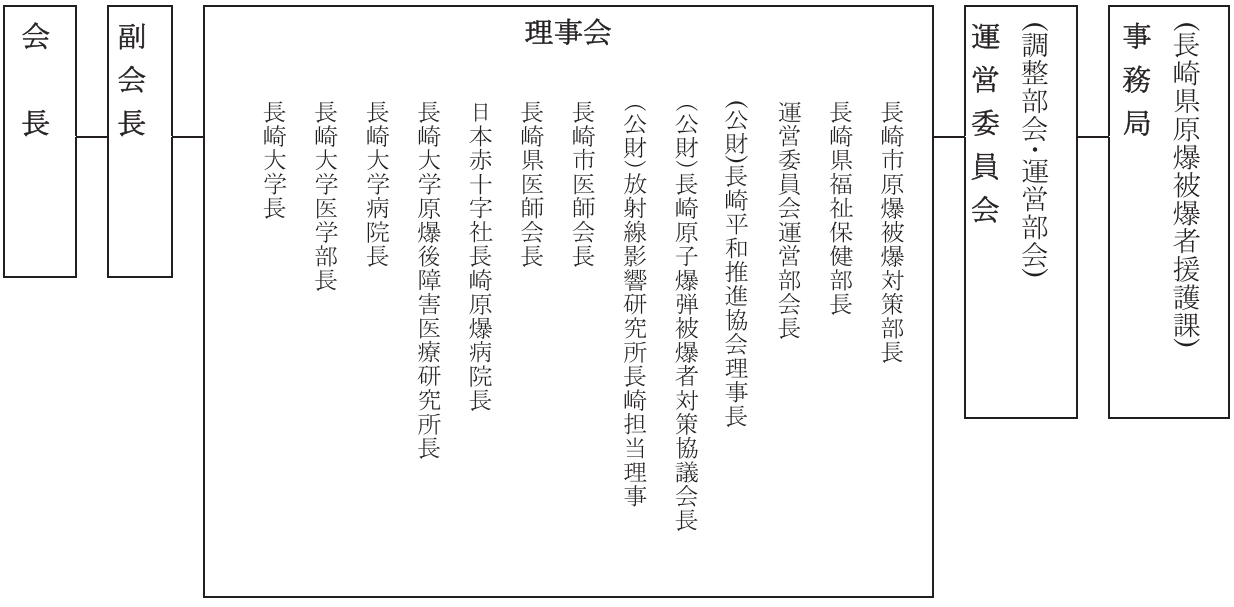
(2) 設立の目的

長崎･ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)は、在外ヒバクシャ及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として設立した。

長崎が有する被爆者医療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果をこれらヒバクシャの医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の研修受け入れや国外への専門医師等の派遣、医学教科書の出版･寄贈及び永井隆平和記念･長崎賞の授賞などを実施し、ヒバクシャ医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に寄与する。

(3) 設　　立　　平成４年(1992 年)4 月 1 日

(4) 機　　構



ホームページアドレス

http://www.nashim.org/

メールアドレス

E-meil:info@nashim.org

(5)役職者

NASHIM役職	所属団体	役職名	平成4年度	平成5年度
会長			土山　秀夫	今村　臣正
副会長			今村　臣正	原　耕平
理事	長崎県医師会	会長	今村　臣正	今村　臣正
	長崎市医師会	会長	石川　壽	石川　壽
	長崎大学	学長	土山　秀夫	横山　哲夫
	長崎大学医学部	学部長		原　耕平
	長崎大学医学部附属病院	病院長		隈上　秀伯
	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(H14～)	科長	—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(H25～)	施設長	—	—
	日本赤十字社長崎原爆病院	病院長	迎　英明	迎　英明
	(公財)放射線影響研究所長崎担当	理事	嶋岡勝太郎	嶋岡勝太郎
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	会長	宮崎　藤美	本島　等
	(公財)長崎平和推進協会	理事長		—
	運営委員会運営部会	部会長		長瀧　重信
	長崎県福祉保健部	部長等	石野　誠	石野　誠
	長崎市原爆被爆対策部	部長	加藤　彰彦	江口　圭介
調整部会部会長		事務局長		安田　實穂
調整部会副部会長		事務局次長		松永　朝春
	長崎県医師会	事務局長		吉原　弘二
	長崎市医師会	事務局長		矢崎弦一郎
	長崎大学	国際主幹、国際交流課長、学術国際課長		永井　俊夫
	長崎大学医学部	事務長、事務部長		宅嶋　文夫
	長崎大学医学部附属病院	事務部長		大坪　義孝
	日本赤十字社長崎原爆病院	事務部長		菅　健太郎
	(公財)放射線影響研究所	事務部長		中岡　雅
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	事務部長、事務局長		勝田　成彬
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長		安田　實穂
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長		松永　朝春
運営部会部会長				長瀧　重信
運営部会副部会長				山下　俊一
	長崎大学医学部(第一内科)	教授		長瀧　重信
	長崎大学医学部(第三内科)	教授		—
	長崎大学医学部(第二外科)	教授		—
	長崎大学医学部(小児科)	教授		辻　芳郎
	長崎大学大学院(放射線診断治療学)	教授		林　邦昭
	長崎大学大学院(精神神経科学)	教授		—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研幹細胞)	教授		近藤　宇史
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研放射)	教授		奥村　寛
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研内科)	教授		朝長万左男
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研医療)	教授		山下　俊一
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研遺伝)	教授		新川　詔夫
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研病理)	教授		関根　一郎
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研国際)	教授		—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研分子)	教授		—
	長崎大学先導生命科学研究支援センター	教授		—
	日本赤十字社長崎原爆病院	内科部長、副院長、外科部長		松尾　罣
	(公財)放射線影響研究所	疫学部長、臨床研究部長		柴田　義貞
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	中央検診所長		—
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長		安田　實穂
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長		松永　朝春
事務局長	長崎県原爆被爆者援護課(H20名称変更)	課長	安田　實穂	安田　實穂
事務局次長	長崎市原爆被爆対策部調査課	課長		松永　朝春
会計監事	長崎県原爆被爆者援護課	統括課長補佐	朝生　典賢	内田　正憲
会計監事	長崎市原爆被爆対策部援護課(H5～)	課長		上田　幸和
書記	長崎県原爆被爆者援護課	係長	大村　正	大村　正

平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
今村　臣正	今村　臣正	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉
原　耕平	長瀧　重信	長瀧　重信	池田　高良	池田　高良	池田　高良	池田　高良	池田　高良	齋藤　寛
今村　臣正	今村　臣正	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉
石川　壽	石川　壽	石川　壽	石川　壽	牟田　博夫	牟田　博夫	牟田　博夫	牟田　博夫	諸岡　久夫
横山　哲夫	横山　哲夫	横山　哲夫	横山　哲夫	池田　高良	池田　高良	池田　高良	池田　高良	齋藤　寛
原　耕平	長瀧　重信	長瀧　重信	池田　高良	齋藤　寛	齋藤　寛	齋藤　寛	齋藤　寛	兼松　隆之
隈上　秀伯	齋藤　泰	齋藤　泰	齋藤　泰	齋藤　泰	藤井　徹	藤井　徹	澄川　耕二	澄川　耕二
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	関根　一郎	関根　一郎	朝長万左男	朝長万左男
迎　英明	迎　英明	迎　英明	迎　英明	田口　厚	田口　厚	田口　厚	田口　厚	田口　厚
長谷川　豊	長谷川　豊	長谷川　豊	平良　専純	平良　専純	平良　専純	平良　専純	平良　専純	平良　専純
梶　兼行	梶　兼行	中島　公彦	山口　博司	寺崎昌幸(代行)	田川　勝	田川　勝	金谷　繁臣	金谷　繁臣
—	—	長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信
長瀧　重信	辻　芳郎	辻　芳郎	辻　芳郎	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文
石野　誠	中林　圭一	中林　圭一	辻村　信正	辻村　信正	辻村　信正	辻村　信正	塚原　太郎	塚原　太郎
江口　圭介	江口　圭介	田中　洋一	岡田　愼二	原　敏隆	原　敏隆	太田　雅英	太田　雅英	坂田　寿孝
安田　實穂	木場田　勇	木場田　勇	森　宏巳	森　宏巳	松本　清助	松本　清助	松本　清助	仲野　喜孝
横田　秀雄	横田　秀雄	横田　秀雄	田口　修三	南條　保郎	南條　保郎	坂田　寿孝	茂　雅博	茂　雅博
吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	吉原　弘二	高井　正実
矢崎弦一郎	矢崎弦一郎	矢崎弦一郎	堀内　保昭	江口　圭介	江口　圭介	江口　圭介	江口　圭介	江口　圭介
海内　保男	海内　保男	海内　保男	川畑　英憲	川畑　英憲	川畑　英憲	吉住　誠司	吉住　誠司	高橋　輝
宅嶋　文夫	池田　誠一	池田　誠一	池田　誠一	池田　誠一	池田　誠一	池田　誠一	池田　誠一	小川　源吾
大坪　義孝	篠宮　勉	篠宮　勉	篠宮　勉	岡崎　文憲	岡崎　文憲	岡崎　文憲	工藤憲一郎	山内　正美
渡辺　才人	八坂　茂尚	八坂　茂尚	八坂　茂尚	八坂　茂尚	渡辺　才人	渡辺　才人	渡辺　才人	渡辺　才人
中岡　雅	中岡　雅	橋口　高明	橋口　高明	大串　康隆	大串　康隆	銀杏田　弘	銀杏田　弘	林　茂利
勝田　成彬	勝田　成彬	勝田　成彬	勝田　成彬	正林　克記	北原　宣孝	北原　宣孝	北原　宣孝	北原　宣孝
安田　實穂	木場田　勇	木場田　勇	森　宏巳	森　宏巳	松本　清助	松本　清助	松本　清助	仲野　喜孝
横田　秀雄	横田　秀雄	横田　秀雄	田口　修三	南條　保郎	南條　保郎	坂田　寿孝	茂　雅博	茂　雅博
長瀧　重信	辻　芳郎	長瀧　重信	辻　芳郎	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文
山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一
長瀧　重信	長瀧　重信	長瀧　重信	江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
辻　芳郎	辻　芳郎	辻　芳郎	辻　芳郎	—	—	—	—	—
林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭	林　邦昭
—	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文	中根　允文
近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史
奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛	奥村　寛
朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男
山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一
新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫	新川　詔夫
関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎
—	—	—	—	柴田　義貞	柴田　義貞	柴田　義貞	柴田　義貞	柴田　義貞
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	松尾　罣	森　秀樹
柴田　義貞	柴田　義貞	柴田　義貞	柴田　義貞	—	—	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純
—	—	—	—	—	—	—	—	—
安田　實穂	木場田　勇	木場田　勇	森　宏巳	森　宏巳	松本　清助	松本　清助	松本　清助	仲野　喜孝
横田　秀雄	横田　秀雄	横田　秀雄	田口　修三	南條　保郎	南條　保郎	坂田　寿孝	茂　雅博	茂　雅博
安田　實穂	木場田　勇	木場田　勇	森　宏巳	森　宏巳	松本　清助	松本　清助	松本　清助	仲野　喜孝
横田　秀雄	横田　秀雄	横田　秀雄	田口　修三	南條　保郎	南條　保郎	坂田　寿孝	茂　雅博	茂　雅博
内田　正憲	内田　正憲	大串　仁志	大串　仁志	森田　一三	森田　一三	森田　一三	原田　正明	原田　正明
上田　幸和	上田　幸和	原　敏隆	南條　保郎	金子　英昭	田口　久子	山口俊一郎	鳥山ふみ子	鳥山ふみ子
大村　正	大村　正	中嶋　洋	中嶋　洋	中嶋　洋	島村恵美子	島村恵美子	島村恵美子	草場　里見

NASHIM役職	所属団体	役職名	平成15年度	平成16年度
会長			井石　哲哉	井石　哲哉
副会長			齋藤　寛	齋藤　寛
理事	長崎県医師会	会長	井石　哲哉	井石　哲哉
	長崎市医師会	会長	諸岡　久夫	諸岡　久夫
	長崎大学	学長	齋藤　寛	齋藤　寛
	長崎大学医学部	学部長	兼松　隆之	兼松　隆之
	長崎大学医学部附属病院	病院長	澄川　耕二	澄川　耕二
	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(H14～)	科長	—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(H25～)	施設長	朝長万左男	朝長万左男
	日本赤十字社長崎原爆病院	病院長	進藤　和彦	進藤　和彦
	(公財)放射線影響研究所長崎担当	理事	平良　専純	平良　専純
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	会長	金谷　繁臣	出口静夫(代行)
	(公財)長崎平和推進協会	理事長	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸
	運営委員会運営部会	部会長	江口　勝美	江口　勝美
	長崎県福祉保健部	部長等	塚原　太郎	塚原　太郎
	長崎市原爆被爆対策部	部長	坂田　寿孝	出口　静夫
調整部会部会長		事務局長	仲野　喜孝	仲野　喜孝
調整部会副部会長		事務局次長	茂　雅博	松本　章
	長崎県医師会	事務局長	高井　正実	高井　正実
	長崎市医師会	事務局長	江口　圭介	江口　圭介
	長崎大学	国際主幹、国際交流課長、学術国際課	高橋　輝	坂下　鈴鹿
	長崎大学医学部	事務長、事務部長	小川　源吾	松浦　孝則
	長崎大学医学部附属病院	事務部長	山内　正美	山内　正美
	日本赤十字社長崎原爆病院	事務部長	蔵屋　末雄	蔵屋　末雄
	(公財)放射線影響研究所	事務部長	林　茂利	西尾　正二
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	事務部長、事務局長	北原　宣孝	北原　宣孝
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長	仲野　喜孝	仲野　喜孝
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長	茂　雅博	松本　章
運営部会部会長			江口　勝美	江口　勝美
運営部会副部会長			山下　俊一	山下　俊一
	長崎大学医学部(第一内科)	教授	江口　勝美	江口　勝美
	長崎大学医学部(第三内科)	教授	—	—
	長崎大学医学部(第二外科)	教授	—	—
	長崎大学医学部(小児科)	教授	—	—
	長崎大学大学院(放射線診断治療学)	教授	林　邦昭	—
	長崎大学大学院(精神神経科学)	教授	—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研幹細胞)	教授	近藤　宇史	近藤　宇史
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研放射)	教授	奥村　寛	奥村　寛
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研内科)	教授	朝長万左男	朝長万左男
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研医療)	教授	山下　俊一	山下　俊一
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研遺伝)	教授	新川　詔夫	新川　詔夫
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研病理)	教授	関根　一郎	関根　一郎
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研国際)	教授	柴田　義貞	柴田　義貞
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研分子)	教授	—	—
	長崎大学先導生命科学研究支援センター	教授	—	—
	日本赤十字社長崎原爆病院	内科部長、副院長、外科部長	森　秀樹	森　秀樹
	(公財)放射線影響研究所	疫学部長、臨床研究部長	赤星　正純	赤星　正純
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	中央検診所長	田川　眞須子	田川　眞須子
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長	仲野　喜孝	仲野　喜孝
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長	茂　雅博	松本　章
事務局長	長崎県原爆被爆者援護課(H20名称変更)	課長	仲野　喜孝	仲野　喜孝
事務局次長	長崎市原爆被爆対策部調査課	課長	茂　雅博	松本　章
会計監事	長崎県原爆被爆者援護課	統括課長補佐	藤田　邦行	藤田　邦行
会計監事	長崎市原爆被爆対策部援護課(H5～)	課長	鳥山ふみ子	鳥山ふみ子
書記	長崎県原爆被爆者援護課	係長	草場　里見	草場　里見

平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭
齋藤　寛	齋藤　寛	齋藤　寛	齋藤　寛	片峰　茂	片峰　茂	片峰　茂	片峰　茂
井石　哲哉	井石　哲哉	井石　哲哉	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭	蒔本　恭
諸岡　久夫	諸岡　久夫	諸岡　久夫	野田　剛稔	野田　剛稔	野田　剛稔	野田　剛稔	奥　保彦
齋藤　寛	齋藤　寛	齋藤　寛	片峰　茂	片峰　茂	片峰　茂	片峰　茂	片峰　茂
兼松　隆之	河野　茂	河野　茂	河野　茂	松山　俊文	松山　俊文	松山　俊文	松山　俊文
江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美	江口　勝美	河野　茂	河野　茂	河野　茂	河野　茂
—	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	山下　俊一	山下　俊一	山下俊一/小路武彦	小路　武彦
朝長万左男	関根　一郎	関根　一郎	山下　俊一	山下　俊一	永山　雄二	永山　雄二	永山　雄二
進藤　和彦	進藤　和彦	進藤　和彦	進藤　和彦	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男
大久保利晃/寺本隆信	寺本　隆信	寺本　隆信	寺本　隆信	寺本　隆信	寺本　隆信	寺本　隆信	寺本　隆信
野口源次郎	野口源次郎	中野　吉邦	中野　吉邦	中野　吉邦	中野　吉邦	中根　允文	中根　允文
横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸	横瀬　昭幸
奥村　寛	柴田　義貞	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	上谷　雅孝	上谷　雅孝
山崎　晋一朗	山崎　晋一朗	山崎　晋一朗	入江　季記	池松　誠二	池松　誠二	岩本　公明	濱本　磨穀穂
出口　静夫	出口　静夫	金谷　博己	金谷　博己	金谷　博己	黒川　智夫	黒川　智夫	黒川　智夫
仲野　喜孝	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	久村　豊彦	梶原　敏彦	梶原　敏彦
松本　章	松本　章	松本　章	高橋　清文	高橋　清文	高橋　清文	金子　正剛	金子　正剛
高井　正実	山口　佳	山口　佳	山口　佳	山口　佳	山口　佳	山口　佳	浜口　龍二
江口　圭介	江口　圭介	江口　圭介	江口　圭介	永江　和正	永江　和正	永江　和正	永江　和正
坂下　鈴鹿	坂下　鈴鹿	川口　勉	川口　勉	川口　勉	佐藤　照明	佐藤　照明	佐藤　照明
石井　利通	石井　利通	西村　司郎	西村　司郎	西村　司郎	西村　司郎	江川　長一	松林　聰
山内　正美	上村　茂敏	赤塚　正夫	赤塚　正夫	丸野　和年	丸野　和年	丸野　和年	丸野　和年
蔵屋　末雄	蔵屋　末雄	村上　公幸	村上　公幸	村上　公幸	小野　道彦	小野　道彦	相川　光正
西尾　正二	西尾　正二	伊原　昭夫	伊原　昭夫	伊原　昭夫	伊原　昭夫	伊原　昭夫	伊原　昭夫
北原　宣孝	坂本　昭雄	坂本　昭雄	坂本　昭雄	妹尾　芳郎	妹尾　芳郎	妹尾　芳郎	妹尾　芳郎
仲野　喜孝	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	久村　豊彦	梶原　敏彦	梶原　敏彦
松本　章	松本　章	松本　章	高橋　清文	高橋　清文	高橋　清文	金子　正剛	金子　正剛
奥村　寛	柴田　義貞	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	上谷　雅孝	上谷　雅孝
—	—	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	高村　昇	高村　昇
—	—	—	—	—	—	—	—
矢野　捷介	矢野　捷介	—	—	—	—	—	—
—	—	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	兼松　隆之	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—
上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝	上谷　雅孝
小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹	小澤　寛樹
近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	近藤　宇史	—	—	李　桃生	李　桃生
奥村　寛	—	—	—	—	工藤　崇	工藤　崇	工藤　崇
朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	—	宮崎　泰司	宮崎　泰司	宮崎　泰司
—	—	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	山下　俊一	—
新川　詔夫	新川　詔夫	—	—	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎
関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	関根　一郎	—	中島　正洋	中島　正洋	中島　正洋
柴田　義貞	柴田　義貞	—	—	高村　昇	高村　昇	高村　昇	高村　昇
—	—	—	永山　雄二	永山　雄二	永山　雄二	永山　雄二	永山　雄二
—	松田　尚樹	松田　尚樹	松田　尚樹	松田　尚樹	松田　尚樹	松田　尚樹	松田　尚樹
森　秀樹	森　秀樹	河野　昌文	河野　昌文	河野　昌文	上田　康雄	上田　康雄	上田　康雄
赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純	赤星　正純
田川　眞須子	田川　眞須子	松尾　辰樹	松尾　辰樹	松尾　辰樹	松尾　辰樹	松尾　辰樹	松尾　辰樹
仲野　喜孝	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	久村　豊彦	梶原　敏彦	梶原　敏彦
松本　章	松本　章	松本　章	高橋　清文	高橋　清文	高橋　清文	金子　正剛	金子　正剛
仲野　喜孝	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	藤田　邦行	久村　豊彦	梶原　敏彦	梶原　敏彦
松本　章	松本　章	松本　章	高橋　清文	高橋　清文	高橋　清文	金子　正剛	金子　正剛
藤田　邦行	永石　憲司郎	永石　憲司郎	永石　憲司郎	吉田　寿雄	吉田　寿雄	吉田　寿雄	村中　励
鳥山ふみ子	濱田　茂	大石　幸雄	大石　幸雄	坂本　洋一郎	坂本　洋一郎	坂本　洋一郎	浦瀬　千恵子
草場　里見	福田　恵子	福田　恵子	福田　恵子	山口　勇次	山口　勇次	山下　素己	山下　素己

3. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会20カ年の歩み

３．長崎･ヒバクシャ医療国際協力会 20カ年の歩み

(1) 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の発足まで

◎ﾁｪﾙﾉﾌﾞｲﾘの事故の発生

〇昭和 61 年(1986 年)4 月

ソ連ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所にて爆発事故が発生。
最も被害が大きかった白ロシア(現ベラルーシ共和国)をはじめ放射線汚染は広範囲に及び、多くの人々が影響を受けた。

◎国の動き

〇平成 2 年(1990 年)

・IAEA(国際原子力機関)が専門家による実態調査を実施。
・日本船舶振興会がチェルノブイリ原発事故調査団(長崎、広島などの研究者で構成)を派遣。事故の現状調査や医療活動を実施。
・政府は、WHO(世界保健機構)の要請を受け、26 億円を拠出。

◎広島県の動き

〇平成 3 年(1991 年)

・広島県は「放射線被曝者医療国際協力推進協議会(HICARE)」を設立し、医師等の受入研修を実施。

◎長崎県の動き

〇長崎･ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)発足前の活動

・研修生の受け入れや医師の派遣等については、各医療機関等がそれぞれ独自に実施。
・長崎県は、国及び広島県とともに在南米被爆者に対する医師団派遣、長崎市は、在北米・南米被爆者の帰国治療を実施。

〇平成 3 年(1991 年)2 月

・知事が、県議会において「ヒバクシャ医療の連絡調整機関をスタートさせる」と言明。

〇平成 3 年(1991 年)5 月 30 日

・「ヒバクシャ医療国際協力懇談会」を開催
世界各地で発生している原子力発電所や核施設等の事故による被災者救済を目的として開催。懇談会には、長崎県医師会をはじめ長崎大学、(公財)放射線影響研究所、日本赤十字社長崎原爆病院、(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会の代表及び原爆医療の専門家が出席。懇談の結果、ヒバクシャ医療における国際協力の必要性を確認し、今後、機関設置に向けて具体的に検討していくことを申し合わせた。

〇平成 4 年(1992 年)4 月 1 日

・長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)を設立
長崎県及び長崎市からの負担金を受け、在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的に各種事業を実施。

ヒバクシャ医療に貢献

国際協力会が発足

長崎



世界のヒバクシャ救済を目指す協力会の発会式　＝長崎市の長崎厚生年金会館＝

チェルノブイリ原発事故の被曝（ひばく）者など世界の核被害者を救済するための医療研修を受け入れる「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」の発会式が三十一日、長崎市茂里町の長崎厚生年金会館であった。

世界各地で放射線被曝事故が多発する中で、日本の国際貢献の一つとして長崎、広島の被爆者医療の実績や放射線調査研究の成果を役立てよう、と県内の行政と医療機関が一昨年から準備を進めていた。

式には構成機関の県、長崎市、長崎大学医学部、日赤長崎原爆病院、県・同市医師会、放射線影響研究所、長崎原爆者対策協議会の代表が出席。

会長に土山秀夫・長崎大学学長、副会長に今村臣政・県医師会長を選出した後、①国外からの医師などの受け入れ②ヒバクシャの受け入れ治療③国外への医師派遣④ヒバクシャ医療のデータ収集、提供―などを行う規約を決定。平成四年度の事業として三十一日に来崎したエストニア共和国医師団を手初めに民間団体や日赤、外務省が招く医師団、ヒバクシャの研修調整などを行うことを決めた。

広島では昨年四月に同趣旨の団体が一足早く発足、新年度は六千四百万円の予算で本格的な受け入れを進めているが、長崎の場合はわずか事業費七十万円での出発。受け入れの窓口が県原爆被爆対策課に一本化され、研修先をあっせんする程度の事業しかできず、予算の増額が今後の国際協力の中身を問われるものとなりそう。

平成4年4月1日長崎新聞より

NASHIM発足以前のチェルノブイリ関係来崎者

期　間	申請団体名	紹介団体	訪問目的	来崎者
平成3年度 平成3年3月31日	エストニア共和国医師団	エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金		エストニア共和国医師団 （医師2名）
平成3年4月30日	IPPNWソ連支部		被曝者治療技術研修の協力依頼	ソ連支部事務局長
平成3年7月8日 〜7月12日	チェルノブイリ・モスクワ視察団	長崎〜ソビエトロシア友好市民団体	モスクワにチェルノブイリ被曝の子供たちのための病院を建設するための視察 （視察先） 恵の丘長崎原爆ホーム、 国際文化会館、 長大附属病院、原爆病院等	国立小児科病院医師、 運輸省補給部長、 国営企業ビタピット部長　計3人
平成3年8月7日 〜8月10日	エストニア・チェルノブイリ委員会	エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金	原水禁大会出席のため	委員会議長、委員、 リトアニア共和国最高会議議員、 医師、ジャーナリスト　計5人
平成3年9月10日 〜9月12 日	「チェルノブイリ同盟・ベラルーシ」代表団	チェルノブイリ支援運動・九州		「チェルノブイリ同盟・ベラルーシ」代表団（医師1人、他1人）
平成3年9月25日 〜9月28 日	チェルノブイリ医療協力ソ連医師団	笹川記念保健協力財団	被曝医療技術修得のため （研究先） 長大附属病院、長大医学部	キエフ州立総合病院 副委員長、医師 （白ロシア3人・ウクライナ3人・ロシア2人）、通訳　計10人
平成3年10月27日 〜10月28日		放射線被曝者医療国際協力推進協議会		サンパウロ日伯友好病院医師 （医師1人、他1人）
平成3年11月3日 〜11月6日	チェルノブイリ原発事故ソ連専門家代表団	外務省	「日・ソ　チェルノブイリ甲状腺シンポジウム」出席のため	ソ連緊急事態国家委員会チェルノブイリ原発事故対策委員会議長、白ロシア保健省実験室長他1人、ソ連邦医学アカデミー部長他3人、ミンスク医学研究所部長、 ソ連邦保健省部長、外務省部長 計10人
平成3年11月5日 〜11月7日	IPPNW ソ連支部代表団		IPPNW長崎支部との交流及び被爆の実相を学ぶため （視察先） 長大医学部	ソ連支部支部長、ソ連支部事務局長、レニングラード支部事務総長、 ラトビア支部事務総長、 ウクライナ支部員　計5人
平成3年11月9日 〜12月3日	チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団	朝日新聞厚生文化事業団		チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団 （子供6人、医師2人）
平成4年3月2日 〜3月20日	チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団	朝日新聞社、 朝日新聞厚生文化事業団、 テレビ朝日（原発事故被災者救援事業）	被災児の健診と放射能測定 （健診　原爆病院・放射能測定原医研） 医師の研修 （研修先） 長大附属病院、長大医学部、 原対協	チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団 被災児6人、ゴメリ州立病院部長、医師（ロシア3人、ベラルーシ2人）、通訳　計13人

NASHIM発足以前の長崎市渡日治療者

年　度	氏　名	生年	日　程					国　名	被爆距離
				入国	入院	退院	入院日数		
昭和57年度（1982）	M.M（旧姓M.S）	S10.	S57	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
	S.W（旧姓S.M）	S 9.	S57	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
昭和58年度（1983）	M.B（旧姓M.S）	S11.	S58	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
	R.L（旧姓R.M）	S 9.	S58	7/27	7/30	8/28	30日	米国	
昭和59年度（1984）	K.D（旧姓K.N）	S 6.	S59	9/30	10/3	11/2	31日	米国	
	H.R（旧姓H.I）	T14.	S60	3/19	3/22	4/8	18日	米国	
昭和60年度（1985）	T.K（旧姓T.S）	S 4.	S61	2/23	2/26	4/14	48日	米国	
	Y.K（旧姓Y.K）	S 3.	S61	3/23	3/26	4/19	25日	米国	
昭和61年度（1986）	T.M（旧姓T.H）	T15.	S62	3/15	3/15	4/18	35日	米国	
	F.S（旧姓F.T）	S 3.	S62	3/22	3/22	4/21	31日	米国	
昭和62年度（1987）	N.H（旧姓N.S）	S 6.	S63	3/21	3/24	4/15	23日	米国	
	N.C（旧姓N.Y）	S 7.	S63	3/13	3/16	4/13	29日	米国	
昭和63年度（1988）	C.G（旧姓C.S）	S 6.	H 1	3/27	3/29	4/20	23日	米国	
	T.O	S 4.	H 1	3/27	3/30	4/22	24日	米国	
平成元年度（1989）	M.B（旧姓M.T）	S 7.	H 2	3/21	3/24	4/16	24日	米国	
	N.S（旧姓N.S）	S 5.	H 2	3/21	3/24	4/21	29日	米国	
平成2年度（1990）	A.H（旧姓A.N）	T10.	H 3	3/23	3/26	5/10（出国5/11）	46日	米国	
	A.H（旧姓A.Y）	S 6.	H 3	3/23	3/26	4/20（出国5/28）	26日	米国	
	C.W（旧姓C.H）	S 4.	H 3	3/22	3/26	4/13	19日	ブラジル	
平成3年度（1991）	T.J（旧姓T.T）	S 2.	H 4	3/24	3/27	6/2	68日	米国	3.2
	S.W（旧姓S.Y）	T11.	H 4	3/24	3/27	4/20	25日	米国	1.2
	A.T	T15.	H 4	3/24	3/27	4/20	25日	ブラジル	2.6

（2）長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 ヵ年の歩み

平成 4 年(1992 年) 11 月～12 月	チェルノブイリ原発事故で被災した子供達と医師団が来崎 NASHIM が調整する医療機関で被災児の健康診断や医師の研修を実施
平成 5 年(1993 年) 3 月～4 月	在外ヒバクシャ(南米・北米)渡日治療事業開始
平成 5 年(1993 年) 8 月～9 月	チェルノブイリ関係国(ロシア、ベラルーシ、ウクライナ)から初の ヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成 7 年(1995 年) 8 月	韓国から初のヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成 7 年(1995 年) 9 月 18 日	第 1 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式　受賞者／秋月辰一郎氏
平成 7 年(1995 年) 9 月 19 日	被爆 50 周年ヒバクシャ医療国際シンポジウム 「ヒバクシャ医療と医科学」～長崎からの提言～
平成 7 年(1995 年) 11 月 15 日	被爆 50 周年記念講演会　～医療と健康～
平成 8 年(1996 年) 4 月	チェルノブイリ原発事故 10 周年記念事業出席のためウクライナへ専門家派遣
平成 8 年(1996 年) 7 月～9 月	カザフスタン共和国から初のヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成 9 年(1997 年) 3 月	カザフスタン共和国科学アカデミー特別調査隊報告書『中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態』を邦訳出版
平成 9 年(1997 年)	非 ODA 対象 NIS 諸国のロシア連邦・ベラルーシ共和国に対する外務省関係団体支援委員会の補助事業を開始
平成 9 年(1997 年) 9 月	機関誌「NASHIM」第 1 号を発行
平成 10 年(1998 年) 3 月 3 日	第 2 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／サイム・バルムハノフ氏(カザフスタン共和国)
平成 10 年(1998 年) 3 月	L.A.イリーン著『チェルノブイリ:虚偽と真実』を邦訳出版
平成 11 年(1999 年) 3 月	『長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 7 ヵ年の歩み』出版

平成 11 年(1999 年)	国際協力事業団(JICA)が実施するカザフスタン共和国セミパラチンスク地域の医療改善事業に参画を開始
平成 11 年(1999 年) 8 月～9 月	セミパラチンスク写真展開催
平成 12 年(2000 年) 3 月	永井隆著『原子爆弾救護報告』英訳版出版
平成 12 年(2000 年) 3 月 30 日	第 3 回永井隆平和記念･長崎賞授賞式 受賞者／ヨハネス･ヤコブ･ブローセ氏(オランダ)
平成 12 年(2000 年) 10 月 18 日	日本の保健衛生分野における権威ある賞として世に認められている第52回「保健文化賞」を NASHIM が受賞
平成 13 年(2001 年) 8 月 4 日	講演会「みんなで考えよう放射線被ばく ～チェルノブイリ原発事故から 15 年～」
平成 14 年(2002 年) 2 月 18 日	第 4 回永井隆平和記念･長崎賞授賞式 受賞者／鎌田七男氏、エヴゲニイ･デミチュック氏(ベラルーシ共和国)
平成 14 年(2002 年) 3 月	支援委員会補助事業により『小児甲状腺学』･『甲状腺超音波診断：疾患偏』をロシア語出版
平成 14 年(2002 年) 8 月 4 日	NASHIM 創立 10 周年記念特別講演会～永井隆博士と原爆～
平成 14 年(2002 年) 10 月 23 日	ベラルーシ共和国政府からこれまでの支援に対して NASHIM が感謝状を授与される
平成 14 年(2002 年) 11 月	長崎･ヒバクシャ医療国際協力会創立 10 周年記念ビデオ制作
平成 15 年(2003 年) 3 月	『長崎･ヒバクシャ医療国際協力会 10 ヵ年誌』発刊
平成 15 年(2003 年)	セミパラチンスク地域医療改善計画への参画（検討会への出席・研修生受入）
平成 15 年(2003 年) 8 月 3 日	チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会開催
平成 16 年(2004 年) 2 月 13 日	第 5 回永井隆平和記念･長崎賞授賞式 受賞者／日本チェルノブイリ連帯基金（理事長　鎌田實氏）　（日本） 鎌田七男著『白血病診断図譜詳解―放射線関連白血病を含む―』出版 『長崎から世界へ～NASHIM・ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～』（ビデオ・CD-ROM）作成

平成 16 年(2004 年)	セミパラチンスク地域医療改善計画への参画（国内支援委員会への出席・研修生受入）
平成 16 年(2004 年) 5 月～11 月	ユーリー・コステンコ　ウクライナ駐日大使来訪（３回）
平成 16 年(2004 年) 6 月 9 日	コスチャンティン・グリシチェンコ　ウクライナ外務大臣来訪
平成 16 年(2004 年) 7 月 31 日	講演会「放射線災害の緊急医療について考えよう」
	ラリッサ・ダニロワ著『甲状腺疾患』出版
	鎌田七男著『白血病診断図譜詳解―放射線関連白血病を含む―』ロシア語ＣＤ作成
平成 17 年(2005 年) 9 月 23 日	被爆 60 周年記念事業を実施
平成 17 年(2005 年) 7 月 25 日	第 6 回永井隆平和記念･長崎賞授賞式 受賞者／市丸道人氏(日本)、横路謙次郎氏（日本）
	秦山弘道著『Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55』出版
	調来助著『長崎ニ於ケル原子爆弾災害ノ統計的観察』英訳版出版
	『長崎原爆の医学的影響』モンゴル語出版
平成 18 年(2006 年) 7 月 10 日	外務省において平成 18 年度外務大臣表彰を NASHIM が受賞
平成 18 年(2006 年) 7 月～8 月	チェルノブイリ原発事故 20 周年事業を実施
	『チェルノブイリ原発事故後のロシアにおける甲状腺癌（Thyroid cancer in Russia after the Chernobyl: an analytical review ）』ロシア語出版
	『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』出版
平成 19 年(2007 年) 10 月 31 日	第 7 回永井隆平和記念･長崎賞授賞式 受賞者／アナトリィ･ツィーブ氏(ロシア連邦)
平成 20 年(2008 年) 3 月 7 日	初の出前出張講座を高尾小学校で開催

平成 20 年(2008 年)	『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』出版
平成 22 年(2010 年) 3 月 15 日	第 8 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／クリストフ・ライナー氏(ドイツ連邦共和国)
平成 22 年(2010 年) 12 月 18 日	初の東京シンポジウム開催 ケシリム・ボズターエフ著『人間と原子』邦訳のうえ、ナシムのホームページに電子書籍として掲載 長崎新聞新書『２１世紀のヒバクシャ』編著　(柴田義貞責任編集)
平成 23 年(2011 年) 5 月～7 月 8 月 10 日	東日本大震災復興支援　東京シンポジウム開催（３回） 被災のあった、いわき市小中学生生徒会リーダーと長崎市内中学生生徒会リーダーを対象に出前出張講座開催 『放射能Ｑ＆Ａ』改訂版出版
平成 25 年(2013 年) 2 月 9 日～10 日 2 月 9 日	ナシム設立 20 周年記念事業～長崎とヒバクシャ医療～　開催 第 9 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／ミコラ・トロンコ氏(ウクライナ) 『放射能Ｑ＆Ａ（改訂版)』を PDF 書籍として作成

4. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の活動状況

4. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の活動状況

(1) 研修者の受け入れ・専門医師等の派遣事業


被ばく者医療の研修へ
ロシアなど4カ国6人 県庁、長崎大など訪問

放射線被ばく者の医療まで、長崎大医学部や日赤長崎原爆病院などで研修を受けるため、長崎市に滞在しているロシア、カザフスタン、ベラルーシ、クライナの四カ国の医師六人が十八日、県庁などを訪問した。
「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」が、一九九三年から毎年実施している研修医らの受け入れ事業。六人は八月十五日まで、長崎大医学部や日赤長崎原爆病院などで研修を受ける。
長崎市中川一丁目の放射線影響研究所長崎研究所では、岩佐正純臨床研究部長が「被爆者のガンが多い」ことは知られているが、心臓病や脳血管障害の報告も多い」などと研究内容を説明し、研修医らの受け入れを見学した。六人は八月十五日に帰国した。

平成12年7月19日西日本新聞より

【事業目的】

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)では、長崎が蓄積した原爆被爆者治療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果を生かして、放射線被曝者の治療・健康管理にあたっている世界各地の医療従事者等に対する指導、技術支援、医療情報の提供を行うために、医師等の受入研修事業及び専門医師等の派遣事業を行う。

【事業内容】

1. 独自事業

医師等受入研修又は専門医師等派遣申請のうち、協力会が特に必要と認めたものについては、協力会独自で医師等の受入研修・派遣を行う。

2. 共同事業

国及びその他の関係機関と共同で、医師等の受入研修・派遣を行う。

3. 窓口調整事業

海外から医師等の研修受け入れや海外への専門医師等の派遣申請に基づいて、関係機関相互の連絡調整を行い、効率的な研修を行う。

【対象要件】

医師等受入研修・専門医師等派遣事業の対象は、次の要件が必要である。

1. 原則として、国際機関、外国政府、外国地方政府又は医師会等これらに準ずる公的機関から、日本国内の公的機関を経由して申し込まれたものであること。
2. 医師等受入研修の場合
   - 研修を受ける者が、放射線被曝者の医療・健康管理等に従事する医師等であること。
   - 長期研修(2 週間以上)を希望する医師等にあっては、研修を効率的、かつ、円滑に受けられる英語能力を有する者であること。
   - 研修の目的が放射線被曝者の医療･健康管理等に関する知識技術の習得を主とするものであること。
3. 医師等派遣の場合は、その目的が派遣先における放射線被曝者の医療・健康管理等に従事する医師等に対する技術研修を主とするものであること。

【申請手続】

1. 医師等受入研修については、「放射線被曝者医療に関する受入研修申請書」に必要事項を記載の上、申し込むこと。
2. 医師等派遣については、「放射線被曝者医療に関する専門医師等派遣申請書」に必要事項を記載の上、申し込むこと。
3. 原則として、毎年 9 月 30 日までに申請があったものについて、翌年度事業の受入研修・派遣の検討対象とする。

【医師等受入研修の費用負担】

1. 協力会が独自事業として実施する場合の費用については、次に掲げるものについて、関係機関と協議して必要と認める額を協力会において負担する。
   - 航空運賃、支度料、滞在費、国内旅費、研修旅費、書籍料、資料別送料
2. 協力会が共同事業として実施する場合の費用については、相手方と協議の上、協力会の負担する額を決定する。
3. 協力会が窓口調整事業として実施する場合は、協力会は原則として費用は負担しない。

【専門医師等派遣の費用負担】

協力会が独自事業として実施する場合の費用については、次に掲げるものについて、関係機関等と協議して必要と認める額を協力会において負担する。

- 航空運賃、支度料、滞在費、国内旅費、書籍料、資料別送料

研修機関



長崎大学医学部

〒852-8523　長崎市坂本１丁目 12-４
TEL:095-819-7004
FAX:095-819-7166

●学部／医学科、保健学科
●大学院
　医歯薬学総合研究科
　　博士課程４専攻
　　修士課程　２専攻



長崎大学病院

〒852-8501　長崎市坂本１丁目 7-1
TEL:095-819-7200
FAX:095-819-7215

●診療科／31 診療科
●病床数／862 床
●中央診療施設（検査部他）



長崎大学原爆後障害医療研究所

〒852-8523　長崎市坂本１丁目 12-４
TEL:095-819-7004
FAX:095-819-7166

●研究組織
・社会医学部門
・放射線生命科学部門
・原爆・ヒバクシャ医療部門
・資料収集保存・解析部



公益財団法人　放射線影響研究所

〒850-0013　長崎市中川１丁目 8-6
TEL:095-823-1121
FAX:095-825-7202

●被爆者の健康に関する調査研究
●遺伝学的調査研究
●疫学的・臨床医学的調査研究
●原爆被曝線量の再評価　等



日本赤十字社　長崎原爆病院

〒852-8511　長崎市茂里町 3-15
TEL:095-847-1511
FAX:095-847-8036

●診療科／14 診療科
●病床数／360 床



長崎市原爆被爆者健康管理センター

〒852-8104　長崎市茂里町 2-41
TEL:095-844-3100
FAX:095-843-9255

●被爆者の健康診断
●被爆者の健康管理及び健康指導
●被爆者への援護　等

研修者の受入・専門医師等の派遣事業　実績一覧表

Ⅰ．受入研修者リスト

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成4年度 窓口調整事業	平成4年3月31日～4月4日 (5日間)		エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金	医師の研修
	9月10日～12日(3日間)		チェルノブイリ支援運動・九州	被爆者医療の視察及び 市民団体との交流
	10月27日～28日(2日間)		HICARE	被爆者医療の視察
	11月9日～12月3日(26日間)		日本赤十字社、朝日新聞厚生文化事業団　他	被災児の検診と放射能測定、 医師の研修
平成5年度 独　自　事　業	8月9日～9月12日(35日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
窓口調整事業	11月24日		笹川−チェルノブイリ医療協力訪日団	
	11月30日～12月15日(16日間)		外務省	チェルノブイリ原発事故 日−旧ソ連共同研究(甲状腺班)
	12月7日～15日(9日間)			
	12月15日		HICARE(外務省)	チェルノブイリ原発事故 日−旧ソ連共同研究 (データ処理班)(白血病班)
	12月15日		HICARE(WHO)	
	平成6年2月15日～3月16日 (30日間)		日本赤十字社	
平成6年度 独　自　事　業	7月25日～9月4日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	11月7 日～9 日(3日間)			在韓被爆者関係 (医療交流の事前打合せ・関係機関視察)
	平成7年3月8日～10日(3日間)			在韓被爆者関係 (医療交流の事前打合せ・関係機関視察)
窓口調整事業	4月21日～5 月11日(21日間)			チェルノブイリ事故の胎内被曝の 影響に関するWHO共同研究の ための打合せ
	7月31日～8月5日(6日間)		(財)笹川記念保健協力財団	放射線医療(時に線量測定)の研修 意見交換
	10月10日～16 日(7日間)		日本赤十字社	日赤によるチェルノブイリ原発事故 被災者救援事業
	10月24日～25日(2日間)		HICARE	放影研による被曝者医療研修
	平成7年2月22日～3月7日 (14日間)		外務省NIS支援室	チェルノブイリ原発事故 日―旧ソ連共同研究 (長崎大学−甲状腺班)
			外務省欧亜局西欧第二課	バルト三国からのチェルノブイリ専門家招聘事業(長崎大学−甲状腺班)
	平成7年3月5日～7日(3日間)		HICARE (外務省欧亜局、 NIS支援室西欧第二課)	HICAREと外務省との共同事業としての受入研修 (データ処理班、白血病班)

凡例　長大医…長崎大学医学部　放影研…(公財)放射線影響研究所　長大病院…長崎大学病院
原研…長崎大学原爆後障害医療研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　血液センター・・・・赤十字血液センター
資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター　原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会　成人病センター…成人

研　修　者	人数	受　入　機　関
エストニア共和国医師団医師	2名	長大病院、原対協
チェルノブイリ同盟・ベラルーシ代表団ゴメリ医学・遺伝センター医長ほか	2名	長大医、原爆病院、原対協、県部長、市課長
サンパウロ日伯友好病院医師	1名	長大医、原爆病院、原対協、放影研
チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団被災児	6名	長大医、長大病院、原爆病院、血液センター
小児血液調査研究医師、ロシア連邦放射能予防科学技術センター医師ほか	9名	
G.D.バナシューク(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター V.M.コバレフ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター A.S.サイコ(ウクライナ)コロステン医療診断センター E.V.クリヴィアキワ(ウクライナ)キエフ州立医療診断センター L.P.コロボコワ(ロシア)クリンシィ診断センター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研(広島、長崎) 原爆病院、原対協、野口病院
V.E.デジルツキー(ゴメリ州立予防専門センター院長)他	11名	長大病院
ワレリー.A.オレイニク(ウクライナ内分泌研究所)他	3名	長大医、長大病院、原研、資料センター、原爆病院 原対協
ミカイロワナ.A.アルテモーバ(ロシア医学アカデミー内分泌センター)他	5名	
ユゲニ.M.ラストファヒン(ロシア放射線医学研究センター)他	13名	放影研
アンドレイ.コノゴロフ(オブニンスク医療放射線研究センター)	1名	放影研
リュドミラ.ヤ.ロシンスカヤ(ロシア医療科学研究所)他	3名	長大医、長大病院、原研、資料センター、放影研 原爆病院、原対協、血液センター
L.A.コトワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター・医師 S.M.ラフィエンコ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・医師 S.ルドニツスキー(ウクライナ)コロステン医療診断センター・医師 N.V.ニキフォロア(ウクライナ)キエフ州立医療診断センター・医師 L.A.スティーブチン(ロシア)クリンシィ市立小児病院・医師	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 野口病院、成人病センター、はまゆう学園
呉　千根(大韓赤十字社原爆福祉事業所長)他	2名	日赤県支部、原爆病院、原研、原対協
宋　秀植(大韓赤十字社ソウル病院長)他	3名	日赤県支部、原爆病院、原研、原対協
A.E.カチャルコ(ベラルーシ)ミンスク公衆医学センター・医師 I.M.ゼルダック (ベラルーシ)ミンスク公衆医学センター・医師 L.K.ロカツフスキー(ウクライナ)ウクライナ臨床放射線神経研究所・医師 E.Y.アンチプチェック(ウクライナ)ウクライナ科学アカデミー放射線医学神経部局・医師 A.プコフスキー(ロシア)モスクワ精神保健センター・医師 V.Y.リュアプーチン(ロシア)モスクワ精神保健センター・医師	6名	長大病院、原爆病院、原対協
V.F.シェリフォフ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 I.ヴェセルキナ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 I.V.ピレンコ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 S.V.コヴァレヴァ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 V.B.マスヤキン(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター・線量測定担当技師 A.I.コヴァレフ (ロシア)クリンシィ市立小児病院・線量測定担当技師 P.M.シミグン(ウクライナ)キエフ州立第2病院・線量測定担当技師 I. N.ソコロフスキー(ウクライナ)コロステン医療診断センター・線量測定担当技師 L.I. コドゥン(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・アドバイザー V. ポシン・イリヤ　笹川財団モスクワ事務所職員・通訳	技師 8名 アドバイザー 1名 通訳 1名	長崎大学アイソトープ総合センター
マリア・ジモヴェッツ(ウクライナ)キエフ内分泌代謝学研究所・医師 ガリーナ・ロマノーバ(ロシア)ブリヤンスク州立医療診断センター・医師 ザボロヴスカイ(ベラルーシ)ベラルーシ国立第10病院・医師	3名	長大医、原爆病院、原研
E.K.ヴィクター(ベラルーシ)グロノド州立医科大学・研究員 Y. N. ウラジミール(ロシア)ロシア保健省生物物理学研究所・研究員 E.S.イゴール(ロシア)ロシア保健省生物物理学研究所・研究員	3名	放影研
V.A.ペテルコーワ(ロシア)内分泌研究所課長 E. I.マローワ(ロシア)内分泌研究所副所長 N.S. セカッチ(ベラルーシ)放射線医学研究所・研究員 E. I.コースメンコワ (ベラルーシ)放射線医学研究所・研究員 E .イゴール　通訳	研修員 等 4名 通訳 1名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協
ヤーヌス・ケルゲ(エストニア)聖マルダレーナ病院・医師	1名	
ニギヤン.A .アルメノヴィッチ(ロシア)他11名 (ロシア1名、ウクライナ4名、ベラルーシ2名、ラトビヤ2名、リトアニア2名、エストニア1名)	12名	放影研

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成7年度 独自事業	7月23日～9月3日(43日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	8月7日～30日(24日間)		大韓赤十字社	在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	平成8年1月30日～3月2日 (33日間)		放影研	
窓口調整事業	7月6日～13日(8日間)		日本赤十字社	
	平成8年2月18日～24日(7日間)		外務省NIS支援室 (日-旧ソ連共同研究)(甲状腺班)	シンポジウム
	平成8年3月8日～12日(5日間)		外務省NIS支援室(日-旧ソ連共同研究) 外務省西欧第2課(データ処理班)	
	平成8年3月17日～24日(8日間)		日本赤十字社	
	平成8年3月18日～31日(14日間)		外務省NIS支援室 (日-旧ソ連共同研究)(甲状腺班)	シンポジウム
平成8年度 独自事業	7月29日～9月8日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	9月2日～23日(22日間)		大韓赤十字社	在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成9年2月22日～3月16日 (23日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	5月26日～30日(5日間)	秋田ベラルーシ友好協会		長大医学部とミンスク医科大との 姉妹校締結
窓口調整事業	4月15日～20日(6日間)		(財)笹川記念保健協力財団	原爆医療に係わる意見交換及び視察
	4月17日～19日(3日間)		HICARE	ブラジル医師研修
	7月27日～31日(5日間)		(財)笹川記念保健協力財団 広島大学医学部	
	8月8日～23日(16日間)		(財)笹川記念保健協力財団	
	平成9年1月27日～2月5日 (8日間)		日本赤十字社長崎県支部	日赤による受入研修

凡例
長大医…長崎大学医学部　放影研…(公財)放射線影響研究所　長大病院…長崎大学病院
原研…長崎大学原爆後障害医療研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　血液センター・・・・赤十字血液センター
資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター　原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会　成人病センター…成人

研修者	人数	受入機関
T.Y. コロスヴェトワ(ロシア)クリンシィ市立小児病院 E.V.クルプニク (ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター T. I. エヴドチョコワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター Y.Y. サウティン(ウクライナ) ウクライナ内分泌代謝研究所 A.V.ヤニュク(ウクライナ)ウクライナ内分泌代謝研究所	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 隈病院、成人病センター、はまゆう学園
李　昌鉉(イ・チャンヒョン) (韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、原研、放影研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム
S.A.イグムノフ (ベラルーシ)放射線医学研究所国立保健センター	1名	長大医、心身障害児療育指導センター
ラリサ．ダニロヴァ(ミンスク放射線医学センター) 他	4名	原爆病院、長大医、原研
E.チェルストヴォイ(ミンスク医科大学)他	6名	原爆病院、隈病院
ナターリア.コロル(ウクライナ)ウクライナ放射線医学研究所　他	8名	放影研、資料センター
A.A. ロマノフスキー(ミンスク州立病院) 他	4名	原爆病院、長大医、原研、原対協
A.ステブーチン(クリンシィ市立小児病院) 他	3名	長大医、原研
リンマ．ピロウコワ.(ロシア)ブリヤンスク州立医療センター・医師 V.コット.アレキサンダー(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター・医師 ナターリア．クリコワ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・SE マリア．エスペンベトワ(カザフスタン) セミパラチンスク医学研究所・医師 ルミドラ．クリザロフスカヤ(ウクライナ)キエフ医学研究所・医師	5名	長大医、長大病院、原爆病院、放影研(広島・長崎) はまゆう学園
宋　秦義(ソン・テ・ウィ) (韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、長大病院、原爆病院、放影研、 恵の丘長崎原爆ホーム
ナターリア.コロル(ウクライナ)ウクライナ放射線医学研究所	1名	放影研(広島・長崎)、放射線医学総合研究所
アレクセイ．クバルコ(ベラルーシ)ミンスク医科大学学長	1名	長大医
リューミドラ.ヴォロペイ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・医師 ナターリア.アルミキク(ベラルーシ)ゴメリ州立医療診断センター・看護婦長 スベトラーナ.シロフスドーワ(ロシア)クリンシィ市立小児病院・看護婦長 ナターリア.サンドラスカヤ(ウクライナ) キエフ州立第2病院・看護婦長 オルガ.コールズン(ウクライナ)コロステン医療診断センター・看護婦長	5名	長大医、長大病院、資料センター、原爆病院、放影研 はまゆう療育園、天草慈恵病院
大久保　静香　ローザ(サンパウロ日伯援護協会・日伯友好病院)・医師 井山　さゆり　エレーナ(サンパウロ日伯援護協会・日伯友好病院)・医師	2名	原爆病院、放影研、原対協
コンスタンチノフ(ロシア)サンクト・ペテルブルク市放射線衛生研究所・研究員 ガブリーニン(ロシア)モスクワ市放射線生物物理学研究所・研究員 グセフ(カザフスタン)カザフ放射線医学環境研究所・所長	3名	長大医
ドルベシュキン(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・副所長 ガイデュク(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・コンピュータ部門長 ポーシン(ロシア)笹川財団モスクワ事務所プログラムオフィサー	3名	長大医、放影研
ドロコフ(ロシア)ブリヤンスク診断処理センター・副所長 ヴォルコバ(ベラルーシ)ゴメリ放射線医学センター・医師 ピリペンコ(ウクライナ)キエフ内分泌及び代謝学研究所・医師	3名	原爆病院、長大医、長大病院

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成9年度 独自事業	7月28日～9月7日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	平成10年2月9日～28日(20日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	6月5日～8日(4日間)		秋田ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	6月4日～14日(11日間)	外務省		
	8月7日～10日(4日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	平成10年2月5日～3月2日 (26日間)	日本赤十字社		放射線医療の研修
	平成10年3 月11日～13日 (3 日間)	HICARE		放射線被曝者医療に関する研修
平成10年度 独自事業	8月3日～31日(29日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	平成11年3月8日～19日 (12日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月3日～11日(9日間)		秋田ベラルーシ友好協会	ヒバクシャ医療の研修 平和祈念式典参列
	8月31日～9月2日(3日間)			ベラルーシWeeK講演会 パネラー NASHIM普及啓発事業
窓口調整事業	8月7日～10日(4日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	平成11年1月29日～2月15日 (18日間)	日本赤十字社		放射線医療の研修
平成11年度 独自事業	7月15日～8月14日(31日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	11月15日～11月30日(16日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月5日～8月12日(8日間)		秋田ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	5月23日～6月2日(6日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	7月15日～ 8月14日(31日間)			
	10月15日～10月27日(13日間)	HICARE		
	平成12年2月28日～3月3日(5日間)	放影研		

凡例
長大医…長崎大学医学部　放影研…(公財)放射線影響研究所　長大病院…長崎大学病院
原研…長崎大学原爆後障害医療研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　血液センター・・・・赤十字血液センター
資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター　原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会　成人病センター…成人

研修者	人数	受入機関
ルスラン.シシコフ(ロシア)ロシア国立ガンセンター タチアナ.ニコラエワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター ナターリャ.ニキホロワ(ウクライナ)キエフ州立第2病院 ザギズベイ.デュマディロフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園
姜　永濟(カン　ヨンジョ) (韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム
イゴール.イスクロフ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院 インナ.プレゾーヴァヤ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院 エレナ.ベリスカイア(ベラルーシ)ミンスク医科大学	3名	長大医、原研、長大病院
アンチーニナ.コレスニコーワ(ロシア)ロシア放射線医学研究所	1名	原研
ホリソビッチ. ゼレンケビッチ(ベラルーシ)保健大臣 ミハイローブナ. ドロビシェフスカヤ(ベラルーシ)上院議員 ニコライビッチ. グラースコフ(ベラルーシ)保健省国際課長	3名	長大医、世界平和市長会議、平和祈念式典献花
タチアナ.スエタ(ベラルーシ)医師 セルゲイ.スジョミン(ウクライナ)医師 ウラジミール.ドロチチェンコ(ロシア)医師	3名	長大医、長大病院、放影研
鐘ヶ江.マルシア.よしえ(ブラジル)医師 三宅.テレーザ.千枝子(ブラジル)医師	2名	長大病院、原爆病院
イゴール.グセフ(ロシア)モスクワ生物物理学研究所 ルドミラ. クリザロフスカヤ(ウクライナ)キエフ医学研究所 ウラジミール.マシャーキン(ベラルーシ) ゴメリ州立病院 ユリー.ブルグロ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園
権　貞兒(クオン・ジョン・ア) (韓国)ソウル赤十字病院 文　昶晧(ムン・チャン・ホ) (韓国) 陝川保健所	2名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎県西彼保健所、「かめだけ」
アレクセーエブナ. グリゴリエヴァヤ(ベラルーシ) ミンクス医科大学 ステパノヴナ. カザケヴィチ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院	2名	長大医、長大病院、原研
高村　昇(長崎大学医学部助手) 豆谷　耕二(長崎県原爆被爆者対策課参事) 中嶋　洋(長崎県原爆被爆者対策課係長)	3名	秋田市(秋田ベラルーシ友好協会)
アレキサンドロヴィッチ. クリセンコ(ベラルーシ共和国ゴメリ州政府保健局長) ステパノヴィッチ. ヴオロヴェイ(ゴメリ州立診断センター院長) ヴィクター. ストリージャック(笹川記念保健協力財団　モスクワ事務所)	3名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
イヴァン.ニキフォルク(ウクライナ)ロブノ地区巡回医 ウラジミール.シヴダ(ベラルーシ)ブレスト地区巡回医 タチアナ.シシュミントセヴァ (ベラルーシ)ゴメリ地区巡回医	3名	長大医、原研、原爆病院、放影研、原対協
ウラジミール. サエンコ(ロシア)放射線医学研究所 エフゲニー.ザイツェフ(ロシア)医学・環境問題研究所 ジャンゲントカーン.アブライウリー(カザフスタン) 衛生学疫学研究所 スヴェトラーナ.ゴマノヴァ(ベラルーシ) モギリョフ診断センター サンディー.ロック(アメリカ)ワシントン公衆衛生研究所	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園、富士通大分ソフトウェア ラボラトリー、東北大学医学部、8月9日平和祈念式典参加
李　相禧(イ　サンヒ) (韓国)ソウル赤十字病院 鄭　明淑(チョン　ミョンスク) (韓国)陝川原爆被害者福祉会館	2名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム 原爆被爆者特別養護老人ホームかめだけ
アンドレイ.スクリップスキー(ベラルーシ)国立ミンスク医科大学 ヴァレリー.ヴォイトヴィチ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 イリーナ.グリゴルチューク(ベラルーシ)国立ミンスク医科大学	3名	原研、8月9日平和祈念式典参加
S. チェキン(ロシア)ロシア医学放射線研究所	1名	
ウラジミール.アルヒペンコ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 ヴィクトール.ダマンツェヴィッチ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院	2名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
セリィ・V・ミロシュニチェンコ(ウクライナ) 放射線医学研究センター臨床放射線研究所	1名	長大医、原研
ニーナ・マトヴェーワ(ロシア)	1名	

事業区分	期　間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成12年度 独自事業	7月17日～8月15日(30日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	12月11日～12月20日(10日間) 12月11日～12月14日(4日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月3日～8月13日(11日間)		日本ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	4月10日～4月12日(3日間)	JICA		セミパラチンスク被曝者支援
	平成13年1月22日～1月25日 (4日間)			セミパラチンスク地域医療改善計画
	7月17日～8月15日(30日間)	(財)笹川記念保健協力財団		
	11月14日～11月21日(8日間)	地球市民集会ナガサキ		
平成13年度 独自事業	7月16日～8月12日(28日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	7月24日～8月21日(29日間)			
	11月26日～12月5日(10日間) 11月26日～11月30日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月3日～8月10日(8日間)		日本ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	7月30日～9月7日(38日間)	ティッシュバンク		
	平成14年2月1日～3月31日(59日間) 平成14年2月16日～3月17日(30日間)	学術振興財団		
	平成14年2月16日～23日(8日間)	外務省		
	平成14年2月12日～26日(15日間)	文部省		
	平成14年3月28日～4月2日 (4日間)	JICA		カザフスタン地域医療改善技術
平成14年度 独自事業	7月16日～8月24日(40日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	7月16日～8月27日(43日間)			
	10月14日～10月23日(10日間) 10月14日～10月18日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成15年2月24日～3月5日 (10日間) 平成15年3月10日～3月19日 (10日間)			
共同事業	8月2日～8月10日(9日間)		日本ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	平成15年3月28日～4月1日 (3日間)	JICA		カザフスタン地域医療改善技術

凡例
長大医…長崎大学医学部　放影研…(公財)放射線影響研究所　長大病院…長崎大学病院
原研…長崎大学原爆後障害医療研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　血液センター・・・・赤十字血液センター
資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター　原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会　成人病センター…成人

研　修　者	人数	受　入　機　関
エレナ．マルチェンコ(ロシア)内分泌学科学センター ウラジミール．スレッサフ(カザフスタン)カザフスタン戦争犠牲者病院 リリヤ．アラディワ(ベラルーシ)モギュロフ州立診断センター オルガ．カミーシュ(ベラルーシ) ゴメリ州立診断センター ニナ．ニローワ(ウクライナ)コロステン州立診断センター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 成人病センター、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
金　漢秀(キム　ハンス) (韓国)統営赤十字病院 姜　再苑(カン　ジェウォン) (韓国)統営赤十字病院 徐　俊錫(ソ　ジュンソク) (韓国)特殊福祉事業所 白　玉淑(ペク　オクスク) (韓国)特殊福祉事業所	4名	長崎県、長崎市、原研、長大病院、放影研、原爆病院 原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 8月9日平和祈念式典参加
アンドレイ.リシク(ベラルーシ)放射線医療及び内分泌学の臨床調査研究所 ユーリア．ムハルスカヤ(ベラルーシ)ミンスク医科大学 イリーナ．アルホビック(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院	3名	原研、8月9日平和祈念式典参加
セリク．イプラエフ(カザフスタン) 保健庁第一次官	1名	長大医、原研、原爆病院、原対協、長崎原爆資料館 長崎県、長崎市
ビクター．ザグランチニー(カザフスタン)東カザフスタン州保険局第一副局長 ルスラン．エンセバエフ(カザフスタン)セミパラチンスク市保健局長	2名	
イリーナ．カレフスカヤ(ロシア)ブリアンスク州立第二診断センター	1名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
トレゲン．ライリフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	1名	原研
ガリーナ．タラソワ(ロシア)オブニンスク州立放射線医学研究所 ベロニカ．アンティポア(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学国際副部長 イゴール．タラシウク(ベラルーシ)ゴメリ州立医科大学医科学・免疫学研究室長 ナタリア．グドゼンコ(ウクライナ)キエフ放射線医学研究所	4名	長大医、長大病院、原研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎市身体障害者福祉センター 九州電力長崎支店、放影研、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
サダガット．サガンディコワ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	1名	
許　鎭哲(ホ　ジンチョル) (韓国)大韓赤十字社居昌赤十字病院 金　銀玉(キム　ウンオク) (韓国)陜川原爆被害者福祉会館 尹　錫勳(ユン　ソクフン) (韓国)大韓赤十字社特殊福祉事業所 李　丙鎔(イ　ビョンヨン) (韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長崎県医師会、長崎市、長崎大学、長大医、長大病院 原研、原対協、長崎原爆資料館、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム、 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、放影研
ナターリヤ．クーズメンコヴァ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 ラリーサ．コズイチュ(ベラルーシ)ミンスク州立専門病院 スベトラーナ．ドゥーベン(ベラルーシ)ミンスク医科大学Collagenosis研究所	3名	原研、原対協、長崎市身体障害者福祉センター 恵の丘長崎原爆ホーム、原爆病院、、放影研 九州電力長崎支店、8月9日平和祈念式典参加
スヴェトラーナ．マンコフスカヤ(ベラルーシ) 甲状腺ガンセンター ナターリヤ．ベトゥコーワ(ロシア) オブニンスク放射線医学研究所	2名	原研、放影研、8月9日平和祈念式典参加
ビクトル．イワノフ(ロシア) オブニンスク放射線医学研究所 ラリッサ．ダニロワ(ベラルーシ)ベラルーシ医学卒後教育研究所	2名	長大医
アレクサンダー．ネロービニャ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ユーリ．デミチュック(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学	2名	長大医
マイラ．エスペンベトワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	1名	長大医
アイヌール．アシロバ(カザフスタン) 保健省国際協力部専門家	1名	長大医、原研、原爆病院、原対協、長崎原爆資料館 長崎県、長崎市
ドミトリー．アバクーシン(ロシア)ロシア放射線医学研究所 ナターリァ．オルコヴィッチ(ウクライナ)ウクライナ小児病院 オレッグ．ゴルベフ(ロシア)ゴメリ医科大学 スベトラーナ．アニスチェンコ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎市身体障害者福祉センター 九州電力長崎支店、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
マリアンナ．ザグロフスカヤ(カザフスタン)第二次世界大戦記念病院 グルフィラ．エンセバエバ(カザフスタン)ポリクリニック第3病院	2名	
林　大原(イム　デ一ウォン) (韓国)陜川郡保健所 梁　慶鎬(ヤン　ギョンホ) (韓国)居昌赤十字病院 南　成子(ナン　ソンジャ) (韓国)統営赤十字病院 金　容賢(キム　ヨンヒョン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 金　光惠(キム　グワンヘ) (韓国) 陜川原爆被害者福祉会館 朴　胤朱(パク　ユンジュ)(韓国)大韓赤十字社特殊福祉事業所	6名	原研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、長大病院 放影研、原爆病院、長崎原爆資料館
邊　聖煥(ピョン　ソンファン) (韓国)ソウル赤十字病院 梁　宙鉉(ヤン　ジュヒョン) (韓国)仁川赤十字病院 朴　鍾澤(パク　ジョンテクッ)(韓国)大邱赤十字病院 金　尚姫(キム　サンヒ) (韓国)尚州赤十字病院 黄　必蓮(ファン　ピリョン) (韓国)統営赤十字病院 裵　正淑(ペー　ジョンスクッ) (韓国)居昌赤十字病院	6名	原研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム、長大病院 放影研、原爆病院、長崎原爆資料館
ジュリア．クバルコ(ベラルーシ)ミンスク医科大学第9診療病院	1名	長大医、原研、放影研、九州電力長崎支店 8月9日平和祈念式典参加
サギン．カレル(カザフスタン)保健省医療部長	1名	原研、原爆病院、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、長崎県、長崎市

事業区分	期　間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成15年度	7月22日～8月26日(36日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
独自事業	6月2日～11日(10日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	9月27日～10月4日(8日間) 9月27日～10月2日(6日間)			
	11月30日～12月6日(7日間) 11月30日～12月4日(5日間)			
	平成16年 2月29日～3月6日(7日間) 2月29日～3月4日(5日間)			
共同事業	7月23日～8月25日(34日間)		長崎大学	
窓口調整事業	9月8日～12日(5日間)	HICARE		
	10月8日～11日(4日間)	JICA		セミパラチンスク地域医療改善計画 カザフスタン「保健行政」研修
	平成16年3月9日～15日(7日間)	放射線影響研究所		
平成16年度	7月20日～8月24日(36日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
独自事業	5月30日～6月5日(7日間) 5月30日～6月3日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	10月24日～30日(7日間) 10月24日～28日(5日間)			
	平成17年 1月16日～22日(7日間) 1月16日～20日(5日間)			
	平成17年 3月6日～12日(7日間) 3月6日～10日(5日間)			
窓口調整事業	10月3日～11日(9日間)			管理職員受入研修
	10月4日～9日(6日間)	JICA		セミパラチンスク地域医療改善計画 カザフスタン「保健行政」研修
	10月18日～25日(8日間)	HICARE		
		放射線影響研究所		

凡例　長大医…長崎大学医学部　長大病院…長崎大学病院　原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
放影研…(公財)放射線影響研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　医療センター…国立病院機構長崎医療センター
健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター　追悼平和祈念館… 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

研　修　者	人数	受　入　機　関
ナターリア.セーレバ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 タチアナ.ドゥホータ(ウクライナ)放射線医学研究所 アリーナ.バラノシスカヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アベチソフ.アラム(ベラルーシ) ベラルーシ医科大学 アナトリー.チカノフ(カザフスタン)東カザフスタン州立病院 ジャナール.エレウバエヴァ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、玄海原子力発電所 国立病院九州がんセンター、信州大学医学部 今村産婦人科、8月9日平和祈念式典参加
南　彦廷(ナム　オンジョン)(韓国)大邱赤十字病院 朴　賢珠(パク　ヒュンジュ)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 宋　基成(ソン　ギソン)(韓国)仁川赤十字病院 姜　守漢(カン　スハン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 洪　淳植(ホン　スンシク)(韓国)保健福祉省	5名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、長崎県
權　永在(クォン　ヨンジェ)(韓国)大邱赤十字病院 徐　相烈(ヨ　サンニョル)(韓国)ソウル赤十字病院 崔　天雄(チェ　チョヌン)(韓国)慶熙大学医学部付属病院 洪　三烈(ホン　サムニョル)(韓国)大邱赤十字病院 崔　喜貞(チェ　ヒィジョン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	5名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
文　淑子(ムン　スッチャ)(韓国)ソウル赤十字病院 黄　貞愛(ファン　ジョンエ)(韓国)大邱赤十字病院 千　萬錫(チョン　マンソック)(韓国)仁川赤十字病院 李　東洙(イ　ドンス)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 永井隆祈念館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
朴　美鶴(パク　ミハク)(韓国)大邱赤十字病院 姜　美敬(カン　ミギョン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 李　宗根(イ　ジョングン)大韓赤十字社 金　尚裕(キム　サンユ)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 永井隆祈念館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
ガリヤ・シャイマルダノーヴァ(カザフスタン)アスタナ国立病院 イリヤ・シドロフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大	2名	(チェルノブイリ・カザフスタン関係医師等受入研修事業と同様のカリキュラム)
ナターリア.シェンテレヴァ(ロシア) 放射線医学研究センター	1名	長大病院、原研、長崎原爆資料館
キディルベク・アンダグーロフ (カザフスタン)ウスチカメノゴルスク州保健局 ビクトル・チュリョーフ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター マラート・サンディバーエフ(カザフスタン)セミパラチンスク癌センター ムフターズ・トゥリュターエフ(カザフスタン)セミパラチンスクアカデミー付属病院	4名	長大大学院、原研、原爆病院、健康管理センター 長崎原爆資料館、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎県、長崎市
ニーナ・ドヴィンスキフ(ロシア)医学放射線研究所	1名	原研、原爆病院
マリーナ.コーノワ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 イリーナ.ドミトレンコ(ウクライナ)放射線医学研究所 ワシーリ.ベリャコースキ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 セルゲイ.デニソフ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 バヒトジャン.イサハノワ(カザフスタン)セミパラチンスク病理診断局 ダニヤル.ムシノフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、玄海原子力発電所 信州大学医学部、8月9日平和祈念式典参加
白　種大(ペク　ジョンデ)(韓国)ソウル赤十字病院 韓　暻根(ハン　ギョングン)(韓国)釜山報勲病院 李　相千(イ　サンチョン)(韓国)ソウル赤十字病院 張　頌雅(チャン　ソンア)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、新里ネフロクリニック 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
李　東烈(イ　ドンニョル)(韓国)ワレス記念浸礼病院 金　世東(キム　セドン)(韓国)嶺南大学医学部 徐　貞姫(ヨ　ジョンヒ)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 朴　省喜(パク　ソンヒ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、長崎森の木神経外科 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
金　鎭國(キム　ジングック)(韓国)大邱赤十字病院 全　炯俊(チョン　ヒョンジュン)(韓国)翰林大学医学部漢江聖心病院 尹　惠淑　(ユン　ヘースック)(韓国)ソウル赤十字病院 李　宇東(イ　ウドン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
蔡　奎英(チェ　ギュヨン)(韓国)国立慶尚大学病院 宋　俊昊　(ソン　ジュンホ)(韓国)尚州赤十字病院 徐　寅範(ソ　インボム)(韓国)尚州赤十字病院	3名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
エフゲニー.ルシニコフ(ロシア)オブニンスク州立放射線医学研究所 ヴァレリー.ダニリュク(ウクライナ)ウクライナ　ジトミール州北西部診断センター セルゲイ.ジャバラナク(ベラルーシ)ゴメリ医科大学	3名	笹川記念保健協力財団、原研、放影研、原爆病院 長崎原爆資料館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ 長崎県
エングリク. カディロバ(カザフスタン)国立科学医療センター アイグル. クサイノバ(カザフスタン)東カザフスタン州保健局 グルジャン. シャヤフメトバ(カザフスタン)セミパラチンスク看護大学 サガダット. サガンディコバ(カザフスタン)JICA調整員 ガリア. ジュアスバエバ(カザフスタン)セミパラチンスク保健局	5名	原研、放影研、原爆病院、長崎原爆資料館 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、長崎県
ヤナ.マリチュナ(ロシア)放射線医学研究センター	1名	長大病院、原研、長崎原爆資料館
ナターリア.シェンテレヴァ(ロシア)放射線医学研究センター リュドゥミラ.クリクノヴァ(ロシア)放射線医学研究センター	2名	

事業区分	期　間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成17年度	7月22日～8月25日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
独　自　事　業	10月16日～22日(7日間) 10月16日～20日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月4日～12月10日(7日間) 12月4日～12月8日(5日間)			
	平成18年 2月19日～2月25日(7日間) 2月19日～2月23日(5日間)			
窓口調整事業	11月21日(1日間)	HICARE		
		放射線影響研究所		
平成18年度	7月21日～8月24日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
独　自　事　業	7月28日～8月13日(17日間)			ゴメリ医科大学研修生受入
	11月5日～11月11日(7日間) 11月5日～11月9日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月3日～12月9日(7日間) 12月3日～12月7日(5日間)			
	平成19年 2月25日～3月3日(7日間) 2月25日～3月1日(5日間)			
共　同　事　業	9月11日～10月11日(32日間)		エストニア・チェルノブイリ ヒバクシャ基金	
窓口調整事業	6月25日～6月30日(6日間)	放射線影響研究所		
	10月10日～10月13日(4日間)	チェルノブイリ医療基金		
平成19年度	7月23日～8月23日(32日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
独　自　事　業	10月1日～10月5日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月10日～12月15日(6日間)			
	平成20年 2月18日～2月23日(6日間) 2月18日～2月22日(5日間)			

凡例　長大医…長崎大学医学部　長大病院…長崎大学病院　原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
放影研…(公財)放射線影響研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　医療センター…国立病院機構長崎医療センター
健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター　追悼平和祈念館… 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

研　修　者	人数	受　入　機　関
イリナ.ゼムラーエワ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 スベトラーナ.コジュシュナヤ(ロシア)ブリヤンスク州立第二病院 イリナ. ペルチュク(ウクライナ)放射線医学研究所 エヴゲニー.ワラパエブ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 ワレンティナ.ドロズト(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医師研修大学 アイヌル.アキルジャノワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 はまゆう療育園、永井隆祈念館 8月9日平和祈念式典参加
趙　承衍(チョウ　スンヨン)(韓国)仁川赤十字病院 魯　昌錫(ノ　チャンソク)(韓国)ソウル赤十字病院 朴　智賢(パク　チヒョン)(韓国)大韓赤十字社 柳　志恣(ユ　チムン)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 長崎県、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
金　殷泰(キム　ウンテ)(韓国)ソウル赤十字病院 朴　大進(パク　テジン)(韓国)慶尚南道陜川保健所 黄　斗燮(ファン　トゥソプ)(韓国)ソウル赤十字病院 朴　炳熙(パク　ビョンヒ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、長崎市 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
李　在鈺(リ　ジェソク)(韓国)ワレス記念浸礼病院 安　讚(アン　チャン)(韓国)居昌赤十字病院 元　鍾寶(ウォン　ジョンボ)(韓国)大韓赤十字社 呉　尚恩(オ　サンウン)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 長崎県、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
アンナ.P.シンカルキナ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所	1名	原研
ナターリヤ・セレヴァ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 タチアナ・メルニツカヤ(ロシア)オブニンスク州立原子力工科大学	2名	
パヴェル.ルミャンツェブ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 スベトラーナ.ガルキナ(ウクライナ)放射線医学研究所 イリーナ.ノビカワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アンドレイ.ベスパルチュク(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 アセル.ジャナドベコワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学 ナリマン.ムハメッドガリエフ(カザフスタン)カザフスタンがん・放射線研究所	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、永井隆祈念館 8月9日平和祈念式典参加
ラマン.ツェツェラウ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学3年生 マリナ.ジャリョナヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学4年生 タチアナ.クラウチャンカ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学5年生 マリナ.イワンチカワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学6年生	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、信州大学病院 長野県立こども病院、8月9日平和祈念式典参加
趙　三権(チョウ　サンウォン)(韓国)ソウル赤十字病院 金　昌潤(キム　チャンヨン)(韓国)嶺南大学病院 姜　仁俊(カン　インジュン)(韓国)韓国保健福祉部 朴　貞姫(パク　ジョンヒ)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
李　俊相(リ　ジュンサン)(韓国) ワレス記念浸礼病院 尹　汝鶴(ユン　ヨハク)(韓国)セソウル内科医院 李　秉燦(リ ビュンチャン)(韓国)ソウル赤十字病院 朴　性直(パク　スンジク)(韓国)大邱赤十字病院	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
金　恩那(キム　ウンナ)(韓国)ソウル赤十字病院 申　東薫(シン　ドンフン)(韓国)嶺南大学病院 李　南鎭(イ　ナムジン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 延　順英(ヨン　スンヨン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
ヨランタ.シルーレ(ラトビア)パウラ・ストラディナ大学病院	1名	長大病院、原研、原爆病院、放影研、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、永井隆記念館
アミルディン.フダ(米国)カリフォルニア州立大学フレズノ校医学部	1名	原研、放影研、長崎原爆資料館、高木産婦人科
カシャリーナ. チェルニショワ(ベラルーシ)モズリー市マタニティセンター	1名	長大病院、原研、放影研、恵の丘長崎原爆ホーム
ウラジミール.パーシン(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 オーレクサンダー.グテビッチ(ウクライナ)コロステン地区医学診断センター アレクサンダー.コズロフスキー(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 イリーナ.シマンスカヤ(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医学教育アカデミー アディルジャン.マサディコフ(カザフスタン)東カザフスタン州立がんセンター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、8月9日平和祈念式典参加
金　基淑(キム　キスク)(韓国)大韓赤十字社 柳　印宣(ユ　インソン)(韓国)大韓赤十字社 趙　又美(チョ　ウミ)(韓国)韓国保健福祉部 李　珉慶(イ　ミンキョン)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
河　鐘京(ハ　ジョンキョン)(韓国)ソウル赤十字病院 金　仙子(キム　ソンジャ)(韓国)ソウル赤十字病院 李　太熙(イ　テヒ)(韓国)ソウル赤十字病院 梁　信惠(ヤン　シンヘ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
張　惠炅(チャン　ヘギョン)(韓国)ソウル赤十字病院 羅　在範(ナ　ゼボム)(韓国)慶尚大学病院 李　閏姫(イ　ユンヒ)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 李　貴子(イ　ギジャ)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)

事業区分	期　間	申請団体名	共同団体	訪問目的
共 同 事 業	7月22日～8月26日(36日間)		長崎大学	
平成20年度 独 自 事 業	7月23日～8月26日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	8月1日～8月12日(12日間)			ベラルーシからの医科大学生受入研修
	平成21年 3月3日～3月30日(28日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	9月28日～10月4日(7日間) 9月28日～10月2日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成21年 1月18日～1月24日(7日間) 1月18日～1月22日(5日間)			
平成21年度 独 自 事 業	7月25日～8月25日(32日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	11月8日～11月14日(7日間) 11月8日～11月12日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成22年 2月21日～2月27日(7日間) 2月21日～2月25日(5日間)			
窓口調整事業	9月2日～9月8日(7日間)	長崎大学		
	10月5日～10月9日(5日間)	HICARE		
	11月15日～11月19日(5日間)	HICARE		

凡例　長大医…長崎大学医学部　長大病院…長崎大学病院　原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
放影研…(公財)放射線影響研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　医療センター…国立病院機構長崎医療センター
健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター　追悼平和祈念館… 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

研　修　者	人数	受　入　機　関
シュロモ.マルモー(米国)ミネソタ大学　学生	1名	(チェルノブイリ・カザフスタン関係医師等受入研修事業と同様のカリキュラム)
ゲオルギ．コワンコ(ロシア)サンクトペテルスブルグ卒後教育医学アカデミー オレクサンドル．ツィムバリュク(ウクライナ)マルゼエフ衛生環境医学研究所 タチアナ．レオノワ(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医学教育アカデミー アリャクサンドル．スクラタウ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 サルタナト．ボルシィンベコワ(カザフスタン)セミパラチンスクがんセンター ユリヤ．セメノバ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
ドミトリ.ミフナベツ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学3年生 ドミトリ.ベラウサウ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学4年生 カチャリーナ.ムンデェラワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学5年生	3名	長大病院、原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 8月9日平和祈念式典参加、公開セミナー
マキシム．ルーシク(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医学教育アカデミー	1名	長大病院、原研
姜　秉局(カン　ビョングク)(韓国)ソウル赤十字病院 安　泰弘(アン　テホン)(韓国)ソウル赤十字病院 崔　日薫(チェ　イルフン)(韓国)セソウル内科医院 金　東洙(キム　ドンス)(韓国)大韓赤十字社 徐　敏姫(ソ　ミンヒ)(韓国)大韓赤十字社 李　菊子(イ　グクチャ)(韓国)大邱赤十字病院	6名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、爆心地公園、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
李　美景(イ　ミギョン)(韓国)ソウル赤十字病院 金　重洙(キム　ジュンス)(韓国)慶熙大学校医科大学病院 金　名世(キム　ミョンセ)(韓国)嶺南大学校医療院 鄭　善旭(チョン　ソンウク)(韓国)陜川郡保健所 崔　鍾千(チェ　ジョンチョン)(韓国)韓国保健福祉家族部 姜　在遠(カン　ジェウォン)(韓国)ソウル赤十字病院総務課 諸葛　錄琳(チェガル　ロクリム)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館	7名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、爆心地公園、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
アンナ.シンカルキナ（ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 スタニスラフ.チュマック(ウクライナ)放射線医学研究所 エレナ.グリゴレンコ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ウォルハ.ワシルコワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アルマ.ヌルタジナ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学 アヤン.、ミッサエフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
宋　柾勳(ソン　ジョンフン)(韓国)ソウル赤十字病院 李　承姫(イ　スンヒ)(韓国)仁川赤十字病院 金　珉濠(キム　ミンホ)(韓国)釜山医療院 崔　元鎔(チェ　ウォンヨン)(韓国)大韓赤十字社 崔　恵善(チェ　ヘソン)(韓国)大韓赤十字社 金　江浩(キム　ガンホ)(韓国)陜川郡庁	6名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
安　玟垣(アン　ミンウォン)(韓国)ソウル赤十字病院 趙　顯澈(チョ　ヒョンチョル)(韓国)大邱報勲病院 李　美淑(イ　ミスク)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 崔　寅吉(チェ　インギル)(韓国)馬山医療院	4名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
スルタン.セジュマノフ(カザフスタン)カザフ医科大学副学長 ベイビット．バシャバエフ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 インディラ.カリバエバ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 アケルケ．ジャルボロワ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 アイゲリム．コベタエバ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 ジャンドス．ツイギノフ(カザフスタン)カザフ医科大学学生	6名	長大病院、原研、熱研、もりまちハートセンター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館
オレグ.コヴァレフ（ロシア）放射線医学研究センター リガ.ラルマネ（ラトビア）リガ・ストラディナ大学	2名	原研、放影研、長崎原爆資料館
ヨランタ.シルーレ（ラトビア）リガ・ストラディナ大学 イネス.マーティンサン（ラトビア）リガ・ストラディナ大学	2名	原研、放影研、長崎原爆資料館

事業区分	期　間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成22年度 独　自　事　業	7月21日～8月27日(38日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	8月2日～8月12日(11日間)			ベラルーシからの医科大学生受入研修
独　自　事　業	11月14日～11月20日(7日間) 11月14日～11月18日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成23年 2月20日～2月26日(7日間) 2月20日～2月24日(5日間)			
平成23年度 独　自　事　業	7月20日～8月23日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	12月18日～12月23日(6日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成24年 2月13日～2月18日(6日間) 2月13日～2月16日(4日間)			
平成24年度 独　自　事　業	7月18日～8月21日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	9月9日～9月14日(6日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成25年 2月18日～2月23日(6日間)			

凡例　長大医…長崎大学医学部　長大病院…長崎大学病院　原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
放影研…(公財)放射線影響研究所　原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院　医療センター…国立病院機構長崎医療センター
健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター　追悼平和祈念館… 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

研　修　者	人数	受　入　機　関
ウリヤーナ．ルミャンツェワ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 コスタンチン．パジィカ(ウクライナ)放射線医学研究所 オルガ．ビャグン(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医学教育アカデミー ワレーリー．シトニコフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アイムクリ．エシムハーノワ(カザフスタン)カザフスタン医科大学 マラット．スィズディクバーエフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
アレナ．カリスニチェンカ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ナターリア．クリコーフスカヤ.(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 タチアナ．カズローフスカヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 ワシーリー．ルデノク.(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学副学長	4名	長大病院、原研、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 8月9日平和祈念式典参加、公開セミナー
丁　恩晧(チョン　ウンホ)(韓国)ソウル赤十字病院 李　宗錫(イ　ジョンソク)(韓国)居昌赤十字病院 李　俊浩(イ　ジュンホ)(韓国)東義医療院 呉　明恵(オ　ミョンヘ)(韓国)大韓赤十字社 崔　小娘(チェ　ソナン)(韓国)大韓赤十字社	5名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
李　宇鎭(イ　ウジン)(韓国)ソウル赤十字病院 金　永植(キム　ヨンシク)(韓国)釜山医療院 金　成春(キム　ソンチュン)(韓国)慶尚大学病院 金　辰泰(キム　ジンテ)(韓国)陜川病院 金　忠洙(キム　チュンス)(韓国)大韓赤十字社	5名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
イリーナ．チェボタリョーヴァ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 エレーナ．フリャンスカ(ウクライナ)放射線医学研究所 ビークトル．コンドラトーヴィチ(ベラルーシ)ミンスクがんセンター ウラジミール．バルトノスキー(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 エルヴィーラ．ヌドゥーエヴァ(カザフスタン)カザフ医科大学 アレクセイ．パルフェーノフ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
鄭　泰垠(チョン　テウン)(韓国)嶺南大学病院 李　東建(イ　ドンゴン)(韓国)釜山医療院	2名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館
黄　守鉉(ファン　スヒョン)(韓国)慶尚大学病院 張　仁一(チャン　インイル)(韓国)陜川郡保健所 李　東一(イ　ドンイル)(韓国)陜川原爆被害者福祉会館 権　寧日(クォン　ヨンイル)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館
アレクサンダー．メニャイロ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 リュドミーラ．ズルナジー(ウクライナ)内分泌代謝研究所 アルトゥール．ピサレンカ(ベラルーシ)ミンスクがんセンター ドミートリー．ルザーノフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 ベネーラ．バイスグーロワ(カザフスタン)カザフ医科大学 ケネス．アキルジャーノフ(カザフスタン)セメイ医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
金　泰炯(キム　テヒョン)(韓国)ソウル赤十字病院 宋　時淵(ソン　シヨン)(韓国)嶺南大学病院 高　志豪(コ　ジホ)(韓国)釜山医療院	3名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
姜　珉珪(カン　ミンギュ)(韓国)嶺南大学病院	1名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県

Ⅱ. 派遣専門家等リスト

派 遣 先	派遣期間	派 遣 者	用 務
平成7年度 ウクライナ(コロステン)	10月10日～16日 (7日間)	長崎県原爆被爆者対策課 課長/安田 實穂	●チェルノブイリ 笹川医療協力シンポジウム出席 ●5センター関係者との協議
平成8年度 ウクライナ (ウクライナ保健省)	4月21日～28日 (8日間)	長崎大学医学部 教授/奥村 寛 長崎大学医学部 講師/三根 真理子 長崎県原爆被爆者対策課 課長/木場田 勇	●チェルノブイリ原発事故10周年記念事業
ウクライナ(キエフ) フランス(パリ)	10月12日～18日 (7日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部 研究生/芦澤 潔人	専門家派遣事業 ●第5回チェルノブイリ医療国際シンポジウム ●フォローアップ調査
平成9年度 ベラルーシ共和国	6月20日～7月2日 (13日間)	長崎県原爆被爆者対策課 係長/ 中嶋 洋	●チェルノブイリ事故による ●甲状腺異常関連の調整会議 NASHIM事業 フォローアップ調査
カザフスタン共和国	9月22日～10月1日 (10日間)	長崎大学医学部 教授／関根 一郎	●アルマータ ミーティング
平成10年度 カザフスタン共和国	9月10日～20日 (11日間)	NASHIM 会長／井石 哲哉 副会長/池田 高良	●第2回国際放射線・環境学会参加 ●フォローアップ調査
大韓民国	8月16日～20日 (5日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎県原爆被爆者対策課 参事/豆谷 耕二 長崎市原爆被爆対策部 次長/南條 保郎	●過去3ヶ年の韓国独自受入研修 フォローアップ調査
平成11年度 カザフスタン共和国	8 月24日～9 月1日 (9日間)	長崎大学医学部 教授/林 邦昭 長崎市原爆被爆対策部調査課 主幹/黒川 智夫	●カザフスタン共和国からの 独自受入研修のフォローアップ調査及び セミパラチンスク核実験50周年記念行事参加
平成12年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月5日 (12日間)	長崎大学医学部 学部長／齋藤 寛 長崎県原爆被爆者対策課 課長／松本 清助	●セミパラチンスク核実験による 被曝者支援事業についての意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬
大韓民国	9 月17日～9月20日 (4日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部 教授/近藤 宇史 長崎県原爆被爆者対策課 参事/重村 和生 長崎市原爆被爆対策部調査課 主事/光武 恒人	●受入研修生のフォローアップ調査 ●関係医療機関等との意見交換
平成13年度 カザフスタン共和国	8 月21日～9月4日 (15日間)	日本赤十字社長崎原爆病院 院長/田口 厚 長崎県原爆被爆者対策課 係長(副参事)/島村 恵美子	●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬 ●カイナール村視察及び検診
平成14年度 大韓民国	8月25日～8 月27日 (3日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部附属病院原研内科 医員/本多 幸 長崎市原爆被爆対策部援護課 課長/鳥山 ふみ子	●受入研修生のフォローアップ調査 ●関係医療機関等との意見交換
カザフスタン共和国	8月27日～ 9月3日 (8日間)	長崎大学留学生課 専門員/青木 一郎 長崎県原爆被爆者対策課 総括課長補佐/原田 正明	●関係医療機関との意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬
大韓民国	平成15年 1月16日～1月18日 (3日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部附属病院原研内科 講師/塚﨑 邦弘 長崎県原爆被爆者対策課 係長(副参事)/草場 里見	●関係医療機関等との意見交換

派　遣　先	派遣期間	派　遣　者	用　　務
平成15年度 カザフスタン共和国	8月26日～9月2日 (8日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/関根一郎 財)放射線影響研究所 長崎疫学部長/陶山昭彦	●関係医療機関との意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬 ●セミパラチンスク核実験場閉所記念式典
大韓民国	7月7日～10日 (4日間)	日本赤十字社長崎原爆病院 副院長/森　秀樹 長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教授/大津留　晶 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見	●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●関係医療機関との意見交換 (ソウル・陜川・大邱)
大韓民国	11月10日～12日 (3日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/朝長　万左男 長崎市原爆被爆者健康管理センター 副所長/松尾　辰樹 長崎市原爆被爆対策部調査課 参事/松田　久美子	●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●釜山市内原爆被爆者診療協定病院との医師派遣に関する協議 (統営・釜山)
大韓民国	平成16年2月24日～ 26日　(3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 看護部長/下田　澄江 日本赤十字社長崎原爆病院 看護部長/中尾　初美 日本赤十字社長崎原爆病院 係長/中島　誠司 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見	●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●看護に関し、関係医療機関等との意見交換 (釜山)
平成16年度 ウクライナ	8月23日～31日 (9日間)	NASHIM 会長／井石　哲哉(長崎県医師会長) 副会長／齋藤　寛(長崎大学学長) 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見 長崎市原爆被爆対策部調査課 参事/松田　久美子	●ナシム研修生派遣機関の視察、管理者との意見交換 ●政府機関等の表敬訪問 ●チェルノブイリ原子力発電所視察
大韓民国	9月6日～9日 (4日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 副看護部長/小林　初子 日本赤十字社長崎原爆病院 看護副部長/江副　郷子 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見 長崎市原爆被爆者健康管理センター 次長兼看護係長/松尾　恵美子	●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 ●看護師のフォローアップと看護状況視察 (ソウル・陜川・統営)
大韓民国	11月21日～24日 (4日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/朝長　万左男 日本赤十字社長崎原爆病院 消化器科部長/古河　隆二 長崎県原爆被爆者対策課 課長/仲野　喜孝 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見	●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 ●日本と韓国の被爆者医療の情報交換 (ソウル・春川・仁川)
大韓民国	平成17年2月14日～ 17日　(4日間)	NASHIM 会長/井石　哲哉 日本赤十字社長崎原爆病院 副院長/森　秀樹 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見 長崎市原爆被爆対策部調査課 課長/松本　章	●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 (ソウル・大邱・尚州)
平成17年度 スイス(WHO)	9月6日～12日 (7日間)	長崎大学 医学部長/兼松隆之 日本赤十字社長崎原爆病院 院長/進藤和彦	●世界保健機構(WHO)でナシム活動を紹介するポスター展開催 ●WHOと長崎大学共催による「原爆放射線の晩発性影響」をテーマとする国際セミナーへの出席
大韓民国	12月12日～14日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教授/大津留　晶 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/中島　正洋 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見	●日韓原爆被爆者セミナー開催 ●在韓被爆者が診療に訪れる病院の視察 (ソウル・大邱)

派　遣　先	派遣期間	派　遣　者	用　　務
大韓民国	平成18年3月1日～ 4日　(4日間)	日本赤十字社長崎原爆病院 呼吸器科部長/福田　正明 長崎大学医歯薬学総合研究科 助手/岩永　正子 財)放射線影響研究所 研究員/今泉　美彩 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場　里見	●韓国の病院の実情や被爆者の疾病発生状況と治療上の問題点の把握。 ●今後研修希望・改善点の協議 (ソウル・陜川・大邱)
平成18年度 カザフスタン共和国	5月25日～6月2日 (9日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/前田　茂人	●フォローアップ調査
ベラルーシ共和国	平成19年1月26日　～ 2月4日(10日間)	NASHIM 会長/井石　哲哉	●フォローアップ調査(研修生派遣機関調査、管理者との意見交換) ●政府機関等訪問
大韓民国	平成19年1月31日　～ 2月3日　(4日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/関根　一郎 助教授/難波　裕幸 長崎県原爆被爆者対策課 課長補佐/島村　恵美子 主事/福田　恵子	●専門家による被ばく者医療に関するセミナー開催 (釜山・居昌)
大韓民国	平成19年2月 6日　～ 8日　(3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 助教授/塚崎　邦弘 研究員/熊谷　敦史 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口　勇次	●韓国人被爆者が診療に訪れる医療機関への状況視察、意見交換 (馬山)
平成19年度 カザフスタン共和国	9月3日～9 月10日 (8日間)	長崎大学 医学部長/河野　茂	●フォローアップ調査
大韓民国	平成20年2月13日　～ 2月15日　(3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/塚崎　邦弘 長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/三根　真理子 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口　勇次	●在外被爆者への援護施策と被爆者医療についてセミナー実施 (馬山、光州)
大韓民国	平成20年3月20日　～ 3月22日　(3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留　晶 長崎大学医歯薬学総合研究科 助教/岩永　正子 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口　勇次	●韓国独自受入研修フォローアップ調査 (ソウル)
平成20年度 カザフスタン共和国	9月5日～9月13日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/兼松　隆之 長崎県原爆被爆者援護課 主事/福田　恵子	●関係医療施設の視察・意見交換 ●日本大使館表敬
大韓民国	9 月22日～9月25日 (4日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/関根　一郎 長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/中尾　優子 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口　勇次	●被爆医療・看護に関するセミナー開催 (ソウル)
大韓民国	平成21年1月18日　～ 1月21日　(4日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 科長/朝長　万左男 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/木下　裕久 長崎県原爆被爆者援護課 主事/福田　恵子	●被爆者に対する医療に関するセミナー実施 (ソウル・大邱)

派　遣　先	派遣期間	派　遣　者	用　　務
平成21年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月2日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/永山　雄二 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口　勇次	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察 ●カザフスタン医科大学での講義 ●第5回セミパラチンスク国際会議
大韓民国	9月4日～9月8日 (5日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教/熊谷　敦史	●在韓被爆者健康相談事業に関するデータ集約 (陜川)
大韓民国	11月26日～11月28日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留　晶 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 大学院生/冨永　信也 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口　勇次	●被爆者に対する医療に関する研修 (釜山・ソウル) ●大韓赤十字社創立104周年記念式典
大韓民国	平成22年3月4日　～ 3月6日　(3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留　晶 長崎大学医歯薬学総合研究科 (活水大学　教授)岩永　正子 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口　勇次	●被爆者に対する医療に関する研修 (ソウル)
平成22年度 カザフスタン共和国	8月24日～9月1日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授／柴田　義貞 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐／栗須　光子	●「セミパラチンスク核実験による健康リスク」に係る 研究打合せ・現地調査
大韓民国	10月7日～10月8日 (2日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留　晶 長崎県原爆被爆者援護課 主事/田添　陽子	●被爆者に対する医療に関する研修 (釜山)
平成23年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月1日 (8日間)	NASHIM 会長/蒔本　恭 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下　素巳	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察
大韓民国	11月30日～12月2日 (3日間)	福島県立医科大学 教授/大津留　晶 長崎大学病院 講師/宇佐　俊郎 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下　素巳	●被爆者に対する医療に関する研修 (大邱)
大韓民国	平成24年 2月2日～2月4日 (3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/中島　正洋 長崎大学病院 講師/宇佐　俊郎 長崎県原爆被爆者援護 係長/山下　素巳	●被爆者に対する医療に関する研修 (慶尚南道・釜山)
平成24年度 カザフスタン共和国	8月21日～8月27日 (7日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/工藤　崇 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下　素巳	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察 ●セメイ医科大学での講義
大韓民国	12月9日～12月11日 (3日間)	長崎大学先導生命科学研究支援センター 教授/松田　尚樹 長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/中根　秀之 長崎県原爆被爆者援護課 主任主事/熊　由香里	●被爆者に対する医療に関する研修 (陜川)
大韓民国	平成25年 2月19日～2月21日 (3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/宮崎　泰司 長崎県原爆被爆者援護課 主任主事/熊　由香里 長崎県原爆被爆者援護課 嘱託／郭　美子	●被爆者に対する医療に関する研修 (ソウル)

(2)在外被爆者(南米・北米)渡日治療事業

長崎・広島で被爆し、その後海外に渡った被爆者で現地の医療事情や経済的な理由により十分な医療を受けられない人の中で、日本の専門医療機関での治療を望んでいる被爆者を長崎に招き、検査・治療を行う在外被爆者(南米・北米)渡日治療事業を平成4年度から平成12年度まで実施した。なお、平成14年度から在外被爆者の渡日治療事業は長崎県や長崎市が国の補助事業により実施している。

在米被爆者渡日治療者一覧表

年度	氏名	生年	日程						国名	備考
				入国	入院	退院	入院日数	出国		
平成4年度(1992)	Y.Y	T15.	H 5	3/23	3/26	4/8	14日	4/27	米国	
	K.H(旧姓K.Y)	S 2.	H 5	3/23	3/26	4/8	14日	5/27	米国	
3名	Y.O	S 5.	H 5	3/23	3/26	4/6	12日	11/12	ブラジル	
平成5年度(1993)	C.M	T 8.	H 5	11/14	11/16	12/8	23日	12/9	ブラジル	
	M.M	T12.	H 5	11/14	11/16	12/6	21日	12/9	ブラジル	
	A.R	S 8.	H 6	2/22	2/25	3/14	18日	3/18	米国	
	K.P	S 6.	H 6	2/22	2/25	3/11	15日	3/28	米国	
	S.R	S 2.	H 6	2/22	2/25	3/28	32日	4/12	米国	
6名	S.K	S 9.	H 6	2/22	2/25	3/14	18日	4/12	米国	
平成6年度(1994)	N.B(旧姓N.T)	T 8.	H 7	2/21	2/23	3/15	21日	3/15	米国	
	M.B.S(旧姓M.B)	S 9.	H 7	2/21	2/23	3/10	16日	3/27	米国	
	T.J(旧姓T.T)	S 2.	H 7	3/22	3/24	5/21	59日	6/14	米国	H3渡日治療者
	H.R.R(旧姓H.R)	S12.	H 7	3/22	3/24	4/10	18日	4/31	米国	
	F.I	T 6.	H 7	3/22	3/24	5/22	60日	5/22	ブラジル	
6名	K.M	T13.	H 7	3/22	3/24	5/22	60日	5/22	ブラジル	
平成7年度(1995)	T.O(旧姓T.K)	S 4.	H 7	7/26	7/31	8/22	23日	8/26	米国	S63渡日治療者
	S.K(旧姓S.F)	S 9.	H 7	7/26	7/31	8/21	22日	8/23	米国	H5渡日治療者

年　度	氏　名	生年	日　程						国　名	備　考
				入国	入院	退院	入院日数	出国		
平成7年度 (1995)	M.N(旧姓M.Y)	S19.	H 7	7/26	7/28	8/18	22日	8/18	ブラジル	
	N.H	S11.	H 7	7/26	7/28	8/22	26日	9/13	ブラジル	
	Y.K(旧姓Y.M)	S19.	H 7	7/26	7/28	8/18	22日	8/18	ブラジル	H6渡日治療者 K.Mの娘
	Y.K(旧姓Y.M)	S14.	H 7	7/26	7/28	8/15	19日	8/19	アルゼンチン	
	T.T(旧姓T.M)	S 9.	H 8	3/18	3/21	4/10	21日	4/13	米国	
	A.B(旧姓A.W)	S 4.	H 8	3/18	3/21	4/11	22日	4/24	米国	
	A.H(旧姓A.N)	T10.	H 8	3/18	3/21	4/15	26日	4/15	米国	H2渡日治療者
	H.R(旧姓H.I)	S14.	H 8	3/18	3/21	4/10	21日	4/11	米国	S59渡日治療者
11名	C.H(旧姓C.H)	S 8.	H 8	3/18	3/21	4/11	22日	4/18	米国	
平成8年度 (1996)	Y.S(旧姓Y.N)	S11.	H 8	8/1	8/2	8/16	15日	8/17	米国	
	A.H	S 2.	H 9	1/22	1/24	2/7	15日	2/15	米国	
	K.M(旧姓K.S)	S 5.	H 9	1/22	1/24	2/4	12日	2/12	米国	
	M.J(旧姓M.W)	T11.	H 9	3/25	3/27	4/15	20日	4/26	米国	
	F.Y	S15.	H 9	3/25	3/27	4/11	16日	4/30	ボリビア	
6名	S.M	S 2.	H 9	3/25	3/27	4/10	15日	4/30	ボリビア	
平成9年度 (1997)	T.I(旧姓T.H)	S 2.	H 9	6/16	6/18	7/26	39日	7/27	ブラジル	
	S.H(旧姓S.H)	S19.	H 9	10/14	10/16	11/7	23日	12/6	ブラジル	
	H.Y	S10.	H10	2/17	2/19	3/9	19日	3/18	米国	
	A.B	S11.	H10	2/17	2/19	3/24	34日	4/3	米国	
	T.T.U	S 3.	H10	3/17	3/19	3/27	9日	4/15	米国	
6名	O.B	S 4.	H10	3/17	3/19	3/30	12日	4/2	米国	
平成10年度 (1998)	F.S(旧姓F.T)	S 3.	H10	11/10	11/12	11/24	13日	12/4	米国	
	M.P(旧姓M.Y)	S 8.	H10	11/10	11/12	11/27	16日	12/4	米国	

年　度	氏　名	生年	日　程						国　名	備　考
				入国	入院	退院	入院日数	出国		
平成10年度（1998）	E.S	S 3.	H 11	3/2	3/4	3/12	9日	3/15	米国	
	H.C	S 7.	H 11	3/2	3/4	3/12	9日	3/21	米国	
	H.Y	S18.	H 11	3/29	3/31	4/16	17日	4/23	ブラジル	
6名	C.T	S 2.	H 11	3/29	3/31	4/23	24日	5/15	ボリビア	
平成11年度（1999）	F.F	S 9.	H 12	3/12	3/15	5/2	49日	7/7	米国	
	S.W	S 6.	H 12	3/15	3/17	4/5	20日	5/11	米国	
	A.F.W	S 6.	H 12	3/22	3/24	4/26	34日	5/10	米国	
	M.B	S12.	H 12	3/22	3/24	4/6	14日	4/21	米国	
	M.S	S 9.	H 12	3/22	3/24	4/13	21日	4/21	米国	
6名	I.T	S 7.	H 12	3/26	3/29	4/16	19日	5/12	米国	
平成12年度（2000）	M.Y	S 2.	H 12	8/27	8/29	9/18	21日	2/19	ブラジル	
	N.H	S11.	H 12	8/27	8/29	10/11	44日	3/30	ブラジル	
	R.M	S11.	H 13	3/13	3/15	3/23	9日	4/7	米国	
	S.W	T11.	H 13	3/14	3/16	3/30	15日	4/7	米国	
	S.D	T12.	H 13	3/13	3/15	4/3	20日	4/15	米国	
6名	A.L	S 8.	H 13	3/13	3/15	4/4	21日	4/15	米国	

最短　9日間
最長60日間
平均22日間

合計　　56名



米在住被爆者が来崎

3人きょうから検査、治療

いろんな不安 相談をしたい

被爆者健康手帳の交付手続きをする（左から）ドワイトさん、ラマイカさん、ミラーさん＝長崎市役所

平成13年3月15日長崎新聞より

(3) 普及啓発事業

放射線ヒバクシャ医療に関する国際協力推進の意義と必要性を啓発するための講演会の開催や各種のPR活動及び情報提供を行っている。

これまでに以下の活動を実施した。

平成7年度

○被爆50周年記念事業
・ヒバクシャ医療国際シンポジウム　長崎シンポジウム
「ヒバクシャ医療と医科学～長崎からの提言～」
期日：平成7年9月19日　場所：ホテルニュー長崎　参加者：海外、国内の医科学者 約170名
・講演会「医療と健康」
講師：東京大学医学部助教授　草間　朋子　熊本県立劇場館長　鈴木　健二
期日：平成7年11月15日　場所：ホテルニュー長崎　参加者：一般県民　約500名

平成9年度

○講演会「チェルノブイリ支援を考える」秋田ベラルーシ友好協会と共同開催
講師：長崎大学医学部教授　山下俊一　期日：平成9年6月3日　場所：秋田市　第一会館本館
○事業紹介パネル展　場所：長崎原爆資料館　他
○機関誌「なしむ」の発行　創刊号・第2号

平成10年度

○事業紹介パネル展　場所：長崎大学医学部　ポンペ会館　他
○英文・和文パンフレット　各3,000部印刷
○機関誌「なしむ」の発行　第3号・第4号

平成11年度

○セミパラチンクス写真展　期日：8月1日～9月30日　場所：長崎原爆資料館
○事業紹介パネル展　場所：長崎大学医学部　ポンペ会館　他
○機関誌「なしむ」の発行　第5号・第6号
○インターネットホームページの開設

平成12年度

○講演会「みんなで考えよう放射線被ばく～被爆地長崎から～」
講師：科学技術庁放射線医学総合研究所室長　明石　真言
期日：8月6日　場所：長崎原爆資料館ホール
○講演会「緊急被ばく医療国際協力システム」
期日：12月18日　場所：長崎大学医学部附属病院会議室
○事業紹介パネル展　場所：長崎原爆資料館　他
○機関誌「なしむ」の発行　第7号・第8号

平成13年度

○講演会「みんなで考えよう放射線被ばく～チェルノブイリ原発事故から15年～」
講師：日本チェルノブイリ連帯基金事務局長　神谷　さだ子
期日：8月4日　場所：長崎原爆資料館ホール
○事業紹介パネル展　場所：長崎原爆資料館　他
○機関誌「なしむ」の発行　第9号・第10号

平成14年度

○NASHIM創立10周年記念事業
・特別講演会「永井隆博士と原爆」　講師：長崎如己の会副会長　久松　シソノ
期日：8月4日　場所：長崎原爆資料館ホール
・10周年記念ビデオ制作
○事業紹介パネル展　場所：長崎原爆資料館　他
○機関誌「なしむ」の発行　第11号・第12号

平成 15 年度

○公開セミナー「測ってみよう放射線」
講演：「医療と放射線」長崎大学教授　林邦昭　　実演：長崎大学教授　奥村寛ほか
期日：8 月 3 日　場所：長崎原爆資料館ホール
○チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会
講演：「旧ソ連での放射能汚染について」長崎大学教授　山下俊一　ほか
○事業紹介パネル展　期日：8 月 3 日　場所：長崎原爆資料館ホール
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　期日：10 月 26 日　場所：おくんち広場
○機関誌「なしむ」の発行　第 13 号・第 14 号

平成 16 年度

○講演会「放射線災害の緊急医療について考えよう」
講師：放射線災害医療研究所副所長　衣笠達也　　長崎大学公衆衛生学分野助教授　高村昇
期日：7 月 31 日　場所：長崎原爆資料館ホール
○事業紹介パネル展　期日：7 月 31 日　場所：長崎原爆資料館ホール
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　期日：10 月 31 日　場所：おくんち広場
○機関誌「なしむ」の発行　第 15 号・第 16 号

平成 17 年度

○被爆 60 周年記念事業
・アニメ映画「ＮＡＧＡＳＡＫＩ　１９４５アンゼラスの鐘」上映
・インターネットでのゴメリ医科大学との交流会（インターネット会議システム）
期日：平成 17 年 9 月 23 日　場所：長崎原爆資料館ホール　参加者：長崎、ゴメリ等　204 名
○事業紹介パネル展　期日：9 月 23 日　場所：長崎原爆資料館ホール
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　期日：10 月 30 日　場所：出島交流会館
○機関誌「なしむ」の発行　第 17 号・第 18 号
○「長崎から世界へ～ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～」外国語版作成（英語・ロシア語）

平成 18 年度

○チェルノブイリ原発事故 20 周年事業
・「チェルノブイリ原発事故支援関係者による座談会」
期日：8 月 2 日　場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　来場者：55 名
・「ゴメリ医科大生と市民との交流」
期日：8 月 5 日　場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　来場者：55 名
・チェルノブイリ写真展　（日本チェルノブイリ連帯基金と共催）
期日：7 月 24 日～8 月 5 日　場所：長崎原爆資料館エントランスロビー　来場者：450 名／日
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　期日：10 月 29 日　場所：出島交流会館
○機関誌「なしむ」の発行　第 19 号

平成 19 年度

○出前出張講座
・高尾小 6 年生　94 名　（3 月 7 日）
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　期日：10 月 27 日　場所：出島交流会館
○機関誌「なしむ」の発行　第 20 号・第 21 号・第 22 号

平成 20 年度

○出前出張講座
・西城山小 5 年生　74 名　（7 月 13 日）
○公開セミナー　「チェルノブイリ原発事故から 22 年・世界のヒバクシャ」
期日：8 月 7 日　場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　来場者：45 名
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　　期日：10 月 26 日　場所：出島交流会館
○機関誌「なしむ」の発行　第 23 号・第 24 号・第 25 号

平成 21 年度

○出前出張講座
・滑石小 5 年生　64 名　（6 月 22 日）
・滑石中 2 年生 117 名　（6 月 30 日）
・島原一中　　210 名　（8 月 9 日）
○ながさき国際協力・交流フェスティバル　　期日：10 月 25 日　場所：出島交流会館
○　機関誌「なしむ」の発行　第 26 号・第 27 号・第 28 号

平成 22 年度

○東京シンポジウム
・講演：日本チェルノブイリ連帯基金　理事長　鎌田實
　　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　科長（教授）　山下俊一
期日：12 月 18 日　場所：三菱ビル（千代田区丸の内）　参加者：180 名
○ベラルーシ研修生と市民との交流会
期日：8 月 6 日　場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　来場者：40 名
○出前出張講座
・日見小 5 年生　87 名　（6 月 9 日）
・西浦上小 5 年生 120 名（6 月 25 日）
・滑石中 2 年生　78 名　（6 月 28 日）
・滑石中 2 年生　94 名　（7 月 8 日）
・福田中 3 年生　94 名　（7 月 9 日）
・平和案内人　40 名　（8 月 21 日）
・平和案内人　44 名　（12 月 14 日）
・青少年ピースボランティア　38 名　（平成 23 年 1 月 15 日）
○機関誌「なしむ」の発行　第 29 号・第 30 号

平成 23 年度

○東京シンポジウム（東日本大震災復興支援）
・［第 1 回目］　テーマ：「長崎から福島へ　～放射能の正しい理解のために～」
期日 5 月 20 日　場所：青山ダイヤモンドホール　来場者：196 名
講演：長崎大学先導生命科学研究支援センター　教授　松田尚樹
　　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　科長（教授）　山下俊一
・［第 2 回目］　テーマ：「長崎から福島へ　～世界は放射線リスクとどう向き合うか～」
期日 6 月 15 日　場所：青山ダイヤモンドホール　来場者：184 名
講演：日本総合研究所　理事長　寺島実郎
　　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　科長（教授）　山下俊一
・［第 3 回目］　テーマ：「長崎から福島へ　～次の世代のために～」
期日 7 月 16 日　場所：灘尾ホール（霞が関）　来場者：101 名
講演：福島県立医科大　救命救急センター医師　長谷川有史
　　福島県立医科大　放射線科医師　宮崎真
　　長崎大学病院　准教授　大津留晶
○出前出張講座
・福田中 2・3 年生 190 名　（7 月 8 日）
・　いわき市小中学生徒会リーダー＋市内中学生徒会リーダー 81 名　（8 月 10 日）
○事業紹介パネル展　期日：7 月 16 日　場所：長崎原爆資料館
○機関誌「なしむ」の発行　第 31 号

平成 24 年度

○ナシム設立 20 周年記念事業
（NASHIM 設立 20 周年・長崎大学原研創設 50 周年記念合同シンポジウム）
・メインテーマ：「長崎とヒバクシャ医療」
サブテーマ：「被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島」
期日：平成 25 年 2 月 9 日～10 日　場所：ベストウエスタンプレミアホテル　参加者：277 人
・記念講演：福島県立医科大学副学長、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授　山下俊一
　　日本赤十字社長崎原爆病院　院長　朝長万左男
　　長崎大学名誉教授、放射線影響研究所元理事長　長瀧重信
○出前出張講座
・日本原子力研究開発機構　（1 回目）34 名　（10 月 20 日）
・　（2 回目）25 名　（12 月 1 日）
○機関誌「なしむ」の発行　第 32 号・第 33 号

(4) 出版事業

チェルノブイリ関係諸国の医療従事者の教材としてロシア語の医学教科書を出版し寄贈している。また、ヒバクシャ医療や放射線についての知識普及のために、諸外国の放射能関係事故に関する図書の邦訳本、外国向けの長崎原爆関係図書の英訳本などを出版している。

これまでに以下の図書などを出版または制作してきた。

平成 7 年度
- ○「放射能Q＆A」（ロシア語、日本語）
- ○「長崎シンポジウム：放射線と人体～長崎から提言～」（英訳）

平成 8 年度
- ○　サイム・バルムハノフ著「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」（邦訳）
- ○「カザフスタンの今」（VTR）

平成 9 年度
- ○ L.A.イリーン著「チェルノブイリ：虚偽と真実」（邦訳）
- ○「甲状腺学：基礎編」（ロシア語）※

平成 10 年度
- ○ 王玉鱗著「台湾の放射能汚染問題」（邦訳）
- ○「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 7 カ年の歩み」

平成 11 年度
- ○「甲状腺超音波診断画像解析図」（ロシア語）※
- ○ 永井隆著「原子爆弾救護報告」（英訳）
- ○「放射能Q＆A」改訂版

平成 12 年度
- ○ L.A.イリーン監修「緊急被ばく事故時の医療対応マニアル」CD-ROM（英訳）

平成 13 年度
- ○「小児甲状腺学」（ロシア語）※
- ○「甲状腺超音波診断：疾患編」（ロシア語）※
- ○ 調来助著「原爆被災復興日誌」（英訳）
- ○ L.A.イリーン監修「緊急被ばく事故時の医療対応マニアル」CD-ROM（邦訳）

平成 14 年度
- ○「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 10 カ年誌」

※ 印は支援委員会の補助事業により出版

平成 15 年度
- ○鎌田七男著「白血病診断図譜詳解－放射線関連白血病を含む－」
- ○「長崎から世界へ～NASHIM・ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～」（ビデオ・CD-ROM）

平成 16 年度

○　ラリッサ・ダニロワ著「甲状腺疾患」
○　蒲田七男著『白血病診断図譜詳解―放射線関連白血病を含む―』CD-ROM（ロシア語）

平成 17 年度

○秦山弘道著「Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55」
○調来助著「長崎ニ於ケル原子爆弾災害ノ統計的観察」（英訳）
○「長崎原爆の医学的影響」（モンゴル語）

平成 18 年度

○「チェルノブイリ原発事故後のロシアにおける甲状腺癌（Thyroid cancer in Russia after the Chernobyl: an analytical review)」（ロシア語）
○「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」

平成 20 年度

○「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」

平成 22 年度

○ケシリム・ボズターエフ著「人間と原子」（邦訳）（電子書籍、ナシムのホームページ上）
○長崎新聞新書「２１世紀のヒバクシャ」編著　（柴田義貞責任編集）

平成 23 年度

○「放射能Ｑ＆Ａ」改訂版

平成 24 年度

○ＰＤＦ書籍「放射能Ｑ＆Ａ（改訂版）」

※ナシムの書籍は、こちらからご覧になれます

http://www.nashim.org/jp/shuppan/index.html

(5) 永井隆平和記念･長崎賞

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成 7 年（1995 年)、長崎原子爆弾被爆 50 周年にあたり、旧制長崎医科大学放射線医学教室　永井隆教授の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を広く顕彰することにより、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、「永井隆平和記念･長崎賞」を制定した。平成 24 年度までに 9 回授賞式を行い、11 人の個人・団体に対して賞を贈っている。

１．名　称

永井隆平和記念･長崎賞

２．主　催

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

３．対　象

原子爆弾による被爆者及び放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人又は団体に隔年毎に贈る。

４．受賞者の選考

国内外の学者、有識者等の個人並びに大学、調査・研究機関、自治体、学会等の団体に候補者の推薦を依頼し、学識経験者で構成する選考委員会において選考し、関係各界の有識者で構成する永井隆平和記念･長崎賞委員会において決定する。

５．授賞の方法

正賞として賞状及び賞牌（ブロンズ像）を、副賞として賞金を授与する。

〔永井隆プロフィール〕

1945 年 8 月、長崎医科大学で原子爆弾により重傷を負いながら、被爆者の救護活動に挺身した。翌年、同大学の教授となったが、白血病に倒れ、病床で「長崎の鐘」「この子を残して」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けた。崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えている。



1908 年 2 月 3 日	島根県松江市にて出生、翌年飯石郡飯石村（現、三刀屋町）に移住
1932 年 3 月	長崎医科大学卒業
1932 年 6 月	長崎医科大学助手、放射線医学専攻
1940 年 4 月	長崎医科大学助教授・物理的療法科部長
1944 年 3 月	医学博士
1945 年 6 月	白血病で余命 3 年と診断される。
1945 年 8 月 9 日	原爆被災・右側頭動脈切断し重傷を負うも救護に挺身
1946 年 1 月	長崎医科大学教授
1946 年 11 月	長崎医学会で「原子病と原子医学」講演
1948 年 3 月	如己堂竣工し移り住む。
1948 年 10 月	ヘレン・ケラー女史の御見舞いを受ける。
1949 年 5 月	天皇陛下及びローマ教皇特使の御見舞いを受ける。
1949 年 12 月 26 日	長崎市名誉市民（第 1 号）の称号を贈られる。
1951 年 5 月 1 日	長崎大学附属病院に入院、午後 9 時 50 分逝去（43 歳）
1951 年 5 月 14 日	長崎市公葬、坂本町国際外人墓地に葬る。

受賞者紹介



第１回受賞者　秋月　辰一郎氏

日本。長崎市生まれ。

昭和 41 年「長崎原爆記」を出版し、被爆直後の浦上第一病院における被爆者医療の実態と人々の生きざまを描写して広くわが国の人々に衝撃を与えた。後に英訳され欧米の人々にも多大な感銘を与えた。

また、個々の原爆被爆者の医療にとどまらず、被爆行政や核兵器廃絶運動等にも積極的に参加している。これまで（財）長崎原子爆弾被爆者対策協議会評議委員、長崎原爆資料協議会委員、平和宣言文起草委員会委員、長崎証言の会会長、如己の会会長、（財）長崎平和推進協会理事長、核戦争防止国際医師会議長崎支部顧問等の役職に就くなど原爆関係の各方面にわたって大いに貢献した。



第２回受賞者　サイム・バルムハノフ氏

カザフスタン共和国

1957 年から 59 年にかけて、旧ソ連軍事体制下でのセミパラチンスク核実験被害を、初めて明らかにした中心人物である。長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）や長崎大学医学部との関係も深く、NASHIM で出版された「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」は、初の邦訳本で広くセミパラチンスク問題を史実に忠実に啓蒙する最良の出版物となっている。また、1993 年 8 月、NHK が、特別報道番組としてセミパラチンスク核問題を取り上げた際にも、最も良心的な医師として同氏が紹介されている。



第３回受賞者　ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏

オランダ

物理学者として放射線生物学、放射線防護学などの基礎研究に携わり、幅広い中性子測定の実験結果の報告を行っている。特に、同氏が 1964 年発表した中性子の酸素増感比および 1971 年の相対的生物効果（RBE）の研究成果は世界的に高く評価されている。同氏はその後、中性子被曝によるラットおよびアカゲザルの発癌研究をすすめ、放射線リスクの解析を行った。同氏は中性子のリスクと相対的生物効果を明確にした第一人者として高く評価され、氏の研究成果は原爆放射線とくに中性子の被爆者に与える影響を解析する上で貴重な資料となっている。



永井隆平和賞
秋月氏の授賞式
夫人が出席

第一回永井隆平和記念・長崎賞に選ばれた聖フランシスコ病院顧問、秋月辰一郎さん(七九)の授賞式が十八日、長崎市のホテルであり、療養中の秋月さんに代わり妻の寿賀子さん(七七)が賞状、賞牌を受けた。

賞は長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（今村臣正会長）が被爆五十年を機に「国際社会でのヒバクシャ医療貢献者」を表彰しようと制定。秋月さんは、被爆直後の医療活動や長崎の平和運動の先頭に立ったことなどから選ばれた。

式には高田知事、伊藤長崎市長ら関係者約百人が出席。今村会長は「国内外から高い評価を受けており、賞に最もふさわしい」と讃えた。永井博士の娘、筒井茅乃さん(五四)から花束を受けた寿賀子さんは「病の秋月も大変喜んでいると思う。同じ志を持って歩んでいただいた皆さんの大切さを思い、賞をいただきます」とお礼を述べた。

筒井さんから花束を受け取る秋月さんの妻の寿賀子さん（左）

平成7年9月19日毎日新聞より



第４回受賞者　エヴゲニィ・デミチュック氏

ベラルーシ共和国

デミチェック氏は、長年の甲状腺外科医としての実績を活かし、ベラルーシ共和国唯一のがんセンターの責任者として、政治経済の混乱した医療現場で、不幸なチェルノブイリ原発事故後の激増した小児甲状腺がん患者に対して大車輪の活躍をした。特に、1990 年にはベラルーシ甲状腺がん研究・診断・治療センターを設立し、患者への的確な治療改善に貢献した。また、同氏は、1992 年に世界で初めて、チェルノブイリ原発事故後の小児甲状腺がんの増加を科学誌「Nature」に報告し、その後はチェルノブイリ事故後の健康影響の研究・調査に関する各種国際共同プロジェクトを担当するなど、その功績は国内外で高く評価されている。

さらに、同氏は、「術後患者へのヨード 131 治療」という、治療の最先端技術をミンスクに確立したことにより、高い診断結果と良い治療結果を得、多数の小児甲状腺がんの救世主として尊敬されている。



第４回受賞者　鎌田　七男氏

日本。鹿児島県生まれ。

鎌田氏は、この間一貫して原爆被爆者の研究にあたり、種々の技術的困難を乗り越え、健常な被爆者の骨随に被爆 20 年を経てもなお染色体異常のあることを証明し、これは、その後の原爆治療の科学的根幹となっている。また、原爆被爆者白血病に関する研究では、分子生物学的解析を行い、原爆被爆者白血病と通常の白血病の病態の違いを明らかにし、世界レベルで優れた研究と評価されている。この研究は、原爆被爆者に多い白血病やがんは、被ばくした放射線が原因となっていることを分子レベルで証明し、原子爆弾の障害作用の起因性に関する科学的根拠となっている。

一方、社会的活動の面では、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）の日本支部会員、次いで、日本支部理事として広島での放射線障害を世界へ発信する科学者としての使命を果たしてきた。また、平成 3 年以降「放射線被爆者医療国際協力推進協議会」（放医協）の幹事、幹事長、会長として各種事業に指導的立場で関与し、被曝者医療、放射線障害の啓蒙に尽力してきた。

このように、同氏は、原爆被爆者の血液異常について多岐にわたる研究成果をあげると共に、常に原爆被爆者の立場から人道的な尽力を行ってきた。

第５回受賞者　日本チェルノブイリ連帯基金　（理事長　鎌田　實祖氏）

日本チェルノブイリ連帯基金
Japan Chernobyl Foundation

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は、チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するために平成 3 年（1991 年）1 月に設立され、日本全国の一般市民を会員にして募金活動を行い、それらをもとにチェルノブイリ原発事故の被災地への医療支援と交流活動を続けている。これまでに、小児甲状腺疾患・白血病・肺がんの検診と治療に必要な医薬品や医療機器をミンスク、ゴメリを中心に約 6 億円贈っている。単に物的な支援だけではなく、頻繁な交流実績から現地医師や患者その他関係者と深い信頼関係を作り上げている。

信州大学医学部とは設立当初から協力関係にあり、科学的なデータに基づいた、的確な医療支援は現地の行政関係者や病院から高く評価されている。また、現地医療の自立・自助をサポートするために、日本への短期招聘研修を信州大学を中心に支援し、現場医療の知識と技術の向上を図っている。

さらに種々の記録映画の作成とチェルノブイリの実態広報活動にも公平な視点から貢献している。



第６回受賞者　市丸　道人 氏

日本。北海道生まれ。

血液学専門の内科医・研究者として、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設教授、同施設長を務め、約４０年にわたって被爆者における放射線誘発性造血器腫瘍・癌の発生率を明らかにする疫学研究やその治療法の開発研究を行ってきた。

中でも昭和２５年頃から始まった白血病多発の実態を長崎において解明したことは、医学的に卓越した功績と評価されている。また原爆放射線による後障害の存在と実態を医学的・科学的に立証して多数の英文論文を世界に向けて発表し、今日世界のすべての医学書において白血病多発の事実が記述されるに至った。

また、昭和５６年（１９８１年)、米国バージニア州エアリーで核戦争防止国際医師会議（IPPNW）の第１回世界大会に招かれ参加して以来、国際評議委員として米ソ政府の指導層への原爆後障害に関する教育・啓蒙を行い、昭和６０年（１９８５年）の IPPNW のノーベル平和賞受賞に大きく貢献した。

長崎大学退官後も IPPNW の顧問として活動し今日なお核兵器廃絶運動を続けており、世界平和にも貢献している。



第６回受賞者　横路　謙次郎氏

日本。岡山県生まれ。

広島大学原爆放射能医学研究所の病理学研究部門教授、同所長を務め、実験病理学の専門家として、５０年余にわたって実験発癌の研究に取り組んだ。

特に放射線によって惹起される白血病や放射線誘発乳癌をはじめ種々の臓器癌の発癌研究を行い、我が国での放射線発癌研究の基盤を作った。さらに発癌研究はホルモンやウイルスによる発癌実験や発癌機構の解明におよび、我が国での実験発癌研究の中心的役割を果たした。

研究成果は多くの英文論文として発表され、また長年の研究をまとめた多くの著書は斯界の研究者から指導書として今なお高い評価を受けている。さらにこれらの研究成果は被ばく者医療の向上にとって大きな貢献となった。

また､社会的活動としては昭和５７年(１９８２年)から参加した核戦争防止国際医師会議(IPPNW)での活動を中心として長年核兵器廃絶運動に取り組んでおり、世界平和にも貢献している。



第７回受賞者　アナトリィ・ツィーブ氏

ロシア連邦

ソ連時代から、オブニンスク医学放射線研究所所長として、また医学アカデミー会員として放射線安全防護と放射線医療推進の中心的な役割を担っている。

1986 年チェルノブイリ原発事故直後から被災者の救助支援活動において指導的役割を果たし、環境放射能汚染の測定から集団被ばく線量の推定、住民健康診断など膨大な被災者の登録と健康診断データベースの構築を行い、特に事故直後から 1 年間にわたり事故処理作業や除染作業に従事した比較的高線量被ばくの軍人や消防士など 24 万人の登録と長期追跡調査活動を継続して行っている。

1991 年 5 月以降はチェルノブイリ笹川プロジェクト、WHOチェルノブイリ医療支援協力プロジェクトのロシア代表、国際機関や日本からの医療協力や学術共同研究の代表責任者として活躍している。WHOやＩＡＥＡ等国際機関における緊急被ばく医療プログラムの中ではロシア代表であり、ロシア放射線安全防護委員会の長を務めている。



第８回受賞者　クリストフ・ライナー氏

ドイツ連邦共和国

ライナー教授はドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ（放射性同位元素）を用いた診断と治療に貢献され、レントゲン博士の後継教授でもある。

1986 年 4 月 26 日チェルノブイリ原発事故が起こり、エッセン大学核医学教授時代には核医学の第一人者として欧州からの医療協力の指導的役割を果たし、1992 年からは最も被害が甚大なベラルーシで人道主義的共同研究プロジェクトを開始し、現在まで多大の貢献をしている。

功績のひとつは、ベラルーシでの甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺癌の早期診断と再発診断に大きく貢献し、放射線誘発甲状腺癌の臨床治療に関する多くの学術業績をあげた。また、ミンスクのドロズド教授らと共同で甲状腺腫瘍の超音波スクリーニング方法を開発した。

その後、母校ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授として、ミンスク甲状腺癌センターにアイソトープ診断と治療のための核医学治療部門を創立し、同様な核医学部門をウクライナのキエフ内分泌研究所にも立ち上げ、多発している甲状腺癌の治療成績向上に大きく貢献した。

また、1992 年から、ベラルーシで再発転移を繰り返す 247 名の重症小児甲状腺癌患者をドイツに招き、子供たちへの医療支援を行い大きな成果を上げ、ベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与された



第９回受賞者　ミコラ・トロンコ氏

ウクライナ

ミコラ・トロンコ氏は、チェルノブイリ事故が発生する一か月前の 1986 年 3 月にウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長に就任。以降、一貫してチェルノブイリ事故による住民の甲状腺への影響に関する調査、検診事業に携わり、1995 年にはウクライナにおいて小児甲状腺がんが増加していることを Nature 誌に報告し、世界的な注目を浴びた。

さらには国際共同研究を推進することによってチェルノブイリ事故によって激増した甲状腺がんにおいて、Ret 遺伝子の再配列という遺伝子異常が高頻度にみられることを世界に先駆けて報告するなど、放射線誘発性甲状腺がんの疫学、分子生物学的研究をリードしてきた。

また、種々の国際プロジェクトにも長年積極的に参画し、WHO（世界保健機関）の国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクプロジェクトにおいても、ウクライナの代表機関として放射線誘発甲状腺がんの摘出標本の管理にあたっている

(6) 支援委員会補助事業

外務省の関連団体　支援委員会の事業の一つである非 ODA 対象 NIS 諸国支援関係民間公益団体補助事業は、旧ソ連邦から独立した 12 カ国のうち、ODA の対象となっていないロシア連邦とベラルーシ共和国に対する人道支援や市場経済への移行支援を目的として、本邦における民間公益団体がこの 2 カ国において行う支援事業に要する経費の一部を補助するもので、平成 8 年度から平成 13 年度まで実施された。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成 9 年度から平成 13 年度まで毎年この補助事業の援助を受け、着実な成果を挙げてきた。特に、ロシア語の医学教科書出版や診断用機材の供与及び技術指導などは、チェルノブイリ原発事故被災者の支援に直結するものであり、これらの成果はその後のフォローアップ事業で当協力会が派遣した日本人専門家により、現場でしっかり根付いていることが確認されている。

これまでに支援委員会から補助を受けて実施してきた事業の成果は次のとおりである。

①平成 9 年度事業

「甲状腺学：基礎編（Thyroidology: Fundamental Aspect）」のロシア語出版

NASHIM にとって最初の補助事業であり、検討を重ねた結果、現地医療関係者の育成と教育を目的としたロシア語版の医学書作成を開始した。1997 年から長崎大学の姉妹校であり、ベラルーシ共和国の医師の人材育成の中心的存在であるミンスク医科大学（現ベラルーシ医科大学）と連携し、長崎大学の専門家が共同でロシア語版教科書の執筆にあたり、事業予算での出版を行った。本書は、旧ソ連邦の崩壊後、ロシア語で書かれた初めての甲状腺学の教科書として注目を集め、出版後は 1000 部がベラルーシの医学生、医師に無料で配布された。

②平成 10 年度事業

「ロシア連邦アルタイ州におけるヒバクシャ実態調査支援」

本事業は、チェルノブイリ支援事業とは異なり、旧ソ連邦最大の核実験場が存在したカザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場に隣接するロシア連邦アルタイ州における放射線被害の実態調査を目的とするものであった。カザフスタンとロシアとの国境に位置するアルタイ地域の被ばくの実態については、従来ほとんど明らかになっておらず、日本からの現地視察は初めてであった。携帯型甲状腺超音波装置の供与によって現地ヒバクシャの検診活動に貢献し、主に線量領域における専門家交流が行われた。

③平成 11 年度事業

「ミンスク医科大学におけるインターネットライブラリーの構築支援」

平成 9 年度事業の教科書出版以来、医学教育に対する現地のニーズは非常に高まり、同時にこの時期飛躍的な進歩を遂げてきた IT 技術の融合による新しい形での教育システムの構築が注目されてきた。この状況を踏まえ、本事業ではベラルーシ共和国のミンスク医科大学（現ベラルーシ医科大学）と共同で、電子図書の創設の為のコンピュータ関連機材を寄贈し、現地のソフト開発や教材作成に貢献した。この先鞭事業がその後の WHO による IT 活用による遠隔医療・医学教育支援プログラムへと引き継がれ、ベラルーシをモデル国として放射線関連 IT 事業が始まった。

④平成 12 年度事業

「ロシア連邦におけるヨード欠乏の実態調査」

チェルノブイリ事故後の急激な小児甲状腺がんの増加の一因として、ヨード不足や事故直後の不適切なヨード剤の服用があげられている。もともとチェルノブイリ周辺地区はヨード欠乏地域であったが、旧ソ連邦時代にはデータが公表されておらず、その把握は困難であった。当時その実態が部分的に明らかになっていたが、日常からの適切なヨード摂取も含めて、克服すべき課題は多く、そのためにも簡便な尿中ヨードの測定技術は不可欠であった。以上のような観点から、本事業では簡便に尿中ヨードが測定できる機材をモスクワ内分泌研究所に寄贈し、測定についての研修を行って現地専門家のレベルアップを図った。

⑤平成 13 年度事業

「小児甲状腺学」のロシア語教科書出版

平成 9 年度の「甲状腺学：基礎編」のロシア語教科書出版のいわば続編とも言うべきもので、チェルノブイリ原発事故後の最大の課題である小児甲状腺がんに焦点をあて、その医学知識の現地医療スタッフへの啓蒙、ひいては専門家の育成を目的として 1000 部が出版された。前回に引き続き、長崎大学とベラルーシ医学大学のスタッフが執筆･編集にあたったほか、アメリカ･ピッツバーグ大学からも執筆陳が加わり、さらにレベルの高いものとなった。内容としては、甲状腺の解剖、発生から生理などの基礎的分野から、診断、治療といった臨床的内容、さらには遺伝子レベルでの最新の知見も盛り込んだ内容となり、ロシア語の教科書としては画期的な内容となった。前刊に引き続き、ベラルーシ共和国の医学生、医師に無料で配布されたほか、ウクライナ、ロシア、カザフスタンの医師にも配布され、現地での医学教育に大きく貢献している。

さらに本事業では、この「小児甲状腺学」の補完的内容として、「甲状腺超音波診断：疾患編」をロシア連邦オブニンスク放射線医学研究所との共同で 1000 部出版した。これによって、甲状腺の基礎分野から現場サイドまでの幅広い分野について、最新の知見をロシア語で提供することが可能になった。



旧ソ連の小児被ばく者治療支援

「甲状腺がん」診断書出版

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

小児甲状腺がんの診断方法を詳しく解説するテキストの一部

露語・英語併記　ロシアなどに1000部贈る

核実験などで苦しむ旧ソ連の被ばく者治療を支援しようと、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM＝ナシム、井石哲哉会長）は、小児甲状腺がんの診断例をまとめたテキスト「甲状腺がんの超音波診断――チェルノブイリの経験から」を出版した。ロシア・オブニンスク放射線医学研究所のウラジミール・パーシン教授と山下俊一・長崎大医学部教授の共著。山下教授は「子どもの甲状腺がんの診断は未開拓の分野。被ばくに苦しむ子どもを救うために活用してもらいたい」と話している。

一九八六年のチェルノブイリ原発事故後、原発のあったウクライナや隣国ベラルーシの放射能汚染地域では、今も約二百二十万人が暮らしているといわれる。パーシン教授は、甲状腺の疫学調査や超音波診断が専門で、事故後、周辺地域で甲状腺がんに苦しむ多くの子どもを診断。九八、九九年、被爆者治療で先進的な長崎大医学部に客員教授として招かれ、山下教授と甲状腺がんの診断について研究を行った。

テキストはこの研究成果をまとめた。A4判二百三十㌻で、パーシン教授が超音波診断機器や顕微鏡などで撮影した患部の写真、図など約千百枚を使って、さまざまな症例について詳しく説明している。旧ソ連で実施された核実験による被ばく者治療にあたる医師らを支援するため、ロシア語と英語を併記。これまでに約千部がロシアなどの医療機関に配布された。

甲状腺がんは、十八歳までの子どもでは、通常百万人に一人の割合で発生するとされるが、山下教授によると、チェルノブイリ原発に近いベラルーシ・ゴメリ州では九二―二〇〇〇年の間、五―十八歳でみると一万人に一人の割合で発生したという。

山下教授は「子どもの甲状腺がんは発生率が低いこともあって、あまり研究がされていなかった。テキストは診断技術の向上に貢献できると思う」としている。

平成14年8月7日読売新聞より

5. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の受賞歴・関係資料

5. 受賞歴

《 第 52 回保健文化賞授賞 》

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は「ヒバクシャ医療に関する国際的な貢献」を高く評価され、平成 12 年に保健衛生の分野で、わが国において権威ある賞として世に認められている「保健文化賞」を授賞した。この賞は第一生命保険相互会社が主催し、厚生省、朝日新聞厚生文化事業団、NHK 厚生文化事業団が後援するもので保健衛生を実際に著しく向上させた団体や個人、保健衛生の向上に著しく寄与する研究又は発見をした団体や個人が対象で、日本国内に限らず、国外における活動も授賞の対象とされている。

当協力会は、チェルノブイリ原発事故や旧ソ連の行った核実験、広島・長崎への原子爆弾投下などによる放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者の研修受け入れや、南米・北米・韓国などに住むヒバクシャの渡日事業に取り組んだり、ロシア語の医学教科書の出版・寄贈などを行っており、これらの事業を通じて国際的貢献を行ったことが高く評価され、今回の授賞となった。

また、同賞の副賞の使途としては、外国からの研修生・研究者に対する放射線物理学や放射線障害医療の基礎的、臨床的知識の向上を目的に行われる実習、講義、セミナーなどに利用するための設備購入にあてることが、最も同賞の趣旨・目的に添うものと判断され、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設（原研）や日本赤十字社長崎原爆病院の研修室・講義室などに、液晶プロジェクターなど視聴覚教育設備や実習用機材を設置した。



平成 12 年度第 52 回保健文化賞贈呈式（H12.10.18 ホテルオークラ）

《 外務大臣表彰 》

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成 18 年 7 月 10 日、外務省において、平成 18 年度外務大臣表彰を受賞した。

外務大臣表彰は、「わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている多くの個人・団体の中から、特に顕著な功績のあった個人および団体」へ贈られるもので、当会の受賞理由は、「わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている。」「チェルノブイリを始め、世界各国から関係者を招聘している。加えて、長崎が有する特性であるヒバクシャ医療の治療、研究成果を国際的に普及している。」「今年はチェルノブイリ原発事故から 20 年であることから、こうまでの貢献に対し功績をたたえると共に今後の国際協力を期待したい。」というもので、当会のこれまでの功績が高く評価されての受賞であった。



平成 18 年度　外務大臣表彰（H18.7.10 外務省）

関係資料

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会規約

（名称及び目的）

第１条　在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故等による被曝者の救済のため、長崎が有する被爆者治療の実績及び調査研究の成果を活用し、もって国際協力に寄与することを目的として長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（以下「協力会」という。）を設置する。

（事　業）

第２条　協力会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び事務を実施する。

(1) 国外からの医師等の研修受入
(2) 国外への医師等の派遣
(3) ヒバクシャ医療に関するデータの収集・分析及び提供体制の整備
(4) その他ヒバクシャ医療における国際協力を推進するために必要な事業
(5) 前各号における連絡調整事務

（理事会）

第３条　この協力会の意思決定機関として理事会を置く。

２　理事会は、次に掲げる理事で構成する。

(1) 一般社団法人長崎県医師会長
(2) 一般社団法人長崎市医師会長
(3) 長崎大学長
(4) 長崎大学医学部長
(5) 長崎大学病院長
(6) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
(7) 長崎大学原爆後障害医療研究所長
(8) 日本赤十字社長崎原爆病院長
(9) 公益財団法人放射線影響研究所業務執行理事
(10) 公益財団法人長崎原子爆弾被爆者対策協議理事長
(11) 公益財団法人長崎平和推進協会理事長
(12) 運営委員会運営部会長
(13) 長崎県福祉保健部長
(14) 長崎市市民局原爆被爆対策部長

３　理事会は、理事の互選により、会長１名及び副会長１名を選出する。

４　会長は、この協力会を代表し、会務を統括する。

５　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

６　理事会は、会長が招集し、本規約の制定及び改正並びに会長及び理事の過半数による提案案件を審議し決定する。

７　会長が必要と認めるときは、第２項に掲げる者以外の者を理事に選任することができる。

（事務局）

第４条　協力会に事務局を置く。

２　事務局は、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課に置く。

３　事務局長は、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課長、事務局次長は長崎市市民局原爆被爆対策部調査課長を充てる。

（運営委員会）

第５条　この協力会に、理事会の補佐機関として運営委員会を置く。

２　運営委員会は、理事がその所属する機関の職員の中から指名した委員及び事務局長並びに事務局次長で構成する。

３　運営委員会は、事務局長が必要に応じ招集する。

４　運営委員会は、調整部会及び運営部会で構成する。

５　調整部会は、協力会の事業執行に伴う連絡・調整等を行う。

６　運営部会は、協力会の事業計画の立案及び事業の執行を行う。

（会　計）

第６条　協力会の事業及び事務に要する経費は、長崎県及び長崎市の負担金及び委託金並びにその他の寄付金をもって充てる。

２　協力会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

３　協力会の会計を監査するために会計監事２名を置く。

４　会計監事は、長崎県原爆被爆者援護課総括課長補佐及び長崎市市民局原爆被爆対策部援護課長とする。

（雑　則）

第７条　この規約に定めるもののほか、協力会の運営について必要な事項は、運営委員会に諮って定める。

（附　則）

この規約は、平成４年４月１日から施行する。

この規約は、平成５年４月１５日から施行する。

この規約は、平成８年１０月３日から施行する。

この規約は、平成１０年４月１日から施行する。

この規約は、平成１１年４月１日から施行する。

この規約は、平成１３年４月１日から施行する。

この規約は、平成１８年４月１日から施行する。

この規約は、平成２０年４月１日から施行する。

この規約は、平成２５年４月１日から施行する。

この規約は、平成２５年４月３日から施行する。

６. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の記録（写真）

チェルノブイリ関係（医師等受入研修事業）



平成６年度



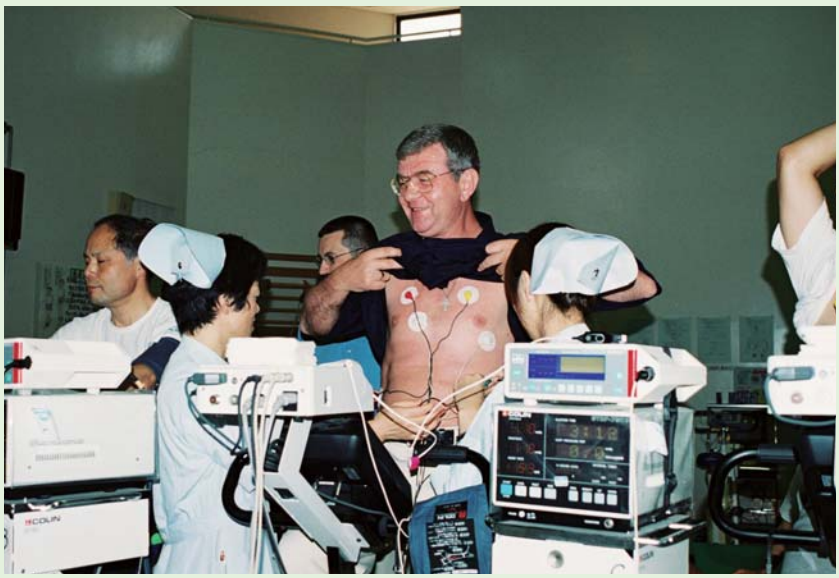
平成６年度



平成６年度



平成11年度



平成12年度



平成12年度



平成12年度



平成12年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成15年度



平成15年度



平成15年度



平成17年度



平成18年度



平成18年度



平成19年度



平成19年度



平成20年度



平成20年度



平成21年度



平成22年度



平成22年度



平成23年度



平成23年度



平成24年度

在韓被爆者関係（医師等受入研修事業）



平成11年度



平成11年度



平成12年度



平成14年度



平成15年度



平成16年度



平成17年度



平成18年度



平成19年度



平成19年度



平成21年度



平成21年度



平成23年度



平成24年度



平成24年度

専門家等派遣事業



平成９年度　ベラルーシ共和国



平成９年度　ベラルーシ共和国



平成12年度　カザフスタン共和国



平成13年度　カザフスタン共和国



平成13年度　カザフスタン共和国



平成13年度　カザフスタン共和国



平成14年度　カザフスタン共和国



平成16年度　ウクライナ



平成18年度　ベラルーシ共和国



平成18年度　ベラルーシ共和国



平成20年度　カザフスタン共和国



平成20年度　カザフスタン共和国



平成21年度　カザフスタン共和国



平成23年度　カザフスタン共和国



平成23年度　カザフスタン共和国



平成24年度　カザフスタン共和国



平成24年度　カザフスタン共和国



平成24年度　カザフスタン共和国



平成24年度　カザフスタン共和国

在韓被爆者関係（専門家派遣事業）



平成12年度　陜川原爆被害者会館訪問



平成16年度　陜川原爆被害者福祉会館訪問



平成18年度



平成19年度



平成20年度



平成20年度



平成21年度



平成21年度



平成23年度



平成24年度

普及啓発・その他



被爆50周年国際シンポジウム「ヒバクシャ医療と医科学」
～長崎からの提言（平成７年度）



普及啓発事業（平成８年度）



チェルノブイリ・カザフ管理職員 JICA 研修員受入研修（平成16年度）



駐日ウクライナ大使長崎訪問（平成16年度）



ベラルーシ・ゴメリ医科大学生研修受入（平成19年度）



エストニア・チェルノブイリヒバクシャ基金（平成20年度）



出前講座　滑石小学校（平成21年度）



ながさき国際協力・交流フェスティバル（平成21年度）



ベラルーシ・ゴメリ医科大学生受入（平成22年度）



東京シンポジウム（平成22年度）



出前講座　福島県いわき市（平成23年度）



東京シンポジウム（平成23年度）



東京シンポジウム（平成23年度）



駐日カザフスタン大使表敬訪問（平成23年度）

永井隆平和祈念・長崎賞



第１回受賞（平成７年度）　永井夫人、代理出席



第２回受賞（平成９年度）



第３回受賞（平成11年度）



第４回受賞（平成13年度）



第５回受賞（平成15年度）





第 6 回受賞（平成17年度）



第 7 回受賞（平成19年度）



第 8 回受賞（平成21年度）



第 9 回受賞（平成24年度）

7. 機 関 誌「なしむ」

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

創刊号

AUTUMN

1997

発行◎平成9年9月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

「ヒバクシャ」は、長崎、広島のためだけの言葉ではありません
世界中の「ヒバクシャ」が、今さまざまな問題に直面しています
長崎のヒバクシャ医療のノウハウを
世界のヒバクシャのために役立てたい
長崎から世界へ
NASHIMはそう考えています

What's NASHIM
ナシムってなあに?

Doctor's Works **チェルノブイリ原発事故後、現地で活動を開始した本村医師夫妻**

Reports
旧ソ連邦から来た4人の研修医師

New Face
はじめまして!!原研国際の新しい顔です。

Letter Box [*秋田-ミンスク-長崎* ベラルーシトライアングル]
[ヒバクは他人事ではなく自分自身のことである]

Seminar
NASHIM・原研の合同セミナー開催される



チェルノブイリの子どもたち

What's NASHIM

「なしむ」ってなあに？



NASHIM(なしむ)とは、在外被爆者、世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的につくられた組織です。





長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、在外被爆者および世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として、一九九二年（平成四年）に設立されました。

長崎がもつ被爆者医療の実績および放射線障害に関する調査研究の成果を、ヒバクシャ医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の受入れ研修、国外からの被爆者の渡日治療などを実施し、ヒバクシャ医療を通じて長崎から世界へ貢献し、国際協力の推進に努めています。

NASHIMの事業概要

❶研修生受入れ・専門医師等の派遣事業

世界の被災地で放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者への指導、技術支援、医療情報の提供、などを行なうために、海外からの研修医師の受入れや海外への専門医師等の派遣を行なっています。

❷在外被爆者（南米・北米）渡日治療事業

長崎・広島で被爆し、その後海外に渡った被爆者の中で、現地の医療事情や経済的な理由により充分な医療を受けられず、日本の専門医療機関での治療を望んでいる方々を長崎に招き、検査・治療を行なっています。

❸放射線ヒバクシャ医療国際協力普及啓発事業

放射線ヒバクシャ医療に関する国際協力推進の意義と必要性を啓発するため、講演会の開催や各種のPR活動および情報提供を行なっています。

❹放射線ヒバクシャ医療出版事業

医療従事者および一般市民向けに、放射線被爆に関する解説書、啓蒙書、講演会の報告書等を作成します。平成七年度はロシア語で「放射能Q&A」、英語で「長崎シンポジウム」を出版、平成八年度は「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民および家畜の健康状態」を翻訳出版、VTR「カザフスタンの今」を制作し、世界のヒバクシャ医療への貢献と国際協力に役立てました。

❺永井隆 平和記念・長崎賞の授与

原子爆弾による被爆者、放射線事故等による被災者の治療および調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉向上を通じて世界平和に貢献し、将来に活躍が期待される国内外の個人または団体に授与します。

■お問い合わせ
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
〒850 長崎市江戸町2-13
TEL・FAX 095-823-4278
［ホームページアドレス］
http://www.us1.nagasaki-noc.or.jp/~nacity

「NASHIMの機構」

事務局（長崎県原爆被爆者対策課）

運営委員会（調整部会・運営部会）

理事会

- 長崎市原爆被爆対策部長
- 長崎県福祉保健部理事
- 運営委員会運営部会長
- (財)長崎平和推進協会理事長
- (財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会長
- (財)放射線影響研究所長崎担当理事
- 長崎市医師会長
- 長崎県医師会長
- 日本赤十字社長崎原爆病院長
- 長崎大学医学部附属病院長
- 長崎大学医学部長
- 長崎大学長

副会長

会長

【創刊に向けて】
長崎、広島から世界のヒバクシャに何ができるか、何をすべきかを一緒に考えていきたい。



今回ヒバクシャ医療国際協力通信「なしむ」を発刊するにあたり、一言皆様にご挨拶申し上げます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）はすでに長崎大学医学部を中心に県、市等の関係機関の献身的な御協力を得て、過去六年間、事業も順調に推移しております。チェルノブイリ関連事業の一環としては露語による「放射能Q&A」を作成し、広く旧ソ連邦に配布しております。更に本年三月には、カザフ共和国科学アカデミー調査隊による一九五八年発刊「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」を邦訳し全国の図書館や関係機関に配布いたし好評を得ておりますが、セミパラチンスク核実験場に関する放射線障害の実態を記録した当時の旧ソ連邦の貴重な資料でもあります。

在外被爆者渡日治療事業については、長崎市が単独事業として昭和五十七年度から実施していましたが、平成五年度から協力会の事業として対象者を倍増し取り組んでおります。現在まで北米十八人、南米十人の被爆者の方々をお招きして長崎原爆病院で治療しておりますが、渡日治療はもとより現地の被爆者団体からも高い評価を得ております。

被爆の世紀ともいわれる二十世紀も、まもなく終わろうとしています。今後二十一世紀にむけた地球レベルでの新しい平和への模索と、長崎から世界のヒバクシャに何ができるか、何をすべきかを皆様と一緒に考えていきたいと存じます。ここに「なしむ」を刊行するにあたり、広く皆様のご支持、ご理解を頂きますように、また本事業内容の益々の充実発展を切望しまして創刊号の挨拶とさせて頂きます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長

井石 哲哉

Doctor's Works

チェルノブイリ原発事故後、現地で活動を開始した本村医師夫妻



すでにテレビや新聞等の報道でご承知の方も多いとは思いますが、今年五月から、NASHIM構成機関のひとつである長崎大学医学部第一内科の本村智子医師が、コンピューター情報管理の専門家であるご主人の政彦さんと共に、ベラルーシ共和国のゴメリ州ゴメリ市（最も被害が甚大な州）で人道支援と学術共同研究をはじめました。これまで、チェルノブイリ笹川プロジェクトの一環として、長崎では、長崎大学医学部や、放射線影響研究所を中心として、六年間にわたって現地の医療スタッフとの共同プロジェクトが行なわれてきました。その結果、事故後、現地において特に小児の甲状腺（頸部にあり、甲状腺ホルモンを産生する臓器）のガンが増加していることが分かりました。しかし、長崎と現地では距離も遠く離れているうえに、医療技術や医師同士の考え方に差があるのも事実で、より現地に密着した医療と、正しい方法に基づくしっかりとしたデータ管理システムの確立が望まれてきました。これまでNASHIMでは、毎年夏に現地の第一線で治療に当たるチェルノブイリ周辺の医師を長崎に招へいして、実際に日本の医療技術を学んで頂くことで、このニーズに応えるべく努力してきました。すでに二十名以上の医師が、帰国後、各地で中核的働きをしています。今回の本村夫妻の現地常駐の実現は、笹川記念保健協力財団のご支援によりますが、被爆地長崎ならではの生きた国際医療協力と言えます。本村夫妻は今後二年間、現地に滞在し、地域住民と同じ物を食べ、生活しながら支援を続けて行きます。特に小児甲状腺ガンの増加について、医学、疫学の立場からも調査を行なう予定です。今後「なしむ」では、本村夫妻の現地からの報告を随時掲載していく予定です。お楽しみに。

NewFace

はじめまして!!
原研国際の新しい顔です。



1997年4月、長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設（原研）の機構が変わり、その中で旧ソ連邦からの客員教授を招く国際放射線保健部門（略して原研国際）という部門が新設されました。原研国際では、チェルノブイリ事故後の医療協力支援活動と学術共同研究を基盤とし、セミパラチンスク核実験場（旧ソ連邦の核実験場）や旧ソ連全体の核汚染による健康障害を明らかにすることをその研究目的としています。6月からは、旧ソ連のベラルーシ共和国（白ロシア）のミンスク医科大学から、大脳生理の専門家であるセルゲイ・ベルギン先生を客員教授として招いて実際の活動をスタートさせています。原研国際は、原研2号館（旧資料センター）の1階にあり、メンバーは、原研細胞との兼任である山下俊一教授と客員教授のベルギン先生、助手の高村昇先生、そして事務の松本さつ美さんの2+2名という非常に小さな教室です。まだまだスタートしたばかり、しかも人も資金も心もとない中での船出となりましたが、「山椒は小粒でぴりっと辛い」という言葉を肝に命じ、NASHIMの一翼を担うべく頑張っていきますので宜しくお願いいたします。なお、原研国際のホームページを公開していますので、ご覧になりたい方は下記のアドレスまでどうぞ。特に「放射能　Q&A」のコーナーでは、皆様からの放射能に関する質問や感想を受け付けています。どんな質問でも構いませんので宜しくお願いいたします。

ホームページアドレス；http://abomb.med.nagasaki-u.ac.jp/inter/

Reports 研修レポート

旧ソ連邦から来た4人の研修医師

去る7月29日から約40日間にわたって、旧ソ連邦のチェルノブイリ原発やセミパラチンスク核実験場の周辺で、放射線障害の治療にあたっている医師団が、平成9年度研修生受け入れ事業で来崎され、研修を行いました。今年で5回目となるこの研修に参加された医師団の横顔を紹介します。

質問内容
1. 長崎の印象
2. 印象に残った研修について
3. 帰国後、この研修をどう活かしたいか



ザキスベイ・ジュマディロフ医師（カザフ共和国）

1. 非常にきれいないい町。
2. 神戸での甲状腺外科の病院の研修はとてもよく、ビデオにおさめてきた。
3. 日本の医療機材はとても優れている。長崎で得た知識を、帰国後、自分の講義やセミナーの場で役立てたい。

タチアナ・ニコラエワ医師（ベラルーシ共和国）

1. 少し暑いが、とてもいい町だと思う。
2. 病理学の講義と、甲状腺ガンの早期発見についての講義。
3. 今後さらにいろんな説明を受けて、自分の国で役立てたい。





ルスラン・シシコフ医師（ロシア連邦）

1. あまり大きくないが、住み心地の良い町だと思う。ヨーロッパ人が始めて来た町だと聞いており、とても興味深い。
2. 神戸で甲状腺外科の病院を見学できたこと。
3. 日本の手術技術や診断技術を学んで今後に役立てたい。

ナターリア・ニキホロワ医師（ウクライナ）

1. 自分の町とは全然違うが、寺院や自然がとても美しい町だと思う。
2. 特に病理学と小児科の研修。
3. 今後も長崎との共同プロジェクトを進めていきたい。



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
なしむ 創刊号 AUTUMN1997 発行◎平成9年9月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel.・Fax 095-823-4278

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。

秋田-ミンスク-長崎 ペラルーシトライアングル

秋田ベラルーシ友好協会副会長
佐々木正光さん



一昨年8月、秋田大学医学部とミンスク医科大学が姉妹校の締結をし、続いて昨年5月長崎大学医学部とミンスク医科大学との間で同様の締結が行われました。締結式には、クバルコ学長が来日され、これを機に秋田ベラルーシ友好協会とNASHIMの深い絆ができ、今年の6月には共同事業として秋田市で講演会を、その後当協会へ招へいしていた研修医3名をNASHIMへ送り、ヒバクシャ医療の本場で研修、原爆資料館の視察等、貴重な経験を積みました。

チェルノブイリ原発事故も問題点を絞って、また日本のNGO団体もお互い情報交換をし、連携して効果を出せる共同事業を積極的に推進すべき時代に来ているのではないかと思います。

その意味で「**なしむ**」の発刊は今後大きな力になると思います。

ヒバクは他人事ではなく 自分自身のことである

——総ヒバクシャの時代意識

会社員（福岡市在住）
松本旺山さん



私は平成7年4月から約2年間、仕事の関係で長崎に住んでいましたが、それまで半世紀も前の原爆についてはあまり関心がありませんでした。

ヒバクシャと自分とは全く別の存在であり、これからも全く無関係であると思っていました。しかし、昨年NASHIMで出版されたセミパラチンスクの核実験報告書を読んだり、山下先生や高村先生の講演会に参加して、ヒバクに対する認識が全く変わりました。それは、自分がいつヒバクシャになってもおかしくないのが現実の世界であるという事が分かったからです。私はこの事を多くの人に知って欲しいと思っています。このような折、「**なしむ**」が発刊される事は、大変有意義なことであると思います。今後の発展を期待しています。

SCHEDULE

今後の活動スケジュール

9月7日	平成9年度チェルノブイリ・カザフスタン関連第1回独自受入研修生帰国
9月下旬	専門医師等派遣事業
	韓国独自受入研修
10月上旬	第2回 永井 隆 平和記念・長崎賞受賞者決定
10月中旬	南米渡日治療
11月	講演会・写真.パネル展

編集後記

NASHIM構成機関である長崎大学医学部、原爆病院、県庁、市役所などの若手素人集団が、なんとか「**なしむ**」の発刊までこぎつけることができました。過去5年間のNASHIMの実績をもとに、知られざる世界中のヒバクシャの実態と、私たちの活動内容を紹介する予定です。長崎の原爆被災者だけではなく、広く市民、県民の皆様にご理解頂けるよう、今後は季刊紙としての充実を図りたいと思います。読者の方で、「**なしむ**」に対するご意見やご質問がありましたら、NASHIMまでお気軽にお問い合わせください。

SEMINAR

NASHIM・原研の合同セミナー開催される



去る8月2日、NASHIMと長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設（原研）共同開催の第2回公開セミナーが、約50名の参加者を集めて医学部のポンペ会館で行なわれました。

当日は原研で日頃放射線関連の研究に携わっている先生方から、「放射線とは何か」や「放射線障害」についての講演がありました。原研の難波先生からは、先頃出版された「放射能 Q&A」をテキストにした講演があり、同じく原研の関根一郎施設長からは、原爆による放射線障害について、その実相と最近の研究による知見を交えての話がありました。「測ってみよう放射線」のコーナーでは、参加者の皆さんに、実際に身近にある物の放射線の測定をしていただきました。参加者にも好評で、測定の様子は新聞でも紹介されました。さらに旧ソ連邦からのNASHIM研修医師を招いてのコーナーでは、現在のチェルノブイリ原発やセミパラチンスク核実験場周辺の住民の健康状態、その他多くの質問があり、参加された市民の皆さんを交えて活発な討論が行なわれました。参加者は異口同音に放射線について具体的に考え、知る機会を得たと非常に喜んでいただきました。

来年以降もこのような企画で、少しずつ正しい放射線の知識を広めて行きたいと思います。同時にNASHIMコーナーと原爆パネル展を併設しました。セミナー後のアンケートでは「今後、もっと広報を盛んに行なえば参加者が増えるのでは」、「セミナーに限らず、NASHIMが行なっている様々な活動をもっと広報してもらいたい」といった御意見を数多く頂きました。

今後はこの「**なしむ**」を通じて、積極的に広報活動を行なっていきたいと考えています。この場を借りまして、いつもボランテイアで準備、貢献して頂いている裏方の皆様や先生方に感謝申し上げます。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第2号

SPRING

1998

発行◎平成10年2月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

第2回「永井 隆」平和記念・長崎賞受賞者決定



サイム バルムハノフ氏

受賞者

サイム　バルムハノフ氏（75歳）

主な経歴

■1922年９月20日
カザフスタン共和国アルマトイにて生まれる

■1943年７月
国立カザフスタン医科大学卒業

■1954年～60年
アルマトイ医科大学放射線医学教授

■1957年～62年
職業病学教授兼任

■1957年～62年
アチャバロフ教授らとセミパラチンスクにおいて住民の核実験による影響を調査、「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」を報告

■1962年～68年
カザフスタン共和国放射線腫瘍医学研究所副所長

■1969年～（現在）
同所長

■1996年～（現在）
カザフスタン共和国医学アカデミー名誉所長

［受賞］

■1997年9月
カザフスタン共和国保健省及び科学技術省より
カザフスタン共和国功労賞受賞

「永井 隆」平和記念・長崎賞 授賞式

日　時■平成10年3月3日（火）15:00～
場　所■長崎県医師会館

What's Takashi Nagai peace memorial Nagasaki prize
第2回「永井 隆」平和記念・長崎賞受賞者決定

New professor
新任教授紹介!!長崎大学医学部内科学第一講座　江口勝美

Reports
在外被爆者渡日治療の実施

Doctor's Works　**核戦争防止国際医師会議（IPPNW）第1回北アジア会議 長崎で開催**

Letter Box　［ロシア生まれの私は、ニュージーランドと長崎で改めて核の脅威を知りました。］

Display
原研（原爆後障害医療研究）2号館のご案内

What's TAKASHI NAGAI PEACE MEMORIAL NAGASAKI PRIZE

「永井隆」平和記念・長崎賞ってなあに？



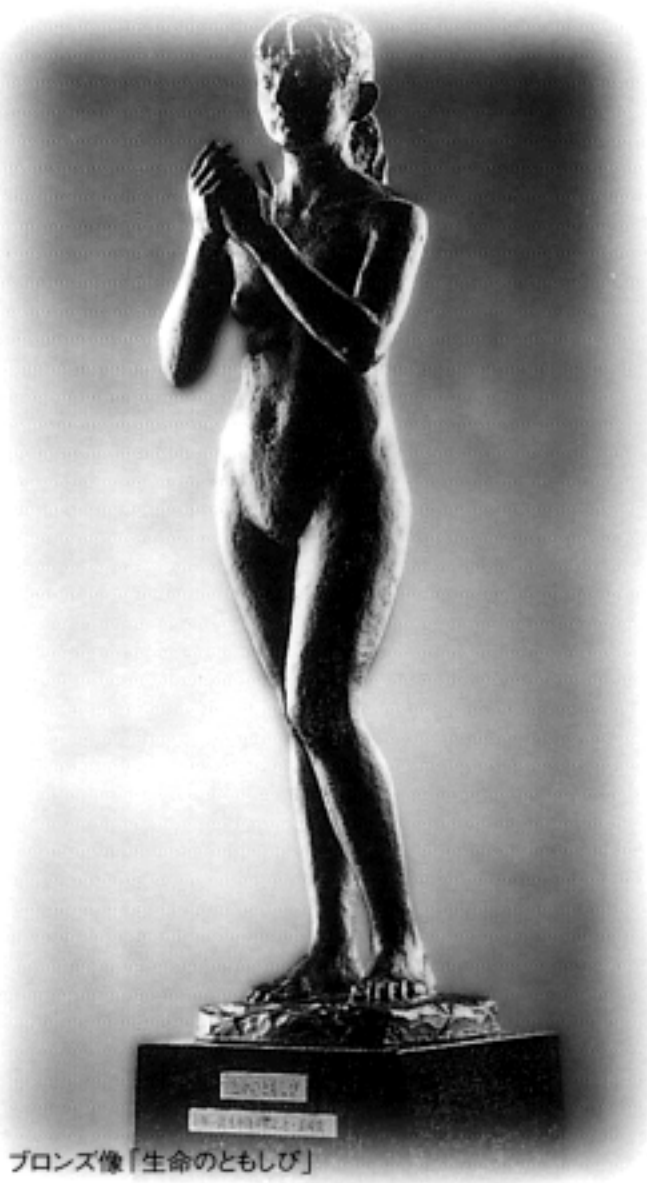
永井 隆（ながいたかし）
明治41年（1908）
～昭和26年（1951）
医師、原爆作家。
島根県松江市生まれ。

昭和7年（1932）長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し昭和15年（1940）帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理的療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年（1945）6月、余命3年と診断される。同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は自宅の下敷きとなり逃げ出しきれず焼死した。子供2人は三ッ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、『ロザリオの鎖』『この子を残して』『生命の河』『長崎の鐘』『花咲く丘』『いとし子よ』など数々の作品を書き、祈りと平和を訴え続けた。これら著作を読んで感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市名誉市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画『長崎の鐘』（昭和25年）は博士の住まいであった「如己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。

昭和26年（1951）5月1日長崎大学医学部付属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

「永井 隆」平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に贈られます。



ブロンズ像「生命のともしび」

第2回「永井隆」平和記念・長崎賞経緯

■候補者推薦依頼先
国公私立医科系大学、国公私立研究所、各都道府県庁及び在日外国大使館等172箇所
インターネット（長崎市のホームページ）に登載

■募集期間
平成9年6月2日～8月9日

■受賞者の選考
学識経験者で構成する「永井隆」平和記念・長崎賞選考委員会において選考し、関係各界の有識者で構成する「永井隆」平和記念・長崎賞委員会において決定した。

■賞の内容
正賞　賞状、賞牌（ブロンズ像「生命のともしび」）
副賞　賞金200万円

■授賞式
日時：平成10年3月3日（火）
場所：長崎県医師会館

「永井隆」平和記念・長崎賞の応募状況　（件）

区分	個人	団体	合計	国内	国外	受賞者
第1回 H7年度	4	1	5	3	2	秋月 辰一郎 氏
第2回 H9年度	8	-	8	1	7	サイム バルムハノフ氏

受賞者 サイム バルムハノフ氏の横顔



１９５７年から５９年にかけて、厳しい旧ソ連軍事体制下でのセミパラチンスク核実験被害を、命をかけて、初めて明らかにした中心人物。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（ナシム・ＮＡＳＨＩＭ）や長崎大学医学部と関係も深く、ナシムで出版された「**中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態**」は、初の邦訳本で広くセミパラチンスク問題を史実に忠実に啓蒙する最良の出版物となっています。

また、１９９３年８月、ＮＨＫが、特別報道番組としてセミパラチンスク核問題を取り上げた際にも、最も良心的な医師として同氏が紹介されました。

バルムハノフ氏は、セミパラチンスク核実験による被害の状況についての調査研究において活動した後も、放射線生物分野の第一人者としてカザフ医学会で活躍しています。また、放射線の医学への応用、とりわけ、癌治療を長年手がけ、臨床と基礎医学の両面から癌治療の研究を推進し、放射線被ばく医療に関する活動は約40年にわたっています。その間に指導した多くの後進が、現在、放射線被ばく医療の分野で活躍しています。

その人格高潔にして、真摯なヒバクシャ医療への取組みは、カザフのみならず、旧ソ連崩壊後の世界反核医師連帯やセメイ・ネバダ反核運動の中核人物として尊敬されており、今回、第２回「永井隆」平和記念・長崎賞を受賞されました。

467回の恐怖 セミパラチンスク核実験の歴史

1942年
米英が核兵器の開発を進めていることが明らかになる

1943年
ソ連核開発開始

1946年
セミパラチンスク核実験場の設置が決定

1949年
8月29日、第一回原爆実験

1952年
アメリカがマーシャル諸島で最初の水爆実験に成功

1953年
8月12日、セミパラチンスクにて第一回水爆実験が行われる

1957年
カザフ科学アカデミー調査隊発足

1958年
カザフ科学アカデミー調査隊第二回調査

1959年
第三回調査が、モスクワ側との合同調査として行われる

1961年
ノーバムゼムリャ島にて50メガトンの水爆実験
モスクワ会議において、核実験による住民の放射線障害が否定される

1963年
部分的核実験停止条約締結
以後、核実験は地下に限定される

1965年
チャガン人工湖のための核爆発

1985年
ゴルバチョフ書記長就任
ペレストロイカ政策のスタート

1989年
ソ連、核実験停止を宣言（１９８７年に再開）

セメイ・ネバダ反核運動

1990年
カザフスタン共和国、主権宣言
第11条「共和国領土で核実験の実験は禁止され、科学・細菌・生物兵器などの実験活動も禁止される」

1991年
ナザルバーエフ大統領が核実験永久禁止の大統領令公布　核実験場閉鎖が決定
市民団体による「セミパラチンスク核実験場閉鎖」を記念する国際会議開催

1992年
カザフスタン共和国、ＳＴＡＲＴ（戦略兵器削減条約）議定書に調印

◎セメイ・ネバダ反核運動
１９８９年、当時セミパラチンスク州の第一書記であったボスタエフ氏や詩人スメイレノフ氏を中心に行われた、旧ソ連における初めての反核運動であるセミパラチンスク運動と、同時期にアメリカ・ネバダ州の核実験に反対するネバダ運動は、その後互いに連携しあい、「セメイ・ネバダ運動」と呼ばれた。なお、セメイとはカザフ語でセミパラチンスクのこと。

New professor 新任教授紹介!!

長崎大学医学部内科学第一講座　江口勝美 教授



NASHIMの発足以来、特にチェルノブイリ関連事業において多大な貢献をしていただきました長崎大学医学部第一内科の、長瀧重信教授が昨年3月にご退官され（現在〈財〉放射線影響研究所理事長）、その後任として江口勝美先生（写真）が、昨年12月に就任されました。江口先生は佐賀県出身の53歳。リウマチや膠原病といった自己免疫疾患がご専門で、長瀧前教授の下、リウマチや膠原病だけでなく、バセドウ病（甲状腺の機能が亢進する疾患）や橋本病といった自己免疫性の甲状腺疾患、さらには自己免疫異常とHTLV－1という長崎に多いウイルスの関与などについて、素晴らしい研究をなされています。また、研究者としてだけでなく、その温厚な人柄と実直さで、多くの患者さんに親しまれています。

1992年のNASHIM設立以来、第一内科は、旧ソ連邦への専門家派遣や海外からの研修生受入れに尽力され、更に出版事業や啓蒙活動などの分野においても、まさにNASHIM活動の屋台骨を支える存在として協力していただいてきました。江口新教授ご自身も、原爆の惨禍の当時、壊滅状態の医科大学学長「角尾晋先生（第一内科・初代教授）」のご意思と伝統を受け継ぎ、21世紀に向けて長崎から世界へと幅広くヒバクシャ医療や医科学分野に貢献していきたいとのお考えです。これまで同様、NASHIMの大黒柱として活動していただけるでしょう。さらに第一内科は、甲状腺研究分野ではWHO協力センターとして登録されていますので、益々の国際的な活躍が期待されています。

なお、第一内科のホームページをインターネット上に公開しています。江口教授のプロフィールや第一内科についての情報を見ることができますので、ぜひ一度ご覧になってみてください。アドレスは以下の通りです。

http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/intmed-1/

Doctor's Works

核戦争防止国際医師会議（IPPNW）第1回北アジア会議 長崎で開催



IPPNWは1980年に創立され、純粋に医学的・科学的見地から核兵器廃絶の道程を模索してきました。米ソの核戦争によって地球規模の環境破壊が人類の生存を不可能にすることを科学的に証明、1980年代の米ソの政治指導者に大きな影響を与え、その活動に対し1985年ノーベル平和賞が授与されました。

IPPNWは昨年のボストンでの世界大会で北アジア地域会議の設立を承認、その記念すべき第一回会議が長崎市の原爆資料館ホールで11月22～23日に開催されました。中国、韓国代表に加え、ボストン本部からIPPNW・マッコイ共同会長ほか18名の海外参加者と約120名の国内参加者が出席して、核兵器の廃絶をめぐる諸問題について活発な討議が行われました。

とくに、一般市民への公開講演会では、元外務省原子力課長の金子熊夫氏によるアジアの非核化の具体的な方策の提唱が注目を集めました。原研山下俊一教授のチェルノブイリ・セミパラチンスクの現状についての講演は、参加者にあらためて、核被害の甚大さを認識させるものでした。

北アジアの非核化を目指しての討論では、中国・陸代表の、核兵器の先制非使用の宣言を全ての核兵器保有国に求めることから始めるべきとする積極的な発言が目立ちました。

北朝鮮の代表の参加が直前に取りやめとなったことは残念でしたが、今後も地道な交流を続けて、民間レベルでの核兵器廃絶の機運を高めることに、医師としての使命感をもって邁進することが決議され、閉会しました。本会議は長崎県、長崎市、及びトヨタ財団の後援によって開催されたものです。会場においてはNASHIMの展示を行い、参加者への広報活動が行われました。

Reports 研修レポート

在外被爆者渡日治療の実施

昭和60年より、外務省、厚生省、広島県、長崎県は、共同事業として海外に在住する被爆者の援護を目的とし、被爆地である広島、長崎より、南米在住被爆者巡廻医師団を派遣し、南米在住被爆者の検診並びに健康相談を実施してきました。この検診結果により日本での精密検査及び治療を必要とする被爆者を、毎年数名づつ帰国治療の対象とし、各医療機関で受け入れています。日赤長崎原爆病院でも、この事業に対して、現地への医師の派遣及び在住南米被爆者の精密検査と治療を行ってきました。今年度は、ブラジルより、「星島幸子氏（53歳・女性）」が渡日治療の対象者として来崎しました。

彼女は14歳でブラジルに渡り、日本食レストランを経営、毎年、カーニバルで日本舞踊を踊るのを楽しみにしていましたが、1993年頃より、息切れを感じるようになり、踊れなくなる事もあったそうです。症状が次第に増悪したため、1996年9月、現地の専門病院で心臓カテーテル検査をうけ、拡張型心筋症と診断されました。以後、治療をうけましたが、症状が悪化するたびに入退院をくり返しました。1997年10月15日、来崎、日赤長崎原爆病院で受診。来院時、全身倦怠、息切れが強く、心電図、胸部レントゲン、心臓超音波検査にて、心不全と診断され、即日入院、ただちに治療が開始されましたが、他にも、糖尿病、痛風、腎機能障害等の合併症もあり、一時重篤な状態も呈しました。しかし、集中治療により、状態は次第に改善、1997年11月7日、元気に退院しました。彼女は、長年ブラジルに暮らし、現地で検査、治療はうけていましたが、ポルトガル語による症状説明の理解が困難だったため、今回の来崎で初めて詳しく自分の病状を把握できたとの事でした。しばらく日本の家族と過ごした後に、帰国し、ブラジルの主治医の元へ帰っていきました。



原爆被爆者手帳を受け取る星島幸子さん
（写真提供：長崎新聞社）

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。



ロシア生まれの私は、ニュージーランドと長崎で改めて核の脅威を知りました。

長崎県企画部国際課 国際交流員
ナタリア ロシナ・フッド さん

ニュージーランドから来ましたナタリアと申します。県の国際課で国際交流員として働いています。

ロシアで生まれ、チェルノブイリのことについて色々聞きました。しかし、ロシアに住んでいた時には、情報の不足でチェルノブイリの事について詳しくは知りませんでした。その後、核のないニュージーランドに引っ越してから、核のことについていろいろ知るようになりました。フランスがニュージーランドに近い「ムルロア環礁」で核実験を行った時には、大きな衝撃を受けました。もし核が地球に悪い影響を及ぼさないというのであれば、なぜフランスはパリではなく、ニュージーランドのような遠い所でテストをしたのでしょう。その後、昨年の7月から原爆が落ちた長崎で生活を始めました。NASHIMや通訳の仕事を通じて山下先生に出会い、より、ヒバクのことを知るようになりました。

私はニュージーランドに住んでいた時には、核のことを心配することはありませんでした。核がないことはニュージーランドの特徴です。しかし、私の考えでは、旧ソ連政府は、チェルノブイリのヒバクシャの救済や、また同じような事故の再発予防についてはほとんど手を打っていないと思います。

NASHIMが日本のヒバクシャだけではなく、チェルノブイリのヒバクシャのために様々な活動をしていることを知り、心から尊敬しています。

Information

「チェルノブイリ虚々実々」刊行

NASHIMでは今春、モスクワ生物物理学研究所のイリーン所長の著書である「Chernobyl : Myth and Reality（邦題:チェルノブイリ虚々実々）」を日本語訳し、出版することになりました。イリーン氏は、旧ソ連邦の放射線医学最高権威の一人で、チェルノブイリ事故当時にも現場において医療活動を指揮した中心人物です。この本では実際の現場における様々な出来事以外にも、旧ソ連邦の放射線医学の歴史が描かれています。出版時に改めてこの「なしむ」で紹介する予定ですのでご期待ください。

編集後記

おかげさまで「なしむ」第2号では、『永井隆』平和記念・長崎賞の特集を行うことができました。原爆投下後の混乱の中、自らの命をも省みずに被爆者の医療活動を行った永井隆博士の尊い精神が、遠く離れたカザフの地で花開くことを願ってやみません。最近ではサッカー・ワールドカップ予選ですっかり有名になったカザフスタン共和国ですが、旧ソ連邦時代の核開発の秘密都市「クリチャトフ」、「セメイ」など、そしてそこに「ヒバクシャ」が50年近く苦しみ続けている現状を、もっと多くの人に知ってもらい支援の輪を広げていきたいと念願しています。

DISPLY 原研（原爆後障害医療研究）2号館のご案内



長崎大学医学部の玄関を左に見ながら奥へ奥へと歩いて行くと、こじんまりした3階建のビルに辿り着きます。これが原研2号館（長崎大学医学部付属原爆後障害医療研究施設2号館）です。旧名称は原爆被災学術資料センターといいます。1階には原爆の医学的影響の展示室があります。世界唯一の被爆医科大学である長崎大学医学部の医学同窓会被爆50周年記念事業のひとつとして造られたものです。原爆直後の急性症状や後障害の主なものがパネルで紹介されています。次の3つの展示品が被爆医科大学の特徴です。

（1）故 永井隆博士の救護報告書、
（2）故 調来助名誉教授の原爆被災復興日誌、
（3）西森一正名誉教授の血染めの白衣です。

展示室は修学旅行生や市内の中学生の平和学習の場となっています。学内よりも学外に有名な2号館です。2階にはコンピュータ室があり、原爆被爆者の健康に関する情報が登録されています。これまでの健康診断の検査結果が250万件も蓄積されています。茂里町ハートセンターでの健康診断の際、過去の検査結果をディスプレイに表示して健康指導に活用しています。さて、この2号館には4つの教室が同居しています。まず1階には「国際放射線保健部門」（なしむ1号で紹介されました）と資料収集保存部の「生体材料保存室」があります。2階には資料収集保存部の「資料調査室」が、3階には放射線障害解析部門の「放射線疫学」があります。ミンスク大学からの客員教授や研究生が出入りする中、「おはようございます」「グッドモーニング」「ドゥーブラウートラ」と多彩な挨拶から一日が始まります。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel・Fax 095-823-4278

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第3号

SUMMER

1998

発行◎平成10年8月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

What's project for trainees from abroad?
研修生受入れ事業／原研公開セミナー

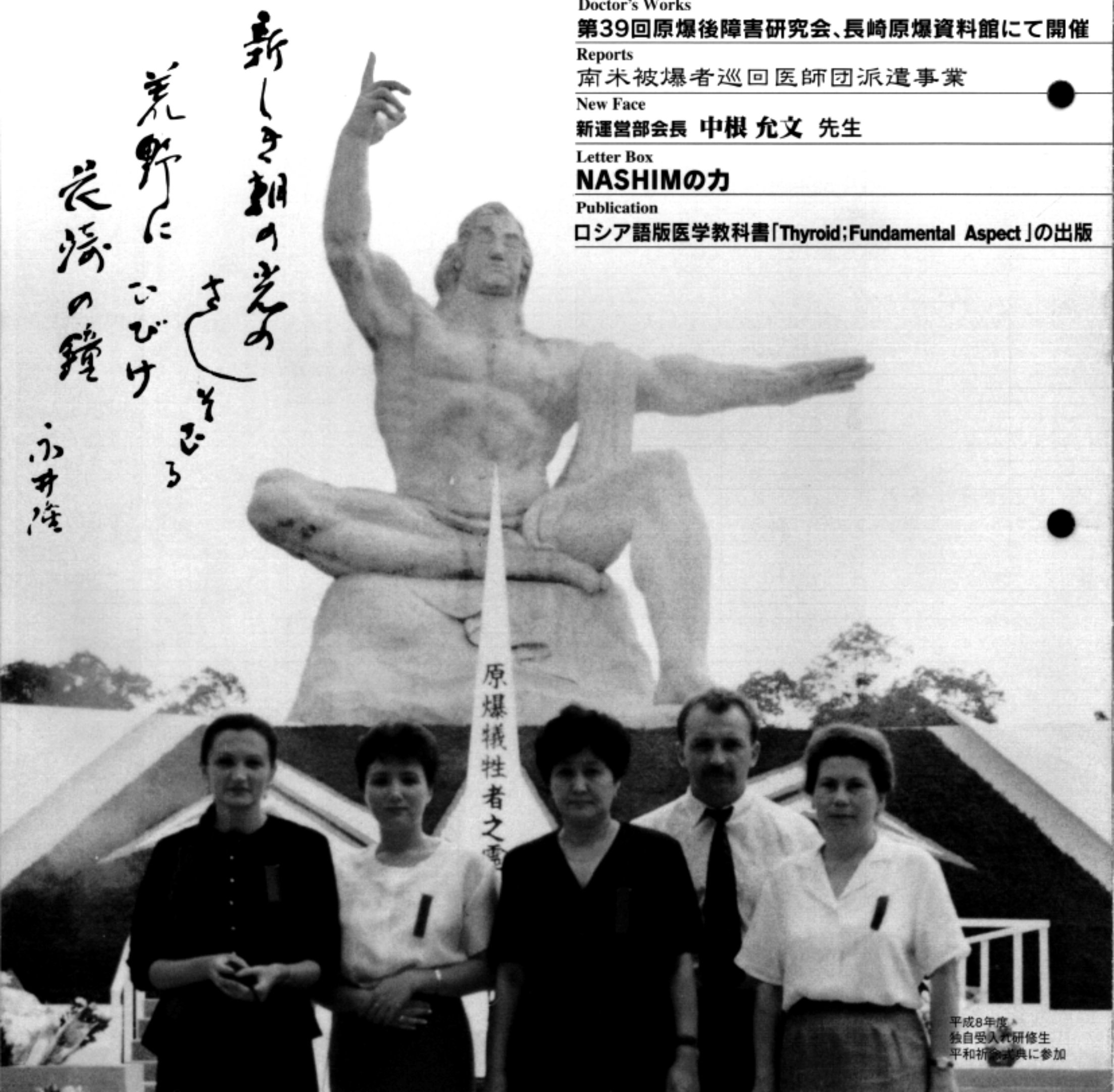
Doctor's Works
第39回原爆後障害研究会、長崎原爆資料館にて開催

Reports
南米被爆者巡回医師団派遣事業

New Face
新運営部会長 中根 允文 先生

Letter Box
NASHIMの力

Publication
ロシア語版医学教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版



平成8年度
独自受入れ研修生
平和祈念式典に参加

What's PROJECT FOR TRAINEES FROM ABROAD?

「研修生受入れ事業」ってなあに？



横山長崎大学長表敬訪問
（平成9年度独自受入れ研修生）

研修による人材育成は 世界のヒバクシャ医療を広く深いものにする

長崎が有する被爆者医療の実績と長期的視野に立ち、ヒバクシャ医療の現場で日夜活動しておられるチェルノブイリ関連諸国及びカザフスタン共和国のヒバクシャ医療従事者を招き人材育成のための受入れ研修・専門医師等の派遣事業を推進しています。

我が国にチェルノブイリ関連諸国の支援NGOは約30団体ほどあり、これらの国々からヒバクした子供達を招いて治療をしたり、ホームステイをさせて日本の子供達と交流を図ったり、医療機器を寄付したり、それぞれ独自の理念や考え方に基づき活発な活動を展開されています。

NASHIMは、被爆地長崎の使命として以下5つの分野の事業を実施しています。①研修生受入れ・専門医師等の派遣事業、②在外被爆者（南米・北米）渡日治療事業、③普及啓発事業、④出版事業、⑤永井隆　平和記念・長崎賞の授与

今回は、①について少し詳しく説明します。

I独自受入れ事業

放射線による人体への影響の特徴として、晩発性の後障害が挙げられます。そのためには長期的な視野に立って医療を行う事が不可欠です。そして、国際ヒバクシャ医療協力を行うには、相手国のしっかりした機関（カウンターパート）と信頼関係を確立する事が大切です。NASHIMでは、ベラルーシ共和国のゴメリ州立病院（放射能汚染が最も深刻な地域）、長崎大学医学部との姉妹校であるベラルーシ共和国・ミンスク医科大学及び、カザフスタン共和国・セミパラチンスク医科大学等をカウンターパートとして、主にこれらの機関から研修生を受入れています。費用は全額NASHIM負担です。

II共同事業

カウンターパートは、何も外国ばかりではありません。国内で活動しているNGOと共同で医師等の受入れ研修、普及啓発事業も実施しています。秋田において積極的な活動を展開している秋田ベラルーシ友好協会から平成8年度より延べ4名の医師が来崎し研修を受けました。また秋田市で講演会をし、ヒバクシャ医療の普及啓発を行いました。今年度も2名の医師の受入れ研修と秋田市でのシンポジウムを計画しています。費用は共同で負担します。

III窓口調整事業

外務省や日本赤十字社、笹川記念保健協力財団等から研修受入れの依頼があった場合に、NASHIMの研修機関の連絡調整を行う事業です。

昨年度は、笹川記念保健協力財団の招きでベラルーシ共和国保健大臣一行が来崎し、8月9日の平和祈念式典に参列し献花をされました。

IV専門医師等派遣事業

研修の成果が研修生帰国後の医療現場で生かされているかどうか、研修の内容が妥当であったかどうかなどをフォローアップするため、専門医師等の派遣を行い今後の研修の質を高めるものです。更に事業展開の調査も行います。

以上研修の形態は様々ですが、医療現場から遊離せず常に研修内容のフィードバック作業を行い、効果の高い、永続性のある研修を実施しています。

また、出版事業と連動してロシア語版の普及啓蒙書「放射能Q&A」や、医学・医療教科書を作成して教育研修効果を更に高く幅広いものにしています。

研修・人材育成は、目立たない事業ですが、ヒバクシャが世界各地で多数発生している現在、人類の生存にとって最重要課題です。

平成9年度までの医師等の受入れ・派遣の年度別・国別状況は左表のとおりです。

■平成9年度までの医師等の受入れ・派遣の年度別・国別状況

区分		5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	計
独自事業		5	5	6	7	5	28
チェルノブイリ関連	ロシア連邦	1	1	1	1	1	5
	ベラルーシ共和国	2	2	2	2	1	9
	ウクライナ	2	2	2	2	1	9
	計	5	5	5	5	3	23
カザフスタン共和国		−	−	−	1	1	2
韓国		−	−	1	1	1	3
共同事業		−	−	1	1	3	5
放影研		−	−	1	−	−	1
ベラルーシ友好協会		−	−	−	1	3	4
調整事業		31	39	25	16	9	120
外務省		19	17	17	−	1	54
日本赤十字社		2	3	8	3	3	19
笹川記念保健協力財団		10	10	−	10	3	33
WHO共同研究		−	6	−	−	−	6
HICARE・広島大		−	3	−	3	2	8
医師等派遣		−	−	−	5	2	7
ベラルーシ共和国		−	−	−	−	1	1
ウクライナ		−	−	−	5	−	5
カザフスタン共和国		−	−	−	−	1	1

原研公開セミナー開催のお知らせ

日時　8月8日(土)午後2時
場所　長崎大学医学部 ポンペ会館

入場無料

原研公開セミナーは、長崎大学医学部原爆後障害研究施設（原研）の主催で、一般の方々に、放射能と健康の関係などについて理解を深めてもらうために毎年行っているもので、平成8年度からNASHIMも共催して、パネル展を併催しています。旧ソ連邦から来崎されている医師の方々（上の記事参照）に現地の医療の実際やチェルノブイリ事故についての話を聞くのに加え、今回は特別講演として、京都大学の**塚谷恒雄**先生をお招きして「**カザフスタン共和国の環境問題**」についてご講演いただく予定です。塚谷先生はすでにカザフ共和国を40回以上も訪問されており、旧ソ連邦時代に同国のセミパラチンスクで行われた核実験の実態についてもご講演いただく予定になっています。

詳しいお問い合わせは、長崎県原爆被爆者対策課内（NASHIM：TEL／095−823−4278）まで御連絡下さい。



「測ってみよう放射線（実習）」で説明をされる奥村教授



「わかりやすい放射能と健康のはなし」を熱心に聞く一般参加者

Doctor's Works

第39回 原爆後障害研究会、長崎原爆資料館にて開催

長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設長　関根 一郎

平成10年6月7日(日)、第39回原子爆弾後障害研究会が長崎で行われました。本研究会は、長崎市および広島市で交互に毎年開かれ、今年は2年前に新装なった原爆資料館を会場として開催されました。

原爆による人体の被害は原爆直後見られた急性障害とその後白血病や種々の癌の増加をはじめとする後障害に分けられます。医学部に設置されている原爆後障害医療研究施設(原研)もこの後障害研究のためにできたものです。今年も長崎と広島の大学、放射線影響研究所、原対協の健康管理センターの医師や研究者約160名が集まって、原爆被爆者に関する日頃の研究成果が報告されました。原爆後50年以上が経過した最近の本研究会では、原爆被爆者の健康についての研究の他に、NASHIM事業と関連の深いチェルノブイリ原発事故や旧ソ連邦核実験場のあったカザフ共和国セミパラチンスクに関する医学調査、研究といった広く世界にまたがるヒバクシャのことも話題になるようになりました。特別講演は台北市の張武修先生をお招きして、「台湾の放射能汚染アパートの居住者における健康への影響」についてお話願い、放射能で汚染された鉄骨を使った建物に住む人達の放射線被曝の実態を紹介していただきました。

また、「放射線発癌の最近の知見」と題してのシンポジウムでは放射線による発癌機構解明の研究の最前線の成果が報告されました。会場ロビーでは、NASHIMの活動をまとめたパネル展示会も開催され、参加者にNASHIMへの理解を深めてもらいました。世界で唯一の被爆国としての責務として、また被爆者の健康増進のために、被爆者の健康に関する調査、研究は今後も必要との認識を深めつつ会は終了しました。


第二会場(平和学習室)


研究発表をされる関根先生

New Face



新運営部会長

中根 允文(よしぶみ) 先生

本年度から、NASHIMの運営委員会運営部会長として、会の世話をすることになったのが、長崎大学医学部精神神経科学講座教授の中根允文先生です。

先生の教室は、精神医学・医療の研究と診療そして教育に当たっており、中でも「社会精神医学」的な研究分野を専門として、様々な精神的問題に及ぼす社会的要因を調査研究してきています。中でも「長崎大水害」や「雲仙普賢岳噴火災害」などによる被災住民の精神的負担に関する研究は注目されています。ごく最近まで継続された、長崎における原爆被爆者の精神健康調査は、原爆被爆に加えて高齢化という悪条件のもと、精神面における多大な問題に苦悩の日々を送っている被爆者の実情を明らかにしました。その結果は、調査に協力した方々への報告会を繰り返すことでフィードバックされ、更に長崎県福祉保健部の協力で「原爆被爆者の健康について――こころの健康ガイド」という冊子になって、被爆者の心の健康のための解説書として配布されました。

チェルノブイリ事故に伴って被災者のメンタルヘルスに関心を持つ同地域の研究者が、世界保健機関(WHO)の紹介やNASHIMの事業の一環として、同教室を訪ねるようになり、中根先生もこの数年運営部会委員の仕事に参加してこられました。新運営部会長は、「NASHIMの活動も今や第二ステージにあり、国内・国際的に認知されるような新機軸を以て新規事業に取り組みたい」と意欲を示しておられます。更なる御支援のほど宜しくお願いします。

Reports 研修レポート

南米被爆者巡回医師団派遣事業

日本赤十字社長崎原爆病院　院長　田口　厚

「南米被爆者巡回医師団派遣事業」は、1985年より外務省・厚生省・長崎県・広島県の共同事業として長崎・広島で被爆し、その後南米に移住された方々のために2年に1度行われているもので、今秋には8回目の派遣が予定されています。通常は長崎、広島の医師3名と厚生省から1名、それと広島県から2名の事務官が派遣され、約3週間かけて、まず被爆者の多いブラジルを全員で巡回し、その後2班に分かれて南米を一巡しています。事業内容は、まず予め現地の医療機関で受けた検診結果についての詳しい説明を行い、もし療養指導あるいは精密検査を行う必要があると判断すれば、一旦日本に帰国して頂き治養を行うというものです。南米には現在約200名の被爆者が居住されていますが、各国によって医療費その他でかなり異なるという現状があり、その意味からも日本政府のこのような事業の継続は非常に大切なものになっています。

しかし実際問題として、日本の20倍近くの面積がある南米大陸をくまなく回るのはとても無理なので、現在は被爆者の方に交通の便のよい医療機関や外務省在外公館に集まってもらい、そこで検診、講演や面談などを実施しています。長崎から空路30時間という地理的な問題や言葉の問題(現地はポルトガル語とスペイン語)、さらには治安の問題などがありますが、現地の人たちの温かい歓迎と各国の日本大使館・領事館の御協力がこの事業の大きな支えになっています。現在、受診者の病態はやはり高血圧症・糖尿病・関節症・リウマチなどといった加齢によるものと生活習慣病がほとんどで、今後はますますその傾向が強まると考えられます。


現地の被爆者から健康相談を受ける田口先生

私自身も二度にわたってこの事業に参加しましたが、南米大陸の雄大さ、日本からの移住者の御苦労と在外被爆者の現状を身近に知り、また珍しい食べ物(焼肉・果物・アルコール)や音楽(サンバ・タンゴ)に巡り合うという貴重な体験もさせて頂きました。今後は、できれば長崎からの医師派遣人数を増やした上で、長崎で被爆された方が多数暮らされているというボリビアのサンファン地区に是非赴いて、移住者の歴史・環境を知った上での検診と指導を行っていく必要があると考えています。

なしむ 第3号 SUMMER 1998 発行◎平成10年8月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。



NASHIMの力

NHK大阪放送局
小田切 千さん

平成6年より9年までNHK長崎放送局の「長崎打町発市」等で活躍

私が「被爆」という長崎の過去の歴史に真剣に向きあったのは、新入職員としてNHK長崎放送局に赴任して2年目のことでした。その年はちょうど被爆50年。ラジオの特番で、「外国と日本との原爆に対する考えの違い」について中継リポートしました。私は中継するにあたって、長崎で勉強している4人の外国人留学生に、被爆者の方の体験談を聞いてもらったり、被爆遺構を見てもらったりしました。そして留学生にその都度インタビューし、自分の持つ原爆に対する考えの変化について語ってもらい、それを放送しました。中には核に対する考えを変えた留学生もいましたが、核保有国アメリカの留学生2人は、「それでも核は必要だ。」と答えたのです。信用できない他国と外交をしていくため、というのが彼らの理由でした。つまり、外交の手段として核の必要性を説いているのです。

私はNASHIMの様な機関こそが、このような考えに対する答えを出せるのではないかと考えます。被爆国日本で生まれた、放射能の犠牲者を救う立場にあるNASHIM。この組織が、日本だけでなく海外で活躍していくことが、インタビューに答えたアメリカ人留学生のような考え方や、放射能や核の世界的あり方に、一石を投じる力があるような気がします。

今後のご活躍を、大阪より応援しています。

SCHEDULE

今後の活動スケジュール

8月3日～31日
平成10年度チェルノブイリ、カザフスタン共和国からの独自受入れ研修

平成10年度共同事業(秋田ベラルーシ友好協会)
<前期> 8月3日～11日(長崎市)
<後期> 8月31日～9月3日(秋田市)

8月5日～8日
NASHIMパネル展

8月8日
原研公開セミナー

8月16日～20日
長崎からの専門医師等韓国派遣事業
(フォローアップ調査)

9月10日～20日
NASHIM井石会長、池田副会長
カザフスタン共和国訪問
(第2回国際セミパラチンスク放射線影響会議出席及びフォローアップ調査)

編集後記

「なしむ」第3号を無事出すことができました。素人集団ゆえに毎回紙面作りに苦労していますが、その中で今回は、NASHIM事業の大きな柱である研修生受入事業についての特集を組みました。長崎はまもなく53回目の原爆記念日を迎えますが、これまで培ってきたヒバクシャ医療のノウハウを世界の舞台で役立てるために、NASHIMはこれからも様々な活動を行っていきたいと考えています。御支援よろしくお願い申し上げます。

ロシア語版医学教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版



ベラルーシの医学雑誌でも紹介された教科書

今年3月、NASHIMは外務省の平成9年度補助事業として、ロシア語の教科書「**Thyroid;Fundamental Aspect**」(邦題;甲状腺学ー基礎編ー)を出版しました。

御存知の方も多いとは思いますが、チェルノブイリ原発の事故後、ベラルーシ共和国を中心に、特に小児の間で甲状腺癌が急増しています。これに対してNASHIMでは、これまでにも現地で活動している医師を招聘して研修を行ったり、長崎大学の専門家の派遣を行ってきましたが、この間現地医師との医療活動を行っていく過程において、特に若い医師達の間で相互の知識を共有するために不可欠な、教科書(特にロシア語で書かれた教科書)が不足していることが明らかになってきました。そこでNASHIMは、外務省の御協力の下、長崎大学医学部の医師と、その姉妹校であるミンスク医科大学の医師との共著という形で甲状腺についての教科書を作成し、1,000部を現地の医学部生に無料で配布しました。



平成10年6月来崎されたミンスク医科大学カバック副学長(左)と校正を担当したミンスク医科大からの留学生ロマノフスキー先生

今回、いわゆる「医師の卵達」に教科書を配布したことにより、将来的により現地の教育や医療活動がスムーズに行っていけると考えています。このような形でNASHIMが外務省の補助事業を行ったのは今回が初めてのことであり、今後も有効な支援を行っていきたいと考えています。

〒850-8570 長崎市江戸町2-13(長崎県原爆被爆者対策課内) Tel.・Fax 095-823-4278

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第4号

SPRING

1999

発行◎平成11年2月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel.・Fax 095-823-4278

What's Delegative Project

派遣事業

●会長・副会長セミパラチンスク訪問
●韓国における被爆者医療視察
（平成10年度 韓国医師受け入れ研修事業フォローアップ調査）

Reports
南米派遣事業報告

Doctor's Works
放射線影響学会報告 ～公開セミナーについて～

New Face
新任教授紹介!! 長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設 放射線障害解析部門放射線疫学研究分野 柴田 義貞 教授

Letter Box
[チェルノブイリ事故から13年]

News
平成10年度 外務省補助事業について



セミパラチンスクを訪問された会長、副会長一行

What's Delegative Project

「派遣事業」ってなあに？

会長・副会長 セミパラチンスク訪問

昨年9月に、NASHIM会長である井石哲也長崎県医師会長と、副会長である池田高良長崎大学医学部長（現長崎大学学長）がカザフスタン共和国を訪問されました。

これまでにも、チェルノブイリを中心に、セミパラチンスクや韓国（下記参照）などに医師や専門家を派遣してきましたが、今回は、セミパラチンスクで行われた「第2回国際放射線・環境学会」に出席し、同時にこれまでの受入研修生のフォローアップ調査を行うのが派遣目的でした。

学会は9月16日から9月18日までの3日間にわたって行われ、カザフスタン、ロシアの専門家はもとより、長崎大学からは同行した山下俊一教授が長崎発の国際ヒバクシャ医療協力についての講演を行って注目を集めたほか、現在セミパラチンスクにおいてヒバクシャの聞き取り調査を行っている元大阪大学医学部の高木昌彦先生が、調査報告についてカザフ語で発表を行うなど、連日活発な討議が行われました。また、池田副会長が講演の座長を行ったほか、井石会長もNASHIM会長として紹介され、盛んな拍手を浴びました。更に井石・池田両先生は、セミパラチンスク医科大学の創立45周年記念式典において、名誉博士号の授賞という光栄を浴しました。

またアルマトイでは、第2回永井隆平和記念・長崎賞を授賞したサイム・バルムハノフ博士や昨年度NASHIMで出版した「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民の健康状態」をバルムハノフ博士と共に記したアチャバエフ博士とも対面し、今後の協力関係等についての話し合いを行いました。

現在長崎大学とセミパラチンスク医科大学は姉妹校の関係にあり、今後学術交流や人的交流を含めた様々な分野での交流が期待されています。また本年はセミパラチンスクでの第1回核実験から50年という節目の年にあたり、NASHIMとしても何らかの形で貢献をしていきたいと考えています。





派遣事業

派遣事業とは、「世界の被災地で放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者に対する指導、技術支援、医療情報などの提供を行うために海外への専門医師等の派遣を行う」ものです。

韓国における被爆者医療視察

（平成10年度 韓国医師受け入れ研修事業フォローアップ調査）

韓国の医師研修受け入れ事業をさらに発展させるためには、韓国の被爆者医療の現状を知る必要があると考え、平成10年8月17日～19日、長崎県より豆谷参事、長崎市より南條次長、医学部より朝長教授の3名が視察旅行を実施しました。

まず、ソウルでは、大韓赤十字社で、朴基論事務総長、朴英煥原爆福祉事業所長と約30分面談、被爆者の医療の現状をお聞きしました。特に医療費の支給に重点が置かれており、ハプチョン（陝川）の原爆福祉会館は赤十字直轄で運営されています。

つぎに大韓赤十字社ソウル赤十字病院を訪問。文明善院長、安倫成副院長、李昌鉉、安泰義、姜永済医師らと面談しました。3医師はこれまでに長崎にこられた方々であり、久しぶりの再会で、話は尽きませんでした。

ソウルを離れ、ハプチョンへ移動、原爆福祉会館の白南珍館長以下の職員の出迎えを受けました。定員80名の福祉会館は満員でした。

やはり原爆症と自分の現在の病状の関係について悩む人が多く、また、自分の子供たちに原爆症がでる可能性を質問する人もあり、原爆後障害についての正しい知識の普及が必要と感じられました（長崎でもそうですが）。健康管理は現在はハプチョン保健所の文稗皓医師（専門は泌尿器科）が週数回来所して、常勤の看護婦、理学療法士と協力して行っています。文医師は30歳で、日本語を学んだ方で会話が弾みました。白館長は前に訪問した長崎の原爆ホームを再度訪問して、勉強したいと話されました。今後は、赤十字病院の医師とともに、現場で働いている医療従事者の受け入れが重要と認識しました。また積極的にNASHIMから毎年同福祉会館へ医師を派遣して、検診、カウンセリングを行えば、今後の事業を充実させることができると思いました。



ソウル赤十字病院にて　［左から宋医師（平成8年度）、文病院長、朝長教授、李医師（7年度）、姜医師（9年度）、豆谷参事、南條次長］

Doctor's Works

放射線影響学会報告

～公開セミナーについて～



講演をされる奥村教授
（長大医学部 原研放射）

日本放射線影響学会が昨年（平成10年）、長崎市で開かれました。そのプログラムの一つとして、市民公開セミナー「もっと知ろう放射能」が12月2日、プリックホールで開かれました。このセミナーは長崎市民に放射能や放射線のことを身近なものとして理解していただこうと企画したものです。講演は長崎大学の原研および放射線科の5人の先生によって行われました。内容は、私共が住む自然界には、生命が始まって以来、自然放射線があり、生きるかぎり放射線とは無縁でいられないこと、そして、放射線は医療において病気の診断や治療に役立っていることがわかりやすく話されました。特に、白血病の治療は放射線照射と骨髄移植によって行われ、白血病も不治の病ではなくなってきていることが紹介され、聴衆の関心を引きました。セミナーの参加者は187名であり、講演後の質問も活発でした。人に害を与える放射線を避け、役に立つ放射線と共存していく必要のあることが話題となりました。

New Face 新任教授紹介!!

長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設
放射線障害解析部門放射線疫学研究分野

柴田 義貞 教授

平成8年4月の改組に伴い原研に放射線疫学研究分野が新設され、柴田義貞先生が平成10年12月に初代教授として就任されました。柴田先生は東京大学工学部を卒業後、大学での研究、教育に携わってこられましたが、とくに医学における統計活用に興味をもたれ、医学統計の著書も執筆されています。その後、水俣病研究センターでは水俣病患者のデータベース構築を、放射線影響研究所では被爆者コホートの疫学研究および笹川プロジェクトでの国際医療協力に関するデータベース構築に携わってこられました。教育および研究ともに長崎大学とは縁が深く、平成2年から公衆衛生学の非常勤講師として医学部学生の教育にも貢献されてきました。また原研の先生方が国際医療協力をされているチェルノブイリ原発事故後の研究プロジェクトでは、健康調査に関するデータベース構築技術支援のため、ロシア、ベラルーシ、ウクライナに度々でかけられています。この2月から、長崎大学が世界のヒバクシャの情報収集および世界への発信基地となることを目的として、原研施設に国際ヒバクシャ学術情報交換システムが設置されます。よりよいシステム作りがヒバクシャの疫学調査研究の発展につながるとのお考えで国際ヒバクシャデータベース構築に力を注がれています。ますますの疫学研究発展が期待されます。



Reports 研修レポート

南米派遣事業報告

日本赤十字 長崎原爆病院内科　早川　滉

平成10年度の本事業に長崎県の派遣医師として10月22日成田を出発し、ブラジルを中心としてボリビア、ペルー、パラグアイ、アルゼンチンを廻り、11月5日に帰国しました。

被爆者の各国における実際の生活、健康状態を各人30分以上かけて、事務系の人も加わって把握し相談に応じました。

また現地の人の要望もあり、長崎関係の被爆者は私ができるだけ相談に応じましたが、事務関係は広島県からのみの派遣であったので、健康相談以外にも手帳の交付、健康管理手当、認定、来日診療の詳細などを厚生省の方と相談に応じました。相談の内容は予想していた以上に（私の現地の実情の理解をはるかに越えていた事情もありますが）きびしいものが感じられました。本邦から一番距離の離れた地域（ジェット機で26時間）であり、若い頃はなんとか生活のため、日本のためという情熱で乗り越えてこられた不安も、被爆50年という年月は肉体の加齢という現実があり、人生をふりかえり、将来に対する我が国（母国）への希望を熱くのべられていたのが印象深く感じました。

医療事情は極端に低く、かつ医療費は生活レベルに比して割り高、国民皆保険もなく、被爆者手帳を有していられても、医療費は個人負担であり、せめて本土（日本）なみにして欲しいとすべての人が声をそろえて訴えられていました。



サンファン地区の人々との記念写真

私はさらにボリビア、ペルーへと訪れましたが、ボリビアの被爆者は長崎関係の方々ばかり8人、サンファン地区から領事館のあるサンタクルスに出て来られ、お元気でした。また、この地区は長崎県の援助で診療所も立派に完成しており、今回は道路事情で現地まで行けず残念でしたが、二世の1人が日本でナースの資格（長崎県の援助）をとられ御活躍であるとの情報を聞き、ほっとして帰国しました。

なしむ NASHIM 第4号 SPRING1999 発行◎平成11年2月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。



チェルノブイリ事故から13年

広島大学 大学院生（研修事業通訳担当）
セルゲイ・ボブコフ さん
（Segei Bobkov）

今年4月で、チェルノブイリ事故から13年になります。その事故で沢山の人が亡くなって、沢山の人が放射能の影響を受け、健康を失いました。その事故の一番恐ろしいことは、13年を経ても、放射能の影響が無くならないことです。地下水、土壌、植物、その植物を食べている牛などは、今でも放射能に汚染されています。汚染された地域では、数百万人が住んでいて、放射能の影響が続いています。放射能は人間の体に溜まって、いろいろな被害を与えて、病気をもたらしています。

ソ連が崩壊してから独立国家になったロシア、ベラルーシ、ウクライナは市場経済への移転時期にありますので、チェルノブイリが生み出している問題を解決するには自分の力と知識が足りない、人的・物的なリソースが足りない状態が続いています。

その状況の中、現地で非常に大きな貢献をしているのは被爆の経験を持っている長崎です。その活動の中心になっている長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は長崎から現地へ放射線医学専門家を送ったり、放射能と医療問題についてロシア語で本の出版をしたり、長崎でチェルノブイリのため、人材育成と技術移転の研修を行っています。文化の違いなどがありまして、難しい仕事だと思いますが、チェルノブイリ被災者にとって、日本からの援助がとても大きな意味を持っていると思います。その高潔な活動に関係されているNASHIMの方々のご成功とご健康を祈っております。

Schedule

今後のスケジュール

2月14日～20日
バルナウル医科大学
ヤコブ・ショイエ教授来崎
（本文参照）

2月24日（水）
運営委員会

3月8日～19日（予定）
韓国医師受入れ研修（独自事業）
権貞兒医師・文昶皓医師来崎

3月15日（月）
理事会

編集後記

「なしむ」第4号では、昨年9月のNASHIM会長・副会長のカザフスタン共和国訪問及びNASHIMの派遣事業についての特集を組みました。現地に赴くと、チェルノブイリもそうですが、カザフスタンでも、徐々にではありますが、NASHIMのこれまでの地道な努力が確実に評価されつつあることを実感させられます。今後もNASHIMは、「長崎から世界へ」をモットーに、世界のヒバクシャのために貢献していきたいと考えています。皆様の御支援をよろしくお願い申し上げます。

News

平成10年度
外務省補助事業について



アルタイ州立診断センター（バルナウル市）にて
［右から高村助手、高橋助手］

昨年度の甲状腺ロシア語教科書「Thyroid;Fundamental Aspect」の出版に続いて、平成10年度の外務省補助事業として、「ロシア・南アルタイにおける放射線障害の実態調査支援事業」が決定しました。

本号にもあるセミパラチンスクの核実験は、カザフスタン国内だけでなく、隣接するロシア連邦アルタイ州南部にも放射能汚染をもたらしました。しかしながら、この地域における放射能汚染の実態は、これまでほとんど表に出ることはありませんでした。

今回の補助事業では、アルタイ州における放射線降下物による被曝状況の実態を調査し、今後の共同研究や医療支援の可能性を探ると同時に、甲状腺用の超音波装置（エコー）を供与する目的で、まず昨年12月に長崎大学医学部の高橋達也助手（衛生学）と高村昇助手（原研国際）の2名が現地を訪問しました。

アルタイ州は南シベリアに位置し、冬には最低気温が−40℃にも達することもあるという、厳しい条件の中での派遣事業となりましたが、実際訪れてみると、現地では当初の予想を上回る規模での医療対策が行われており、ハード、つまり医療機器の導入という面でも、カザフスタン共和国に比して遥かに充実していました。またヒバクシャに対する検診体制や疫学調査も、カザフスタン側に比べてかなり詳細に検討されています。一方、例えば遺伝子レベルでの放射線の影響といった研究分野に関してはまだまだこれからで、この分野での今後の共同研究が期待されます。また、ヒバクシャの検診活動も積極的に行われており、この分野での医療協力が可能であると考えられました。

本年2月には現地の責任者であるヤコブ・ショイエ教授が来崎し、NASHIMや長崎大学との共同事業及び共同研究について具体的な話し合いを行う予定です。

〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel・Fax 095-823-4278

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care
ヒバクシャ医療の「今」を発信する
なしむ
NASHIM
ヒバクシャ医療国際協力通信

第5号
SUMMER
1999

発行◎平成11年8月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel. 095-823-4278
Fax 095-820-3037

What's Publish Project
出版事業

Photo Exhibition
［セミパラチンスク写真展］開催のお知らせ
Reports
日本赤十字社専門医師研修事業
Topics
平成11年度研修生受け入れ事業スタート
NASHIM's Works
韓国からの医師招聘2名に増加
Letter Box
［毎年6000人の検診を続ける
コロステン診断センター］
N
シ共和国クラウチェンカ駐日大使、
医学部を訪問



1949年8月29日ソ連最初の核実験

What's Publish Project

「出版事業」ってなあに?

NASHIM 出版事業

出版事業とは、ヒバクシャ医療、特に国際ヒバクシャ医療に関する普及、啓蒙を目的として各種の出版事業を行うもので、平成10年度は「台湾の放射能汚染問題」の翻訳出版を行いました。



NASHIMではこれまで、ヒバクシャ医療、特に国際ヒバクシャ医療に関する普及、啓蒙を目的として、各種の出版事業を行ってきました。具体的には平成8年度にセミパラチンスク核実験場周辺住民の健康状態を綿密に調査し、その影響を報告した「中部カザフスタンにおける住民及び家畜の健康状態」の邦訳版の出版を行ったのをはじめ、平成9年度には、チェルノブイリ事故後の現場の様子を克明に記した「チェルノブイリ―虚偽と真実」の邦訳版の出版、外務省との共同事業でベラルーシ共和国の医学生、医師のために作成した甲状腺の教科書「Thyroid: Basic Aspect」の露語出版を行いました。

今回NASHIMは、平成10年度の出版事業として「台湾の放射能汚染問題」の邦訳出版を行いました。この本は、これまであまり知られていなかった、台湾でのコバルト60(放射性核種の一種)が建築用の鉄骨に誤って混入されたことによる放射能汚染について、実際に被害者の立場にある王玉麟氏がその実態を調査報告しているものです。また平成11年度には永井隆博士の出版物の英訳版の出版等も予定されています。

このような本の出版に加え、この「なしむ」のような広報誌や、あるいは一般の方向けに放射能についての知識をQ&A方式でまとめた「放射能Q&A」といった小冊子の出版も行っています。

NASHIM出版物は、原則として全国の県立図書館やマスコミ関係、あるいは長崎県内の高校の図書館に寄贈していますが、もし本を御希望の方がいらっしゃいましたら、NASHIM事務局(長崎県原爆被爆者対策課内TEL095・823・4278)に御連絡下さい(ただし、各出版物とも部数に限りがありますので、場合によってはお渡しできない場合もあります)。



Photo Exhibition

[セミパラチンスク写真展]

~ソ連の核実験場・被曝の大地~

8月1日~9月30日

長崎原爆資料館地下2階エントランスホール

1949年8月29日、旧ソ連邦で初めての核実験がカザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場において行われました。それ以来1989年に至るまで同核実験場では地上、地下併せて450回以上にも及ぶ核実験が行われました。この間周辺住民には何も知らされず、多くの住民が被曝しましたが、その実態は闇に葬られ、旧ソ連が崩壊した現在においてもその全貌は明らかになっていません。

今年は、第1回の核実験からちょうど50年という節目の年に当たります。NASHIMでは、(財)長崎平和推進協会との共同開催で8月1日~9月30日に長崎原爆資料館地下2階エントランスホールにおいてセミパラチンスク写真展を行うことになりました。これは、旧ソ連時代のセミパラチンスクにおいて何が行われたかを紹介すると同時に、実際の核実験の模様や実験場周辺の様子などを公開する予定です。

また、50周年記念日である8月29日の前後には、現地のセミパラチンスク医科大学と姉妹校の関係にある長崎大学医学部を衛星回線で結び、セミパラチンスク側から送られてきた甲状腺エコーの画像や顕微鏡の画像を、長崎大学の専門家が診断支援を行う「テレメディシンシステム(Telemedicine)」の開通式も予定されており、今後ますます長崎からの医療協力と、セミパラチンスクとの学術交流を積極的に行っていく予定です。

(上記写真は、1955年11月22日の水爆実験。ソ連の航空機から投下され、セミパラチンスクでは最大規模の水爆実験となった。これにより、ソ連は水爆の航空機搭載が可能であることを示した。)

NASHIM's Works

韓国からの医師招聘2名に増加

NASHIMによる外国人医師招聘事業では、韓国からの場合、過去3回にわたって毎年、韓国赤十字社の推薦による1名のソウル赤十字病院の医師の受け入れを行ってきました。昨年には長崎からも韓国を訪問し、種々の意見交換を行った結果、今年度より研修生を2名に増員し、1名は従来どおり韓国全体の被爆医療に責任をもつソウル赤十字病院から、もう1名は被爆者医療に直接従事している現場の医師またはコメディカルの職員を招き、韓国の被爆者医療の実態にあわせた調整を行うことが決まりました。これにもとづいて、ソウル赤十字病の臨床病理科のクオン ジョンア(権 貞兒)医師とハプチョンの原爆被爆者特別養護ホームの医療を担当しているハプチョン保健所のムン チャンホ(文 昶晧)医師のお二人を3月8日より2週間にわたってお迎えしました。お二人とも流ちょうな英語を話し、さらにムン先生は、小学校時代を日本で過ごした経験があり、日本語が全く不自由がないため、研修はきわめてスムースに行われました。

お二人にとって、被爆者に対する医療がよく整備されている日本の状況は大変勉強になったようで、原研、原爆病院、原爆ホーム、被爆者検査センターなどで精力的に視察と研修をこなし、各施設の日本側の指導者達との交流も積極的に行って、終了時点では、被爆者医療に必要な基本的事項をほとんどマスターして、びっくりするくらいの成果をあげておられました。さらに両医師には、ご自分の専門の領域についても多忙な中を、それぞれ大学病院の泌尿器科(斉藤泰教授)と臨床検査科(上平憲教授)において視察と交流をしていただき、こちらでも大きな成果をあげられました。日本の社会の現状についても好奇心旺盛に、あちこちをみて回り、送別の宴での日本の分析の話はなかなかのもので、将来にわたる日本と韓国の交流のあり方について会話も盛り、またの再会を約して元気に帰って行かれました。クオン先生、ムン先生ご苦労様でした。

これまでに合計5名の韓国の医師が長崎において被爆者医療を学ぶ機会を持ったことは、現在3,000名以上の韓国各地に生活している被爆者の医療の推進に大きな力となって、将来的にこの方面の医療が充実していく原動力となることが期待されます。今後も定期的に日本からも訪問して交流を拡げ、情報交換とともに、被爆者の方々にも直接お会いして、原爆後障害医療の進歩などのお話もしていければと考えています。今後は、看護婦の受け入れも現在検討中です。



Reports 研修レポート

日本赤十字社 専門医師研修事業

日本赤十字社は、チェルノブイリ原発事故後、様々な支援活動を行ってきましたが、長崎、広島両方においても、これまで日本支部を通じて、チェルノブイリ被災者救援医師招聘研修事業を実施してきました。平成10年度も、NASHIMの協力をもとに、現地で事故後の実際の巡回診療に携わっている医師の招聘研修を、平成11年1月から2月にかけて行いました。招聘医師は、ウクライナから、イヴァン、ニキフォルク医師、ベラルーシから、ウラジミール、シヴダ医師と、タリアナ、シシュミントセヴァ医師の計3名で、いずれも巡回診療では主に、超音波診断装置を用いての甲状腺の検診を行っている方々です。長崎での研修は、日赤長崎原爆病院、長崎大学第一内科、長崎大学原研の各施設、放射研、原爆被爆者対策協議会、日赤支部等で行いました。研修内容は、放射線の基礎的研究から、長崎における原子爆弾の人体への影響及び後遺症などの渡学調査、甲状腺や血液疾患と放射線との関連と、その病理組織学的検索、長大あるいは原爆病院での実際に超音波装置を用いての実習、長崎における被爆者検診のシステム、原爆ホームに入所されている被爆者との交流、等多岐に渡りました。今回来崎した医師達も、現地では十分整備されていない医療環境のもと、安全性にも問題、不安を抱えながら、毎日巡回診療を行っています。日本、長崎での体験、研修が少しでも今後の彼らの仕事に役立つ事を願いながら、今回の事業を終了しました。



TOPICS

平成11年度

研修生受け入れ事業スタート

NASHIMの事業の一つである平成11年度の研修生受け入れ事業が今年も7月15日からスタートします。

今年は、ロシア連邦、ベラルーシ共和国、カザフスタン共和国の旧ソ連邦諸国で放射線障害の治療にあたっている医師たちと、アメリカ合衆国の医師の5名の研修医を独自に受け入れます。

この5名のほかに(財)笹川記念保健協力財団の依頼でベラルーシ共和国から2名の研修医が加わり、総勢7名が7/15～8/14の31日間研修を受けます。

研修医たちは、それぞれ放射線生物学、疫学、情報システム学、公衆衛生学、内分泌学等の専門家で、長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設(原研)や、長崎原爆病院等で専門研修を受けるほか、原研公開セミナー参加や、8月9日の平和記念式典への参列も行います。

また、平和記念式典をはさんだ1週間程度、秋田ベラルーシ友好協会が受け入れた研修医3名の来崎もあり、賑やかな研修になりそうです。

核兵器・ヒバクシャ医療国際協力会通信
なしむ NASHIM
第5号 SUMMER 1999 発行◎平成11年8月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel. 095-823-4278 Fax 095-820-3037

Letter Box
NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。



毎年6000人の検診を続けるコロステン診断センター

BHNテレコム支援協議会
常任理事・事務局長
篠原 浩一郎さん

1996年の秋のキエフは黄金色に白樺が輝いていました。笹川チェルノブイリ支援プロジェクトの完了を記念した国際セミナーで、私どもBHNテレコム支援協議会の代表団は、初対面の長崎大学医学部山下教授にウクライナジトミル州コロステン診断センターのダニリューク所長を紹介されました。翌日、それまで5年間長崎大学の指導の元で小児検診を続けてきたセンターを見学しました。ウクライナ側で建設した立派な建物、すばらしく訓練された医師や技師たち、5年経っても新品のような設備、そして今なお検診を必要としている多くの子供たちの行列。しかし、笹川財団の試薬の供給が打ち切られるとセンターは閉鎖されるとのことでした。そこで私達が代わって出来る限り試薬の供給をすることにしました。それから現在まで、ダニリューク所長たちの奮闘と長崎大学の協力そして私達のささやかな支援でセンターは毎年6000人の検診を続けています。

この間コロステン以外でも、長崎大学の放射能災害対策のプロジェクトには、私達の本来の任務である電気通信を活用した人道支援の立場から参加させていただいてきました。これは同時に、放射能汚染に科学的に立ち向かう医師たちの国際交流を深める「なしむ」の活動のお手伝いもしているのだと勝手に思っています。これからも宜しくお願いします。

Schedule
今後のスケジュール

7月15日（木）～8月14日（土）

チェルノブイリ・カザフスタン
研修生受入れ事業
（秋田・ベラルーシ友好協会との共同事業、
笹川保健記念協力財団の窓口事業を併催）

8月1日（日）～9月30日（木）

セミパラチンスク写真展
（長崎原爆資料館地下2階エントランスホール）

8月7日（土）

原研公開セミナー（13:00～）
於 長崎大学医学部ボンベ会館
問い合わせ：長崎大学医学部原研国際
TEL:095-849-7122
FAX:095-849-7169

編集後記

長崎は今年で54回目の原爆記念日を迎えますが、長崎原爆から4年後の1949年8月29日に、長崎に落とされた原爆と同じプルトニウム爆弾が、カザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場で爆発したことは日本人には意外と知られていません。今年でセミパラチンスクの第1回核実験から50年。日本と同じように、むしろより深刻にヒバクシャの高齢化がセミパラチンスクにも襲ってきています。今後同じ被爆地として、長崎がより貢献できる道を模索したいと考えています。

NASHIMのホームページのアドレスが変更になりました。
http://village.infoweb.ne.jp/~nashim/

News
ベラルーシ共和国クラウチェンカ駐日大使、長崎大学医学部を訪問

去る5月6日、ベラルーシ共和国のクラウチェンカ駐日大使が長崎大学医学部を訪問され、本年2月より長崎大学医学部とベラルーシのゴメリ診断センターとの間で行われている遠隔医療システム（テレメディシン）や、原研情報室の長崎原爆被爆者登録システムの見学をされました。

大使は、テレメディシンシステムについて熱心に質問され、日本の医師による診断支援によって、現地の子供たちに福音がもたらされるだろうと、感謝の言葉を述べられました。

非常に短時間の訪問ではありましたが、大使は、今後ベラルーシ大使館としても長崎が行っている国際ヒバクシャ医療をサポートしたいと述べられました。これまでにもNASHIMは毎年夏にベラルーシからの医師、専門家の研修事業を行っており、さらに平成9年度には外務省との共同事業で甲状腺の教科書を露語出版しました。今後もNASHIMとしても、積極的にベラルーシとの交流を進めていく予定です。



Information


第3回「永井 隆」平和記念・長崎賞
募集のお知らせ

「永井隆」平和記念・長崎賞はNASHIMの事業の一環として長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年度に創設し今回が第3回目の実施となります。

原子爆弾による被爆者、放射線事故等による被災者の治療および調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉向上を通じて世界平和に貢献し、将来に活躍が期待される国内外の個人または団体に授与します。

賞受賞にふさわしい候補者がおられたら8月20日まで推薦をお願いします。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第6号

SPRING

2000

発行◎平成12年3月30日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel. 095-823-4278
Fax. 095-820-3037

第三回「永井 隆」平和記念・長崎賞 受賞者決定！



Nagasaki Dr. Nagai Peace Memorial Prize
第三回「永井 隆」平和記念・長崎賞

「原子爆弾救護報告」英訳版出版

NASHIM's Works
1999年度 ―韓国からの「招請研修」受け入れ事業― **はじめてナース来崎**

カザフスタン雑感 専門医師等派遣事業

Reports
在外被爆者渡日治療事業

Letter Box
［遠隔医療支援システム確立は、長崎から
セミパラチンスクへの具体的支援の第一歩］

News
外務省補助事業 **電子図書作成支援と専門家交流**

「永井 隆」平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に贈られます。

第3回「永井 隆」平和記念・長崎賞の受賞者はオランダライデン大学のヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏に決定しました。授賞式は3月30日に長崎厚生年金会館で行われ、正賞として賞状と賞碑（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞として賞金200万円が授与されました。

受賞者の横顔

受賞者 ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏

ブローセ氏は、世界的に著名な放射線物理学者であり、授賞式の後、「中性子：それは本当に危険なものか？」の演題でお話をして下さいました。スライドを使っての講演に、100名近くの聴衆は熱心に耳を傾けていました。講演の後は盛大にブローセ氏の受賞を祝福しました。



物理学者として放射線生物学、放射線防護学などの研究に携わり、これまで、幅広い中性子測定の実験結果の報告を行っています。

特に、1964年に発表した中性子の酸素増感比および1971年の相対的生物効果の研究成果は世界的に高く評価されています。



ブローセ氏はその後、中性子被曝によるラットおよびアカゲザルの発癌研究をすすめ、放射線リスクの解析を行いました。

ブローセ氏は中性子のリスクと相対的生物効果を明確にした第一人者として高く評価され、氏の研究成果は原爆放射線とくに中性子の被爆者に与える影響を解析する上で貴重な資料となっています。

このようにブローセ氏の放射線リスクについての基礎的な研究は、ヒバクシャ医療の進展に大きく貢献しており、今回、第3回「永井隆」平和記念・長崎賞を受賞されました。



永井 隆
（ながいたかし）
明治41年（1908）
～昭和26年（1951）
医師、原爆作家。
島根県松江市生まれ。

昭和7年（1932）長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し昭和15年（1940）帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理的療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年（1945）6月、余命3年と診断される。同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は自宅の下敷きとなり逃げ出しきれず焼死した。子供2人は三ッ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、『ロザリオの鎖』『この子を残して』『生命の河』『長崎の鐘』『花咲く丘』『いとし子よ』など数々の作品を書き、祈りと平和を訴え続けた。これら著作を読んで感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市名誉市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画「長崎の鐘」（昭和25年）は博士の住まいであった「如己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。

昭和26年（1951）5月1日長崎大学医学部附属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

永井隆記念館OPEN

白血病に侵されたうえに原爆で被爆し、それでも救護医療に献身した永井隆博士は『長崎の鐘』『この子を残して』等の名著を残しました。さらに博士は少年少女のために「うちらの本箱」を開設、それを発展させ今回名称も新たに「永井隆記念館」として4月5日にオープンします。新記念館は、1階が視聴覚コーナーとグラフィックパネルや遺品等を展示しているコーナー、2階は図書室となっており、これまでの約2.7倍の広さとなります。



受賞者
ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏（65歳）
主な経歴

1934年10月12日	アムステルダム（オランダ）にて生まれる。
1959年	アムステルダム大学（核物理専攻）卒業
1961～1973年	放射線生物学研究所、ライスワイク
1974年	スタンフォード大学（放射線医学）、（米国）
1974～1991年	放射線生物学研究所、ライスワイク
1986年～現在	ライデン大学、非常勤教授
1991年～現在	放射線防護・測定センター顧問、ライデン

受賞

1976年	デーモン・リュニョン記念基金受賞
1999年	ベック・アレキサンダー賞受賞



原子爆弾救護報告

「原子爆弾救護報告」英訳版出版

NASHIMでは、永井隆博士が長崎原爆の急性期障害を如実に記載した貴重な救護報告書の英訳版を初めて出版しました。

1945年8月9日午前11時2分、原爆の落下中心地から500～800mに位置していた長崎医科大学およびその附属病院では、教職員・学生・看護婦896名、入院患者・付き添い72名を失う潰滅状態となりました。

永井博士は、自分も重傷を負いながら、また、緑婦人も原爆で失う状況の中で、献身的に救護活動を続けました。そして、原爆直後の大学の被害状態と三ッ山地区における救護活動の様子、負傷者の様子などについて克明に記したのがこの救護報告なのです。そこには科学者としての博士の一面も見ることが出来、原爆投下直後の状況が手に取るように伝わってきます。今回の英訳により、原爆の悲惨な実態が諸外国の人々にも伝わるものと期待しています。皆さんも、この機会に原著を是非お読みいただきたいと思います。

出版にあたり、快くご許可いただきました長崎大学医学部教授会に感謝申し上げますと共に、翻訳のご苦労をいただきました郭芳村先生父子ならびに関係各位にお礼申し上げます。

NASHIM's Works

1999年度
—— 韓国からの「招請研修」受け入れ事業 ——

はじめてナース来崎



韓国からの研修は今年度からドクターとナースの組み合わせで行うことになり、ソウル赤十字病院一般外科医長 李相禧(Lee Sang Hee)先生と、ハプチョン原爆被害者福祉会館看護婦 鄭明淑(Jun Myoung Suk)さんが来崎、平成11年11月15日から11月30日までの2週間の研修・視察を行いました。

今回のナースの招聘は、実際に韓国の被爆者の介護に従事しているナース、あるいはその他のコメディカルスタッフに来ていただき、長崎の原爆ホームなどでの介護の実際を見ていただくとともに、日本の被爆者の方々の心情に触れて、韓国内で療養する被爆者の介護の質的向上を図っていただくことを目的に加えたことから実現しました。

鄭さんは精力的に研修・視察を行い、また、「恵の丘」、「かめだけ」両原爆ホーム、原爆検診センターなどのナースとの交流を深め、また多くの日本の被爆者の方々にも接して、きわめて印象深い研修になったこと、そして原爆による被害が50年を経て、なお多くの問題を個々の被爆者に与え続けている実態が良く理解できたと、今回の研修の成果を語っておられました。

李先生も精力的に病院関係を中心に回られ、被曝による身体的障害、精神的後遺症などについて、熱心に質問をして、放射線被曝による後遺症のみならず、多くの障害の複合による現在の被爆者の苦しみが理解できたと語っておられました。また専門の消化器外科についても、大学病院第一外科のドクター達と交流、日本の医療の現状にきわめて強い印象を受けられたようです。

お二人の帰国後の活躍を期待するとともに、韓国からの招請研修を続けてきたことによって、韓国と長崎がますます近い関係となってきたことを実感しています。今年度は、もし予算と時間が許せば、一昨年のように韓国を訪問して、被爆者の方々や医療従事者の方々と交流し、韓国における被爆者の医療が少しでも進展するよう努力したいと考えています。

Reports レポート

在外被爆者渡日治療事業



長崎県が、国及び広島県と共同で実施している在南米被爆者巡回健康診断や、広島県医師会が行っている、在北米被爆者巡回健康診断を受診された被爆者を対象に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)では毎年、在外被爆者渡日治療を実施しています。今年度も、日本赤十字社長崎原爆病院において、平成12年3月14日より、アメリカ合衆国在住の被爆者6名の渡日治療を行いました。

今回検査治療を受けられたのは、深堀フジエさん、シズコ・ウエストさん、アン・フミコ・ホワイトさん、ミズホ・スティーブンスさん、ミユキ・ブロードウォーターさん、田中五百子さんの6名で、いずれも女性です。それぞれに、体調には不安を抱かれており、血圧、甲状腺、肝臓、心臓などの病気の検査・加療を目的としての来崎ではありますが、故里へのなつかしい思いと同時に、当時の原爆被爆の状況も思い出され、複雑な心境が察せられました。特に、深堀フジエさんは、11才で長崎で被爆された後、渡米し、以後連絡が途絶えていたため、感慨ひとしおといった様子でした。

平成11年5月の在北米被爆者健診を受診された事で長崎市と連絡が取れ、今回43年ぶりに帰国、来崎され、被爆者健康手帳の交付がなされました。約半世紀に及ぶ空白後の肉親との対面では、感無量を述べられていましたが、まだ戦争の傷あとがここにある思いです。まだみなさん、検査治療の半ばですが、少しでも、渡日治療による効果が認められる事を望むと同時に本事業の継続を期待します。

カザフスタン雑感

専門医師等派遣事業

長崎市原爆被爆対策部調査課 黒川 智雄

平成11年8月24日、アシアナ航空131便に乗り、空路韓国経由でカザフスタンへ向かった。日本とカザフスタンの直行空路は、唯一アシアナ航空が週一便運行しているこのルートだけ。しかも、中国の上空を飛行するため、機密保持の関係からか夜間飛行となっている。見知らぬ地への期待と不安の中、カザフスタンの前首都であるアルマトイに着いたのが、夜中の1時半だった。入国手続きをすませ、夜明け前の市街地を抜けて、宿舎のOTRARホテルへ到着。ホテルの窓からは遠くに雪を抱いた峰々が連なっている。朝の凛とした空気と多くの緑と遠景の雪山を眺めながら、カザフスタンの自然の素晴らしさにしばし疲れを癒される。



翌日は、ナシム研修生のフォローアップ事業という所期の目的のため、以前研修で来崎されたアブラエフ医師にお会いし、いろいろとお話をお伺いした。また、国立がんセンターを訪問し、第2回永井隆平和記念・長崎賞を受賞されたバルムハノフ医師とお会いしたが、カザフスタンでの産業育成には基幹となる電力の確保が急務であることを話されていた。

今回の訪問で、セミパラチンスク医科大学と長崎大学医学部間の遠隔医療診断システムの開通式という劇的な瞬間に臨み、核実験場に近いドロン村にて長崎大学原研施設の山下教授をはじめ、多くの先生方の診察にも立ち会う時を得た。ドロン村の診療所やポリショイウラジミーロスカ村の病院では、お粗末な医療機械しかなく、被曝による甲状腺がんなどの診断治療は困難を極めている。医療支援の最前線を訪れて、遠隔医療診断システムが定着し活用されるためには、ひとえに現地の医師の認識と育成にかかっているのではないかと思われた。今回設置された遠隔医療診断システムが定着し、大いに活用されることを祈りたい。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 NASHIM なしむ 第6号 SPRING 2000 発行◎平成12年3月30日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel. 095-823-4278 Fax.095-820-3037

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

（長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。）



遠隔医療支援システム確立は、長崎からセミパラチンクスへの具体的支援の第一歩

在日カザフスタン共和国大使館　一等書記官
イエルラン バウダルベク・コジヤタエフさん

悲しいことに、日本と私の国カザフスタンは、「ヒバク」という共通の原爆被災問題を抱えています。

私は、日本語を学び在日カザフスタン大使館に勤務していますが、そこで多くの日本人が医療を通じて、カザフスタンのヒバクシャのために尽力している姿を見てきました。すでにNASHIMは、医師の派遣、現地専門家の招聘・研修を通じてヒバクシャ医療支援を幅広く展開し、また1960年初頭のカザフ科学アカデミー調査隊による「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」報告書を邦訳し、セミパラチンスク地域の放射能汚染実態をいち早く日本に紹介しています。昨年8月の長崎大学医学部ーセミパラチンスク医科大学附属病院間の遠隔医療支援システム確立は、ヒバク地長崎からセミパラチンクスへの具体的支援の第一歩であり、開通式に立ち会った者の一人として、携わった多くの関係者の方々に深くお礼申し上げたいと思います。このシステムの確立は、これまでのNASHIMの継続的なセミパラチンスク支援が実を結んだ、一つの努力の「結晶」ではないかと思います。同時にセミパラチンスク写真展を長崎で、広島・長崎原爆展を現地で開催して頂きました。今後は具体的なセミパラチンスクヒバクシャ医療協力がJICAレベルで予定されています。このプロジェクトでもNASHIMが現地のヒバクシャに密着した支援活動を続け、両国の悲しい歴史を克服し、真に平和な国際協調社会構築に寄与されんことを期待しています。

Information

NASHIMのホームページが新しくなりました。

NASHIMの活動状況のほかに、永井隆平和記念・長崎賞についても見ることができます。さらに、英語版も完成し、海外の医師・専門家がインターネットで研修の申し込みができるようになりました。

新しいホームページのアドレスは、

http://village.infoweb.ne.jp/~nashim/jp/index.htm

また原研国際のホームページでは放射能Q&Aを掲載していますので是非一度ご覧ください。

原研国際ホームページ

http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/renew/information/interna_heal_j/index.html

編集後記

「なしむ」第6号では、永井隆博士の特集を組みました。「原子爆弾救護報告」の英訳版は、被爆直後の悲惨な状況と自らも重傷を負いながら被災者の救護にあたった永井博士の献身的な姿を諸外国の人々に知ってもらう貴重な1冊になるでしょう。また、「永井 隆」平和記念・長崎賞の授与を通じ、博士の崇高な平和希求の精神がオランダ国でも受け継がれていくことを期待しています。

NASHIMへの期待は、国の内外を問わず大きくなっています。これからも世界のヒバクシャのために貢献していきたいと考えます。ご支援をよろしくお願いします。

News

外務省補助事業

電子図書作成支援と専門家交流



NASHIMでは平成9年度から外務省との共同事業でチェルノブイリへの医療協力を継続し、すでに現地でのロシア語医学教科書作り支援や、携帯用超音波診断装置の寄贈を行ってきました。本年度は、ベラルーシ共和国ミンスク医科大学の医学・医療情報部門を支援し、電子図書の立ち上げに協力しました。ハード面での機材供与に加え、専門家の派遣と受け入れは厳しい冬季に行われましたが、順調にその成果を挙げました。現地での困難な社会経済状況では、チェルノブイリ周辺における情報インフラ整備が最重要課題です。特に医学教育、医師再教育、新技術や最新の知識への確実なアクセス方法の確立は、この国の将来だけではなく、患者への適切、迅速な医療支援の根幹をなすものです。そこで、従来からの遠隔医療診断支援事業に加え、現在計画中のWHO-ベラルーシ・テレメデイスン・プロジェクトにリンクする形で、インターネット上で見れる医学事典の編纂や教材の作成をソフト面からも支援しました。ロシア語圏内すべての医師や医学生、医療関係従事者が機会均等に学べるハードとソフトの支援を目指しています。この事業には長崎大学医学部とNTT西日本から有形無形の多大な貢献をして頂いています。なお電子図書教材の一部は本年度の医学部原研国際客員教授ウラジミール・パーシン先生のご尽力で、カラーアトラスの教科書としても限定部数の出版が可能となりました。外務省補助事業が多面的なチェルノブイリ支援となっていることを追記させて頂きます。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

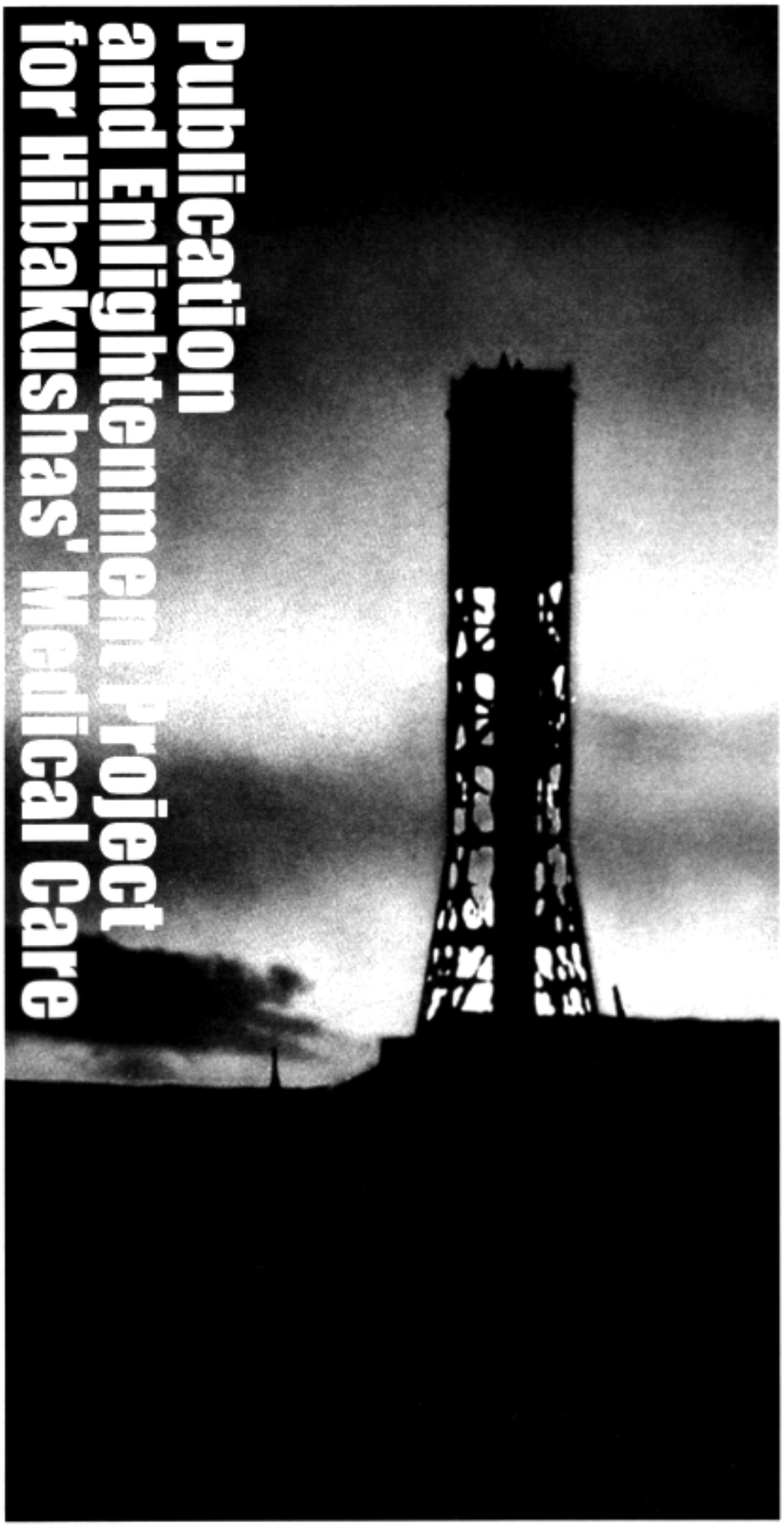
ヒバクシャ医療国際協力通信

第7号

SUMMER

2000

発行◎平成12年7月31日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel. 095-823-4278
Fax. 095-820-3037



PUBLICATION AND ENLIGHTENMENT PROJECT FOR HIBAKUSHAS' MEDICAL CARE

NASHIM普及啓発事業

INFORMATION NASHIM講演会

DOCTOR'S REPORT
東海村臨界事故における被曝医療救護班体験記

動き出したセミパラチンスクへのヒバクシャ医療協力

放射能Q&A
長崎大学原研国際ホームページに送られた質問より

REPORT
第41回 原子爆弾後障害研究会

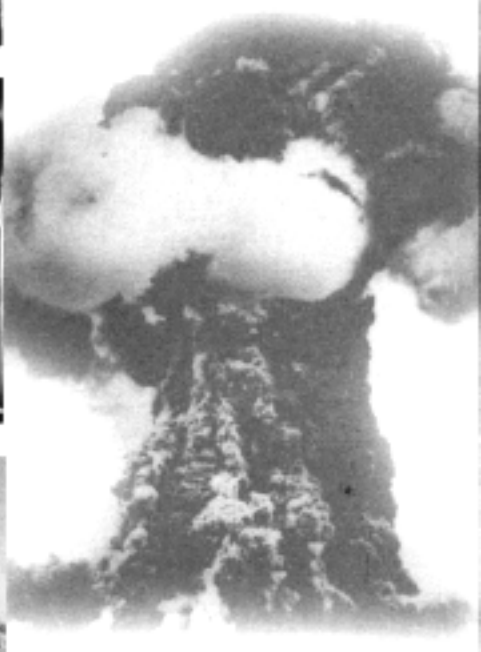












NASHIM普及啓発事業

NASHIMでは放射線ヒバクシャ医療に関する国際協力推進の意義と必要性を啓発するため、講演会の開催や各種のPR活動および情報提供などをおこなっています。



NASHIMでは、平成7年度に被爆50周年記念事業として「医療と健康」をテーマとした講演会と「ヒバクシャ医療と医科学～長崎からの提言～」と題してシンポジウムを開催しました。このシンポジウムの内容は英語版で出版されています。また、平成9年度にも、秋田ヘラルーシ友好協会との共同で「チェルノブイリ支援を考える」のテーマのもとに秋田市で講演会を開催しました。そのほか、当協力会の事業を紹介するパネルを長崎大学医学部原研公開セミナーや長崎原爆写真展示会場などの諸会場を活用して毎年展示を行い、NASHIMのPRに努めています。

また、平成9年春には、写真家山端庸介氏の長崎原爆写真展の開催、平成11年夏には2カ月に渡り原爆資料館にて「セミパラチンスク写真展～ソ連の核実験場・被曝の大地～」を開催しました。これは旧ソ連邦の核実験場として500回にも及ぶ核実験が繰り返されたカザフスタン共和国・セミパラチンスクの被ばくの実相を伝えるもので、大きな反響を呼びました。



この他にNASHIM事業のPRとして、英文・和文でのパンフレットを作成し、国内外で活用すると同時に、インターネットホームページも英語・日本語で開設しています。NASHIM発足当初から平成10年までの活動を綴った「なしむ7か年の歩み」も作成していますので、ご希望の方がいらっしゃいましたら、NASHIM事務局までご連絡下さい。この機関誌「なしむ」も毎年2回発刊し、今回で第7号を数えます。毎号特集を組み、多くの方々にご協力をいただきながら活動を報告してきました。ご意見等ございましたら、事務局までお寄せ下さい。

今年の普及啓発事業としては、下記の日程で講演会を開催します。「放射線被ばく」についてわかりやすく説明し、みんなで考える会にしたいと思っています。多くの方の参加をお待ちしています。

NASHIM講演会



NASHIMではこの夏、講演会を開催します。
昨年9月に起こった東海村臨界事故で、実際に3名の被曝した方の治療に携わられた先生の講演のほかに、身近な言葉でありながら以外と知らない「放射線」について、放射線の専門家がわかりやすく説明します。私たちの身の回りにも存在する「放射線」を、正しく理解し、正しく怖がってください。

「みんなで考えよう放射線被ばく ～被爆地長崎から～」

☆プロローグ 「原爆放射線について」
講師 関根一郎 （長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設長）

☆特別講演 「東海村でなにが起こったか～臨界事故に学ぶ～」
講師 明石真言 （放射線医学総合研究所放射線障害医療部第一研究室長）

☆対 談 「放射線被ばくのはなし」
講師 奥村 寛 （長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設教授）
山下俊一 （長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設教授）

■とき：平成12年8月6日（日） 10:00～12:00
■ところ：長崎原爆資料館ホール

入場無料

CLOSED

東海村臨界事故における被曝医療救護班体験記

昨年9月30日に起きた東海村での臨界事故に際し、長崎県からの被曝医療救護班派遣の要請により日赤長崎原爆病院においても5人編成（医師1名、婦長1名、看護婦1名、放射線技師1名及び事務1名）の医療救護班を結成し、県内の他の医療機関からの派遣4チームと共に早速翌日には水戸市へ向かいました。事故現場で3人の重症被曝患者がでたこと、10キロメートル以内の住民に対する屋内退避勧告が出されたことは報道で知っていましたが、その他に関しては時間的な余裕もなく、充分に状況を把握できぬまま現地へと赴きました。5班はそれぞれ割り振られた検診所へと赴きました。私どもの班は診断除染スタッフや自衛隊の除染車が待機する中、約2000名の周辺住民の検診（放射性物質の汚染検査と問診による汚染者の篩い分け）を行い、翌日は東海村内の石神コミュニティーセンターでの検診に参加しました。前日の夕方には350メートル内の地区の避難要請が解除となっており、当日は多くの住民が受診しました。ここでは更に詳しい体表面放射能線量測定の他、全員に採血、検尿及び問診がなされました。後日、国の関係機関の報告では地域住民の中にも健康には影響のない程度の被曝をされた方々がいたことが判明しました。

今回の臨界事故では違法な裏マニュアルでのずさんな作業が引き起こした、国内で初めての臨界事故とされ、さらに関係監督官庁の監督・指導の甘さも明らかになりました。最善の治療と闘病にも拘わらず、最終的には2名の従業員が亡くなられ、あらためて極めて深刻な放射能事故となりました。



動き出したセミパラチンスクへのヒバクシャ医療協力



旧ソ連時代、カザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場では、1949年以降、地上、地下を合わせて500回近い核実験が行われています。すでにNASHIMでは1992年以降、チェルノブイリ周辺3ヶ国（ベラルーシ、ロシア、ウクライナ）から毎年夏40日間の研修生受け入れを行ってきました。1995年の原爆50周年を期して、世界の被ばく地からの研修生招聘事業を拡大し、翌年からは毎年1名をカザフスタン共和国から招聘しています。これら交流の中で、特に長崎大学医学部の主導の中、セミパラチンスク被ばく者医療協力の具体的な準備が行われてきました。1997年2月には、セミパラチンスク医科大学のライソフ学長が長崎を訪問し、翌年3月に両校は学術交流協定書に調印し姉妹校関係を確立しています。この間、NASHIMでは中部カザフスタンの環境と健康問題を邦訳出版し、幅広くセミパラチンスクの核実験被害の一般啓蒙を行いました。

この報告書を1950年代後半にまとめられた当時のカザフスタン科学アカデミーの調査団副団長で、現在もNGOの代表としてセミパラチンスクの被ばく者支援で活躍されているサイム・バルムハノフ博士は、第2回永井隆・平和記念長崎賞を受賞されています。また1999年夏には約2ヶ月にわたり長崎市原爆資料館でのセミパラチンスク写真展示会を行い、広く現地の被ばく者状況の紹介に努めてきました。このような長崎からの取り組みに対して、日本政府も本格的な平和外交さらにシルクロード外交の一環として、昨年9月国連との共同でセミパラチンスク核実験被ばく者への幅広い支援国会議を主催し、大きな成果を挙げました。唯一の被爆国である非核先進国の責務として、世界の平和外交に貢献する為に、外務省を中心とする日本政府は当時の高村外務大臣、武見政務次官の主導で以下の項目での積極的なセミパラチンスク支援に向けた具体策を提言しました。それはまず第一に、被ばく者への具体的な医療支援です。これは長崎、広島での長年蓄積されてきた被ばく者医療面でのノウハウの技術移転で、長崎大学や広島大学を中心に、JICA（国際協力事業団）の技術協力の枠組みで本年6月末から準備が始まっています。これに関連して無償資金供与による医療機材の現地導入も、来年4月以降に予定されています。次いで現在では掌握困難な長期にわたる被ばく状況や、被ばく者の実態を明らかにする為に、患者登録や検診体制整備への協力が計画されています。さらにNASHIMへの具体的な協力要請としては、被ばく者行政のノウハウの紹介や技術移転で、これは具体的な行政レベルでの研修生の受け入れなどが予定されていますが、いずれもNASHIMで従来から行ってきた国際ヒバクシャ医療協力の活動内容と合致し、今まで以上の取り組みが期待されています。これら以外にも国連を通じた女性の地位向上のための貢献策なども日本の資金供与を中心に展開される予定です。すでにカザフスタン共和国への日本政府の支援は、イルティシュ川に架かる平和大橋の建設事業や、新首都アスタナ建設計画、小児白血病センター建造支援など、多くの案件が行われています。東にセミパラチンスク核実験被害、西にアラル海塩害問題など、広大な国土に諸種の環境汚染問題を内包するカザフスタンでは、旧ソ連からの独立後カスピ海での石油、天然ガス資源開発を中心に国の経済建て直しが計られています。しかし、セミパラチンスク核実験場周辺住民の健康問題や経済低迷問題は一国の能力を越えた大きな負の遺産として残されています。NASHIMでは今までのチェルノブイリを中心とした医療協力に加え、さらにセミパラチンスクへの具体的な支援を国や関係各機関と協力して実践していく予定です。特にヒバクシャ医療に関わる人材育成に対しては、この地でも積極的に参画していく予定です。







長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 NASHIM ナシム 第7号 SUMMER 2000 発行◎平成12年7月31日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県原爆被爆者対策課内）Tel.095-823-4278 Fax.095-820-3037

放射能Q&A

長崎大学原研国際のホームページ
http://www-sdc.med.nagasaki-u.ac.jp/inter/coverpage.htmlに、
放射能Q&Aというコーナーを設けています。
このコーナーを御覧になられた全国の方々から週に2～3通の割合で
お便りや御質問があります。今回は、その中の一つを紹介します。

質　問

Question

昨年の茨城での事故以来、放射線・放射能に関して少し関心を持つようになりました。実際に放射線をなんらかの事情で浴びてしまった場合、まず、どのような病院へ行ったらよろしいでしょうか。また、どのような検査をしてもらえばいいのでしょうか。各県にそのような事態になったときの救急病院の一覧というものが実際あるのでしょうか。（30代主婦）

解　答

Answer

放射線の急性障害や被ばく後の健康影響について関心を持っている医療施設は、一般病院では非常に少ないのが現状です。

全国的に見た場合、原発設置県以外の2次病院ではわからない場合があると思いますが、その場合でもしかるべき施設に問い合わせて対処していただけると思います。（長崎では長崎大学医学部附属病院）

もし、急がない場合や近くにない場合は、千葉県の稲毛にある放射線医学総合研究所（放医研）に相談することもできます。

被曝時の検査は、一般的なのがリンパ球数や染色体とされています。しかしある程度以上の被曝量でないと（リンパ球は500mSv、染色体も定量的には100mSvくらい）変化はでない、というのが一般的です。もし、被ばくをしてしまった可能性があれば、状況等を正確に思い出し、放医研に連絡すれば、線量測定、医療の領域の人も含めた対応ができると思います。

Schedule

7月17日（月）～8月15日（火）
チェルノブイリ・カザフスタン研修生受入事業
（笹川保健記念協力財団の窓口事業、
日本ベラルーシ友好協会との共同事業を併催）

8月6日（日）10:00～12:00
NASHIM講演会
と　こ　ろ／長崎原爆資料館ホール
（共催：原研公開セミナー）
お問い合わせ／NASHIM事務局
（県原爆被爆者対策課内）
TEL.095-823-4278
FAX.095-820-3037

8月22日（火）～9月5日（火）
専門医師等派遣事業
（カザフスタン共和国セミパラチンスク）

編集後記

また、暑い夏が巡ってきました。今年は長崎原爆被爆から55周年。行政レベルでは、長崎市を中心に被爆地域拡大是正のための取り組みが活発に行われています。

NASHIMでは「みんなで考えよう放射線被ばく」をテーマに、今年も講演会を開催します。昨年9月、国内初の臨界事故が発生し、尊い命が失われました。犠牲になられた2名の方のご冥福をお祈りするとともに、この教訓を生かし長崎から何が出来るか考えていきたいと思います。

長崎が有する被爆者治療の実績と放射線障害に関する調査研究の成果を生かし、ヒバクシャ医療を通じて世界へ貢献する道をさらに目指していきたいと考えています。

REPORT

第41回 原子爆弾後障害研究会

平成12年6月4日、長崎原爆資料館にて第41回原子爆弾後障害研究会が開催されました。今年の研究会は、一般演題47題と特別講演およびシンポジウムという構成でした。特別講演は重松逸造・放射線影響研究所名誉顧問によるもので、「原爆後障害研究―その歩みと二十一世紀への教訓」と題してなされました。

被爆者研究は1950年の被爆者調査から始まり、12万人の集団を50年間追跡調査し、被曝線量別のがん死亡リスク、がん発生リスクが計算されました。この結果は放射線防護基準のデータとして利用されています。この他に遺伝的影響調査やがん発生のメカニズムを調べるための分子生物学的アプローチなど多岐にわたって研究がなされてきました。重松先生は21世紀のヒバクシャ研究は「温故知新」ではなく『温故創新』という言葉が望ましいと提唱されました。つまり、古きをたずねて新しきを知るのではなく新しきを創りあげていくべきであるということです。

シンポジウムは昨年9月30日におきた臨界事故に関するもので「東海村臨界事故の放射線被曝に学ぶ」というテーマで6名のシンポジストによる講演が行われました。被曝線量の推定、高線量被ばく患者の治療、被曝住民の健康管理についての調査結果が報告されました。



一般演題ではWHO（世界保健機関）や、外務省、NASHIM、長崎大学が医療支援を行っているセミパラチンスクやチェルノブイリに関する報告もありました。さらに、長崎大学の医学部生によって、チェルノブイリ周辺における尿中ヨード量の検討が報告され、海外医療支援における若手の成長が実感されました。今後の原爆被爆者研究が世界のヒバクシャ医療に貢献できるよう、『温故創新』を胸に刻みつつ閉会となりました。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

第8号

SPRING

2001

発行◎平成13年3月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
（長崎県原爆被爆者対策課内）
Tel. 095-823-4278
Fax. 095-820-3037

招聘事業

NASHIM's Works
平成12年度専門家派遣事業

警鐘「残された負の遺産」
チェルノブイリ原発の完全停止 2000年12月15日

Doctor's Works
在南米被爆者対策 在南米被爆者巡回医師団派遣事業 日赤長崎原爆病院 副院長 松尾圭

AWARD
保健文化賞受賞！

Letter Box
［NASHIMは20世紀最大の負の遺産と研究成果を国境を越えて
全人類の幸せに貢献活動する世界でも希有な組織］

News
外務省補助事業 **ヨード不足の地域に測定器を供与**

REPORT
WHO本部専門家の特別講演



NASHIM 招聘事業

NASHIMでは、毎夏チェルノブイリ及びセミパラチンスクといった旧ソ連を中心とした放射線被ばく地域や韓国から、実際にヒバクシャ医療に従事している医師や専門家を長崎へ招聘し、研修の機会を与えています。

この事業は長崎原爆被災後、長年蓄積されてきた被爆者医療のノウハウや、放射線医学研究の知識や実際を研修してもらうためのものです。これまで招聘してきた医師・専門家の国別内訳は別表に示していますが、旧ソ連邦を中心とした多くの医師が、毎年夏の暑いさなか、長崎大学医学部や同附属病院、あるいは日赤長崎原爆病院などで1ヶ月以上研修を受けています。この間多くの市民や関係機関にお世話になっていますので、まさに長崎ならではの官公民プロジェクトとなっています。

これまで研修した医師の多くが、帰国後その知識や技術を実際のヒバクシャ医療現場に役立てています。日本人専門家によるフォローアップ調査により、その成果や問題点については適切な評価が行われています。

さらにNASHIMは、韓国人医師・専門家の研修も同様に行ってきました。これは、長崎・広島で被爆し、その後祖国に帰国された韓国人被爆者に対する医療レベルの向上を目的としています。主にソウル赤十字病院の医師・看護婦が来日し、長崎で研修を行っています。また、最近では被爆者のために設置されたハプチョンの福祉施設からの医師・看護婦も受け入れ、より現場に密着した医療支援を行っています。この韓国人医師・専門家研修事業についても、長崎の専門家が派遣され定期的にフォローアップ調査を行っています。



今後もNASHIMは、長崎原爆を原点に海外ヒバクシャに還元できる医師・専門家の養成・レベルアップを目的として、この事業を行っていく予定です。



■医師等の受入・派遣の国別状況等

区分／年度		5	6	7	8	9	10	11	12	計
医師等受入研修		40	43	32	24	18	15	18	18	208
独自事業		5	5	6	7	5	6	7	9	50
関連 チェルノブイリ	ロシア連邦	1	1	1	1	1	1	2	1	9
	ベラルーシ共和国	2	2	2	2	1	1	1	2	13
	ウクライナ	2	2	2	2	1	1		1	11
	小計	(5)	(5)	(5)	(5)	(3)	(3)	(3)	(4)	(33)
カザフスタン共和国					1	1	1	1	1	5
アメリカ合衆国								1		1
韓国				1	1	1	2	2	指導2 研修2	11
共同事業				1	1	3	2	3	3	13
放射線影響研究所				1						1
ベラルーシ友好協会					1	3	2	3	3	12
調整事業		35	38	25	16	9	6	7	5	141
笹川財団		10	9		11	3	3	3	1	40
外務省		21	17	17		1		2		58
日本赤十字社		3	3	8	3	3	3			23
WHO共同研究		1	6							7
HICARE・広島大			3		2	2		1		8
放射線影響研究所								1		1
JICA・セミパラ									4	4
外務省補助事業						1	1	1	1	4
医師等派遣				1	5	3	7	4	8	28
ベラルーシ共和国						1				1
ウクライナ				1	5					6
カザフスタン共和国						1	2	2	2	7
韓国							3		4	7
外務省補助事業						1	2	2	2	7

NASHIM's Works ―― 平成12年度専門家派遣事業

昨年の8月下旬から9月上旬にかけて、NASHIM専門家派遣事業の枠内で、医療の専門家として齋藤寛長崎大学医学部長、行政の専門家として松本清助長崎県原爆対策課長の2名をカザフスタン共和国のセミパラチンスクへ2週間派遣しました。

1999年9月のセミパラチンスク支援東京国際会議を受けて、長崎大学医学部の山下俊一教授がJICAの専門家として3ヶ月現地に滞在している最中でもあり、齋藤医学部長らは訪問期間中に、山下俊一教授らが中心となって進めているJICAの医療改善計画プロジェクトの視察、協力も行いました。また一行は、長崎大学と姉妹校の関係にある、セミパラチンスク医科大学を訪問し交流を深めました。第2回セミパラチンスク長崎医学賞の授与式の後、医学生を前にした会場では齋藤医学部長が、NASHIM関係者では4人目となる、セミパラチンスク医学アカデミーの名誉博士号を受賞されました。

一方同時期に、医学部の朝長万左男教授、近藤宇史教授等が、在韓被爆者の医療支援を目的として韓国を訪問しました。朝長教授らは、現地の赤十字病院を訪問して、これまで長崎で研修を行った医師たちのフォローアップ調査を行うと同時に、原爆被爆者が数多く暮らしているハプチョンの福祉施設を訪問し、入所者や施設従事者の悩みや要望を聞きました。

いずれの派遣事業も、これまでの招聘事業のフォローアップと同時に、今後の活動の方向性を検証する大切な事業となっています。



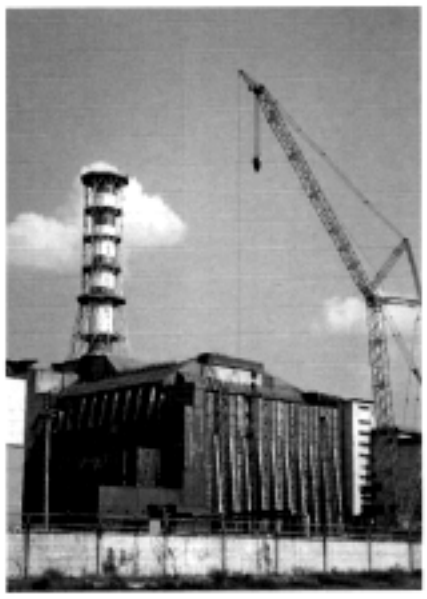
残された負の遺産 警鐘

チェルノブイリ原発の完全停止

——2000年12月15日

1986年4月26日未明、旧ソ連邦ウクライナ共和国の穀倉地帯、キエフ州チェルノブイリという小さな町で、世界を震撼させる人類史上最悪の原発事故が起きました。事故から15年を迎えようとしていますが、20世紀最後の冬に、チェルノブイリ原子力発電所の火が消えました。多くの人は今まで稼動していたことに少なからず驚き、同時に酷寒の冬を電力事情の悪いウクライナが、いかに生命線を確保するのかと大変心配しています。

広島、長崎の原子爆弾被災と異なり、チェルノブイリでは多くの周辺住民は放射性降下物の影響を受け、今なお放射能で汚染された大地に住み、汚染した食べ物を口にしています。事故直後の混乱や、詳細な正しい情報の欠如に加え、適切な対応が困難な状況から、その後子供達の甲状腺がんの激増という、これまた未曾有の惨事を引き起こしました。世界のマスコミはこぞってチェルノブイリの悲劇を取り上げ、チェルノブイリの子供たちを衆目の的にしています。当時の東西冷戦構造の中では、核に関する機密事項があまりにも膨大であり、周辺住民に対する健康への配慮や補償問題はなおざりにされています。ゴルバチョフ書記長（当時）が推進していたペレストロイカ（経済改革）に加え、グラスノチ（情報公開）への路線転換への追い風となったこの原発事故は、20世紀最大の懸案事項だった「核開発競争の狂気」に少なからず歯止めをかけ、その後の東西対立の雪解けをもたらしました。しかし、放射能汚染の後遺症で苦しむ多くの海外ヒバクシャの存在もまた明らかにしてきました。例えば、原発事故処理に動員された多くの軍人の中には、核戦争を想定して訓練されたカザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場から派遣された若者も含まれているのです。このような複雑な世界情勢の中にあり、原爆被爆者の思いを世界に伝え、医療に特化した国際協力の推進役を担うべく発足したのがNASHIMです。長崎大学医学部の専門家を中核に、長崎県、長崎市が関連機関と共同で、足並みを揃えてヒバクシャ医療を実践するというまさに手作り、独創的な長崎からの官公民一体となった国際貢献を目指しています。21世紀を向かえ、歴史に名を刻む「広島・長崎原爆」と「チェルノブイリ原発事故」は、「人間の弱さと愚かさ」を象徴する科学万能・安全神話に対する人類への警鐘でもあります。これら「負の遺産」を清算するのではなく、原爆被爆の原点に立ち返り、永井隆博士の精神に基づく「反核平和・国際協力」という実行力を継承することがNASHIMの存在として今後も大切であると言えます。



Doctor's Works

在南米被爆者の診療を実施

——在南米被爆者巡回医師団派遣事業

日赤長崎原爆病院副医院長 松尾 霍

この事業は、南米に移住されている被爆者対策として、外務省、厚生省、長崎県、広島県の四者共同で行っているもので、南米5カ国（ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチン、ペルー）に2年に1度医師団を派遣し、現地で被爆者の健康診断、相談を実施しています。平成12年度も、長崎、広島、厚生省から3名の医師と広島から2名の事務官という構成で、10月26日から11月9日までの日程で行われました。

現在登録されている被爆者は180名で、その内80名が受診されました。ただ、広大な土地がらで交通の便や治安が悪く、高齢である事により一人で外出が出来ないこと、情報システムの遅れで音信がとれない事により受診出来ない方々の健康状態が気がかりでした。事業内容は、前もって現地医療機関において検査されたデータを基にしての診療、また、被爆者行政についても相談を行いました。疾病については生活習慣病が主でしたが、平均年齢が69才という高齢化のため老後の心配、被爆者であるがゆえの後遺症への不安が強く、帰国しての治療を希望されていました。行政相談では、現地の経済事情や医療体制の違いがあるため、在外被爆者へも援護法の適用を求める声が多くあり、切実な感がありました。今回の事業を通して思った事は、南米に移住され、これまで懸命に努力して生きてこられたみなさんの日本人としての誇りと自信、またその中で献身的に被爆者のために活動されている多くの人々を目の当たりに見ることが出来、非常な感動を覚えた事です。



最後に、心あたたまる歓迎とご協力をいただいた県人会や被爆者協会の皆様、在外公館に対して心から御礼申しあげます。

AWARD

NASHIMが保健文化賞受賞！

昨年8月に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会が第52回保健文化賞を受賞しました。

この賞は、保健衛生の向上に寄与した団体または個人に対して送られる大変名誉な賞であり、受賞者は昭和24年の第一回からこれまで764件にのぼっています。本年度は75件の応募の中から団体10件、個人4名が受賞しました。

10月には、井石会長、池田副会長、松本事務局長が上京、ホテルオークラにて厚生大臣よりの表彰状と主催者の第一生命保険相互会社よりの感謝状をいただき、さらに、井石会長は、皇居にて天皇皇后両陛下へ拝謁の栄誉も賜りました。

帰崎後11月には受賞記念祝賀会を催し、関係機関の皆様と受賞を喜び合いました。



この受賞は、長崎大学医学部を中心としたヒバクシャ医療に携わっておられる関係機関の、長年にわたる地道なかつ献身的な活動を評価いただいたものであり、大変喜ばしいことですが、同時に、NASHIMへの期待と社会的影響、事業推進の責任も大きくなってきます。今後とも被爆者医療のノウハウを世界の被ばく者救済の為に活用することを目的に、より、時代にあった国際貢献に寄与する事業の推進を目指していきたいと思います。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
NASHIM なしむ 第8号 SPRING 2001 発行◎平成13年3月1日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 E-mail fvgt6060@mb.infoweb.ne.jp http://village.infoweb.ne.jp/~nashim/ Tel.095-823-4278 Fax.095-820-3037

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

（長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介いたします。）



NASHIMは20世紀最大の負の遺産と研究成果を国境を越えて全人類の幸せに貢献活動する世界でも希有な組織

長崎～ロシア／ベラルーシ／ウクライナ
友好市民協会
代表 **松藤龍彦**さん

平凡無知な一長崎市民が心ならずもチェルノブイリに関わり、気付いた時には人生で最大の感動と感銘、知識を与えられて満10年が経過した。最初チェルノブイリの現地で見たもの全てが私の想像を越えていた。咲きほこるリンゴの花、無限に咲く菜の花やタンポポの草原、ヒバリがさえずりコウノトリが舞い、原発の対岸プリピヤテ川の岸辺にはスズランの花が群生し、人類史上最大の事故が信じられない幾年かが過ぎた。一方、医療現場では薬品棚に薬は皆無、薬も注射器も自分で買い求めるのが常識と知ってカルチャーショックで幾度も倒れた。各国の支援団体活動の実態と素顔を見て、支援のあり方、維持管理の困難性、自立への方策等多くの教訓を学んだ10年でした。

山下俊一教授の言葉、"長崎、チェルノブイリ、セミパラチンスクの尊い犠牲者が残してくれた生命のデータを私物化することなく人類共有の財産として調査、研究に生かし、成果を全人類へ還元する。"その心を支えているのがNASHIMだと思います。日本の最西端の地方都市が、世界の人々から頼られ、世界に誇れる希有な存在と感じています。

医学教科書Thyroid : Fundamental AspectはNASHIMの心と成果が玉成されたシンボルだと思います。NASHIMが招聘した研修医達が、休日もなく毎夜徹夜に近い献身的なラボーテ（働き）で完成されたことも、現場で手伝って知っています。市民の私には衝撃的な感動でした。

NASHIMにより公刊されたイリーンさんの「チェルノブイリ-虚偽と真実」は、実験できない巨大事故の素顔の一面を伝えた貴重な証言です。私にはチェルノブイリについて一言では何も言えなくなりました。

"放射能Q&A"も理解に大変役立ちました。世界と市民のNASHIMとして益々御発展されることを切望し、お便りとします。

REPORT WHO本部専門家の特別講演

去る平成12年12月18日、長崎大学医学部附属病院においてWHO（世界保健機関）本部（スイス・ジュネーブ）のスシュケビッチ専門官による特別講演が行われました。一昨年の東海村事故以来関心が高まっている、緊急被曝時医療の際の国際医療ネットワークシステムに関する話が行われ、国際機関が緊急被曝事故の際に、どのような活動を行っているかについての具体的な説明がありました。現在、WHOを中心としてREMPANという国際的なネットワークが構築されていますが、これは不測の事故に備えて、緊急時にどのような医療を行えばよいのかについて、世界中の専門家の意見を反映するシステムです。講演では、このREMPANの活動状況についての説明が行われました。NASHIMの活動にも合致し、今後の国際機関との連携が模索されています。またこの日の講演は、大学間での衛星通信を用いて全国の大学病院に生中継され、大きな関心が寄せられました。



Information

第4回「永井隆」平和記念・長崎賞の募集がもうすぐ始まります。

編集後記

20世紀から21世紀へのバトンタッチがなされました。新しい世紀は、いわば情報の世紀でもあり、益々地球が小さくなります。NASHIMにも、「長崎から世界へのヒバクシャ医療情報・人材発信基地」という大きな役割が期待されています。長崎被爆という悲しい体験を原点に、21世紀も国際社会での共存共栄を目指し、正しい情報収集と発信、適切な人材育成をNASHIMの原点としたいと思います。

News

外務省補助事業

ヨード不足の地域に測定器を供与



毎年支援を受けている外務省からの補助事業では、今年はロシア連邦へ尿中のヨードを測定するための機材供与が行われました。甲状腺から分泌されるホルモンはヨードから合成されますが、世界の多くの地域では、食習慣の違いや地域土壌問題等からヨードが欠乏しています（ヨードは、昆布のような海産物に豊富に含まれますので、そのような食事をとる習慣のない地域では、ヨード不足が問題となります）。ヨード欠乏は、チェルノブイリの事故のように放射性のヨードが大気中に放出された際、大きな問題を引き起こします。つまり、ヨードを豊富に摂取している地域では、放射性ヨードを被ばくしても甲状腺にそれが蓄積することは少ないのですが、ヨード不足の地域では、この放射性ヨードが甲状腺に多く蓄積してしまいます。チェルノブイリ事故後に小児甲状腺がんが激増したのは、この放射性ヨードが原因ではないかと考えられています。このため、特にヨード欠乏地域に住む人々のヨード（主に尿を用いて測定します）の量を正しく測定することは、ヨード不足の解消予防以外にも放射線被ばく防護という観点からも非常に重要です。

今回NASHIMでは、最近開発された簡便なヨード測定機材を、実際にチェルノブイリ周辺住民の尿中ヨードの測定にあたっているモスクワ内分泌学研究所に供与しました。昨年12月には、専門家2名を現地へ派遣して、その測定法についてのトレーニングを行いました。さらに、モスクワ内分泌学研究所から研修生を一名招聘し、機材の取り扱いの習熟を目的とした研修を行いました。

これによって、これまで時間がかかり煩雑であり、有毒な試薬を用いなくてはならなかったヨード測定が、簡便に、しかも安全に行えるようになりました。今後はより多くの住民のヨード測定が行われ、ヨード不足の予防や被ばく防護に役立つことが期待されています。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



長崎大学医学部キャンパスの原爆犠牲者慰霊碑と海外からの研修生達

『なしむ』第９号

Report　海外研修生受け入れ
Report　「みんなで考えよう放射線被ばく」
People　神谷さだ子さん
Works　原爆被災学術資料センター
　　「長崎原子爆弾の医学的影響」

Vol.9
2001 AUTUMN

発　行／平成13年9月20日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570　長崎市江戸町2-13
（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037

Report

海外研修生受け入れ

平成13年度の研修生受け入れ事業が7月16日から8月12日まで実施されました。各々の専門分野やヒバクシャ医療の現場を学びながら、長崎や日本の今を感じる事のできた研修になりました。



日赤長崎原爆病院での研修中

今年で9回目となる、チェルノブイリ・カザフスタン関連医師等研修が7月16日から8月12日まで、長崎大学医学部を中心に行われました。本年は、ベラルーシ共和国から2名、ロシア連邦、ウクライナ共和国、カザフスタン共和国から各1名の計5名が参加しました。

例年どおり、研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。一般カリキュラムでは、関連の各教室で講義や実習を行ったほか、今回初めてとなる佐賀県の玄海原子力発電所の見学を行いました。研修生は全員、日本はもとより、自国の原子力発電所も訪問したことはないということもあって、日本の原子力発電所のしくみや、事故を起こしたチェルノブイリ原子力発電所との違い、あるいは発電所の安全管理や職員の健康管理システムなどについて、熱心に質問されていました。また、廃熱を利用した欧州風の植物園では楽しく記念撮影をする姿もみられました。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせて、疫学や臨床検査医学といった長崎大学医学部の各専門分野での研修を行いました。

研修の合間には、母国ではなかなかできない海水浴を楽しんだりする一方、8月9日の長崎原爆記念日には平和公園で行われた祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。

研修生はいずれも今後、ヒバクシャ医療やあるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を背負っていかれる方々ばかりです。このような医師・専門家の方々を長崎に招聘し、研修を行うことで、長崎がこれまで培ってきた被爆者医療のノウハウを世界に伝えるのみならず、長崎発国際医療協力のカウンターパートの育成が可能となります。地理的にも、そして文化的にも遠い国々からの招聘には、いろいろな困難がつきものですが、今後もヒバク地のニーズに即した研修生の人選と研修を進めていきたいと考えています。


恵の丘長崎原爆ホーム施設訪問

研修スケジュール

研修期間中、研修生の皆さんは講義・実習・専門カリキュラムなどのスケジュールをこなしながら、原子力発電所視察、平和祈念式典にも参列。忙しい毎日でした。

7/16～7/27(一般カリキュラム)
原爆後障害医療研究施設の各教室や原爆病院での講義・実習

7/30～8/12(専門カリキュラム)
免疫学や臨床検査医学などの各々の専門分野での研修

玄海原子力発電所視察
放射線影響研究所オープンハウス参加
NASHIM講演会参加
平和祈念式典参列(長崎市)
恵の丘長崎原爆ホーム訪問
健康管理センター視察



秋田などからの研修生と、玄海原子力発電所を見学



今年の研修生はこの5人でした。

ガリーナ・タラソワ
ロシア連邦
オブニンスク州立放射線医学研究所
主任技師

ベロニカ・アンティポア
ベラルーシ共和国
ベラルーシ医科大学国際副部長
医師

イゴール・タラシウク
ベラルーシ共和国
ゴメリ州立医科大学
医科学・免疫学研究室長／医師

ナタリア・グドゼンコ
ウクライナ共和国
キエフ放射線医学研究所／上級研究員

サガダット・サガンディコーワ
カザフスタン共和国
セミパラチンスク診断センター
主任医師

研修を終えた彼等が帰国する前に、印象に残った事や感想をたずねました。
「過去の悲惨な出来事から観光地として復興した長崎の街の美しさ」や日本の文化・伝統に触れた感動とともに、長崎大学や原爆病院、放射線影響研究所などでの研修でみた医療システムやデータベース、遠隔医療システムなどに大変興味を持ち、それが帰国後の各々が携わるヒバクシャ医療にとって大変有意義なものだということ、また今後も長崎とのネットワークをもっと強めて行きたいということでした。彼等がヒバクシャ医療の分野で活躍し、長崎での経験を祖国の人々の治療に役立ててくれる事を願います。



県庁に金子長崎県知事を訪問

バートン G. ベネット
放射線影響研究所
新理事長紹介



チェルノブイリ関連事業を通して、NASHIMにも多大な貢献をなされた長瀧重信放射線影響研究所（放影研）理事長が今年6月に退任されました。後任として7月より前国連原子放射線影響科学委員会（UNSCEAR）事務局長のバートン G. ベネット先生が、原爆傷害調査委員会（ABCC）が1975年に放影研に改組されて以来、米国人としては初めて理事長に就任されました。

ベネット理事長は1939年米国ネブラスカ州に生まれ、現在61歳です。オレゴン州立大学を卒業後、ワシントン州立大学で修士号を、さらにニューヨーク州立大学で博士号を取得され、1964年からは環境測定研究所（ニューヨーク）、1979年からは国連環境プログラム（ロンドン）、さらに1988年からはUNSCEAR事務局長（ウィーン）を勤められた物理学、被曝線量評価の専門家です。

現在放影研では寿命調査、成人健康調査を二つの大きな柱として、被爆者の健康に関する追跡調査が行われていますが、今後は被爆当時20歳未満であった若年被爆者の健康調査に重点を置く予定とのこと。さらに、被爆二世も生活習慣病が発生しやすい時期にさしかかってきたため、被爆二世健康影響調査を今年5月より開始し、被爆者、被爆二世の方々の調査研究を更に進め、疾患の発生メカニズム解明にも今後は努力していきたいとのことです。

新理事長から、「長崎大学、広島大学および地元の調査研究機関との連携、共同研究を積極的に進めて、若手研究者を放影研に受け入れて共同研究を行えるような環境を整え、放影研の魅力を広く世界にアピールしていく必要があると考えています。今後は、今まで以上に長崎大学やNASHIMとの協力関係を密にしていきたいと考えておりますので、更なるご支援を宜しくお願い致します。」とのコメントがありました。

Report

みんなで考えよう
『放射線被ばく』

8月4日、長崎原爆資料館ホールにてNASHIMと長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の共催による講演会「みんなで考えよう放射線被ばく」を開催し、日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)事務局長の神谷さだ子さんに「チェルノブイリの子供たちに笑顔を」と題して特別講演をしていただました。

神谷さだ子氏特別講演

日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)は1991年に設立されていますが、92年からその事務局長をされ、献身的な現地活動をされている神谷さだ子氏に、「一粒の子供の涙への大人の責任」、そして女性として、母としてのまなざしを通じて、チェルノブイリ汚染地への医療支援、ならびに文化交流活動の10年間を振り返ってもらいました。

ご講演の隅々にご自身の体験がちりばめられ、まさに原爆被爆者のかたりべに匹敵する迫力と真実味がありました。参加者は一同に感動と深い感銘を受けたようです。たくさんのスライドと思いのこもった、それでいて冷静なお話を50分間たっぷりと聞く事ができました。

JCFでは本年7月までに、58回の訪問団を派遣し、医療専門家による医療知識の伝達と医薬品や医療機器の供与を行っています。特に信州大学医学部との共同事業による、遠隔医療診断技術を用いた小児白血病への末梢幹細胞移植や、化学療法の支援は特筆すべきものがあります。余命いくばくもない子供たちに救いの手をさしのべ、同時に現地の病院への丁寧な支援体制づくりは手作りの味わいを醸し出し、とても暖かいものを感じました。チェルノブイリ周辺に激増した小児甲状腺がんだけではなく、真に支援を必要としている現地の被ばく者たちに何が必要で、何が優先度が高いかを、ご自身39回の現地訪問で熟知されている内容を講演されました。スライドの多くは、基本的に一人一人の患者さんが中心であり、医療の原点を踏襲された国際医療支援活動の真髄でした。

また、日本国内での各種広報活動も紹介されましたが、映画「ナージャの村」の上映展開に努力されています。最近は第2作目の「アレクセイと泉」という映画も近日封切予定とのことです。これからもチェルノブイリをより良く知ってもらい、その上で継続した支援活動の必要性を訴えられ、NGOとしての活動を信州の地から世界へ発信されていかれるそうです。信州JCFと長崎NASHIMとの新たな結びつきが胎動を予感させる幅広い、大変有意義なご講演でした。



講演中の神谷さん

Report

チェルノブイリ原発事故から15年 継続支援必要

世界を震撼させたチェルノブイリ事故(1986年4月26日)は、人類史上最悪の原発事故であり、後世に伝えるべき貴重な教訓をもっています。長崎はこの夏56回目の原爆忌を迎えましたが、被爆後50年以上経っても種々の問題を抱えています。チェルノブイリ周辺の放射能汚染地域には、現在でも400万人近い人が住んでいます。事故から15年、長崎から「顔の見える国際協力」として、NASHIMはすでに現地からの被ばく医療研修生の受け入れ、専門家の現地派遣指導など毎年チェルノブイリの負の遺産の精算に向けた協力をおこなってきました。その実績は世界的に評価されていますが、情報の収集発信基盤は未だ脆弱です。その為NASHIMが実質的な活動面でお世話になってきたのが、チェルノブイリ笹川プロジェクトでした。しかし、本プロジェクト(10年間約50億円)による現地20万人を超す児童・学童検診支援が本年4月で終了しました。NASHIMの海外ヒバクシャ支援活動も招聘人事などこれにリンクすることが多く、今後は長崎からチェルノブイリへの「継続した国際協力の実行性」が問われています。現地では、今なお自立自活の道は険しく、激増した小児甲状腺がんの発症年齢層が青年から大人に移行し、ますます成人がん検診の必要性が高まり、被ばくしたハイリスクグループの追跡調査が重要となっています。現地の被爆国日本への期待は大きなものがあります。

今後は、チェルノブイリでの活動拠点を絞り、従来の交流成果を生かしながら、被ばく医療に還元できる人材の育成を現地とこの長崎で展開していく必要があります。地域から世界の国際ヒバクシャ医療協力を目指す為には、外交政策などとも協調し、NASHIM自身が他の非政府機関NGOなどとも連携をとり、主導的かつ有効な支援活動へと脱皮していくことも重要です。現地のヒバクシャに対して、身体問題だけではなく、精神的な影響と言う面でも長崎からできることを模索していく必要があります。21世紀、これからがNASHIMの本領発揮の時代に入ります。

People

日本チェルノブイリ連帯基金
神谷さだ子さん

今回からスタートする『PEOPLE』では、NASHIMやその事業の中で出会ったヒバクシャ医療に携わる人々をクローズアップします。



神谷さだ子さん
長野県出身
日本チェルノブイリ連帯基金事務局長

大地と生きる人々

第1回は『みんなで考えよう放射線被ばく』の講演会に、講師として来て頂いた神谷さだ子さん。日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)事務局長の神谷さんが、そもそも『チェルノブイリ』と関わったきっかけはロシア語。大学でロシア文学を専攻された神谷さんが、そのロシア語が役に立てばとボランティアとして日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)の活動に参加されたのは92年の事。チェルノブイリ事故後の放射線障害に苦しむベラルーシの子供たちを治療する活動に、通訳兼遊び相手として本当に軽い気持ちで参加されたのだそうです。以来9年間、39回もベラルーシを訪れ、多くの子供たちの治療にも力を尽くして来られました。訪問の旅は決してスムーズではなく、ロシアの大平原で車が立ち往生したり、宿ではバスルームのお湯が出なかったりが日常茶飯事。他にも日本からの支援、講演や出版、映画制作と多忙でご苦労の多い活動なのに、『それまでは普通の専業主婦でしたよ』とおっしゃる神谷さんが9年も続けておられる理由をお尋ねすると、『ロシア文学を専攻していたので、ロシア的なものにひかれる』事と、『日本でなら助かる命が、医療環境の整っていないベラルーシでは絶命していく。こんな医療格差があってはならない』という強い想い、そして『過酷な運命にさらされながらも大地とともに生きるロシアの人々のたくましさ』に感動した事を、静かながらも力強い言葉で語って下さいました。

『医療の専門家ではない』とおっしゃる神谷さんですが、その分旧ソ連邦の人々とたくさん友達になり『美味しい家庭料理もマスターした』そうです。

日本と旧ソ連邦との距離に歯がゆい想いをされ、白血病の子供たちの中には治療の甲斐なく幼い命を失った子もいますから、辛いことも決して少なくないはずなのに『人が好きだから続いているのかも』と笑顔でおっしゃる神谷さん。JCFの活動の中で出会ったたくさんの人々が、神谷さんの原動力となっているようです。

『ベラルーシの人々は理不尽な原発事故によってもたらされた厳しい状況の中、本当にたくましく、そしてプライドをもって生きています。日本でモノに恵まれて暮らしている人達の方が、心は疲れているかも知れませんね。』

これから

文化交流事業としてJCFが現在制作中の映画『アレクセイと泉』が11月には完成。坂本龍一さんが音楽を担当されたという映画です。子供たちや若い人にチェルノブイリや放射線と健康についての知識を広める為、全国の幼稚園や小・中・高校での講演やこうした映画の上映も行っておられ、子供たちの素直な反応がとてもうれしいとの事。『自分たちに何ができるのかを若い人たちが考えてくれることが大事』とおっしゃる神谷さん、お忙しい中長崎まで来て頂いて、ありがとうございました。



講演のあと、研修生達との記念写真

Works

原爆被災学術資料センター
『長崎原子爆弾の医学的影響』

長崎大学医学部キャンパスの一角に、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設が数十年にわたって続けてきた原爆被爆者の治療と原爆の医学的影響の研究の資料が常設展示されています。
『医学』の立場から原爆の影響を考える事のできる貴重な資料であり、原爆が人の体に具体的にどのような障害を引き起こすのかが、時間の経過や爆心地からの距離等のデータと共に示されています。

熱症や外傷、放射線の強い障害等原爆による初期の死亡、そして一定の時間の後におこる原爆後障害の貴重な研究データは、世界各地で放射線被曝事故の被ばく者治療に役立てられています。

また、長崎大学医学部では多くの医師や学生が原爆の犠牲となりました。自らも被爆しながら命を顧みず人々の救護に当たった医師や学生の記録も『血染めの白衣』と共に展示されています。
こうした医師や学生そしてたくさんの原爆被爆者の犠牲があって、今、長崎はヒバクシャ医療の世界的ネットワークを支える力となっている事を実感させられる展示です。

展示資料は冊子にまとめられていて、無料配布も行われています。
自由に見学できますので、是非一度ご覧ください。

問い合わせ
長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設
TEL　095-849-7123
FAX　095-849-7131(資料調査室)
　　095-849-7130(生体材料保存室)



展示内容
◆長崎原爆の物理的被害
◆長崎原爆の物理的影響
◆長崎原爆の人体に与える影響
　急性期
　後障害初期
　後障害後期
　疫学







Dictionary

「なしむ」では、毎号ヒバクシャ医療国際協力に関する様々な事業やニュースを紹介しいていますが、専門用語も数多く登場します。どなたにも分かりやすく、読みやすい内容にするためよく使われる言葉をこのコーナーで解説します。

① チェルノブイリ
現ウクライナ共和国の北部に位置する町。1986年4月26日、この町にある原子力発電所の4号炉の事故により、甚大な被害が引き起こされた。

② ヒバク（被爆／被曝）
本来は、「爆撃を受けること」。その受けた状態によって、「被爆」と「被曝」の二つに分けられるが、国際医療の場では、統一する意味で「ヒバク」と表記している。

③ 放射線・放射能
放射性元素から出るα、β、γなどの線のことを放射線と呼ぶ。放射能とは、その放射線を出す作用のこと。

④ 甲状腺
首の部分に存在するホルモン分泌器官。チェルノブイリ原発事故後、小児の間でこの部位のがんが激増した。

分からない用語があればご質問下さい。
素朴な疑問も大歓迎です。
皆さんからの質問にもこのコーナーでお答えしたいと思っています。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
E-mail:fvgt6060@mb.infoweb.ne.jp
FAX:095(820)3037
『なしむディクショナリー』宛お送り下さい。

Letter Box

From Japan

NTT西日本 長崎支店
ビジネスユーザ営業部
システム担当
中川和久さんよりのメッセージ

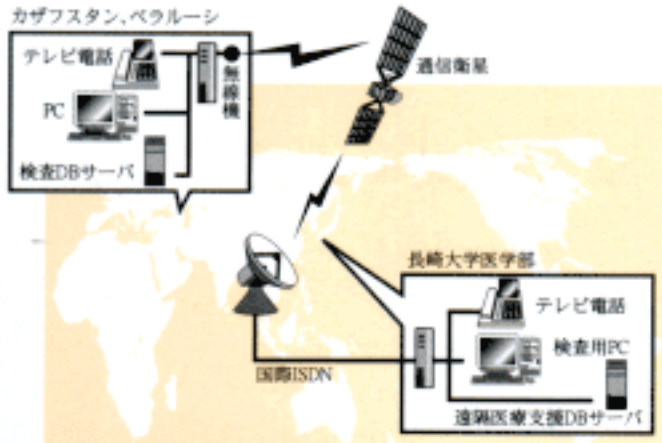


伊王島での海水浴

私はセミパラチンスクの遠隔医療システムの構築や保守をさせて頂いておりますす関係でロシア方面と楽しく関わらせて頂いております。

子供たちと研修生

先日も天気のよい真夏の日曜日にナシムの研修生達と伊王島の海岸に泳ぎに行く機会がありました。そこの桟敷で子供達が時々興味ありそうに、見るからにガイジンである彼らの周りをうろうろして、声をかけられればさっと逃げ出したりして見ていてたいへんほほえましい光景でした。長崎に海外からのお客様はそう多くはありませんが、ナシムの研修生としてせっかく数多くの異国の人達が来崎しているのだから、なにか日本の子供達に想い出を残していってもらいたいなと、ふと考えました。ホームステイでの家族レベルの交流や学校のイベント参加などで、子供のうちから異国の人達と楽しく交流した想い出は子供達の将来の財産に、延いては長崎の財産になっていくものと思います。



中川さんが携わった遠隔医療システム
長崎大学医学部とカザフスタンやベラルーシの医療機関を結んで遠隔医療が可能になりました。

大人になった私自身も海外に行って観光での記憶は少しずつ色褪せていきますが、人と触れ合った記憶はいつまでも残っていると感じております。

ヒューマンな交流

ナシムの研修生は日本で研修したことを現地における被爆者医療の啓蒙啓発活動で活躍が期待されるだけでその目的はじゅうぶん果たされますが、技術・知識の交流にヒューマンな交流が加わるとその効果はさらに上がるのではないでしょうか。

Have a break....

簡単！ロシア料理 「ロシア風餃子 ペリメニ」

餃子のようで、ラビオリのようなロシアの家庭料理にチャレンジしてみましょう。

（材料 約10人分）
皮 小麦粉500グラム 卵（全卵）1個 水1/2カップ（100ml）
具 牛ひき肉300グラム 豚肉ひき300グラム 玉葱1/2個 塩・ブラックペッパー・レッドペッパー適宜
月桂樹の葉2枚 ゆで塩、バター、サワークリーム等



1.まず、皮の準備から。
小麦粉はふるって山をつくるようにし、頂上部分にくぼみをつくり卵をおとす。
水を頂上部分から少しずつ加え、山を崩しながら手で混ぜる。
良くまぜあわせてひとかたまりにし、ラップをかけて室温で30分ねかせる。
2.ねかせている間に、具をつくる。
牛肉と豚肉、みじん切りにした玉葱は、塩・ブラックペッパー・レッドペッパーを加えて手で良くこねる。
味付けはお好みで。
3.ねかせて置いた皮を4つにわけ、その1つを打ち粉をしながら麺棒等を使って1ミリ位の薄さに延ばす。
普通のガラスのコップを使って、皮を丸く型抜きする。
4.型抜きした皮に具をのせる。皮1枚につき具はティースプーン1杯分程度。欲張っていれすぎないこと。
まず餃子と同じ要領で具を包み、水を少しつけて皮を閉じる。閉じた皮の両端を合わせて丸くする。
型抜きに使ったコップの大きさにもよるが、でき上がりの大きさは直径2センチくらい。
5.水2リットルに対しティースプーン2杯分の塩を加えてお湯を沸かす。このとき香りづけに月桂樹の葉2枚をお湯にいれる。4のペリメニをお湯の中に入れ、浮いてきてから5分茹でて、すくい上げる。
6.温かいうちに、バターやサワークリームをたっぷりかけていただく。

お好みで茹でたペリメニをバターをひいたフライパンで焼いてもOK。
この分量で100個程作れますが、食べきれないと思ったら茹でる前に冷凍庫へ。ロシアではたくさん作って冷凍しておくことが多いそうです。仲間がそろうときにわいわいやりながら作ると楽しいかも。



今回「ロシア風餃子 ペリメニ」の作り方を教えていただいたのは長崎大学医学部大学院1年のスタレンキ・ドゥミトリィさん。ウクライナ共和国出身で、何と調理師免許をもっていらっしゃるという本格派。
彼のペリメニは美味しいと好評だそうです。ロシア料理というとボルシチなどが有名ですが、日本ではビーツなどの野菜が手に入りにくいので、材料の揃えやすいペリメニを紹介していただきました。
ありがとうございました。



長崎・ヒバクシャ医療
国際協力会通信

第9号
発行　平成13年9月20日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
(NASHIM)
TEL 095(823)4278
FAX 095(820)3037
http://village.infoweb.ne.jp/~nashim/
E-Mail:fvgt6060@mb.infoweb.ne.jp

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care

Information



講演会のアンケートより

8月4日に行った「みんなで考えよう放射線被ばく」の講演会に参加された皆さんのアンケートの中からいくつかのご意見を紹介させて頂きます。

「長崎から世界へ　どんなつながりをもっていけるのか考えたいと思いました。」
(女性・40代)

「専門的な話しはやはり分かりづらいので質疑の方法を考えてほしい。もっと参加しやすい様に日曜に開催したほうが良いのでは？」
(男性・40代)

「放射能がすごく身近に思える反面、もっと理解していく努力をして平和を語っていきたいと思う。」
(女性・30代)

「もっと市民にPRしてたくさんの人に聞いてほしい講演会だった。」
(男性・60代)

「これまで漠然と耳にしていた事をはじめて資料や実験、体験談に触れる良い機会でした。」
(女性・50代)

「専門家の方々が、市民に解る話しを、と心がけて下さっていて、この試みの大切さを実感できました。」
(男性・60代)

「難しい部分もあったけれど、興味のもてる内容でした。特別講演には胸を打たれました。」
(男性・30代)

ここでご紹介した他にもたくさんのご意見やご感想を寄せていただき、また暑い中たくさんの皆様に参加していただきありがとうございました。
今後もより多くの皆さんに参加していただける講演会となるよう、参考にさせていただきます。

今後のNASHIM事業(予定)

◆韓国医師等受け入れ研修(13年11月)
◆外務省補助事業実施(ロシア・ベラルーシ)
　医師等の派遣(13年12月)
　医師等の招へい(14年1月)
◆永井隆平和記念・長崎賞の授与(14年2月)
◆在外被爆者渡日治療実施(14年3月)

こうしたNASHIMが行う事業については、また次号で詳しく紹介・報告いたします。

編集後記

第9号から「なしむ」が新しくなりました。ページ数も増えて、少しカラフルにもなりました。内容も事業報告や紹介だけでなく、楽しんで読んで頂けるコーナーや専門用語の解説などを加えてボリュームアップ。中高校生にも読んでもらえる「なしむ」を目指しています。

特別講演の講師としてお招きし、「PEOPLE」で紹介した神谷さんは長野県の方でした。被爆地・長崎に住む私達がもっと積極的に多くの人達と連携しながら、世界にそして21世紀を生きる子供たちに「ヒバクシャ医療」についての情報発信をしなければと感じさせられました。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



第４回 永井隆平和記念・長崎賞授賞式

『なしむ』第10号

Report 「第4回永井隆平和記念・長崎賞」
セミパラ巡回医療記
People エヴゲニイ・デミチュック博士
鎌田 七男博士
高木 昌彦先生を偲んで
Works 外務省補助事業
Korea Report 韓国医師等受け入れ事業
Information 新しい原研施設の紹介

Vol.10
2002 SPRING

発　行／平成14年 3月 29日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570　長崎市江戸町2-13
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037

Report

第４回 永井隆 平和記念・長崎賞

2月18日、今回で第４回を迎える「永井隆」平和記念・長崎賞を授与しました。

永井隆 平和記念・長崎賞

「永井隆」平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に送られます。

第４回「永井隆」平和記念・長崎賞の受賞者は、ベラルーシ保健省内分泌研究所のエヴゲニイ・デミチュック博士と(財)広島原爆被爆者援護事業団理事長の鎌田七男博士のお二方に決定しました。

授賞式は２月１８日にホテルニュー長崎で行われ、井石会長から賞状と賞牌(ブロンズ像「生命のともしび」)が授与されました。

デミチュック博士は永年にわたりチェルノブイリ原発事故後の小児甲状腺がんの診断及び治療に尽力され、鎌田博士もまた、永年にわたり原爆被爆者における放射線誘発がん、特に白血病の発症機構の解明、治療に尽力されました。両博士の活動は、原発事故と原爆というそれぞれ異なる分野での活動ですが、いずれも国際的に活躍され、後世に残る重要な放射線医療分野への貢献者として、その業績は高い評価を受けておられます。

両博士の医療活動と研究の成果は、ヒバクシャ医療の分野はもとより、世界の平和に大きく貢献していることから、本賞の目的に最もふさわしいお二人として今回の授賞となりました。

授賞式には、長崎県知事、長崎市長をはじめ、ベラルーシ共和国などチェルノブイリ関連諸国からもたくさんの医療関係者が出席してくださいました。また、笹川保健協力財団からと広島県医師会からそれぞれの受賞者のお祝いに理事長、会長が駆けつけてくださり、授賞式後の祝賀会では、受賞者を囲んで和やかな歓談が続きました。



永井隆(ながいたかし)

明治41年(1908)～昭和26年(1951)
医師、原爆作家／島根県松江市生まれ。

昭和７年(1932)長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し昭和15年(1940)帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理的療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年(1945)6月、余命3年と診断される。同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。
手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は、自宅の下敷きとなり逃げ出しきれず焼死した。
子供2人は三ツ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、『ロザリオの鎖』『この子を残して』『生命の河』『長崎の鐘』『花咲く丘』『いとし子よ』など数々の作品を書き、祈りと平和を訴え続けた。
これら著作を読んで感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市名誉市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画『長崎の鐘』(昭和25年)は博士の住まいであった「如己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。
昭和26年(1951)5月1日長崎大学医学部附属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

デミチュック博士紹介

受賞者
エヴゲニイ・デミチュック博士(７６歳)
(ベラルーシ保健省放射線内分泌研究所甲状腺部門部長)
(ベラルーシ医学アカデミー会員)

- ・1925年1月2日　ミンスク(ベラルーシ共和国)にて生まれる。
- ・1958～1965　モギリョフ州立病院外科部長
- ・1966～1997　ミンスク州立甲状腺がんセンター所長
- ・1997～2001　放射線内分泌研究所甲状腺部門部長
- ・1992　チェルノブイリ原発事故後、小児甲状腺がん患者の激増を世界で初めて科学誌「Nature」に報告
- ・1996　小児甲状腺がん患者における放射線外科治療技術の開発と導入
- ・1998　誘発甲状腺がんの予防的頸部リンパ節切除の必要性の立証

鎌田博士紹介

受賞者
鎌田 七男博士(６４歳)
((財)広島原爆被爆者援護事業団理事長)

- ・1937年3月20日生まれ
- ・1970年7月　医学博士号取得
- ・1962～1976　広島大学原爆放射能医学研究所臨床第一部門助手
- ・1985～2000　同　血液学研究部門教授
- ・1997～1999　同　所長
- ・2001～　(財)広島原爆被爆者援護事業団理事長
- ・1962～　被爆者白血病の研究開始
- ・1969～　放射線傷痕の持続性を証明
- ・1972～　放射線後障害の明確化
- ・1988～　ＩＰＰＮＷ(核戦争防止国際医師会議)日本支部理事として核廃絶に努力
- ・1992～1999　放射線被曝者医療国際協力推進協議会幹事長、会長歴任

第４回　永井隆平和記念・長崎賞
受賞者の横顔

受賞者のお二人は、長くヒバクシャ医療に貢献してこられました。ご苦労も多かったその道のりをほんの少しだけですが、お話いただきました。

デミチュック博士はチェルノブイリ原発事故の直後からベラルーシでの治療活動にたずさわってこられ、医療器機やスタッフも不足する中大変なご苦労があったことと思います。

一番印象に残ったことをおたずねすると「事故の時はまだ小さな子供だった男の子が、甲状腺がんを乗り越え、立派に成人して結婚、子供がうまれた事。自分の孫のような気がします。」と目を細められました。76才になられる今も、ベラルーシの子供達やその未来のために研究センターの設立のため、また医師達の教育や医療器機の充実のため「まだまだ引退はできないんだ」とおっしゃるデミチュック博士は、きっと子供達や若い医師からも慕われる先生なのでしょう。

ベラルーシでの治療活動にはやはり経済的な問題もあり困難な面も多いそうです。ナシムをはじめとする国際的な医療支援には大変感謝され、これからも人材・物資の両面からの支援が必要であることを訴えておられました。



祝賀会でのデミチュック博士(右)

鎌田博士は長崎や永井隆先生との所縁の深さについてお話をして下さいました。鎌田博士の恩師は故永井隆博士を治療された朝長先生です。永井博士のお話を聞いておられたせいでしょうか、今回の受賞は感慨深いものがおありのようでした。

鎌田博士も広島で被爆者医療にたずさわるかたわら、核戦争防止国際医師会議や原爆被爆者への人道的援助など幅広く活動されています。長崎でもそうですが広島でも原爆被爆者の高齢化に伴って、医療面はもちろん彼等を精神的にサポートする必要があると鎌田博士はおっしゃいました。「生き残ったことで、自分を責め続ける人もいるのです。老人となったいまだから、精神的な支えが要ります。」



祝賀会での鎌田博士(右)

治療や研究の中で出会った人々に対して、とても感謝しているという鎌田博士。「研究のためとはいえ、相手は生身の人間です。血液採取や辛い骨髄穿刺を長い間許してくれた方々のおかげで、今日の研究成果があります。彼らとは家族以上の信頼関係を築いてきたのです。」という言葉の中に、博士のお人柄が凝縮されていると感じました。

お二人はそれぞれの立場でヒバクシャ医療にたずさわってこられたのですが、デミチュック博士は子供達に対して、鎌田博士は高齢となってゆく被爆者に対して、常に誠意と情熱をもって接してこられました。またそうした姿勢や人間的な魅力がなければ人々との信頼関係は築けなかったと感じました。

受賞者のお二人は研究への情熱を失わない、とても魅力的な方でした。きっとお二人の周りからはヒバクシャ医療の未来を担う人材が多く育つのではないでしょうか。

今後のご活躍をお祈りいたします。



Report

セミパラ巡回医療記

平成13年8月24日から2週間にわたってNASHIMではセミパラチンスクでの住民の健康診断と実情調査のため、専門家による医療チームを派遣しました。

セミパラチンスク巡回医療記

日本赤十字社　長崎原爆病院
院長　田口　厚

カザフスタン共和国セミパラチンスク地区旧ソ連核実験被災者の健康と医療の実情を調査のため平成13年8月24日から2週間、現地に出張してきた。もともとこの事業は長崎大学原研の山下教授が3年前から行っていたチェルノブイリ原発事故の調査が一段落したことと、旧ソ連の秘密核実験都市で行われた地上・地下核実験で、その付近に住むカザフ族に広大な放射線障害が及んでいた事が判明しながらも、様々な事情から約１０年間も放置されていたのを、同じ被爆地である長崎と広島でなんとか援助できないかという事で始まった事業である。山下教授も赤十字の参加を希望され、現地の実情を知り健康相談を受けてほしいとのナシムからの要請もあって、様々な不安材料を抱えながらも参加した。

カザフスタン共和国は、国全体としての医療レベルが低いわけではない。10年前の独立後に経済状態が悪化、医療器機の新規設備はほとんどが日本をはじめとした諸外国からの援助がたよりで、そのメンテナンスも十分できない状態であった。それよりも驚いたのは都市と地方の格差である。アルマトゥやセミパラチンスクといった都市にはホテルやスーパー、医科大学などもあったのだが、核実験地の周辺の村になると悲惨な現状である。500～5000人の集落が散在していて、10年前に舗装された一本道の道路と（電気と電話の）2本の電信柱が、広大な草原に延々とのびる他は何もない。

ここで旧ソ連時代に核実験が行われたのだが、住民には何の通告もなく、彼らは近くでくり返しおこる爆発が何なのかも知らされないまま、広大な平原でのんびりと放牧を行っていたのである。

我々の一行が巡回したカイナールとカラウルの診療所も水は近くの池から手押し車で汲んでくるような状態。病院でもこれだから民家は推して知るべしである。

巡回健康診断では、小児甲状腺エコー、日本へ持ち帰ってホルモン測定をするための尿の採取、婦人科疾患診察、などを行った。私は整形外科的な診察と、総合調整役として実験地周囲の村落で巡回診療的なことを行った。私が担当した整形外科関係では、先天股脱、斜頚、内反足、大腿頚部骨折の放置例などが見られたが、その集団の母数が不明なこと、被曝線量が不明なこと、妊婦の栄養状態が悪いことなどで、放射線障害と断定できるデータはとれなかった。それよりも貧困と近くの医療機関が整っていないために、また設備の良い病院に通うのは遠すぎて無理であるために、治療すれば良くなるものもそのまま放置せざるをえない実情を実感した。カザフ最大の都市アルマトゥの2ケ所の医療センターを視察し、日本から援助された医療器機の実情を見聞したが、試薬切れ、不安定な電圧のためのデータの信用性の低さと故障の頻発、機械操作の未熟などが目立ち、技術と人のさらなる援助が必要と痛感した。



カイナール村の診療所にて

この巡回では、あちこちに残るロシアの文化遺産やカザフの習慣、豊富な食べ物などにも出会い、旧ソ連の核実験停止10周年記念式典に出席し、日本・ヒバクシャ・長崎の代表として献花を行った。また帰国前日に日本大使館の招待で日本・カザフの親善として改装なったコンサートホールで故団伊久磨作のオペラ『夕鶴』を特等席で観劇できるという幸運もあった。

この事業への参加を機に、今後日本赤十字社長崎原爆病院として、さいはての地セミパラの被害者に何ができるかを考えてみたい。



日本から援助された医療機器の使用状況を見聞





カイナール村の診療所にて

Report

高木 昌彦先生を偲んで

長崎大学医学部原研病理教授　関根　一郎

2002年3月21日、高木昌彦先生が大阪のご自宅で急逝された。76才。
70才にして中央アジア・カザフの旧ソ連邦核実験地近くのセメイ市(セミパラチンスク)に下宿、自炊しながら、カザフ語を勉強、非核・平和を世界へ訴え続け、現地ヒバクシャの調査を企画され、いよいよスタートを切ろうとしていた矢先のことであった。「カザフは核保有国から非核の国に生まれ変わった。原爆被爆国の日本こそ非核を宣言し、その代表であるべき」とは、セメイで、またしばしば訪問いただいた長崎で何度も、何十回も先生からお聞きした先生の信念であった。

70才から学ばれたカザフ語で、ゆっくりゆっくり平和のメッセージを語られる先生の姿は、聖なる伝道者を思わせた。崇高な目標をしっかり抱いて、みずみずしい心を持って、全力で生きる、それが青春。地平線に連なるセメイの町の道路を歩かれている先生の背中から、本当の若さとは何かを教えていただいた。

広島で被爆され、大阪の「被爆婦人の集い」のお世話をなされている奥様の静子さんによれば「いつものようにカザフの民族衣装の帽子を頭に、応接間でお客様に熱心に話をしている時に、突然発作がおこりました」とのことであった。早すぎたことが悔やまれる。しかし何か先生らしい。
先生はカザフの人達がいつでも見上げることができる星になられた。

高木昌彦先生のご略暦を紹介しつつ、先生のご冥福をお祈りする。

大正14年(1925年)　ロサンゼルス生まれ
　　1才半より山口県由宇町に育つ
昭和20年　第六高等学校卒業
　　24年　大阪大学医学部卒業
　　公衆衛生学教室助手、講師など歴任
　　62年　大阪大学退職
平成　7年　9月よりカザフ在住
　　14年　3月21日ご逝去



カザフにて
左が高木昌彦先生

People

Dictionary

1 臨界前核実験
【りんかいまえかくじっけん】
プルトニウムなど核分裂性物質の連鎖反応が起きる「臨界」に達しないように量や温度などを管理して実施する核実験。
核爆発は、コンピューターシミュレーションで行う。

2 被ばく線量【ひばくせんりょう】
人体が放射線を浴びた場合、その強さにより障害の起こる内容が異なる。その評価の為に体が受けた放射線の強さを量(線量)としてあらわす場合に使われる。
シーベルという単位。

3 エコー
音響効果を利用して、体の表面から深部に到るまで異常の部位を探索する超音波診断装置のこと。エコーを用いて得られた画像で、甲状腺、乳腺、肝臓などの病気の診断に役立てる。

4 遺伝子治療【いでんしちりょう】
遺伝子の異常で起きる種々の病気(がんや先天異常など)を、その異常な遺伝子自身をターゲットに選択的に修復したり、削除したりする新しい期待されている治療法である。

?
分からない用語があればご質問下さい。
素朴な疑問も大歓迎です。
皆さんからの質問にもこのコーナーで
お答えしたいと思っています。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
E-mail info@nashim.org
FAX:095(820)3037
『なしむディクショナリー』宛お送り下さい。

Korea report

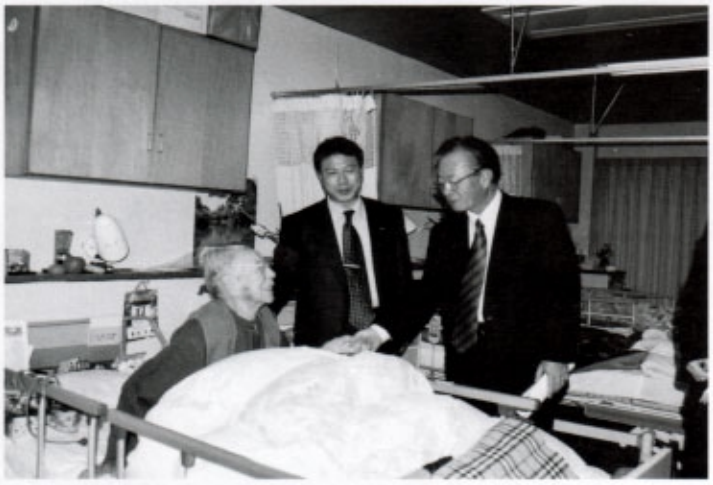
韓国から医師等を招聘

韓国からの医師等専門職の招聘人数は、ここ数年増加傾向にあるところですが、平成13年度は前年度と同じ4名を招聘しました。これまでと同様全員大韓赤十字社の職員で、韓国南部の慶尚南道居昌郡にある居昌赤十字病院の許 鎭哲(ホ ジンチョル)院長、同じく慶尚南道の陜川郡にある陜川原爆被害者福祉会館(日本の原爆被爆者養護ホームに相当)の李 丙鎔(イ ビョンヨン)館長と金 銀玉(キム ウンオク)物理治療師、それに在韓被爆者福祉事業を担当している大韓赤十字社特殊福祉事業所の 尹 錫勳(ユン ソクフン)所長を長崎にお迎えして、11月26日から12月5日までの10日間と11月26日から30日までの5日間の2班に分かれて被爆者医療に関する研修・視察を行いました。
まず、原爆資料館の見学から始まり、行政側の県・市から原爆被爆者対策事業の概要についての説明や日赤長崎原爆病院で業務概要の説明を受けました。 その後、恵の丘長崎原爆ホームや原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」の視察を行い、日本の被爆者とじかに接しました。
4人は、原爆の後障害に今も苦しんでいる様子を見て原爆の悲惨さを肌で感じるとともに、同じ原爆に遭った者として被爆者に国境のないことを痛感されたそうです。
尹 錫勳所長と李 丙鎔館長は視察を中心とした5日間の研修だったので、これで韓国へ帰られました。管理職員という立場で日本の原爆施設の運営実態をつぶさに視察してきわめて強い印象を受けられたようです。

許 鎭哲院長と金 銀玉さんは、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で分子治療や放射線応答解析、放射線疫学、国際放射線保健の各研究分野(部門)で専門研修を受けられました。
また、医療の現場である日赤長崎原爆病院や長崎大学医学部附属病院で実地研修を受けた他、許 鎭哲院長は放射線影響研究所においても研修を受けられました。
2人とも医療従事者としての立場から被爆による精神的・肉体的後遺症などに関して熱心に質問をしていました。また日韓の医療関係者の間の相互理解がいちだんと高まったことを実感しました。
4人の帰国後のご活躍をおおいに期待いたしますとともに、NASHIMからも医師等を派遣して、被爆者の方々の健康診断や各種相談、医療従事者との情報交換、長崎での研修終了者のフォローアップなどを実施したいと考えています。

(原研施設長 朝長 万左男)


長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設にて


原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」(西彼町)を訪問

Works

外務省補助事業

NASHIMは、これまでにも補助事業の枠内で、ミンスク医科大学(現ベラルーシ医科大学)との共同作業として、甲状腺のロシア語教科書である「甲状腺学:基礎編」を作成したほか(平成9年度)、セミパラチンスク核実験場に隣接するロシア連邦アルタイ州における超音波画像診断支援事業(平成10年度)、ミンスク医科大学における電子図書の整備事業(平成11年度)、モスクワ内分泌研究所への尿中ヨード測定に関する技術支援事業(平成12年度)といった内容で多大の貢献を行ってきました。
本年度の事業としては、以上のようなこれまでの実績を踏まえ、ロシア連邦オブニンスク放射線医学研究所及びベラルーシ医科大学との共同事業での医学教科書出版を行いました。チェルノブイリ原発事故から15年目を迎え、一体私たちが何を教訓としたかを反省し、ロシア語での二冊の教科書(甲状腺超音波診断:疾患編と小児甲状腺学)の出版を行いました。

前者は平成11年度の事業枠内で出版した「甲状腺カラーアトラス」の続編として出版されたもので、現地小児甲状腺がんの症例を中心に編集されています。執筆は前作と同じオブニンスク放射線医学研究所のウラジミール・パーシン教授(元長崎大学医学部客員教授)が担当し、医学部の山下俊一教授の校正を経て、現地モスクワで3000部が出版されました。今後、甲状腺がん診断レベルの向上につながることが期待されています。
一方後者の「小児甲状腺学」(写真)は、ベラルーシ医科大学のアレクセイ・クバルコ教授と山下教授が編集を担当し、ドミトリー・ロマノフスキー副所長(写真)や高村昇講師を中心とした両大学のスタッフに加え、アメリカのピッツバーグ大学の医師らも執筆陣に加わりました。この教科書は長崎でロシア語印刷され、ベラルーシ共和国をはじめ、旧ソ連邦で内分泌学・放射線医学を学ぶ医学生に1000部が無料で配布されることになっています。

いずれも外務省や現地大使館でも大変好評であり、日本の顔の見える継続した医療支援、人材育成の柱の一つとなっています。



ドミトリー・ロマノフスキー副所長



甲状腺超音波診断:疾患編(写真・右)
小児甲状腺学(写真・左)

Have a break....

簡単！カザフスタンの料理　「ベシバルマク」

ベシバルマクは、カザフスタンの一般的な大皿料理で食材が揃えばとっても簡単にできる家庭料理です。

材料
1)スープ
羊肉　750g
(馬肉1,270gか牛肉1,200gでも可)
玉ねぎ　1個
じゃがいも　1個
塩、スパイス(コショウ、黒コショウ)
<ソース>
玉ねぎ　1個
ねぎ(万能ねぎ)
ブイヨン　100mℓ(スープの煮汁で可)
塩、コショウ
2)パスタ
小麦粉　375g
水　70mℓ
卵　2個
塩　小さじ1杯

作り方
1)水を入れた鍋に肉を入れ、弱火で沸騰させ灰汁をとりながら2時間くらい煮込み、火からおろす30分前に塩、コショウ、玉ねぎ、黒コショウを入れて味をつけ、じゃがいもを入れる。
2)上の1)を煮込んでいる間にパスタをつくる。
小麦粉と水をまぜて30分くらいねかせ、良くこねて厚さ1～1.5mmにのばし、8cm平方に切る。
3)煮込んだ1)の肉と玉ねぎ、じゃがいもを取り出してスライス。
スープの中にパスタをいれて2～3分茹でる。
大きな皿に茹でたパスタを盛り付け、その上に切った肉、玉ねぎ、じゃがいもを盛り合わせる。
最後にソースをかけて出来上がり。





今回カザフスタン料理「ベシバルマク」の作り方を教えて頂いたのは長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の病態分子解析研究分野(原研病理)所属のアリポフ・ガビットさんです。
ガビットさんは、日本滞在8年で日本語はペラペラですが、やっぱり故郷の味が忘れられないそうです。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

第10号
発行　平成14年 3月 29日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
(NASHIM)
TEL 095(823)4278
FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail info@nashim.org

Information

NASHIMのH.P.アドレスが変わりました。

この度、独自ドメイン「www.nashim.org」を取得しましたので、ホームページもリニューアルしました。新しい情報、ニュース等はこのページでお知らせしますので、時々このページをチェックして下さい。

http://www.nashim.org/

ご意見やご質問はメールでどうぞ。

info@nashim.org

原研　新研究棟が完成

平成13年11月、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設の増改築により新研究棟が完成し、研究の再スタートが切られました。

建物は鉄筋コンクリート造り、地上3階建て、建築面積は3,723㎡で、旧棟の1.5倍、1,328㎡増えました。最新の省エネタイプの設備が多数施されています。旧棟は昭和37年に建設され、すでに30年が経過し、かなり老朽化していました。新棟の完成で職員一同、新しい気分で研究に打ち込んでおり、能率も飛躍的に高まっております。

また、「被爆者医療学術研修センター」という研修室も4階に設けられ、すでに海外から各種研修や内部の会議におおいに利用されております。この研修室の諸設備はNASHIMの財政支援や故 永井誠一氏(永井 隆先生の御長男)の御遺族の御寄付によって整備されました。

原爆被爆や放射線被曝事故等による放射線障害発症機序の分子レベルでの解明と放射線被曝者の遺伝子治療を設置目的とした原研は、放射線ヒバクシャの国際的調査や医療協力事業を含め、今後ますますの活躍が期待されています。さらに今年から始まる在外被爆者支援事業にも参加します。

今後共、皆様のあたたかいご支援のほどをお願い申し上げます。

(原研施設長　朝長 万左男)

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設新研究棟





共同カンファランス室

HPでも詳しく紹介しています。
http://abomb.med.nagasaki-u.ac.jp/index-sjis.html

今後のNASHIMの事業 (予定)

- ◆チェルノブイリ・セミパラチンスク関係医師受け入れ研修
  14年7月～8月
- ◆日本ベラルーシ友好協会との共同事業による医師等受け入れ研修
  14年8月
- ◆NASHIM 10周年記念事業特別講演会
  14年8月4日(長崎原爆資料館ホール)
- ◆カザフスタン共和国へ専門医師等派遣
  14年9月
- ◆韓国医師等受け入れ研修
  14年11月

こうしたNASHIMが行う事業については、次号で詳しく紹介・報告いたします。

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care

編集後記

セミパラチンスクへの訪問団一行が9月に無事帰国したのは、アメリカでの同時多発テロ直前のことでした。帰国がほんのすこし遅れていたら、影響を受けていたに違いありません。

またそれ以降の世界の動き、核兵器や核開発に関する各国の姿勢や反応には多くの事を考えさせられました。

これから私達にできることは何かを改めて考えた時、「長崎から世界へ」というナシムの情報発信がさらに大きな意味を持つようになるのではないでしょうか。

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



県庁に金子長崎県知事を表敬訪問

『なしむ』第11号

Report　チェルノブイリ・カザフ関連
医師の研修受け入れ
カザフスタン派遣報告
People　平成14年度研修者たちの研修感想
Works　NASHIM創立10周年記念特別
講演「永井隆博士と原爆」
公開セミナー
「測ってみよう放射線」
Korea Report　韓国医師等受け入れ事業
Infomation　外国人による翻訳出版

Vol.11
2002 AUTUMN
発　行／平成14年 10月 31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570　長崎市江戸町2-13
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037

Report

チェルノブイリ・カザフ関連医師の研修受け入れ

ヒバクシャ医療を学ぶため、ベラルーシ、ロシア、ウクライナ、カザフスタンの4ヵ国から6人の医師等が7月16日来崎。8月21日まで1ケ月余りにわたって、チェルノブイリ国際医療協力事業を活発に行っている長崎大学医学部を中心に、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センターなどNASHIMを構成する各機関で研修を受けました。

ヒバクシャをめぐる総合施策を

研修はまず、共通カリキュラムとして長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設(原研)で各先生方から4日間にわたって講義を受講した後、病理学や放射線科などそれぞれの専門分野に分かれて研修を行いました。
また、被爆者が多数入所している「恵の丘長崎原爆ホーム」を訪問し、診察室やリハビリルームなどを見学した後、被爆者2人から原爆投下当時の話を直接聞きました。医師たちの中には当時の悲惨な状況を聞いて、目頭を押さえる人もいました。

研修の間には、長崎原爆資料館や九州電力玄海原子力発電所を見学したり平和公園での平和祈念式典に参列したりして、長崎原爆の実相などについての認識を深めました。

被爆地・長崎での研修を終えて、研修者一同が口々に話していたのは、日本の被爆者はたいへん手厚く保護されている、自分達の国のよい手本である、ということでした。医療費や手当の支給、健康診断、養護ホームの設置など格段の違いがあり、ヒバクシャ医療技術の向上だけでなく、ヒバクシャをめぐる総合的な援護対策の必要性を認識していただいた研修でもありました。



放射線影響研究所で研修中
後姿は、バートンG.ベネット理事長

People

平成14年度　研修者たちの研修後の感想



ドミトリー・アバクーシン

(ロシア連邦／ロシア放射線医学研究所 上級研究員／専門:免疫学)

日本の先生方にはいろいろご指導いただき、たいへん感謝しております。最新の医療機器が整っている研究所で研究することができました。日本での研修の成果を今後の研究に生かしていきたいと思います。日本の先生方以外に、一緒に研修を受けたウクライナ・ベラルーシ・カザフスタンのドクター達との間で、今後の協力ができればと思います。国家や民族に関係なく、我々ドクターの目的は一つです。それは「人間の健康」を守ることです。

日本における被爆者や高齢者に対する医療保障やその他の特別な配慮にとても感動しました。私の国でも障害者や高齢者に対して、同じように国家が配慮することを望みます。

ナターリァ・オルコヴィッチ

(ウクライナ／ウクライナ小児病院 遺伝医学部門主任／専門:遺伝子診断)



今回の研修はたいへんすばらしくプログラムされていました。医学の最新テクノロジーに触れることができ、自分の専門レベルを上げることができました。特に最初の1週間に受講した一連の講義はたいへん興味深く、役に立つ情報でとてもためになりました。講義して下さった先生方、たいへんありがとうございました。特に原研の先生方には大変お世話になりました。山下先生と高村先生の仕事に対する熱心さと献身が、放射線医学分野でのウクライナ・日本間の協力の成果を上げている基本になっていることを目の当たりにしました。

今回の研修に参加させていただいたNASHIMには心から感謝しております。

マリアンナ・ザグロフスカヤ

（カザフスタン共和国／第二次世界大戦記念病院 医師／専門：放射線科）



今回、この研修を企画・運営して下さったNASHIMの皆様に心から感謝したいと思います。被爆者の健康状態や生活について、また豊かでとても美しい日本、友好的で開放的な、しかもお客を大切にする日本人について多くを知ることができました。

日本政府の被爆者や国民の健康に対する配慮にはとても感動しました。もちろん、医療技術の高さや専門家養成のレベルにも感動を覚えました。関係機関の諸先生方にはすばらしい講義をしていただき、感謝いたします。また、長崎大学医学部附属病院の放射線科の専門家の方々には特にご指導いただき、本当にありがとうございました。長崎で得たすべての知識と暖かい歓迎や配慮は、私にはとてもためになりました。

オレッグ・ゴルベフ

（ベラルーシ共和国／ゴメリ医科大学 病理学教室主任／専門：病理学）



私はこの研修で、日本の保健制度、被爆者のための医療援助システム、長崎大学医学部の学生教育プログラムなどについて、大変多くを学びました。日本での被爆者への援助や配慮に関しては驚くべきものがあります。日本では被爆者の方々を尊敬して大切にしていると思いました。そして私も被爆者と会ってみて同じ気持ちを持ちました。もう一つわかったのは、広島と長崎に対する原爆投下はいかに戦争とはいえ、計画的な犯罪実験だったということです。

私の担当しているゴメリ市での乳ガンの形態発生の研究プロジェクトに関して山下先生には的確な助言をしていただくとともに、関根先生のお陰でゴメリ市にすばらしい顕微鏡用プレパラートのセットをもって帰ることができました。

お世話になったすべての皆様に、日本に滞在することができたことと、自分の専門的なレベルを上げることができたことを心から感謝いたします。

スベトラーナ・アニスチェンコ

（ベラルーシ共和国／ベラルーシ医科大学 病理学教室助教授／専門：病理学）



日本での被爆者に対する医療支援は私たちのお手本となるものです。日赤長崎原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム、放射線影響研究所などへの訪問でそれがよくわかりました。各先生方の「人体への放射能の影響」に関する医学的・社会的な面から見た一連の講義内容は、とても興味深く、内容の深いものでした。また、原研での最新の研究、方法、新技術、医療機器など多くを学び、情報収集することができました。

ベラルーシと日本両国民間の相互理解、友好と平和に対する日本の努力には深く感動するとともに、原爆資料館の見学や平和祈念式典への参加は、とても強い印象を残しました。今回の研修内容は様々な内容が上手く組み合わされており、とてもすばらしいものでした。

また、ご多忙であるにもかかわらず、長崎県知事、長崎市長が私たち研修者とお会いになって下さり、とても光栄でした。また、報道関係者の方々にも私たちの研修をニュースとして取り上げていただき、とても嬉しく思いました。

グルフィラ・エンセバエバ

（カザフスタン共和国／ポリクリニック第3病院　院長 ／専門：皮膚科・医療経営学）



この研修は、私個人や私の国カザフスタンの人々にとって大変役に立つと思います。なぜなら、日本では被爆者に対する援助の蓄積が豊かだからです。

研修の内容はとてもすばらしいものでした。私たちは理論のみでなく、実習の面でも多くのものを得ることができました。

多くの先生方の興味深い、内容のある講義はとてもよかったです。また、長崎市の個人クリニックを訪問することができ、院長先生やその他の先生とも知り合うことができました。

私たちに日本での研修の機会を与えて下さったNASHIMと、暖かくもてなして下さった長崎市民の皆様に深く感謝申し上げます。

Report

カザフスタン派遣報告

NASHIMでは、受け入れた研修者のフォローアップ事業として専門家等をチェルノブイリ原発事故周辺国やカザフスタン共和国へ派遣していますが、今年は長崎大学留学生課の青木一郎専門員と、長崎県原爆被爆者対策課の原田正明総括課長補佐の2名をカザフスタン共和国へ派遣しました。

カザフスタン共和国 医師等派遣事業に参加して

長崎県原爆被爆者対策課
原田　正明

平成14年8月27日(火)から9月3日(火)までの間、実施された「平成14年度カザフスタン共和国医師等派遣事業」に参加させていただきました。

NASHIMでは、医師等医療関係者の招聘研修事業を実施していますが、カザフスタン共和国からも毎年何名かの受け入れを実施しており、対象国の現状の把握と関係機関へのNASHIM活動の周知及び意見交換がその主な目的です。

セミパラチンスクへ

日常の業務に追われる中、十分な準備もできないまま、出発の日を迎えました。同行する長崎大学医学部の関根一郎教授、青木一郎専門員らとともに、韓国の仁川経由で7時間のフライトの後、深夜にアルマティ市に到着、市内のホテルで仮眠を取って国内便を乗り継ぎ、ようやく目的地のセミパラ空港に着いたのは、8月28日の午後2時でした。

最初の訪問先であるセミパラチンスク診断センターに着くとすぐに先行して現地入りしていた長崎大学の山下俊一教授が主催されている医療関係者向けセミナーに呼ばれました。

山下教授は、現地医療関係者の被曝医療の知識や技術の向上に心を砕かれ、息の長い活動を続けておられますが、その活動の一端を見せていただくことができました。私も50人近い出席者の前で、NASHIMの活動について発表する機会を与えていただきました。

翌日は関根教授に同行し、現地の医療の中核であるセミパラチンスク国立医科アカデミー(医科大学)やセミパラチンスク市保健局を訪問、被曝医療や国際協力について意見交換を行いました。

閉鎖記念式典に出席

午後は、関根教授と別れ、青木専門員と私は、セミパラチンスク核実験場の閉鎖記念式典に出席しました。この日がちょうど核実験場が閉鎖された記念日に当り、毎年、記念式典が開催されているのですが、NASHIM関係者として挨拶及び献花を行いました。遠い日本国の長崎から来たということで、出席者からたいへんな歓迎を受け、現地のお年寄りたちが一生懸命話し掛けてくるのに感激しました。



閉鎖記念式典終了後、現地の被曝者達と記念撮影

滞在中、私たちがお世話になったセミパラチンスク・コンサルタント診断センターは、JICAや長崎大学医学部の現地での活動拠点となっており、JICAの土井先生や大宮さん、長崎大学の先生方、現地のスタッフが席を温める間もないほど、忙しく活動されていたのが今も強く印象に残っています。



アルマティ市内の美しいキリスト教の教会



МОЛЧАНИЕ РОЖДАЕТ СЛЕЗЫ

ГЕНЕРАЛЬНЫЙ КООРДИНАТОР JICA В СЕМИПАЛАТИНСКЕ

セミパラチンスク核実験場閉鎖記念式典に、参列したことを報ずる現地の新聞

リーダーとしての人材を

セミパラチンスク・コンサルタント診断センターはたいへん立派な施設で、JICAの支援等により医療設備も充実しているようです。診察室も広くとってあり、「診察室は男女別、大人・子供別にありますよ。」との説明を聞くなど、日本より充実している面もあるようです。所長のチュビリョフ・ビクトル氏からは、「帰国後に医療チームのリーダーとしてスタッフを指導できる人材をとの観点から日本への研修生の人選を行っている。」とのお話を聞きました。

このほか、アルマティ市の心臓と内臓研究所のアブラエフ・ジャンゲットハン副所長や日本大使館の早水書記官にお目にかかってお話をお聞きすることができました。

カザフの食卓

思い出に残っているのは、マイラ・エスペンベトワ教授御夫妻が私たちを自宅に招いて、手作りの料理でもてなしてくださったことです。マイラ教授が「お招きしたのはカザフ人の生活を見ていただきたかったからです。」と挨拶されましたが、口では簡単に表現できないほどの山ほどのごちそうで歓迎していただきました。食事の途中に休憩時間があるほど、カザフ人はよく食べるのだそうですが、実際、私などは出された料理の3分の1も食べることができず、本当に申し訳なく思いました。マイラ先生ありがとうございました。

訪問前に抱いていたイメージとは異なり、アルマティ市もセミパラチンスク市も緑の多い美しい街でした。

人口の5割を占めるカザフ系の人たちは日本人と見分けがつきませんので親しみが持てます。多民族国家ですが国民は仲良く、国情は安定しているようです。核実験による被曝の歴史を乗り越えて今後の発展が期待されます。

以上、短期間に多くの医療機関を回って責任者のお話をお聞きすることができ、たいへん有意義な活動をさせていただきました。行程のコーディネートをしてくださった山下教授に感謝いたします。JICAの土井先生、大宮さん、現地スタッフの皆さん、ありがとうございました。ご活躍をお祈りします。

ダフストリェーチ！

（また、あいましょう）



JICAプロジェクト「セミパラチンスク地域医療改善計画」への参加

長崎大学原研医療分子部門　濱田亜衣子

カザフスタン共和国旧セミパラチンスク州では、旧ソビエト連邦時代に500回近い核実験が繰り返されました。周辺住民は、長年何も知らされないまま放射能降下物の影響を受け、その後遺症に苦しんでいます。すなわち海外のヒバクシャです。日本政府は国際協力事業団（JICA）を通じて、長崎大学などの力でこの放射能汚染地域の医療改善計画を立案し、2000年夏から現地で支援活動を展開しています。私自身は、今年の5月から放射線障害によって引き起こされるがん（甲状腺がん、乳腺がん、肺がん、白血病を含む血液疾患）に対する検診活動に従事しました。供与された検診用トラックにはレントゲン撮影機材や超音波診断装置などが搭載され、旧核実験場周辺の広大な草原に散在する人口1,000人から5,000人程度の約20の村落を巡回しながらの検診活動でした。

セミパラチンスク市の診断センターのスタッフらと一緒に、検診会場となる町の病院や小学校に泊り込みで検診を行い、がんの早期発見に努めました。多くの住民が集まり、多い日には一日に約100人の診察を行いました。夏の草原のシルクロードは、昔ジンギス汗らが歴史を築いた地でもあります。夜は満天の星空で、本当に360度天の川を見ることができます。素朴な遊牧民とのユルタでの交流や、ワイルドな自然での生活では、日本では決して味わうことのできない心の豊かさを感じることができました。一緒に働いた細胞診の土井先生や林調整官は、もうシルバーボランティアのお年ですが、大変お元気で現地の人材育成に貢献しておられます。巡回検診だけでなく、種々の技術移転が試みられていますが、長崎からJICAを通じた医療支援活動が地域住民の健康増進に少しでも貢献し、その結果、放射線被ばくに対する健康への不安を軽減できればと念願せざるを得ません。

世界には自然環境や社会環境など多種多様な外的因子が人間を取り囲んでいます。国境を超えてどの社会においても健康を願う人々の気持ちは同じであることを実感できた3ケ月間でした。



がん検診を行うスタッフ



検診対象となったカラウル村

People



カザフスタンから管理職員来崎



NASHIM 放射線疫学会議に出席

カザフスタン共和国から、放射線医学環境研究所のアブサリコフ・カズベック・ネグマトビッチ所長が12月17日来崎されました。アブサリコフ所長は、ナシムの新規事業として今年度から始まった「チェルノブイリ・カザフスタン管理職員研修受け入れ事業」でナシムが招聘したものです。12月24日まで長崎に滞在して、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎大学医学部附属病院を視察したり、兼松隆之長崎大学医学部長や塚原太郎長崎県福祉保健部長を訪問して意見交換を行いました。

また、ナシムが主催する放射線疫学会議に出席して、セミパラチンスク地区での放射線ヒバクシャたちの健康状態などについて発表を行いました。

カザフスタン共和国放射線医学環境研究所は、旧ソ連が1949年以来450回以上の核実験を行ってきたセミパラチンスク核実験場から約150キロに位置しており、1991年に改組、新設された研究所で、セミパラチンスク核実験場周辺の被ばく線量評価や健康影響の研究を活発に行っています。前身は旧ソ連が設置した、カザフスタン風土病研究所で、後を引き継いだ放射線医学環境研究所は現在も当時のの検診データを保管しています。

12月18日同研究所は、これまで遺伝子解析などの共同研究を行ってきた長崎大学と学術交流協定を締結しました。アブサリコフ所長は「放射能の人体影響研究で世界をリードする長崎大学との協定は大きな意味を持つ」と語っています。



(財)放射線影響研究所を視察



長崎大学医学部附属病院を視察

Kazakhstan

放射線医療科学国際コンソーシアム 第1回長崎シンポジウムに参加



文部科学省の「21世紀COEプログラム」に昨年選定された長崎大学の、「放射線医療科学国際コンソーシアム」の第1回長崎シンポジウムが2月21日、22日の2日間長崎大学医学部ポンペ会館において開催され、ナシムから井石哲哉会長が出席しました。

21世紀COEプログラムは先駆的な研究を実践する大学に科学研究費を重点配分し、世界最高レベルの研究拠点づくりを進める国家プロジェクトです。長崎大学では昨年、世界各地の研究機関などと連携し、低線量放射線の人体影響など放射線医療科学の世界拠点化を進める「放射線医療科学国際コンソーシアム」事業を計画しています。



長崎大学医学部ポンペ会館にて



レセプションで挨拶する井石哲哉NASHIM会長

第1回長崎シンポジウムには国内外から110人の専門家が参加し、初日は朝長万左男原爆後障害医療研究施設長からコンソーシアム事業の内容などの説明がありました。また、チェルノブイリの甲状腺がんなどについての基調講演もありました。

夜のレセプションでは、コンソーシアム事業に協力する団体として、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の井石哲哉会長から「今回のシンポジウムを契機として長崎大学が提唱する『放射線医療科学国際コンソーシアム』が1日も早く設置され、人類の健康と平和に大いに貢献されるよう望んでいます」と挨拶がありました。

Symposium



Information

外国人による翻訳出版のご紹介



『この子を残して』　　訳者　韓国　成 浩慶氏

成浩慶氏は1929年生まれで現在73歳。1930年から1946年まで日本の名古屋市に居住しその間、幾多の空襲、戦災を身をもって体験されている。戦後、韓国に帰国し、農畜産業に従事。1992年にカトリックに帰依し、その後居住地の教会の信徒会長に選ばれ、現在に至っている。

2000年8月、大邱大教区長や神父たちとともに長崎カトリック聖地巡礼の旅に参加。出発直前、長崎市のホームページで永井隆博士や著書を知り、永井隆記念館や如己堂を訪れた。記念館で永井博士に感銘を受け、「ロザリオの鎖」、「如己堂随筆」、「この子を残して」の3冊を購入。



『この子を残して』の表紙

帰国後、何度も繰り返し読んで、カトリック信者として深く心を打たれたそうである。この感激を自分だけでなく、もっと多くの韓国の信者たちに分けてあげたいと思い立ち、その年の秋から「この子を残して」を翻訳し始め、今年6月、自費出版した。 成浩慶氏は「永井隆博士の文章を翻訳しながら、私のイエス様に対する信仰心がますます深まり、心が平和的な気分になりました。永井博士に感謝しております。この本を読む韓国の人たちが、博士の崇高な人間愛の精神を少しでも手本にしてくれれば、訳者としてたいへん幸いに思います。」と語っている。

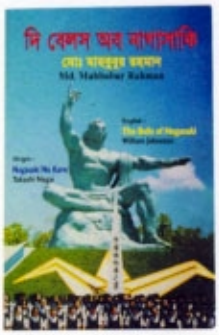


『長崎の鐘』

訳者　バングラデシュ　マハブラ・ラーマン氏

バングラデシュの弁護士ラーマン氏は、子供の頃、医師の父から原爆の話を聞いて以来、原爆に強い関心を持ち続けた。1997年、31才の時、首都ダッカの日本大使館で「長崎の鐘」英語版に出会い、そこにつづられた永井博士の姿に深い感銘を受け、ベンガル語版の出版を思い立った。まもなく翻訳を完成したが出版資金が足りず、来日して長崎、広島で協力を呼びかけていた。両市民から寄付金が集まり、今年2,650冊を印刷。バングラデシュの学校の他、来日して長崎市の原爆資料館や広島市の平和記念資料館などに寄贈した。

ラーマン氏によると、ベンガル語は世界の3.32％にあたる2億700万人の人々が話す言葉だそうで、資金が足りず2,650冊しか出版できなかったのを残念がっている。ラーマン氏はバングラデシュの医師や弁護士、大学教授らで2000年1月に設立した「広島・長崎連帯協議会」の活動の一環として、バングラデシュの全小学校93,992校に簡単な言葉に直した『長崎の鐘』を贈る運動に取り組んでおり、各方面に協力を呼びかけている。


『長崎の鐘』の表紙

編集後記

戦後我が国でベストセラーとなった永井隆博士の代表的な著書が、今日でも国境を越えて世界のいろんな国で翻訳され、読者に深い感動を与えています。今年翻訳出版された韓国の成浩慶さんやバングラデシュのマハブラ・ラーマンさんには、その労苦に対し心からねぎらいと感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

今回、写真はすべてカラーにしたのでずいぶん見やすく、きれいになったと思います。次号以降も続けていきたいと思っています。　（草場）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

第11号
発行　平成14年 10月 31日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
(NASHIM)
TEL 095(823)4278
FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail info@nashim.org

Nagasaki
Association
for
Hibakushas'
Medical Care

NASHIM

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

なしむ

Vol.12
2003 SPRING

From Korea
韓国から医師等を招聘

People
被爆者医療研修を
終えて感じたこと…

Korea Report
韓国の医療機関を訪問

NASHIM 研修機関紹介 1
長崎大学医学部附属
原爆後障害医療研究施設

Report
カザフスタンから管理職員来崎

放射線医療科学国際コンソーシアム
第1回長崎シンポジウムに参加

Information
核禁会議がナシムへカンパ金を贈呈

ベラルーシ共和国政府から感謝状



被爆者医療研修のため来崎した韓国人看護師たち（於:日赤長崎原爆病院）

FROM KOREA

“アンニョン ハセヨ”

韓国から医師等を招聘

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、韓国から2月と3月に医師2名、臨床病理士１名、看護師３名計６名が来崎しました。これでNASHIMが韓国から招聘した研修者の人数は平成7年度以来27名となりました。

研修者一行は長崎原爆資料館をまず見学。原爆被害のすさまじさに驚いていた様子でした。その後平和公園や、原爆落下中心地、朝鮮人被爆者慰霊碑を見て回りました。

翌日から、日赤長崎原爆病院や長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎大学医学部附属病院、



長崎市原爆被爆者健康管理センターを視察



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で研修

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設、放射線影響研究所の順に研修や視察を行いました。

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設では、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故やセミパラチンスク核実験場周辺の被ばく者医療を支援する「遠隔医療診断支援システム」を視察しました。衛生通信などでベラルーシ共和国やカザフスタン共和国の関連施設から送られてきた被ばく者の超音波画像や細胞組織画像を同大学の医師が診断している現場を見た研修者たちは、興味深そうに盛んに質問をしていました。

2002年度・後期　韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所　属	職　名	姓　名
2月24～3月5日（10日間）	仁川赤十字病院	院長（放射線科医師）	ヤン・ジュヒョン 梁　宙鉉
	ソウル赤十字病院	外科科長（外科医師）	ピョン・ソンファン 邊　聖煥
	大邱赤十字病院	臨床病理室長（臨床病理士）	パク・ジョンテック 朴　鍾澤
3月10～3月19日（10日間）	統営赤十字病院	看護科長	ファン・ピリョン 黄　必蓮
	居昌赤十字病院	看護師	ペー・ジョンスクッ 裴　正淑
	尚州赤十字病院	看護師	キム・サンヒ 金　尚姫

PEOPLE



平成14年10月に研修に参加した 梁 慶鎬室長

被爆者医療研修を終えて感じたこと…

大韓赤十字社居昌赤十字病院
放射線科室長
梁　慶鎬

長崎滞在期間中は、関係者の方々からとてもよくしていただき、本当にありがとうございました。10日間という短い期間でしたが、未だに忘れられない追憶として心の中に残っています。

研修を通して感じたことは次のとおりです。

まず一つ目は、原爆と関係する多くの機関を訪問し、施設を視察しましたが、どこに行ってもその機関のトップの方がいつも私たちを迎えてくれる準備がされており、一度も時間に遅れたり訪問できなかったことはなく、彼らの時間観念と準備性が際だって目立ちました。

二つ目は、日本は原爆被害者たちのためにどんなに財政的・行政的に治療や福祉のため努力してきたかを十分に見ることができたことと、それは官と民がすべてにおいて体系的・効率的に行っているものと思われました。

三つ目は、長崎で直接行き当たりばったりに入った多くのスーパーや食堂、ホテル、店はもちろん、タクシーで会った日本人たちの、体に染みついたような親切や微笑を含んだやさしさは私たちとは多くの差を感じました。

四つ目は、少なくとも我々研修者が行くところはどこもゴミくずやたばこの吸い殻をひとつも見つけることができず、訪問機関や施設はもちろんのこと、公園、駅、市場、飲食店街などで見た感じは、本当に清潔だということでした。

五つ目は、これは通訳や留学生たちから共通して聞いたことですが、日本は長期不況に陥っていて、多くの日本人が希望や意欲を失っているということです。また、物価が高い反面、年をとると社会保障制度が行き届いていることも国民性の肯定的な発達ではありますが、一部短所として現れているところがあるようです。

以上、長崎研修中に感じたことをいくつかあげましたが、このような研修の機会を与えてくださった方々に、この紙面をお借りしてもう一度感謝の言葉を申し上げ、研修のお礼のご挨拶といたします。



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設で研修

KOREA REPORT

韓国の医療機関を訪問



陜川高麗病院を訪問

ナシムでは、韓国からの被爆者医療研修者の派遣について韓国側と協議するため、長崎大学医学部の朝長万左男教授と塚﨑邦弘講師を去る1月16日～18日、韓国に派遣しました。

また、これまで韓国からの研修者は大韓赤十字社傘下の病院等から派遣されていましたが、今回、枠を広げて、赤十字社以外の原爆被爆者診療協定病院からの派遣について協議するため、関係医療機関を訪問しました。

慶熙大学慶熙医療院、陜川高麗病院、慶南連合医院を訪問し、ナシムの活動について説明を行い、医師などの被爆者医療研修派遣について協議したところ、いずれの医療機関からも前向きな回答が得られました。これらの病院からは平成15年度から研修者の受入について準備を進めていくことにしています。



慶熙大学慶熙医療院を訪問

韓国での訪問先

ソウル

1月16日
- 大韓赤十字社特殊福祉事業所
- 大韓赤十字社ソウル赤十字病院
- 慶熙大学慶熙医療院

陜川（ハプチョン）

1月17日
- 大韓赤十字社陜川原爆被害者福祉会館
- 陜川高麗病院
- 慶南連合医院



長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設

長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設（原研）は昭和37年（1962年）に「原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防、及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究」を目的に設置され、毎年1部門が増設されて6部門が昭和42年（1967年）に完成し、残留放射能の測定、被爆者疾病の病理学的研究、放射能障害の発症機序の解明、白血病や放射能誘発癌の発症機序の解明と治療法の開発などを中心として総合的な研究を行ってきました。

一方、昭和47年（1972年）に「原爆被災の実体を明らかにするための諸資料の収集、整理、保存」を目的として『原爆医学資料センター』が設置されました（昭和49年に『原爆被災学術資料センター』と改称）。平成9年（1997年）4月、原爆後障害医療研究施設と原爆被災学術資料センターは整備統合され、新しい『原爆後障害医療研究施設』として再スタートしました。統合後の施設は「原爆被爆や放射線被曝事故等による放射線障害発症機序の分子レベルでの解明と放射線被曝者の遺伝子治療」を目的としています。同時にWHO甲状腺研究協力センターや世界アルバート・シュバイツァー医学センターにも指定され、チェルノブイリやセミパラチンスクなどでの世界的な医療協力活動が展開されています。平成13年11月、増改築により新研究棟が完成し、以前の建物とは見違えるように立派になりました。

研究組織としては大きく4部門に分けられ、「放射線障害解析部門」、「分子医療部門」、「国際放射線保健部門」、「資料収集保存部」に教授7名、外国人客員教授1名、助教授5名、講師以下19名、合計32名の職員に加え、多くの大学院生、研究生、留学生らが日夜研究に励んでいます。平成14年度の21世紀COEプログラムに『放射線医療科学国際コンソーシアム』構想が選定され、原研を中心とした放射線医療科学研究の世界拠点が構築されつつあります。

現在、ロシアやベラルーシ、ウクライナ、カザフスタン、中国などからの研究者9名がスタッフとして参加しており、共同研究を推進すると同時に、NASHIMやJICAでの短期研修生受け入れ指導が積極的に行われ、世界の放射線医療科学分野における人材育成に貢献しています。原研はNASHIM活動の屋台骨を支えているのです。



本館



2号館

カザフスタンから管理職員来崎



NASHIM 放射線疫学会議に出席

カザフスタン共和国から、放射線医学環境研究所のアブサリコフ・カズベック・ネグマトビッチ所長が12月17日来崎されました。アブサリコフ所長は、ナシムの新規事業として今年度から始まった「チェルノブイリ・カザフスタン管理職員研修受け入れ事業」でナシムが招聘したものです。12月24日まで長崎に滞在して、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎大学医学部附属病院を視察したり、兼松隆之長崎大学医学部長や塚原太郎長崎県福祉保健部長を訪問して意見交換を行いました。

また、ナシムが主催する放射線疫学会議に出席して、セミパラチンスク地区での放射線ヒバクシャたちの健康状態などについて発表を行いました。

カザフスタン共和国放射線医学環境研究所は、旧ソ連が1949年以来450回以上の核実験を行ってきたセミパラチンスク核実験場から約150キロに位置しており、1991年に改組、新設された研究所で、セミパラチンスク核実験場周辺の被ばく線量評価や健康影響の研究を活発に行っています。前身は旧ソ連が設置した、カザフスタン風土病研究所で、後を引き継いだ放射線医学環境研究所は現在も当時のの検診データを保管しています。

12月18日同研究所は、これまで遺伝子解析などの共同研究を行ってきた長崎大学と学術交流協定を締結しました。アブサリコフ所長は「放射能の人体影響研究で世界をリードする長崎大学との協定は大きな意味を持つ」と語っています。



(財)放射線影響研究所を視察



長崎大学医学部附属病院を視察

Kazakhstan

放射線医療科学国際コンソーシアム 第1回長崎シンポジウムに参加



文部科学省の「21世紀COEプログラム」に昨年選定された長崎大学の、「放射線医療科学国際コンソーシアム」の第1回長崎シンポジウムが2月21日、22日の2日間長崎大学医学部ポンペ会館において開催され、ナシムから井石哲哉会長が出席しました。

21世紀COEプログラムは先駆的な研究を実践する大学に科学研究費を重点配分し、世界最高レベルの研究拠点づくりを進める国家プロジェクトです。長崎大学では昨年、世界各地の研究機関などと連携し、低線量放射線の人体影響など放射線医療科学の世界拠点化を進める「放射線医療科学国際コンソーシアム」事業を計画しています。



長崎大学医学部ポンペ会館にて



レセプションで挨拶する井石哲哉NASHIM会長

第1回長崎シンポジウムには国内外から110人の専門家が参加し、初日は朝長万左男原爆後障害医療研究施設長からコンソーシアム事業の内容などの説明がありました。また、チェルノブイリの甲状腺がんなどについての基調講演もありました。

夜のレセプションでは、コンソーシアム事業に協力する団体として、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の井石哲哉会長から「今回のシンポジウムを契機として長崎大学が提唱する『放射線医療科学国際コンソーシアム』が1日も早く設置され、人類の健康と平和に大いに貢献されるよう望んでいます」と挨拶がありました。

Symposium

核禁会議がナシムへカンパ金を贈呈



長崎原爆資料館ホールにて

平成14年8月8日、核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）全国集会が長崎原爆資料館ホールで開催され、ナシムが核禁会議から他の4団体とともにカンパ金を贈呈されました。

核禁会議は「いかなる国の核兵器にも反対し」「特定政党や政治勢力の干渉をうけず」「あくまでも人間尊重の人道主義を貫くこと」を基調に昭和36年（1961年）に結成され、「被爆者に愛の手を！」を合言葉に原爆被爆者の方々を救援するためのカンパ活動を長年行ってきています。

結成以来、昨年までの間に全国の人たちによって9億5830万円の浄財が核禁会議に寄せられており、この浄財で核禁会議は様々な団体に対して支援を行っています。長崎の被爆者たちに対しては、「のどが渇いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました…」と水を求めながら死んでいった原爆犠牲者の霊を慰めるとともに、平和を求めるシンボルとして「平和の泉」を、昭和44年（1969年）8月、平和公園内に建設しています。また、被爆者健診センターや原爆被爆者療養センターをはじめ、恵の丘長崎原爆ホームなど多くの施設に検診車、送迎用マイクロバス・車椅子・ベッド・医療機器などを毎年贈り続けています。

また、韓国の被爆者たちに対しては、昭和48年（1973年）に韓国内に被爆者診療センターを建設したり、平成8年（1996年）に開館した陜川原爆被害者福祉会館に医療機器などを贈り続けています。

ナシムは平成14年度活動助成金として核禁会議から50万円のカンパ金を贈呈されました。贈呈式には井石会長が出席し、核禁会議の大谷恵教議長から目録を受領しました。

核禁会議に対しあらためて厚く感謝申し上げますとともに、ナシムとしては世界のヒバクシャ支援のためこのカンパ金を有効に活用したいと考えております。

ベラルーシ共和国政府から感謝状

平成14年10月23日、第3回日本チェルノブイリ支援会議が東京で開催され、チェルノブイリ支援NGOの一つとしてナシムも出席、ベラルーシ共和国大統領府人道局長から感謝状を授与されました。

会議は駐日ベラルーシ共和国大使館が主催するもので、チェルノブイリ原発事故から16年経過した現在、関係NGOにチェルノブイリ支援について一層の支援をお願いするとともに、これまでの苦労や今後の要望などを聞き、併せて関係NGO相互の交流を深めることにより、今後の支援活動をより円滑にしていくことを目的に開催されました。

会議はまず、駐日ベラルーシ共和国特命全権大使の挨拶の後、チェルノブイリ事故委員会委員長とベラルーシ共和国大統領府人道局長のそれぞれの立場からの報告がありました。その後、（財）笹川記念保健協力財団の槇 洽子 室長がチェルノブイリ医療協力事業について講演を行うとともに、チェルノブイリ支援NGO 20団体が活動状況を報告しました。ナシムからも事務局が出席して、ヒバクシャ医療研修生の受け入れ状況やロシア語での医学教科書出版・寄贈、専門家の派遣・医療技術指導などについて報告しました。

会議の最後に、ベラルーシ共和国大統領府人道局長から各NGOに対して、これまでの支援に対しての感謝状が授与されました。

また、レセプションでは、多くのNGO関係者と知り合うことができ、またたいへん有意義に情報交換を行うことができました。



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第12号
発行／平成15年3月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care
NASHIM
ヒバクシャ医療国際協力通信

Report　チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受け入れ研修
チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会
公開セミナー「測ってみよう放射線」

Korea　『韓のくにをゆく』
韓国から医師等を招聘

Report　人とひとのふれあいに築かれた友好のナシム事業

新設診療科紹介　永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター

Information　核禁会議が昨年に続きナシムへ浄財を寄附
カザフスタン共和国保健省の次官が来崎

Vol.13
2003 AUTUMN



チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会で現地の状況を報告

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修

今年で10回目となるチェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修が、7月23日から8月23日まで、長崎大学医学部を中心に行われ、ベラルーシ共和国、カザフスタン共和国から各2名、ロシア連邦、ウクライナから各1名の計6名が参加しました。



兼松隆之長崎大学医学部長を表敬訪問

研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、各研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。一般カリキュラムでは、長崎大学の各関連教室で講義や実習を行ったほか、佐賀県の玄海原子力発電所の見学や、恵の丘長崎原爆ホームの訪問、天草はまゆう療育園の見学などを行いました。玄海原子力発電所では、自国の原子力発電所を訪問したことはないということもあって、日本の原子力発電所のしくみや、事故を起こしたチェルノブイリ原子力発電所との適い、あるいは発電所の安全管理や職員の健康管理システムなどについて、熱心に質問されていました。また、恵の丘長崎原爆ホームでは直接、被爆者の証言を聞く機会が設けられ、天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、母国の現状との比較を行うなど、有意義な研修を体験することができたようです。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせ、疫学や病理学などについて長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の各専門分野での研修を行いました。また8月9日の長崎原爆記念日には、平和公園で行われた祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。

研修生はいずれも、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を背負っていかれる方々ばかりです。このような医師・専門家の方々を長崎に招聘し研修を行うことにより、長崎がこれまで培ってきた被爆者医療のノウハウを世界に伝えるのみならず、将来の国際医療協力分野におけるカウンターパートの育成が可能となります。NASHIMでは今後とも長崎大学をはじめとした研修機関と協力しながら、本事案を継続、発展させていきたいと考えています。



井石哲哉NASHIM会長を表敬訪問（長崎県医師会）

チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会
公開セミナー　「測ってみよう放射線」

チェルノブイリ原発事故周辺国や旧ソ連時代に核実験が多数行われたカザフスタン共和国では、今もなお放射線被ばくにより苦しんでいる人がたくさんいます。8月3日、これらの国で医療活動に携わっている専門家と市民との交流会と、公開セミナーとして放射線医療専門家の講演や身近に存在する放射線の測定実演を長崎大学と共同で開催しました。

まず、『測ってみよう放射線』では長崎大学の林邦昭教授が「医療と放射線」と題する講演を行いスライドを使いながら癌の治療に放射線がいかに役立っているかなどをわかりやすく説明されました放射線測定実演では長崎大学の奥村寛教授と吉田正博助手が機械を使って、私たちの身近に放射線が存在することを証明して見せました。

次に『チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会』では、まず山下俊一長崎大学教授がチェルノブイリ原発事故とカザフスタン共和国・セミパラチンスクでの核実験による被ばくの概要を説明した後、ベラルーシ共和国ゴメリ医科大学産婦人科のエレーナ・パラノシスカヤ医師が「チェルノブイリ原発事故被災者とその後の健康状況」と題して報告を行いました。次にカザフスタン共和国セミパラチンスク診断センターのジャナール・エレウバエヴァ医師が「カザフスタン旧核実験場被曝者を診断して」と題して報告を行いました。

エレーナ・パラノシスカヤさんは「甲状腺がんを患う人が多く、妊婦や一歳児の死亡率が高くなっている。最近は循環器系の病気が増えているが、被ばくとの関係を証明することが難しい。」と述べました。また、ジャナール・エレウバエヴァさんは「核実験の影響で住民の健康は悪化しているが、政府の援助は十分でない。原爆から立ち直った経験を私たちに分け与えてほしい。」と訴えました。

一方、参加した市民は「原発事故や核実験の影響で奇形児は増えているのか」、「ソ連が崩壊して多くの国に分かれたが、ロシア政府としては核汚染の現実をどう考えているのか」などと熱心に質問していました。



放射線測定実演



エレーナ。バラメシスカヤ医師の現地報告

来場者アンケートより

現地の医師の方々の生の声を聞けたことが大きな成果でした。現在本当に困っていることが身にしみて、何か募金以外にできることはないかという思いに駆り立てられました。
（30歳代　女性　公務員）

被爆者というと広島、長崎だけを考えがちですが、同じように苦しんでいる国があることを知り、もっと世界に目をむけ、子供たちにも知らせたいと思いました。知らない人が多いと思います。
（30歳代　女性　公務員）

現地では被曝者の組織がありますか。ありましたらどんな運動や要求をしているんでしょうか。
（60歳代　男性）

各種の疾病のため病院で放射線をとられますが、健康に障害はないのでしょうか。1ケ月もしない間に、内科、胸部、歯科などで次々とレントゲンをとられるとそういう気になります。
（70歳代　女性）

チェルノブイリやカザフスタンの生の声が聞けてとても有意義でした。研修生の方々、自国に戻られて頑張っていただきたいと思います。
（40歳代　女性　パート）

「医療と放射線」では大学の講義を聴いているような気分になりました。専門的な話しをわかりやすくしてもらって良かったです。
（40歳代　男性　会社員）

専門医師等派遣事業（韓国）

『韓のくにをゆく』

長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
助教授　大津留　晶

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、韓国で被爆者の治療にあたる医師などの医療職や医療事務を行う事務職を長崎に招聘し、被爆者医療の研修・交流を行っていますが、これまでに研修等で来崎された方はすでに37名となっています。去る7月、より効果的な被爆者医療の研修・交流を実施するため、訪韓して韓国側カウンターパートとの会談・見学・協議を行いました。訪韓メンバーは、長崎原爆病院副院長の森秀樹先生とNASHIMの草場里見書記と私の3名で、本年7月7日から10日までの4日間、「韓のくに」こと韓国へ渡りました。

初日は大韓赤十字社事務総長　李　柴求氏、同社特殊福祉事業所長全　元均氏、大韓赤十字社総裁補佐役　成　仁淑氏との会談を行いました。ソウルの大韓赤十字本社をまず訪れたのは、在韓被爆者に対する支援を大韓赤十字社が主として担ってきたからです。例えば現在の韓国では医療費の自己負担は外来で4割、入院の場合は2割です。在韓被爆者が韓国全土に6カ所ある赤十字病院や一部の指定病院で受診した場合は、この4割と2割を赤十字社が補填しています。しかし韓国の場合、赤十字病院は高度先進医療を行う病院ではないので、血管造影、MRIなどを用いた検査や手術による治療はできません。よって先進医療を希望する場合は、他病院に紹介されることになり、患者の医療費の負担が増加します。そのような状況の中、日本の在外被爆者支援事業による渡日治療はたいへん感謝をされています。また1990年に日本政府により援助を受けた在韓被爆者援助のための資金（40億円）を基に、2000人の在韓被爆者に対し、毎月10万ウォン（約1万円）の健康管理手当を支給してきたそうです。しかしそれらの資金も金利低下とともに底をついてきたそうです。そういった現状の中で、日本政府が在外被爆者も日本国内の被爆者と同等の支援が受けられる方向で検討を始めるとの報道がなされ、喜ばれておりました。在韓被爆者は高齢化しており、渡日が困難な人も増加していることから、今後の話し合いにより被爆者健康手帳の交付や健康管理手当の支給業務が、できるだけ韓国内でできるようになることを期待されていました。

次の日は、在韓被爆者の方々が多く住んでいる韓国南部のハプチョン（陜川）という山里に向いました。陜川（ハプチョン）原爆被害者福祉会館には80名の身寄りのない被爆者の方々が現在住んでおられます。ここは万葉集の「あしびきの山にゆきけむ山人のこころも知らず山人や誰」という歌を彷彿とさせる山村ですが、産業がないため第2次世界大戦中に日本に出かけて、不幸にして原爆に遭い、戦後韓国に戻って来た人たちがたくさんいるところだそうです。彼等はまた被爆者ということに加えて日韓の歴史の中で翻弄された人生を送っているようです。

3日目はソウル・釜山に次いで韓国第3の都市である人口260万の大邱市の大邱赤十字病院を訪れ、院長の權永在民らと会談しました。大邱赤十字病院は在韓被爆者である患者さんが受診されることが多く、被爆者はひと月に延べ20名が入院され、外来ではひと月に延べ50名程が受診されているそうです。また、この会談の中で大邱赤十字病院から日赤長崎原爆病院との姉妹病院提携の申し出があり、関係者のご尽力の結果、本年9月30日に長崎市において姉妹病院の提携書を交換しました。

最終日は再びソウルに戻り、在韓被爆者支援事業連絡事務所を訪問しました。同事務所は、長崎県からの委託を受けて韓国と日本の関係機関との間の連絡・調整や、在韓被爆者に対する被爆者健康手帳の交付に関する事務手続きなどを代行していましたが、現在、これらの事務は大韓赤十字社が委託を受け持殊福祉事業所が実施しています。訪問した時点で、手帳を取得していない1000名あまりの在韓被爆者のうち約500名がすでに申請手続きに入っていました。また、渡日治療に関する手続きも代行しており、7月時点で35名の希望者がありました。

在韓被爆者の方々は、被爆障害に関しては日本の被爆者同様の問題を抱えているわけですが、歴史の大きな流れに翻弄された様々な苦労もされています。NASHIMや県・長崎市などの在韓被爆者に対する支援事業は、それらに理解と共感を示して推進しているという良い面があります。我々はそれらの特徴を生かしつつ、真に在韓被爆者の方々や彼らのお世話をしている医療スタッフにとって意味のある交流・支援とは何かを考えて、今後もNASHIM在韓被爆者支援に取り組んでゆきたいと思います。最後になりましたが、今回の訪韓で、とてもお世話になったカウンターパートの韓国の方々、現地通訳の大和T&C所長　黄日輝さんに、この誌上をお借りして感謝申し上げます。



李　榮求　大韓赤十字社事務総長と会談

From Korea

“アンニョン　ハシムニカ”

韓国から医師等を招聘

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、今年度も韓国から6月と9月に医師4名、物理治療師1名、事務職員5名の計10名が来崎しました。6月の研修では、初めて、在韓被爆者の医療問題を担当する韓国政府職員も1名参加し、原爆資料館や平和公園視察をはじめ原爆被爆者養護ホームでの被爆者の養護状況や施設の管理運営方法などについて熱心に見学していただきました。県庁で日本の被爆者対策について説明を受けたあと、県の職員と意見交換を行いました。
また、陜川原爆被害者福祉会館から研修に参加した物理治療師の朴　賢珠（バク　ヒョンジュ）さんは「日本の患者さんの方が韓国の患者さんより疾病を治そうという熱意が強いようです。韓国人はよく苦しい、苦しいと言ってばかりいますが、自分の疾病を治そうとする努力に欠けている人が多いです」と国民性の違いを述べました。



姉妹病院提携



被爆体験聞き取り（恵の丘長崎原爆ホーム）

9月の研修では、初めて大韓赤十字社以外の病院（慶熙大学医学部附属病院）からも1名の医師が参加しました。原爆被害者診療協定病院は韓国内で20病院が韓国原爆被害者協会によって指定されていますが、韓国の被爆者に対する診療等に少しでも有益になるよう今後とも多くの診療協定病院の医師や看護師等を招聘していきたいと考えています。
また、9月の研修期間中、二人の研修者の所属する大韓赤十字社大邱赤十字病院と日本赤十字社長崎原爆病院は姉妹病院の提携を結び、被爆者医療を含む医療全般と学術分野で今後、各種交流事業を推進していくことになりました。
大邱赤十字病院の権　永在（クオン　ヨンジェ）院長は「提携を通して日本の進んだ被爆者医療を学びたい」と語り、高齢化が進む在韓被爆者の方々にとって両病院の姉妹提携の取り組みは大きく期待されています。

2003年度・上半期　専葦国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所　属	職　名	姓　名
6月2日～6月11日（10日間）	大邱赤十字病院	内科科長	南　彦延　ナムオンジョン
	陜川原爆被害者福祉会館	物理治療師	朴　賢珠　バクヒョンジュ
6月2日～6月6日（5日間）	仁川赤十字病院	管理部長	宋　基成　ソンギソン
	陜川原爆被害者福祉会館	庶務担当	董　寺漢　カンスーハン
	保健福祉省疾病管理課	庶務担当	洪　淳植　ホンスンシク
9月27日～10月4日（8日間）	大邱赤十字病院	院　長	權　永在　クオンヨンジェ
	ソウル赤十字病院	医療副院長	徐　相烈　ソサンニョル
	慶熙大学医学部附属病院	臨床講師	崔　天雄　チェチョヌン
9月27日～10月2日（6日間）	大邱赤十字病院	院務課長	洪　三烈　ホンサムニョル
	陜川原爆被害者福祉会館	栄養士	崔　書貞　チエセイジョン

人とひとのふれあいに築かれた友好のナシム事業

放射線影響研究所長崎研究所
疫学部部長　陶山　昭彦

私にとってカザフスタン共和国訪問は今回で3度目となる。前の2回はJICAとしての派遣であり、ナシムからは今度が初めてである。放射線影響研究所の立場にある私にとって、この3回とも長崎大学の先生方に同行する派遣ではあったが、今回は特に印象に残るものがあった。

「身近になったカザフスタン」

渡航経路は福岡－ソウル経由であったので昼前に出発し、夜にはアルマティに到着した。JICA派遣はドイツのフランクフルト経由で2日がかりだったため、カザフスタンという国の距離が身近になった。またセミパラチンスク出身で、長崎大学原爆後障害医療研究施設の関根教室のセリック先生が通訳として同行し、アルマティでは同じく関根教室のガビット助手が空港まで出迎えてくれていた。入国審査は前2回のJICA派遣では緊張する時間であったが、今回は極めて「難なく」入国でき、拍子ぬけするほどであった。相手国との人材交流の深い絆のありがたさを感じた　一面であった。

「ナシム研修生との意見交流」



今回の目的は、ナシムがこれまでカザフスタンから独自に受け入れてきた研修生の帰国後のフォローアップである。セミパラチンスク到着後の2日目、ガビット先生の通訳のもと、関根教授、私と元ナシム研修生のセミパラチンスク医科大学：ユーリ・プルグロ教授、ジャクシベイ・ジュマディロフ教授、セミパラチンスク診断センター：サガダット・サガンディコーワ先生、それに長崎大学にかかわりのある2～3の先生を加えて意見交換を行った。ナシムによる研修に対しては皆非常に満足しているとのことであったが、研修内容が多岐にわたっているため、2～3日間程度は自分の専門分野について深めたいという希望も出された。研修生の専門にあわせて一部のオプションを用意するというプログラムは受け入れ側としては困難な部分が多いと感じたが、このような意見交流を通じてナシム事業がより充実していくことは重要であろう。

「高木記念室」



JICAのオフィスはセ　ミパラチンスク市診断センターの中にあり活動の拠点となっている。この度、この診断センターの一室に、長くセミパラチンスクで被爆者支援活動をされてきた高木昌彦先生を顕彰する記念室が設置された。日本人としてこの記念室に入室するのは関根教授が最初となり、私は2番目の入室の光栄を得た。恥ずかしいことを暴露するが、この記念室入室まで高木先生のお名前、ご活動を私は存じ上げなかった。先生は、平成14年に76歳で亡くなられたが、大学の職を退かれてからは一人の人間としてセミパラチンスクに住まわれ、被爆国日本とカザフスタン両国の友好のために生涯をかけられており、その歴史の一部を記念室は再現している。両国の専門家交流が活発になりつつある今、被爆国日本の国民の一人として何をすべきかについて、この高木記念室は日本人訪問者にあらためて教えてくれるに違いない。

「病理学専門家との友好」



公的なスケジュールは、関根教授が団長ということで病理学領域専門家との交流で始まった。今回は病院施設訪問に増して大切なことがある。セミパラチンスク医科大学プログロ教授から、郊外の別荘に招かれ半日を過ごした。また、ウスカメノゴルスクでは今回長崎から帰国したナシム研修生の病理学専門家とともに、はるか郊外の湖畔の宿で一夜を楽しんだ。関根教授の話では交流当初は彼らの心は閉ぎされていたそうだが、ナシムの人材交流を通じて、家族的な友好関係が築かれている。被爆研究になくてはならない病理標本による研究もこの友好の炎なくしては遂行できない。もちろん関根教授の人柄に負うところが大だと感じるが、人と人とのふれあいまで到達することの大切さを痛感した。

「私たちの役割」

ここに、私たちの役割を考えてみた。私たちとは放射線影響研究所を意味する。私たちは50年近く原爆被爆者の放射線による健康影響の追跡研究を継続してきた日米共同研究機開に所属している。1年に数度、ナシムの研修生が視察に訪れるが、今年研修生から被爆線量評価や被爆二世調査について詳しく時間を割いて説明を聞きたいとの要望があった。ナシム研修生、ナシム事業から求められている私たちとしては、これからも貢献していきたいと願っている。

長崎大学医学部歯学部附属病院

永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター

『永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター』は、本年4月から新しく長崎大学病院に誕生したヒバクシャのための医療センターです。長崎大学医学部前身の長崎医科大学は、世界で唯一の被爆医科大学で、多くの先輩が原爆の犠牲になりました。また九死に一生を得られた方々が、急性被爆や慢性被爆障害に苦しめられながらも、診療活動を続けられた誇るべき歴史があります（センターに名前を頂いた永井隆博士も自身が昏睡して倒れる直前まで、被爆者の医療救護にあたり、もう最後だと思われて詠んだ句が有名な「光りつつ秋雲たかく消えにけり」です）。そこで当然、長崎大学病院を訪れた方々は、日本の方でも外国の方でも、ヒバクシャ診療部門があると期待されているのですが、これまで不思議なことに長崎大学病院には、被爆者に多い血液疾患を専門にする原研内科はありましたが、ヒバクシャの一般診療から高度先進医療を一貫して行う部門はありませんでした。私自身も被ばく2世ではありますが、大学病院第一内科で日常診療に追われていた時には、そのことを不思議に感じたこともありませんでした。たまたま11年前に医学部原研分子医療部門の教官になったのをきっかけとして、国際医療協力を行ったり、基礎研究を臨床に生かす展開医療を開発する機会をいただき、日本や世界の一般の人々が長崎大学に期待していることと、長崎の我々の感覚とのギャップを痛切に感じるようになりました。そのような中、今回の永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター（センター長は山下俊一教授、名誉センター長に久松シソノ氏）の立ち上げに参画する事になったのも、何かの運命だという気がいたしております。

今年の3月31日には、それまで大学病院6階外来の布団置き場として使っていた狭い倉庫を、夜までかかってバタバタと改装し、どうにかこうにか4月1日のヒバクシャ医療センターオープンに漕ぎつけました。センターとは名ばかりのたたみ2畳あまりのスペースからのスタートでしたが、これこそまさに「如己堂診察室」です。最初に訪れた女性の患者さんは、病歴をとるため子供の頃のことを伺っていると、故永井隆博士とお話をしたことをふと思い出され、神様のお導きではないかと感激されていました。また2番目の方は、Japan Timesに掲載された“A new medical center for treating Japanese and foreing victims of atomic bombs is to be set up in April at Nagasaki University Hospital.”という記事を見て、はるばるアメリカ合衆国のシカゴより飛行機を乗り継いで受診されました。また、在韓被爆者の方で、来日されていた方が重症になり治療にあたりましたが、この方は日本語を完全に忘れておられ、主治医や9階病棟の看護師さんたちと一緒に片言の韓国語を即席で覚えて対応いたしました。

現在は、山下俊一センター長と原研分子医療部門の難波助教授、芦澤講師、森下助手と副センター長である私の5名で毎日の外来と県・長崎市の渡日治療を中心として診療を行っています。ヒバクシャに関するあらゆる疾患を、軽症のものから重症まで扱うので、内科分野に限らず紹介や受診があり、予想外のところに症状の原因があったり、今までなかなか診断がつかなかった病気などもあり、毎日毎日が真剣勝負です。また被爆により心のどこかに傷を抱えられた方も多く、医科学的な面だけではないケアも行き届くよう、6階外来の看護師の貞方さん、増山さん、瀬崎さんと、国際ヒバクシャ医療センター受付の角尾さんらが中心となって、心がけていただいており、患者さんにとても喜んでもらっています。

如己堂診察室より産声を上げたばかりの国際ヒバクシャ医療センターですが、永井隆博士の名前に恥ずかしくない世界のヒバクシャのセンターに成長し、そして多くのヒバクシャの皆様の治療に貢献できるよう微力を尽くしたいと思います。読者の皆様方の暖かい声援をお願い申し上げますとともに、ヒバクシャの健康面や医療面の大学病院の窓口ですので、どうぞお気軽に御相談ください。

TEL：095－849－7594（医局）
　　095－849－7467（6階外来）
ホームページ：
http：／／www. mh. nagasaki－u. ac. jp／hibakusha/frontpage. htm



国際ヒバクシャ医療センター医局

（副センター長　助教授　大津留　晶）

Information

核禁会議が昨年に続きナシムへ浄財を寄附

平成15年8月8日、核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）長崎集会が市内のホテルで開催され、核禁会議の大谷恵教議長からナシムの仲野喜孝事務局長に寄附金30万円が贈呈されました。

昨年はこの寄附会を活用しナシムの事業広報用ビデオのロシア語版を製作いたしました。今年夏に被ばく者医療研修でチェルノブイリ原発事故やカザフスタン旧核実験場関連の医師6人が来崎した際には研修の冒頭でさっそく利用しましたが、ナシム事業を理解するのにわかりやすかったと好評を得ました。

核禁会議は昭和36年（1961年）に結成され、「被爆者に愛の手を！」を合い言葉に原爆被爆者の方々を救援するためのカンパ活動を長年行ってきています。

結成以来昨年までに全国から9億8678万円の浄財が寄せられており、これにより核禁会議は多くの施設に検診車、送迎用マイクロバス、車椅子、ベッド、医療器具などを毎年送り続けています。長崎市の平和公園内にある「平和の泉」を建設したのはこの核禁会議であり、また国際的には、韓国の被爆者支援のため、平成8年（1996年）に開館した陜川原爆被害者福祉会館に医療機器などを贈り続けています。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、あらためて厚く感謝申し上げる次第です。



川村力核禁長崎議長より寄附金贈呈

カザフスタン共和国保健省の次官が来崎

旧ソ連の核実験場・セミパラチンスク地域の医療改善のため、地域医療改善計画、管理手法知識を習得することを目的としてカザフスタン共和国から保健省次官（治療・予防局長）サギン・カレル氏が3月未来崎しました。

JICAの事業で研修員を受け入れたもので、県と長崎市から原爆被爆者対策についての説明を受けた後、長崎大学附属原爆後障害医療研究施設で遠隔医療支援システムを視察しました。また、長崎市原爆被爆者健康管理センターで被爆者の健康管理の手法を熱心に聞くとともに、健康診断の様子も見学しました。恵の丘長崎原爆ホームでは被爆者養護の状況を視察したり被爆者から悲惨な被爆体験を聞いて、核実験で汚染された同国の被災者に対する思いを新たにされた様子でした。

サギン・カレル次官は「被爆者に対する健康管理手当のような制度はカザフスタンにはない。カザフスタンではGNPの2%しか保健に使われていない。ぜひ経済発展をとげてこのような制度を取り入れたい。」と語っていました。



井石哲哉NASHIM会長を訪問

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第13号
発行／平成15年10月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail　info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol. 14
2004
SPRING



第5回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

Report ---】　第5回永井隆平和記念・長崎賞

講演会　-･-･･.　「がんばらない」けど「あきらめない」
一命・家族・地域・チェルノブイリを語る－

From Korea.　韓国から医師等を招聘

Report ･･-･･････　大韓赤十字病院視察報告

Information ･.　ナシムが大韓赤十字社から感謝牌
JICA研修員が来崎

Report

第5回永井隆平和記念・長崎賞

2月13日、今回で第5回目となる永井隆平和記念・長崎賞を、日本チェルノブイリ連帯基金（本部　長野県松本市　鎌田實理事長）に授与しました。



井石哲哉ナシム会長から賞状を授与

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、原子爆弾による被爆者と放射線被ばく事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を隔年毎に贈っています。

日本チェルノブイリ連帯基金は、チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するため平成3年（1991年）1月に設立され、日本全国の多数の一般市民を会員にして募金活動を行い、それらをもとにチェルノブイリ原発事故被災地に10年以上にわたり医薬品や医療機器を贈り、現地の医師たちと交流し、現地医療水準の向上に草の根的に努めてきています。これはチェルノブイリ原発事故被災地NGOの中で特筆すべき貢献であり、今後の更なる活躍が期待されることから今回の授賞となりました。

授賞式には、金子原二郎長崎県知事や内田進博長崎市助役をはじめ、医師会、病院、研究機開などからたくさんの医療関係者に出席していただきました。
また、ご推薦いただいた信州大学から小宮山淳学長や永井隆博士の次女の筒井茅乃さんも受賞のお祝いに駆けつけてくださり、授賞式後の祝賀会では受賞者を囲んで和やかな歓談が続きました。

永井隆博士の次女・筒井茅乃さんのご挨拶

「父が長野県内での学会に出席したとき、列車の窓から見た茅葺きの家のある風景がとても気に入ったそうです。『茅野』（ちの）というところだったそうですが、あまりにも気に入ったので、生まれてきた子どもの名前を『茅野』と付けようとしましたが、野原の“野”ではあまりにありふれているので、乃木大将の“乃”の字をお借りして『茅乃』（かやの）というふうにしたと、兄が亡くなる数年前に兄から聞いたことがあります。

今回、永井隆平和記念・長崎賞という父の名前の付いた賞を受賞した日本チェルノブイリ連帯基金の理事長さんが勤務されている諏訪中央病院が、茅野市にあるというのも、何かご縁のようなものを感じます。

日本チェルノブイリ連帯基金の今後のさらなるご活躍をお祈りいたします。」



筒井茅乃さんが受賞者に花束を贈呈

授賞式では、日本チェルノブイリ連帯基金を代表して鎌田實理事長は「自らを犠牲にしながらも、原爆で負傷して苦痛にあえいでいる人たちを治療し続けた永井博士の精神に医療の原点を感じます。今後、チェルノブイリ原発事故被災地で医療が充実していない地域での検診や、幼児期や働き盛りに被害にあった世代の健康のチェックあるいは治療につなげるシステムづくりに尽くしていきたいと思います。」と、抱負を語りました。



日本チェルノブイリ連帯基金の活動を紹介

受賞者紹介

1. 団体名　日本チェルノブイリ連帯基金（鎌田　實理事長）
2. 主な経歴

1991年1月	日本チェルノブイリ連帯基金設立
1992年10月	ベラルーシ共和国保健大臣より表彰
1994年5月	第1回信毎賞受賞（信濃毎日新聞社主催）
2000年4月	フランチェスカ・スコーリヌイ勲章受賞

3. 主な活動歴

チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するために、これまで72回の訪問団を派遣している。

主な医療支援活動は以下のとおりである。

1）小児甲状腺がんの診断・治療

・ベラルーシ共和国ゴメリ州で児童の甲状腺検診を行い、ハイリスクの子供たち23人を日本に招聘し、精密検査を行った。

・1991年～1998年、ミンスクの第一病院に小児甲状腺疾患の診断と治療のために専門医を派遣し、診断機器や手術機材を贈った。

2）小児白血病の診断・治療

・1991年より、高汚染地の子どもたちの免疫能調査（NK細胞の活性異常）を行った。

・ゴメリ州立病院小児血液病棟に入院している年間のべ100人の血液疾患の子どもたちの診断・治療のために専門医の招聘研修、医薬品・医療機器の供与、日本からの専門医の派遣を行っている。

一1997年より、ゴメリ州立病院移植部で、白血病の集中治療、末梢血幹細胞移植をサポートしている。

3）医療環境の整備

・検査の充実を図るための機器や試薬の供与、検査技師のトレーニング。

・信州大学医学部医療情報部が行っている遠隔地医療の衛星通信システムで、ゴメリ州立病院、ミンスク小児血液がんセンターを結び、診断・治療のカンファレンスを行っている。

4）新生児支援

事故当時の少女達が出産適齢期を迎えているため、安心して出産できる医療環境の整備と周産期医療の充実のために専門医を派遣している。

5）児童健康診断

高汚染地のボレーシェ学校で、全校児童150人の甲状腺と血液検査を定期的に行っている。


高汚染地の学校で健康診断を実施

第5回永井隆平和記念・長崎賞受賞記念講演会

「がんばらない」けど「あきらめない」

― 命・家族・地域・チェルノブイリを語る ―

平成16年2月13日、長崎原爆資料館で開催した講演会での
鎌田實日本チェルノブイリ連帯基金理事長の講演の一部を次のとおりご紹介します。

チェルノブイリ原子力発電所が1986年4月26日未明に大爆発をして、風が北側に吹いていたために、北へ北へ汚染地帯が広がって行きました。

ウクライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所の事故は国境を越えて北側のベラルーシ共和国に主に汚染が広がって行きました。その汚染の最も厳しいゴメリという州の基幹病院を中心に、私が信州でやってきたような地域医療という手法を使って、そこに住んでいる人々たちの健康を守れないだろうか、命を守れないだろうかと考え、市民グループとして14年間行ってきました。これまでに72回、医師団を現地に派遣しております。

21世紀に入っても永井先生が描いていた平和への期待はますます薄らいでおり、戦争は無くなっていません。私たちは信州大学や長崎大学の先生たちの学問的バックアップを受けながら、人間と人間はつながれるんじゃないか、国境があっても、民族が違っても、宗教や言葉・文化が適っても、人間と人間は必ず理解できると思ってきました。それは永井隆先生がたくさんの書物の中の端々で、言葉として残されています。

永井先生は大学人でありながら、原爆が落ちた時に巡回診療という形で地域の、放射能で被爆された方々の命をなんとか支えたいと思って外へ出られ、永井先生だけでなく、多くの医療人が命を落としかけている人々を一人でも救いたいと思って、永井先生の言葉で言えば、「原子野」の長崎へ医療人たちが出ていきました。たくさんの医療人が、医療の原点みたいなものを大切にしながら、この地域で人々の命を救おうとしました。

ベラルーシ共和国の中でもやはり、何人もの先生たちが子どもの命を救おうとして命がけで仕事をしています。その仕事を私たちがボランティアとして応援をしてきました。

永井先生は自分が慢性骨髄性白血病に冒されていて、そのことをよく承知していて無理はできないとよくわかっていながら、「飛田」という地域から診に来てくれと言われると、一時ためらってしまいます。永井隆先生ですらやはり人間で、とても行けないと思っていても心は揺れていて、困っている人がいる以上行こうと決心します。結局無理をされて行かれて昏睡状態になられて、命を失いかけてしまいます。

今年1月、ある新聞で全国の世論調査が行われ、日本の医療に対して国民がどう見守っているかという世論調査が行われました。私が頼まれてそのデータの分析をしながら論説をしましたけれども、現在の医療に対して6割の国民が不満足というか、満足していない、という結果でした。そうだろうなと思います。本当はもっと国民から信頼されている医療を展開しなければならないはずなのに、何かどこかで、ボタンの掛け違いが起き始めています。

医療の原点として、この長崎では原爆が投下された時、自分の命ですら危ない時に、苦難の中にいる人の命を救おうとしている医療人たちがいらっしゃいました。それは永井先生だけではなく、たくさんの医療人が命を救おうとして必死に働きました。実は今も本当はマスコミが批判するよりは、たいへん厳しい状況の中で、多くの若い医師や若い看護師たちが命を救おうとしています。永井先生の言われたことを医療人たちは時々はかみしめながら、医療の原点というものをもう一度見直して、国民が望む医療、住民が望んでいる医療はどういうものかということを、考えなければいけないかなと思っています。



スライドを使って熱心に講演される鎌田實理事長

宗教や言葉や文化を超えて人間は理解しあえるか

日本からチェルノブイリ原発事故被災地のベラルーシ共和国へ送った抗がん剤で、白血病を克服できた子どももいましたが、薬だけでは完治できない難治性白血病の子どもの命を救うために、今まで九人の子どもに、末梢血幹細胞輸血という初歩の移植療法を行いました。この方法だと、自分の細胞の移植なので、拒絶反応が少ないのです。しかし、治療のかいなく、ひとりの子どもが死にました。

その子どものお母さんが、今どう思っているのか、ずっと気になっていました。悲しみがあれば、その悲しみを聞いてあげたい、と思っていました。

ベラルーシ共和国の田舎の町で、死んだ少年アンドレイのお母さんから意外な話を聞きました。

「私には忘れることができない人がいます。日本から、移植療法の看護を指導するために来た、若い看護師さんがいたでしょう。」アンドレイは、1997年2月14日、移植を受けました。それから4、5日、熱と口内炎のために、全く食事がとれなくなりました。母親として、見るに耐えない光景でした。日本から来た看護師さんが食事を工夫してくれました。

『何が食べたい？』、アンドレイの返事はありませんでした。

『何なら、食べられるの？』、何度も聞かれたアンドレイが小さな声で答えました。『パイナップル……』、アンドレイは、それまでに1度だけ、パイナップルを食べたことがありました。

ベラルーシ共和国は経済が崩壊して、お店に行っても何もありません。ましてや、寒い国、パイナップルなんて、自国ではできません。

日本の若い女性は、マイナス20度に凍った町へ出かけて、見つけてきたのです。アンドレイ少年はパイナップルを食べました。それをきっかけに彼は1度元気になり、退院しました。

10か月後、白血病が再発して、アンドレイは死にました。お母さんは、思い出し、ちょっと涙ぐみながら語りました。

「でも、私たち家族は、2月の雪の町を、パイナップルを探し回ってくれた、日本の女性がいたことを忘れません」

人間は、命が助からなかったときだって感謝し、理解しあうことができます。国が違っても、文化が違っても、宗教が違っても、理解しあえるんだと思いました。





大腸癌が肝に転移し、命という事を考えなくてはいけない時です。　講演会に参加させていただき、これからの希望にしていきたいと思います。ありがとうございました。

（50歳代・女性　主婦）

私も肺癌の手術をし、放射線治療を受けていましたが、最近退院して家庭で療養中です。なげやりな日々でしたが、今日の感動的なあ話を聞いたのをきっかけに、今後は一日々を大切にして生きていきたいと思います。

（50歳代・女性　会社員主婦）

癌患者にとって、いかに家族の愛やきずなが必要かということがわかりました。
白血病患者の救援活動が72回も行われているということに驚き、今後もがんばってもらいたいと思います。

（60歳代・女性　主婦）

鎌田先生から直接お話が聞けて、今日はとても感激しています。鎌田先生のような考え方をされる先生がなかなか身近にあらず、日々の仕事にむなしさを感じる時が多いです。今日は少し癒されました。

（30歳代・女性　病院関係者）

最後の方のパイナップルの話が印象的でした。永井先生が大好きで、先生の本を何度も繰り返し読んでいます。永井先生の魅力とは何でしょう。それは病気をみるのみでなく、人間をみるという姿勢、そして人間を愛する思いでありましょう。

（20歳代・女性　学生）

From Korea

“アンニョン　ハシムニカ”

韓国から医師等を招聘

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、今年度後期に韓国から12月と3月に看護師4名、事務職員4名の計8名が来崎しました。

研修者一行は長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館をはじめ、平和公園や、原爆落下中心地などを見て回りました。
その後、ナシム会長を訪問し、県庁で原爆被爆者対策の説明を県や市の職員から受けました。

研修二日目からは、日赤長崎原爆病院や長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」、長崎大学病院、放射線影響研究所、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研修や視察を行いました。



「かめだけ」で入所者を慰問



長崎大学附属病院で看護状況を視察

ソウル赤十字病院の文淑子看護師長は、「患者に関することですが、一週間分の薬を自分が管理して服用しているという話を聞いてとても驚きました。韓国の病院では、1日ずつ、決まった分を飲むよう指導しなければなりません。そうしないと、一度にたくさん飲んでしまったり、また全く飲まない患者がいるために、とても困ります。お風呂の使用については、有料です。なぜかというと、患者の家族も使用する場合が頻繁にあるためです。こちらの病院で浴室使用規則が徹底して守られているのは、患者たちに限ったことではなく日本の国民性から出ているのではないかと思われます。」と感想を述べられました。

2003年度・後期　韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所　属	職　名	姓　名
11月30日～12月6日（7日間）	ソウル赤十字病院	看護師長	文　淑子 ムン・スッチャ
	大邱赤十字病院	看護師長	黄　貞愛 ファン・ジョンエ
11月30日～12月4日（5日間）	仁川赤十字病院	庶務課長	千　萬錫 チョン・マンソック
	大韓赤十字社政策企画課	幹　事	李　東洙 イ・ドンス
2月29日～3月6日（7日間）	大邱赤十字病院	看護課長	朴　美鶴 パク・ミハク
	陜川原爆被害者福祉会館	看　護　師	姜　美敬 カン・ミギョン
2月29日～3月4日（5日間）	大韓赤十字社	南北交流局長	李　宗根 イ・ジョングン
	〃	在外同胞課長	金　尚裕 キム・サンユ



ソウル赤十字病院を視察

大韓赤十字病院視察報告

日本赤十字社長崎原爆病院看護部長
中　尾　　初　美

今回、図らずも長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）による専門医師等派遣事業の一環として、在韓被爆者への医療を提供している大韓赤十字社のソウルと大邱の赤十字病院を視察する機会を得たのでご報告いたします。

韓国から被爆者医療の研修で来られる大韓赤十字病院の看護師を円滑に受け入れるにあたり、韓国の病院事業や看護体制を把握し、実際の看護現場の様子を把握しておくことはたいへん重要であり、今回の視察となったものです。

期間は平成16年2月24日～26日の3日間で、同行者は長崎大学附属病院下田澄江看護部長、日本赤十字社長崎原爆病院中島誠司医療社会事業係長、ナシム事務局草場里見書記の計4名でした。

まず最初に、大韓赤十字本社を訪問し、朴　炳大事務総長を表敬訪問しました。朴事務総長は、「ナシムが韓国の医師等の研修受け入れを長年行っていることにたいへん感謝しています。在韓被爆者のために役立っています。」とお礼を述べられました。次に韓国の被爆者の援護事業を実施している特殊福祉事業所を訪問し、ペ・ファンス所長ら職員たちと懇談しました。その中で、長崎の高島炭坑で被爆した人のことを書いた小説が「カマギィ」（からす）という名前で出版されているとして、実際に現物を見せていただきました。日本語訳でぜひ読んでみたいと思いました。

さて、大韓赤十字病院は全国に6病院あるそうですが、今回はソウルと大邱の2病院を訪問しました。ソウル赤十字病院は1905年創立で実働病床299床の総合病院です。13診療科で医師は55名、看護師は91名です。大邱赤十字病院は1945年創立で実働病床134床、6診療科で医師は9名、看護師は36名です。

いずれも赤十字の愛と奉仕の原則に沿った活動を旨とし、外国人労働者やホームレスの人々の健診、入院治療、独居老人の介護などいわゆる恵まれない人たちを主な対象に医療活動をしています。

被爆者医療はその中のひとつとして位置づけられ、ソウル赤十字病院では、昨年1年間に外来延べ380名、入院1～3名／月の治療が行われていました。大邱赤十字病院では、訪問した時、4名の被爆者が喘息、慢性閉塞性肺疾患、関節炎などで入院中でした。近郊の陜川原爆被害者福祉会館と連携し、必要な時に入院治療をしているそうです。

また、私たちが大邱赤十字病院を訪問すると聞いて、長崎原爆病院や長崎大学病院で渡日治療を受けた韓国原爆被害者協会女性会の金会長他会員2名が、病院に訪ねて来てくださいました。検査を受けたが痛みの症状はまだとれないとつらそうでした。流暢な日本語を話され、しばし長崎の思い出話に花が咲きました。

最後に、日本の病院と違う点をご紹介しておくと、病室の各ベッドの下に付き添い者用ベッドが置かれセットになっていること、ボランティアが大勢活躍していて、その中には運転免許違反で裁判所から社会奉仕の命令を受けて来た人もいること、韓国のほとんどの病院は建物の中や敷地内に立派な葬祭場を持っていて、亡くなられた方はそこで葬式を済ませるのが一般的であること、したがって、大邱市内では民間の葬祭場は1軒もないということでした。

在韓被爆者医療の現状と併せて、医療が国や文化の違いによって様々な形態をとっていることを学んだ3日間でした。



大邱赤十字病院を視察

Information

ナシムが大韓赤十字社から感謝牌



感謝牌

1905年10月27日に創立された大韓赤十字社は昨年98周年を迎えましたが、創立98周年記念式が行われた10月27日、ナシムは、大韓赤十字社の徐英勲総裁から「事業支援」部門で感謝牌を授与されました。

大韓赤十字社が求めている人道主義精神の具現と、韓国人被爆者のための惜しみない支援に感謝するという意味で、感謝牌を贈呈することにしたとのことです。



井石哲哉ナシム会長へ感謝牌を贈呈

ナシムは平成7年度から毎年、韓国の医師や看護師等を被爆者医療研修に招いており、15年度末現在その数は45名に上っています。

感謝牌には「貴協力会は、赤十字の人道主義運動に積極的に関与され、人々の苦難の軽減と福祉の増進に大きく寄与されたので、深甚なる感謝の意を表します。」と書かれています。

感謝牌を贈呈された井石哲哉ナシム会長は「今後とも世界のヒバクシヤのために貢献したい」とお礼を述べました。

JICA研修員が来崎

旧ソ連で核実験が多数行われ、「世界の核汚染地」の一つとなっているカザフスタン共和国・セミパラチンスク地域の医療改善のため、地域医療改善計画、管理手法を習得することを目的として、カザフスタン共和国から4名の医師団が昨年10月来崎しました。

研修員はアンダグロフ東カザフスタン州保健局長をはじめ、チウビリョフ東カザフスタン州立診断センター院長、サンディハエフ東カザフスタン州立癌センター院長、トゥルタエフ東カザフスタン州立アカデミー付属病院長の4名で、独立行政法人国際協力機構（JICA）の事業により、「保健行政」研修の一貫として来崎したもので、県の福祉保健行政の説明や長崎市から原爆被爆者行政についての説明を受けた後、長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設で遠隔医療支援システムを視察しました。

また、長崎市原爆被爆者健康管理センターで被爆者の健康管理の手法を熱心に聞くとともに、健康診断の様子も見学しました。恵の丘長崎原爆ホームでは被爆者養護の状況を視察した後、被爆者から悲惨な被爆体験を聞いて、核実験で汚染された同国の被災者に対する思いを新たにされた様子でした。

また、日赤長崎原爆病院では日本の進んだ医療現場をたいへん興味深そうに視察していました。



長崎市役所で原爆被爆者行政について説明を受けたカザフスタンからの研修員

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第14号
発行／平成16年3月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol. 15
2004
AUTUMN



チェルノブイリ原子力発電所を視察
（後方の建物が事故を起こした4号炉）



ウクライナのグリシチェンコ外務大臣を表敬訪問

Report …… ウクライナをナシム会長・副会長が訪問
Report …… チェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修
People …… 研修後の感想
From Korea …… 韓国医師等と被爆者医療で交流
公開セミナー …… 放射線災害の緊急医療について考えよう
Information …… ウクライナのグリシチェンコ外務大臣が長崎を訪問
図書出版

Report

ウクライナをナシム会長・副会長が訪問

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（略称NASHIM ナシム）は、毎年、旧ソ連時代に数多くの核実験が行われたカザフスタン共和国やチェルノブイリ原発事故周辺国へ専門家を派遣し、現地医療機関や研究所で放射線被ばく者の医療などに従事する医師や研究者たちと情報交換を行ったり、医療技術の指導や長崎でこれまで受け入れた被爆者医療研修生のフォローアップなどを行ってきました。

今年はナシムから井石哲哉会長（長崎県医師会長）と齋藤寛副会長（長崎大学長）、事務局の草場里見書記（長崎県）と松田久美子書記(長崎市）が8月25日～30日の6日間ウクライナを訪問しました。また、長崎大学から高村昇助教授、イリヤ・シデロフ大学院生にも同行していただきました。



内分泌代謝研究所を訪問

ウクライナ

ウクライナは国土面積が60万3,700㎢で日本の約1.6倍、人口は4,800万人です。首都はキエフで、主要産業は農業、鉄鋼業、造船業です。第二次世界大戦末期、ソ連の対日参戦問題などについて3ヵ国の首脳が会談したところとして知られるヤルタや、19世紀半ば、看護師ナイチンゲールがロシアとトルコ・英仏との戦争で敵味方の区別なく負傷者を看護した地 クリミヤ半島はこのウクライナにあります。

ウクライナ人は現在長崎県内に30名住んでおり（H15.12末現在）、うち3名は長崎大学に留学中です。

なお、ウクライナは、1991年の独立時には世界第3位の核保有国でしたが、1996年には旧ソ連から引き継いだ核兵器すべてを撤去し、現在非核保有国になっています。

ウクライナ外務大臣を表敬訪問

今年6月、ウクライナのコスチャンティン・グリシチェンコ外務大臣が来日し、川口外務大臣との会談に先立ち長崎県を訪問して金子知事や伊藤長崎市長と会談したほか、ナシムの井石会長、齋藤副会長等ナシム関係者とも懇談を行いました。今回のウクライナ訪問では、訪問団が在ウクライナ日本大使館のご協力を得て、キエフのウクライナ外務省にグリシチェンコ外務大臣を表敬訪問することができました。



放射線医学研究所

会談では、グリシチェンコ外務大臣が「ウクライナはチェルノブイリ原発事故の悲惨な経験を有する国民として、長崎市民が数十年前の悲惨な出来事を生き抜いたことを良く理解するとともに深く同情している。ウクライナ政府はチェルノブイリ原発事故の被災者の保護を国家の優先戦略としており、この点からナシムがウクライナの関係機関へ協力している姿勢を高く評価している。」と述べられました。井石会長は長崎とウクライナの関係機関との協力関係がますます密接になるよう、大臣に側面からの支援を要請しました。

在ウクライナ日本大使を表敬訪問

また訪問団は、今回のウクライナ訪問にあたって現地で関係機関と日程調整等の協力をいただいた在ウク

ライナ日本国大使館を表敬訪問し、天江大使をはじめとするスタッフの方々にお礼を述べました。席上、天江大使はウクライナ国内の医療機関の現状を説明するとともに、チェルノブイリの悲劇が風化しないよう今後とも協力が必要であると述べるとともに、ナシムや長崎大学医学部のこれまでの活動にお礼を述べられました。

また、訪問最終日には、日本大使館会議室で現地のマスコミ関係者を集めて記者会見を行い、熱心な質疑が行われました。

関係機関訪問

期間中、訪問団はナシムが毎年夏に実施している被爆者医療研修に職員を派遣している内分泌代謝研究所と放射線医学研究所を訪れました。内分泌代謝研究所ではトロンコ所長からチェルノブイリ原発事故発生後現在までの研究所の活動内容についての説明がありました。また、放射線医学研究所ではベベシュコ所長をはじめとする研究所のメンバーから暖かい歓迎を受けた後、意見交換を行うとともに、研究所内を視察しました。併設されている病院にはチェルノブイリ原子力発電所爆発事故の消火活動を行って被ばくした元消防士が入院しており、事故後18年経ってもなお被ばくの後遺症で苦しんでいるのを見て、放射線事故の悲惨さをあらためて実感しました。

さらに訪問団は、キエフ市内のチェルノブイリ被災者のための健診センターを総合管理しているキエフ市保健局を訪問し、被災者の健康管理の現状について説明を受けました。



古都キエフ市内には美しいキリスト教会が多い

チェルノブイリ原子力発電所視察

チェルノブイリ原子力発電所は、首都キエフから北に車で約2時間半のところにあります。広大な敷地に発電所が立ち並んでいましたが、発電所のすべての炉は2000年末に稼働停止しました。事故を起こした4号炉はコンクリートの石棺で覆われていますが、老朽化のために放射能漏れが懸念されており、現在さらに新たなドーム型石棺の建設を予定しているとのことでした。4号炉のすぐそばにある資料展示室では、職員から事故の様子の説明を受け、爆発炎上した原子力発電所事故が周囲に与える影響の甚大さを痛感しました。

また、チェルノブイリ原子力発電所視察の帰りに、チェルニゴフ州立健康管理センターを訪問しましたが、訪問団一行がセンターに到着すると、オーロフィノスカヤ所長以下職員多数が玄関前で到着を待ってくれており、現地のテレビ局まで取材に来ていました。遠い日本で原子爆弾の被害を受けた長崎から医師団が、同じ放射線被ばく地である当地を訪問することに地元でも大きな関心を持っていることを実感しました。



チェルノブイリ原子力発電所内の資料展示室

今回初めて長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の会長と副会長がウクライナを訪問し、現地の研究機関や政府機関等の責任者と大所高所からの意見を交換し、今後のナシムの活動の方向性について協議すると同時に、お互いの信頼関係を構築したことは、今後のナシムの活動にとって大きなメリットになることと考えられます。

Report

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修



歓迎レセプション

平成５年度から毎年実施しているチェルノブイリ・カザフスタン関連医師・専門家研修が、本年度も7月20日から8月24日まで、長崎大学医学部を中心に行われ、ベラルーシ共和国、カザフスタン共和国から各2名、ロシア連邦、ウクライナから各1名の計6名が参加しました。

研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、各研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。一般カリキュラムでは、放射線影響研究所や長崎市原爆被爆者健康管理センター、長崎原爆病院の視察をはじめ、恵の丘長崎原爆ホームの訪問、天草はまゆう療育園や玄海原子力発電所を見学した他、長崎大学の各関連教室で講義や実習を行いました。研修期間中1泊2日で訪れた熊本県天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、母国の現状を省みて大きな感銘を受けたようです。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせ、疫学や病理学などについて長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の各専門分野での研修を行いました。また8月9日の長崎原爆記念日には、平和祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。その前夜である8月8日には市民が平和の灯をともし、原爆の惨禍を忘れず、平和の尊さの意識を受け継ぐため平和公園で実施されている「平和の泉キャンドルライトアップ・ミニコンサート」に研修生として初めて参加し、カザフスタン共和国のダニエル・ムシノフ　セミパラチンスク医科大学教授が研修生を代表して多くの参加者の前で追悼の辞を述べました。


伊藤長崎市長を表敬訪問

研修生はいずれも、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を背負っていかれる方々ばかりです。将来の国際医療協力分野における良きカウンターパートになっていただけるものと思っています。ナシムでは今後とも長崎大学をはじめとした研修機関と協力しながら、本事業を継続し、発展させていきたいと考えています。

研修後の感想

People

◆マリーナ・コーノワ Marina Konova（ロシア連邦）

オブニンスク放射線医学研究所研究員（分子病理学）

研修の前半に訪れた原爆資料館や平和公園などの原爆関連場所では大きな衝撃を受けるとともに、各種医療機関を訪問した際には国家がいかに原爆被爆者に対して労力や資金を割いているかを実感しました。原爆ホームでは職員の方たちの入居者に対する愛情と心遣いに感動を覚え、暖かい気持ちにさせられました。

◆イリーナ・ドミトレンコ Iryna Dmytrenko（ウクライナ）

放射線医学研究所研究員（血液部門免疫遺伝学）

研修で強く印象に残ったのは重症心身障害児施設の訪問です。そこで働く職員たちの入所者に対する医療的支援や心配り、忍耐にはたいへん感動しました。私はキエフの職場で放射線被ばく者と非被ばく者の白血病発生に関する遺伝子破壊について研究しています。放射線誘因による癌発生の問題などで長崎大学原研の優れた専門家と意見交換したり、様々な学術的アプローチについて話し合ったりしたことはたいへん有意義でした。



財団法人 放射線影響研究所を視察

◆ワシーリ・ベリャコースキ Vasili Beliakouski（ベラルーシ共和国）

ゴメリ医科大学教授（腫瘍学・放射線医学）

我々はよく、日本のことを「陽が昇る国」と言います。今回の滞在中、私は、太陽が単なる日本のシンボルではなく、苦痛を乗り越え、未曾有の悲劇から立ち直った日本人の精神的シンボルでもある、ということを感じました。このような機会を与えてくれたナシムには心より感謝しています。また長崎滞在中に出会った多くの人々にも感謝申し上げたいと思います。

◆セルゲイ・デニソフ Sergei Dzianisau（ベラルーシ共和国）

ベラルーシ医科大学副学長・教授（解剖学）

研修で重要だったのは、長崎県知事や長崎市長、長崎大学学長及び医学部長、それにナシム会長といった方々への表敬訪問です。これらの訪問は我が国の問題に対して関心を持っていただく役割を果たしたと思っています。そのことは長崎の新聞やテレビが私たちに関心を示していた、ということからもわかります。研修のプログラムは私の学術的・教育的関心によくフィットしていましたし、教育カリキュラムの作成や医学教育制度の充実といった私の管理事務にもよく適合していました。

◆バヒトジャン・イサハノヴァ Bakytzhan Issakhanova（カザフスタン共和国）

セミパラチンスク病理診断局主任（病理学）

専門研修で非常に興味深い講義を聴き、その中で個別の病理的問題に対する新しい視点を知るとともに、最新のテクノロジーも知ることができました。日本は私たちが興味を持っているすべての事柄について快く情報を提供してくださり感謝しています。

原爆資料館や、死の床にありながらなお未来の同僚たちのためにできる限りのことをしてくれた永井隆博士の勇気が非常に印象深かったです。



天草・はまゆう療育園を視察

◆ダニエル・ムシノフ Daniyal Mussinov（カザフスタン共和国）

セミパラチンスク医科大学教授（腫瘍学）

私は、ソ連の核実験により40年以上にわたって放射線被ばくの影響を受け続けてきた人々が住むカザフスタン共和国セミパラチンスクの出身です。この地域では急速に腫瘍（がん）の頻度が増加しています。私は長崎の原爆被爆者に対して医療や福祉などでどのような援助がなされているかを知り、それはたいへん興味深いものでした。外科医である私のために多くの病院を見学させていただきましたが、実際に手術を見学させていただいたこともあり、たいへん有益なものでした。とても感謝しています。

“アンニョン　ハシムニカ”
韓国医師等と被爆者医療で交流


長崎市原爆被爆者健康管理センターを視察

ナシムでは、ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、平成７年度から韓国の医師や看護師等を長崎に招聘しておりますが、本年度も６月に医師２名、事務職員２名の計４名を招聘しました。大韓赤十字社職員以外にも、原爆被害者診療協定病院に指定されている釜山報勲病院から初めて医師１名を招聘しました。乳癌患者の乳房再建手術に関心を持っているソウル赤十字病院の白 種大（ペク　ジョンデ）外科専門医は、日赤長崎原爆病院で乳房の手術を視察し、たいへん興味深かったと感想を述べました。また人工透析室長をしている釜山報勲病院の韓 璟根 （ハン ギョングン）内科専門医は長崎市内で人工透析ベッド数の多い医院を視察し、医師と意見交換をして交流を深めました。韓国内の原爆被爆者に対する健康管理や福祉の増進事業を担当している大韓赤十字社特殊福祉事業所の張 頌雅（チャン ソンア）さんは長崎市役所の原爆被爆対策部で手帳交付事務の細かい説明を受け、韓国で原爆被爆者からの手帳交付申請に対する審査要領等を学びました。

またナシムでは、専門医師等派遣事業で９月６日～９日の４日間、長崎大学附属病院　小林初子副看護部長、日本赤十字社長崎原爆病院　江添郷子看護副部長、長崎市原爆被爆者健康管理センター　松尾恵美子中央検診所次長兼看護係長、NASHIM事務局　草場里見書記の計４名を韓国へ派遣しました。韓国から被爆者医療の研修で大韓赤十字病院等の看護師を円滑に受け入れるにあたり、韓国の病院事業や看護体制を把握し、実際の看護現場の様子を把握しておくことはたいへん重要であり、今回の派遣となったものです。

大韓赤十字社の林 光振（イム クワンジン）事務総長表敬訪問後、居昌赤十字病院、陜川原爆被害者福祉会館、統営赤十字病院を訪問し病院視察や看護事情についての意見交換を行いました。大韓赤十字病院はホームレスを含む最貧生活層の市民や外国人労働者に対して無料診療を行っているのが特徴ですが、まさに基本理念である人道や奉仕の精神を実践しているものといえるでしょう。病院を視察して気づいたことは、ナースステーション近くの白板に患者の氏名、年齢、病名、症状、手術名等のプライベートなことが病院訪問者からすぐ見られるような状態で掲載されていること、各病室に付き添い用の大きい冷蔵庫が１台ずつ置いてあること、ベッドの下に付き添い用の簡易ベッドが置かれてあることなどでした。また看護師数が少ないので、勤務がたいへん忙しいということでした。

今回の病院視察や看護師との意見交換等を通じて韓国の看護師の置かれている環境や勤務状況がよく理解され、今後、より在韓被爆者のニーズに即した専門家研修を行うに当たって、非常に参考になりました。


居昌赤十字病院を視察



統営赤十字病院を視察

2004年度・前期　韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所　属	職　名	氏　名	性別
5月30日～6月5日（7日間）	大韓赤十字社ソウル赤十字病院	外科科長外科専門医	白　種大　ペク・ジョンデ	男
	釜山報勲病院	内科科長内科専門医	韓　璟根　ハン・ギョングン	男
5月30日～6月3日（5日間）	大韓赤十字社ソウル赤十字病院	医　務　課　長	李　相千　イ・サンチョン	男
	大韓赤十字社特殊福祉事業所	在韓被爆者担当	張　頌雅　チョン・ソンア	女

2004年度・前期　専門医師等派遣事業・（韓国）派遣職員名簿

派遣期間	所　属	職　名	氏　名
9月6日～9月9日（4日間）	長崎大学医学部・歯学部附属病院	副　看　護　部　長	小林　初子
	日本赤十字社長崎原爆病院	看　護　副　部　長	江副　郷子
	長崎市原爆被爆者健康管理センター	中央検診所次長兼看護係長	松尾恵美子
	長崎県原爆被爆者対策課	係　長（副　参　事）	草場　里見

公開セミナー

『放射線災害の緊急医療について考えよう』

ナシムでは、ヒバクシャ医療や放射線に対する正しい知識の普及のため、一般市民向けのシンポジウムや講演会、写真展等を毎年夏に開催しています。

近年、原子力関連施設の事故や国際紛争により、放射線災害に対する国民の不安が高まってきており、不測の際の放射線災害について日頃からよく対策を講じておく必要があります。そこで7月31日、『放射線災害の緊急医療について考えよう』と題して長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設（原研）と共同で公開セミナーを、長崎原爆資料館で開催しました。

第一部の講演会では、財団法人原子力安全研究協会放射線災害医療研究所の衣笠達也副所長が「放射線災害医療の取り組み：原発事故などへの対応について」と題して講演を行いました。世界で起きた放射線災害の事例を紹介し、「放射線事故は思いがけない場所や状態から発生する。緊急医療体制は日頃から準備しなければ有効に機能しない」などと述べました。

次に、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の高村昇助教授が「世界のヒバクシャ：これまでの放射線被ばく関連事故」という題で、世界でこれまで行われた核実験や発生した放射線事故について、隣接する国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館のデータベースをもとに、わかりやすく紹介していただきました。

第二部では、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学を、追悼祈念館職員が案内する形で行いました。平和情報コーナーでは、長崎大学の高村助教授と三根真理子助教授にパソコン画面で緊急放射線被ばくデータベースや放射能Q＆Aなど被爆医療関連情報の説明をしていただきました。また、追悼空間では献花して被爆者の冥福を祈りました。

講演会後10日も経たない8月9日には、福井県の関西電力美浜原原子力発電所3号機で運転中に蒸気が噴出し、4人が死亡し7人が重軽傷を負うという痛ましい事故が発生しました。この事故は放射線漏れ事故ではなかったにせよ、事故に迅速に対応する緊急医療体制の整備の必要性を改めて痛感させられるものであり、緊急被ばく医療の重要性を再認識させられました。



衣笠達也 副所長が講演



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学



参加者が追悼空間で献花

来場者アンケート

ナシムの講演会はこれまでほぼ毎回参加していますが、今回は前回までと内容の変化があり、たいへん興味深く聞きました。被爆を学問的に理解し研究することの必要性を感じていますが、そこに世界のヒバクシャの苦しくてつらい思いを忘れないでほしいと思いました。

（40歳代　女性　公務員）

衣笠先生のご講演はたいへんわかりやすく理解を深めることができました。講演とは関係ありませんが、電離放射線健診を受けられる病院が少なく探すのにたいへん苦労しました。医療関係者ではないのでそういう情報もホームページ等で紹介して頂けると助かります。

（30歳代　女性　会社員）

放射線が身近な生活の中にどのような形で利用されているのかがわかるような講演があればよいと思いました。

（20歳代　男性　会社員）

ブラジルにおける放射線源紛失事故の話が印象に残りました。このような形で被害が拡がるとは知りませんでした。

（20歳代　男性　学生）

東海村の臨界事故は未だにはっきり覚えています。放射線事故がこれほど多いとは思っていませんでした。

（30歳代　女性　学生）

放射線事故に対する長崎県内の医療体制はどのようになっているか疑問を持ちました。

（20歳未満　男性　学生）

Information

ウクライナのグリシチェンコ外務大臣が長崎を訪問

6月9日、ウクライナからグリシチェンコ外務大臣が川口外務大臣との会談に先立ち長崎を訪れ、金子県知事や伊藤長崎市長を訪問し、さらにはナシムの井石会長や齋藤副会長等と懇談を行いました。グリシチェンコ外務大臣はチェルノブイリ原子力発電所事故との関係でウクライナに各種の医療支援を行っている被爆地長崎へ訪問したいと以前から希望しており、今回の訪日で実現した形となりました。県庁や長崎市役所では、金子知事や伊藤市長にウクライナ政府が今後も核軍縮に取り組んでいくと述べるとともに、知事、市長のウクライナ訪問を要請しました。また、ナシムの井石会長や齋藤副会長、長崎大学関係者、県、市の職員とも懇談を行い、チェルノブイリ原発事故後の医療支援に対してお礼を述べ、今後とも協力をお願いしたいとの発言がありました。



グリシチェンコ外務大臣と懇談

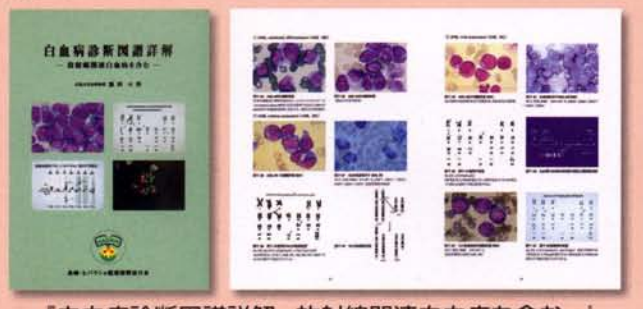
図書出版

ナシムは諸外国での放射線関係事故に関する図書の邦訳出版や長崎原爆関係図書の英訳出版、ロシア語の医学教科書出版などを行っています。今年は次の図書を出版して、関係団体等に無償配布しています。

『白血病診断図譜詳解－－放射線関連白血病を含む－』

鎌田七男　広島大学名誉教授著

本著は、白血病の基礎から臨床までの幅広い分野について、最新の情報を網羅したカラーアトラス集です。かつて不治の病として恐れられ、原爆被爆者に多発した白血病の病態を究明すべく、細胞から染色体、そして遺伝子の異常に到るまでを克明に記載しています。特に放射線関連白血病に関する章は、長年直接原爆被爆者に関わってこられた鎌田先生ならではの貴重な資料が提示されています。今後英語版、ロシア語版等に翻訳することで、世界の医師・研究者に活用していただく予定です。



『白血病診断図譜詳解－放射線関連白血病を含む－』

『原爆被災復興日誌』英訳版

翻訳　郭　芳村
監修　柴田義貞　長崎大学教授

本著は、故・調来助長崎大学医学部名誉教授が、原爆が投下された直後からの被爆者の救護や大学再建の模様を克明に記述した「長崎医科大学原爆被災復興日誌」を英訳出版したもので、英文タイトルは「A Physician's Diary of the Atomic Bombing and its Aftermath」です。翻訳したのは米国メリーランド州在住の台湾出身医師の郭芳村さんで、郭さんの兄芳徽さんは、長崎医科大学に留学中、大学構内で爆死しました。芳村さんが1955年に台湾から米国へ渡る途中、お兄さんの埋葬場所を探そうと長崎に立ち寄った際、埋葬時の様子などを教えてくれたのが調来助教授（当時）でした。本著は220部を米国の大学図書館や研究者に贈った他、国内の大学図書館や県内図書館などにも寄贈しました。



『原爆被災復興日誌』英訳版の表紙

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第15号
発行／平成16年10月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail　info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



大韓赤十字社　張　錫準事務総長を表敬訪問

Vol. 16
2005
SPRING

Report …… 韓国の医療機関等を訪問
From Korea …… 被爆者医療研修を 終えて…
Report …… ユリー・コステンコ駐日ウクライナ大使が長崎を訪問
Report …… チェルノブイリ関係国から管理職員来崎
Report …… ＪＩＣＡ研修員受け入れ
Information …… 永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集
アニメーション映画「アンゼラスの鐘」の製作を支援しよう

韓国の医療機関等を訪問

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、平成7年度から韓国の医師や看護師等を長崎に招聘し、被爆者医療の研修を実施していますが、今後の参考とするため韓国の医療関係者との情報交換、赤十字病院等の実情を把握するため去る11月と2月に韓国を訪問しました。



翰林大学聖心病院で日韓被爆者医療セミナーを開催

まず11月に訪問した翰林大学聖心病院（京畿道安養市）で「日韓被爆者医療セミナー」を開催しました。長崎側から朝長万左男 長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設教授が「原爆後障害研究の現状」と題して講演するとともに、古河隆二 日赤長崎原爆病院消化器科部長が「長崎原爆病院における癌患者の状況」を説明しました。韓国側からは在韓被爆者の事情に詳しい（社）人道主義実践医師協議会の会員3人が研究調査の成果を発表しました。韓国人原爆被爆者の健康実態現況について周 永洙翰林大学社会医学教室助教授、金 鎭國 大邱赤十字病院神経科長、全 炯俊翰林大学社会医学教室助教授が発表を行いました。韓国側は被爆1世の健康診断や設問調査の結果、被爆2世に対する設問調査の結果などを発表しましたが、日本側との意見交換で被爆1世の放射線量の把握の重要性を認識してたいへん有益だったと感想を述べました。また、日本側から朝長教授は「日韓の研究者間のセミナーで今回初めて被爆2世問題を扱ったが、韓国の2世たちの健康面や生活面に対する問題意識を共有できたことは大きな成果だった。」と感想を述べました。

仁川赤十字病院は結核療養病院（1940年創立）と京畿赤十字病院（1956年創立）が1993年に統合されてできた病院で、2002年に新館病棟が建設されています。ナシムの招聘で来崎したことのある梁 宙鉉院長と宋 基成管理部長が病院概要を説明した後、病院内を視察しました。

なお、訪問団一行は仁川赤十字病院の敷地内に建設されているサハリン同胞福祉会館の入所者を慰問しました。戦前、日本領だったサハリンには、当時、日本国民だった韓国の人々も労働者として多数移住していました。1999年に日本政府の支



仁川赤十字病院を視察



仁川サハリン同胞福祉会館に入所者を慰問

援で永住帰国者のために福祉会館が建設され、現在94名が入所しています（平均年齢83歳）。流暢な日本語で親しげに訪問団一行に話しかける人もいました。

また、2月にはナシムの井石哲哉会長（長崎県医師会長）が森秀樹 日赤長崎原爆病院副院長等とともに韓国を訪問しました。まず韓国人被爆者に対して福祉事業を行っている大韓赤十字社を訪問し、1月下旬に就任されたばかりの張 錫準事務総長（事務総長は日本赤十字社社長に該当）や裵 煥洙特殊福祉事業所長と懇談しました。張 錫準事務総長は、「ナシムはたいへんすばらしいことを行っており、長崎で研修を受けた人たちは韓国に帰ってから実際に研修の成果を生かしている。大韓赤十字社としても韓国の被爆者たちを積極的に支援していきたいと考えている。」と述べられました。

嶺南大学医学部附属病院は韓国に20ヶ所ある原爆被害者診療協定病院の一つで、昨年10月、同大学の金世東医学部長がナシム研修で来崎したのがきっかけで今回視察したものです。同病院は病床数が914床で、ＰＥＴが2台使用されているなど、先進医療を行う大邱市内でもトップ水準の病院です。韓国人被爆者が多数居住している陜川から近いこともあり、被爆者がよく診療に訪れる病院の一つです。尚州赤十字病院がある尚州市は慶尚北道の北西部にある都市で、人口は11万です。尚州赤十字病院は尚州市の代表的な病院で、病床数は265床、12診療科があります。金 元基院長と金 容吉管理部長の病院概要説明後、金 容吉管



嶺南大学医学部附属病院を視察

理部長が病院内を案内してくださいました。同病院は各種先進的な事業を行っており、地元新聞でたびたび紹介されています。たとえば、労使和合による病院運営、障害者に駐車場無料開放、一人暮らしの老人に対する無料訪問看護の実施、夏休みや冬休み期間、家庭が貧しくて昼食がとれない児童に対する食事の提供などです。また、老人の生きがい対策として病院内に長寿大学を開設し、余暇活用、自己発展、健康増進のための各種講座などを行っています。

大韓赤十字病院は日本の病院と比べて職員数が少ないこと、ホームレスや外国人労働者に対する無料診療等により経営が厳しい事情にあることなどがわかりました。しかし赤十字の基本原則である「人道」、「奉仕」を身をもって実践している医師や看護師、その他の職員たちにはどこか使命感にあふれるものを感じるとともに、地域住民たちからの信頼がかなり厚いという印象を受けました。



尚州赤十字病院を視察

韓国内での訪問先

11月22日～23日

大韓赤十字社本社
翰林大学聖心病院
仁川赤十字病院
仁川サハリン同胞福祉会館

2月14日～16日

大韓赤十字社本社
嶺南大学医学部附属病院
大邱赤十字病院
大邱医療院（大邱市立病院）
大邱市医師会
尚州赤十字病院

被爆者医療研修を 終えて…



日赤長崎原爆病院で病院概要を開く研修者たち



国立慶尚大学病院
放射線腫瘍科教授
蔡　奎英

長崎での７日間の研修のお陰で、新春はますます暖かさを増した。

多くの研修機関や原爆関連施設を関係者の皆様の暖かいご配慮により、とても気持ちよく訪問することができたし、好奇心の充足を楽しむことができた。

しかし、この春、私が享受している暖かさが被爆者の受けた苦痛を土台にして与えられたということを思うと、いつも複雑な心境になるのだった。

決してあってはならなかったその残酷な苦しみを人類を代表して担うことによって、世に向かって無言のメッセージを与えた被爆者の皆様に、一片の哀悼の念を抱くことさえ、なぜか自信がなかった。

ただ、国立原爆死没者追悼平和祈念館で日本の地に刻み込まれた深い傷の治癒をお祈りするメッセージを残すことで、少しは心が慰められた。

長崎を発った日は風がとても強かった。

原子爆弾が炸裂した現場はそんなに抽象的なものではなかった、強い爆風ですべてのものが徹底的に破壊されてしまったというメッセージが、私に必要だったのだろうか。

今、韓国人の私に残っているものがもうひとつある。

長崎のカステラのその甘ったるい味・・・・・



恵の丘長崎原爆ホームを訪問



長崎大学原爆後障害医療研究施設で研修

2004年度・後期　韓国人医師等受入研修者名簿

研修期間	所　属	職　名	氏　名
10月24日～10月30日（7日間）	ワレス記念浸礼病院　病院長	病院長　脳神経外科	イ・ドンニョル 李　東烈
	嶺南大学医学部	医学部長　整形外科	キム・セドン 金　世東
10月24日～10月28日（5日間）	大韓赤十字社　陜川原爆被害者福祉会館	社会福祉士	ソ・ジョンヒ 徐　貞姫
	大韓赤十字社　特殊福祉事業所	在韓被爆者担当	パク・ソンヒ 朴　省喜
1月16日～1月22日（7日間）	大韓赤十字社　大邱赤十字病院	神経科長	キム・ジングック 金　鎭國
	翰林大学医学部　漢江聖心病院	助教授　産業医学科	チョン・ヒョンジュン 全　炯俊
1月16日～1月20日（5日間）	大韓赤十字社　ソウル赤十字病院	管理部長	ユン・ヘースック 尹　惠淑
	大韓赤十字社　陜川原爆被害者福祉会館	館長	イ・ウドン 李　宇東
3月6日～3月12日（7日間）	国立慶尚大学病院	教授　放射線腫瘍科	チェ・ギュヨン 蔡　奎英
	大韓赤十字社　尚州赤十字病院	外科科長	ソン・ジュンホ 宋　俊昊
3月6日～3月10日（5日間）	大韓赤十字社 尚州赤十字病院	広報係長	ソ・インボム 徐　寅範

Report

ユリー・コステンコ 駐日ウクライナ大使が長崎を訪問

去る11月18日、ユリー・コステンコ駐日ウクライナ大使が長崎県医師会を訪問して、井石哲哉会長（ナシム会長）や長崎大学医学部関係者と会談を行いました。

ウクライナにはチェルノブイリ原子力発電所事故の被害者が多く、ナシムはこれまでにウクライナから16名の医師や研究者を被ばく者医療の研修に招いています。また同国には発電所事故により小児甲状腺癌患者が多く、このためロシア語による甲状腺関係の医学教科書を出版してウクライナの病院や研究所で働く医師たちに無償で配ったりしています。また長崎からウクライナへ専門家を派遣し、被ばく医療技術の向上に努めています。

コステンコ大使はこうしたナシムのこれまでの支援に対し改めて感謝の意を伝えるとともに、今後の協力のあり方について協議するため長崎を訪問されたものです。

大使は、「被爆地・長崎から若い医師もウクライナへ行って、ウクライナの医師にいろいろ教えてほしい。チェルノブイリ原発事故から20周年となる2006年には首都キエフで政治や科学などの分野で様々な会議を予定している。日本やウクライナだけでなく他の国々も参加する予定である。

2006年にはウクライナだけが20周年事業を行うのではなく、日本でも開催してほしい。

被爆60周年となる2005年には平和祈念式典にぜひ私を招待してほしいと本日長崎市に申し入れたが、承諾をしてもらったところである。2006年の20周年祈念行事には井石会長もぜひ参加してほしい。」と述べられました。

コステンコ大使は長崎大学を訪問して齋藤寛学長に同大学の医学部が行ってきたこれまでの支援に感謝されるとともに、県庁や長崎市役所も訪れ、6月に同国のグリシチェンコ外務大臣が金子知事や伊藤市長に要請したウクライナ訪問について、重ねて要請されました。

また、大使はかつてゴルバチョフ大統領が訪問したことのある長崎市内のロシア人墓地を訪れ、ウクライナ人の墓に献花をされました。



田中裕司　長崎県副知事を訪問



井石哲哉 長崎県医師会長（ナシム会長）を訪問

チェルノブイリ関係国から管理職員来崎

ナシムは毎年夏にチェルノブイリ関係国及びカザフスタンから医療従事者を招聘し被ばく者医療の研修を実施しているところですが、この研修が円滑に実施できるよう、研修に職員を派遣している大学や病院、研究所の管理職員を長崎に招聘し、長崎原爆の実相を把握していただくとともにナシムの事業に理解を深めてもらうこととしています。管理職員研修は平成14年度から隔年で実施しており、2回目となる今年度は10月3日から10月11日までの期間で実施しました。



齋藤 寛 長崎大学学長（ナシム副会長）を訪問

招聘したのは、ロシアのオブニンスク放射線医学研究所からエフゲニー・ルシニコフ臨床形態学部長、ウクライナのジトミール州北西部診断センターからヴァレリー・ダニリュク院長、ベラルーシのゴメリ医科大学からセルゲイ・ジャバラナク学長の3人の先生方です（カザフスタンからは都合により不参加）。

一行はまず東京の財団法人 笹川記念保健協力財団を訪問して紀伊國献三理事長と会談しました。3人はいずれも財団が行っているプロジェクトに関係しており、今後の包括的なチェルノブイリ支援の観点から紀伊國理事長と意見交換を行ったものです。

長崎では最初に原爆資料館を見学しましたが、写真など多くの展示品を見て原子爆弾被害のすさまじさに強い衝撃を受けられたようでした。また、長崎大学原爆後障害医療研究施設、放射線影響研究所、日赤長崎原爆病院、長崎県福祉保健部を訪問し職員から業務説明を受けたり、原爆被爆者特別養護ホーム 「かめだけ」を視察しました。

この他、井石哲哉長崎県医師会長（ナシム会長）や齋藤寛長崎大学学長（ナシム副会長）を訪問し、ナシム事業に対してお礼を述べるとともに、被ばく者医療の研修はたいへん役に立っており今後も継続してほしいと述べました。



平和公園を視察

チェルノブイリ・カザフスタン管理職員名簿

氏　　名	性別	国　籍	所属・役職
Evgeny Lushnikov エフゲニー・ルシニコフ	男	ロシア	Medical Radiological Research Center of Russian Academy of Medical Sciences Head of the Clinico-Morphological Department オブニンスク放射線医学研究所　臨床形態学部長
Valeriy Danylyuk ヴァレリー・ダニリュク	男	ウクライナ	Oblast Interrayon Diagnostic Center in Korosten City Chief Physicianm ジトミール州北西部診断センター（コロスティン）　院長
Sergey Zhavaranak セルゲイ・ジャバラナク	男	ベラルーシ	Gomel State Medical University Rector ゴメリ医科大学 学長

JICA研修員受け入れ

カザフスタン共和国の北東部にあるセミパラチンスクという地域は旧ソ連時代の1949年8月から89年10月までの40年間にわたって、地上及び地下を含め約500回もの核実験が繰り返されてきたところです。この実験場周辺の人々は放射性降下物で汚染した空気や水、食物などにより健康に深刻な影響を受けており、この地域では乳癌や甲状腺癌の発病が他の地域に比べて多くなっています。ソ連崩壊後の経済の低迷や社会保障制度の混乱もあって、この地域の保健・医療体制は極めて不充分な状況にあるため、カザフスタン政府や国連から要請を受けた日本政府は、平成11年9月にセミパラチンスク支援東京国際会議を開催し、その結果、唯一の被爆国である日本は広島・長崎の経験と被爆者支援の実績を生かした医療支援を行うことが決定されました。

具体的にはＪＩＣＡがセミパラチンスク地域医療改善計画プロジェクトを平成12年度から開始し、無償医療機材供与や健診バスなどを利用した住民の健康診断などを行っています。長崎からも長崎大学医学部が専門家を派遣するなど積極的に協力を行っているところです。

ナシムはＪＩＣＡが招聘したカザフスタンからの研修員を12年度当初から受け入れていますが、今年度は10月5日から9日まで5名を受け入れました。ＪＩＣＡの「保健行政」研修に参加したのは、カディロバ・エングリク国立科学医療センター副センター長、クサイノバ・アイグル東カザフスタン州保健局次長、シャヤフメトバ・グルジャンセミパラチンスク看護大学総長、サガンディコバ・サガダットＪＩＣＡ調整員、ジュアスバエバ・ガリア看護協会会長で、長崎滞在中はナシムが招聘したチェルノブイリ関係国管理職員3名といっしょに研修を受けました。研修員は「日本の医療技術の高さに驚いた」「日本は人権を尊重する優れた国」「日本人は几帳面で規律正しく、責任感がとても強く親切だ」などと感想を述べました。



放射線影響研究所を視察



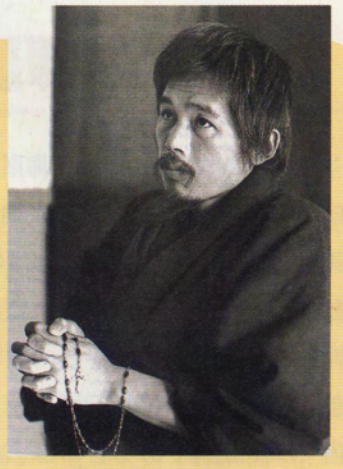
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を視察

ＪＩＣＡ研修員名簿

氏　　名	性別	国　籍	所属・役職
Kadvrova Englik カディロバ・エングリク	女	カザフスタン	国立科学医療センター 副センター長　　内科医
Kusainova Algul クサイノバ・アイグル	女	カザフスタン	東カザフスタン州保健局 次長　　小児科医
Shayakhmetova Gulijan シャヤフメトバ・グルジャン	女	カザフスタン	セミパラチンスク看護大学 総長　　内科医
Sagandykova Sagadat サガンディコバ・サガダット	女	カザフスタン	ＪＩＣＡ調整員 内科医　　リュウマチ医
Zhuaebaeva Galla ジュアスバエバ・ガリア	女	カザフスタン	セミパラチンスク保健局 看護チーフスペシャリスト　看護協会会長

Information

永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集



ナシムは、原子爆弾による被爆者と放射線被ばく事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を被爆50周年の平成7年度から隔年毎に贈っています。



昨年11月から候補者を募集していますが、今後、選考委員会、賞委員会を経て被爆60周年となる今年、第6回目の授賞を行う予定です。

～被爆60周年平和祈念作品～

アニメーション映画「アンゼラスの鐘」の製作を支援しよう

原爆投下直後の長崎で、自ら被爆しながら被爆者医療に尽力した医師の秋月辰一郎さんを主人公にした長編アニメ「NAGASAKI・1945～アンゼラスの鐘～」の製作が現在進められています。秋月さんは大正5年（1916年）長崎市万才町で生まれ、京都帝国大学医学部を卒業後、昭和15年6月から昭和16年4月まで永井隆助教授が部長を勤める長崎医科大学物理的療法科（現在の放射線科）の助手として勤務されています。原爆が投下された当時は爆心地から1.4kmの浦上第一病院（現在の聖フランシスコ病院）に医長として勤務しておられ、患者を診療中に原爆に遭われています。「巨大な衝撃」が病院はもちろん秋月さんの身体にまで加えられ、病院は大きく破壊されて秋月さんも負傷します。生き残った人々が苦悶する様子は秋月さんの著書「死の同心円」に生々しく記述されています。被爆者医療での貢献と長年の平和活動が評価され、平成7年に第1回永井隆平和記念・長崎賞を受賞されました。



映画の総製作費（1億5千万円）の半分の7,500万円を長崎で募金しようと、「アンゼラスの鐘」製作を支援するナガサキの会は市民に協力を呼びかけています。一枚1,000円で映画を鑑賞できる製作協力券をぜひたくさんの方たちに購入していただきたいと思います。

購入方法については、長崎事務局の長崎県映画センター（TEL 095-824-2974）へお問い合わせ下さい。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第16号
発行／平成17年3月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/
E-Mail　info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.17 2005 AUTUMN



第6回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

Report …… 第6回 永井隆平和記念・長崎賞
People …… 第6回 永井隆平和記念・長崎賞　受賞者紹介
Report …… チェルノブイリ・カザフスタン医師受入研修
People …… 研修後の感想「長崎で過ごした日々」
Report …… ジュネーブでのWHO・長崎大学COE共同セミナーに参加して
Information …… 核禁会議がNASHIMへカンパ金を贈呈、図書出版
Information …… 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会平成17年度役員異動／平成17年度の事業内容

Report

第6回 永井隆平和記念・長崎賞

7月25日、今回で第6回目となる永井隆平和記念・長崎賞を、市丸道人博士（長崎大学名誉教授）と横路謙次郎博士（広島大学名誉教授）のお二人に授与しました。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、原子爆弾による被爆者と放射線被ばく事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を隔年毎に贈っています。









井石哲哉NASHIM会長からブロンズ像を授与



永井隆博士の孫、永井徳三郎氏から花束贈呈



朝長万左男 長崎大学教授の特別講演

授賞式は長崎市のホテルニュー長崎で行われ、井石哲哉 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長から受賞された市丸博士と横路博士に賞状、ブロンズ像、副賞が授与されました。続いて、賞選考委員会委員の関根一郎 長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設教授に受賞者の功績を詳しく紹介していただいた後、永井隆博士の孫である永井徳三郎 長崎市永井隆記念館館長からお二人に花束が贈呈されました。

授賞式には、金子原二郎長崎県知事や内田進博長崎市助役をはじめ、医師会、病院、研究機関などからたくさんの医療関係者に出席して祝っていただきました。

また、特別講演として朝長万左男 長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設長から「半世紀を経てもなお持続する被爆者の健康障害」というテーマでご講演もいただきました。

受賞された市丸道人博士と横路謙次郎博士は、白血病や乳癌など放射線による発癌等の研究を積み重ねられ、被爆者医療の発展に多大な貢献をされたことや、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）の草創期からの中心メンバーとして核兵器廃絶運動に永年取り組んでこられ、世界平和に大きく貢献されたことなどが評価されたもので、原子爆弾被爆60年という記念の年に最もふさわしいものとなりました。

授賞式で、市丸博士は長崎医科大学卒業式の日に永井隆博士の自宅へご挨拶に行った時、永井博士から医師として出発する心得のようなものをいくつか話していただいた思い出を語られるとともに、横路博士は永井博士の崇高な精神を具現すべく、健康の許す限りIPPNW活動に邁進していきたいと抱負を語られました。

PEOPLE

永井隆平和記念・長崎賞
受賞者紹介



市丸　道人 博士（80歳）

サンレモ リハビリ病院長（佐世保市）・長崎大学名誉教授

・大正13年12月26日生まれ（北海道札幌市）
・昭和25年3月　長崎医科大学卒業
・昭和55年12月　長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設長（併任）
・平成2年3月　長崎大学を定年退官し、同年5月から長崎大学名誉教授
・平成3年～7年　佐世保市立総合病院長

主な活動歴

・昭和25年～　長崎医科大学卒業後は第二内科において血液内科学と原爆後障害医療の研究を開始し、白血病を研究テーマとして長崎における原爆後障害研究の中心となる。
・昭和48年～　厚生省原爆医療審議会の専門委員として被爆者に対する医療援護の充実に尽くす。
・昭和55年～　核戦争防止国際医師会議（IPPNW）に国際評議員として参画するとともに、長崎支部副支部長、顧問を務める。

学術上の貢献

血液学専門の内科医・研究者として、永年にわたって被爆者における放射線誘発性造血器腫瘍・癌の発生率を明らかにする疫学研究やその治療法の研究開発を行ってきた。中でも昭和25年頃から始まった白血病多発の実態を解明したことは卓越した功績と高く評価されている。



横路　謙次郎 博士（78歳）

広島県医師会腫瘍登録室長・広島大学名誉教授

・昭和2年4月11日生まれ（岡山県井原市）
・昭和27年3月　広島県立医科大学卒業
・昭和56年4月　広島大学医学部附属原爆放射能医学研究所長（併任）
・平成3年3月　広島大学を定年退官し、同年4月から広島大学名誉教授
・平成3年～6年　（財）放射線影響研究所顧問研究員（長崎研究所）

主な活動歴

・昭和28年　人体病理学及び実験的放射線発癌の研究を開始。
・昭和33年～36年　米国において放射線、化学物質及びウイルスによる発癌機序の実験的研究に従事する。
・昭和57年～　核戦争防止国際医師会議（IPPNW）に参画し、日本支部事務総長、日本支部副会長、全地域代表理事を務める。

学術上の貢献

実験病理学の専門家として永年にわたって実験発癌の研究に取り組み、特に放射線によって惹起される白血病や放射線誘発乳癌をはじめ種々の臓器癌の発癌研究を行い、我が国での放射線発癌研究の基盤を作った。さらに発癌研究はホルモンやウイルスによる発癌実験や発癌機構の解明に及び、我が国での実験発癌研究の中心的役割を果たした。

～過去5回の受賞者～



第1回　秋月辰一郎氏　聖フランシスコ病院顧問

第2回　サイム・バルムハノフ氏（カザフスタン共和国）
放射線腫瘍医学研究所長

第3回　ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏（オランダ）
ライデン大学教授　物理学者

第4回　エヴゲニィ・デミチュック氏　（ベラルーシ共和国）
放射線内分泌研究所　甲状腺部門部長

鎌田七男氏　（財）広島原爆被爆者援護事業団理事長、広島大学名誉教授

第5回　日本チェルノブイリ連帯基金　（長野県松本市）

Report

チェルノブイリ・カザフスタン医師受入研修

平成5年度から毎年実施しているチェルノブイリ・カザフスタン関連医師・専門家研修が、本年度も7月25日から8月24日まで、長崎大学医学部を中心に行われ、ベラルーシ共和国、ロシア連邦からそれぞれ2名、ウクライナ、カザフスタン共和国からそれぞれ1名の計6名が参加しました。

研修はまずヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための「一般カリキュラム」を行った後に、各研修生の専門分野に即した「専門カリキュラム」を行いました。



日本赤十字社長崎原爆病院を視察

一般カリキュラムでは、放射線影響研究所や長崎市原爆被爆者健康管理センター、長崎原爆病院の視察をはじめ、恵の丘長崎原爆ホームの訪問、天草はまゆう療育園の見学を行ったほか、長崎大学の原爆後障害医療研究施設を中心とした各関連教室で放射線医学分野の講義や実習を行いました。特に研修期間中1泊2日で訪れた熊本県天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、大きな感銘を受けたようです。さらに今年は、昨年12月からスイス・ジュネーブの世界保健機関（WHO）に専門官として派遣されている長崎大学の山下俊一教授が一時帰国され、放射線国際保健学の特別講義として2日間の集中講義を行なわれました。

専門カリキュラムでは、それぞれの専門分野にあわせ、疫学や病理学、分子生物学などについて長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の各教室で研修を行いました。研修生の中には、滞在中に長崎大学の研究者と共同研究を行い、その成果を国際的雑誌に発表した方もおり、非常に実りある内容になったようです。また8月9日の長崎原爆記念日には、研修生全員が平和祈念式典に参列して、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。



長崎市原爆被爆者健康管理センターを視察

研修生はいずれも、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を担っていかれる方々ばかりです。将来の国際医療協力分野における良きカウンターパートになっていただけるものと思っています。NASHIMでは今後とも長崎大学をはじめとした研修機関と協力しながら、本事業を継続し、発展させていきたいと考えています。



齋藤 寛NASHIM副会長（長崎大学学長）から修了証書を授与

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師研修者名簿

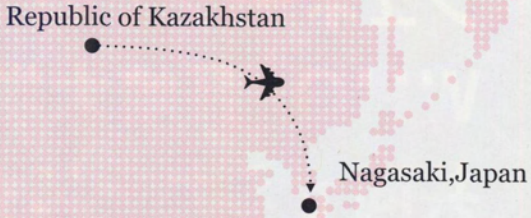
氏　名	性別	国　籍	所属・役職・専門分野
Irina Zamulaeva　イリナ・ゼムラーエヴァ	女	Russia　ロシア	オブニンスク放射線医学研究所　主任　放射線生物学
Svetlana Kozhushnaya　スベトラーナ・コジュシュナヤ	女	Russia　ロシア	ブリヤンスク州立第二病院　病理医　病理学
Irina Perchuk　イリナ・ペルチュク	女	Ukraine　ウクライナ	放射線医学研究所　上級研究員　精神・神経病学
Evgenii Voropaev　エヴゲニー・ワラパエブ	男	Belarus　ベラルーシ	ゴメリ医科大学　上級研究員　放射線医学、腫瘍学
Valentina Drozd　ワレンティナ・ドロズト	女	Belarus　ベラルーシ	ベラルーシ卒後医師研修大学　教授　内分泌学
Ainur Akilzhanova　アイヌル・アキルジャノヴァ	女	Kazakhstan　カザフスタン	セミパラチンスク医科大学　助手　血液病学

PEOPLE

研修後の感想

長崎で過ごした日々





カザフスタン共和国　国立セミパラチンスク医科大学
内科学助手　　アイヌル・アキルジャノヴァ

今回長崎へ来てすぐに、我々は原爆資料館や国立原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、原爆の甚大なる悪影響を感じました。とくに印象に残ったのは、純真な魂と人類への限りない愛情を持った、永井隆博士の記念館、如己堂です。

長崎大学の多くの先生方の講義は、様々な角度から放射線の影響問題、被爆者に対する検診・援助体制、WHOの役割と課題についてであり、非常にたくさんの情報を得ることができました。

公衆衛生学分野の高村先生からは、遺伝子の解析などをはじめとする分子疫学の手法を教えていただき、その研究結果を英文の論文として国際的な雑誌に投稿することができました。

原研内科の朝長先生、塚崎先生、宮崎先生からは、白血病の治療法や、末梢幹細胞や骨髄の移植などについて、非常に興味深い講義をしていただき、輸血部の長井先生には自己輸血法を紹介していただきました。これらの経験を通じて感じたのは、日本人の医師たちが、彼らの何年分もの経験、成果を私たちに積極的に分け与えようとしてくれたことです。

また8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参加も、非常に思い出深いものでした。式典で、何千もの長崎市民、外国人の招待客、日本国首相らと共に私たちは祈りました。「長崎が核の恐怖を味わった最後の場所になりますように」と。

長崎は、自然の美しさ、港町のロマンチックな雰囲気、忘れがたい島々の景色、海水浴場、海、セミの鳴き声、ホテルの居心地の良さ、礼儀正しさ、客へのもてなしの心といった点ですばらしい町だと思います。今回参加したNASHIMの研修プログラムは各研修生の要望に応じたプログラムであり、私たちの日本滞在をこのうえもなく楽しく、有益なものとしてくれました。

私個人から、そして国立セミパラチンスク医科大学を代表して、私を研修に招聘してくれ、私の日本での滞在を有益なだけでなく快いものとしてくれた、日本の友人たち全てに対して感謝いたします。そして最後に、長崎での研修の機会を提供してくれたNASHIMに対して、心よりお礼を申し上げます。



長崎大学医歯薬学総合研究科で研修



WHO放射線プログラム専門科学官の特別講義を受講

Report

ジュネーブでのWHO・長崎大学COE共同セミナーに参加して

日本赤十字社長崎原爆病院長　進藤　和彦



WHO本部での共同セミナーに参加

2005年9月9日 スイス・ジュネーブのWHO本部で、「原爆放射線の晩発性影響について」をメインテーマとしてWHO・長崎大学COEプログラム共同セミナーが開催された。

セミナーはWHO本部会議場で日米欧の放射線医学・医療専門家約50人が出席して開催された。

日本からは、内閣府原子力安全委員会の久住静代委員、長崎大学斉藤寛学長初め長崎大学医学部関係者、放射線影響研究所関係者、NASHIM関係者総勢20数人が参加した。長崎大学、放影研、NASHIMが会議場前に準備した資料は、他部門のWHO職員が興味深そうに持ち帰っていた。

9月6日朝、台風に追われるように中部国際空港から出発し、フランクフルト経由で約13時間掛かってジュネーブ（時差7時間）に6日夕方到着した。

4日間の滞在中には、日本政府代表部の美根慶樹・軍縮会議日本政府代表部　特命全権大使、藤崎一郎・日本政府代表部　特命全権大使、遠藤　茂・日本政府代表部大使 兼 在ジュネーブ総領事への表敬訪問と軍縮大使公邸で行われた2005世界軍縮会議フェロー・レセプションにも出席させて頂いた。また、ジュネーブ市地下に建設されている直径9km、円周27kmにおよぶCERN欧州原子力研究機関の地下実験施設の見学では長い時間と莫大な費用を掛けた壮大な実験計画に驚き、そして、国際赤十字委員会（ICRC）の訪問は赤十字病院に勤務する者として感慨深いものがあった。



国際赤十字本部（CICR）前：山下俊一教授と共に



シャモニからロープウェイで15分の
エギーユ・デユ・ミディ展望台（3800m）よりモンブランを望む

セミナー終了後の10日には、素晴らしい天候に恵まれたアルプス・モンブランの雄大な絶景や氷河見物を堪能させてもらった。

今回のジュネーブでのセミナー出席並びに各部門・施設の訪問、見学には現在WHO放射線プログラム専門科学官としてジュネーブに滞在している山下俊一先生のご尽力によるところが非常に大きく感謝している。

最後になりましたが、NASHIMの一員としてジュネーブでのセミナーに参加させて頂き有り難うございました。

核禁会議がNASHIMへカンパ金を贈呈

核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）が行う原爆被爆者救護事業の一環として、今年8月7日、長崎県立総合体育館で原爆被爆者救援団体へのカンパ金贈呈式があり、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は他の6団体とともに核禁会議からカンパ金をいただきました。NASHIMがいただいた活動助成金30万円は海外の放射線被曝者の支援のために有効に活用したいと考えています。核禁会議には厚くお礼申し上げますとともに、核兵器廃絶と世界平和実現に向けて活動されている核禁会議に心から声援を送りたいと思います。



川村 力 長崎核禁会議議長の挨拶

図書出版

NASHIMは諸外国での放射線関係事故に関する図書の邦訳出版や長崎原爆関係図書の英訳出版、ロシア語の医学教科書出版などを行っています。今年は、次の図書を出版してベラルーシ共和国の医師や医学生、WHO、IAEA、国連本部等へ寄贈しました。

『甲状腺疾患』

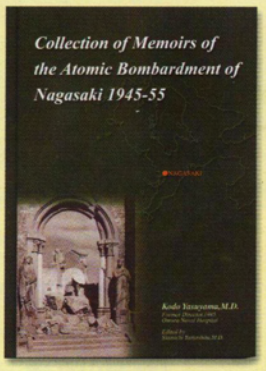
著　　者：ラリッサ・ダニロワ
　　ベラルーシ卒後医師研修大学教授
監　　修：山下俊一　長崎大学教授
出版部数：1,500部（平成17年3月末出版）



本書は、一般臨床医が甲状腺学の基礎から臨床を幅広く学び、チェルノブイリ原発事故のヒバクシャを診療する際に役立てることを目的として、著者が長崎大学の協力により執筆したロシア語の医学教科書です。ベラルーシ共和国の卒後医師研修大学へ1300部無償配布され、今後現地で活用されることにより、チェルノブイリ周辺における甲状腺がんをはじめとする甲状腺疾患の早期診断・早期治療に役立つものと期待されます。

『Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55』

著　　者：泰山弘道　元大村海軍病院長
監　　修：山下俊一　長崎大学教授
出版部数：1,000部（平成17年8月出版）



本書は、原爆投下直後から大村海軍病院（現在の国立病院機構　長崎医療センター）に収容された被爆者の惨状や臨床経過などの調査報告をはじめ、原爆に関する見聞、アメリカ進駐軍原子症研究班の進駐、また、壊滅的被害を受けた長崎医科大学の復興問題等について当時の院長であった著者が英文で記述したものを編集・出版したものです。

NASHIMでは長崎原爆の実相を広く世界に伝え、被ばく医療に関する情報を発信するため、国連本部をはじめ世界保健機関（WHO）、国際原子力機関（IAEA）、核関連国の駐日大使館、日本国内の各大学医学部図書館等へ本書を寄贈しました。

Information

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会　平成17年度役員異動

今年度は次の方々に新たにご就任いただきました。

NASHIM新理事・委員

理　事

長崎大学医学部・歯学部附属病院長　江口　勝美
財団法人放射線影響研究所　理事長　大久保　利晃
財団法人長崎原子爆弾被爆者対策協議会　会長　野口　源次郎

運営部会委員

長崎大学医学部・歯学部附属病院　第三内科　教授　矢野　捷介
長崎大学医学部・歯学部附属病院　精神神経科　教授　小澤　寛樹
長崎大学医学部・歯学部附属病院　放射線科　教授　上谷　雅孝

運営部会新役員

部会長　長崎大学原爆後障害医療研究施設　放射線応答解析研究分野　教授　奥村　寛
副部会長　長崎大学原爆後障害医療研究施設　放射線疫学研究分野　教授　柴田　義貞

平成17年度の事業内容

4月25日　第1回運営部会開催
〃　第6回永井隆平和記念・長崎賞第2回選考委員会開催
6月 7日　第1回NASHIM事業検討会開催
6月13日　第6回永井隆平和記念・長崎賞委員会開催
7月22日　チェルノブイリ・カザフスタン関連諸国から医師等6名を被ばく者医療研修に招聘（～8月25日）
7月25日　第6回永井隆平和記念・長崎賞授賞式開催
8月 4日　『長崎原爆の記録』英語版である「Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55」（故泰山弘道 元大村海軍病院長著）を出版（1000部印刷）
9月 5日　スイス・ジュネーブのWHOへ専門家2名を派遣（～9月12日）
9月21日　第2回NASHIM事業検討会開催
9月23日　アニメ映画「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」上映会開催
〃　インターネット会議システムを利用したベラルーシ共和国ゴメリ医科大学学生と市民との交流会開催
10月16日　韓国から医師等4名を被ばく者医療研修に招聘（～10月22日）
10月30日　ながさき国際協力・交流フェスティバルでNASHIM事業紹介パネルを展示
11月21日　放射線影響研究所と放射線被曝者医療国際協力推進協議会からの依頼により、3名のロシア人医師等を研修のため長崎大学原爆後障害医療研究施設へ連絡調整
11月22日　第2回運営部会開催

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第17号
発行／平成17年11月30日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(823)4278　FAX 095(820)3037
http://www.nashim.org/　E-mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.18
2006
SPRING



ゴメリ医科大学学生とのネット交流会



Report …… アニメ映画「アンゼラスの鐘」上映会・ゴメリ医科大学学生とのネット交流会
Report …… 第2回日韓原爆被爆者医療セミナーを開催
From Korea …… 韓国から医師等を招聘
From Korea …… 被爆者医療研修を終えて…
Report …… WHO・長崎大学共催国際セミナーに参加して…
Information …… NASHIM研修機関紹介２　日本赤十字社 長崎原爆病院

アニメ映画「アンゼラスの鐘」上映会
ゴメリ医科大学学生とのネット交流会

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、被ばく者医療に関する国際協力の必要性や放射線についての理解を深めてもらうため、毎年夏に講演会やシンポジウムなどを開催していますが、平成17年9月23日に被爆60周年事業として、被爆直後の長崎で救援活動に尽力した医師秋月辰一郎さんの奮闘を描いたアニメ映画「NAGASAKI 1945～アンゼラスの鐘」の上映会とインターネット会議システムを利用したゴメリ医科大学との交流会を長崎原爆資料館で開催しました。


ゴメリ医科大学学生とのネット交流会

会場に市民約200人が訪れ、熱心に映画を鑑賞していただきました。「大人にも子供にもわかりやすく作られており、原爆を知らない私にも原爆の恐ろしさ、その後のたいへんさがわかりました」「二度とこのようなことが起きてはならないと改めて思いました。涙なしには見ることのできない映画でした」といった感想が寄せられました。

また映画上映の後のゴメリ医科大学との交流会ではインターネット会議システムを利用して行われましたが、このシステムはもともと、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館において、被爆者体験を全国に発信するために利用されているシステムで、現在全国の小中学生などに被爆者の体験談を聞いてもらうために活用されています。今回はこのシステムを利用して、長崎とベラルーシ共和国のゴメリ医科大学を結び、リアルタイムでの交流会を初めて実施しました。



ベラルーシ共和国のゴメリ州はチェルノブイリ原子力発電所の事故で最も大きな被害を受け、多くの甲状腺がん患者が発生した地域ですが、ここに設立されたゴメリ医科大学はヒバクシャの医療を行う医師の育成を主な目的として設立された大学です。この医科大学には、事故の影響で小児期に甲状腺がんになり、手術を受けながら、その後自ら医師になることを志して勉強している医学生が数名います。今回は、これら医学生にゴメリから交流会に参加してもらい、長崎市民との対話を行いました。

長崎からは、小、中、高校生や大学生、さらには社会人がパネリストとして壇上に上がり、インターネットを通じた画面を見ながら、ゴメリの医科大学生にチェルノブイリについての疑問点などの質問を行いました。初めての試みで画像も鮮明とまではいきませんでしたが、原発事故の被害にあって甲状腺がんの手術を受け、現在は医師になるため医学部で学んでいる学生の生の声は、日本のパネリストにも深い印象を与えたようです。

NASHIMでは、今後もこのような交流の場を通じて、市民の方に世界のヒバクシャについて知ってもらい、長崎から医療支援、情報発信していくことの大切さを肌で感じていただきたいと考えています。

来場者アンケートより

●「アンゼラスの鐘」上映会感想

感動し、言葉もありません。多くの小中高生に見てほしいと思います。（70歳代　男性　無職）

本を読んだ時よりも画像の方が訴える力があると思いました。（40歳代　女性）

原爆の被害・被災といったものをもう少し深く掘り下げても良かったのではないかと思います。（30歳代　女性　会社員）

涙、涙、涙、、、、、（50歳代　男性　自営業）

素晴らしいアニメ映画と思います。戦争を知らない子供たちには必ず見せたいと思います。現実はもっとむごかったということもつけくわえてほしい。（60歳代　男性　無職）

普通当たり前にできることが、この時代ではできないというのがとてもかわいそうだった。とってもこわかった。映画の中で「どんなことがあっても必ず生き抜いて見せる。」という言葉が印象に残った。（女性　中学生）

被爆後の放射線の影響がものすごく分かりやすく表現されていて、ビックリしました。（女性　高校生）

原爆が投下された時の爆風の音とか、吹き飛ぶ様子がとてもリアルでした。（女性　高校生）

原爆の怖さを伝えていく方法としてとても良いツールだと思います。（50歳代　男性　公務員）

●ベラルーシ共和国ゴメリ医科大学学生との交流会感想

チェルノブイリで被ばくした子供たちが大学生になり医学を勉強している姿が印象的でした。（50歳代　女性　無職）

チェルノブイリ原発事故は今でも放射線被害がその土地に多く残っていて、ドームのようなものでさらに包む計画があるなど初めて知りました。（30歳代　女性　自営業）

医学も原爆も科学技術で作られたという講演の言葉が印象的でした。（女性　高校生）

人を救う医療現場も人の手であれば核兵器を生み出すのも人の手。科学の進歩が生み出す人類の幸福と、人類の破壊にもつながっているということが印象的でした。（50歳代　女性）

Report

専門家派遣
第２回 日韓原爆被爆者 医療セミナーを開催


ソウル赤十字病院で日韓原爆被爆者医療セミナーを開催

被爆者に対する相互理解と被爆者医療の進展を図るため、韓国に12月と3月に専門家を派遣し、韓国の医療関係者たちとの意見交換や病院等の視察を行いました。このうち12月に開催した第2回日韓原爆被爆者医療セミナーについて報告します。

12月12日と13日、大韓赤十字社のソウル赤十字病院と大邱赤十字病院で「第２回日韓被爆者医療セミナー」を開催し、長崎大学医学部・歯学部附属病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センターの大津留晶助教授と長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設　生体材料保存室の中島正洋講師が講演を行いました。

まず、ソウル赤十字病院では金漢善病院長の挨拶後、大津留助教授が「がん遺伝子治療の研究開発」というテーマで講演しました。講演の冒頭、永井隆博士や「国際ヒバクシャ医療センター」の説明もありました。次に中島講師が「長崎原爆被爆者の重複癌」というテーマで講演し、被爆後60年を経てもなお、非被爆者より高い率で被爆者に癌が発生しているという話に、80名の出席者は興味深そうに聞き入っていました。


大邱赤十字病院で日韓原爆被爆者医療セミナーを開催

大邱赤十字病院では大学で講義のため欠席された權永在病院長に代わって李珍雨診療部長が歓迎の挨拶をされた後、中島講師が「長崎原爆被爆者の重複癌」というテーマで講演しました。続いて大津留助教授が「韓国人原爆被爆者の健康相談事業に従事しての所感～より良い相談事業のために～」というテーマで講演を行いました。長崎県と長崎市が国の補助を受けて昨年度から韓国で実施している在韓被爆者の健康相談事業に参加しての感想ということで、相談会場となった大邱赤十字病院の医師や看護師等の他に、会場で被爆者のお世話をしてくれたボランティアたちの出席もあり、30名の出席者たちから熱心に講演を聞いていただきました。

中島正洋講師の話：「韓国の医師と接して感じたことは、実際に医療に役立つ情報の提供を期待している、ということです。その点で日本人医師による在韓被爆者検診や健康相談は非常に好意的な評価をなされていて、被爆者医療セミナーへの期待感も大きいのではないかと思いました。」

韓国での訪問先

12月12日～13日	3月2日～3日
ソウル赤十字病院	大韓赤十字社特殊福祉事業所
嶺南大学附属病院	ソウル赤十字病院
大邱赤十字病院	大邱赤十字病院
	大韓赤十字社陜川原爆被害者福祉会館
	慶尚南道陜川郡保健所
	陜川高麗病院

2005年度　専門医師等韓国派遣者名簿

回数	派遣期間	所　属	職　名	姓　名
第1回	12月12日～12月14日（3日間）	長崎大学医学部・歯学部附属病院	国際ヒバクシャ医療センター　助教授	大津留　晶
		長崎大学原爆後障害医療研究施設	生体材料保存室　講師	中島　正洋
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局　書記	草場　里見
第2回	3月1日～3月4日（4日間）	日本赤十字社長崎原爆病院	呼吸器科部長	福田　正明
		長崎大学原爆後障害医療研究施設	分子診断研究分野　助手	岩永　正子
		財団法人　放射線影響研究所	臨床研究部　研究員	今泉　美彩
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局　書記	草場　里見

From Korea

韓国から医師等を招聘



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を視察

ヒバクシャ医療の研修と交流を目的として、韓国から10月と12月、2月に在韓被爆者の援護事業を実施している大韓赤十字社などから、医師等6名、事務職員6名の計12名が来崎しました。

研修者一行は長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館をはじめ、平和公園や、原爆落下中心地、永井隆記念館などを見学しました。

その後、長崎県医師会を訪問してナシム会長である井石哲哉県医師会長と懇談し、日本と韓国の保険医療の違いなどについて意見を交わしました。また、県庁では職員から原爆被爆者行政の説明を受け、熱心に質問をしていました。 研修二日目からは、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」、長崎大学医学部・歯学部附属病院、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研修や視察を行いました。

長崎大学医学部・歯学部附属病院の病理部で研修を受けた居昌赤十字病院の安讃臨床病理室長は、「わが病院では病理組織検査の結果が出るのが遅いと不満を言われることもあるが、長崎大学病院ではとても早いのでびっくりした。韓国へ帰って関係者に説明したい。」と感想を述べました。



江口勝美 長崎大学医学部・歯学部附属病院長を表敬訪問



井石哲哉 NASHIM会長を表敬訪問

2005年度 韓国人医師等被爆者医療研修者名簿

回数	研修期間	所属	職名	姓名	姓別
第1回	10月16日～10月22日（7日間）	仁川赤十字病院	病院長・外科科長	チョウ・スンヨン 趙 承衍	男
		ソウル赤十字病院	内科医師	ノ・チャンソク 魯 昌錫	男
	10月16日～10月20日（5日間）	大韓赤十字社 災難救護奉仕本部	保健教育担当	パク・チヒョン 朴 智賢	女
		大韓赤十字社 特殊福祉事業所	原爆担当	ユ・チムン 柳 志忞	男
第2回	12月4日～12月10日（7日間）	ソウル赤十字病院	家庭医学科科長	キム・ウンテ 金 殷泰	男
		慶尚南道陜川郡保健所	公衆保健医師	パク・チンン 朴 大進	男
	12月4日～12月8日（5日間）	ソウル赤十字病院	医事課係長	ファン・トウソプ 黄 斗燮	男
		大韓赤十字社	原爆担当	パク・ビョンヒ 朴 炳熙	男
第3回	2月19日～2月25日（7日間）	ワレス記念浸礼病院	影像医学科科長	イ・ジェソク 李 在銶	男
		居昌赤十字病院	臨床病理室長	アン・チャン 安 讃	男
	2月19日～2月23日（5日間）	大韓赤十字社 特殊福祉事業所	所長	ウォン・ジョンボ 元 鍾寶	女
		大韓赤十字社 特殊福祉事業所	原爆担当	オ・サンウン 呉 尚恩	女

被爆者医療研修を終えて…



大韓赤十字社ソウル赤十字病院
家庭医学科科長　金　殷泰

七日間の原爆被爆者関連の医療研修に参加したソウル赤十字病院 家庭医学科科長の金殷泰です。

個人的には初めての日本訪問ということで、最初は緊張感が大きかったです。しかし、現地の通訳からＮＡＳＨＩＭ会長様に至る皆様の細心な御配慮のお陰で、緊張感はなくなり、いつの間にか親密感まで感じるようになりました。



放射線影響研究所を訪問

今回の研修に参加する前は、原爆被爆に関して、知っている知識というのがほとんどありませんでした。しかし、原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館、爆心地公園、平和公園などを見学しながら、原爆のとてつもない威力、それによる深刻な被害、原爆に遭われた生存者たちの人生における逆境や後遺症などについて知るようになり、驚愕に耐えませんでした。また、原爆の被害に遭った生存者に対して憐憫の情を催すだけでなく、もっと被爆者に対する細心な配慮が必要であることが分かりました。

日本赤十字社長崎原爆病院及び長崎大学医学部・歯学部附属病院、放射線影響研究所、恵みの丘、かめだけ等を視察し、また、長崎県庁で原爆被爆者行政に関する説明をお聞きしながら、日本政府の原爆被爆者に対する体系的な管理及び支援に深く感銘を受けました。



恵の丘長崎原爆ホームを視察

最後に、七日間の研修期間中に我が家のように心くつろげる雰囲気で接してくださった皆さんに心から感謝しながら、今後とも、韓国に居住している原爆被爆者に対してもより一層の積極的な関心や支援をお願いします。

ありがとうございました。



原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」を視察

Report

WHO・長崎大学共催国際セミナーに参加して・・・

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
公衆衛生学分野　助教授　高村　昇



長崎大学から寄贈された桜の木の前にて。
左から兼松長崎大学医学部長、
下田長崎大学医学部・歯学部附属病院看護部長、
齋藤長崎大学学長

平成17年9月9日、スイス連邦ジュネーブの世界保健機関（WHO）で長崎大学とWHOが共催するセミナーが開催されました。これは、原爆被爆60周年という節目の年に当たって、長崎や広島の被爆者への健康影響を、WHOという国際機関で世界にアピールすることで、放射線被ばくの実態、さらには平和の重要性について認識することを目的とするもので、現在WHOに専門官として派遣されている長崎大学の山下俊一教授が中心となって企画、準備されたものです。当日は長崎、広島などの日本の専門家に加えて、WHOの専門官やジュネーブの国際機関の関係者、さらにはアメリカの研究者などが参加し、NASHIMからは長崎大学医学部長の兼松隆之先生と日赤長崎原爆病院の進藤和彦先生が参加されました。

会議の冒頭では、長崎大学の齋藤寛学長が長崎原爆によって多くの一般市民が一瞬のうちにその命を奪われたことを紹介するとともに、長崎、広島において60年間に渡って行われてきた被爆者医療、さらには国際ヒバクシャ医療協力を紹介し、平和の尊さをアピールされました。また、放射線影響研究所や放射線医学研究所といった、日本の放射線医学研究施設の代表者からは、被爆者医療、放射線影響研究に関するこれまでの取り組みについての報告がなされ、さらに長崎大学、放射線影響研究所やアメリカがん研究所の専門家からは、これまでに蓄積された被爆者の健康影響についてさまざまな観点からの報告が行われました。WHOの専門家からは、放射線災害に



WHOの李事務総長（右）と談笑する齋藤学長

対する国際機関の取り組みと今後の課題などが報告されたほか、レントゲンやCTといった放射線を用いた診断機器に関する国際的な現状等について、報告がありました。最後に質疑応答になり、今後、長崎大学を始めとする日本側とWHOが、放射線の健康影響解明や緊急被ばく医療、さまざまな放射線関連研究などの幅広い分野で積極的に連携することが確認されました。

また当日は、WHO会議場のロビーでNASHIMのポスター展が開催されました。長崎における原爆被害の実態や、NASHIMがこれまで行ってきた活動の報告などを掲載したポスターを、会議参加者が熱心に見学していました。WHOと長崎大学の共催による会議において、NASHIMの活動を広く紹介できたことは、非常に意義があったと考えています。



NASHIMのポスターを熱心に見るセミナー参加者

WHO前の庭園には、長崎大学が寄贈した桜の木が植樹され、桜の花がWHOの春の風物詩になるのも近そうです。同時に、今後NASHIMやその関連機関がWHOのような国際機関と密接に連携することで、より効果的な国際ヒバクシャ医療支援が行えることが期待されます。


レマン湖の大噴水。高さ140mにも達する大噴水は、
ジュネーブのシンボル的存在。


セミナーの成果について、マスコミの取材に答える
山下教授（WHO専門官）

NASHIM研修機関紹介 2

日本赤十字社　長崎原爆病院



長崎原爆病院は、広島・長崎に投下された原子爆弾によって、多くの肉親を失い、自らの放射能障害と闘っている原爆被爆者に対し、その健康上の特別の状態に鑑み、日本赤十字社が赤十字の人道的任務を達成する目的で、国、県、市の協力のもと、昭和33年5月20日病床数81床で片淵町に建設し、長崎市の運営で開院しました。また、昭和37年1月5日に、より充実した被爆者の診断治療と健康の保持、向上を図ることを目的として、原子力放射能障害対策研究所を開設し、昭和44年4月1日に長崎市から日本赤十字社に移管されて日本赤十字社長崎原爆病院と名称変更しました。その後増改築を重ね、診療部門も充実整備されがん診療施設等も有する総合病院として被爆者医療に研さんしてきましたが、開設以来20有余年を経過し、近年の医療需要の増大と疾病の多様化等に対処するためには、既存の施設では、敷地、建物共に狭隘となり、被爆者等の強い要望もあり、国、県、市並びに被爆者団体等関係各機関の協力な支援を得て、昭和57年12月12日、現在地・茂里町に病床360床、地下1階地上7階建、総工費約45億円をもって新病院が完成し、片淵町より移転しました。新病院の特色は、被爆者の老齢化に対応するリハビリテーションの強化とがん診療施設の充実並びに重症患者用個室の整備です。

標榜科目12科の近代医療を整備した中核機能病院として、被爆者の医療、健康管理、更に後遺症の研究とともに、輪番制第2次救急医療機関として、平成12年2月より救急告示病院の認定を受け地域医療活動にも積極的に参加し、平成14年度は、救急医療の充実を図るために、救急センターの改修を行っています。同年12月に長崎県地域がん診療拠点病院に指定され、質の高いがん医療を提供する体制を確保するとともに、地域の医療機関と緊密な連携を図り、また必要ながん医療に関する情報提供を行うことにより、地域全体における医療水準の向上に努めています。

またNASHIMに参加し、韓国及びチェルノブイリ・カザフスタン関連医師等の研修受入や韓国へ医師・看護師の派遣を行っております。その他、在南米被爆者診断事業ではブラジル、ボリビア、アルゼンチン、パラグアイ、ペルーの5カ国に医師を派遣、在韓被爆者健康診断・健康相談事業では医師、理学療法士を派遣するなど、国際協力にも積極的に参加しています。





大韓赤十字社の病院医師等が当病院を視察

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第18号
発行／平成18年3月31日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(895)2473　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.19
2007
SPRING

チェルノブイリ原発事故20周年祈念公開座談会





ゴメリ医科大学生の受入研修風景



絵文字はジュネーブ在住の画家猪又由加氏の画です。ウクライナ語で「チェルノブイリ」と筆書きされた上に国旗につかわれている青と黄の２色が配分され、被災者が心身共に健康であることを祈念しています。

Works …… チェルノブイリ原発事故20周年記念事業
People …… カザフスタンから来た医師のご紹介
Report …… チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受入研修
Report …… 派遣・フォローアップ事業報告
From Korea …… 被爆者医療等研修～韓国から医師等を招聘～
Report …… 韓国への専門家派遣
Information …… 平成１８年度外務大臣表彰受賞
核禁会議が NASHIM へ活動助成金を寄付
第７回永井隆平和記念・長崎賞候補者募集のお知らせ

チェルノブイリ原発事故20周年記念事業

１９８６年４月２６日に発生したチェルノブイリ原発事故から２０年が過ぎました。ＮＡＳＨＩＭではチェルノブイリ原発事故２０周年記念事業として、チェルノブイリ関係諸国への医療協力に精力的に携わってきた関係者による公開座談会と毎夏のヒバクシャ医療研修に加えて、放射能汚染の最も深刻であったベラルーシ共和国のゴメリから４名の医科大学生を招聘して教育・研修プログラムを実施しました。また、彼らと長崎の学生、市民との交流会や長崎原爆資料館において日本チェルノブイリ連帯基金と共催のチェルノブイリ写真展を開催しました。







チェルノブイリ原発事故から２０年



山　下　俊　一

1986年4月26日未明のチェルノブイリ原発事故から20年が経過しましたが、周辺の汚染地域では500万人を超える一般住民が不安を抱えながら今なお生活しています。チェルノブイリの教訓とは一体何でしょうか？それを取り上げたのが、今回のNASHIM主催による20周年記念事業の一つである公開座談会です。日本を代表するチェルノブイリへの支援協力活動を通じて、チェルノブイリ20年目の現実と今後の支援活動についての展開が被爆地長崎の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で語られました。

20世紀後半から狂気の核開発競争が繰り広げられ、エネルギー資源状況の変化や激増する人口問題も絡み、先進国を中心に国際社会は原子力時代に入りました。この原子力時代の幕開けへの警鐘が人類史上最悪の惨禍となる、チェルノブイリ原発事故でした。当時は東西冷戦の渦中にあるため情報封鎖の劣悪な世界情勢が被害を拡大することになりました。その後明らかになった事実として放射線誘発と考えられる小児および若年者の甲状腺がんが多発し5000例近くが現地で手術されています。そしてその後遺症や精神心理的影響は深刻です。さらに事故直後の原子力発電所内での大量放射線被ばく者300名近くと、数十万にも及ぶ除染作業者の長期にわたる健康影響も懸念されています。このような渦中、唯一の被爆国日本の心と経験を生かすべく、チェルノブイリ被災者への継続した医療支援活動が行われてきました。被爆地長崎からも多くの関係者が現場への医療協力や支援活動に活躍しています。しかし、低線量慢性被ばくの実態解明や、その健康影響についての解析は遅々として進まず、長期にわたる注意深い経過観察と医療協力が必要です。

大量かつ広範囲の放射線被ばくという人類史上初の事象に対するこの20年間における後手後手の対策対応の中で、低線量被ばくの不確実な領域での長期にわたる健康影響への地道で息の長い支援と協力こそが現地の被ばく者が望むものであり、広島、長崎に蓄積された原爆被爆者医療のノウハウを役立てることになります。チェルノブイリにおける緊急事態が過ぎると、被災者が軽視されたり、過去の負の遺産が放置されたりします。今回のチェルノブイリ原発事故後20周年の座談会では、この負の遺産を如何に清算するかが忌憚なく話し合われ、被爆地長崎から世界のヒバクシャへの医療協力に向けた継続こそが力であることが確認されました。今後ともNASHIMの活動基盤が充実し、大所高所から戦略的にチェルノブイリ医療協力が推進されんことを心から念願します。

公開座談会

チェルノブイリ原発事故から２０年～長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力～

２００６年８月２日、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジにおいて公開座談会を開催しました。WHO 放射線専門科学官（現長崎大学大学院教授）の山下俊一さんをコーディネーターに、民間支援団体としてチェルノブイリ医療協力に関わってこられた笹川記念保健協力財団の槙洽子さんと日本チェルノブイリ連帯基金の神谷さだ子さん、長崎大学大学院で疫学的な観点からチェルノブイリに携わってこられた柴田義貞教授に NASHIM の井石哲哉会長の参加を得て様々な意見を出していただきました。

「事故の影響による小児甲状腺がん多発のピークは過ぎたが、今後何が起こるかわからないため、支援継続の必要性があること」、「科学の進歩が危険と裏腹な現代で、被爆地長崎・広島の役割は安心・安全を担保しながら科学の平和利用を進めるべきだという警鐘を鳴らし続けること」等が再確認され、被爆地の灯火をエネルギーに NASHIM の活動がチェルノブイリを起点とした次の国際医療協力や世界平和のために進んでいくことに期待が寄せられました。

※詳しい内容はチェルノブイリ原発事故２０周年記念誌「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」や NASHIM のホームページでご覧いただけます。

◆出演者紹介◆



山下俊一さん（WHO 放射線専門科学官）

長崎大学教授として、チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトや種々のプロジェクトにおいてチェルノブイリ被災国の支援を行うと共に、NASHIM 事業の柱であるヒバクシャ医療貢献の中心的存在として活躍。WHO で放射線専門科学官として世界の舞台で活躍した。



槙洽子さん（笹川記念保健協力財団元チェルノブイリ医療協力室長）

チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトを担当し、「チェルノブイリの母」と呼ばれるほど現地を頻回に訪問してプロジェクトの遂行にあたった。現地では今でも笹川記念保健協力財団が寄贈した巡回バスが活躍している。



神谷さだ子さん（日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）事務局長）

JCF の事務局長として、理事長の鎌田實先生（「がんばらない」等の著作でも有名）と二人三脚でチェルノブイリ支援に積極的に取り組み、その継続的な支援は現地でも高い評価を受けている。現在も頻回にベラルーシ共和国を訪問し、現地に密着した支援を継続している。



柴田義貞さん（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授）

放射線影響研究所の疫学部長として、チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトにおいて事故の影響評価にあたり、事故後に小児の甲状腺がんが増加していることを示した。現在、長崎大学においてチェルノブイリにおける健康影響についての疫学調査を継続して行っている。



井石哲哉さん（NASHIM 会長）

長崎県医師会長としての要職にありながら、平成８年から現在まで１０年間にわたり NASHIM 会長としてカザフスタンやウクライナ、韓国を訪問するとともに、チェルノブイリ関係国をはじめとする多くの国からの研修医の受入を行うなど積極的に国際貢献に努めている。

ゴメリ医科大学生の受入研修


恵の丘長崎原爆ホーム

7月28日から17日間、チェルノブイリ事故による汚染が最も深刻であったベラルーシ共和国のゴメリから4名の医科大学生を招聘して教育・研修プログラムを実施しました。

4人はまず、長崎大学生の案内で長崎原爆資料館や平和記念公園等を見学し、悲惨な原爆の実相を知って強い印象を受けたようでした。研修本番では長崎市原爆被爆者健康管理センターや日本赤十字社長崎原爆病院、財団法人放射線影響研究所を視察し、日本の医療設備・技術や被爆者に対する支援について学びました。また、長崎大学医学部では外科の外来見学や甲状腺の手術に立ち会ったほか、自身の血液検査や放射線量を測るといった経験もしました。恵の丘長崎原爆ホームでは、長崎で被爆された方の生の証言に真剣に耳を傾け、同じ被ばく者としてヒバクの不安に共感し、目に涙を浮かべて「これからの人生が平和であるように祈ります」と声をかける場面もありました。

帰国前にはチェルノブイリ医療基金の招きで長野県の松本も訪れました。

17日間という短い研修期間でしたが、非常に強い印象と医師を志すことへの新たな決意をもって帰国されたようです。

放射線障害という困難を経験した彼らが医師を目指して学んでいるということは、将来のベラルーシにおける放射線被ばく医療の大きな力になることと思います。

NASHIMはこれから彼らのような若い人材の育成にも取り組んでいきたいと思います。


日本赤十字社長崎原爆病院


長崎市原爆被爆者健康管理センター

研修を終えての感想

マリナ　イワンチカワ　（ゴメリ医科大学6年生）
Maryna Ivanchykava さん

原爆の被爆者の方々が住まわれる原爆ホームを訪問した際、また8月9日の慰霊祭に出席した際に、その恐ろしい日のことをまざまざと感じました。私は涙が溢れ、心が痛みました。なぜならそれと似たようなことが私自身にも起こったからです。不幸は私の国、私自身、そして私の家族に降りかかりました。でもその不幸こそが私の将来の職業の選択の決め手となったのです。

日本での研修後、私は、私達2つの国の助け合い、特に医学の分野での助け合いがいかに重要で不可欠なものかを痛感しました。広島と長崎の悲劇から61年の月日が経ちました。この間に日本では多くの貴重な経験と知識が蓄積されました。私は、その有益な経験と知識に見習わせていただけることに対し、敬意と尽きせぬ感謝の思いを述べたいと思います。

タチアナ　クラウチャンカ　（ゴメリ医科大学5年生）
Tatsiana Krauchanka さん

私が日本で研修を受けることができるようご尽力してくださった皆様に、非常に感謝しております。

日本での研修は非常に印象深いものでした。

私は、各種医療機関や研究施設に近代的設備が完備されていること、それに医療関係者が患者に対して丁寧に接していることに感銘を受けました。原爆ホームを訪問したときには、弱者に対するいたわり、これほどの高齢者が何不自由なく活き活きと生活していることに驚かされました。小児科の病院でも、子供達が家にいるのと同じように感じられるよう、様々な工夫がなされていることに感心しました。

和食や茶道もとても気に入りました。

ありがとうございました。

マリナ　ジャリョナヤ　（ゴメリ医科大学4年生）
Maryna Zialionaya

NASHIMの皆様に、このような研修を準備していただいたことに対し、心よりお礼を申し上げたいと思います。

私達は、素晴らしい時間を過ごし、楽しみ、様々な人と知り合うことができました。その他、多くの時を医療施設で過ごし、その仕組みや住民への医療サービスについて知り、病院の機器のレベルの高さと、スタッフの高い専門性について納得することができました。この研修の後、私は医者であることがどういうことか、またその職業にはどんな責任が伴うのかを実感しました。この国での研修で得た印象は、長く私の心に残るでしょう。

ラマン　ツェツェラウ　（ゴメリ医科大学3年生）
Raman Tsetserau

長崎市で私は、数え切れないほど多くの興味深く独特な場所を訪れた。例えば、原爆資料館、平和公園、長崎大学医学部、放射線影響研究所、NASHIM、多くの被爆者が住む原爆ホームなどである。特に印象深かったのは、当時の出来事の生き証人の話である。その話は私の心に長く残ることだろう。

拭い去れぬ印象を残したのは、原爆資料館である。これに似た場所は世界中のどこにも無い。そこには恐るべき出来事が目に見える形で示されていた。私は原爆の爆心地を訪れ、いかに多くの人がその場所を訪れているか、そして人々がいかにその悲しみの記憶を大切に守っているかを見た。私を日本に招待してくれたNASHIMに対し感謝したい。

ゴメリ医科大学生と市民との交流





交流会は８月５日に国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で行われました。コーディネーターに長崎大学の高村助教授を迎え、NASHIMで招聘したゴメリ医科大学生４名に長崎大学医学部から村上知彦さん、元春洋輔さん、茅野龍馬さん、活水高校から岩永礼美さんの参加を得て実施しました。

はじめに高村助教授からチェルノブイリ事故についての説明があった後、各学生がスライドを使って、自分たちの生活や取組みについて説明し、チェルノブイリ事故とは何だったのかということについて現状の再確認をしました。後半は来場者とのやりとりを交えてベラルーシの被曝医療の現状や被爆地長崎が取組むべき今後の課題などについて意見交換を行いました。

ベラルーシを訪れたことのある元春さんは「ベラルーシの学生はアルバイトなどで医療に触れながら勉学に励んでいる。同じ医学生として凛としていて志が高いと感じた。また、戦争や侵略の歴史が長く、独立してからの歴史もまだ浅いので、みんなそれぞれに平和に対する哲学を持っていると思った。」と話しました。これに対し、マリナ･イワンチカワさんは「被ばくの痛みを味わったから、被ばくした人の気持ちがわかる。心理的な面からも支えてあげられる医師になりたい」、「医師になったらもちろんゴメリで働くが、もっと知識や経験を高めたい。長崎のみなさんが研修を受け入れてくれるなら、再び長崎を訪れたい。」と将来の夢を語りました。

最後に高村助教授は「NASHIMがこのような希望を持った医師、学生の方々に学ぶ機会や被ばく者医療について知る機会を提供することは、チェルノブイリ原発事故から２０年経った今後も必要。できればこれからも将来被ばく者医療に携わる若い世代に人材育成の分野でNASHIMが長崎から情報を発信できればと考えている。」とまとめました。

		研　修　日　程
7/28	金	長崎着
29	土	長崎大学医学部学生の案内で原爆資料館等見学
31	月	血液検査（長崎大学医学部） 長崎大学医学部長表敬訪問
8/ 1	火	第二外科外来見学（長崎大学医学部･歯学部付属病院） 県医師会長、長崎大学長表敬訪問
2	水	長崎市原爆被爆者健康管理センター視察
3	木	自身の被爆線量測定（長崎大学医学部） 恵の丘原爆ホーム視察
4	金	交流会打ち合わせ
5	土	交流会
7	月	甲状腺手術見学（長崎大学医学部・歯学部附属病院） 日本赤十字社長崎原爆病院視察
8	火	原爆遺構見学
9	水	平和式典参列 財団法人放射線影響研究所視察
10	木	チェルノブイリ医療基金の招きで長野県松本市へ
13	日	帰国

チェルノブイリ原発事故20周年記念関連事業

チェルノブイリ写真展

昨年の7月下旬から8月初旬にかけての１３日間、日本チェルノブイリ連帯基金と共催で写真展を開催しました。これは事故から２０年という節目の年にあたって、一般市民の皆様に事故や事故後の状況について認識を深めていただくとともに、海外のヒバクシャ医療に携わるNASHIMや日本チェルノブイリ連帯基金について知っていただくために企画したものです。チェルノブイリ原発事故で大きな汚染の被害を被ったベラルーシの村人を撮影した本橋誠一さんの『無限抱擁』から６０点の写真とNASHIM、日本チェルノブイリ連帯基金の活動紹介パネルを展示しました。

長崎原爆資料館のエントランスホールで開催されたこの写真展には開催期間中、約５０００人の来場者が訪れ、真剣に展示写真に見入っていました。



出　版

NASHIMは諸外国での放射線関係事故に関する図書の出版や長崎原爆関係図書の英訳出版、ロシア語の医学教科書出版などを行っています。２００６年度はチェルノブイリ原発事故２０周年事業の一環として、医学書と普及啓発冊子を出版しました。

医学書『ロシアにおける甲状腺癌の研究成果』（ロシア語）



事故後急激に増加した小児甲状腺癌の基礎的研究成果を長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設（原研）の山下俊一教授とウラジミール・サエンコ助手、ロシアのオブニンスク放射線医学研究所のアナトリ・ツィーブ所長ら６人で共同執筆したものです。年間１００万人に１人と言われる稀な小児甲状腺癌の病理診断基準や遺伝子異常の詳細を明らかにし、今後予想される成人の放射線誘発による甲状腺がん多発に備える早期診断・治療の教科書的な役割を現地で担うものと期待されます。

１０００部をモスクワで出版し、７月に関係諸国の専門機関に配布したほか、１００冊を長崎大学に置き、ヒバクシャ医療教育に役立てています。

『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』

チェルノブイリ原発事故から２０年目を迎えた記念として出版したものです。2006年度にNASHIMが行ったチェルノブイリ２０周年記念事業の報告に加え、事故の概要や事故後の現状、放射線に関するQ&A等が盛り込まれています。

４０００部を出版し、NASHIMの関係機関や全国の医科系大学等に配布する予定です。



People

カザフスタンから来た医師のご紹介



私の名前はアイヌール・アキルジャノワと申します。私はカザフスタンから来ました。今回、3回目の来日になります。1回目は2005年3月、長崎大学で行われた若手研究者の会議に、2回目はその年の7－8月に NASHIM の研修でそれぞれ長崎に来ました。

これまでの日本での体験は、私にとってとても興味深く、有意義なものでした。それは実際の病院での仕事だけでなく医療システムといった多岐にわたるものです。特に被爆者医療における医師と被爆者との密接な関わりと予防医学の高いレベルに感銘を受けました。また NASHIM の研修プログラムでは、被爆者の健康影響についての調査がいかに多角的に行われているかを目の当たりにしました。このような機会を与えてくれた NASHIM には改めて感謝したいと思います。長崎で得た経験は、その後の私の仕事にも応用できましたし、その後も長崎大学の高村先生との共同研究を継続してきました。

そして2006年末、私は再び長崎に来る機会を得ました。

私の母国であるカザフスタンが、アメリカ、フランス、ドイツそして日本の優れた研究施設に人材を長期に派遣することになり、選考の上、日本の長崎大学には私が派遣されることになったのです。私の役割は、特に乳がんについての遺伝子解析の研究を長崎大学で行うことです。現在私は、長崎大学の原爆後障害医療研究施設（原研）で客員研究員として研究を行っています。この長崎で分子生物学や病理学を学べることは私にとって光栄なことです。

長崎に来て3か月がたちました。長崎について少しずつ分かってきましたが、まだまだわからないこともたくさんあります。現在、私は日本語を学んでいます。それは「言葉ができてはじめて、その国の文化が理解できるのではないか」と思うからです。これからも、宜しくお願いいたします。

〈2005年度　NASHIM の受入研修での様子〉







Report

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受入研修



平和記念式典参列

１９９３年から実施しているチェルノブイリ・カザフスタン関連医師・専門研修を今年度も７月２１日から８月２４日まで１ヶ月余りにわたって、チェルノブイリ国際医療協力事業を活発に行っている長崎大学医学部を中心に、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センターなどNASHIMを構成する各機関で行われました。本年度で１４回目となるこの受入研修にはベラルーシ共和国、カザフスタン共和国からそれぞれ2名、ウクライナ、ロシア連邦からそれぞれ１名の計６名が参加しました。彼らは「被ばく者医療で高い技術がある長崎で得た知識を自国で活かしたい」と意気込み、研修に臨みました。

例年どおり長崎大学の原爆後障害医療研究施設(原研)でヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための共通の講義が２日間にわたって行われた後、病理学や疫学などそれぞれの専門分野に分かれての専門カリキュラムが始まりました。

研修の間には長崎原爆資料館の見学や平和記念式典へ参列するなど長崎原爆の実相についての認識を深めるとともに、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。また、恵の丘長崎原爆ホームでは直接被爆者の証言を聞く機会が設けられ、天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、母国の現状との比較を行うなど、有意義な研修ができたようです。

今年度は受入研修期間中に「放射線医療科学国際コンソーシアム第２回長崎シンポジウム」が長崎大学で行われ、研修者６名もこれに参加し、より専門知識を深めました。



恵の丘長崎原爆ホーム

研修生はどの方も、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を担っていかれる方々ばかりです。将来の国際医療協力分野における良きカウンターパートになっていただけるものと思っています。NASHIMでは今後とも長崎大学を始めとした研修機関と協力しながら、本事業を発展させていきたいと考えています。

2006年度 チェルノブイリ・カザフスタン関連受入研修者名簿

国　籍	氏　名	性別	所属・役職・専門分野
ロシア	Pavel Rumyantsev パヴェル・ルミャンツェブ	男性	オブニンスク放射線医学研究所 放射線外科上級研究員 放射線外科学
ウクライナ	Svetlana Galkina スベトラーナ・ガルキナ	女性	ウクライナ放射線医学研究所 研究部部長 小児科学
ベラルーシ	Iryna Novikava イリーナ・ノビカワ	女性	ゴメリ医科大学 臨床検査医学主任 臨床検査学・免疫学
ベラルーシ	Andrey Bespalchuk アンドレイ・ベスパルチュク	男性	ベラルーシ国立医科大学 形成外科助手 形成外科学
カザフスタン	Assel Zhanatbekova アセル ジャナトベコワ	女性	セミパラチンスク医科大学 内科学講師 内科学
カザフスタン	Nariman Mukhametgalyiev ナリマン ムハメッドガリエフ	男性	カザフスタンがん・放射線研究所 細胞診部門主任 細胞診断学

Report

研修後のレポート

研修結果に関するレポート

ベラルーシ共和国　ゴメリ医科大学
臨床検査医学主任　**イリーナ・ノビカワ**


日本赤十字社長崎原爆病院

2006年8月2日より、公衆衛生科で研修を受けた。この間大学病院の検査部で、治療及び研究目的で行われる臨床検査全般について知ることができた。研修中、免疫化学（血清）、生化学、遺伝、血液、輸血の各検査室を見て回った。免疫化学室では、ホルモン査定法、自己免疫関連病の患者の検査について知識を得たが、自分の専門が臨床免疫学なので、大変興味深かった。生化学室では、種々の生化学検査の機器について知った。どの検査室でも、分析前、分析、分析後の作業について、懇切丁寧に説明を受けることができた。検査部での精度管理についても、詳しく知ることができた。遺伝検査室では、PCR 検査やサザンブロット法について学んだ。またフローサイトメトリーに関する興味深いレクチャーや検体に関する作業についても知った。個人的にも様々な研究を行うことができた。特に興味深かったのは、輸血検査室である。日本赤十字社長崎原爆病院の血液センターを訪問したり、脚部の血管の病気における再生医療に関する実験について聞いたり、幹細胞の抽出や培養の実験を見学することができた。最も多くの情報を得ることができたのは、この輸血部においてである。全体として、研修課程はよく考案されており、職員の親切さ、その専門性の高さ、検査室の臨床データを惜しげもなく与えられるレベルの高さと善意に支えられていた。ゴメリ医科大学に帰った後は、教育や治療においてこちらで感心した幾つかの要素を取り入れてみたい。NASHIM に対して研修の機会を与えてくれたこと、また研修期間全体におけるサポートについて感謝の意を表したい。

長崎での研修レポート

カザフスタン共和国　カザフスタンがん・放射線研究所
細胞診部門主任　**ナリマン・ムハンメッドガリエフ**


長崎大学での講義

2006年7月22日から、長崎市の平和公園、爆心地公園、如己堂、原爆資料館、平和祈念館を見学し、原爆による悲劇に関して、強い印象を受けた。またいくつかの表敬訪問を行い、被爆者に対する援助を行う研究機関、医療機関を見学して回った。

7月31日、8月1日は、原研内科・病理・国際・疫学の講義を受けた。

8月2日から22日まで、長崎大学医学部原研病理および大学病院の病理部で研修を受けた。研修期間中、200名以上患者の様々な部位の腫瘍の組織標本、パパニコロウ染色による400名以上の患者の様々な部位の腫瘍の標本を観察した。その他に、パパニコロウ染色や免疫細胞染色、免疫組織染色の手法について、またフローサイトメトリーや PCR、DNA の抽出、シーケンス、プライマー選別などについても学んだ。大学図書館が契約しているインターネットサイトの文献も活用した。

そのような機会を与えてくれた NASHIM に深く感謝している。

関根先生、山下先生、朝長先生、高村先生にお礼を申し上げたい。

研究員のサエンコ夫妻、病理部の穴見先生、院生のナターリア、同郷のセリック・メイルマノフおよびタマーラ・ジュヌソヴァにも感謝している。みなさん、ありがとうございました。

カザフスタン共和国アルマティ・セミパラチンスク派遣記録

長崎大学移植・消化器外科（旧第二外科）
前田　茂人

今回2006年5月25日から6月2日まで、NASHIMの一員としてカザフスタンへ派遣させていただいた。カザフスタン第一の商業都市アルマティ市と被曝地域であるポリゴンの近くのセミパラチンスク市を中心に、ジュネーブWHO出向中の山下俊一先生と公衆衛生学の高村昇先生らと行動を共にした。

思い起こせば1999年の8月が最初の訪問であったが、それから2001年の医局長時をのぞき毎年訪問させてもらっている。当初は経済的に支援が必要だと思えていた街並みが、たくさんのビルディングや新築の家が建ち並び、道には高級車が数多く往来していて、少なくともアルマティは長崎よりも経済的には恵まれていると感じた。



1）講演：アルマティへ着いた翌日5月26日には、Scientific Research Institute of Cardiology and Internal Diseaseで甲状腺疾患に対する診断から治療までの流れについて講演を行う機会を得た。循環器内科医と内分泌内科医がおられたが、甲状腺の手術に興味を持たれたようで有難かった。



2）長崎大学賞：セミパラチンスク医科大学と長崎大学は姉妹校であり、今回、第7回目の長崎大学賞が学業優秀な学生さんへ授与された。授賞式に先立って「WHOの世界戦略」という山下俊一教授の講演が行われ、セミパラチンスク医科大学の学生さんはとても幸せではなかったろうか。この賞はセミパラチンスク医科大学学生の医学へのモチベーション向上に高く寄与していると感じた。



3）検診・セカンドオピニオン依頼：これまでの日本人医療関係者による検診・診断および治療に関する医療支援は、特にセミパラチンスクでは大変感謝されている。山下教授の数多くのご尽力から始まり、土井先生（長期間滞在による細胞診指導）や坂本穆彦教授（杏林大学病理学）、林徳真吉先生（長崎大学病理学）らによる細胞診診断技術移転は軌道に乗っているようだ。私の役目であった超音波と細胞診技術指導、そして診断から治療までの流れに対する啓蒙活動も、遅々とではあるが、うまくいくものと期待している。



4）表彰状贈呈：今回は特にすばらしい表彰を受けた。これまでの長崎大学関係者全員への贈り物と思う。山下俊一先生にはカザフスタン共和国保健省から、高村昇先生と私には東カザフスタン保健局から表彰状をいただいた。

今回の出張を終えて

外科医として少しばかりの医学的貢献と心の橋渡しができたように思う。これまでの長崎とセミパラチンスクの絆がますます力強いものになってきたのは間違いない。この絆が長く続き、長崎からの被爆医療支援が世界へ発信され理解されることを祈願する。

最後に貴重な機会を与えていただきましたNASHIM関係各位の方々にお礼を申し上げます。

井石会長、齋藤副会長ベラルーシ共和国を訪問



2007年1月27日から約10日間にわたって、これまでNASHIMのチェルノブイリ医師・専門家招聘事業で研修生として来日した医師・専門家のフォローアップ事業としてNASHIMの井石会長（長崎県医師会長）と齋藤副会長（長崎大学学長）がベラルーシ共和国を訪問しました。

井石会長と齋藤副会長は、まずベラルーシ共和国の首都ミンスクで国立ベラルーシ医科大学、甲状腺がんセンターを訪問し、ベラルーシにおける医師·学生への教育の現状や甲状腺がんの治療の実際について現状を視察しました。ベラルーシ医科大学では、NASHIM、それに長崎大学のこれまでの貢献に対して感謝状が贈られました。

続いて訪問した甲状腺がんセンターでは、現在稼働している甲状腺がんの診断のための遠隔医療診断支援システムの見学を行うと同時に、2001年に第4回永井隆平和記念・長崎賞を受賞されたエフゲニー・デミチック氏に面会し、同国におけるヒバクシャ医療の現状について意見交換を行いました。さらにミンスクでは在ベラルーシ日本大使館の小池孝行氏を表敬訪問し、これまでのNASHIMの活動について報告するとともに、今後のベラルーシ共和国への支援の在り方について意見を交換しました。小池大使からは、これまでの長崎からチェルノブイリへの貢献について高い評価をいただき、今後は大使館の支援事業への助言をしてほしいという要請も受けました。

その後、井石会長と齋藤副会長はチェルノブイリ原発事故の影響を最も受け、小児甲状腺がんが多発した同国のゴメリ州を訪問しました。ゴメリ医科大学や国立放射線医学・環境研究センターを訪問して、これまで長年にわたってNASHIMで招聘した医師・専門家が現地のヒバクシャ医療の第一線で活躍している現状を視察しました。さらに、事故後住民が避難し、その後も放射能汚染があるため一般の人は立ち入ることができない発電所周辺の「30kmゾーン」も特別の許可を得て見学し、チェルノブイリ原発事故による放射能汚染が、事故から20年を経過した現在でも存在していることを目の当たりにしました。

なお、ゴメリ医科大学では、齋藤副会長に対し名誉教授号が授与され、これを記念して齋藤副会長による「長崎大学の歴史と放射線医学研究に対する取り組み」と題する特別講演が行われました。



今回の派遣事業は短い期間の訪問でしたが、NASHIMが長年行ってきた研修事業に参加した多くの医師・専門家がヒバクシャ医療の第一線で活躍している現状を確認することができ、非常に有益なものとなりました。

（レポート：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　高村 昇）

From Korea

被爆者医療等研修　～韓国から医師等を招聘～

ＮＡＳＨＩＭでは、長崎が蓄積した原爆被爆者治療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果を生かして、韓国国内で在韓被爆者に対する援護事業を実施している医療機関などから医師等を招聘し研修を行っています。

今年度も、被爆者医療の研修と交流を目的として、１１月、１２月、２月の３回に分け、医療職６名、事務職６名の計１２名が来崎しました。



NASHIM 会長訪問



原爆資料館見学

研修者はまず、長崎県庁や長崎市役所で職員から原爆被爆者行政の説明を受け、熱心に質問や意見交換を行いました。その後、長崎県医師会を訪問し NASHIM 会長である井石哲哉県医師会会長と懇談し、日本と韓国の被爆者医療の違いなどについて意見交換を行いました。

研修期間の前半では、長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼祈念館のほか、平和記念公園、原爆落下中心地、永井隆記念館などを訪れ原爆の実相など研修しました。また、長崎市原爆被爆者健康管理センターにて被爆者健診の状況や施設などを見学しました。

後半では、医療職、事務職それぞれに別れ、日本赤十字社長崎原爆病院や財団法人放射線影響研究所、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎大学医学部・歯学部附属病院、長崎大学原爆後障害医療研究施設などで研修や視察を行いました。

研修者らは、「被爆地を訪れ、原爆投下は二度とあってはならないと実感した。帰国して周囲の人に伝えたい。」「韓国の被爆者は約2,400名いるが、一般の人たちは被爆者に対する関心が低い。研修で被爆者医療への理解を深め、韓国でこの経験を活かしたい。」などの感想を述べました。

○ 2006年度　韓国人医師等被爆者医療研修者名簿

回数	研修期間	所属	職名	姓名
第1回	11月5日～11月11日（7日間）	嶺南大学附属病院	教授	金　昌潤　キム チャンヨン
		ソウル赤十字病院	診療部内科長	趙　三権　チョウ サンウォン
	11月5日～11月9日（5日間）	韓国保健福祉部疾病対策課	事務官	姜　仁俊　ガン インジュン
		陜川原爆被害者福祉会館	館長	朴　貞姫　パク ジョンヒ
第2回	12月3日～12月9日（7日間）	ワレス記念浸礼病院	内科部長	李　浚相　リ ジュンサン
		セソウル内科医院	医師	尹　汝鶴　ユン ヨハ
	12月3日～12月7日（5日間）	ソウル赤十字病院	院務課長	李　秉燦　リ ビョンチャン
		大邱赤十字病院	院務課長	朴　性直　パク サンジク
第3回	2月25日～3月3日（7日間）	ソウル赤十字病院	医師	金　恩那　キム ユンナ
		嶺南大学附属病院	医師	申　東薫　シン トンホン
	2月25日～3月1日（5日間）	陜川原爆被害者福祉会館	生活指導員	李　南鎮　リ ナムジン
		陜川原爆被害者福祉会館	生活指導員	延　順英　イェン サンヨン

＜NASHIM 研修を終えて＞

2007年2月25日から3月3日まで‘NASHIM 韓国医師等受入研修’に参加しました。





２００７年 １月に被爆者検診研究のために長崎に訪れたこともあり、また私が担当している患者の中にも被爆者がおり、今回の研修は被爆者に対する背景知識と原爆に対しての理解を深める良い機会になりました。

4回の講義で原爆に対する基礎説明、放射線が人体に及ぼす影響及び放射線による発癌、そして最近取り上げられている放射線医療まで充実した説明を受けました。実は原爆に対する漠然とした恐怖を感じていただけで実際の被害やそこで生き残った人々がどんな苦痛を経験したのかは全く知りませんでした。私にとって今回の研修は原爆の被害の実態を現実的なものとして実感することが出来る機会となりました。

いろいろな日程の中で私は落下中心地付近の見学が一番印象に残りました。原爆の悲惨な被害や被爆者の苦痛を考えたら二度とこのようなことはあってはならないと思います。‘平和は長崎から’と言うメッセージは全世界の人々の無知や無関心から、原爆あるいは水爆の恐ろしさを絶えず思い起こさせてくれます。私たちが平和を求め続けていくことは孤独であり困難も伴いますが本当に重要な運動だと思われます。

もう一つ、長崎で敬愛されている永井隆記念館と如己堂を訪ねた事も記憶に残っています。若くして闘病生活と戦いながら最後まで愛と使命感を失わなかった永井博士の一生を知り感銘を受けました。大変だった時期に多くの一般の長崎市民の方々もおそらく同じように立派に乗り越えたのではないかと思われます。

私の兄弟も原子力研究所と関わりのある仕事をしているので個人的にも放射能のことを心配しています。今回の研修は個人的にもとても有益なものでした。



今回の研修で充実した教育と温かく歓待してくださったNASHIM 会長様、長崎県市の関係者の皆様、長崎大学、日本赤十字社長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センター、財団法人放射線影響研究所の先生方にもこの場を借りて感謝の言葉を申し上げます。

2007年3月15日　ソウル赤十字病院　内科　金恩那

韓国への専門家派遣

NASHIMでは、被爆者に対する相互理解と被爆者医療の進展を図るため、１９９９年から韓国へ医師等の専門家を派遣しています。今年度も１月から２月にかけて２回の派遣を実施し、韓国の医療関係者との意見交換や病院等の視察を行いました。

第１回目の派遣では釜山ワレス記念浸礼病院と居昌赤十字病院での被ばくしゃ医療セミナー開催と陜川原爆被害者福祉会館の訪問を行い、第２回目は2007年５月に健康相談等事業が実施される予定の馬山医療院で健診視察と事業を円滑に進行させるため健診担当者との協議を行いました。

派遣した先生方に報告をしていただきましたのでご紹介します。

※健康相談等事業…厚生労働省の委託による在外被爆者対策として、外国に医師等を派遣し、健康相談等を実施することにより原爆による後障害に対する不安の解消と健康の増進を図ることを目的とするもの。

韓国での講演と陜川原爆被害者福祉会館見学

長崎大学原研　難　波　裕　幸

NASHIMの専門家派遣事業の一環として、韓国の釜山と居昌の医療従事者を対象として平成19年1月31日から2月3日に被ばく者医療に関する講演を行ないました。この講演の目的は、在韓被爆者の診療を行なっていらっしゃる韓国の医療従事者の方々に原爆と被ばく医療についてより深く理解していただこうというものです。



原爆被害者福祉会館館長と関根先生

原研病理の関根一郎教授と私が、現地の2病院（ワレス記念浸礼病院と居昌赤十字病院）でそれぞれ「長崎原爆と後障害」と「チェルノブイリ原発事故とNASHIMおよび長崎大学の国際医療協力」について講演しました。ワレス記念浸礼病院では約40名、居昌赤十字病院では、約15名の医療従事者の方々に熱心に拝聴していただき、また質疑応答を行いました。特に居昌赤十字病院では、院長をはじめとしてスタッフの皆様に歓迎晩餐会を開いていただき、和やかに友好を深めることができました。

最終日には、長崎の原爆ホームに相当する陜川原爆被害者福祉会館に見学でき、80名の被爆者の方々の生活ぶりを見せていただきました。まだ１００名以上の被爆者の方々が入居を希望して待機してらっしゃるという事実を知りました。居昌赤十字病院と陜川原爆被害者福祉会館に、関根教授の撮影なされた花の写真数点が飾られることに決まり、今後、在韓被爆者の心の癒しになるとともにNASHIM被爆者医療の記念となることでしょう。



ワレス記念浸礼病院



居昌赤十字病院

2007年度在韓被爆者健康相談事業に関する健康診断状況視察報告書

熊谷　敦史

健診施設の概要

2007度の健康相談事業は5月に慶尚南道馬山市で予定されています。馬山市は人口約43万人、韓国東南端中央部に位置した海岸都市で、釜山から約44kmの距離に位置しています。健診及び相談事業を行う馬山医療院は慶尚南道からの予算措置のもと、慶尚大学医学部により運営される国立民営形態の公共病院であり、ベッド数234で18名の医師により診療がなされています。主な医療設備としてMRI、CT、X線透視装置、消化管内視鏡を備え、血液・尿検査のほとんどの項目に対し、院内の分析装置で対応することができます。

2007年の在韓被爆者健診は2月1日から開始しており、1日あたり約12名の健診を行っています。健診専門の部署はなく、実際の検査は各診療科に依頼し、結果を診断検査医学課長の鄭賢珠医師が統括して受診者に郵送し、緊急の診療が必要な場合には電話で直接受診者に連絡をしています。

訪　問





馬山医療院を訪問し、同院の院長をはじめ、健診に関与するスタッフと面談しました。

崔埈榮院長からは、「韓国に住む被爆者に温かい関心をもってくださっていることに感謝します。これから被爆者個人の心の痛みともに韓日両国が抱えている歴史上の痛みをも克服する努力が必要です。」との挨拶をいただきました。「医療設備は大学に及ばないものの、できる限りの協力をしたい。」との言葉も頂戴し、院長をはじめ健診に従事するスタッフの本事業への強い期待が感じられました。

健診施設の視察のあと、健診総括担当者との実務協議として、相談事業開始までに行われる資料準備について、その内容・項目についての質疑を行い、加えて馬山医療院と大韓赤十字社との項目ごとの役割分担を検討しました。

協議による合意内容

健診結果については、馬山医療院所定の入力様式に従って同院で英語入力・出力されたもの及び外部委託業者から返信されたパターン図が相談事業に提供され、総合判定についてはハングル語で入力されているため、大韓赤十字社により日本語翻訳した上で提供される予定。また、前回の検査結果については、別紙として添付される予定です。

（※事務局：協議結果の詳細については紙面の関係上省略させていただきました）

謝　辞

院長以下現地スタッフの本事業に対する関心・期待の大きさも十分に高まっていることが察せられ、5月の相談事業が円滑かつ実りあるものになることが期待された訪問でした。なお、今回の訪問・協議については長崎県と大韓赤十字社による周到な事前準備により、つつがなく行うことができましたことに感謝致します。

2006年度　専門医師等韓国派遣者名簿

	派遣期間	所属	職名	氏名
第1回	1月31日～2月3日（4日間）	長崎大学原爆後障害医療研修施設	病態分子解析分野教授	関根　一郎
		長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子診断研究分野助教授	難波　裕幸
		長崎県原爆被爆者対策課	課長補佐	島村恵美子
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局	福田　恵子
第2回	2月6日～2月8日（3日間）	長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子治療研究分野助教授	塚崎　邦弘
		長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子診断研究分野研究員	熊谷　敦史
		長崎県原爆被爆者対策課	係長	山口　勇次

Information

平成18年度外務大臣表彰受賞



平成１８年７月１０日に平成１８年度外務大臣表彰が外務省で執り行われ、NASHIMが表彰状を授与されました。この賞は近年の国際環境の変化と日本の国際的地位の向上および諸外国との相互依存関係の深化に伴い、多くの方々が国際関係のさまざまな分野で活躍し、日本と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている中で、特に顕著な功績のあった個人や団体を表彰するものです。今年度は個人36名と１６団体が表彰され、NASHIMからは井石会長が授賞式に出席しました。

井石会長は「NASHIMは長崎原爆という負の体験を将来へむけた非核平和の礎石として、県と市の行政がヒバクシャ医療に携わる関係機関と連携し、一丸となって医療協力関連分野の事業に専念してきた。長年にわたる国際貢献に対して、外務大臣から表彰をいただき、大変名誉でうれしい。今後とも長崎原爆を被災された多くの犠牲者の御心に応え、また蓄積された被爆者医療のノウハウを世界の被ばく者救済のために活用するため、平和医療外交の一助としてNASHIM事業の更なる発展を期したい」と喜びを語りました。

核禁会議がNASHIMへ活動助成金を寄付

平成１８年８月7日に核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）全国集会が長崎原爆資料館ホールで開催され、NASHIMがほかの７団体とともにカンパ金を贈呈されました。

核禁会議は昭和３６（１９６１）年に結成され、「被爆者に愛の手を！」を合言葉として被爆者の方々を救援するためのカンパ活動を長年行っています。結成以来、多くの施設に検診車、送迎用マイクロバス、車椅子、ベッド、医療器具などを毎年贈り続けています。長崎市の平和公園にある「平和の泉」を建設したのはこの核禁会議であり、また、国際的には韓国の陜川原爆被害者福祉会館に医療機器などを送り続けています。

今年度はこの活動助成金を医学図書『小児甲状腺学』（ロシア語）の増刷に利用させていただきました。核金会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

第７回永井隆平和記念・長崎賞候補者募集のお知らせ



ナシムは原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療および調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を贈っています。長崎原子爆弾被爆５０周年にあたる平成７年度に創設し、今回が第７回目の実施となります。

この賞にふさわしい候補者がおられたら、５月１５日までに推薦をお願いします。



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第19号
発行／平成19年3月30日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(895)2473　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/
E-Mail　info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.20
2007
AUTUMN

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師受入研修



Report …… チェルノブイリ・カザフ関連医師等受入研修
Study …… NASHIM研修医師の皆さん、体内放射能を測定!!
People …… 原研の外国人研究員のご紹介
Report …… 泰山弘道著「長崎原爆の記録」完全版が復刻出版される
Information …… 永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定
Information …… 核禁会議がNASHIMへ活動助成金を寄附

Report

チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受入研修



チェルノブイリ原発事故関連諸国、カザフスタン共和国から専門医師を招いてのヒバクシャ医療研修が今年も7月24日から8月24日まで約1ヶ月間に渡って実施されました。

今年で15回目となる本研修には、ロシア連邦、ウクライナ共和国、カザフスタン共和国からそれぞれ1名、ベラルーシ共和国から2名の計5名が参加しました。

研修は長崎大学医学部を中心として実施され、ヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための共通講義が行われた後、それぞれの専門分野に分かれてのカリキュラムが組まれました。

研修期間中には原爆資料館の見学や平和祈念式典への参列などで長崎原爆の実相について認識を深めるとともに、日赤長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センター、財団法人放射線影響研究所、恵の丘原爆ホーム、天草はまゆう療育園の視察や長崎県庁での行政説明など原爆被爆者への医療システムや行政支援についても学びました。

休日には、みなとまつりの打ち上げ花火や精霊流し、伊王島での海水浴など夏の長崎を満喫しました。





研修を終えて

●オブニンスク放射線医学研究所（ロシア連邦）



教授　ウラジーミル・パーシン（超音波診断学）

訪問中、1945年8月9日に起こった長崎市の原爆投下の歴史について知ることができた。原爆資料館を訪れた際、また原爆犠牲者の追悼式典に参列した際に、拭い去りがたい印象を受けた。

研修で最も重要だったのは、放射線、内科、外科の治療制度に関して、実地に知ることができたことである。導入研修として行われた、様々な臨床的・理論的講義は、日本の臨床医学における最新の成果である。その広いテーマ性、講師の高い知識レベルにより、その分野での臨床医学の基本的成果を知ることができた。

この素晴らしく、多角的な研修の準備および遂行に携わった全ての方々、とりわけNASHIM会長の井石先生および山下教授に対し、感謝の意を表したい。

●ベラルーシ卒後医学教育アカデミー（ベラルーシ共和国）



講師　イリーナ　シマンスカヤ（産婦人科）

NASHIMの招待をいただき、長崎医科大学の分子医学部門（原研細胞）にて教育を受けることになった。研修期間中、私は、被爆者のための健康ケアシステムに関する知識を得ることができ、分子生物学や放射線被ばくによる医学的な影響、医学と生物学統計など最高レベルの専門技術を持つ長崎大学の教授陣により、学ばせて頂いた。

平和式典はこの研修中に最も印象的で重要なプログラムだった。この式典に参加させて頂いて、日本の首相や市長のスピーチが拝聴できた事をとても嬉しく思っている。

長崎の博物館や、浦上天主堂などの訪問も興味深く文化体験ができるプログラムだった。

最後に、長崎へ招待して頂き、日本の大学と交流し、また、学んでいくように配慮してくださった、NASHIMの井石会長と山下教授に深く感謝申し上げたい。

●ゴメリ医科大学（ベラルーシ共和国）



副学長　アレクサンダー・コズロフスキー（小児学、疫学、免疫学）

研修はNASHIMの招聘により、医学部大学病院で行われた。研修期間中、日本の保健、教育、社会保障の制度について情報を得、放射線防護、医療放射線、統計、分子病理学、診断学、血液学、輸血学他に関する諸講義を聴き、大学病院では放射線科、小児科、外科の業務を見学した。小児科の教授の診察や、小児外科、外科の手術にも立ち会った。また、原爆ホームやはまゆう療育園、原爆病院を視察した。

私に研修へ加わるように勧めてくれたジャヴァラノク教授に、また長崎での研修へ招聘し、受け入れてくれたNASHIM会長の井石先生、山下教授に対し、深く感謝の意を表したい。

●コロステン地区医学診断センター（ウクライナ共和国）



副センター長　オーレクサンダー・グテーヴィチ（超音波診断学）

私は現場の医師および保健担当者として、日本および長崎の医療制度、様々なレベルでの医療体制、治療機関の構造、財政、資材供給、人材育成に関する、また学術研究の成果や診断・治療に関する新しい手法の導入に関する問題に興味を抱いた。特によかったのは、長崎および広島原爆の医学的・社会的被害、チェルノブイリ原発事故、疾病の疫学、高線量・低線量放射線の人体に対する影響、分子的・遺伝的研究、放射線障害、がん・血液学的その他の疾病の診断と治療、肝細胞移植、放射線防護に関する講義である。全ての講義が高いレベルで、豊富な資料を用いた分かりやすい形で行われた。よりよい資料を提供しようとする、講師陣の熱意を感じた。

日本での研修は、私の技術レベルを向上させ、人生の中でもっとも鮮烈な印象となって残ることだろう。

●東カザフスタン州立がんセンター（カザフスタン共和国）



外科主任　アディルジャン・マサディコフ（外科学）

研修期間中、私は日本の保健制度、住民への検診と医療行為の体制について知ることができた。原爆ホームや天草のはまゆう療育園を見学し、入居者の待遇や、医療スタッフの子供達に対する暖かで思いやりに満ちた態度に驚かされた。大村市の長崎医療センター訪問時には、甲状腺の手術に立ち会い、容姿を考慮した縫合など、自分の職場で取り入れられるような技術について知ることができた。

長崎市とセミパラチンスク市の市民は、原爆と、セミパラチンスク市民を苦しめてきた核実験場での実験という、共通の痛みと悲劇を有している。私は今後も、悪性の病気の予防と治療を目的とした、我々の仕事によき影響を与えてくれる長崎大学との交流を望んでいる。

『NASHIM研修医師の皆さん、体内放射能を測定!!』

原研放射　森田直子



ホールボディカウンタ鉄室の内部（検出器とベッド）

長崎大学ホールボディカウンタは、主に原爆被爆者を対象とした微量な体内放射能の残留量を測定することを目的として、1968年に設置されました。1980年代当初まで、被爆者の方々の体内残留放射能のみならず、土壌中や農作物の放射能測定が継続されておりましたが、徐々に体内からも土壌や農作物における残留放射能も測定感度以下となり、消失したとみなしてよくなりました。1990年代以降は、1986年4月26日に発生した旧ソ連（現ウクライナ）チェルノブイリ原子力発電所爆発事故の被災者の体内残留放射能測定を行っており、ＮＡＳＨＩＭ協力事業の一つとしても継続させていただいております。今日、原爆被爆者からチェルノブイリ・ヒバクシャ、他の世界各国のヒバクシャ、またその他トロトラストによる内部被ばく測定や体内K測定の目的でも利用があり、日本でも数少ない貴重な内部被ばくの計測器として有効に利用されております。さらに長崎大学病院に緊急被ばく医療患者が入院した場合、内部被ばくの有無を確認する目的にも用いることができるように整備しております。

このホールボディカウンタは、外界の自然放射線を遮蔽するための大型の鉄室（鉄20mm厚、鉛内張3mm厚、合成樹脂板3mm厚、重量約50トン）と、γ線検出器のNaI(Tl)シンチレータ、511チャンネル波高分析器等から構成されており、人体内に存在するごく微量な放射性核種を測定することができます。

測定可能な核種は、カリウム-40（K-40）やセシウム-137（Cs-137）などのγ線を放出する放射性核種で、このうち天然放射性核種であるK-40は、自然界のカリウムの約0.012%の割合で存在し、人体には不可欠の金属です。

一方、Cs-137はウランの核分裂により生じる人工放射性物質であり、原爆投下や過去の核実験の放射性降下物（フォールアウト）として存在します。近年においては、1986年4月26日に発生した旧ソ連（現ウクライナ）チェルノブイリ原子力発電所の爆発事故によるフォールアウトにより、周辺地域の土壌中に含まれていると推察されます。

これまでに、NASHIM研修医師の方々にご協力をいただいたホールボディカウンタ測定は、2002年（平成14年）から2007年（平成19年）までで、計25名となりました。そのうち、13名の方から体内セシウムが検出されました。表1に、体内セシウムが検出された研修医師の方々の居住地と人数、測定結果より年間被ばく線量を算出した値（ICRP Pub.67より）を示します。一方、セミパラチンスク核実験場周辺地域からの研修生ではこれまで体内セシウムは検出されていません。

表1　体内セシウムが検出された方々の居住地と人数、年間被ばく線量

NSHIM研修医師居住地	人数	年間被ばく線量(ICRP Pub.67より)
ベラルーシ·ゴメリ	8名	0.002~0.070 mSv/年
ベラルーシ·ミンスク	1名	0.006 mSv/年
ウクライナ·キエフ	1名	0.020 mSv/年
ウクライナ·コロステン	1名	0.008 mSv/年
ロシア·クリンシー	1名	0.015 mSv/年
ロシア·オブニンスク	1名	0.001 mSv/年

NASHIM研修生の方々は、チェルノブイリ原子力発電所の周辺地域(ウクライナ、ベラルーシ、ロシア)に居住している方々が多く、事故の際の放射性降下物で汚染された地域で栽培された農作物を常食していると思われます。チェルノブイリ原発による汚染地域の農地などでは、Cs -137が農作物に取り込まれ、周辺住民がそれらを食料として摂取することにより、体内にCs -137が蓄積している可能性が示唆されています。また、過去の長崎原爆被ばく者を対象とした測定結果においても、同様の現象がみられたことが報告されています。

Cs-137の物理学的半減期は約30年ですが、生物学的半減期(体内に取り込まれた物質が、排泄作用等により体内から失われ、半分に減るまでに要する時間)は、約110日程度で比較的短いことが分かっています。従って、チェルノブイリ原発事故から約20年が経過した現在でもCs-137が体内に検出できるレベルで存在するということは、土壌から農作物を通じて絶えず摂取されていることが示唆されます。

しかしながら、2002年以降のホールボディカウンタ測定で検出されたCs-137による年間被ばく線量についてみてみると、13名のうちの12名の方々においては、日常生活における１人当たりの世界平均の年間被ばく線量(2.4mSv/年)の1%以下であり、また残り1名の方も3%程度にとどまっております。検査していただいた方には、帰国までに内部被ばくの結果をお渡ししておりますが、上記のようにチェルノブイリ原発事故によるCs-137内部被ばくによる障害はほとんど考えられず、体内セシウムが検出された方々を含め皆様安心してお帰りいただいているようです。



ホールボディカウンタ制御部

毎年長崎を訪問されるNASHIM研修医師の方々には、ホールボディカウンタ測定にご協力いただいており、心より感謝申し上げます。また、今後の長崎大学における国際ヒバクシャ医療の発展にとっても、お役に立てれば幸いです。

最後に、長崎大学ホールボディカウンタ測定のご要望がございましたら、下記までご連絡下さい。お待ちいたしております。

長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 原研放射
ホールボディカウンタ管理担当　森田直子
電話 095-849-7103 FAX 095-849-7104

People

外国人研究員のご紹介

原爆後障害医療研究施設は、原爆被爆者や放射線被曝事故等による放射線障害発症機序の分子レベルでの解明と放射線被曝者の遺伝子治療を目的として研究が行われています。また、放射線障害者（ヒバクシャ）の国際的調査や医療協力を実施し、さらに原爆後障害医療の情報センター的性格を併せ持った総合的研究施設として活動しています。

この研究施設では、チェルノブイリ事故被災国やカザフスタン共和国などからの外国人研究員の方たちも研究をしています。彼らに研究の内容や日本の印象などについて尋ねてみました。

1. 名前　2. 国籍　3. いつ日本に来たか　4. 研究の内容　5. 日本に来て感じたこと



1. Tatiana Rogounovitch（タチアナ・ログノビッチ）
2. ベラルーシ共和国
3. 1997年10月7日
4. 放射線誘発甲状腺癌についての研究
5. 安全の国・日本人の優しい心・進んでいる技術



1. Vladimir Saenko（ウラジミール・サエンコ）
2. ロシア連邦
3. 2000年5月
4. 甲状腺癌の分子生物学的研究・放射線誘発癌の分子疫学的研究
5. 日本人の細やかな気配り、彼らの仕事に対するひたむきな努力、外国人への非常に親切な理解



1. 孟 召偉（モウ・ショウイ）
2. 中華人民共和国
3. 2007年4月1日
4. 甲状腺癌に対するタキサン系抗がん剤とNF-kappaB標的剤の併用効果の検討
5. 第一印象は、日本と長崎が非常にきれいで、親しみやすい場所であるということです。道にゴミが落ちていません。川にはたくさんの大きい魚がいて、空にはたくさんの野鳥が飛んでいます。人々は、捨てる前に、ゴミを分別します。これは、中国人が見習うことができる良い習慣です。しかし、とりわけ、私は日本人が親切で礼儀正しいと思います。すべての先生、職場の人達は、非常に私によくしてくれます。私は、私がこの大家族の一員であると感じます。そして、私はこの教室で本当に多くのことを学びました。私は、この体験をいつまでも忘れません。



1. Valentina Drozd（ワレンチナ・ドロズド）
2. ベラルーシ共和国
3. 2007年5月28日
4. チェルノブイリ事故後のベラルーシにおける、超音波を用いた放射線誘発甲状腺癌の早期診断について
5. 私は、日本はとても自然が美しい国だと感じました。また、とても組織化されており、人々は勤勉で、経済も科学も非常に発展していると思います。私は一生懸命働くことも大切だけど、時々リラックスすることも大切ではないかと思いますが・・・・。



1. Serik Meirmanov（セリック・メイルマノフ）
2. カザフスタン共和国
3. 1999年10月7日
4. 放射線による甲状腺癌、乳腺癌についての研究
5. カザフスタン人と日本人はよく似ている。自分の国のために日本で研究出来ることを嬉しく思った。



1. Zhanay Akanov（ジャナイ・アカノフ）
2. カザフスタン共和国
3. 2007年6月8日
4. 幹細胞についての研究
5. 日本の歴史、人々は面白いと思った



1. Akulevich Natallia（アクレビッチ・ナタリア）
2. ベラルーシ共和国
3. 2004年10月
4. 個人間の甲状腺癌への罹患しやすさの違いを規定する分子メカニズムの解析
5. 私が初めて日本に来た時、私は長崎が「アジア的」でもあり「西洋的」でもあることに驚きました。普段の生活の中で着物を着ている女性に会うとは思ってもいませんでした。日本人は、たとえ日本語が全く分からない相手に対してでも、あらゆる手段を使って手助けをしてくれ、詳しい説明をしてくれます。大変すばらしいことです。最初の頃、日本人はユーモアのセンスがないと感じましたが、その考えは時間とともに変わりました。私にとって興味深かったことがあと2つあります。「チームスピリット」と「規則に従うこと」が日本人にとってとても大切だということです。また、日本人は非常に外交的でもあり、しばしば本心では何を考えているのか分からないときがあります。日本人になるということはたやすいことではありません。日本にいて、日本人ではないということはずっと難しいことですが。

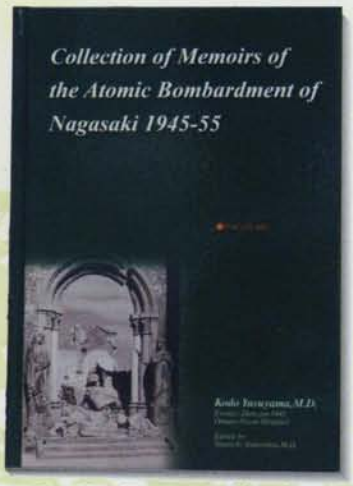


1. Ainur Akilzhanova（アイヌール・アキルジャノワ）
2. カザフスタン共和国
3. 2006年12月8日
4. 乳がんについての遺伝子解析の研究
5. カザフスタンと比べて面積が小さくて山も多いので、住めるところには人も家も多い。それを飛行機から見たとき、おもちゃのように可愛く、また美しく感じた。人は多いが、皆仲良く、親切である。

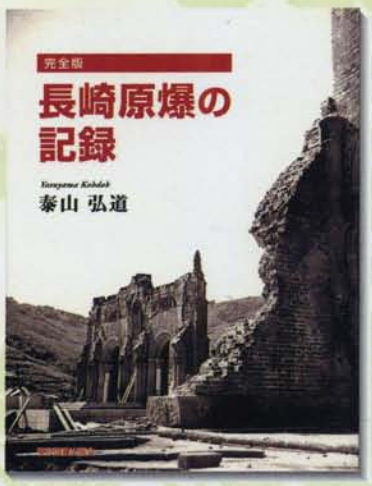
泰山弘道著「長崎原爆の記録」完全版が復刻出版される

NASHIMでは平成17年度に、大村海軍病院院長であった泰山弘道博士が、長崎に原爆が投下された際の被爆者の様子、その医療の実際、そして終戦後の長崎大学医学部の再興に向けた動き等を克明に記載した「長崎原爆の記録」の英語版、「Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55」を出版しました。これは泰山博士が、この記録をアメリカ国民にぜひ読んでもらいたいという思いから自ら英訳し、英語専門家の修正を経て完成したものの、当時の状況から出版されることができず、その後50年以上も日の目を見ることがなかったものを、長崎大学の山下俊一教授をはじめとする多くの方の御尽力もあってNASHIMから出版されたものです。出版後、この本はニューヨークの国連本部や世界保健機関（WHO）にも配布され、国内外で大きな反響を呼びましたが、日本語版については昭和59年の出版後、現在絶版になっており、入手が困難な状況でした。

今回、NASHIMによる英語版出版をきっかけとして、日本インシュレーション株式会社会長である柿木克己氏の御尽力もあり、「長崎原爆の記録」日本語版が、これまでカットされていた部分も含めた完全版として東京図書出版会より復刻・出版されました（税込2,100円）。この復刻版では、当時の大村海軍病院の現状や大村への空襲に関する記述から8月9日の長崎原爆投下の前後の記録、さらには長崎から搬送されてきた多くの被爆者の惨状と被爆者に対する治療の様子等について、写真と共に克明に記載しています。さらに終戦後、壊滅した長崎医科大学（長崎大学医学部）がどのように再興される運びとなったかについても記載されており、今年創立150周年を迎える長崎大学医学部の歴史を考える上でも極めて貴重な資料となっています。



「長崎原爆の記録」英語版



「長崎原爆の記録」日本語版

本書は書店やインターネットを通じての購入も可能です。また図書の詳細については日本インシュレーション株式会社（担当：情報管理部　金子一郎部長。電話06-6633-7323　E-mail: i-kaneko@jic-bestork.co.jp）までお問い合わせください。

Information

第７回 永井隆平和記念・長崎賞の受賞者が決定





NASHIMは被爆50周年にあたる平成７年に被爆者の救護に尽力した故永井隆博士の精神を引き継ぐことを目的に「永井隆平和記念・長崎賞」を創設し、ヒバクシャ医療の向上・発展とヒバクシャの福祉の向上に貢献した個人や団体を隔年で顕彰しています。第７回目となる今回は、多数の候補者の中からロシア医学アカデミー・オブニンスク医学放射線研究所のアナトリィ・ツィーブ博士が本賞受賞の最適者として満場一致で決定されました。

ツィーブ博士は、ソ連時代から放射線安全防護と放射線医療推進の中心的な役割を担われ、これまでの業績や活動は既に十分な国際的評価を受けておられますが、チェルノブイリ被災者及びロシア連邦全国民の健康状態の改善、放射線科学研究の推進、若手研究者の育成などの多岐にわたる貢献を評価し、この度、本賞を授与することとなりました。

授賞式は、10月31日にツィーブ博士を招いて長崎市内で開催する予定です。その模様は次号で詳しく報告します。



アナトリィ・ツィーブ博士

核禁会議がNASHIMへ活動助成金を寄附

今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金として、寄附していただきました。贈呈式は８月７日に開催された核禁会議長崎集会の中で行われ、他の９団体とともにNASHIMからは藤田事務局長が出席し、贈呈を受けました。

核禁会議は結成から今年で47年目を迎えますが、「被爆者に愛の手を！」を合い言葉として被爆者の方々を救援するためのカンパ活動を長年行っています。NASHIMは毎年活動助成金をいただき、図書の出版などに活用させていただいていますが、多くの医療施設には健診車、送迎用マイクロバス、車椅子、ベッド、医療器具などが贈られています。

長崎市の平和公園にある「平和の泉」を建設したのはこの核禁会議であり、また、国際的には韓国の陜川原爆被害者福祉会館に医療機器などを贈り続けています。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。



昨年の助成金により増刷した医学教科書
『小児甲状腺学』（ロシア語）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第20号
発行／平成19年10月10日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内）
TEL 095(895)2473　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.21
2007
WINTER



第7回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

Report …… 第7回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
Report …… カザフスタン訪問記 ～核汚染の大地に足を踏み入れて～
Report …… 韓国被爆者支援業務担当者への研修
Information …… 永井隆生誕100年記念式典のお知らせ
Information …… 出前出張講座のご紹介

第7回 永井隆平和記念・長崎賞
アナトリィ・ツィーブ博士に授与

永井隆平和記念・長崎賞は原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ、世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体に隔年毎に贈られます。



NASHIM 事業の一環として1995年に創設されて以来、第7回目となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式が10月31日に長崎市において開催され、はるばるロシアからご出席された受賞者アナトリィ・ツィーブ博士に井石会長から賞状と賞牌（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金が授与されました。

来年2月は永井隆博士の生誕100年を迎える記念の年となるため、永井隆平和記念・長崎賞委員会及び選考委員会では、本賞にふさわしい方の選考のため、これまでに増して活発な議論が重ねられました。アナトリィ・ツィーブ博士は、1986年のチェルノブイリ事故直後から被災者の救助支援活動において指導的役割を果たし、被災者の健康診断データベース構築や長期追跡調査の遂行などによるチェルノブイリ被災者医療の向上と放射線科学研究の推進、さらには若手研究者の育成などの多岐にわたる貢献が評価され、今回の受賞となりました。



授賞式へは、長崎県副知事、長崎市長をはじめ、病院、研究施設などから多数の関係者の皆さんにご出席いただきました。また、ツィーブ博士が、「LIFE AND RADIATION」というタイトルでスピーチを行い、「チェルノブイリ事故後の日本政府や支援団体、研究者の皆さんのこれまでの協力に感謝し、今後も事故後に増加した甲状腺がんの治療に力を注ぎたい」と力強く述べられました。

授賞式後は祝賀会を開き、ツィーブ博士の受賞を皆さんに祝っていただきました。



長崎原爆病院進藤院長の音頭で乾杯。



長崎如己の会久松副理事長（右）と
永井隆記念館の本田さん（左）



放射線影響研究所寺本常務理事（中央）
長崎大学原研朝長教授（右）、山下教授（左）

受賞者紹介



アナトリィ　ツィーブ
Anatoly Tsyb 博士（73歳）
ロシア医学アカデミー・オブニンスク放射線医学研究所所長

経　歴

1934年1月21日生まれ

1957年	ウージュゴロド国立大学（ウクライナ）卒業
1959年～1961年	ウージュゴロド国立大学医学部大学院在学
1961年～1978年	ソビエト連邦陸軍医療部門医学放射線研究機関（RIMR）で大学院生として学んだ後、研究員、部門長として勤務。
1978年～1992年	ソビエト連邦陸軍医療部門医学放射線研究機関（RIMR）理事
1992年～現在	ロシア医学アカデミー・オブニンスク医学放射線研究所（MRRC RAMS=元RIMR）所長

活　動　歴

1986年	チェルノブイリ原発事故により放射線被曝した人々のためのロシア国立線量測定登録事務所（RNMDR）を設立。
1986年～現在	放射線事故の健康上の影響を緩和する連邦プログラムを実施。
1989年	「セミパラチンスク核実験施設の周辺の生態系の状況、付近に居住する住民の健康上の影響に関する国際会議」に参加。
1993年	当時の中曽根元総理大臣に招聘され、「脱冷戦における核実験禁止とプルトニウム問題についての協力」国際会議において基調講演を行った。
1996年	ウィーンで開催された「チェルノブイリから10年」国際会議に参加し、WHOを代表して発表を行った。

第7回永井隆平和記念・長崎賞を受賞して

この機会をお借りし、私の仕事を高く評価していただきましたことに、また、永井隆平和記念・長崎賞の栄誉を与えていただきましたことに、心から感謝の意を表す次第です。原爆の恐ろしい経験にもかかわらず、自分の苦痛を克服し、他人の苦痛を和らげることに全力を尽くした永井博士をはじめ、永井博士の同僚の皆様に、心から敬意を表します。

広島・長崎原爆とチェルノブイリ事故は、世界に多大な苦痛をもたらし、放射線が及ぼす被害には境界がないことを実証してきました。一国に核の惨事があれば、国際的な影響をもたらします。このことから世界中の医師と科学者達は、チェルノブイリの放射線被害を理解し、それを緩和するため、力を合わせてきました。

チェルノブイリ事故直後の非常に困難な時期に、ご尽力いただいた日本政府と国民に心から感謝の意を表する次第です。

私たちと私たちの子供や孫たちは、ロシアと日本が経験した悲劇がまた繰り返されないように全力を尽くさなければなりません。「長崎の鐘」に永井博士が訴えた世界平和を共につくり出すことができると信じています。



※授賞式にあたっていただいたコメントの一部を掲載しています。



カザフスタン訪問記

核汚染の大地に足を踏み入れて

長崎大学医学部長　河野　茂

今回、長崎ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)の代表としてカザフスタン共和国を9月3日から一週間訪問しました。現地では、永井隆博士の業績を中心としたNASHIMの活動や長崎大学医学部150周年の歩みを講演し、各種交流を深めることができました。実は私は1980年米国ニューメキシコ州立大学に留学している時に、長崎に落とされた原爆が開発されたロスアラモス研究所と核実験が実施されたアラモゴードを訪れています。しかし、今回は図らずも長崎に落とされた原爆の情報がソ連のスパイの手に渡り、長崎型の原爆が作成され、旧ソビエト連邦が第一回核実験をおこなった核実験場:ポリゴンを訪れることとなりました。

そこでの強烈な印象をお話する前に、まずNASHIMの関係の皆様にご報告したいことがあります。それは山下俊一教授の長い期間に渡る粘り強い努力がなければ、これまで、これほどの実績が挙がらなかったことを私が確信したことです。この国は旧ソビエト連邦から1991年に独立したばかりで、いわゆる旧共産圏に属するため、官僚機構やKGBの組織などの影響で、NASHIMの仕事を進めるためには粘り強い精神力と強靭な意志が必要な所と感じました。山下俊一教授や高村昇准教授の仕事ぶりをみますと、現地の人としっかりとした人間関係が確立されており、現場の人だけでなくいわゆる有力者との関係も確実に築きながら、人材を捜し、留学生や客員教授を受け入れ、時には忌憚のない議論をしながらも、辛抱強く現地に滞在して10年以上かけて積み上げてきた仕事ぶりには心から敬服するものがあります。



図1　カザフスタン共和国とセミパラチンスク

さて、2007年9月3日に私は山下教授、高村准教授、カザフスタン留学生のアイヌール・アキルジャノバさんと一緒に韓国経由でカザフスタンに入りました。長崎を朝7時に発ち、韓国経由で、カザフスタンのアルマティに現地時間の20時半(時差3時間)に到着しました。まず皆さんも私と同じように、カザフスタンってどこに在るのだろうと思われるとおもいます。(図1)で示しますように、モンゴルよりさらに西でチベットの北、シベリアの南に位置するところで、世界でも9番目に国土の広い所だそうです。いわゆるシルクロードの要で、中央アジアの中心といった国です。ここはウラニウムやチタンなどの金属の埋蔵量が極めて多い所で、昨年は小泉前首相も訪れ、国を挙げての外交が展開されましたが、政治的に経験豊かなナザルバイエフ大統領に翻弄され十分な成果を上げきれなかった印象が残っています。

アルマティのカザフ医科大では、関根一郎教授の教室に12年間留学して最近医学部長に就任したガビット・アリポフ先生の取り計らいにより医学部の4年生に対し150周年に関連した長崎大学医学部の歴史と被爆後の永井隆博士の献身的貢献と多くの先輩の努力で蘇った我が医学部歴史の話をさせて貰いました。その後いよいよ原爆実験の行われたセミパラチンスクに向かいました。さすがに実験が行われるような僻地であり、アルマティからの飛行機には決まった座席はなく、早いもの順に席をとるようなシステムで、窓側の座席は上空で

かなり冷え込むため通路側をわれ先に確保するよう山下教授から指導を受けました。しかもこのセメイ航空はIATAにも加盟してない航空会社であり、山下教授からは墜落しても保険はでないのでとしっかり脅されながらの飛行でした。ここでは一足先に現地に入っていた現在関根一郎教授の教室に8年間留学しているセリック・メイリマノフ先生がすべての会合や仕事の調整をしてくれており、国際協力において彼のような人材の発掘と育成がいかに重要であるか実感しました。セミパラチンスク医科大学のマラット・ウラザリン副医学部長の紹介でトレベイ・ラヒンベコフ新学長を表敬訪問し、医学部2年生160人ほどが集まった教室で第7回長崎国際医学生奨励賞の授与式を行いました(図2)。白い帽子と白衣をつけた学生達の前で、3年生のディララ・アスハバリナさんと5年生のガオラール・ジュマグロワさんをそれぞれ表彰しました。感動的だったのは彼らの両親が授賞式に来られていたことと日本ではともすれば忘れ去られがちな規律と礼儀正しさでした。最後に私が長崎大学150周年の歴史を永井隆博士の話を中心に講演をしました。



図2　セミパラチンスク医科大学で行われた第7回長崎国際医学生奨励賞の授与式

そしてついに今回の最大目標である核汚染大地ポリゴンを訪れました。1949年8月29日に旧ソビエト連邦で初めて核実験が実施された場所はセミパラチンスクから150kmほど西にあります。途中の道路は舗装されているものの穴ぼこだらけでゴトゴト大きく揺られながら、3時間ほどでまずクルチャトフ市に着きました。ここは核実験のためにつくられた秘密都市で、昔は地図にも載っていなかったそうです。そこの博物館(図3)で大まかな話を聞き、さらに60km



図3-1　クルチャトフの博物館において説明を受ける河野医学部長ら



図3-2　博物館内に展示されている核実験場の模型

ほど離れたポリゴンに向かいました。ここから案内の兵士が乗り込み、舗装されていない道路を土煙を上げながら走行し、1時間ほどかかって、ポリゴンの中心地点に着きました。途中、爆心地から14ｋｍの地点では爆発のスイッチが押され、実験を観察した建物が残っていました。地平線と草原と空がどこまでも広がるこの大草原を進むと本当に核に汚染されているのだろうかと疑うほど長閑(のどか)な大地です。ただ、中心地点に近づくにつれ、一定の距離をおいて、観察機器をおいた建物や被爆の影響を見るための建物が残骸として残っており、爆心地に近いものはほとんど倒壊し、次第に不気味な雰囲気を醸し出していました。そして道なき道を少し外れたところに意外にも直径50mほどの大きな穴が空いており、その周囲の地上にはなんとなく不気味な小さな



図4-1　核実験における放射線量の測定



図4-2　核実験によって放射能汚染された石

穴の開いた黒い石が散らばっていました(図4)。ガイガーカウンターを近づけると草原のまっただ中で甲高いピーという不気味な連続音が鳴り響き、今でも40マイクロシーベルト／時間の残留放射線を出し続けているのが実感させられました。この音がなければ放射線が出ていることは解らないほど穏やかな草原の中で、野生動物はもちろんのこと、植物も生息し続けています。本当に一見普通の大草原に見えるこの場所は今でも永続的に生物に障害を与え続ける恐ろしい場所に変わってしまっています。この場所では1949年から52年まで核実験が行われたそうで、セミパラチンスクのポリゴン全体では1949年夏から1962年暮れまでの13年間で地上実験30回、空中実験88回が行われたそうです。だだっ広い草原の真ん中で今後数百年も続く放射能汚染を残す愚かな人類の行いは、そこに健気に咲いている小さなヒナゲシの可憐さと相まって、地球の環境と人間との関係を真剣に考えさせる重い気持ちにさせられました。しかも周辺の住民を巻き込んだ人体実験の様相も感じられる実験場は、米ソ両大国の核開発競争とはいえ、科学者の倫理観と人間のあり方についても強い示唆を与えています。爆心地を500mほど離れると突然放射線量は一般のバックグランドレベル0.04マイクロシーベルトに低下し、その後は荒涼とした草原を後にセミパラチンスクに向かって走りました。途中のチャガン村で長野県から一緒にみえた神谷さだ子さんが二人の老人から直接実験当時の話を聞いていました。二人とも子供の頃、赤黒いキノコ雲を見たそうで、初めての核実験の時には、前もって軍隊が来て核実験のあることを知らせ、家の外に出るように言われたそうです。逆なら理解できるのですが、当時のソビエト連邦は健康被害を隠して人体実験でもしていたような印象を受けました。爆心地から100kmほどの所なので、風向きによっては明らかに被ばくしているものと考えられます。荒涼とした夕暮れの草原を走る車中で、私が今後できることは何があるのか考え続けました。山下教授のように原爆関係の国際的な仕事はできないとしても、何か自分にできることがあるのではないかと考えながら、とっぷり日が暮れたセミパラチンスクに帰り着きました。

このように重い経験のあとのカザフスタン人の心のこもったもてなしは本当にアジア人共通の心に触れた思いがしました。マラット・ウラザリン教授の家は、部屋の中はやや肌寒く、しかもその日は奥さんが出張中で、彼が一人で夕食の料理を用意してくれました。なすび料理、サラミ、チーズ、鶏肉料理、スープとどちらかといえば質素な料理ですが、大変美味しく、彼の心からの歓待をウオッカでの乾杯を繰り返すことで、皆で気持ちよく語らい、暗い夜道も明るい気持ちで帰ることができました。

1週間があっという間に経ち、私にとって初めての中央アジアの経験でしたが、人々の暖かい心に触れると同時に何とも愚かな人類の足跡に触れ、重い気持ちも交錯した旅でした。

このような機会を与えて頂いたNASHIMに感謝し、ご報告と致します。

Report

韓国被爆者支援業務担当者への研修



NASHIMでは韓国に居住している被爆者への医療充実のため、医師等を受け入れ、研修を行っています。

10月初旬に今年度第１回目となる韓国からの医療従事者等の受入研修を実施しました。今回の研修へ参加したのは、韓国で被爆者支援に関する業務を行う事務職４名で、５日間に渡って長崎に滞在し、被爆者医療に携わる医療機関等の訪問や被爆建造物の視察などを行いました。

大韓赤十字社の金基淑（キム キ スク）さんや韓国保健福祉部の趙又美（チョウ ウ ミ）さんは「研修を通じて日本の被爆者の状況や支援実態を把握し、今後の在韓被爆者への支援対策の参考としたい」との目的を持って研修に参加されたので、１日目の長崎県福祉保健部山崎部長表敬訪問や、その後行われた被爆者行政説明では特に熱心に質問し、意見交換をしていました。

研修団はそのほかにも放射線影響研究所や長崎市原爆被爆者健康管理センターなどを訪れ、日本の被爆者に関する調査研究や健康管理の状況について学びました。また、原爆資料館や被爆建造物を見学したり、恵の丘長崎原爆ホーム訪問で入所されている被爆者の被爆当時の体験談をお聞きするなど、原爆の実相や日本の被爆者の気持ちに触れる機会を得、日頃各々が業務で接する韓国の被爆者の背景を理解するための良い経験となったようです。



長崎市原爆被爆者健康管理センター視察



恵の丘長崎原爆ホーム訪問

研修者紹介

- 大韓赤十字社特殊福祉事業所　庶務課長　金基淑（キム キ スク）
  〈職務内容〉　日韓両国から受託した被爆者支援事業の全般
- 大韓赤十字社特殊福祉事業所　職員　柳印宣（ユ インソン）
  〈職務内容〉　在韓被爆者に対する保健医療助成費の支援
- 韓国保健福祉部　疾病政策課　主務官　趙又美（チョウ ウ ミ）
  〈職務内容〉　原爆被爆者支援に関する業務
- 陜川原爆被害者福祉会館　生活指導員　李珉慶（イ ミンギョン）
  〈職務内容〉　入所者の生活指導及び運営業務

10/1	来崎
2	長崎県福祉保健部長表敬訪問 オリエンテーション 原爆被爆者行政説明（長崎県庁）
	長崎原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館見学 永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター訪問
3	放射線影響研究所視察
	長崎市原爆被爆者健康管理センター視察 日本赤十字社長崎原爆病院視察
4	恵の丘長崎原爆ホーム視察
	被爆建造物等（平和記念公園、如己堂、浦上天主堂）見学
5	帰国

Information

永井隆生誕100年記念式典で平和のリサイタル開催



平成20年２月３日(日)に永井隆生誕100年記念式典が長崎市平和会館において開催されます。この式典のメインはソプラノ歌手下垣真希さんによる記念コンサート、ひとり歌語り「わが心の歌・長崎の鐘」の公演です。

下垣さんはケルン国立音楽大学を卒業後、５年半にわたりドイツ国際ラジオ局でDJとして活躍されました。帰国後は「命と平和の尊さ」をテーマに、日本の歌を中心にしたトークコンサートを全国で公演し、2002年には長崎大学の原爆慰霊祭において『長崎の鐘』を献歌しています。また、叔父様が永井博士宅に下宿していたという博士ゆかりの人でもあります。

「わが心の歌・長崎の鐘」は、永井博士の平和への祈りと命の尊さを伝えるために下垣さんが書き下ろした歌と語りの感動作です。この作品は被爆し亡くなった下垣さんの叔父様や、原爆の犠牲者に捧げる鎮魂歌でもあります。

“人類愛に基づく恒久平和実現”の願いを今に伝えるコンサートにぜひご参加ください。

※この式典の詳細については下記にお問い合わせください。
永井隆生誕100年記念事業実行委員会事務局(永井隆記念館内　TEL/FAX 095-844-3496)

出前出張講座
「平成の鳴滝塾～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」を行います

小中学生を対象として、NASHIMが行っているヒバクシャ医療国際協力や放射線被ばく医療等について知っていただくため、長崎大学の先生などが出前出張講座を行います。「チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力」、「放射線、紫外線と健康について」など幅広いメニューの講義を準備しています。また、空気中のホコリやダシ昆布、岩盤浴の石粉末など身の回りの物質から放出される放射線を簡易型放射線測定器で検出するといった実験型の講義も計画しています。講座は今年度から実施しますが、平成２０年4月以降はインターネットでも受講申し込みを始める予定です。

詳細はNASHIM事務局までお問い合わせください。

講座メニュー

身近な放射線の話(自然放射線、放射線発見の歴史と応用)	
チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	チェルノブイリ周辺諸国での国際被ばく者医療協力
	ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎の国際被ばく者医療協力
	テレメディスンによる遠隔医療協力
カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	セミパラチンスクでの国際ヒバクシャ医療協力
	カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎の国際被ばく者医療協力
世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について
	もし、被ばく事故が起こったら
	放射線障害を治療する最新医療　－再生・移植医療について－
長崎原爆の話	永井隆、調来助、秋月辰一郎について
	長崎被爆者の苦悩　PTSDについて
NASHIMの国際被ばく者医療協力	NASHIMのこれまでの活動
	南米・韓国における在外被爆者医療について
世界保健機関WHOからみた長崎の国際被ばく者医療協力	
放射線・紫外線とわたしたちの健康	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第21号
発行／平成19年12月25日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570　長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)
TEL 095(895)2473　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

Vol.22
2008
SPRING





韓国で被爆者医療セミナーを開催

Report …… 韓国医師等への被爆者医療研修
Report …… 韓国専門家派遣2008年～被爆者医療セミナーの開催～
Report …… 出前出張講座の開催
Report …… グローバルCOEシンポジウム報告
Information …… 良順会館の紹介
Information …… 永井隆博士を追悼するパイプオルガンコンサートのお知らせ

Report

韓国医師等への被爆者医療研修

NASHIMでは在韓被爆者への医療充実のため、毎年3回程度医師等の受け入れ研修を行っています。第1回目の研修については前号で紹介しましたが、さらに2回の受入研修を実施しましたので報告します。



被爆者地区検診の見学

第2回目の研修は、12月上旬に、ソウル赤十字病院の医師等3名と大韓赤十字社特殊福祉事業所の事務員1名を招いて実施しました。研修者は6日間にわたって長崎に滞在し、研修を受けました。ソウル赤十字病院では、今年春に在韓被爆者の健康相談事業が長崎県により実施されることとなっています。この事業は、在韓被爆者の健康保持及び増進を図ることを目的に、長崎の医師が韓国へ出向いて被爆者の健康相談を受けるものです。17年度から19年度の3年間（1年に2回）で韓国内を一巡し、在韓被爆者約2,500名のうち、約1,800名が健康診断を受診し、約1,500名が相談を受けました。ソウル赤十字病院での実施は今年で2回目となります。この健康相談等事業の実施に備えて、研修で日本の検診活動を知っていただこうと、長崎市原子爆弾被爆者健康管理センターでの研修に重点を置いた内容としました。研修団は健康管理センターの概要説明を受け、センター内の視察を行った後、午後からは検診車が公民館等に出向いて被爆者の検診を行う地区検診に同行して、被爆者検診の様子を視察しました。被爆者の健康診断が、センターでの検診のほかに、年間100ヶ所以上の地区へ出向いて行われているシステムに大変感心していたようでした。

第3回目の研修は2月の中旬に実施しました。今年度最後となる研修へは、ソウル赤十字病院と慶尚（キョンサン）大学病院から医師2名と陜川（ハプチョン）原爆被害者福祉会館の職員2名が参加しました。この研修では、医師と福祉会館職員のカリキュラムを分けて実施しました。医師2名は、放射線影響研究所や長崎大学医学部・歯学部附属病院でヒバクシャ医療に関する専門的な研修を受けました。



放射線影響研究所での研修



恵の丘原爆ホームでの研修

福祉会館職員へは、恵の丘原爆ホームで1日をかけた実習的な研修を行いました。自分たちの職場である原爆被害者福祉会館との比較ができ、日本の施設に学ぶ点などを韓国へ持ち帰ることができたようです。

研修後の感想

〈第2回目研修者〉　河（ハ）　鐘京（ジョンキョン）（ソウル赤十字病院医師）

今回の研修を通して、原子爆弾の威力及びその惨状について、多く学ぶことができ、これによって、私が韓国の赤十字病院で診療した被爆患者さんの事をもう一度、考えさせられるよい契機になりました。また、被爆者に対する日本政府とNASHIMの努力を感じることができました。

健康管理センター及び原爆病院、そして、長崎大学病院の被爆者に対する努力と情熱などは、私にとっていい勉強になりました。帰国後は、整形外科（河医師の専門）に来られる被爆者の痛みを理解し、共感することができると思います。そして、被爆者からの健康相談により専門的に対応することができると期待しています。

第2回目受入研修者



職　種	所　属	氏　名
医　師	ソウル赤十字病院	河（ハ）　鐘京（ジョンキョン）
看護師	ソウル赤十字病院	金（キム）　仙子（ソンジャ）
事務職員	ソウル赤十字病院	李（イ）　太熙（テヒ）
事務職員	大韓赤十字社特殊福祉事業所	梁（ヤン）　信恵（シンヘ）

〈第3回目研修者〉　李（イ）　閏姫（ユンヒ）（陜川原爆被害者福祉会館看護師）

私は老人養護施設に勤務しているため、多くの研修先の中で、原爆養護ホーム恵の丘が一番印象深く、共感できる点と、学びたい点が多くありました。韓国より、ずっと早い時期から被爆者に関心を持ち、細かいところまで考慮され、環境に気を配った施設であるということが感じられました。

研修中、「以前は、施設入居者の手足になるのが責務だと考えていたが、年月がたつにつれ、入居者が自ら動ける能力を向上させるよう手伝う方向に変わりつつある」と職員の方に話を聞きました。この点では、少しでも入居者の運動機能を維持するよう日本の施設に習い、私の職場でも実行したいと思いました。

第3回目受入研修者



職　種	所　属	氏　名
医　師	ソウル赤十字病院	張（チャン）　恵炅（ヘギョン）
医　師	慶尚大学病院	羅（ナ）　在範（ゼボム）
看護士	陜川原爆被害者福祉会館	李（イ）　閏姫（ユンヒ）
生活指導員	陜川原爆被害者福祉会館	李（イ）　貴子（ギジャ）

Report

韓国専門家派遣2008年
～被爆者医療セミナーの開催～

長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設
准教授　三根　真理子



2月13日、原爆に関するセミナー開催のため、塚崎邦弘先生、長崎県の山口勇次係長と私の3名で釜山に向かいました。目的は馬山（マサン）医療院と光州（カンジュ）健康管理協会にて在韓被爆者健診に携わるスタッフに原爆に関する知識を持ってもらうことです。二日とも職員の業務終了後ということで夕方5時半の開始でした。



看護師を中心としたセミナー参加者

【馬山医療院】

釜山空港から高速バスで1時間のところに馬山があります。

馬山医療院の院長は出張中のため診療部長とお会いしました。外科が専門とのことでした。この先生は夜の会食の場で「鋏（ハサミ）で焼肉を切るのは外科手術の練習に良い」と、鋏さばきを見せてくださいました。馬山医療院スタッフにはセミナー会場設営、プレゼン準備など的確かつ周到な準備をしていただき、事前のチェックも行なえました。原爆アニメ「アンゼラスの鐘」ダイジェスト版上映希望にも快く対応してくださいました。

プレゼンと配布資料は事前に韓国語に翻訳されていました。完璧な準備！と感激する間もなく、塚崎先生と私は少しあせりました。プレゼンの画面をみても読めないのです。通常、画面をみながら説明をしていきますので、なんじゃこりゃ状態でした。とりあえず、手持ちの日本語版配布資料をカンニングペーパーにしての講義でした。参加者は看護師さんや事務関係者70名近くで、皆さん熱心に聴いておられました。前半は私が「長崎原爆と大学」という演題で話をしました。後半は塚崎邦弘先生が「被爆者のがんリスクと検診」という演題で話されました。私が原爆のこと、救護活動、直後の急性症状や後障害を簡単に紹介し、詳細は塚崎先生が説明されるという流れです。前半と後半の話がつながるのは聴講者にとってわかりやすいだろうと想像します。塚崎先生と打合せをしたわけでもなく偶然の組み合わせが最高だったと満足感にひたりました。



馬山医療院スタッフ

【馬山から光州へ】

2月14日、馬山からワゴン車で4時間ほど高速を走り、光州に向かいました。車中からは高層マンション、お墓など韓国特有の景色が眺められました。土地が少ないので高層マンションに住む習慣があるそうです。またマンションは高価ですが引っ越しの際にはすぐあとに入る人がいるという利便性もあるそうです。ときどき目にする民家の屋根は日本のものよりそりかえっています。韓国の美だそうです。立派なお墓の前に饅頭のような山がいくつもあります。これは土葬されているものだそうです。



韓国健康管理協会スタッフと記念撮影

【光州健康管理協会】

光州健康管理協会は正式には韓国健康管理協会の光州·全南支部というそうです。韓国には支部が15箇所あるそうです。韓国健康管理協会本部から来られた課長さんの話では、支部の中でも光州は健診管理のレベルが高いとのことでした。光州健康管理協会では事務局長さんとお会いして、まず塚崎先生が前回訪問の相談事業についてお礼を述べられました。尹政雄(ユン ジョンウン)院長(長崎で言えば検診センター長)は産婦人科が専門とのことでした。68歳には見えない若々しさでした。「長崎の歌」という原爆に関する著書を読み感銘を受けた、三根が登場するのだが関係あるのかという質問から始まりました。これがきっかけで韓国語の著書を長崎にもどり探すことになりました。帰国後、永井隆記念館を訪れました。韓国のカトリック教会大主教である李文熙(イ ムン ヒ)という方が「永井隆の生涯」を「愛の歌、平和の歌」というタイトルで韓国語の著書にされていたことが分かりました(2000年発行)。セミナーは院長をはじめ職員60名近い参加がありました。ここでは、大腸がんのリスクは一般人と違うのか、遺伝に関する研究結果、精神的なことについての現状、認知症に関する研究結果、自殺者に関する研究結果はあるかなど活発な質問がでました。



セミナー風景



調教授が勤務した病院(現在看護大学)

【偶然のできごと】

通訳の金鎭姬(キム ジン ヒ)さんの事前調査により調来助先生が1937年、全羅南道立光州医院の院長をされていたことが判明、セミナー前の空き時間を利用して訪問しました。今では全南大学病院になっていました。昔の建物が残っていないかを広報室の方に確認し、一つだけ残っていることがわかりました。現在は看護大学として利用しているとのことでした。2010年に100周年を迎えるとのことで、資料を収集している最中で、何か情報があれば教えて欲しいとのことでした。帰国して早速、調来助先生のご令嬢である朝子様に報告いたしました。

今回の訪問で知識の共有に言語が重要であることを再認識しました。ナシム紹介の韓国語版パンフレットは作成されておりますが、原爆影響パンフレットの韓国語版はありません。今後の検討課題と思います。

最後に馬山医療院、光州健康管理協会並びに長崎県スタッフの周到な準備に感謝いたします。また大韓赤十字社の呉尚恩(オ サン ウン)さんの心行き届く日本人向け対応に感謝すると共に、通訳の金鎭姬さんの熱心な通訳と配慮に感謝いたします。

Report

出前出張講座の開催



NASHIMでは、小中学生を対象として、ヒバクシャ医療国際協力や放射線被ばく医療等について知っていただくため、昨年4月からヒバクシャ医療に関する出前出張講座の計画を練ってきましたが、記念すべき第1回目の講座を3月の初めに長崎市の高尾小学校で開催しました。

授業は「身近な放射線の話」というテーマで、長崎大学先導生命科学研究支援センターの松田教授が行い、卒業を間近に控えた6年生94名が、普段聞くことのできない授業を興味深く真剣に聴いていました。

松田教授は、「放射線とは音や携帯電話の電波と同じように空気中を伝わるエネルギーで、見えない、聞こえない、臭わない、感じないもの」と説明し、放射線測定器を松田教授自身の体や準備してきただし昆布、岩盤浴の石、塩化カリウム粉末などにあて、どこにでも存在することを実証しました。放射線を感知するとピーという音をたてながらメータの動く測定器は、生徒の皆さんにとって大変めずらしかったことでしょう。



岩盤浴の石を放射線測定器で測定

授業の後半は松田教授から「日本には放射能をもった温泉がある？」などの放射線に関するクイズが7問出され、7名の生徒さんが見事全問正解しました。授業後の質疑応答では、「放射線でダイヤモンドに色を付けることができるというのは本当ですか」などの質問がありました。

NASHIMでは、今後もこの出前講座を継続して開催する予定です。たくさんの小中学生に講座を受講していただき、NASHIMの活動を知っていただくとともに、ヒバクシャ医療や国際協力に興味を持っていただきたいと思います。

授業後の感想

- ○ 放射線がこんなに身近にあるとは思いませんでした。家に帰って放射線やNASHIMのことを話すとみんな興味を持って聞いてくれ、もっと知りたいと思いました。
- ○ 私は放射線を少しでも受けたりすると脱毛すると勘違いをしていました。ちゃんと知識を持つことが大切だなあと思いました。
- ○ 私たちも今放射線をあびているという話に驚きました。害のある放射線についてしか知らなかったので、放射線を見つける機械を昆布に向ける実験をした結果には驚きました。
- ○ 放射線は色々なことに使われていて便利だと思ったけれど、使い方をまちがえると大変なことになると思いました。この授業を受けて、放射線についてもっと知りたいと思いました。

グローバルCOE シンポジウム報告



シンポジウム開会式後の記念撮影

1月31日から長崎大学において、グローバルCOEシンポジウム「新学際領域『被ばく医療学』の教育・研究拠点形成に向けて」が行われました。

グローバルCOE(Center of Excellence)プログラムとは、「日本の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりの推進を目的とする文部科学省研究拠点形成等補助金事業」です。長崎大学では「放射線健康リスク制御国際戦略拠点」が平成19年度から5年間の予定で採択されました。このプログラムは、これまで長崎大学が構築したチェルノブイリやセミパラチンスクといった旧ソ連邦のフィールドを中心とした拠点や、欧米を中心とした放射線生命科学拠点を活用して、国内外における本分野の人材育成を目的とするものです。さらに本プラグラムでは、世界保健機関(WHO)をはじめとする放射線と健康に関連する国際機関と連携し、将来的には国際機関において放射線健康リスク制御のための各種ガイドラインやスタンダードを、策定、発信できる人材を育成することで、「被ばく医療学」の分野における人材の育成を図っています。

今回のシンポジウムは、グローバルCOEプログラムの開始にあたり、旧ソ連邦や欧米、それにアジア各国からの研究者20名を含む放射線疫学、被ばく者医療、及び放射線生物学の国内外の著名な専門家42名が招聘され、基調講演や研究発表が行われました。今後今回の成果をもとにして、グローバルCOEプログラムを通じた「被ばく医療学」の専門家、特に若い人材の育成が行われる予定です。







シンポジウムの様子

Information

良順会館の紹介

長崎大学医学部では、創立150周年記念事業の一環として、「良順会館」を建設しました。良順会館は、オランダ人海軍軍医ポンペ・ファン・メールデルフォールトとともに同学部の創立に関わった人物のひとりである松本良順にちなんで名付けられたもので、215席を備えた会議室「ボードインホール」、多目的に利用できる会議室「専斎ホール」のほか、日本の近代西洋医学発祥の歴史と医学部150年の歩みを紹介する展示室「150周年ミュージアム」などを備えた、生涯学習国際センターとしての役割を果たすものです。また、「ボードインホール」には同時通訳室も完備しており、多様な国際会議に対応できるようになっています。



1月31日から行われたグローバルCOEシンポジウム「新学際領域『被ばく医療学』の教育・研究拠点形成に向けて」をこけら落としとして、種々の国際会議やシンポジウム、また市民公開セミナーが行われています。一般の方、また「150周年ミュージアム」の見学だけでも可能ですので、ぜひお気軽にお越しください。

永井隆博士を追悼する パイプオルガンコンサートのお知らせ



昨年の２月３日から永井隆生誕１００年記念事業実行委員会などにより、博士生誕１００年を記念した様々な行事が行われているところですが、博士の命日となる５月１日に、博士を追悼する催しが長崎市のカトリック浦上教会で行われます。

当日は世界的オルガニストとして全米をはじめ欧州、ロシア、チェコ、韓国などで活発な演奏活動をなさっているグレゴリー・ダゴスティーノさんが来日し、パイプオルガンコンサートを開催します。このコンサートは、グレゴリーさんの演奏に心を惹かれた博士の娘茅乃さんのご希望で計画されたものです。また、演奏の前には、九州のキリシタン研究の第一人者で、「永井隆の生涯」をはじめ多くの著書を残された片岡弥吉さんの娘片岡留美子さん（長崎純心大学教授）が、永井博士や茅乃さんとの思い出などを特別記念講演としてお話しされます。

永井隆博士生誕１００年の記念行事を締めくくるコンサートに、ぜひご参加ください。

※このコンサートの詳細については下記にお問い合わせください。
長崎如己の会（永井隆記念館内 TEL/FAX 095-844-3496）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第22号
発行／平成20年3月25日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail info@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.23
2008

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■NASHIM会長に蒔本長崎県医師会長が就任
■西城山小学校で出前講座を開催
■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修
■ベラルーシ共和国から医科大学生を招聘
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■セミパラチンスク市長がNASHIMへ感謝状を贈呈



被爆者健康講話へ参加するベラルーシ共和国の医科大学生ら

NASHIM会長に
蒔本長崎県医師会長が就任(4月)

NASHIM発足の5年目(1996年)から12年間もの長きにわたってNASHIM会長を務めていただいた井石哲哉前長崎県医師会長が3月にご退任され、後任として蒔本恭(まきもとやすし)長崎県医師会長が新しく就任し、4月から事業推進のためご尽力いただいております。

蒔本会長は、長崎市の田上病院の院長を務めておられ、午前中は病院の外来、午後は医師会の用務などでお忙しい中、海外からの受入研修実施の際などは研修生等との交流会へ積極的に参加していただいています。

機関誌発刊にあたりご挨拶をいただきました。



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 会長に就任して

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長への就任にあたりまして、皆様に一言ご挨拶申し上げます。

当協力会は、私の会長就任まで15年間にわたって、世界の放射線被ばく事故による被災者救済のため、多くの活動を展開しております。活動の中心である受入研修事業においては、受け入れた研修者数が昨年度までに394名に上り、また、現地へ派遣した専門家等も93名になります。さらに、被爆50周年目に始められた永井隆平和記念・長崎賞では8名1団体を表彰し、出版物も医学教科書をはじめとして数多く、講演会や機関誌などを通じて情報発信を行うなど、活動の活発さが伺われます。来日された各国からの研修医師と接してみましても、現地の長崎に対する信頼感と密接な友好関係が感じられ、当協力会の国際的な貢献を実感するものであります。

このような多岐にわたる活動と実績は、「被爆地長崎で蓄積された医療の実績を世界で苦しむヒバクシャへ」との願いがこもった皆様の税金により支えられ、NASHIMを構成する各団体の献身的なご協力により成し遂げられてきたものと思います。

前任の井石哲哉先生は、カザフスタン、ウクライナ、ベラルーシ、韓国等の現地を訪問してその状況を確かめ、被災者のためにと懸命にNASHIMの活動を支えてこられました。私も被爆者のひとりとして、原爆被爆の悲劇を乗り越えて蓄積された医療の実績が、世界中で苦しんでいる人々の救済に役立てば、この上ない喜びです。

12年もの間、NASHIM会長を務め上げられた井石先生のご意志を引き継いで、皆様方と一緒に今後の活動を支えて参る所存でありますので、どうぞよろしくお願い致します。

今後ともNASHIMの活動に広く皆様のご支持、ご理解をいただきますよう、また、本事業内容の益々の充実と発展を切望しまして、ご挨拶とさせていただきます。

普及啓発事業

西城山小学校で出前講座を開催（7月）

夏休みを直前に控えた7月13日、長崎市立西城山小学校で5年生74名の皆さんを受講者として出前講座を開催しました。

ＮＡＳＨＩＭでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、平成の鳴滝塾　～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～と題して、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前講座を昨年度から実施しています。

今回は「原爆直後の救護活動と調査」というテーマで、長崎大学原爆後障害医療研究施設の三根真理子准教授にお話しをしていただきました。

講座はグビロが丘など長崎大学医学部内にある被爆遺構の紹介から始まり、原爆直後の悲惨な被害状況の中での調来助教授、永井隆博士、秋月辰一郎医師等による救護活動や、その後の日本とアメリカによる調査について等がスライドを使ってわかりやすく説明されました。途中には、「長崎に落とされた原子爆弾の通称は？」などのクイズが所々に織り交ぜられ、生徒の皆さんと三根准教授とのやり取りが非常に活発な授業となりました。また、最後にはアニメ「アンゼラスの鐘」のダイジェスト版が上映されましたが、アニメーションによりリアルに描かれている焼け野原となった被爆後の惨状の中での秋月医師らによる懸命な救護活動の様子は、生徒の皆さんに強く訴えかけるものがあったようです。



明るい語り口で授業を行う三根准教授

西城山小学校では1学期中の総合学習の中で原爆について調べ、原爆記念日の8月9日に発表することになっていたそうですが、今回の講義では、生徒さん方がそれまでに調べて来たこととまた違った角度での知識が得られたと思います。

この講座を通して若い世代の皆さんに長崎特有のヒバクシャ医療や国際協力に関心を持っていただき、将来、世界のヒバクシャ医療へ貢献できるような人材が一人でも育ってくれることを期待します。

講座を受講して…（生徒の感想）

○被爆直後の救護活動と調査をしたのは永井隆博士だけと思っていました。でも、今日の授業で調来助教授や秋月辰一郎先生もいることを知りました。

○今まで勉強したこと以外にも色々なことが知れて良かったです。ＮＡＳＨＩＭの活動のことも初めて知りました。

○自分も怪我をしたり、家族を亡くすなど原爆の被害にあっているのに、永井博士、調教授、秋月医師は救護活動をしてすごいと思いました。この授業でまた平和の大切さを知りました。今日の授業は忘れません。



授業を真剣に聞く子どもたち



生徒の代表から三根准教授へお礼の言葉

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修(7～8月)



蒔本会長を表敬訪問する研修医師と受入研修担当の長崎大学山下教授

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して指導や医療情報提供を行うため、今年度も6名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月末から1ヶ月余りに渡って長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学んだり、ヒバクシャ医療分野での共同研究のため、関係者との交流を深めました。

また、長崎原爆資料館を見学したり平和祈念式典へ参列するなど、長崎原爆の実相についても学び、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護やケアについても理解を深めました。



ロシア連邦　サンクトペテルスブルグ卒後教育医学アカデミー

Kovanko（コワンコ） Georgy（ゲオルギ） 医師　専門：老年医学

原爆被爆者の治療施設や制度について知る機会を提供してくださったNASHIMの皆様に深くお礼申し上げます。特に、山下教授が与えてくださった研究の機会と温かいもてなしに感謝しています。

私の研究テーマは細胞工学であるため、原爆後障害施設で行われている新しい研究方法について学ぶことは大変重要でした。長崎大学の先生方により行われた講義はとても興味深く、今後役立つものと感じています。研究室での私の研修と実験に多大なお力添えをいただいたサエンコ助教、タチアナ助教に感謝申し上げます。また、日本の皆様とのコミュニケーションのために尽力いただいた通訳の木村さんにも心から感謝しています。

この研修は実り多く、甲状腺癌研究の発展と甲状腺癌患者にとって、有益なものになることと思います。



ウクライナ共和国　ウクライナ医学アカデミーマルゼエフ衛生環境医学研究所

Tsymbalyuk（ツィムバルク） Olexandr（オレクサンドル） 医師（上級研究員）　専門：放射線疫学

まず第一に、私たちに対する研修指導者の皆様と日本の皆様の暖かさ、親切さに感謝申し上げます。私たちは、日本の健康保護のシステムの構造について詳しく説明していただき、被爆者の治療を行う多くの長崎の施設を訪問しました。各施設で行われている正確で深い調査活動と素晴らしい資料や技術的なベース、それに個人の高いプロ意識に感銘を受けました。財団法人放射線影響研究所で得た知識は放射線衛生学と放射線疫学の専門家として、とても有益なものでした。同研究所の専門家によって、原爆被爆による有害要因の被爆者に対する影響についての情報を提供していただき、また、有用な資料の収集と総括のために多大なお力添えをいただきました。

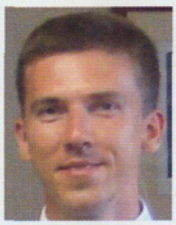
放射線影響の研究分野における実りの多い協力関係が、私たちの国の間で今後も継続することを望んでいます。



ベラルーシ共和国　ベラルーシ卒後医学教育アカデミー

Leonova（レオノワ） Tatsiana（タチアナ） 医師（上級研究員）　専門：小児科、内分泌

私は主に原研細胞で研修を受け、そこで新しい研究方法について学びました。小児内分泌について学ぶ機会や患者のカウンセリングに立ち会う機会をコーディネートしてくださった大津留准教授と本村先生に心からお礼を申し上げます。文化的なプログラムも多様で、週末には伊王島の海で海水浴を楽しみ、グラバー園、出島のオランダ商館、大浦天主堂、諏訪神社などを訪問して、日本人の歴史と伝統を知る機会も得ることができました。私たちの訪問を手配してくださった皆様や異なる放射線事故の影響で苦しむ者へ関心を示してくれた皆様、放射線の影響への対処を教示くださり、この科学分野への貢献を続けている蒔本会長と山下教授へ深く感謝申し上げます。



ベラルーシ共和国　ゴメリ医科大学

Skuratau（サクラタウ） Aliaksandr（アレクサンドル） 医師（助教）　専門：外科

長崎市は深い歴史と文化を持ったとてもきれいな街で、戦争のみが人々に暗い影を落としており、原爆資料館訪問や、被爆者と話す機会によって、1945年に起こった悲劇で日本人が感じた苦痛を理解することができました。

私は特に外科医として癌の初期に行う医療と診断の新方法に興味がありましたが、日本の研究者は私が興味を持ったこと全てを熱心に教えてくださったので、癌の早期診断のための新しい内視鏡方法を学んだり、早期胃癌と早期結腸癌で解剖の内視鏡粘膜下手術や、腹腔鏡補助下大腸切除術、摘出、肝臓移植、甲状腺摘出、乳腺切除術など多くの興味深い手術に立ち会うことができました。NASHIMの研修期間中に学んだことは、ベラルーシでの患者への医療に必ず役立つことと思います。



カザフスタン共和国　セミパラチンスクがんセンター

Bolsynbekova（ボルシィンベコワ） Saltanat（サルタナト） 医師（主任）　専門：病理学

この訪問は私にとって、多くの印象と専門的な技術をもたらしました。被爆者の養護施設の訪問では、原子爆弾が投下された悲惨な日を生き延びた人と会うことができ、忘れられない経験となりました。また、8月9日に平和公園で行われた63回目の平和記念式典に出席できたことは私にとって名誉なことでした。全世界を揺るがした日本人の悲劇は絶対に忘れられません。長崎にいる一ヶ月の間、新免疫組織化学の新しい手法の習得を手伝ってくださる研究員を紹介していただき、高度な専門チームの中で研究する機会を提供していただきました。NASHIMの皆様に私の心からの感謝の気持ちを伝えたいと思っています。特に、山下教授、関根教授、メイルマノフ・セリック助教の援助ともてなしに感謝しています。



カザフスタン共和国　セミパラチンスク医科大学

Semenova（セメノバ） Yuliya（ユリヤ） 医師（講師）　専門：眼科

今年の8月にNASHIMのプログラムに参加できたことを大変光栄に思っています。研修では長崎大学病院の眼科における活動を視察し、参加する機会を与えていただきました。眼科のスタッフは北岡教授の指導の下、高水準のアイケアを行い、また現代の眼科へのニーズに沿うことを目指した研究を行っていました。私は幸いにも、洗練された硝子体網膜手術に立ち会い、白内障水晶体超音波乳化吸引術の技術を習得できました。

長崎で私たちを温かく歓迎し、知識と経験を分けてくださったNASHIMのご尽力に大変感謝しています。このプロジェクトへ参加したことによって得た経験は、私たちの自国のヒバクシャ医療の改善に効果があるものと感じています。

受入研修事業

ベラルーシ共和国から医科大学生を招聘(8月)



受入研修担当の長崎大学高村教授と齋藤長崎大学長を表敬訪問

2年ぶりに医科大学生へヒバクシャ医療研修を実施

チェルノブイリ原発事故の影響によって甲状腺がんを発症し治療(手術)を受けた経験を持つベラルーシ共和国の医科大学生を長崎に招聘して、8月1日から約10日間のヒバクシャ医療研修を実施しました。NASHIMでは2006年にチェルノブイリ事故20周年記念事業の一環として同様の境遇を持つ医科大学生4名に対して受入研修を実施していますが、彼らのように被ばくによる健康障害を持ちながら医師を目指して頑張っている若者に、今後のヒバクシャ医療を担っていただきたいという期待を持って、今年度も研修を実施することが決まりました。



平和式典へ参列
(左からクラウチャンカさん、ムンデェラワさん、ベラルサウさん、ミフナベツさん)

来崎した3名は長崎大学の原爆後障害医療研究施設や医学部・歯学部付属病院で専門知識を習得したり、日赤長崎原爆病院や恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を行い、また、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館が行う被爆者健康講話へも参加して受講者へ自らの経験を語るとともに、被爆者と意見交換を行いました。8月8日には長野で研修を受けていたゴメリ医科大学のドミトリ・クラウチャンカさんも合流し、翌日の平和祈念式典へ参列して長崎原爆の被災者にご冥福をお祈りしました。真夏の暑い盛りでしたが異国の地でヒバクシャ医療や原爆被爆の実相について学ぶ機会を得、普段できない多くの経験をして強い印象とともに帰国したことと思います。

皆様方の国での第一印象としては、人々の温かい心とホスピタリティーの素晴らしさでした。日本については多くの素晴らしさを聞いていましたが、自身でこれについて確信しました。私にとって、非常に価値があったのは、長崎大学でのトレーニングにより得られた知識です。日本における保健システムを深く知ることができ、また、医学の発展条件を自身の目で見て感じることができました。私の観点では、これは医学技術だけではなく、医師と学者の個人的な質や全ての医学関係者の意識に組み込まれた最新技術が必要であると思います。セミナーへの参加や講義の受講、手術、外来に立ち会うことができたおかげで、私は多くのことにおいて新天地を開拓でき、大変意義ある研修となりました。この研修により始まった私たちの協力関係が今後も発展することを希望します。最後にNASHIM、長崎大学、長崎原爆病院に対して我々自身の知識向上の機会を与えてくれたことに感謝いたします。

ベラルーシ医科大学3年　ドミトリー・ミフナベツ

日本訪問では、博識で、面白く、高い文化的な多くの人々と出会うことができ、おとぎの国のような印象を受けました。日本の方々は、世界に広く届くような美しい言葉を話し、街には過去の事実を示すかけらを集めた博物館、記念碑が多く建設してあるように思いました。また、出会った皆さんに接する中で、日本人は非常に勤勉な国民であるという印象を持ちました。何事にも注意深く、詳細に事実を残すところが、医学に通じると思いました。

ベラルーシ医科大学5年　ドミトリー・ベラルサウ

長崎大学病院や日赤原爆病院訪問では、日本の高く効率的な医療レベルを学ぶことができ、大変興味深く、役立ちました。特に、長崎大学病院では初めて甲状腺摘出の手術に立ち会いましたが、私も以前受けた手術なのだなと非常に興味深かったです。

最も印象を得たのは原爆ホームであり、原爆被爆者に対する親切で配慮の行き届いた接し方や、養護施設の高レベルな生活環境を見学することができました。

被爆者健康講話へは様々な人が来場し、マスメディア関係者もおられ、翌日の新聞で私たちの写真が載っていたのを見たときは、驚くと同時に嬉しく思いました。また原爆後障害医療研究施設の訪問も興味深くためになるものでした。

長崎訪問は全てがとても良かったです。日本はすばらしい国であり、来日した時点から多くのことに驚かされました。

ゴメリ医科大学4年　カチャリーナ・ムンデェラワ

被爆者健康講話へ参加

今年度、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館では被爆者を対象とした被爆者健康講話を開講していますが、講座の第3回目はNASHIMとの合同事業として、長崎大学医学部の高村昇教授をコーディネーターに、ベラルーシ共和国から招聘した3名を加えたシンポジウム形式の講話「チェルノブイリ原発事故から22年・世界のヒバクシャ」が実施されました。

講話は甲状腺のエコー検査の実演などを交えて、高村教授がチェルノブイリ事故後の放射能汚染状況や事故による身体への影響などについて説明することから始まり、その後、ベラルーシの学生3名が、被ばくにより甲状腺がんを患った過去の経験や医師を目指して勉学に励んでいる現在の状況を語りました。

彼らは、「治療は、肉体的にも精神的にもつらく、思い出したくない」と振り返りながらも、「自分が助けられたように、将来は人々の健康のために尽くしたい」と話し、今回、日本でヒバクシャ医療研修の機会が与えられたことに感謝していると述べました。



会場からの質問を受ける医科大学生

また、受講者との意見交換を行い、「被爆後の思いや社会の対応はどのようだったか」、「若い世代は被爆者の話をどのように受け止めているのか」などと来場された被爆者や長崎大学の医学部生に対して質問し、原爆被爆という背景の異なる放射線被害の状況についても理解を深めました。

受講後のアンケートには、「子どもの頃につらい治療を受けたにもかかわらず、他人のために尽くそうという心構えに感動した」、「小児甲状腺がんを発病し、手術等の治療を受けた後も一生苦しまなければならないという話を聞き、放射線の恐ろしさ、原発事故の恐ろしさを感じた」といった感想や「(原爆被爆者と原発事故の被曝者について)継続して交流と対談をしてほしい」といった意見がありました。





高村教授によりチェルノブイリ事故による健康影響がわかりやすく説明されました。

Information

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附(8月)

今年も核兵器禁止平和建設国民会議(核禁会議)に寄せられた浄財を活動助成金としてNASHIMに寄附していただきました。核禁会議は１９６１年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のための積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施し、多くの医療施設等へ検診者、車椅子、ベッド、医療機器等を贈呈しています。NASHIMへも毎年活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は医学教科書の出版等に役立っています。

贈呈式は８月７日に長崎原爆資料館ホールで執り行われ、NASHIMからは藤田事務局長が出席して、長崎県被爆者手帳友愛会等の９団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。NASHIMとしましては世界のヒバクシャ支援のため、この活動助成金を有効に活用したいと考えております。



事務局を訪れた川村核兵器禁止・平和建設長崎県民会議議長



感謝状を受け取った兼松教授

セミパラチンスク市長がNASHIMへ感謝状を贈呈(9月)

今年の９月５日から13日にかけて、運営部会長である長崎大学兼松教授と事務局員が派遣事業としてカザフスタン共和国を訪問しましたが、現地滞在中に、セミパラチンスク市長からこれまでのNASHIMのヒバクシャ医療協力に対する感謝状が贈呈されました。

NASHIMでは、旧ソ連時代の核実験によって被爆に関する問題を抱えるカザフスタン共和国から1996年に医師等の受入研修を開始しています。研修者数は合計19名に上り、また、受入研修開始の翌年から始めたカザフスタン現地への専門家派遣も今年で17名の実績となりました。そのほか、第2回永井隆記念・長崎賞を1997年にソ連時代のセミパラチンスク核実験による住民への放射線障害を調査したサイム・バルムハノフ博士に授与するなど、12年間にわたってヒバクシャ医療協力を行っており、長崎大学を中心とした密接な関係を築いています。

今回の感謝状の授与は、このようなNASHIMの協力活動を評価していただいたものですので、今後もより一層、現地のヒバクシャへの支援が充実するよう活動を継続させていきたいと思います。



感　謝　状

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)　様

核実験場の影響に苦しむセミパラチンスク市民のリハビリテーションプログラムに多大な尽力をいただき、心から感謝申し上げます。
セミパラチンスク市民に代わり、貴殿のますますのご多幸とご活躍をお祈り申し上げます。

市長　M.アイナベコフ

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第23号
発行／平成20年10月27日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570　長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail n_admin@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.24
2008

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■カザフスタン訪問記～百聞は一見にしかず～
■NASHIMの専門家派遣事業（韓国）に参加して
■在外被爆者健康相談等事業とは？
■韓国医師等へ受入研修を実施



▲ カザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場跡

カザフスタン共和国の北東部に位置するセミパラチンスク市郊外には、旧ソ連時代に核実験場が存在しました。ここでは1949年から1989年までの40年間にわたって、空中、地上、地下を含めた450回以上の核実験が行われ、約170万人の住民が住む周辺30万4000平方キロメートルの土地に放射性降下物の拡散と影響があったといわれています。

専門家派遣事業
（9月）

NASHIMでは、これまでに受け入れた研修者のフォローアップや関係機関との調整・意見交換のため、チェルノブイリ関連国及びカザフスタン、韓国などへ専門家を派遣しています。9月にはカザフスタン共和国と韓国への派遣を実施しましたので、今号は、現地へ行っていただいた兼松教授、関根教授の報告を中心に掲載します。

カザフスタン訪問記

“百聞は一見にしかず”



長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科
移植・消化器外科
教授　兼松　隆之

■ カザフスタン共和国とNASHIM

NASHIMからの派遣で2008年9月5日(金)から9月13日(土)にカザフスタン共和国を訪問しました。今回は長崎大学原研施設長の山下俊一教授、同原研Serik Meirmanov先生、Ainur Akilzhonova先生、林田直美先生、長崎大学医学部・歯学部附属病院の林徳真吉先生、熊谷敦史先生、国立病院長崎医療センター外科の前田茂人先生、長崎県原爆被爆者援護課の福田恵子さんと私の総計9人での訪問でした。

NASHIMは1996年8月から旧ソ連時代の核実験によって被爆に関する問題を抱えているカザフスタン共和国のセミパラチンスク医科大学の研修生の受け入れ事業を開始しました。これまでNASHIMからカザフスタンへの専門家派遣は15名、受け入れ研修生は19名にのぼっています。

■ AlmatyからSemeyへ

9月5日(金)早朝、長崎を高速バスで一路福岡空港へ。そこから韓国仁川空港を経由して、夜半カザフスタンのAlmaty空港に到着しました。日本との時差は3時間です。翌6日(土)にAlmatyを出発し、空路Semeyに向かいました。この飛行機は小型の古い型で、まるで乗り合いバスといった感じです。チェックインカウンターで預けた荷物は飛行機の搭乗階段の下に置かれていて、各自が機内に持ち込む形式になっていました(写真1)。飛行時間は約2時間。窓側席は飛行機が高度を上げた時には、外気温が伝わり壁が凍りつくように冷たくなります。落ちないことだけを祈りつつの2時間でしたが、どうにか無事にSemey空港に降り立ちました。



写真1：機内の様子

■ 旧ソ連時代の核実験場(ポリゴン)見学

7日(日)は49～62年にかけて核実験が繰り返し行われたクルチャトフを見学しました。穴だらけのひどい道を、ライトバンはバウンドしながら進み、約3時間でクルチャトフに到着しました。そこは核実験のために作られた秘密都市で、そこでは核実験に関する博物館を見学しました(写真2)。



写真2：博物館での見学

それから再び車で約1時間かけてポリゴンの中心地へ。小高い丘に差し掛かり、突然、目の前に大きな湖が広がりました。幅400メートル、深さ200メートルの湖は核実験のためにできた大きな穴です（写真3）。乾燥しきった平原の中の湖の輝きは美しく、事情を知らない兵士たちがこの地を訪れ、しばしこの湖で泳ぎを楽しんだこともあったそうです。それにしてもこの地ではいまだに放射線が放出しており、ガイガーカウンターの針は大きく振り切れていました。核実験当時、この地域には遊牧民が住んでおり、甚大な被害を人体に与えた歴史がここにあります。



写真3：核実験によってできた湖

■ Semey医科大学での講義と長崎賞の授与

8日（月）Semey医科大学で私が「長崎の医学の歴史とNASHIM活動」、山下教授がGrobal COEの業績についてそれぞれ講演しました。それからSemey医科大学の2名の優秀な学生に「長崎賞」を授与しました（写真4）。

午後からはセミパラチンスクがんセンターと診断センターを訪問し、スタッフと意見の交換を行いました。その夜は、Semey医科大学主催の夕食会に全員招かれました。



写真4：長崎賞受賞の学生さん

■ がんセンターでの臨床現場の経験とセミパラチンスク市長からの感謝状

9日（火）前田先生が甲状腺腫瘍の摘出手術を担当し、私も一緒に手術に参加しました。前田先生はもうこの10年来、カザフスタンを訪問して医療活動をおこない、前田ファンも多く、たくさんの医療相談も受けていました。

同日の夜、NASHIM主催の夕食会が開かれました。Semey医科大学、がんセンター、診断センターのスタッフ、元NASHIM研修生などが参加し、楽しいひと時を過ごさせてもらいました。同席でセミパラチンスク市長からのNASHIMに対する感謝状を贈呈されました(写真5)。



写真5:NASHIM主催の夕食会

■ 再びAlmatyへ

10日(水)"あの"飛行機に乗り、Almatyへ戻りました。同日の午後、山下教授はカザフスタン医科大学で放射線と甲状腺癌に関する講演を行い、私は別に国立外科センターに行き「肝切除」の講演を行いました。

11日(木)日本大使館に表敬訪問した後、日本人墓地に参拝しました。第二次世界大戦後、ロシアに抑留された日本人兵士が再び祖国へ帰ることなく、その地で落命されたことの無念はいかばかりであったろうと考えると、胸が詰まりました。

その後、山下教授は原研病理に長年留学経験のあるGabit先生が勤務する私立医科大学とAl-Farabi Kaz国立大学で講演し、聴衆に多大の感銘を与えました。

■ カザフスタンからの帰国

12日(金)市内を展望できる山の上の公園コクトベでピクニックを楽しみました(写真6)。その日の夜にAlmaty空港を出発。韓国、福岡を経て、13日(土)に長崎に戻りました。

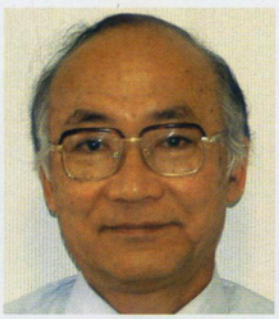
■ 結びに

この度、カザフスタン訪問の機会を与えていただき、NASHIMの関係の皆様に心からの御礼を申し上げます。この国を訪問して、「百聞は一見にしかず」という諺を実感しました。異文化の中、日本語はもちろんのこと、英語も通じない国で、今日まで活動と支援を続けてこられた山下教授並びにそのご一門の方々のこれまでのご苦労の大きさが、真にしのばれました。ほんとうに頭が下がる思いです。今後、さらにNASHIMの支援がこの国におけるヒバクシャ医療の推進に貢献できることを痛感した次第です。



写真6:コクトベから見たAlmaty市

専門家派遣事業
（9月）



NASHIMの専門家派遣事業（韓国）に参加して

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設
原研病理 教授　関根　一郎

2008年度NASHIM専門家派遣事業（韓国）に、9月22日～25日私と医学部保健学科の中尾優子准教授が参加した。われわれ二人の目的はソウルにある大韓赤十字看護大学での講演であった。



大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪問

今回は10回目となる在韓被爆者健康相談事業について韓国側と相談するため訪韓する大学附属病院・国際ヒバクシャ医療センターの副センター長、大津留　晶准教授らと同行しての訪韓であった。一行は関根、中尾、大津留、ほか附属病院精神神経科木下裕久先生、越本莉香さん、県の原爆被爆者援護課保健医療班の山口勇次氏の6名であった。

ソウルのホテル到着後、直ちに徒歩15分の大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪問した。まず、申 東寅（シン ドンイン）所長、金 東洙（キム ドンス）庶務課長らに訪韓の挨拶をした。所長・課長とも人事異動で着任早々であったが、長崎と韓国の相互事業に深い関心を示してくれた。関根、中尾はそこで退席し、大津留先生らは韓国側と在韓被爆者健康相談事業の業務協議に入った。赤十字社福祉事業所には担当職員の呉 尚恩（オ サンウン）さん、柳 印宣（ユ インソン）さん、梁 信恵（ヤン シンヒエ）さんと相談員の徐 敏姫（ソ ミンヒ）さんの4名の若い女性がおり、いずれも通訳として通用するほど日本語が堪能で、今回の訪韓でも何かと私たちをサポートしてくれたが、日頃の彼女らの協力のお陰で、NASHIMの韓国での事業や在韓被爆者健康相談事業がスムーズに行われていることがよく理解できた。

24日は朝から大韓赤十字社特殊福祉事業所を訪れ、通訳と2時間にわたって講演の内容の確認を行い、午後ソウル市鐘路（ジョンロ）区にある大韓民国赤十字看護大学を訪問した。

まず大学長である金 慕妊（キム モイム）先生にお会いした。金慕妊先生は大韓民国における看護教育・実践の 第一人者的存在であり、国際看護協会(ICN)会長や、大韓民国延世大学大学学長、大韓民国赤十字社副総裁などを歴任されたと聞いていた。学長室には蘭の鉢植えがところ狭しと置かれ、先生の花を愛する人柄が偲ばれ、花の写真を趣味としている私としてはとても嬉しい出会いであった。金先生が「もうしばらくすると定年になるので、済州島の花を見に行くのが



赤十字看護大学長と面会

楽しみだ」とまず語られ、「私も済州島を訪れたい」、「それでは一緒に･･･」楽しい会見であった。

われわれの講演に先立ち、長崎県庁で勤務経験のある特殊福祉事業所の呉　尚恩さんが長崎市と長崎原爆について紹介を行った。中尾准教授の講演は「日本における産後の乳房ケアについて」と題するもので「現在、日本で実施されている産後の授乳サポートは、早期授乳を含めたカンガルーケアが主流になってきている。その後の乳房ケアについて施設内で実施されている方法は、基底部剥離、乳頭・乳輪をソフトに保つためのマッサージ法、乳頭の痛みや損傷のトラブルを改善する適切なポジショニング、ラッチ・オンである。産後の母親への乳房ケアは身体のみではなく心のマッサージ、エモーショナルサポートが重要であり、児に対しても相談する姿勢が必要である。」が要旨であった。助産師の資格を有し海外活動経験の豊かな中尾先生の講演は好評で、看護師のたまご達は熱心に聞き入り、講演後次の私の講演時間がなくなるのではと心配になるほど質問が相次いだ。



左から中尾准教授、関根教授、金慕妊学長



花の写真を交えて講義を行う関根教授

私は「長崎原爆の医学的被害」と題して「被爆都市長崎の歴史、世界で唯一の被爆医科大学としての長崎大学医学部について、原爆の理論、原爆の破壊力と熱線、放射線が生体に及ぼす影響、急性原爆症の医学的説明、原爆後障害としてのがんの多発や重複がんの増加について述べ、『長崎市は世界で最後の被爆都市でなければならない、そのために人類の負の遺産として原爆被爆者の医学的被害の結果をまとめ上げ後世へ残さねばならない。また被爆者が日本人だけでなく外国人も含まれ、なかでも韓国人が多かったことを決して忘れていない』ことを強調し」講演を終わった。趣味の花の写真を多数介在させての講演であったが、皆さんが熱心に聴講していることが、肌で感じられ嬉しかった。

講演が終わって一人の男子学生が近寄ってきて、「私は日本人の学生です。この看護大学で学んでいます。広島出身なので先生の話はとても興味深かったです。」国際化社会に生きる日本の若者に出会えて今回の訪韓に花を添えていただいた感じがした。

今回の訪韓では最初の2日間は大津留先生らと接触でき、日本の厚生労働省委託の在外被爆者支援事業の一環としての在韓被爆者健康相談事業を多少理解することができた。本事業は2004年に開始、これまでに9回にわたって韓国内15箇所において健康相談事業を行い、総計で2228名の事前健診参加者と1863名の相談事業参加者があったという。

韓国でのNASHIMの事業が健康相談事業と両輪の轍(わだち)を刻みつつ、韓国被爆者支援を促進し、日韓友好の絆をより堅固にしていくものであってほしいと願いつつ、帰国の途についた。

在外被爆者健康相談等事業とは？



日本国内に居住地及び所在地を持っていない在外被爆者の健康保持と増進を図ることを目的に、治療のための渡日や医療費の助成などの支援が国により行われています。

日本の医師が現地へ出向いて被爆者から健康相談を受ける健康相談等事業は、この支援の一環として行われ、韓国では陜川(ハプチョン)郡を皮切りに2004年から実施されています。今年度もこれまでと同様、2地域（ソウル特別市、大邱広域市）で実施されました。

関根教授の報告の結びに「韓国でのNASHIMの事業が健康相談等事業と両輪の轍(わだち)を刻みつつ、韓国被爆者支援を促進し･･･」という一文がありましたが、今後はこの健康相談を徐々に韓国の医師が中心となって実施できるよう、NASHIMで行っている医師等の受入研修や専門家を派遣して開催する被爆医療の講義等により、韓国側の病院関係者に理解を深めていただいています。





▲韓国での健康相談等事業の様子。
11月に行われた大邱広域市での健康相談等事業では、長崎から派遣された7名の医師が5日間にわたって韓国の被爆者304名から健康相談を受けました。

受入研修事業
（9月～10月）

韓国医師等へ受入研修を実施

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる6名の関係者を招いて、受け入れ研修を実施しました。研修者は9月28日に来崎し、事務職3名は10月2日まで、医療職3名は10月4日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や、長崎大学、放射線影響研究所などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ、被爆の実相についても学びました。



平和案内人嶺川さんの案内で
原爆死没者追悼祈念館を見学した研修生ら

研修後の感想



ソウル赤十字病院（内科）　姜秉局（カンビョングク）　医師

今回の研修は、原爆被爆者の実情をより詳しく学ぶ機会となり、二度とこのような原爆の被害が地球上で起きてはいけないと思いました。在韓被爆者をより深く理解したうえでの診療ができる契機になったと思います。

ソウル赤十字病院（内科）　安泰弘（アンテホン）　医師



研修を通して、原爆被爆の実相と被爆者の痛みを感じることができました。今後もナシムの尽力によって長崎の犠牲と涙が無駄にならないことを祈願するとともに、もう一度長崎を訪問したいと思います。



セソウル内科医院（家庭医学科）　崔日薫（チェイルフン）　医師

長崎の被爆者の状況や彼らに対する健康管理などを知ることができ、とても有意義でした。特に長崎大学での講義は豊富な視覚的資料を使って行われ、理解しやすかったです。歓迎していただき、ありがとうございました。お互いの友情が深まることを期待します。

大韓赤十字社特殊福祉事業所（庶務課）　金東洙（キムドンス）　課長



63年前の原爆投下の痛みを克服し、被爆者のための様々な活動が積極的に行われていることに感銘を受けました。被爆者に対する認識を深めることができたので、今後、彼らのためにやるべきことについて考えたいと思います。



大韓赤十字社特殊福祉事業所（庶務課）　徐敏姫（ソミンヒ）　さん

行政機関と医療機関がひとつになって支援を行っており、被爆者が残りの人生をより安心して幸せに暮らせるように、また、二度と被爆者という犠牲を作らないようにとの皆さんの努力を感じました。研修で得たことを活かし、今後は被爆者に共感して接することができそうです。

大邱赤十字病院（院務課）　李菊子（イグクチャ）　さん



長崎原爆資料館などを訪問しながら、当時の惨状が絵のように頭に浮かび、両国にとって原爆は悲劇的な現実だったように思いました。研修を通して、放射線の健康影響について十分な知識を得ることができました。韓国に帰ってからは被爆者に接する心が新しくなりそうです。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第24号
発行／平成21年1月15日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail n_admin@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.25
2009

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■第２回韓国医師等受入研修を実施
■ソウル・大邱再訪～韓国の被爆者医療の現状～
■ベラルーシ共和国から医師を招聘
■お知らせ
第８回永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集
小中学校で出前講座を開催します
セミパラチンスク核実験場の秘話「人間とアトム」を翻訳



▲ 韓国の医師らに向けた被爆者医療セミナーの様子（ソウル赤十字病院）

第2回 韓国医師等受入研修を実施

今年度２回目となる韓国医師等の受入研修を１月に実施しました。

今回の研修には、韓国に居住している被爆者の医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる7名の関係者が参加しました。

研修者は1月18日に来崎し、事務職3名が1月22日まで、医療職4名が1月24日まで長崎に滞在して、日本赤十字社長崎原爆病院をはじめとする医療機関や、長崎大学、放射線影響研究所などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ、被爆の実相についても学びました。



長崎原爆病院で研修を受ける研修者ら

陜川郡保健所（産婦人科）　鄭（チョン）　善旭（ソンウク）　医師

今回の研修により、原爆投下後の悲惨な状況について実感するとともに、現在もその影響が続いていることを学び、このようなことは二度とあってはならないと思いました。今後は、学んだことを忘れず、被爆者の方の気持ちを考えながら診察を行いたいと思います。

嶺南大学校医療院（放射線腫瘍学科）　金（キム）　名世（ミョンセ）　教授

研修機関の方の熱意を感じ、また、なぜ平和を求めるべきかを考えるためにもとても有意義な時間を過ごすことができました。今後ともナシムの研修を継続していただき、研修だけではなく交流を深める場があればと思います。

慶熙大学病院（家庭医学科）　金（キム）　重洙（ジェンス）　医師

被爆者の現況と医療支援の実情について理解することができました。これからは、韓国の被爆者の方のために何かできることがあればと思います。また、この交流がこれからも続くことを願っています。

ソウル赤十字病院(外科)　李(イ)　美景(ミギョン)　医師

今回の研修で被爆者に多く見られる疾患について知ることができ、また、診療する際に患者の精神的な面も理解することの大切さを改めて学ぶことができました。今後は、学んだことを生かして一つ一つ手順を踏んで診療したいと思います。

ソウル赤十字病院(総務課)　姜(カン)　在遠(ジェウォン)　課長

原爆に対して漠然としたイメージしか持っていませんでしたが、今回の研修で被害の程度や威力についてより深く知ることができ、被爆者への医療及び支援の必要性を感じ、理解することが大事だと思いました。

保健福祉家族部　崔(チェ)　鍾千(ジョンチョン)　主務官

被爆建造物の見学を通じて、原爆投下による悲惨な状況をより現実的に実感することができました。被爆者のために努力されている日本政府の姿に感動するとともに、これからも韓国人被爆者のための支援事業に全力を尽くしたいと思いました。

陜川原爆被害者福祉会館　諸葛(チェガル)　録琳(ロクリム)　指導員

研修の際訪れた様々な施設において原爆投下により悲惨な体験をされた被爆者のため、献身的に仕事をされている姿をみて、福祉会館の被爆者にもっと誠意をもって接したいと思いました。



長崎原爆病院の進藤院長と記念撮影する金名世医師

今回は長崎県の招聘により来崎していたブラジルのサンタクルス病院と日伯友好病院の医師2名(手前の女性2名)も一緒に研修を受けました。



専門家派遣事業
（1月）

今年度2度目となる韓国への派遣事業として、長崎大学原爆後障害医療研究施設の朝長万左男教授と精神・神経科木下裕久講師を派遣し、被爆者医療セミナーを開催しました。

今回は韓国の被爆者医療にも長年携わって来られ、ご退官を間近に控えた朝長教授に派遣の報告及び現地の被爆者医療の現状をまとめていただきました。



大韓赤十字社を訪問した派遣団

ソウル・大邱訪問

～韓国被爆者医療の現状～

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設分子治療学分野
(原研内科) 教授　朝長　万左男

年明けの1月18日～21日、2泊3日で韓国を再訪した。ソウル赤十字病院および大邱市の南嶺医科大学附属病院を訪問し、韓国内の被爆者医療にたずさわっている韓国医師に対して、長崎における原爆被爆者医療の現状、とくに現在もなお持続する癌リスクについての講義を行うためである。折からの寒波でソウルの夜の気温が零下2℃くらいまで下がり、20日の朝、ソウルから大邱へ新幹線で移動途中の河川も氷結しており、冬の韓国を久しぶりに体感した。

NASHIMの韓国派遣事業が始まってすでに10年たったが、開始当時とは比較できないくらい、原爆医療の理解が進んだ。まず、韓国政府が被爆者医療に直接予算を認めるようになったことが大きい。被爆者医療を担当する大韓赤十字社においても、長崎県・市の被爆者医療行政担当の部署とその担当者との交流の蓄積の結果、諸々のノウハウ蓄積も進み、自信にあふれる対応となっており、目を見張るレベルに達した。健康相談事業も3年で希望者をほぼ一巡して、2巡目が開始されることになったが、事前の韓国側による健康チェックもスムーズに行われており、相談の現場で通訳付きで行われるインタビューも効率が高まり、被爆者の方々の満足度も高いものとなっている。

被爆者の医療における最大の課題は、近距離被爆者における癌の頻度が高いことと、距離(被ばく線量)とは関係なく原爆体験者(韓国では被害者と呼ばれている)にひろくみられる精神的影響が持続していることである。この相談事業をきっかけに、少ないものの癌が発見されており、効果があがっていると言える。木下先生らによる精神的影響調査からも、今なお続く不安や悩みが明らかにされており、カウンセリングの重要性が指摘されている。精神医学的あるいは心理学的カウンセリングは地元長崎でも未だ十分には取り組まれていない分野であり、今後どのような方策をとって進めるのか、韓



在韓被爆者のこころのケアの必要性
について講議する木下講師

国内被爆者も含めた総合的な対策が必要と強く感じられた。

ソウル赤十字病院の講演会では、金漢善（キム ハン スン）院長の計らいで院内の研修プログラムに組み込んでいただき、若いレジデントの先生を含め40名ほど集まっていただいた。生涯持続性の造血器腫瘍（骨髄異形成症候群および白血病）と癌のリスク（多重癌の問題を含め）に先生方の興味が集中し、多くの質問を受けた。なぜ生涯持続性になっているのか、未だ全貌は明らかではないが、これまでの研究では各臓器の幹細胞が1945年の8月9日（長崎の場合）に放射線でDNA損傷（二重鎖切断）を受け、その後60年以上にわたって被爆者の体内で生き残り、二重鎖切断で生じたゲノム不安定性によって遺伝子変異を蓄積する結果、癌の発生に結びつく確率が高まるものと推定されると説明したが、納得していただいたように思われた。フローサイトメーターによる幹細胞を単離する方法で、遺伝子不安定性を測定する研究を紹介したところ大変興味を持っていただいた。

夜はしんしんと冷えるソウルの町に出て、家庭料理の有名な韓式レストランで懇親会をもっていただき、院長をはじめ多数の内科の先生方と被爆者医療のあり方をめぐって意見交換が活発に行われた。ホテルに帰る途中、南山公園まで案内していただき、ソウルのみごとな夜景を360度楽しませていただいたが、零下に下がった気温で足がじんじんと冷えてきて、早々に下山した。講演会から懇親会を通じて、親しくなった赤十字病院の先生方と今後の被爆者医療のいっそうの推進と相互訪問・交流を深めるお約束をして、お別れした。







南嶺大学附属病院内を視察する朝長教授

新幹線による大邱への移動はわずか1時間半ときわめて快適で、もう以前のように金浦空港から国内線で移動する不便さは解消されていた。

訪問した南嶺大学附属病院は大邱地域で最も被爆者医療に力を入れていただいているところである。放射線治療科の金名世（キム ミョン セ）教授は我々と入れ違いで長崎に研修に来ていただいており、韓国から帰着後に長崎大学病院でお会いするという、まさに国際交流を地でいく形となった。南嶺大学病院は巨大な私立医科大学の附属病院であるが、放射線治療科が独立しており、照射装置などの先端設備も整い、ファントムやコンピューターを駆使した治療技術も高度で、10年前の韓国の医療から飛躍的な進歩が遂げられたことが実感できた。むしろ日本の方が後れをとっている。乳ガンの患者さんの放射線治療の実際を見学させていただいた。韓国内の被爆者の方々も癌の早期発見で、治癒の機会が増えていくことだろう。

昼食時を利用して、大学院講義室でソウル赤十字病院と同じ内容の講演をさせていただいた。ここでも、生涯持続性について質問があり、幹細胞仮説を説明した。10年前に比べ、韓国の先生方が原爆についての知識が増え、また関心も高まってきているように感じられた。以前より切実な問題と韓国の先生方が認識し始めているのは、やはり北朝鮮が核兵器を保有(原爆数個と推定されている)するに至った現実が背景にあるように感じられた。

日本の植民地政策によって日本に居住し、労働していた韓国の人々が被爆し、帰国後半世紀を経てやっと日本からの医療支援を受けることができる時代になったこと、また韓国政府自身も、ハプチョンの原爆被害者福祉会館の増築予算を韓赤に対して付けるなど、理解とともに政策も急速に具体化してきたこと、韓国内の被爆者医療についても韓国の医師たち、赤十字職員たちの理解が高まったことなど、この十年間に確かに大きな進歩がもたらされたといえる。日本政府の外務省、厚労省、長崎県、長崎市、NASHIM、長崎大学、市内の総合病院（原爆病院、市民病院、放影研）、被爆者医療にかかわるすべての関係者の努力が実りつつあることを実感した意義ある韓国再訪であった。訪問の企画と実施に当たっていただいた、長崎県庁の福田恵子氏、韓赤の呉尚恩（オ サンウン）氏に心から感謝の意を表したいと思います。カムサムニダ。

私は今年度で定年により大学を去りますが、相談事業の2巡目でのさらなる発展を期待し、またNASHIMの派遣事業が今後も日韓両国の自治体・赤十字社・民間交流のユニークな成功例としてますます成果を上げていくものと信じつつ、報告を終わりたいと思います。

受入研修事業（3月）

ベラルーシ共和国から医師を招聘



蒔本会長を表敬訪問したMaxim医師

3月3日からベラルーシ共和国よりLushchyk（ルスチュク） Maxim（マクシム）医師を招聘し、ヒバクシャ医療研修を実施しています。

Maxim先生はベラルーシ卒後医学教育アカデミーで上級研究員としてお勤めですが、年齢は30歳とお若く、英語が堪能で礼儀正しい、とても気さくな先生です。2006年にも3ヶ月ほど長崎に滞在し、長崎大学原爆後障害医療研究施設で研究を行ったご経験があるとのことで、日本語の挨拶や食事中の箸の使い方は日本人と変わらないほどお上手です。



今回の研修では特に甲状腺疾患の専門家研修を実施するほか、長崎大学において共同研究の打ち合わせを行います。

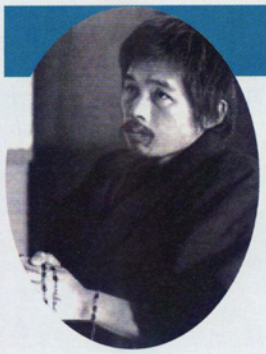
3月10日には受入研修担当の長崎大学の山下教授とともに蒔本NASHIM会長を表敬訪問し、「ベラルーシには無い最新の医療技術を習得したい。」と研修への意気込みを語りました。

Maxim先生の招聘研修を含めると平成20年度までの受入研修者数は、独自事業で206人、共同事業や調整事業を含めると421人に上りました。今後もチェルノブイリ関係国をはじめ、カザフスタン共和国、韓国等の医師等へ研修を継続するとともに、研修を受けて帰国された方々とのネットワーク構築や共同研究をすすめ、世界のヒバクシャ救済に貢献したいと思います。

H.21.3.3現在

医師等受入研修

区分 ／ 年度		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
チェルノブイリ関連	ロシア連邦		1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2	2	1	1	1	19
	ベラルーシ共和国		2	2	2	2	1	1	1	2	2	2	2	3	2	6	2	6	38
	ウクライナ		2	2	2	2	1	1		1	1	1	1	2	1	1	1	1	20
	小計	0	5	5	5	5	3	3	3	4	4	4	4	7	5	8	4	8	77
カザフスタン共和国						1	1	1	1	1	1	3	2	2	1	2	1	2	19
アメリカ合衆国									1										1
韓国					1	1	1	2	2	4	4	12	18	15	12	12	12	13	109
独自事業 計		0	5	5	6	7	5	6	7	9	9	19	24	24	18	22	17	23	206
放射線影響研究所					1														1
ベラルーシ友好協会						1	3	2	3	3	3	1							16
長崎大学													2			1			3
エストニア・チェルノブイリヒバクシャ基金																1			1
共同事業 計		0	0	0	1	1	3	2	3	3	3	1	2	0	0	1	1	0	21
笹川財団			11	9		11	3	3	3	1									41
外務省			21	17	17		1				2								58
日本赤十字社		15	3	3	8	3	3	3											38
WHO共同研究			1	6															7
HICARE・広島大		1		3		2	2		1				1	1	1				12
放射線影響研究所									1				1	2	2	1			7
JICA等（セミパラ）										3	1	1	4	5					14
文部省											1								1
ティッシュバンク											2								2
学術振興財団											2								2
その他NGO		4				1										1			6
調整事業 計		20	36	38	25	16	9	6	5	5	8	1	6	8	3	2	0	0	188
うち、ウクライナ		0	3	9	8	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
支援委員会補助事業 計							1	1	1	1	2								6
合計		20	41	43	32	24	18	15	16	18	22	21	32	32	21	25	18	23	421



第8回永井隆平和記念・長崎候補者を募集

ＮＡＳＨＩＭでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成７年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。
この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を顕彰するものですが、平成21年度は第８回目を実施予定です。

４月から候補者の募集を開始する予定ですので、本賞の候補者としてふさわしい方をぜひご推薦ください。詳細については随時ホームページでお知らせします。

小中学校で出前出張講座を開催します

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前出張講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

講座メニュー	
身近な放射線の話（自然放射線、放射線発見の歴史と応用）	
チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の原子力発電所事故被災者への医療協力
	ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎
	テレメディスンによる遠隔医療協力
カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の核実験場セミパラチンスク（カザフスタン）と長崎
	カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎
世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について
	もし、被ばく事故が起こったら
	放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
	長崎原爆被爆者のこころの調査
在南米・在韓国被爆者	海を渡った被爆者
世界保健機関 WHO からみた長崎の国際被ばく者医療協力	
放射線・紫外線とわたしたちの健康	





セミパラチンスク核実験場の秘話「人間とアトム」を翻訳

今年はカザフスタン共和国のセミパラチンスク核実験場で初めての核実験が行われてから60年目になります。ＮＡＳＨＩＭではこの節目に合わせて、ロシア語で書かれた故ボスタエフ・ケシリム氏の著書「人間とアトム」の翻訳を行いました。これは、セミパラチンスク核実験場の閉鎖を求める戦いについて語られたドキュメンタリー中編小説で、著者であるボスタエフ氏の「人々が類似の過ちを繰り返さないよう予防するための記念として多くの人に読んでいただきたい」との思いがこもっています。今後は日本語訳したこの著書を広く皆様に読んでいただくため、出版に向けた作業を行っていく予定です。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第25号
発行／平成21年3月25日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/　E-mail n_admin@nashim.org

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.26
2009

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修
■滑石小学校、滑石中学校、島原第一中学校で出前講座を開催
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄付
■第8回永井隆平和記念・長崎賞について



▲ 平和祈念式典に参加したチェルノブイリ・カザフスタン関連国からの研修生

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修



ナシムの蒔本会長を表敬

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して指導や医療情報提供を行うため、今年度も６名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月末から１ヶ月余りに亘って長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野で共同研究を行う関係者との交流を深めました。

また、長崎原爆資料館を見学し平和祈念式典へ参列するなど長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護やケアについて理解を深めました。



ロシア連邦　オブニンスク放射線医学研究所

Anna（アンナ） Shinkarkina（シンカルキナ） 医師（上級科学研究者）　専門：病理学

NASHIM研修のお陰で、被爆者における健康ケアや研究の多様な問題に取り組んでいる、素晴らしい夏季研修に参加させていただく機会が得られました。そして、長崎大学大学院付属原研の国際放射線保健部門での実験研究にも参加させていただくことができました。NASHIMと、長崎大学、そして実験室の同僚の助言と配慮にとても感謝しています。

最も印象深い出来事は、原爆ホームの訪問でした。涙なしで被爆者の体験談を聞くことはできませんでした。日本国民の被爆者への注意深い姿勢は、本当に誇らしいものです。また、私は平和式典の規模と意義深さに深く感銘を受けました。本当に完璧に準備されていました。　被爆者と子ども達の合唱、長崎の空を飛ぶ鳩の群れ、みんなの記憶への敬意、すべての人々が恒久平和への願いを込めてこの式典に臨んでいました。

研修以外にも、長崎の楽しい観光名所を訪問し、忘れられない思い出になる日本文化や料理を楽しむ機会を頂きました。今回は２回目の日本訪問になりますが、新しくかつ楽しい盛りだくさんの事を学び、体験しました。同時に、世界中でもっとも親切なおもてなしの国、また、もっとも自分の国民を大事にする国、日本への変わらない思いを持っています。

わが国で放射線被曝により苦しんでいる人々のために、研修中に学んだ知識と技術を生かし最善を尽くしていきたいと思います。



日本赤十字社長崎原爆病院

ウクライナ共和国　ウクライナ医学アカデミー放射線医学研究所

Stanislav Chumak（スタニスラスフ　チュマック） 医師（上級研究者）　専門：精神医学



研修はNASHIMの招待で、長崎大学の原爆後障害医療研究施設にて行われました。長崎大学の熟練した先生方から多様な分野（放射線生物学、放射線被曝の医学的影響、医学統計、疫学など）の講義を受けました。私は特に講義とご意見をいただいた三根先生、本田先生、須山先生に感謝申し上げたいです。

大村国立病院の訪問の際には、今村先生に会って、有意義な情報を得ることができました。病院を見学させていただき、何人かの患者さんの診療にも参加させていただきました。また、中根教授からはご自分の自殺学に関する研究結果を見せていただきました。ヒバクシャの心理学的かつ精神的健康ケア分野での最新のレベルの研究についての研修は有用なものでした。

博物館、教会、市内の観光などの文化プログラムも興味深いものでした。平和式典は、研修中の最も感動的なイベントでした。平和祈念式典に参加させていただいたのは私にとって、大変光栄でした。日本の首相、市長、そしてヒバクシャの演説にはとても感銘を受けました。

最後に　蒔本NASHIM会長と山下教授に長崎へ招待していただいたことを深く感謝申し上げます。日本の同僚との知識と経験の交流にも感謝します。特に柴田教授には我々の長崎での研究のために支援を送っていただき本当に有難うございました。

NASHIMの関係者とすべての日本の同僚の支援と助言に感謝します。



恵の丘長崎原爆ホーム



ベラルーシ共和国　ベラルーシ医科大学

Elena Grigorenko（エレナ　グリゴレンコ） 医師（助教）　専門：内科学（循環器病学）

私はこの研修で新たな専門知識や、人々との交流の中で貴重な経験を得て、過去に起こったさまざまな出来事を別の角度から見たり、また現在起こっていることを新たな視点でみたりすることができました。日本の医療制度や、疫学データ、長崎の原爆被爆者に対する支援について知ることができて大変興味深かったです。私は放射線の医学的・社会的影響について初めて詳しく知り、今日の学術界が行っている最新の調査結果について知ることができました。

長崎大学の付属病院において、循環器科で研修を受けさせてもらえたことに非常に感謝しています。自分の専門である循環器系の疾患について見学できたことは、私にとって興味深く有益なことでした。ベラルーシ国立医科大学の学生に授業で教える際に有益な多くの情報をここで得ることができました。私は患者回診や教授の診察に立ち会ったり、手術室や診断のための検査を見学したりすることができました。

有益で内容の濃い研修プログラムや、温かく、気持ち良く迎えてくださったこと、私たちの要望を非常に理解していただいて日本での研修を快適なものにしてくださったことに対して、私たちの研修を準備してくれた皆さんに大変感謝しています。NASHIMのプロジェクト遂行に携わっている皆さんの時間と心配りは、かけがえのないものです。

私は、いつか、人々が共通の悲しみや問題だけでなく、お互いの喜びと成果によって団結できるような日が来ることを望んでいます。



山下教授によるオリエンテーション

受入研修事業

ベラルーシ共和国　ゴメリ医科大学



Volha（オリガ） Vasilkova（ワシルコワ） 医師（大学院生）　専門：内分泌学

私は現在、国立ゴメリ医科大学公衆衛生学講座の大学院生です。メタボリックシンドロームおよび糖尿病2型、男性更年期障害の研究をしています。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科で研修を受ける機会に恵まれ、非常に嬉しく思っています。充実した興味深い研修プログラムにより、私はさまざまな新しいことを知ることができました。原爆資料館や原爆病院、原爆ホームの見学ができたことにも感謝しています。

最初の週は、公式行事のほかに疫学や放射線医療、また長崎大学や原爆に関する数々の興味深い講義がありました。

高村昇教授には、１か月にわたるお心遣い、ご援助、ご支援に対して特にお礼を述べたいと思います。さまざまな研修プログラムにより、住民検診に参加したり、長崎大学病院ばかりか、他病院の甲状腺外科や内分泌科を訪れたりすることができました。

１ヶ月間の間に私は指導教官と共に、" Testosterone Is an Independent Determinant of Bone Mineral Density in Men with Type 2 Diabetes Mellitus" という論文を完成させることができました。

長崎での研修という又とない機会を与えてくださったNASHIMのみなさんに、心からお礼を申し上げたいと思います。



カザフスタン共和国　セミパラチンスク医科大学

Alma（アルマ） Nurtazina（ヌルタジナ） 医師（准教授）　専門：循環器病学

私は今年、長崎大学病院で１ヶ月間行われるNASHIM研修の研修生に選ばれました。１週間目はとても忙しく、ナシム会長をはじめ、ナシム構成機関の表敬訪問が主で、残りの３週間は長崎大学病院循環器内科でのオブザーバーシップに参加させていただきました。

大学病院の皆さんはすべての面で、とてもフレンドリーで手厚く、理解しやすいように助けてくださいました。

私は、心臓専門医として医科大学の家庭医学部門で講義をしており、５，６年次の学生には外来診療に関する授業も行っています。このため、私は日本での一次診療医がどのように働いているのかを知ることに何よりの関心がありました。大津留先生は私の要望が叶うようにご親切にアレンジしてくださいました。そして、研修の最後の２日間、一次診療医の森先生と白髭先生の病院で研修しました。日本での一次診療医や家庭医学に関する一般的状況を説明していただき、森先生に本当に感謝しています。翌日は、白髭先生の患者さんの自宅を訪問しました。先生は自宅訪問の特徴について、患者さんの管理が自宅でどのように行われているのかなど、いくつかのケースを挙げながらお話してくださいました。訪問の際の、白髭先生の患者さんへの励ましと元気づけの言葉は、本当に素晴らしいものでした。

４週間はあっという間に過ぎてしまいました。高度の医学と日本文化を体験し、たくさんの有用な情報を教えていただきました。研修はとても有意義なもので、楽しかったです。わが国の医師が高水準の日本の病院で専門技術を学ぶことができ、また、ヒバクシャの健康管理に関する経験を共有できる機会を与えてくださることは、とてもよいことだと思っています。

カザフスタンへ帰ってからは学んだ知識を生かして使いたいと思います。長崎での滞在は本当に素晴らしかったです。この素晴らしい研修を用意してくださったNASHIMに深甚たる謝意を表します。



放射線影響研究所 赤星先生の講義

カザフスタン共和国　セミパラチンスク医科大学



Ayan（アヤン） Myssayev（ミッサエフ） 医師（助教）　専門：整形外科

私はセメイ市セミパラチンスク国立医科大学の外傷科および整形外科に助教として奉職しています。この地方には、40年以上にわたり、空中、地上、地下を含む約500回の核実験が行われてきたセミパラチンスク核実験場があります。放射線の被害を受けてきた住民は、特別な医療支援を必要としており、それはNASHIMの事業の目的とも合致しています。

我々の研修プログラムは、自由時間がほとんどないほど充実したものでした。3週目と4週目には、臨床研修が行われました。まず始めに、長崎大学病院の救急部で長谷先生や山下先生のお世話になり、患者救護の一助を担うことができました。また、大村市の長崎医療センターではICUを見学しました。高山先生には救急部やICUの業務について詳細に説明していただきました。ドクターヘリその他の航空救急体制に重点がおかれた内容でした。

学習のほか、文化的プログラムも充実していました。原爆資料館や平和公園、稲佐山の展望台(昼間、夜間)、出島、伊王島と温泉、26聖人記念館、グラバー園、大浦天主堂、ペンギン水族館などを訪れました。

我々は8月9日の平和祈念式典や、15日のお盆の行事にも参加しました。原爆で亡くなった方や被爆者の方たちに対しての日本人の心遣いには感動しました。我々は、恐ろしい日々を生き抜いてきた被爆者の人々の苦しみを感じ取り、被爆者の方の治療や介護にあたっている人々に対し、尊敬の念を抱きました。



平和祈念式典に参加

レポートの最後に、NASHIMがこのような国際交流プログラムを作り、運営していることに対してお礼を述べたいと思います。各教授、講師、病院の医師の皆さんのホスピタリティー、理解、忍耐、支援に対しても感謝しています。私は、日本で得た知識が今後の仕事の役に立つであろうことを確信しています。



歓迎レセプション



ナシム会長から修了証書を受け取る研修生

出前出張講座

NASHIMでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、平成の鳴滝塾　～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～　と題して、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前講座を平成19年度から実施しています。

今年は、①6月22日長崎市立滑石小学校（5年生64名）、②6月30日長崎市立滑石中学校（2年生117名）、③8月9日島原市立島原第一中学校（全学年210名）で出前講座を行いました。



①滑石小学校の講座は「放射線・紫外線とわたしたちの健康」というテーマで、長崎大学先導生命科学研究支援センターの松田尚樹教授が行いました。

松田教授は、「放射線とは音や携帯電話の電波と同じように空気中を伝わるエネルギーで、見えない、聞こえない、臭わない、感じないもの」と説明し、放射線測定器を用い空間中や人体中のカリウムに相当する量の塩化カリウム粉末を計り、教室や身体の中にも自然放射線が存在することを実証しました。放射線を感知するとピーという音をたてながらメーターの動く測定器は、生徒の皆さんにとっては大変めずらしかったようで休憩中は大人気でした。

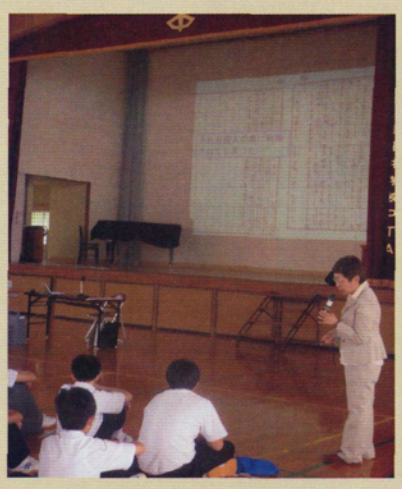
講座の後半は松田教授から「昔の地球には放射線はなかった？」、「紫外線をあびると涙が出やすくなる？」などの放射線や紫外線に関するクイズが14問出されました。全問正解者が出た場合には、「宿題なし」と担任の先生のありがたい約束があったので、クイズの最中は松田教授の声もかき消されるぐらい大変な盛り上がりでした。しかし、クイズの半分を経過する頃からだんだんと難しい問題が出て、最終的には残念ながら全問正解者はいませんでした。

生徒の感想

- 昔の地球には、たくさんの放射線があったことを初めて知ったし、人間の体の中にも放射線があるということにビックリした。
- 紫外線は体を通り抜けないけど、放射線は体を通り抜けてしまうことなど紫外線と放射線の違いがわかった。放射線を計る器械もおもしろかった。
- 同じ年齢なのに、紫外線のあたる量によって、しわやしみのでき方が違うことがわかったので、これからは外に出るときは、日焼け止めをぬったり帽子をかぶろうと思った。
- 紫外線は悪いことをするだけでなく、ビタミンDをつくるのを助けてくれることがわかった。

②滑石中学校の講座は、「原爆直後の救護活動と調査」というテーマで、長崎大学原爆障害医療研究施設の三根真理子准教授が行いました。

講座は「グビロが丘」など長崎大学医学部内にある被爆遺構の紹介から始まり、原爆直後の悲惨な被害状況の中での調来助先生、永井隆先生、秋月辰一郎先生等による救護活動や、その後の日本とアメリカによる調査について等がスライドを使ってわかりやすく説明されました。途中には、「長崎に落とされた原子爆弾の通称は？」などのクイズが所々に織り交ぜられ、生徒の皆さんと三根准教授とのやり取りが盛んに行われ、非常に活発な授業となりました。



また、最後にはアニメ「アンゼラスの鐘」のダイジェスト版が上映されましたが、アニメーションによりリアルに描かれている焼け爛れた原爆後の惨状の中での秋月医師らによる懸命な救護活動の様子は、生徒の皆さんに強く訴えかけるものがあったようです。

生徒の感想

・被爆遺構として、旧長崎医科大学の正門があることは知っていたが、グビロが丘、薬専防空壕跡やゲストハウスがあることも初めて知った。また、滑石近くには救護所がたくさんあったこともわかった。
・原爆は落とされた時ばかりではなく、髪が抜けたり斑点がでたり、歯茎から出血したり、あとから症状が出てくるということがとても印象に残った。
・今まで被爆者の話は聞いたことがあったが、客観的な事実に基づいた講話は初めてだった。また、平和について考えたりするけど、放射線については考えたことがなかったので、今回の講演はすごくためになった。
・アニメ「アンゼラスの鐘」では、7分しか上映されなかったが、戦争の恐ろしさがよくわかったので、自分たち若い世代が平和の大切さを伝えていかなければならないと思った。
・原爆でたくさんの人々が火傷やケガをして、それを少ない人数で、しかも自分はけがをしているのに、手当をした医師（調先生、永井先生、秋月先生など）はすごいと思った。



③次は初めて長崎市外に出ての講座で、島原第一中学校に伺いました。

講座は、上記②と同じ「原爆直後の救護活動と調査」というテーマで、長崎大学の三根真理子准教授が行いました。

長崎市内の学校ではないため、原爆についての認知度が低いのではないかと心配しましたが、平和学習を行っていることもあり、杞憂に終わりました。

また、この日は長崎に原爆を投下された8月9日でしたので、講座終了後の11時2分に参加者全員で黙祷を行い、原爆で亡くなられた方々のご冥福を祈りました。

生徒の感想

・原爆は、爆風、熱線、放射線などの被害があることがわかり、64年たった現在までも苦しんでいる人がいることもわかった。
・原爆の恐ろしさと平和の大切さ、命の尊さが改めてわかったので、2度と戦争をおこさないでほしい。
・今日8月9日、多くの命を失った犠牲者に祈りを捧げるような、世界にとって大切な日になってほしい。
・自分たちが次へと伝えるために原爆の被害があったことに向き合って、事実を知らなければいけないと思った。
・爆心地に近い人たちは、一瞬で黒こげになったり、内臓が飛び出ていたそうだが、この死体を片づける人たちは大変だと思った。
・原爆では日本人だけでなく、外国の人も被爆したことを知った。また、日本は被害者というだけでなく、加害者としての側面があることを学んだ。
・ナイチンゲール賞を受賞した人（久松シソノさん）が長崎にいたとは、すばらしい！

松田先生、三根先生は、講話の中にクイズやおもしろい話を混ぜ、また話し方も小中学生にわかりやすいように工夫して下さり、生徒達からも非常に好評を得て、たくさん感謝の言葉を頂きました。ありがとうございました。

この講座を通して若い世代の皆さんに長崎特有のヒバクシャ医療や国際協力に関心を持っていただき、将来世界のヒバクシャ医療へ貢献するような人材が1人でも多く育ってくれることを期待します。

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄付



今年も核兵器禁止平和建設国民会議(核禁会議)に寄せられた浄財を活動助成金としてNASHIMに寄付していただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のための積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施し、多くの医療施設等へ検診車、車椅子、ベッド、医療機器等を贈呈しています。NASHIMへも毎年活動助成金を寄付していただいており、いただいた助成金は医学教科書の出版等に役立っています。

贈呈式は8月7日に長崎県立総合体育館で執り行われ、NASHIMからは藤田事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の9団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。NASHIMとしましては世界のヒバクシャ支援のため、この活動助成金を有効に活用したいと考えております。

第8回永井隆平和記念・長崎賞について



NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するものですが、今年度は第8回目になります。

5月から8月まで候補者の募集をしたところ、日本をはじめ、ドイツ、カザフスタンなど世界各地から6件の応募がありました。6件の候補者と前回次点の候補者の中から本賞受賞者が決定することになります。受賞者が決定次第ホームページでお知らせします。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第26号
発行／平成21年10月29日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570　長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.27
2010

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■専門家派遣事業（韓国）
■専門家派遣事業（カザフスタン）
■韓国医師等へ受入研修を実施
■第８回永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定



▲ 大韓赤十字社の柳 宗夏（ユ ジョンハ）総裁から感謝盾を受け取る大津留晶（長崎大学病院）准教授

専門家派遣事業

NASHIMでは、これまでに受け入れた研修者のフォローアップや関係機関との調整・意見交換のため、韓国、チェルノブイリ関連国及びカザフスタンなどへ専門家を派遣しています。今号では、大津留准教授、冨永医師の韓国訪問と永山教授のカザフスタン訪問の報告を掲載します。

2009年 NASHIM 韓国専門家派遣事業（釜山医療院視察報告）

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設
分子医療部門　分子治療研究分野（原研内科）
冨永信也



11月26日、NASHIM専門家派遣事業として、長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター　大津留晶准教授、長崎県原爆被爆者援護課保健医療班　山口勇次係長と共に韓国釜山に向かいました。今回の目的は、釜山における被爆者医療の実情把握と今後の健康相談事業のあり方についての意見交換でした。



釜山医療院院長室にて

金海空港から高速バスで釜山市内に入った後、車で10分程のところにある釜山医療院を訪問しました。初めに、金東憲（キム・ドンホン）院長とお会いし、院長より「自分は福岡にある九州大学医学部に研修に行ったこともあり、日本特に九州には特別の思い入れがある」との挨拶をいただきました。釜山医療院は、1876年に韓国初の西洋式病院として創立され既に140年が経過しており歴史と伝統がある病院で医師約50人、看護師約200人、その他約200人の合計450人が勤務している病院です。同院は2005年9月より原爆被害者診療協定病院に指定され、在韓被爆者の診療を行っています。診療協定病院になった2005年には、わずか（延べ）11人の被爆者しか診療していませんでしたが、年々診療する被爆者の数は増え続け2008年には（延べ）333人の被爆者が診療を受け、今年もこのままのペースでいけば過去最高の被爆者が診療を受けることになるだろう、とのことでした。

また、同院にはNASHIMが今年11月8日～14日に行った韓国医師等受入研修に参加していた金珉濠（キム・ミンホ）先生もおられ、「NASHIM研修で学んだいろいろなことを韓国での被爆者医療に役立て、少しでも被爆者のための診療を行いたい。」と、おっしゃって下さいました。



釜山医療院院長を囲んで



林先生との熱心な意見交換

さらに、2005年11月在外公館にて健康管理手当の申請ができるように制度が変わってから、被爆者の健康管理手当用診断書を書いて下さっている林知香（イム・ジヒャン）先生（家庭医学科）とお会いし、健康管理手当申請時の注意点などについて意見交換を行ないました。

その後、翌日に行われる大韓赤十字社創立104周年記念式典に出席するために、韓国の新幹線といえるKTXで一路ソウルへ向かいました。釜山～ソウルは約3時間かかりますが、日本の新幹線と比べると、車内が静かで揺れも少なく大変快適でした。

11月27日、ソウル市ウリ銀行本店で行われた授賞式で、大津留先生が大韓赤十字社の柳宗夏（ユ・ジョンハ）総裁から「事業支援」部門で感謝盾を授与されました。大津留先生はNASHIMが行っている韓国からの医師等受入研修事業や韓国への専門家派遣事業の窓口となっており、研修機関との連絡調整に尽力されていること、また長崎県や長崎市が行っている在韓被爆者健康相談事業や渡日治療に対する真摯な態度及び在韓被爆者支援の中心的な役割を果たしてきたことが高く評価され今回の受賞となりました。改めまして大津留先生、受賞おめでとうございます。



大韓赤十字社職員からの祝福

最後になりましたが、今回通訳として同行していただいた呉尚恩（オ・サンウン）さんを始め、大韓赤十字社の方々の細やかな心配りにより大変充実した韓国訪問となりました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



総裁を中央に記念撮影（右から2人目が大津留晶准教授）

専門家派遣事業

2009年 NASHIM カザフスタン専門家派遣事業



長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科
附属原爆後障害医療研究施設（原研）
分子設計学研究分野
永山雄二

2009年8月25日から9月2日までNASIMの専門家派遣事業として、長崎大学原研疫学・高村教授、NASHIM事務局・山口さんとカザフスタンを訪問しました。目的は、今までNASHIMが受け入れてきた旧ソ連邦からの研修生の近況調査及び現地におけるヒバクシャ医療の現状評価・人事交流に加えて、長崎大学とカザフスタン国立医科大学の大学間協定式出席、セミパラチンスク第20回核実験中止記念カンファランスでの講演・長崎賞授与、カザフスタン私立医科大学での学生への講義などです。

25日、長崎から福岡へバス移動後、韓国・仁川空港経由でカザフスタン最大の都市アルマティへ向かいました。この路線ができたおかげで以前のヨーロッパ或いはモスクワ経由に比較してカザフスタン行きが非常に楽になったそうです。深夜到着、前原研病理助教ガビット先生（現カザフスタン私立医科大学医学部長）らが出迎えに来てくれました。同市泊。

翌25日、カザフスタン国立医科大学で、長崎大学との大学間協定の調印式に出席。アカノフ学長との調印式・記念撮影を済ませた後、今回長崎大学を訪問する5名の学生と面談しました。日本語を話せる学生もおり、日本への興味の高さが伺えます。午後はResearch Institute of Cardiology and Internal Diseases訪問見学。アルマティ2泊目。この間、水のようなシャワー・長時間にわたる停電・クレジットカード使用不可という想定内外（?）の些細なトラブルが頻発しました。



カザフスタン国立医科大学との調印式

27日、飛行機でセミパラチンスクへ移動。約40年前の軍用機？らしい約50人乗りの双発機でなんと小さいこと。さらに座席は自由席。離陸直前にゴムが焼けるような臭いを伴う煙が機内全体に立ち込めたり、飛行中に窓枠から冷たい空気が漏れてきたりと不安一杯の飛行でしたが、約2時間で無事到着しました。セミパラチンスク医科大学副学長マラット先生の出迎えで、診断センター・癌センターを訪問見学、JICAの支援機器に非常に感謝していました。

28日は、地上核爆発でできた原子の湖(atomic lake)見学。高速道路を約2時間、それからでこぼこ道を14km走ると聞いていましたが、高速道路が日本の高速道路ではなく、未舗装・穴だらけ。よってでこぼこ道を約2時間走って、さらに野山を走ったといったほうが正確でしょう。近づくにつれ線量計のメーターが



原子の湖(atomic lake)

反応を始め、湖畔での線量は約50m Sv/年まで上昇、CT検査5-10回分くらいに相当します。短時間の滞在は全く安全ですが、気持ちのいいものではありませんでした。帰りに被爆村として有名なズナメンカ村に寄り診療所見学。市内の病院・センターなどの施設も日本に比べるとまだまだですが、特に田舎は格差が激しいのには驚きました。

29日、核実験中止記念式典と第５回セミパラチンスク国際会議出席。国際会議とはいえ参加者の多くが国内からで、政府の援助がなかった今年はかなり規模が縮小されたとの事。小生が長崎大学のグローバルCOEプログラム「放射線リスク制御国際戦略拠点」の概要とこれまでの成果について、高村教授がこれまでのセミパラにおける分子疫学研究をまとめて報告しました。なお、優秀学生2名への長崎賞の授与を執り行いました。他に長年セミパラチンスクで医療貢献されている長崎医療センタースタッフの皆さんらも発表されていました。最後に大統領の核廃絶宣言を読み上げて終了。



式典での講演

30日、日曜日。マラット先生の案内で日曜バザールと森でのキノコ採りへ（高村先生が放射線測定のため必要、決して遊びではありません）。昼食は自宅へ招待していただき、お手製のウクライナ・ボルシチとカザフスタンの伝統料理・ベシュバルマックをご馳走になりました。夜はNASHIMの同窓会へ参加。今まで長崎で研修したセミパラチンスク在住の約10名の医師に集まっていただき、研修の感想など語り合い、楽しい会でした。



カザフスタン私立医科大学での講義

31日、朝からアルマティに戻り、カザフスタン私立医科大学でガビット先生の通訳を通して講義。休日にも拘らず約50名ほどの学生が聴講に来てくれました。夜は、アルマティ在住のNASHIM研修医師と夕食。２夜連続でNASHIM研修生の感想（NASHIMで受けた研修が現在も役に立っていること、今後も受入研修を行い、カザフスタンの医療向上に力を貸してほしい等）をいろいろ聞けたことは今後のNASHIM活動のあり方を考えるにあたっては良いことでありました。

31日、日本・カザフスタンの友好関係におけるNASHIMの事業と長崎大学の国際保健活動の貢献の大きさを痛感しながら韓国・福岡経由で無事帰崎。

最後にカザフスタン訪問の機会を与えてくださったNASHIMと今回の訪問に関してお世話になったカザフスタンの関係者の方々に深謝いたします。ところで、当地での肉だらけの食事とウォッカ・コニャック攻めには閉口しました。もっと健康的な食習慣を身につけてほしいものです。

受入研修事業

韓国医師等へ受入研修を実施

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる６名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は11月８日に来崎し、事務職３名は11月12日まで、医療職３名は11月14日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

研修後の感想



ソウル赤十字病院　内科医　宋　柾勲(ソン・ジョンフン)

韓国で原爆被爆者の診療に携わっていましたが、原爆により発生しうる問題点については充分な理解がなく、一般の患者と同じように診療しながらも、なんだか私が被爆者のためにやるべきことを看過しているのではという漠然たる不安感を抱いていました。

しかし、今回の研修を通して、こういった不安感を払拭して帰ることが出来ました。特に最後の２日間の講義(放射線の基本知識についてと日本の医療体系について)は本当に有意義な時間でした。

仁川赤十字病院　内科医　李　承姫(イ・スンヒ)



月曜日、最初に今回の研修のためのオリエンテーションがあってよかったと思います。火曜日、長崎大学病院の見学と概要講義も非常に興味深く、午後の長崎原爆病院も印象的でした。水曜日、検診センター訪問と日程はシンプルでしたが、充実した有意義な研修でした。午後の原爆ホーム訪問がキャンセルになって残念でしたが、その代わりにグラバー園等長崎を楽しむ事ができました。長崎はただの小さな都市ではなく、日本がはじめて西洋に向けて門を開き、先進文化（西洋文化）を受け入れた意味のあるところであることを学ぶことができました。木曜日、金曜日の講義は講義の内容も、また先生方の説明も良かったです。



釜山医療院　内分泌内科医　金　珉濠(キム・ミンホ)

今回の研修で印象深かったことを大きく３つに分けることができます。

①医学セミナー

広島と長崎であった被爆は世界のどこの国も経験したことがない事件です。原爆と疾患との因果関係、治療対策に対して大きな関心を持てるようになりました。

②長崎大学病院、長崎原爆病院の訪問

原爆被爆者の入院及び検診、治療段階を一目瞭然に見ることができました。

③原爆資料館、平和公園、浦上天主堂の見学

原爆の実状及び危険性に関する適切な情報を提供してくれただけではなく、原爆を経験していない2世代、3世代の人達に放射線及び原爆の危険性とその深刻性を語る場として活用していることをみて、深い感銘

を受けました。

最後に、如己堂の展示を見ながら永井隆先生の崇高な犠牲精神に触れ、医師としての使命についてもう一度考えるきっかけになりました。他の地方に比べて、天主堂が著しく目に入り、カトリック導入の現場を見る機会にもなりました。

大韓赤十字社特殊福祉事業本部　本部長　崔　元鎔(チェ・ウォンヨン)



研修の期間及び日程は適切であり、また事務職と医療職に分けて医療職に対して２日間専門研修を行うことも良いと思う。

最も私の心に残ったことは、永井隆先生が畳２枚の部屋で人類愛を実践するために力を尽くし、その子孫により世界平和のための先駆者の役割を果たしていることを見て、感じて、教育を受けながら、赤十字社の精神と一脈相通ずるものだと思った。その実践のために私もより献身的に努力すべきだと心に誓った。

韓国に「マジュンムル」（呼び水）という言葉があるが、それはポンプに水がない時、一、二瓢の水を入れて、ポンプを上げ下げすれば水が出るという意味で、短い日程ではあったが、この研修をきっかけに世界平和のための活動にNASHIMの関係者の方々と一緒に微力ながら私も参加させていただきたいと思った。



大韓赤十字社特殊福祉事業本部　総務担当　崔　恵善(チェ・ヘソン)

韓赤で原爆被爆者の手当などの支給を担当しながらも実際被爆者の方々がどういう経緯により被爆したのか、韓国で資料と写真だけでの教育は受けていましたが、今回NASHIM研修のお陰で直接現場を目で見ながら、様々な教育を受けることができ実務者としてとても有意義な研修となりました。

火曜日訪問した長崎大学病院において渡日治療で韓国から来られた被爆者の治療過程を直接見ることができ、どのような経緯でどのような病院でどういうふうに治療を受けていらっしゃるのかが分かり、とても意義のある時間でした。

今回NASHIMで受けた教育を土台にして、私に任せられた仕事に生かし、より被爆者を理解した上での仕事ができるように頑張ります。

陜川郡役場　係長　金　江浩(キム・ガンホ)



原爆投下後64年が過ぎた今も、被爆者がたくさんの苦痛をうけていることから、放射線がどんなに恐ろしいものであるかをもう一度確認することができた。

日本政府は、とても組織的かつ体系的に原爆被爆者のために大学病院だけではなく、医師会などが中心となって被爆者の福祉と健康増進に心血を注いでおり、我々が見習うべきところだと思われる。

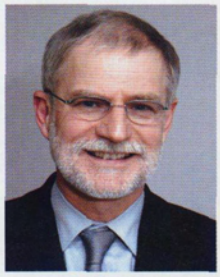
わが国の被爆者の中で、現在長崎県に２名が渡日して治療中であることは幸いなことだが、より多くの被爆者が渡日治療を受けられるようにしていただければと思う。

長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を建て、育っていく学生達に原爆で亡くなられた方々の貴重な犠牲を記憶させ、二度と戦争が起きないようにと平和への誓いの場として活用していることは後世にも継続的な教訓になるので、韓国にもこのような施設を建てるべきだと思った。

第8回永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定

ＮＡＳＨＩＭでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成７年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するもので、今年度は第８回目になりますが、この度その受賞者が決定しました。



1. 氏名・年齢　Christoph（クリストフ） Reiners（ライナー）（ドイツ連邦共和国）
1946年１月28日生（63歳）

2. 役　　職　ビュルツブルグ大学病院長

3. 受賞理由　放射線誘発甲状腺癌の診断と治療への貢献

ライナー教授はドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ（放射性同位元素）を用いた診断と治療への貢献が大きく、レントゲン博士の後継教授でもある。

エッセン大学核医学教授時代の1986年4月26日チェルノブイリ原発事故が起こり、核医学の第一人者として欧州からの医療協力の指導的役割を果たしており、1992年からは最も被害が甚大なベラルーシとの間での人道主義的共同研究プロジェクトを開始している。

功績の1 つは、ベラルーシ共和国での甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺癌の早期診断と再発診断に大きく貢献するなど放射線誘発甲状腺癌に関する多くの学術業績をあげた。また、ミンスクのドロズド教授らと共同で甲状腺腫瘍の超音波スクリーニング方法を開発した。

その後、母校ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授では、ミンスク甲状腺癌センターに甲状腺癌のアイソトープ診断と治療のための核医学治療部門を創立し、同様な核医学部門をウクライナのキエフ内分泌研究所にも立ち上げ、多発している甲状腺癌の治療成績向上に大きく貢献した。

また、1992年からベラルーシで再発転移を繰り返す重症小児甲状腺癌の術後患者250例をドイツに招聘し、産業界やEUの財政支援で人道的支援も継続している。

現在WHO緊急被ばく医療研究協力センター長でもあり、チェルノブイリ医療協力の功績によりベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与された。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第27号
発行／平成22年1月20日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.28
2010

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■第8回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
■韓国医師等へ被爆者医療研修を実施
■ブラジルからの被爆者医療研修生紹介
■平成の鳴滝塾（小中学校への出前講座を募集）



▲ NASHIMの蒔本会長から賞状（楯）を授与されるクリストフ・ライナー教授（ドイツ ビュルツブルグ大学病院長）

第8回永井隆平和記念・長崎賞
クリストフ・ライナー教授に授与

永井隆平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体に贈られます。



NASHIM事業の一環として1995年に創設されて以来、第８回目となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式が３月15日に長崎市において開催され、ドイツから出席された受賞者クリストフ・ライナー教授に蒔本会長から賞状と賞牌（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金が授与されました。

昨年９月永井隆平和記念・長崎賞選考委員会、同12月に永井隆平和記念・長崎賞委員会が開催され、本賞にふさわしい方を選考するために活発な議論が交わされました。クリストフ・ライナー教授は、ドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ（放射性同位元素）を用いた診断と治療に貢献してこられ、ベラルーシ共和国で甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺がんの早期診断と再発診断に大きく貢献し、放射線誘発甲状腺がんの臨床治療に関する多くの学術業績を上げられました。また、1992年からは、最も被害が甚大なベラルーシ共和国で再発転移を繰り返す247名の重症小児甲状腺がん患者をドイツに招き、子供たちへの医療支援を行い大きな成果を上げ、ベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与されるなどの多岐にわたる貢献が評価され、今回の受賞となりました。



授賞式へは、長崎県知事、長崎市長をはじめ、大学、病院、研究施設などから多数の関係者の皆さんにご出席いただきました。また、ライナー教授が、受賞スピーチを行い、「チェルノブイリ事故後の日本政府や支援団体、研究者の皆さんのこれまでの協力に感謝し、今後も事故後に増加した甲状腺がんの治療に力を注ぎたい」と力強く述べられました。

授賞式後は祝賀会を開き、ライナー教授の受賞を皆さんに祝っていただきました。



ライナー教授との思い出話を披露する長瀧先生



長崎原爆病院の朝長院長と懇談



放射線影響協会の青木理事長と懇談

受賞者紹介



1．氏名・年齢

クリストフ　ライナー
Christoph Reiners（64歳　ドイツ連邦共和国）

2．主な経歴

- 1971年　ビュルツブルグ大学医学部卒業
- 1971年～87年　ビュルツブルグ大学で核医学を専攻
- 1987年～89年　エッセン大学准教授
- 1989年～94年　エッセン大学核医学教室主任教授
- 1994年～現在　ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授
- 2001年～現在　ビュルツブルグ大学病院長



3．主な活動

- 1989年　オーストリア医療放射線防護協会名誉会員
- 1990年～96年　ドイツ医療放射線防護協会会長
- 1996年　ドイツ連邦共和国、連邦十字勲章
- 1996年～98年　ドイツ放射線防護委員会会長
- 2000年　ベラルーシ共和国、フランシスカ・スカリナ勲章
- 2002年　レオポルド科学アカデミー会員
- 2003年　ミンスク市、ベラルーシ医科大学名誉博士
- 2005年～現在　WHO-REMPAN（緊急被ばく医療国際ネットワーク）ドイツ研究協力センター長
- 2010年　ニューヨーク市、スローン・ケタリング記念癌センター「生命の灯」名誉賞



第8回永井隆平和記念・長崎賞を受賞して

第８回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者に選ばれたことを非常に光栄に存じます。原爆や放射線被曝の影響を受けた人々の福利向上を目的とし、世界平和実現に貢献する賞をいただいたことに対して深く感謝しております。

私は、放射線防護と放射線疾患の医学的管理を専門としていますが、最も印象深いことはチェルノブイリ原発事故により異常発生した小児甲状腺がんの治療に携わったことです。当時、ベラルーシ共和国ではこうした進行がんを治療するほどの医療技術が進んでいませんでした。それで、私たちは子供たちへの医療支援を始めるとともに、ベラルーシの医師へのトレーニングと教育を目的とするプロジェクトを立ち上げ、247名の子供たちをドイツに招きました。それから17年が経過した現在、その全員が治療に良く反応し、今や若き成人となり、既に自分たちの家庭を築くまでになっていることは、ほんとに嬉しいことです。チェルノブイリ原子炉の事故から20年以上が経過したにもかかわらず、国際協力は続いており、特に日本との協力はさらに進展しています。また、ビュルツブルグ大学と長崎大学は学術協定を結んでおり、今後も両大学が友好な関係を続け、世界平和実現に向けて努力していきたいと思います。

受入研修事業
（2月）

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施



韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる４名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は２月21日に来崎し、事務職２名は２月25日まで、医療職２名は２月27日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

研修後の感想

ソウル赤十字病院　家庭医学医　安　玟垣（アン・ミンウォン）



原爆資料館見学では原爆による被害状況を、原爆関連医療機関訪問では被爆医療やその研究に関する専門的なお話しを聞くことができるなど、研修期間及び内容構成が、原爆についての理解を深める上で適切であったと思います。

今回の研修は原爆被害の深刻さをあらためて考える契機になったと同時に、自らの知識不足を痛感する機会でもありました。戦争・原爆を経験したことのない若い世代の多くが、同じような状況ではないかと思います。今後、原爆問題に対する理解を得るためにも、原爆の悲惨さや被爆医療について積極的な広報が必要だと考えます。



大邱（テグ）報勲病院　放射線科医　趙　顕澈（チョ・ヒョンチョル）

今回私が受講した７日間の研修プログラムは、内容が体系的に構成されており、原爆被害の深刻さと被ばく医療に対する理解を大いに深めることができたと感じています。私の専門分野が放射線科であることから、特にＰＥＴについてのお話しは大変興味深いものでした。また、被爆については医学的研究がいくつも行われていることを知り、その中心機関である放射線影響研究所にも関心を持ちました。残念ながら今回の研修では訪問することができませんでしたが、次回以降の研修プログラムで放射線影響研究所を訪問したいと感じています。

帰国後は、原子爆弾及びチェルノブイリ原発事故等による放射能被害の深刻さと、被爆者医療に係る知識の周知に努めたいと思います。



陜川(ハプチョン)原爆被害者福祉会館　総務担当　李　美淑(イ・ミスク)

研修１日目の行政オリエンテーションでは、どのような手順で被爆者健康手帳の交付が行われているか、在外被爆者の健康維持のためどのような事業に取り組んでいるかといった基礎的知識を得ることができました。また、研修２日目以降は、実際に被爆医療に携わっている先生方から原爆に関する医療的研究についてお話しを聞くこともでき、被爆医療の実情に対する理解が深まりました。

さらに、私自身が陜川原爆被害者福祉会館に勤めていることもあり、研修３日目の恵の丘原爆ホーム見学は非常に興味深く、長崎にある他の療養ホームも訪問してみたいと感じました。

今回の研修全体を通して、原爆の被害によりどれほどたくさんの方々が苦しめられたのかを知り、二度とこの地球上に戦争の被害者が生まれないようにという思いです。

帰国後は、被爆者の方々が過去の痛みを少しでも忘れられるよう、より一層業務に従事したいと思います。

意義ある研修に参加させていただき、ありがとうございました。

馬山医療院　院務課長　崔　寅吉(チェ・インギル)



今回の研修は、原爆被害の深刻さと被爆医療の難しさを理解するうえで非常に有意義であったと思います。特に、原爆資料館や恵の丘原爆ホーム見学では、実際に原爆を経験された方から実体験を踏まえた説明を聞くことができ、原爆被害の深刻さを改めて感じました。また、お話ししてくださった被爆者の方が戦争・原爆の悲惨さを後世に伝えようという情熱を持っておられたことが非常に印象に残っています。

私にとってこの５日間は大変実り多いものでしたが、今回研修でお世話になった長崎大学病院、日赤長崎原爆病院以外にもいくつかの先進病院を見学することができれば、さらに充実した研修になるのではないかと思います。また、研修中一部日本語で提供される資料がありましたが、これについてもハングル語で訳していただければ非常に嬉しく思います。

最後に、研修生が少数だったにも関わらず、お時間をさいて歓迎の場を設けてくださったＮＡＳＨＩＭ会長様、大学病院、原爆病院の先生方、行政の皆様に感謝申し上げます。また、過密なスケジュールの中でも、常に笑顔で親切に対応してくださった職員と通訳の方にも深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

ブラジルからの研修生紹介

ナシムの構成機関である、長崎大学病院及び長崎原爆病院等で２月22日から約１ヶ月間研修を受けているブラジルからの研修生を紹介します。

この研修事業は、厚生労働省から長崎県に委託された在外被爆者支援事業の一環として行われているもので、海外の医師を招聘し、日本の原爆医療等に関する研修を実施しており、今年度も日伯友好病院とサンタクルス病院から医師を受け入れました。

最初の１週間は韓国からの研修生と同様、被爆の実相を学ぶ研修を受け、残りの３週間はそれぞれ専門の研修を受けました。



原爆資料館で平和案内人から説明を受ける研修生

研修後の感想



ブラジル　日伯友好病院
ルシア　ミチコ　ヨシタ(Lucia Mitiko Yoshita)医師　専門:放射線科

まず、この研修の機会を与えてくださったＮＡＳＨＩＭ、長崎県、長崎大学と原爆病院の先生方に感謝申し上げたいと思います。

この研修を通して、私の専門分野における最新コンセプトと新しい診断方法について学ぶことができました。何よりも、原爆の影響に関して分子レベルから被爆者の精神健康面まで、幅広い研究内容を学ばせていただいたことは大変意義深いと感じています。

また、ここ数週間、日本の文化や習慣、そして歴史についても少し分かるようになりました。特に、長崎の歴史について多く学ぶことができました。私は日本の孫娘であり、そのことに大変感謝しております。ブラジルに帰っても日本の文化を大事にしたいと思います。

私の専門分野においても、また個人的な面においても本当に役立つ研修になりました。より良い診断が出来るだろうという確信を持って、国に帰ります。本当に有難うございました。



長崎大学医学部・良順会館の見学



長崎大学病院・河野院長を表敬



ブラジル　サンタクルス病院
ルーベンス ヤスゾー イッコー ウエダ(Rubens Yassuzo Ykko Ueda)医師　専門:外科

第二次世界大戦時に投下された原爆に関する知識を広めるための取り組みに、私も一員として加えていただいたことをとても光栄に思っております。研修が始まった頃は、原爆に関して僅かな知識しか持っていませんでしたが、研修を通して多くのことを学ぶことができました。原爆によってもたらされた長崎市民、県民の苦悩の日々は、私の心にいつまでも残るでしょう。

永井隆先生をはじめ、苦難の中でも助け合いながら、長崎を再建していく人々の強さは大変印象深かったです。特に、長崎大学は放射線の影響に関して、世界的な技術と研究実績及び治療方法を開発してきました。こうした大学で分子生物学、遺伝子学的研究、病理学、核医学、放射線学、内視鏡による手術などを学ぶことができ、大変嬉しく思っております。このことに対する感謝の気持ちを一言で表すと「すごい！！」ということです。この研修の機会を与えてくださったＮＡＳＨＩＭと長崎県、長崎市また被爆者や医学的研究についてだけでなく、日本の歴史や文化、生活面も学ぶことができるよう配慮してくださった山下先生、大津留先生、熊谷先生、そのほか長崎大学の先生方や長崎原爆病院の先生方に感謝申し上げます。

この美しい町でこのような時間を過ごすことができ、非常に嬉しく思います。

そして、この研修から学んだ最も大切なことは、「戦争も核兵器ももうやめよう、平和な世界を作ろう」これが、私の国、ブラジルの人々に伝えたいメッセージです。



平成の鳴滝塾（小中学校への出前講座を募集）

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただいて講義を行う出前講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

島原市立第一中学校





長崎市立滑石小学校

番　号	タ　イ　ト　ル	
1	身近な放射線の話（自然放射線、放射線発見の歴史と応用）	
2	チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の原子力発電所事故被災者への医療協力
		ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎
		テレメディスンによる遠隔医療協力
3	カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	世界最大の核実験場セミパラチンスク（カザフスタン）と長崎
		カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎
4	世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について
		もし、被ばく事故が起こったら
		放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
5	長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
		長崎原爆被爆者のこころの調査
6	在南米・在韓国被爆者	海を渡った被爆者
7	世界保健機関WHO からみた長崎の国際被ばく者医療協力	
8	放射線・紫外線とわたしたちの健康	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第28号
発行／平成22年3月30日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.29
2010

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■ベラルーシ共和国から医科大生を招へい
■チェルノブイリ・カザフスタン関連諸国医師へヒバクシャ医療研修
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■東京シンポジウムについて



▲ 市民・県民との交流会に参加したベラルーシ共和国からの医科大生（左は司会の高村教授）

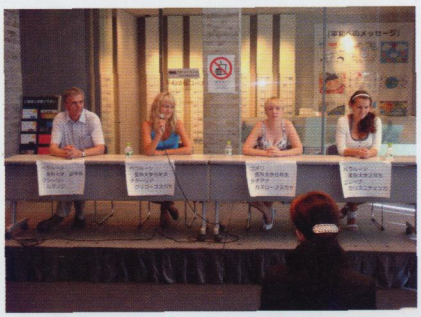
ベラルーシ共和国から医科大学生を招へい



（ナシム）蒔本会長を表敬

チェルノブイリ原発事故の影響によって甲状腺がんを発症し治療（手術）を受けた経験を持つベラルーシ共和国の医科大学生を長崎に招聘して、８月２日から８月12日までヒバクシャ医療研修を実施しました。NASHIMでは2006年にチェルノブイリ事故20周年記念事業の一環として同様の境遇を持つ医科大学生に対して受入研修を実施しましたが、彼らのように被ばくによる健康障害を持ちながら医師を目指して頑張っている若者に、今後のヒバクシャ医療を担ってほしいという期待を持って、２年前に続き今年度も研修を実施しました。

来崎した４名（医科大生３名、随行１名）は、長崎大学の原爆後障害医療研究施設や長崎大学病院で専門知識を習得したり、日赤長崎原爆病院や恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を行い、また、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館が行う被爆者健康講話へも参加して受講者へ自らの経験を語るとともに、被爆者と意見交換を行いました。８月９日には平和祈念式典へ参列し、長崎原爆被爆者のご冥福をお祈りしました。真夏の暑い盛りでしたが異国の地でヒバクシャ医療や原爆被爆の実相について学ぶ機会を得、普段できない多くの経験をして強い印象とともに帰国したことと思います。



被爆者健康講話で話す医科大生



Natallia Kulikouskaya （ナターリャ・クリコーフスカヤ）
国立ベラルーシ医科大学　予防医学部5年生

「日出ずる国」日本に滞在した10日間は毎日がとても濃密なものでした。甲状腺がん全般、長崎の原爆後遺症やチェルノブイリ事故の影響、被ばくの影響、甲状腺がんや白血病の最新の診断法や治療法などのテーマで充実したレクチャーを受け、原爆資料館や医療ケアの充実した原爆養護ホームも見学させていただきました。

また住民健診の現場も訪問しました。そこでは身体計測（メタボリック症候群の検査）、血液検査、胸部レントゲン、造影剤による胃腸透視、骨そしょう症の検査、咀嚼力検査、動脈硬化や甲状腺のエコー検診などが行われていました。私自身は、甲状腺エコー検診のお手伝いをさせていただきました。このような健診が行われることによって悪性腫瘍を含む様々な疾病の早期発見が可能となっていることを実感しました。日本人はこういった健診を自発的に受け、自身の健康を管理していることを目の当たりにしました。

内分泌系の患者さんの外来や外科手術を見学する機会もあり、自分にとって多くの発見がありました。今後の勉学、さらには医療従事者としてのキャリアにおいて、この滞在で得たことを生かしていくつもりです。



平和祈念式典に参列

Alena Kalisnichenka （エレーナ・コリスニチェンコ）
国立ベラルーシ医学大学　予防医学部2年生



日本は、高度に発達した技術力と建築のミニマリズムと生活のすべての面で秩序が守られている国です。私は、この素晴らしい国を訪れる機会に恵まれたことをとても幸せに感じています。この国のすべてが好きになりました。会う人ごとに微笑んでくれる人たち、清潔で秩序の整っている通りや建物、美しい自然環境、高いレベルの医療サービス…。

日本のドクターは患者さんが不快を感じないように、治療が心地よく適切なものであるように最善を尽くしています。素晴らしいことだと思います。私は帰国後、高度な技術を持つ日本の医療サービスがどのように行われていたかについて、多くの人に語ることによって、少しでも自国の医療の質を向上させたいと思います。

病院の訪問も私にとっては非常に興味深いことでした。健診にも参加する機会があり、お手伝いをさせていただきました。市民ひとりひとりが定期的に健康診断を受けることは、国民生活の健康水準向上のために非常に大切だと思います。病気が早期に発見され、早い段階で治療を開始することができるからです。また、私たち自身の検査をしていただいたことにも感謝します。ベラルーシよりもかなり高い測定精度をもつ医療機器で検査していただいたことにより、私たちの健康に問題がないことに100%自信をもつことができました。



片峰長崎大学長を表敬

Tatsiana Kazlouskaya（タチアナ・カズローフスカヤ）
ゴメリ医科大学　４年生



日本は、私たちの国とは様々な点で異なります。すべてのことに感動しました。美しい自然、とてもやさしい人々、美味しい料理…。高レベルの医療は特筆すべき驚きでした。日本に行く前にも、平均寿命が高く新生児死亡率が低いなど、日本は多くの点で医療レベルの高さを裏付ける健康水準を誇っていることは知っていました。しかし、私が長崎で見たことは、自分が本で知っていたことを上回っていました。日本の見事な医療システム、医師だけでなく看護師のみなさんも高い知識と豊かな経験・技術をもっていることなどを目の当たりにしました。医療従事者が一人一人の患者に対して、とてもあたたかい心配りをもって接していることにも感動しました。

日本での滞在期間中に、今後の勉強、そして医師のキャリアにおいて有益になるであろう多くのことを新たに学ぶことができました。手術見学も大変印象に残りました。内視鏡を利用した胃切除手術は、ベラルーシではまだ教科書にさえ記載がありません。



被爆者の話を聞く医科大生

原爆資料館も見学しました。戦争がどのような悲惨な結果をもたらすか、世界各国が兵器の開発を進めることがどんなに恐ろしい過ちを引き起こす可能性があるか、について世界の人々が忘れないようにする役割をもつ資料館の存在はとても大切なものだと思いました。また、あえて自身の辛い体験について語る被爆者の勇気に私は感嘆せずにはいられませんし、被爆者に対する行き届いたサポートを忘れない日本国民にも敬意を表します。

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へヒバクシャ医療研修



(ナシム)蒔本会長を表敬

チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して指導や医療情報提供を行うため、今年度も６名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月21日から約40日間に亘り長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学びヒバクシャ医療分野で共同研究を行う関係者との交流を深めました。

また、長崎原爆資料館を見学し平和祈念式典へ参列するなど長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院や放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護やケアについて理解を深めました。



Uliana Rumyantseva（ウリヤーナ・ルミャンツェヴァ）
ロシア共和国　オブニンスク放射線医学研究所
放射線科上級研究者　内分泌学

この研修で私は、長崎大学の各先生方による興味深く内容豊かな講義と大学の実験室・大学病院の臨床施設における実習により、これまで十分ではなかった知識を補うことができた。内分泌、癌、臨床遺伝学を専門とする私にとって最も重要だったのは、甲状腺癌、放射線による癌、発癌機構における分子遺伝学的側面に関する諸講義であった。

長崎の被爆者とチェルノブィリ原発のヒバクシャは、異なる線源（プルトニウムとヨード）と作用（外部被ばくと内部被ばく）による被ばくではあるが、これらの被ばく者の回復や、分子生物学的に見た被ばく後障害に関する関係諸国の経験の交換は、学術・実務において、大きな意味合いを持っている。ここで得られた知識は、癌、放射線、遺伝学、内科の専門家である我々にとって、間違いなく有益なものである。我々の重要な職責は、チェルノブイリの事故によるヒバクシャの様々な疾病を治療することであり、そのため日本の被爆者に対する医療サービスのシステムや、先進的なハイテク治療・診断の手法、また最新の分子生物学の業績について知ることは、実務的にも研究的にも興味深かった。特に、特筆すべきは原爆の爆風、熱線、放射線による様々な影響を受けた人々の治療と回復のプロセス作りが進んでいることである。



(長崎大学)松山医学部長を表敬

研修の合間には、限られた時間の中で日本の文化や伝統をできるかぎり知ろうと努め、いくつかの神社仏閣、浦上天主堂、グラバー園、出島などの名所旧跡を見て回った。また稲佐山の展望台や17世紀に造られた古い橋の辺りを散策し、特にめがね橋に感銘を受けた。また日本の歴史と文化に関する講義も興味深かった。日本は比類のない、独特な国だ。長崎は、親切で笑顔にあふれた、素晴らしい人々の住む美しい街だ。この印象は終生胸に残るだろう。



ウクライナ共和国　Kostiantyn Bazyka（コスタンチン・バジィカ）
ウクライナ医学アカデミー放射線医学研究所
若手研究者　循環器科

長崎滞在期間中、我々は長崎県医師会、日本赤十字社長崎原爆病院、恵の丘原爆ホーム、長崎市原爆被爆者健康管理センター、放射線影響研究所などを訪れ、放射線からの保護、放射線による疾病の診断・治療・予防などに関し、日本の専門家たちの経験を教えて頂いた。また、日本の保健制度についても知ることができ、さらに被爆者たちと交流を持つこともできた。

長崎大学では、以下のようなテーマの講義を受けた。日本の歴史と文化、原爆の後障害、放射線の人体への影響全般、様々な組織や制度、特に日本と世界の放射線安全問題について、医療データの統計的処理、その他多くの講義である。実習は、大学病院の各科で行われた。この期間に各科の業務について知り、カンファレンスや原爆被爆者の治療の特異性についての検討会、教授の回診、外来診察、新しい診断方法の実施などに参加した。

日本に関する全般的な印象は、非常に良かった。日本は古く豊かな歴史を持ち、高いレベルの文化と技術的発展を遂げた国だ。来日前は考え方の違いから日本人とコミュニケーションをとったり一緒に作業したりするのは非常に難しいだろうと思っていたが、2、3日もすると日本の人々は親切で、丁寧で、勤勉で、常に他人を助けようとしている人々だとわかり、話をするのはとても楽しかった。

2010年8月9日に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した。ウクライナ医学アカデミー付属放射線医学研究所で、放射線医学およびチェルノブィリ原発事故の被爆患者の病気の診断と治療に携わるスタッフとして、また放射線および放射線医学科のスタッフとして、原爆被爆者の問題は非常によく理解できた。



（原爆病院）朝長院長を表敬



ベラルーシ共和国　Volha Biahun（オリガ・ビャグン）
ベラルーシ卒後医学教育アカデミー
社会人大学院生　眼科

この研修期間中、新しい研究、癌の診断、統計、放射線管理、日本の歴史と文化などに関する講義を受け,医療機関（原爆病院、大学病院、放射線影響研究所）を訪問し、最新の機器を用いた診断や治療の実務を見学した。

また、原爆ホーム訪問時には、1945年8月9日の恐ろしい日を体験された年配の方々への対応や、これらの人々に対する社会的援護に感銘を受けた。大学病院の眼科での実習も、同様に知識を増やしてくれるものだった。ここで私は加齢による網膜の病変の新たな治療（医薬品や手術を用いての）を知ることができ、外来・入院治療もみることができた。病院には最新の医療機器が豊富に備え付けられていることに感心した。また、放射線影響研究所での眼科の外来も見学した。これらの診察記録の完全性と、患者観察の長期性、統計のための情報レベルの高さは特筆に値する。

原爆資料館や爆心地の訪問、8月9日の平和祈念式典、被爆者の証言により、国家間の和平と友好の大切さと、放射線による病気の治療のための研究の重要性を感じた。

研修の合間に、私たちはグラバー園、神社仏閣、出島など、長崎の歴史に触れることができる場所を訪れた。また寿司や刺身、ちゃんぽん、天ぷら、日本茶などの日本食を試した。伊王島では自然、太陽、海を満喫した。

ベラルーシ共和国で放射線の影響に苦しむ人々の診察や治療に役立つ新たな知識を得る機会を与えてくれた関係者の皆様に感謝の意を表したい。



（長崎大学病院）河野院長を表敬



ベラルーシ共和国　Valery Sitnikov（ワレーリー･シトニコフ）
ゴメリ医科大学　副学長　耳鼻科

研修計画、出迎え、ホテル手配、長崎県・市の公的機関の代表者への表敬訪問は、最高のレベルで行われた。研修の基本的な部分を占める講義は、長崎大学の優れた研究者、教授陣により、現代の世界的研究レベルで、視覚的に効果のある教材を使って行われた。講師たちはすべての質問に対し、余すところなく答えてくれた。特に興味深かったのは、医療遺伝学、放射線生物学と放射線による疾病の予防、被爆者に対する精神的ケア、幹細胞移植、日本の歴史と文化などに関する講義である。

原爆資料館や原爆ホームの訪問、また被爆65周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列したことは、強く印象に残った。この日本国民の悲劇を例とし、人類が生き残るための平和の大切さ、またこのような悲劇が二度と繰り返されないためにあらゆる手段をとらなければならないということが感じられた。

大学病院の治療・検査施設を見学したが、病院は最新の機器やコンピュータなどの設備を備えており、検査、内科・外科的治療が世界的に高いレベルで行われ、大学病院の医師たちの職業レベルも非常に高かった。

我々が研修で得た知識は、我々が今後研究や実務を行う上で活用されるであろう。

NASHIMおよび長崎大学のスタッフには、知識を習得させてくれたことに対し、心より深く感謝している。日本とベラルーシの研究者が、今後医学の分野で実り多き研究および実務的協力関係を築けることを信じており、また切望している。



（長崎大学）片峰学長を表敬



カザフスタン　Aiymkul Ashimkhanova（アイムクリ･エシムハーノワ）
国立カザフスタン医科大学　大学院生　消化器科

今日の長崎は、世界に平和を訴える歴史的な街である。私は、原爆被爆者に対する社会福祉のシステムに感動した。原爆資料館では亡くなられた方々のお名前と遺影、悲劇の瞬間に止まったままの時計があった。最も印象的だったのは、命の最後の瞬間まで平和と長崎の人々の幸せを祈り続けた、永井博士の写真である。世界中から人々が集まり、涙した平和祈念式典では、私が子供時代に聞いた、あの鶴と少女の歌が歌われた。

赤十字、原爆被爆者健康管理センター、放射線影響研究所、長崎大学病院、原爆ホームなどを一つに結び付けているNASHIMは、あらゆる福利事業の中で、最も人道的な事業に関係のある活動を行っている。ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、カザフスタンといった国々と日本は、放射線による被害という同じような悲劇的な運命で結び付けられており、NASHIMのおかげで私たちは自分たちの国の人々にどのように対応し、放射線による重い後遺症とどのように戦わなければならないかを知ることができ、また研修で得た知識を我が国のすべての国民の援護に役立てたいと考えている。

日本は、私にとっていつでもハイテクの国であったが、それと同時に、発展しながらも自らの伝統と文化を保ち続けている驚くべき国である。研修期間中このことはいつでも、どこでも感じられた。往来を散策しているとき、公共交通機関に乗っているとき、丁寧で笑みをたたえた人々、素晴らしい文化財、伝統的な食事、祭り、筆舌に尽くしがたい自然、海。私は、子供時代に読んだ歴史的な街にいつか行くことがあろうとは、夢想だにしてなかった。

私たちは、放射線や最新の癌の臨床疫学、世界の先端的な病院で取り入れられている治療法、長崎大学の研究者や医師たちによる分子遺伝分野での新しい



長崎大学病院での講義

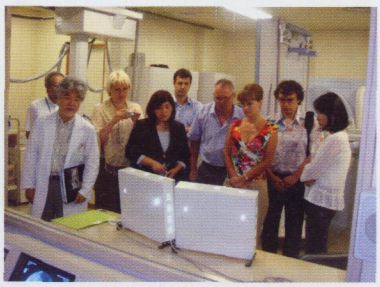
業績などに関する様々な講義を聴いた。病棟では最新の機器が備え付けられ、熟練の専門家たちが配され、知識と経験を受け継ぎ、患者を救おうとしている多くの後進たちがいて、世界水準の診断と治療が行われていた。私たちを温かく迎え入れてくれ、自らの知識を分け与えてくれた先生方をはじめとするスタッフの皆様方にお礼を申し上げたい。カザフスタンの国民を代表して、深く御礼申し上げます。



カザフスタン　Marat Syzdykbayev（マラット・スィズディクバーエフ）
セミパラチンスク医科大学　医師　小児気管支鏡検査

長崎での研修は多くの新しい情報が盛り込まれ、知識を増加させる講義を聴講した。核爆発が人体や環境に与える影響、遺伝学、分子生物学、放射線医学、放射線によって引き起こされる腫瘍および様々な疾病、またその影響についてなど、様々な講義と研究についてである。また、同様に知識を増やし、興味を与えてくれる日本の文化と歴史に関する講義も聞いたが、日本人がアルタイ民族の出自を持ち、日本語がチュルク・アルタイ語族に属するという話が印象に残った。

研修は、病院にて専門ごとにも行われた。日本は最良のシステムを持つ国、少なくとも世界で最も優れた保健システムを持つ国のうちの一つである。日本の中ではさほど大きくない市でありながら、これほど独自性を持つ移植や器官埋め込み、その他さまざまな手術が行われているのである。麻酔や集中治療、気管支鏡も最も高いレベルで行われ、多くの新しく有益な知識を増やすことができた。麻酔のために素晴らしい薬剤が使われ、ありとあらゆるハイテク機器が備え付けられていた。非常にホスピタリティーがあり、丁寧で好意的で勤勉で忍耐強い日本人は、信じられないほど完全志向が高い。非常によく働き、チームワークがあり、エゴイズムを生むライバル意識は見当たらなかった。見るもの聴くものただ喜びと感動のみだった。素晴らしい国、素晴らしい人々！すべてが素晴らしく、丁重に迎え入れられ、心配りを受け、細部にいたるまで配慮が行き届いていた。本当にいつかまた、この日出ずる魔法の国を再訪したいものだ。私の個人的な望みは、この国で個展を開くために来訪し、日本とカザフスタンの文化的交流と相互発展に寄与することである。また、可能であるなら、麻酔科医、気管支鏡専門家としての専門訓練（気管支鏡手術、レーザー治療）を受けたい。



長崎市健康管理センター



藤井副知事を表敬



智多副市長を表敬

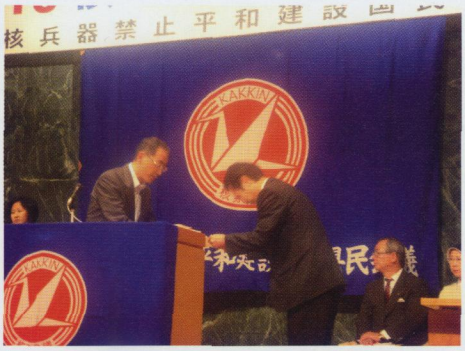


放射線影響研究所での講義



歓迎レセプション

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附



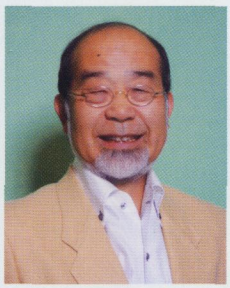
今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金としてNASHIMに寄附していただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のための積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施し、多くの医療施設等へ検診者、車椅子、ベッド、医療機器等を贈呈しています。NASHIMへも毎年活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は医学教科書の出版等に役立っています。

贈呈式は８月７日に長崎原爆資料館で執り行われ、NASHIMからは久村事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の９団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。NASHIMとしましては世界のヒバクシャ支援のため、この活動助成金を有効に活用したいと考えております。

東京シンポジウムについて

日時：平成22年12月18日（土）午後２時～午後４時30分
場所：東京都千代田区丸の内２－５－２　三菱ビル　10階


鎌田 寛 先生


山下 俊一 教授

NASHIMでは、これまでに長崎が培った放射線に関する知識と最新の放射線医療を世界のヒバクシャ救済に役立てるため、様々な活動を行ってきました。こうしたNASHIM の活動を多くの方々に知っていただくとともに、世界平和への貢献を期し、**「核に汚染された大地を歩いて－チェルノブイリ・カザフスタンが語り続けるもの－」**をテーマに東京でシンポジウムを開催します。

講演者は、鎌田實先生（日本チェルノブイリ連帯基金　理事長）と山下俊一教授（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　科長）です。

会場の都合上、先着150名までとさせていただき、後日整理券を送付いたします。

お申し込みは、ナシムのホームページ（http://www.nashim.org/jp）、又はナシム事務局（電話 095-895-2475 長崎県原爆被爆者援護課内）にお願いいたします。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第29号
発行／平成22年10月20日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.30
2011

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

■大盛会!!ナシム初の東京シンポジウム
■韓国医師等へ受入研修を実施
■出前講座「放射線をサイエンスする」
■第9回永井隆平和記念・長崎賞候補者の募集
■小中学校等で行う出前講座の開催案内



▲セミパラチンスク核実験場について説明を行う山下俊一教授（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長）

チェルノブイリ　カザフスタン　セミパラチンスク　日本

大盛会!!
ナシム初の東京シンポジウム

テーマ

核に汚染された大地を歩いて

ーチェルノブイリ・カザフスタンが語り続けるものー

日　　時：平成22年12月18日(土) 14:00～16:30

場　　所：東京都千代田区丸の内2-5-2　三菱ビル10階

参加者数：180名

講　　師：山下俊一（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長）
：鎌田　實（日本チェルノブイリ連帯基金理事長）

司　　会：高村　昇（長崎大学教授）

主　　催：長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

共　　済：長崎大学グローバルＣＯＥプログラム「放射線リスク制御国際戦略拠点」
長崎大学国際連携研究戦略本部

開会あいさつ



ナシム会長　蒔本　恭
(長崎県医師会長)

本日は、ナシム東京シンポジウム「核に汚染された大地を歩いて」を開催いたしましたところ、お忙しい中、このように多くの皆さまにご出席いただき、心からお礼申し上げます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会略してナシムと称しておりますが、ナシムは、1992年、長崎県・長崎市及び長崎大学医学部をはじめ県内の放射線医療にかかわる医療機関等により設立され、以来、至上最悪の原発事故により被災したチェルノブイリの子供たち、また長期にわたる核実験のため被災したカザフスタンの人々を救済するために、被災地の医師の受け入れや長崎からの医師の派遣など、原爆被爆者医療で培われた最先端の医療を提供し続けています。

ナシムは、同じ苦しみを受けた世界のヒバクシャに対し被爆地長崎だからこそできる支援を続けていくことが、ひいては核兵器廃絶と世界平和に大きく貢献することになると考えています。

今回、ナシムの活動の実績とその意義を多くの方々に知っていただくとともに、被爆地長崎が切実に願う核兵器廃絶と世界平和への思いをお伝えしたく、命を大切にするシンポジウムを開催することとなりました。

講師には、医師として地域医療に多大の貢献をされるとともに長年にわたってチェルノブイリ救援活動を行ってこられた、鎌田實（かまたみのる）先生をお招きしております。鎌田先生が理事長をされている日本チェルノブイリ連帯基金は、ナシムが被爆50周年に設定した「永井隆平和記念・長崎賞」の第５回受賞団体であります。後方にパネル展示もしておりますが、ここに皆さまにご紹介させていただきたいと思います。

鎌田先生には大変ご多忙の中、快く講師を引き受けてくださり、この場をお借りしまして深く感謝申し上げます。

またもうお一人、チェルノブイリ医療協力20年、カザフスタンのセミパラチンスク地域医療支援１５年と世界に向けて長崎から医療支援を続けてこられ、またナシム活動のリーダーでもある山下俊一教授から、ナシムの活動について皆さまにご紹介させていただきたいと思っております。

皆さまには、今日のシンポジウムを機会に日本チェルノブイリ連帯基金とナシムが日本から世界に向けて発信している世界平和へのメッセージに対し、力強いご支援をいただければ幸いでございます。

終わりに、ご出席の皆様のご健勝とご多幸を心から祈念いたしまして、ご挨拶といたします。

講演 1

「長崎からの国際ヒバクシャ医療協力」



講師
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
科長　山下俊一

1 チェルノブイリ原発事故

事故直後の除染作業者及び強制退去者における平均被ばく線量、セシウム137の放射能汚染土壌地図を説明しながら、現地での医療活動を紹介



図1



図2

旧ソ連邦崩壊に伴う医学教育の混乱に対するナシムからの支援

現地のベラルーシ医科大学やゴメリ医科大学にロシア語に翻訳した医学書を提供、また診断治療基準づくりや、ヒバクシャに生涯続く健康リスク管理を教育指導するとともに、長崎大学が行っている遠隔医療、顕微鏡下での診断支援などを紹介



図3

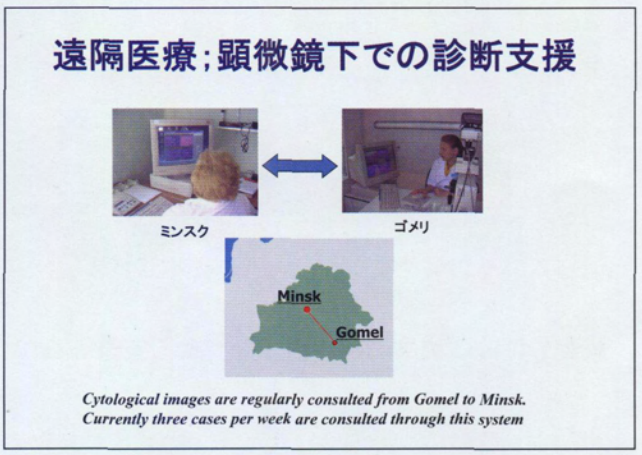


図4

2 セミパラチンスク核実験場

セミパラチンスクでは500回近い地上、大気圏、地下核実験が繰り返された。

この核実験により被ばくした周辺住民を救済するため、ＪＩＣＡ地域医療改善プロジェクトとも連携をとりながらこれまでナシムが行ってきたカザフスタンのセミパラチンスク地域医療支援について紹介



図5



図6

長崎大学は、後継者の育成を支援するため、セミパラチンスク医科大学の正式優秀な学生に対し、「長崎国際医学賞」を授与している。

この賞の受賞者をはじめとする若い世代は、両大学さらには両国の架け橋になることが期待されている。



図7

アルマ・アタ宣言について紹介

1978年９月、旧ソ連のカザフ共和国首都アルマ・アタに、世界140カ国以上の代表がＷＨＯとユニセフの呼びかけで集まり、国際会議が開催された。

この会議で「西暦2000年までにすべての人に健康を」という目標を定め、その為の世界戦略として、プライマリー・ヘルス・ケア（ＰＨＣ）と言う理念を打ち出した。

その10箇条の最後の条項に；

現在かなりの部分が軍備と軍事紛争に使われている世界の資源を、十分にかつより良く利用すれば、世界中のすべての人々の健康水準は西暦2000年までに十分達成可能となろう。独立、平和、緊張緩和、軍縮への真の政策は、平和的目的、とくに社会経済開発の促進のために適切に活用されるさらなる資源を生み出すことができるであろうし、また、そうすべきである。その中で、ＰＨＣは、必要不可欠な要素として、資源が適切に割り当てられるべきである。

放射線被ばく医療ネットワークの構築

今後は原子力潜水艦、放射性廃棄物処理などの核解体作業が問題となってくる。

先端医療機関の国境を越えた連携や医学の人材育成がますます重要となってくる。



図8



図9

3 ナシムが今まで行ってきた事業の紹介

①海外人材育成のとりくみ

・チェルノブイリ・セミパラチンスクなどの世界の放射線汚染地域でヒバクシャ医療に従事する人材を育成するための事業（研修生の受け入れ、専門医師の派遣、医学教科書の出版）

②国内後継者育成の推進

・ヒバクシャ医療を通じての国際貢献と平和希求の精神を継承する後継者を育成するための事業を実施（講演会の開催、事業紹介パネル展の開催、啓蒙図書の作成、永井隆平和記念・長崎賞の授与）

③ヒバクシャ医療情報の受発信

・国際ヒバクシャ医療情報の収集・発信と緊急被ばく医療に対応できるようなホームページの充実



図10

まとめ

国際医療協力活動は平和活動そのものである



図11



図12

講演2

「生きているってすばらしい」
－チェルノブイリ救援活動20年の報告－



講師
日本チェルノブイリ連帯基金
理事長　鎌田　實

鎌田先生がこれまでチェルノブイリで行ってこられた救援活動の数々を美しい映像と音楽を交えながら、丁寧に報告していただきました。

・パレスチナの旅で、心臓移植を受けた少女とその少女に心臓を提供したイスラエルの少年の父親に出会った。少女は、自分も命を助ける医師になりたいと夢を語り、少年の父親は子供の臓器が今も生きていることはうれしいが、うれしさは半分、まだ完全な平和は訪れていないと語ったこと。

・難民キャンプで予防接種を受けているスライド

・両親を殺された少年が寂しく食事をしているスライド

・眼のがんにかかった少女、この子は病気になって入院したときに初めて、院内学級で勉強することができ、すばらしい絵を残して亡くなった。その絵はチェルノブイリ連帯基金が募金活動の一環として行っているバレンタインチョコの缶を飾る絵に選ばれた。このことを知ったとき、この子は「自分はもう助からないけど、私の絵で誰かが助かるから嬉しい」という言葉を残した。

・20年前、ゴメリ州立病院で、白血病のお母さんから「うちの子供を日本に連れて行って助けて」と頼まれたことがある。その時、タチヤーナ先生は「ひとりの子供を助けても問題は解決しない。私たちベラルーシの医師を教育してほしい。私たちに薬を支援してほしい。私たち医師が自分の国の子供を助けることができるようになることが大事」と言った。

・タチヤーナ医師は自らもがんと闘いながら、最後まで子供たちの治療に全力で取りんだ。

・その国の大人がその国の子供達を救うのが原則、そのためにどのような支援ができるのかが大事。

・永井隆先生もすばらしい医師だったと思うが、ベラルーシにも永井先生のような自己を犠牲にしても住民のために医療活動を行う医師がいる。

・9．11テロ以後、憎しみの連鎖があるように感じるが、今世界で必要なのは温かさの連鎖だ。

・平和・自由を考える人はどこにでもいる。軍隊強化ではなく、心と心を繋げそこら中に温かい種を播くことが必要だ。

質疑応答及びご意見

Q 原子力発電所の事故が起こった場合、どのようなことに気を付けたら良いか？

A 原子力発電所の事故はヒューマンエラーで起こる可能性が高い。これを防止するためには、①高度な教育、しっかりとした科学の心を持つこと、②情報をオープンにすること、が大切。世界中で唯一原爆を落とされた広島・長崎がするべきことは基準をつくることである。

Q これからの鎌田先生の方向性は？

A 今までも行き当たりばったりで、系統だってはいなかった。チェルノブイリ支援も理路整然とあったわけではなく、誰もやらないなら自分が支援をやってもよいのではないか思い活動をはじめ、そうすることでチェルノブイリ原発事故を風化させないことができるのではないかと思う。

Q 山下先生の話を小中学生にもしたらどうか？

A 現在ナシムでは、小中学校への出前講座を行い、放射線への理解を深めてもらっている。

Q セミパラチンスクではどのようなことをしているのか？

A セミパラチンスクでは疫学調査を行っている。２万人のサンプリングを行い、ガンの発生が通常の1.7倍という結果が出ている。

まだまだ質問のための挙手は多数ありましたが、時間の都合により途中で打ち切らせていただきましたことをお詫び申し上げますとともに、最後までのご静聴ほんとうにありがとうございました。

閉会あいさつ



長崎大学 副学長
大井久美子

本日は、年末のお忙しいところ、ナシム東京シンポジウム「核に汚染された大地を歩いて」にご参加いただきまして、ありがとうございました。

山下先生のチェルノブイリ・カザフスタンでの医療活動について、現地で活動を行ってきた山下先生ならではのお話しを聞くことができましたが、これらは過去のことではなく、現在も放射線で苦しんでおられ、治療を必要とする方々がたくさんいらっしゃることを改めて認識いたしました。これからも長崎大学をはじめ、ナシムの構成機関と共にチェルノブイリ・カザフスタンへの支援を継続したいと考えております。

また、鎌田先生のお話では、自分の子供の心臓を提供した父親と心臓移植を受けた少女との話しがとても印象的でした。

「戦争」という悲しい行動をおこす人間が、その一方で敵味方であるにもかかわらず、生きるために心臓移植を行う。憎しみばかりではなく、人への温かさが伝わるお話しでした。

鎌田先生が理事長を務められておられるチェルノブイリ連帯基金の活動に負けないように、これからナシムも世界に広がる活動を行いたいと考えておりますので、皆様のご支援・ご協力をいただきますよう、お願いいたします。

アンケートの感想

○イスラエルの心臓移植を受けた少女の話。心臓移植を決断したパレスチナの父親の勇気ある行為に感動した。

○日本でも世界でも困っている人がたくさんいるが、私には何ができるだろうと改めて考えた。できることを1つ1つやるだけかなと思ったが、まずは動かなければならないと感じた。

○気持ちを込めた具体的な活動を通して他者を良くしていく山下先生や鎌田先生の想いはすばらしいと思います。

○負（憎しみ、戦争、報復）の連鎖ではなく、正（優しさ、温かさ）の連鎖の話しが聞けて良かった。

○日本にできる貢献ということについて考えさせられた。

○山下先生の話は知識（理論的学術的な放射線の人体への影響）としてためになる講演で、鎌田先生の話は心を大切にする（気持ちに訴える）内容で何度も涙が出そうになりました。

○放射能についての正しい知識の普及は難しい。

○地道ながら創造的な活動に感動しました。「愛」にあふれていることが人を繋げていくこと、それが平和に繋がることを学びました。

○ナシムや日本チェルノブイリ連帯基金の活動が世界に広がる活動になってほしい。

○小さな力の積み重ねと継続が大切だと改めて感じました。

○長崎が最後の被爆地になるよう、核兵器廃絶に向けた長崎の活動、取り組みに期待しています。

○ナシムと鎌田先生の現場主義の活動がいかに重要か理解できた。

○過去のことになったと思っていたチェルノブイリ原発事故やセミパラチンスク核実験場などで長い時間をかけて活動していることを知って、平和（世界状況）に関心を持つ使命あることを強く感じた。

○今後の自分の生き方を考える良い機会になった。

○援助の方法、支援の方法についてとても考えさせられました。

○世界の核汚染の実情について大変良く理解できた。また今後の汚染の危険性と問題点を知ることもできた。

○人は他人と共生するものである（人と人との絆）ということに改めて気づいた。

○ナシムの成り立ちを今回の講演会を通して初めて知りました。長崎と東京の距離を感じましたが、チェルノブイリ、セミパラチンスク、イラク、ネバダと繋がることで理解を深める機会になりました。

○温かい心の支援を心がければ世界は良くなると確信しました。

○物を送るのではなく、現地の人たちが自分の手で人を助けられるようにするという支援の方法が素晴らしいと思った。

多数のご意見ありがとうございました。



①丸ノ内風景



②会　　場



③受　　付



④開会挨拶・蒔本会長



⑤山下教授講演



⑥会場風景１



⑦会場風景２



⑧司会・高村教授



⑨会場風景３



⑩会場風景４



⑪鎌田理事長講演



⑫鎌田理事長講演



⑬会場風景５



⑭質疑応答



⑮質疑応答



⑯質疑応答



⑰質疑応答



⑱質疑応答



⑲閉会挨拶・大井副学長

受入研修事業
（11月）

韓国医師等へ受入研修を実施



ナシム蒔本会長を表敬

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる５名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は11月14日に来崎し、事務職２名は11月18日まで、医療職３名は11月20日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

研修後の感想

ソウル赤十字病院　内科医　丁　恩晧（チョン　ウンホ）



去年、ソウル赤十字病院で大津留先生（長崎大学病院）の講義を聴きました。また、時折、病院で原爆被爆者に会ったりしていたので、原爆の被害や被爆者の治療について浅いながら、ある程度の知識は持っているつもりでした。しかし、今回長崎での研修を通じて私の浅い知識をはるかに超えるたくさんのことを得ることができました。そして、原爆被爆者の治療・研究のために一生懸命に働いていらっしゃる方々の姿を見ながら、いろんなことを感じ、勉強になりました。これから歩んでいく医者としての人生の中で、かなり大きな影響力を与えてくれるだろうと思う今回の研修を準備してくださった方々に、心より感謝申し上げます。

短いといえば短く、長いといえば長かった一週間でしたが、長崎の美しさを感じるには十分な時間だったと思います。こんなに美しい港町に、あんなに苦しい原爆の痛みがあったというのは、実に皮肉的だと思います。将来、機会があったら子どもたちと一緒に来たいと思う長崎です。ありがとうございました。



居昌赤十字病院　内科医　李　宗錫（イ　ジョンソク）

研修期間の間、いつも親切にしてくださり、ありがとうございました。直接被爆者の診療を行っているのではありませんが、健康診断など間接的に診療をしていますので、非常に役に立つと思います。

長崎で行っている継続的な研究が今後、起きるかもしれない放射線関連事故及び医療にとても役立つと思います。

もう、高齢になった被爆者の方々（日本、韓国など）に対してより細かな心づかいや思いやりが必要だと思います。苦しみの中にいらっしゃる被爆者のために、医療関係者、行政職員など、みんながもっと頑張るべきだと思います。

東義医療院　内科医　李　峻浩(イ　ジュンホ)



全般的に新しい経験ができてとてもよかったです。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の見学などは漠然としていた被爆者の被害状況を直接に感じたことで、関連業務の大切さについて考えることができました。

最後の日、熊谷先生（長崎大学病院）の講義はとても現実的な問題を扱っていたので印象に残ります。特に「グループワーク」で提示してくださった実際と類似したケースは今後の臨床診療に大変役に立つだろうと思います。中島先生（長崎大学医学部）の講義も私の専攻と関係がある分野の話で興味深かったです。

特にセミナー室にある巨大なモニターから見る病理組織の所見の鮮明さは忘れられないと思います。



大韓赤十字社特殊福祉事業所　総務担当　呉　明恵(オ　ミョンヘ)

今まで原爆関連の仕事をしてきて、習得していたのは仕事に関連した内容だけの生齧りの知識でしたが、ここに来てたくさんのことを学ぶことができました。

長崎大学病院、原爆病院、医師会、健康管理センター、恵の丘原爆ホームを次々と訪れ、被爆者に対する政府(日本)の支援状況や研究、そしてこれからの生活についてまではっきり分かり、心から深く感じ、考えることができました。

いろいろたくさんのことを学んだ研修でした。戦争のむごたらしさや原爆のこと、特に現在、大韓赤十字社でしている原爆支援についてより真剣に考える機会になりました。いい研修を通じてたくさんのことを感じさせていただきました。真にありがとうございます。

大韓赤十字社特殊福祉事業所　支援担当　崔　小娘(チェ　ソナン)



研修が始まる前、長崎に落ちた原子爆弾、その一発の意味をはっきり理解していませんでした。今回の研修で、すべての被爆者のことを思いながら、何十年が経った今も被爆者の体や心のために頑張っていらっしゃる方々に感謝の言葉を伝えたいです。

原爆死没者追悼祈念館の原爆死没者の名前が登載されている名簿保管所の前で、黙祷しながら心から哀悼の意を捧げました。私たちは今それぞれ違う人生を歩んでいますけど、一瞬に廃墟になった都市で、原爆死没者から学び、感じています。

どうか核兵器のない永遠に平和な世界になりますように…。

４泊５日の研修ですべてを理解したとは思いません。

原爆投下の中心地である長崎市を訪問する足取りが軽やかではなかったですが、私にとってはとても有意義な、忘れられない研修でした。

これからもより多くの人がこの研修を通じて、恵の丘でお会いした被爆者の方がおっしゃったように、改めて言いますと、世界平和のため二度とこんなむごたらしいことがないことを祈りながら、関心と愛情を持って原爆被爆者の気持ちを理解したいと思います。



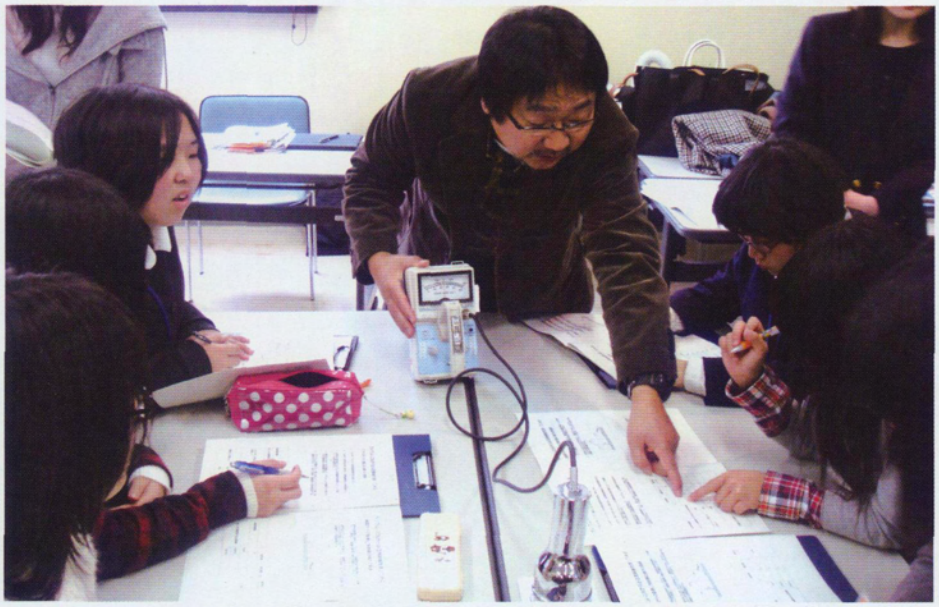
長崎大学病院河野院長を表敬



恵の丘原爆ホームを訪問

出前講座

放射線をサイエンスする
－正しく知ろう放射線－



青少年ピースボランティアに説明する松田教授

*NASHIM*では、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、「平成の鳴滝塾～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方に小中学校等へ出向いていただいて講義を行う出前講座を実施しています。



今年度８回目となる出前講座を平成23年１月15日（土）、長崎大学先導生命科学研究支援センターアイソトープ実験施設で長崎市の青少年ピースボランティア（主に高校生）38名を対象に行いました。普段は小中学校へ出向いて講義だけですが、今回は講師である松田尚樹教授のご配慮により、教授が所属するアイソトープ実験施設での講義と実習となりました。

講義の内容は「放射線をサイエンスする－正しく知ろう放射線－」というテーマで、「放射線とは音や携帯電話の電波と同じように空気中を伝わるエネルギーで、見えない、聞こえない、臭わない、感じないもの」と説明し、放射線測定器を用い講義室の空間や準備してきた塩化カリウム粉末を計り、普段生活する環境だけでなく人体に存在する元素からも放射線を検出できることを実証しました。



また、講義の後半は松田教授から「昔の地球には放射線はなかった？」、「日本には放射能を持った温泉がある？」などの放射線に関するクイズが７問出されました。さすがに高校生だけあって、全問正解者も数名出ました。

実習では、放射線測定器（アルファちゃん、ベータちゃん、ＧＭサーベイメータ）を使用して、空気中のほこりから出ている放射線量を測定したり、霧箱を使用して放射線が飛んだ跡を検出しました。

生徒の感想

・今まで放射線＝髪の毛が抜ける、がんになる可能性があるという風に考えていましたが、放射線はどこにでもあるもので、普段自分達が生活している身近な所にあるものだということがわかりました。そして、必ずしも放射能を浴びたから病気などになるというわけでなく、一定の量を越すと髪の毛が抜けたりするということがわかりました。

・放射線は原爆で人々を苦しめるだけでなく、私たちの生活に大いに役立っていると分かりました。放射線のおかげで、電気が通って、放射線のおかげでガンが見つかって・・・・私たちの多くは放射線は単に怖いものだと思っていると思いますが、そうではないことを知りました。

・「ホールボディカウンター」を見てみて、全国的にも珍しいこのような機械が長崎にあるのが本当に驚きました。

・放射線を測る実験でプラスチック板と鉛板では遮へい後の放射線量が違い、鉛板の方が値が低くなりました。また、ラジウム-226 をGMサーベイメータから遠ざけると値が低くなりました。部屋の空気のホコリ（注1）から放射線を測る実験では、アルファ線、ベータ線、ガンマ線のすべてが出ていてびっくりしました。また、霧箱の実験（注2）では飛行機雲のような筋が見えて、すごいと思いました。

（注1）ホコリには室内中のラドン、トロンおよびその娘核種が吸着しています。
（注2）粒子線（主にアルファ線）の飛跡が一筋の霧のように見えます。これは、飛んできた粒子により過飽和の状態の気体が刺激され、液滴が形成したためです。飛行機が飛んだ跡に飛行機雲ができる原理と、基本的に同じです。


クイズを行う松田教授

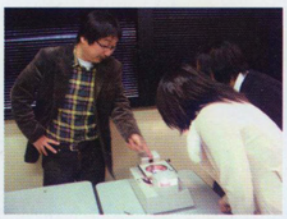

放射線測定器
（GMサーベイメータ）


放射線測定器の測定方法を
指導する職員


放射線測定器の使用方法を
説明する吉田正博　助教


放射線測定器の測定方法を
指導する職員


真剣な表情で実習を行う
青少年ピースボランティア


霧箱で放射線の飛んだ跡を検出


マスコミから取材を受ける
青少年ピースボランティア

第9回永井隆平和記念・長崎賞候補者を募集



ＮＡＳＨＩＭでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成７年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するものですが、平成23年度は第９回目を実施予定です。

本賞の候補者としてふさわしい方をぜひご推薦ください。詳細については随時ホームページ(http://www.nashim.org/)でお知らせします。

小中学校等で出前講座を開催します





ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校等へ出向いていただいて講義を行う出前出張講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生等の皆さんにわかりやすく説明しますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

1	放射線って何？－身近な放射線の話	
2	チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	原子力発電所事故による被ばく者への国際医療協力
		ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎
		テレメディスンによる遠隔医療協力
3	カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	核実験による被ばく者へ国際医療協力
4	世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界のヒバクシャ：世界での被ばく事故について
		もし、被ばく事故が起こったら
		放射線障害を治療する最新医療（再生・移植医療について）
5	長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
		長崎原爆被爆者のこころの調査
6	在南米・在韓国被爆者	海を渡った被爆者
7	核時代における世界の動向と長崎の将来	
8	放射線・紫外線とわたしたちの健康	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第30号
発行／平成23年3月28日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)
〒850-8570　長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.31
2012

ヒバクシャ医療国際協力会通信

CONTENTS

■震災支援　東京シンポジウム「長崎から福島へ」
■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■韓国医師等へ受入研修を実施
■専門家派遣事業（韓国・カザフスタン）
■出前講座
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■ホームページにPDF書籍を追加しました



▲ 東日本大震災復興支援　東京シンポジウム「長崎から福島へ」第１回目の会場全景

東日本大震災復興支援のため 東京で３回のシンポジウム開催

～長崎から福島へ～

NASHIMは、東日本大震災に伴い発生した福島原発事故により、放射線に対する大きな社会不安が生じていることから、放射線を正しく理解してもらい、風評被害をなくすため東京で連続３回のシンポジウムを開催しました。



開会に際し挨拶する
蒔本ナシム会長



被災地にエールを送る田中副知事



被災地にエールを送る田上市長

第１回シンポジウム ～放射線の正しい理解のために～ ５月20日

会 場　青山ダイヤモンドホール（東京都港区）参加者数 約200人



長崎大学先導生命科学研究支援センター
松田 尚樹 教授　講演の様子



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
山下 俊一 教授　講演の様子

（山下教授は、平成23年７月から福島県立医科大学副学長に就任されました。）

第２回シンポジウム ～世界は放射線リスクとどう向き合うか～ ６月15日

会 場　青山ダイヤモンドホール（東京都港区）参加者数 約180人



日本総合研究所　理事長
寺島 実郎 氏　講演の様子



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
山下 俊一 教授　講演の様子

第３回シンポジウム ～次の世代のために～ ７月16日

会 場　新霞ヶ関ビル　灘尾ホール（東京都千代田区）参加者数 約100人



福島県立医科大学　救命救急センター医師
長谷川 有史 氏　講演の様子



参加者からの質問に答える福島県立医科大学
放射線科医師　宮崎　真 氏



長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
大津留　晶 准教授　講演の様子



シンポジウム出席者

（大津留准教授は、平成23年10月から福島県立医科大学 医学部教授に就任されました。）

※詳しくは、NASHIMホームページにシンポジウム記録集を掲載しています。
以下のＵＲＬからアクセスしてください。
URL http://www.nashim.org/jp/data/2011sympo_pdf/

受入研修事業

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施



蒔本ナシム会長を表敬訪問する研修生

チェルノブイリ原発の周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報の提供を行うため、今年度も６名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月20日から約１ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについて理解を深めました。

研修後の感想



Irina Chebotareva（イリーナ・チェボタリョーヴァ）
ロシア共和国　オブニンスク放射線医学研究所
放射性核種診断学　医師

2011年3月に福島の原発で起こった悲劇的な出来事にもかかわらず、NASHIMのみなさんは放射線医学関連の様々な分野で働く専門家を招聘して研修を行ってくださり、日本の経験を学ぶために素晴らしい環境を整えてくださった。

長崎県知事、長崎市副市長に表敬訪問をする機会があり、とても感謝している。私たちの国々と交流を深めることに対し、このように高い地位の方々が関心をよせてくださっていることには、非常に責任感を感じさせられた。

長崎原爆資料館や長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学し、長崎の人々が経験した恐ろしい出来事について、拭いさることのできない印象を受けた。また、このような悲劇を繰り返さないために、記憶を残していく必要性を痛感させられた。

長崎市被爆者健康管理センターや、日本赤十字長崎原爆病院、国際ヒバクシャ医療センター、恵の丘原爆ホーム、長崎大学病院、放射線影響研究所などの見学により、原爆被爆者の医学的観察の手法や、医療支援の質、高齢の患者へのケアなどについて、とてもよく知ることができた。

長崎大学の片峰学長や、医学部長には、大学で研修を受けさせて頂き、特にお礼を申し上げたい。聴講した全ての講義は非常に詳しく、興味深く、わかりやすいものであった。また、私は専門研修を原研リスクで受けたので、研修中、常に支援していただいた山下教授およびスタッフのみなさんには特に感謝したい。実験室で行った研究は非常に学術的に意味の深いもので、ここで得た知識は今後の私の仕事を大きく助けてくれることだろう。

研修中に心に残ったのは勉強の部分だけではなかった。多くの寺社や歴史的な博物館、素晴らしいカフェ、美味しい食事、海、海水浴場、そして比べるものとてない日本の温泉のある長崎の町自体が、私の心に永遠に残るだろう。



Olena Khukhrianska（エレーナ･フフリャンスカヤ）
ウクライナ共和国　ウクライナ医学アカデミー
放射線医学研究所　がん疫学研究室　研究員

非常に有益で実りのある研修に参加させてくれたNASHIMに、とても感謝している。研修は内容が濃く、多岐に渡るものであった。被爆者医療に携わる医療機関など、多くの場所を訪れることができ、放射線医療の分野の多くの専門家と会い、講義を聞くことができた。

研修の初めに訪問した長崎原爆資料館からは、この悲しい出来事の、重さと苦しさが伝わってきた。しかし、それによってこの世に平和より大切なものはないこと、平和を守るためにはあらゆる努力をしなければならない、ということについて考えさせられた。

長崎県知事、長崎市副市長は私たちをとても暖かく迎えてくれた。私たちの研修に関心を寄せ、チェルノブィリの事故後の状況について質問をされた。

長崎大学学長の表敬訪問時には、日本の教育制度、特に未来の医師たちの養成について詳しく知ることができた。

放射線影響研究所では、寿命調査集団（LSS）の登録や調査法について知った。ここの疫学的調査は、50年以上も続いている。また組織バンクで、どのように組織が保存されてるのかを見ることができた。放射線影響研究所の仕事は、原爆が被爆者の健康にどのような影響を与えているのかを調べる上で、計り知れない貢献を行っている。我がウクライナでは、研究に際し、しばしば放射線影響研究所に倣っている。

恵の丘原爆ホームでは、高齢の被爆者に対し、心配りと愛情を持って接していることに心を打たれた。そして原爆投下時に若い女性だった高齢の女性が、どれほどつらい経験だったか、しかし人々がどのように助け合ったかを自ら語られるのを聞いた。

大村の長崎医療センターでは、病院の設備や、様々な診療科、検査室を見学した。診断のための資材は豊富で、あらゆる病気の患者に対応できるようになっていた。また、病院にはドクターヘリがあり、離島の人々の医療に役立てられている。

原研医療では柴田教授のご指導のもと、最新の放射線疫学の研究に関する知識を増やすことができた。原研で得た知識を用いて、あらたな企画を立て、2つの疫学的研究の中間評価を行った。

将来の仕事に役立つ、多くの興味深く、有益な事柄を、今回の研修中に知ることができた。自分の知識レベルを深めてくれたNASHIMに対し、私は深く感謝している。

そしてもちろん、長崎という町にも、そこに住む好意的な人々にも、とてもいい印象が残ったことを述べておく。



Victor Kondratovitch（ヴィクトル･コンドラトーヴィチ）

ベラルーシ共和国　ミンスクがんセンター
甲状腺がん　副院長

被爆者でない方との対照における原爆被爆者の疾病や癌による死亡率、またさまざまな癌治療に関する講義を聴講した。また福島の原発事故を例に、住民の放射線防護体制についても学んだ。

NASHIMは、長崎市の副市長や、長崎県の知事への表敬訪問をアレンジしてくれた。それに、長崎県医師会会長とも会うことができた。

長崎大学医学部では業務を見学し、学長ともお会いすることができた。

8月9日は、第66回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆資料館も訪れた。原爆病院や放射線影響研究所、恵の丘原爆ホームを訪問し、被爆者に対する医療補助･社会的支援についても知ることができた。

長崎滞在中に、日本人全体に対する医療体制についても知ることができた。長崎県大村市にある長崎医療センターを訪れ、外来や病棟、診断部門の仕事について概念を得ることができた。また、救急や一般の診療科についても知ることができた。

様々な病院で、新しい医療機器や手術道具について知る機会を得、多くの術式の行われ方を見ることができた。長崎大学病院での研修中には、甲状腺の病変や乳腺、肝臓、すい臓、大腸の癌、また肝移植の手術を見学することができた。また多くの消化器官のビデオ補助下手術についても知見を得た。

総合的に見て、研修は非常に高い水準であった。ここで得た知識や技術は、ベラルーシの人々の癌の治療や社会的援助の改善に、必ず役立つことだろう。



Uladzimir Bartnouski（ウラジーミル･バルトノフスキー）

ベラルーシ共和国　ゴメリ国立医科大学
公衆衛生･環境･放射線医学教室主任

この研修で私は、放射線量測定、放射線生物学、放射線病の診断と治療、放射線防護、日本の保健制度、日本の歴史的･文化的遺産など、昨今注目を浴びている問題に関する14の講義を聞き、2つのセミナーに参加した。研修の重要だったのは、被爆者や住民に対する各種医療･社会保障の施設、また長崎原爆被爆者の後障害や世界的な放射線医学の研究に携わってきた研究機関の視察である。これらの視察により私は、日本の医療機関で使われている設備や高い技術について、詳しく知ることができた。

専門研修においては、高村教授のもと、長崎大学医学部における医療放射線分野の専門家養成のための学習指導要領や、被爆者に対する放射線の影響に関する長年の研究成果、甲状腺癌その他放射線による疾病の検診方法と早期診断について学んだ。研修で得た資料を用いて、ゴメリ医科大学の学生のための、マルチメディアのプレゼンテーション資料を2つ作成することができた。

私の所属教室の研究テーマに従い、尿ヨード指数を用いて、ヨード供給率による日本とベラルーシの小児甲状腺病理のレベルと構造の比較分析を行い、チェルノブイリ原発事故により最も被害を受けた地域のラドンモニタリングのための、居住地におけるラドンの平衡比放射能測定法を学んだ。

日本の雑誌、「 Journal of Radiation Research」に載せるため、高村教授と共同で「ベラルーシにおけるラドンリスク評価の間接的方法」という論文を作成した。

長崎で学んだことと自ら観察したことを元に、「ゴメリ・プラウダ」という地元紙に、「フクシマの神話と真実」および「日本人の長寿の秘訣」という2つの記事を書いた。

NASHIMの代表者および全ての関係者に対し、放射線被曝者に対する医療支援に関する経験の共有という国際的なミッション、また緻密な研修に対し、心から深く感謝したい。私が得た経験や知識は、帰国後チェルノブィリの原発事故による後障害の克服のために、将来必ず研究・教育において生かされることであろう。



Elvira Naduyeva（エルヴィラ・ナドゥーエヴァ）
カザフスタン共和国　国立カザフ医科大学
国際協力開発部　主任

私が受けた研修内容は、放射線の影響の予防及び除去に関する知識を得るためのものであった。

研修で得られた知識と経験を元に、カザフスタンの保健制度のいくつかの改革、特に癌検診の分野に対して提案を行いたい。各都道府県では様々な年齢層の住民に対する検診が、被健診者の社会的立場に応じて制度化され（往々にして腫瘍の所在が特定されている）、様々な疾病の早期診断につながっている。全ての都道府県において検診が可能であり、内臓の代謝異常その他の予防に役立っている。

長崎市および長崎県の先進的な病院の活動により、診察のために外部医療機関から専門医を招聘したり、ローカルネットワークを通じて、主治医に治療状況や他の医療機関での追加検査に関する情報提供を行ったりすることが可能になっている。

長崎県医師会は、県や国の医療制度改良の過程に参与している。

日本の厚生労働省のプログラム「健康日本21」の基本コンセプトについて知識を得た。

被爆者対策、および被爆者健康手帳を持つ住民の健康管理、恵の丘原爆ホームの運営、被爆者のケアとリハビリは、高い水準であった。

長崎大学病院の内部連絡体制を知ることができ、非常に参考になった。重篤な患者、また入院患者の急変の際、容体に猶予がない場合、院内のすべての医師が連絡を受け、駆け付ける義務を負っている。

長崎大学病院の外来の様子を知ることができた。素晴らしい病院運営により、多くの患者を受け入れ、患者に応じたさまざまな分野の専門医を抱えている。各レベルの管理職がきっちりと自分の職務を果たし、患者、特に被爆者の回復に注意を払っている。

これらすべてについて、帰国後周囲に話し、可能であればカザフスタンの保健医療制度に取り入れたいと思っている。



Alexey Parfenov（アレクセイ・パルフョーノフ）
カザフスタン共和国　セメイ診断センター
放射線科医師

研修期間中、私は原爆後障害医療研究施設、長崎大学医学部、長崎市被爆者健康管理センター、日本赤十字原爆病院、放射線影響研究所、恵の丘原爆ホーム、国際ヒバクシャ医療センター、長崎大学病院、長崎医療センターの活動について学んだ。

また、他のNASHIM研修生とともに、長崎原爆資料館、長崎原爆死没者追悼平和祈念館など様々な施設を訪問し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列した。

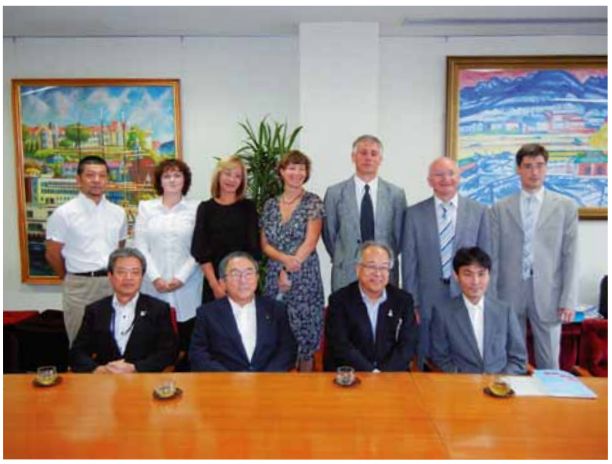
放射線医学、核医学、研究や治療の新たな手法などに関する講義を聴講した。

長崎大学病院の放射線科において専門研修を受けた。病院でデジタルレントゲン撮影装置、デジタルデンシトメトリー、CTスキャン、MRI、シンチグラフィー、PET/CTなど様々な機器を目にし、作業の基本について学んだ。放射線科のスタッフの指導のもと、さまざまな疾患の画像診断における鑑別診断の特徴について学んだ。

新しい経験と知識をえる機会を与えてくれた、NASHIMの方々、原研および大学病院のみなさんに対し、心からの感謝の意を表したい。



中村知事を表敬訪問



三藤副市長を表敬訪問



８月９日の平和祈念式典に参加



放射線影響研究所　講義後の所内見学

受入研修事業

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施



長崎大学病院 宇佐先生の講義

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる関係者を招いて受入研修を実施した。1回目は、医療職2名が12月18日から6日間、2回目は事務職2名が2月13日からは4日間、医療職2名が6日間、長崎に滞在し、日赤長崎原爆病院や長崎大学病院などの医療機関や長崎大学や放射線影響研究所などの研究機関等で、被爆者医療に関する最新知識の習得を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

なお、2回目の研修では、長崎県が在外被爆者支援事業の一環で招へいしたブラジル医師2名(ジュリオ・マツモト・トオヤマ氏とアリス・カヨコ・ミヤムラ氏)と一緒に研修を受講しました。

研修後の感想

1回目



鄭　泰垠(チョン・テウン)
嶺南大学病院胸部外科　教授

放射線影響に関わる様々な組織の役割とシステムを見ることができました。研修生が二人だけにも関わらず、各組織及び構成員の誠実で意欲的な研修でいい勉強になしました。研修生の数がもっと多かったら、より多様な観点から質問や議論ができると思います。



李　東建(イ・ドンゴン)
釜山医療院　医師

被害の写真、被害地や患者さん、そして被爆者の証言は、今まで言葉でしか聞いていなかった原爆の残酷さと恐ろしさを実感させました。もう二度とこんなことが起きてはいけないと思わせてくれる本当の教育でした。

全般的な説明があったオリエンテーションと施設の見学を通した動機づけの後に行われた先生方の講義は、今度患者さんの診療や相談の時、役に立つと思います。

2回目



黄　守鉉（ファン･スヒョン）
慶尚大学病院神経外科　医師

研修の全般的なプログラムがとてもよかったです。ナシム受入研修のおかげで、原爆資料館、追悼記念館、平和公園を直接見て、また、現在恵の丘にいらっしゃる原爆被爆者の方々にお会いして平和は大切だと感じさせられました。

NASHIM研修を受けた人は皆平和を大切に思うようになれると思います。



張　仁一（チャン･インイル）
陜川（ハプチョン）郡保健所　医師

全般的にとてもよかったです。関係機関の訪問、講義もとても役に立ちました。ナシム受入研修にお招きいただきありがとうございました。韓国での診療にとても役立つと思っています。



李　東一（イ･ドンイル）
陜川（ハプチョン）原爆被害者福祉会館　館長

被爆の実態と被爆者のための医療支援の現況について理解することができました。

原子力発電など、平和的に利用されている核及び放射能の被害の可能性について一般国民にも正しく知らせる必要があると思いました。チェルノブィルの例を見て、放射能の被害を受けた地域には生命体が住めないということはとても悲しく、次世代に譲り渡すべき人類の財産、自然をきれいな状態で譲り渡すことができるよう努めることが大切だと思いました。

また、被爆２～３世の健康のために研究活動及び遺伝要因についての研究などをする必要があると思います。



権　寧日（クォン･ヨンイル）
大韓赤十字社特殊福祉事業所　総務課長

今回ナシム受入研修は、全般的に有意義で原爆被爆者に対する理解を深めるのにとても役に立ちました。原爆記念館及び関連施設を見学しながら、今まで漠然としていた原爆の威力と破壊力について、より現実的で具体的に理解することのできるいい機会でした。

特に、放射線影響研究所と長崎原爆病院の訪問を通じて被爆者に対する理解と研究、そして治療及び管理について日本政府が力を注ぎ、良い成果を出していると感じました。

原爆被爆者の福祉支援事業に携わっている者として、韓国に帰って今回ナシム研修で見て、聞いて、感じたことを対象者の支援に生かす方法を講ずるよう努めます。



恵の丘原爆ホームで被爆体験を聞く研修生



長崎大学　中島教授の講義



長崎大学病院　河野病院長を表敬訪問



放射線影響研究所　赤星先生の講義



長崎大学　松田教授の講義



長崎大学病院　熊谷先生の講義

専門家派遣事業

韓国専門家派遣 ～被爆者医療セミナーの開催～

１回目は11月30日～12月２日に大邱（テグ）市内の郭病院と慶北大学病院で、２回目は２月２日～24日にの慶尚大学病院（慶尚南道）とワレス記念浸礼病院（釜山（プサン）市内）で被爆者セミナーを開催しました。セミナーでは、最新の被爆者医療の研究成果や在外公館経由で手続きが可能となった原爆症認定申請書に医師が記載する内容について、各講師が説明をしました。セミナー参加者は熱心に説明を聞き、質問も寄せられました。

各回の講演者及びセミナーの内容は次のとおりです。

１回目

講演者：福島県立医科大学　医学部　大津留　晶　教授
「在外公館経由での原爆症認定申請書類の記載方法について」
講演者：長崎大学病院　永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
宇佐　俊郎　副センター長
「長崎・広島原子爆弾の医学的影響」
会　場：郭病院・慶北大学病院（いずれも大邱（テグ）市内）

２回目

講演者：長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設　中島　正洋　教授
「原爆被爆者のがんリスクとゲノム不安定性」
講演者：長崎大学病院　永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
宇佐　俊郎　副センター長
「在外公館経由での原爆症認定申請書類の記載方法について」
会　場：慶尚大学病院（慶尚南道）・ワレス記念浸礼病院（釜山（プサン）市内）



郭病院　郭院長と



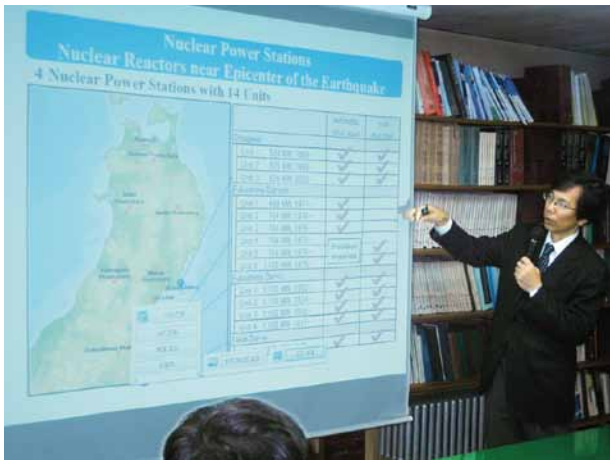
慶北大学病院にて



慶尚大学病院で病院長表敬

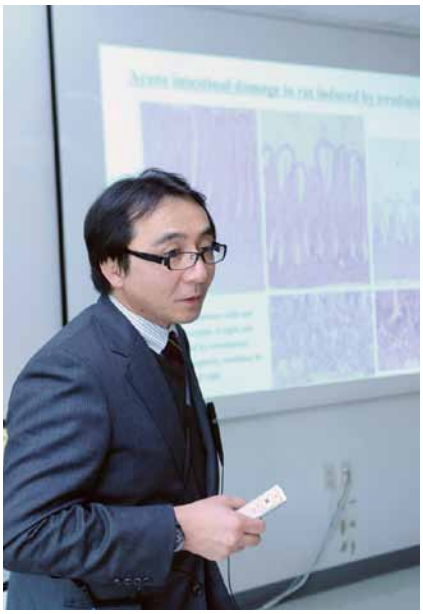


ワレス記念浸礼病院で病院長表敬



郭病院でセミナーを行う大津留教授


慶北大学病院でのセミナーの様子


慶尚大学病院でセミナーを行う中島教授


慶尚大学病院でのセミナーの様子


ワレス記念浸礼病院でのセミナーの様子


慶北大学病院玄関前にて

専門家派遣事業

カザフスタン専門家派遣を実施　8月25日～9月1日

セメイ医科大学の国際会議「The Ⅶ International Research and Practice Conference」

蒔本会長　開会時のあいさつ



挨拶を行う蒔本ナシム会長

このたびは、セメイ医科大学の「The Ⅶ International Research and Practice Conference」にお招き頂きくと伴に、式典に臨席できたことを大変光栄に思います。NASHIMを代表してお礼申し上げます。

NASHIM (Nagasaki Association for Hibakusha's Medical care) は、世界各地で発生している放射線被ばく事故による被災者の救済を目的に1992年に設立された、国際協力のための団体です。

以来、被爆地長崎の行政と、長崎大学などの被爆者診療に携わってきた、あるいは放射線の影響を研究してきた医療機関や研究所と一体となって、世界の放射線被ばく者の健康被害に対して、長崎の原爆被爆者医療で培われた知識を役立てる目的で活動しています。

主な活動として、毎年夏の1ヶ月間、カザフスタンを始めとする旧ソ連諸国から医師を招聘して、長崎で原爆被爆者の医療・福祉や放射線関連の基礎医学を学んでいただいています。

これまでに、カザフスタン共和国からは25名をお招きし、その半数以上はセメイの方々です。

今年は、アルマティの国立カザフスタン医科大学とセミパラチンスク診断センターから研修生がおいでになりました。

特にここセメイで、NASHIMで学ばれた研修生がそれぞれの医療の場で、ご活躍されていることを、とても嬉しく思います。

ところで、我が日本では、今年３月11日に発生した、「東日本大震災」という未曾有の大規模な地震と、それによって発生した巨大津波がとても大きな被害をもたらしました。

この地震による被害に対して、カザフスタン共和国をはじめ、世界各地から暖かいご支援をいただいたことに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

津波によって致命的な打撃を受けた、福島第１原子力発電所の放射線事故は、関係者の懸命な対応によって、ようやく沈静化しつつありますが、放射線の影響は、現在も続いており、まだ多数の方が避難をされています。

私どもナシムは、長年培ってきた放射線に関する知識を生かしたシンポジウムを連続して開催し、放射線による風評被害を防ぐ活動をしているところです。

長崎大学においても、原発事故発生直後から現地に入り、長崎でのヒバクシャ医療やチェルノブイリでの原発事故での調査・研究の知見をもとに、緊急被ばく医療の立ち上げなどに努めました。

福島の原発事故は、改めて放射線の脅威について考えさせられ、核兵器廃絶と世界の恒久平和について意を強くいたしました。

この会議を契機に、日本とカザフスタンの友好がさらに深まるとともに、核兵器廃絶に向けての取り組みが、一層進むことを祈念して、私からのご挨拶とさせていただきます。



セメイがんセンターで説明を受ける蒔本ナシム会長



セメイ診断センターで来訪者名簿に署名する蒔本ナシム会長



セメイ医科大学玄関前にて
左から、中島教授、高村教授、蒔本会長



セメイ医科大学　国際会議開始前記者会見の様子



優秀学生へ長崎大学からの長崎賞授賞式



中島教授の講演



高村教授の講演



前田先生の講演



国際会議主催のディナー会場にて



ナシム夏季研修生達とのディナー



核実験場跡爆心地で土壌サンプリングを行う高村教授



クルチャントフにて（核実験場跡への移動途中）



セメイ医科大マラット副学長ご自宅での昼食後



カザフ医科大学玄関前で民族衣装を着た学生代表者と



カザフ医科大学学長面談



アルマティ市内を見渡す高台から

出前講座

NASHIMでは、ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、「平成の鳴滝塾　～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただき講義を行う「出前講座」を平成19年度から実施しています。

今年度は、①７月８日 長崎市立福田中学校（2-3年生約190人）、②８月10日福島県いわき市内中学校生徒会リーダーと長崎市内中学校生徒会リーダー（81人）【長崎市が東日本大震災復興支援事業のひとつとして福島県いわき市内の中学校生徒会リーダーを長崎に招待し、長崎でしか体験できない平和学習や長崎市内中学生とのリーダー研修を実施。】に対し出前講座を行いました。

①福田中学校の出前講座は、「放射線事故の歴史～福島第一原発原子力災害より考える～」と題して、長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センターの大津留晶准教授が行いました。





福田中学校で生徒の皆さんに講義する大津留准教授（福田中学校体育館にて）



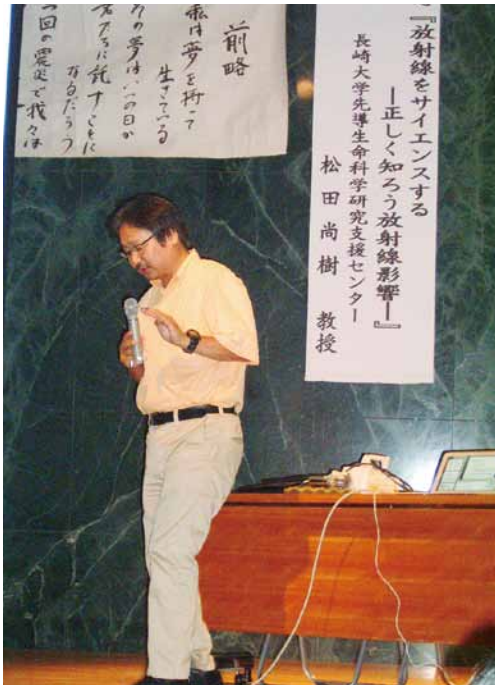
東日本大震災での犠牲者の方々に
黙祷をささげる福田中学校の皆さん



出前講座を終えて参加した中学生と
握手する大津留准教授

※大津留先生は、平成23年10月から福島県立医科大学医学部教授に就任されました。

②福島県いわき市中学校生徒会と長崎市内中学校生徒会のリーダー研修での出前講座は、「放射線をサイエンスするー正しく知ろう放射線影響ー」と題して、長崎大学先導生命科学研究支援センターの松田尚樹教授が行いました。また、当日は、福島県立医科大学の山下俊一副学長が、「いわき市の中学生にエールを送る」との趣旨でご挨拶がありました。



講義をする松田教授


いわき市の中学生にエールを送る
山下副学長


出前講座に参加したいわき市と長崎市内
中学校生徒会の皆さん


熱心に出前講座に参加する生徒会の皆さん

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附



今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金として、NASHIMに寄附をいただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のために積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施され、多くの医療施設等へ健診車、車椅子、ベッド、医療機器等を寄附されています。NASHIMへも毎年、活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は海外からのヒバクシャ医療研修生受入事業等に活用しています。

贈呈式は８月７日に長崎原爆資料館で執り行われ、NASHIMからは梶原事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘原爆ホーム等の10団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

NASHIMとしましても、この活動助成金を有効に活用し、世界のヒバクシャ支援に努めてまいります。

ホームページにPDF書籍を追加しました

“ナシムが日本語版図書として出版していた『チェルノブイリ：虚偽と真実』と『放射能汚染の大事故：影響と防護措置』をPDF書籍としてホームページにアップしています。

東日本大震災発生後、専門機関等から入手についての問い合わせが寄せられたため、多くの方々がご覧いただけるようホームページに掲載するものです。”





著者：L.A.イリーン

チェルノブイリ：虚偽と真実

著者：L. A. イリーン
翻訳：本村智子、浜田亜衣子、高村昇、本田純久、芦澤潔人、山下俊一、本村政彦（翻訳順）
（平成９年度 日本語版出版図書）





編集：L.A.イリーン

放射能汚染の大事故：影響と防護措置

編集：L. A. イリーン　外
翻訳：西条泰博
（平成14年度　日本語版出版図書）

PDF書庫へは、以下のURLからアクセスしてください。
URL：http://www.nashim.org/jp/pdf/index.html

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信
第31号
発行／平成24年３月20日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095(895)2475　FAX 095(895)2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力会通信

Vol.32
2012

NASHIM設立20周年及び長崎大学原研創設50周年記念
合同シンポジウム（原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会）

長崎とヒバクシャ医療

被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島

開催日時　2013年 2/9(土)・10(日)
9日:13:00~17:30（開場12:00）
10日:9:30~15:00（開場 9:00）

会場　ベストウェスタン プレミアホテル長崎 3階（長崎市宝町2-26）

参加者募集

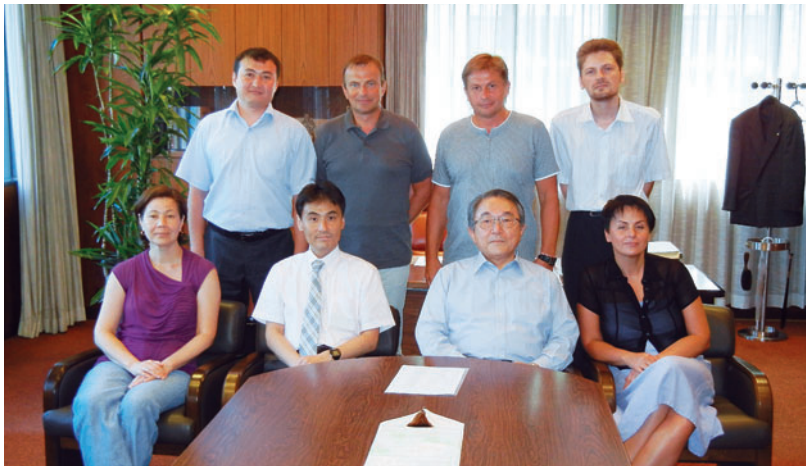
入場無料



CONTENTS

■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附
■専門家派遣事業（カザフスタン）
■韓国医師等へ受入研修を実施
■第9回永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定
■NASHIM設立20周年・長崎大学原研創設50周年記念
合同シンポジウムの開催

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施



チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報の提供を行うため、今年度も６名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月 18 日から約１ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについて理解を深めました。

[日程概要]

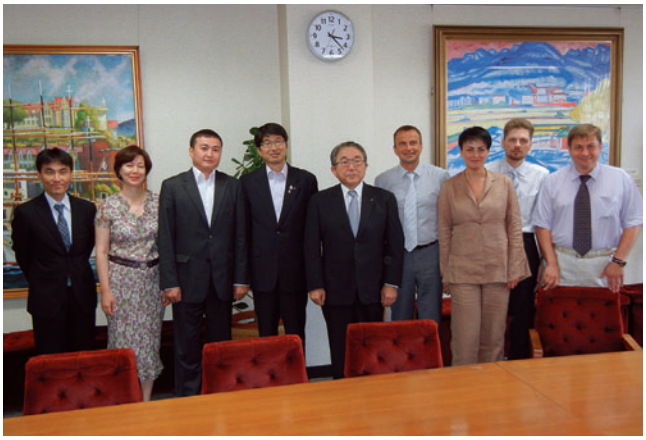
○７／18	長崎到着
○７／19～27	関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
○７／30～８／20	長崎大学（病院）での専門研修
○８／21	帰国のため長崎出発

[研修生名簿]

1. アレクサンドル メニャイロ	(ロシア)	オブニンスク放射線医学研究所 技官
2. リュドミーラ ズルナジー	(ウクライナ)	ウクライナ医学アカデミー　内分泌代謝研究所 上級研究員
3. アルトゥール ピサレンコ	(ベラルーシ)	ミンスクがんセンター 主任
4. ドミートリィ ルザーノフ	(ベラルーシ)	ゴメリ医科大学 主任
5. ヴェネーラ バイスグーロヴァ	(カザフスタン)	カザフ医科大学 主任研究員
6. ケネス アキルジャーノフ	(カザフスタン)	セメイ医科大学 助教



中村知事を表敬訪問



田上市長を表敬訪問

研修後の感想



Alexander Menyaylo（アレクサンドル・メニャイロ）
ロシア共和国　国立オブニンスク放射線医学研究所
放射線疫学　　技官

私の仕事は、がんに関するデータを統計的に解析し、それにより被ばくした方の被ばく線量と疾患との間に相関関係、法則などを発見することである。

2012 年 7 月 18 日、私は日本へやってきた。空港で他の研修生たちおよび私達の通訳と合流した。この瞬間から東方の素晴らしい国での私の忘れがたい研修が始まった。

嬉しい驚きだったのは、私達に見学と学習を両立させるプログラムが用意されていたことだ。これは私の初めての外国旅行だったので、原爆資料館や、原爆を生き延びられた方たちが住まう原爆ホームを訪れたりしたことは、強い印象として残った。

私達のために、非常に興味深い講義が準備されていた。オブニンスクでの私の仕事は悪性腫瘍疾患における放射線リスクの研究なので、すべての講義が、何らかの側面をより深く理解するのに役立った。特に嬉しかったのは、原爆を生き延び、世界中に放射線障害の情報を届ける供給源となっている人びとの、特別なコホート研究をしている放射線影響研究所を訪問し、自分の目でその仕事を確認できたことである。そのうえ、なんと長崎県知事や長崎市長への表敬まで用意されていたのである！その他にも数多くのプログラムがあった。

全体として、日本へ来てから最初の一週間半は、情報の洪水の中、研修で用意されていたあらゆる出来事に強く印象づけられた。

私達のために講義を行なって下さった先生方、工藤教授、三根教授、李教授、中島教授、塚崎准教授、高村教授には深く感謝している。そして、講義や見学、訪問の関係者の皆さんにもお礼を言いたい。こちらの皆さんのおかげで、私は人間としても、学究の徒としても成長できたと思う。

7 月 30 日からは、専門研修が始まった。私は原研リスクに配属され、ウラジーミル・サエンコ先生のもとで研修を行った。私には必要な持ち場が用意され、とても気持ちよく接してもらったおかげで、非常に楽しく仕事をすることができた。三週間の作業により、データ分析を完遂し、成果も出すことができた。私の作業を直接手伝い、私にとって新しい環境での仕事のやり方を教えてくれたサエンコ先生には、特に感謝の意を表したい。サエンコ先生との作業は、私に新しい知識を与え、統計分析という仕事において、大いに経験を積ませてくれた。

最後に、長崎の人びとの親切さによって、私は長崎が大好きになったということを申し添えておきたい。それに長崎の町は美しく、多くの名所旧跡がある。親切な日本の方々のお陰で、私はホテルでもお店でも、全く困った目にあわなかった。皆親切だった。日本の皆さん、私を招待し、新しく、有益な事柄をたくさん与えてくれて、ありがとう。もちろん私は日本について、全てを理解したわけではないし、機会があれば、この素晴らしい国にきっとまたやってきたいと思っている。



放射線影響研究所にて



Liudmyla Zurnadzhy（リュドミーラ・ズルナジー）
ウクライナ共和国　ウクライナ医学アカデミー
内分泌代謝研究所内分泌システム病理検査室上級研究員病理医

NASHIM の招聘により、私は他の研修員たちとともに、2012 年 7 月 18 日に初めて日本、そして長崎の地を踏んだ。他国からの研修員たちは、非常に気持ちのよい、人付き合いがよくて親切な人たちで、すぐに仲良くなることができた。長崎は、私達を暖かく、笑顔で迎えてくれた。また町は太陽の熱気とともに、様々な出会い、歴史的な場所など万華鏡さながらの日々を用意してくれていた。

私は長崎市長、長崎県知事、NASHIM 会長、長崎大学学長への表敬訪問を、深い敬意を込めて思い出すことになるだろう。これらの人びとは、忙しい中私達に関心を寄せてくれ、自分たちの活動について語り、私達の質問に答えてくれた。

原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館からは、強い印象を受けた。巨大な水盤から、死者への追悼を表す水が流れ落ち、追悼空間ではすべての死者の名前が記されている。私が 8 月 9 日の原爆の日を忘れることは決して無いだろう。

恵の丘原爆ホームの訪問も感動的だった。この上ない善良さ、力強さ、人生で恐ろしい体験をした高齢者への愛情には、驚きがさめることはないと思う。職業意識、尊敬、高齢者への思いやり、避けられない老いと病からくる負担を和らげてあげたいという心、こういった事柄は、長崎の優れた医療機関（長崎大学病院、日本赤十字長崎原爆病院、放射線影響研究所、ハートセンター、長崎県医師会）全てにおいて感じられた。

長崎の病院については、記憶の中でも特別なページを持っている。まず医師たちとの交流について。彼らは率直に隠し事なく、自分たちの職場を誇りと愛情を持って紹介し、高い職業意識と設備、効率的なシステムによって得られた仕事の業績について語ってくれた。

塚崎准教授、三根教授、李教授、中島教授、サエンコ准教授、工藤教授らによる、歴史的、教育的、医学的題材に沿った、最新の学術研究や臨床研究に関する一連の素晴らしい講義を聴講した。

共通講義プログラムの後、私たちはそれぞれの専門の研究室や診療科に分かれて研修を受けた。私は山下教授の原研リスクに配属され、サエンコ准教授の指導のもと、「チェルノブイリ事故後における甲状腺がんの分子疫学研究」という共同プロジェクトに関する作業を行った。設備、試薬、知識、専門的な助言と支援を得られる状況など、どれを取っても作業環境は素晴らしかった。研究室は、優秀で思いやりのある人材の宝庫だった。活力、支援、観光案内、無尽蔵の知識の泉、あらゆる質問と問題の助言者を体現するタチヤーナ・ログノーヴィチなくしては、私達研修員は日本についてこれほどよく知ることができなかっただろう。彼女は、共同プロジェクトの試料の分析、蛍光免疫化学反応のプロトコール作成、マイクロフィルム撮影など、すべてを計画通り実行してくれた。また、実験室の作業では、大学院生のアンドレイ・ヴィチコフ（スモレンスク医科大学の病理学者）が、大いに手助けをしてくれた。彼は私に素晴らしい顕微鏡で、日本語メニュー（！）のデジタルカメラを使ってマイクロフィルムの撮り方を教えてくれ、実際に撮ってくれた。またプロトコールの仕上げに際しては、自分の膨大な知識と高度なスキルを使い、入念に、辛抱強く実験を行なってくれた。

大村の長崎医療センターでは、伊東先生、前田先生に暖かく迎えて頂き、感謝している。伊東先生とは「チェルノブイリ組織バンク」のプロジェクトを通じ、長年の親交があるが、素晴らしい方で、謙虚で、細やかで、知的な人物である。

「日本」と言う名の、おとぎ話のような贈り物に対する感謝を、とても言葉で表しきれない。ここで出会った人びと、長崎の絵画のような町、先生方は、日本にとってかけがえのない宝だと思う。全てに対してお礼を申し上げたい。



Artur Pisarenka（アルトゥール・ピサレンコ）

ベラルーシ共和国　ミンスクがんセンター
頭頸部外科 主任

最初の一週間に、各種講義、長崎県知事、長崎市長、NASHIM 会長への表敬訪問、長崎の医療機関視察が行われた。特に印象に残ったのが原爆ホーム訪問およびその居住者との交流で、この施設における高齢者の生活環境には驚かされた。これこそ目指すべきものだと感じた。

講義は長崎大学で、高いレベルで行われた。すべての講義で、様々な分野の最新のデータが使われていた。講義を聴講して得られた知識は、日々の実務でも応用が可能である。

表敬訪問や視察では、質問に対して余すところ無く答えてもらえた。被ばくした住民（患者）の社会復帰に関して得た知識と経験は、自らの実務でも活用するつもりである。また長崎で見た、放射線の人体への影響に対する緻密なアプローチは、研究において活用していきたい。

実務での活用にとって非常に有益だったのは、長崎大学病院での医師たちとの交流および実習である。私はほとんどの時間を外科の各科で過ごした。

外来および入院における、あらゆる段階での住民への外科医療について、知識を得た。甲状腺や乳腺、大腸がんの患者に対する日本の治療方針について、詳しく知ることができた。甲状腺や大腸の多くの手術、また形成外科の手術に立ち会った。また甲状腺や大腸の腫瘍のビデオ補助下手術、顕微鏡を使った血管吻合も見ることができた。

私が病院の各科で受けた、親切で根気良い対応は、考えがたい。

私はありとあらゆる回診、診察、治療に立ち会った。特に、第二外科や手術室、外来での仕事を説明し、当該分野での日本の文献を探すのに協力してくれるなど、私のために労力と時間を割いて下さった南恵樹先生にお礼を申し上げたい。

大村の長崎医療センターでは、住民に対する医療サービスなど、センターの仕事について知ることができた。甲状腺の腫瘍の手術に立ち会い、病理検査室や臨床生化学検査室、人工透析室などを見学することができた。伊東先生には多くのことを教えていただき、とても感謝している。

日本で積み重ねられた経験は、ベラルーシで活用していきたい。



恵の丘長崎原爆ホームにて



長崎原爆病院　朝長院長の講義



Dzmitry Ruzanau（ドミートリイ・ルザーノフ）

ベラルーシ共和国　ゴメリ国立医科大学
結核・呼吸器科主任・テレメディシンセンター主任

最初の一週間は、講義、公衆衛生や医学教育の関係者表敬、長崎の医療機関訪問などが行われた。講義の題材は非常にレベルが高く、実務での応用が可能なものであった点を特に記しておきたい。訪問の際には、質問に対して詳細で率直な答えを得られ、「隠し事」というものは存在しなかった。日本で見聞きした放射線被ばくの影響に苦しむ市民（患者）の社会復帰に関する知見は、自分の日々の仕事で活かすつもりである。また長崎で目にした放射線の人体への影響に対する緻密なアプローチは、自分の研究で活用していきたい。訪問や表敬で教えてもらった連絡先は、将来的に多方面でコンタクトをとり続けるよすがとしたい。例えば、李桃生教授からは、呼吸器系疾患の治療のために幹細胞を使う共同プロジェクトに関して事前の承諾を得られたので、2013 年度に申請を行うつもりである。

私の実務にとって非常に貴重だったのは、長崎大学病院で得た経験と知識である。私はほとんどの研修期間を、呼吸器系疾患の患者が集まる第二内科で過ごした。呼吸器学、結核病学、腫瘍呼吸器学について、詳しい説明を受けた。私が第二内科やこの病院全体から受けた、以上の親切で根気良い対応は考えがたい。私はありとあらゆる外来、回診、診察、治療に立ち会い、どこへでも僚友のみなさんが呼んでくれた。僚友のみなさんが英語を話せるため、研修は非常に効果的だった。期待していた以上に私のために時間と労力を割いて下さり、友情を育んでくれた中村茂樹先生と原信太郎先生には、特に感謝している。彼らとは「結核の疫学、結核の感染コントロール、結核診断における諸問題、多剤耐性結核の治療」や、「肺がんの化学療法」、「感染病の病理診断」などといった、専門性の高い話題について日々話しあった。また気管支内超音波検査と経気管支生検のための細気管支カテーテル法を、事実上ほぼマスターした。

大村市の長崎医療センターでは、救急医療や集中医療、テレメディシンについて、非常によく知ることができた。ベラルーシでは医療航空制度が始まったばかりなので、非常に参考になった。

長崎大学の先端医育支援センターでは、呼吸器学の学生の教育、卒後教育などについて、詳しく知ることができた。

その他、休日や、平日の研修後の自由時間を最大限活用し、長崎の観光名所や、日本の歴史・文化に親しんだ。九州の有名な景観や建築について知りたいと思い、雲仙や熊本にも足を伸ばした。

日本での研修は、長崎大学の皆さんの、知識や経験を分けあいたいという好意がなければ、このような実りあるものにならなかったと思う。私はたくさんの知識と、ここで得た経験を帰国後活かしたいという熱意、そして日本の皆さんへの愛情を抱えて帰国の途につくところである。

NASHIM のみなさん、ありがとう。長崎大学のみなさん、ありがとう。日本の皆さん、ありがとう。



Venera Baisugurova（ヴェネーラ・バイスグーロヴァ）

カザフスタン共和国　国立カザフ医科大学
公衆衛生学部主任研究員

初日は長崎大学学長および大学病院院長への表敬訪問。また NASHIM 会長や、長崎県知事、長崎市長ともお会いした。地方行政機関が被爆者に関するあらゆる事業を援助していること、また NASHIM の研修に理解を示してくれていることを、特に記しておきたい。

上記の表敬訪問時に、日本の保健制度や、一般住民および「ヒバクシャ」と呼ばれる方々の健康問題、また治療・予防体制について色々とお聞きすることができた。

塚崎准教授、三根教授、李教授、中島教授、サエンコ准教授、工藤教授に、非常に興味深く、実際的な講義をしていただいた。

研修中に、私は長与町で、被爆者健診（スクリーニング）のやり方を見学した。健診時に、来診者の健康状態の変化を知るためにどのような問診が行われているのか、またどのように問診票が使われているのかを知った。また血圧測定、採血、身長・体重・胴囲測定、咬合など必要な検査がどのように行われているのかも目にした。

特記事項：
- ●充実した健診体制
- ●実際的で、機動的なこと
- ●住民が健診に行こうとする意思を持っていること
- ●地方行政機関からの支援（健診には長与町健康保険課の公衆衛生医師が同席する）
- ●健診を行う側の配慮
- ●短時間で対象グループをほぼカバーできていること
- ●単純で比較的安価な医療サービスで行われていること

長与町健康保険課課長中村宰子氏とお会いした時に、住民の健診事業、地域住民の健康状態や生活事情、健康増進のためのボランティアの活用、高齢者で病後や年金生活に入った人びとの精神的健康状態や社会復帰などについて、お聞きした。

研修中、私は日本の人口動態や保健制度、また住民の健康状態に関し、以下の機関から情報を得た。

大きく興味を惹かれたのは、長崎大学保健・医療推進センターの代表者達（山崎浩則氏、田山淳氏）のお話だった。学生の健康状態や、学生・教職員の健康診断についてお聞きした。保健・医療推進センターのスタッフが、自分たちの活動について説明してくれた。特に、センターが行なっている学生・教職員の精神的健康に関する調査、また必要に応じて行なっているカウンセリングについての話が興味深かった。

各地への移動健診用のバスの設備についても知ることができた。また、新生児の先天性および遺伝性の疾患を発見するための全体検査（日本では七つの疾患について検査が行われる）を行う検査室も見学した。

長崎大学医学部では、保健学科長松坂誠應教授、および看護学の浦田秀子教授、新川哲子准教授にお会いした。その折に看護師の養成方法、中等医療従事者の活動枠拡大に関する問題、医師との連携、看護師の高等教育などについてお話を伺った。看護師と医師の協力体制強化のために、外部の中等医療従事者養成機関が大学の下部機関になったという経緯をお聞きし、興味を惹かれた。

全体として日本での研修は、興味深く有益だった。私は公衆衛生の諸問題について、多くの新しい情報を得、予防医学の原則が現場でどのように実施されているのか、またその成果について知り、健康管理および保険制度など私が興味を持っている分野についても詳しく知ることができた。また、研修の運営についても好感をもった。その他にも長崎の名所旧跡を回り、日本人の文化と伝統についても新しく知るところが多かった。本研修の関係者および他の研修員に感謝したく、また将来の発展をお祈りする次第である。



8月9日の平和記念式典に参加



Kenes Akilzhanov (ケネス・アキルジャーノフ)
カザフスタン共和国　国立セメイ医科大学
パブロダール支部第二外科助教

初日はオリエンテーションの後、長崎大学学長および大学病院院長への表敬訪問。受講に先立ち、我々研修生は長崎原爆資料館、平和祈念館、原爆ホームを訪れた。また日本赤十字原爆病院、放射線影響研究所の視察も行なった。その他、長崎市の被爆者の健診センターも見学した。

NASHIM 会長や、長崎県知事、長崎市長ともお会いした。地方行政機関が被爆者に関するあらゆる事業を援助していること、また NASHIM の研修に理解を示してくれていることを、特に記しておきたい。上記の表敬訪問時に、日本の保健制度や、一般住民および「ヒバクシャ」と呼ばれる方々の健康問題、また治療・予防体制について色々とお聞きすることができた。

塚崎准教授、三根教授、李教授、中島教授、サエンコ准教授、工藤教授に、非常に興味深く、実際的な講義をしていただいた。

7 月 31 日から 8 月 20 日までの期間、私は外傷センター、整形外科、形成外科、また大村の長崎医療センターの業務を見学させてもらった。

特記事項：
- ●充実した入院・外来診療
- ●医療従事者の技量レベルの高さ
- ●最新で効果的な手法を用いた、高い診断力
- ●患者に対する思いやりのある暖かい態度
- ●実務の他、学術研究、データ分析をし、研修医や学生向けの内容の深い講義を聞いた。

研修期間中に、私は多くの有益な情報、かけがえのない経験を得た。研修の関係者全てに感謝し、将来のご成功をお祈りしたい。日本の皆さん、暖かく迎えてくれてありがとう！

核兵器禁止平和建設国民会議が活動助成金を寄附

今年も核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）に寄せられた浄財を活動助成金として、NASHIM に寄附をいただきました。核禁会議は1961年に結成され、核兵器廃絶、被爆者援護、平和建設のために積極的な活動を行っている団体ですが、活動の一環である被爆者援護運動として長年にわたりカンパ活動を実施され、多くの医療施設等へ健診車、車椅子、ベッド、医療機器等を寄附されています。NASHIM へも毎年、活動助成金を寄附していただいており、いただいた助成金は海外からのヒバクシャ医療研修生受入事業等に活用しています。

贈呈式は8月7日に長崎原爆資料館で執り行われ、NASHIM からは梶原事務局長が出席して、社会福祉法人恵の丘長崎原爆ホーム等の10団体と共に贈呈を受けました。

核禁会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

NASHIM としましても、この活動助成金を有効に活用し、世界のヒバクシャ支援に努めてまいります。

カザフスタン専門家派遣事業

[日程概要]

○8／21　長崎を出発し、福岡国際空港から出国（深夜アルマティ到着）。
○8／22　Almaty State Institute of Advanced Medical Education での講義
○8／23　カザフ医科大学訪問後、セメイ市へ移動。セメイ診断センター等訪問
○8／24　セメイ医科大学訪問並びに講義。セメイがんセンター等訪問
○8／25　核実験場跡訪問
○8／26　アルマティ市へ移動
○8／27　アルマティを出発し、帰国。

「カザフスタン初訪問紀行」



長崎大学　原爆後障害医療研究施設
アイソトープ診断治療学研究分野（原研放射）
工藤　崇

2012年8月21日から8月28日まで、NASHIMの専門家派遣事業として、カザフスタンを訪問いたしました。同行していただいたのは、長崎大学原研国際の高村教授、林田先生、関谷先生、およびNASHIM事務局の山下さんです。今回の訪問は従来のようなカザフスタンとの人事交流や長崎大学からの長崎賞授与に加え、私の専門であるPET、および林田先生の専門である乳がんの診療についての講演が目的でした。訪問の内容を旅行記風にお知らせしたいと思います。

Day2　アルマティ



カザフスタンの初日は、ALMATY STATE INSTITUTE OF ADVANCED MEDICAL EDUCATION（ASIAME）への訪問と、レクチャーから始まりました。ASIAMEでは30人程度でしょうか、大勢の先生・学生さんがたに対して、PETの話（主に腫瘍FDG PET）を雑駁ながらお話しさせていただきました。おそらくほとんどの方にはなじみがないと思っていた（これについては、Day4に覆されることになります）PETというジャンルについての話であり、興味を持っていただけるか大変に心配でありましたが、皆さん非常に熱心に聞いていただき、講義の後も大勢の方からご質問をいただいたのが深く印象に残りました。カザフスタンの方々の高い意欲が感じられました。引き続いて、長崎大学原研国際の林田先生の乳がんについての講義が行われましたが、これも皆さん質問が相次ぎました。

Day3 アルマティ＞セメイ

Kazakh National Medical University 訪問の後、セメイ市に移動。ちなみに今回の旅行ではセミパラチンスク核実験場への訪問が一つの大きな目的でしたが、この日セメイの旧称がセミパラチンスクであることを高村教授より教わりました（それまでセメイとセミパラチンスクが別の場所だと思っていたのは秘密です）。

Semey Diagnostic Center を訪問。画像診断医としては 3 テスラの MRI が稼働していたことが印象的でした。かつては日本の支援で CT が運用されていたが、現在では旧式になったことと、部品調達の問題から、運用されていないとのことです。画像診断機器は進歩のスピードが速くすぐに陳腐化してしまい、その割には維持費用が高額であることが、カザフスタンのような遠隔地での運用の大きな障壁となっていることを感じさせられました。大型機器を用いた医療支援についてのロジスティックスの重要性が認識されます。

Day4 セメイ

Semey State Medical University を訪問。PET についての講義。やはり、熱心さが印象的でした。引き続く林田先生の講義の後で、長崎賞の贈呈式が行われ、今年は 2 名が表彰されました。学習意欲の高さから考えて、今後も優秀な医師・医学者が育っていくのではないかと思われます。

午後は、Semey Oncology Center を訪問。今回最大の驚きが待っていました。

Semey Oncology Center は現在様々な拡張工事を行っており、そのうちの目玉の一つとしてサイクロトロンと PET の設置を行っている途中でした。まだ建築途中で建物の基礎を作っている段階ですが、基礎工事の規模から見て相当に大きな PET センターとなりそうです。聞くところによると、カザフスタン全土で合計 5 カ所の PET センターが建築中で、すべてサイクロトロンを保有するとのこと。旅行中うすうす感じていたことでしたが、カザフスタンという国家が非常に上向きの国家であり、大きな成長過程にあることを強く実感させられました。ここでは、PET 装置についての技術的なアドバイスを求められました。思わぬところで、思わぬ専門内の質問を受けたため、つい嬉しくなって「ノリノリ」になってしまい、長時間話し込んでしまいました。同行の先生方にはご迷惑をおかけしたことを陳謝いたします。



Day5 セメイ



この日は体調を崩してしまいましたが、核実験場訪問を強行。同行の皆さんには迷惑をおかけしてしまいました。セメイからクルチャコフ市に 2 時間かけて移動の後、さらに曇り空の下、広大なステップ地帯を 2 時間程度かけて核実験場の中心部に移動。広大なステップの光景が広がり、ぱっと見ただけでは、ここが核実験の中心地であるとは気がつかないでしょう。しかし、ポケット線量計は 3 μ Sv/hr 程度を指しています。強いところでは 20 ～ 30 μ Sv/hr のところもあるとのことです。核実験終了から 4 半世紀経過しているにもかかわらず、爪痕の大きさが感じられます。しかし、一方で、ステップの広大な風景は、逆に、自然の回復力の強大さ、人間の行為の矮小さも感じさせます。体調を崩した中ではありましたが、貴重な経験で、無理を押して良かったと思っています。

Day6 セメイ>アルマトイ

セメイ中央公園の見学。数日後に国際会議があるとのことで、準備中。巨大なキノコ雲のモニュメントが印象的でした。昼食の後、帰国に向けてアルマティ市に移動。

驚いたことに、同時期に長崎大学第二外科の江口教授も医療支援でカザフスタンを訪問中で合流。長崎とカザフスタンのつながりの深さを実感しました。



Day7 アルマトイ>日本

早朝の飛行機で日本に帰国。

7 日と短い（?）訪問で、体調を崩すなどいろいろありましたが、カザフスタンとの今後の友好関係の重要性が実感でき、また PET を専門としている私のような物でも役に立てる領域があることを知ることができ、大変有意義な訪問でした。このような機会を与えていただいた、NASHIM とカザフスタンの関係機関各位に感謝いたします。

韓国医師等への被爆者医療研修を実施



長崎大学中島先生の講義

韓国在住の被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる３名の医師を招いて、受入研修を実施しました。

９月９日から９月 14 日まで長崎に滞在し、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相について学びました。

［日程概要］

○９／ ９　　長崎到着
○９／ 10 ～ 13　関係先訪問・見学、
　　長崎大学（病院）での研修
○９／ 14　　帰国のため長崎出発



蒔本ナシム会長を表敬訪問

研修後の感想



金　泰炯（キム・テヒョン）
ソウル赤十字病院　内科 医師

ここに来る前は原子爆弾や放射線の被害に対して興味もなかったし、知識も全くありませんでした。私だけではなく、韓国人はほとんどがそうだと思います。

今回、ナシムの受入研修に参加して、原爆資料館と長崎原爆ホームでは原子爆弾の恐ろしさと放射線被害について生々しく感じました。その後、先生方の講義を受けて放射線被害について理解することができました。

福島原発事故以来、韓国でも放射能に対する関心が高まっていますが、それに対する知識や処置などについてはあまり知られていません。こういう状況の中で今回の研修に参加でき、様々な知識を得ることができて嬉しいです。

韓国にも原子力発電所がたくさんあるので、放射線被害が起きる可能性はあります。韓国に帰りましたら原爆被害者の診療だけではなく、あってはいけないことですが、万が一の事態に備えてこれからも続けて勉強していきたいと思います。

最後に日本滞在中、親切にしてくださったナシム関係者の方々、長崎県庁の皆様、講義をしてくださった先生方、皆様のご多幸を祈ります。



長崎市健康管理センターにて



宋　時淵（ソン・シヨン）

嶺南大学病院　耳鼻咽喉科　教授

9月10日から4日間、長崎大学病院をはじめ、原爆被爆者治療および関係機関などを訪問し、現場で勤めていらっしゃるたくさんの方々に触れ合う機会をいただきました。

原爆資料館と追悼記念館の訪問は今まで漠然と理解していた原爆の弊害について具体的に理解できる機会になりました。また、今回の研修を通じてナシムを含むいろんな団体が日本国内外の多くの被爆者のために、どれほど多くの事業を取り組んできたかと、どれほどたくさんの努力を注いでいるかが分かりました。

多様な講義を聞いて、原爆被爆だけではなく、チェルノヴイリの原発事故のような放射能流出事故を経験して、今まで多くの研究が進んできたことがわかりました。こういう研究結果を基に、2011年の東日本大震災により発生した福島原発事故の時は、長崎の研究者たちが蓄積された知識を持って積極的な対処をすることができたかと思うと、研修を受ける前に持っていた「この研修が本当に役に立つのか」という疑問が今は完全になくなりました。

今、4日間の貴重な研修を終えて帰国を準備していますが、韓国に帰ったら、今まで被爆患者を一般の患者と同様に接して診察してきた姿勢を捨てて、もっと細心に、誠意をつくして診察していきたいと思います。

最後に、暖かく迎えてくださった長崎県庁職員の方々や関係者の皆様、研修のチャンスを作ってくださったナシムの蒔本　恭会長、そして講義をしてくださった先生の方々にここを借りてお礼を申し上げます。

ありがとうございました。



高　志豪（コ・ジホ）

釜山医療院　放射線科 専門医

まず、ナシム研修がうまく行われるように支えてくださった関係者の皆様とナシム会長へ感謝のお礼を申し上げます。

私は映像医学科専門医（放射線科医師）なので「放射線」という言葉は常に触れていて聞き慣れていますが、今回の研修を通じて、原爆がどれほど人類に大きい悪影響を与えるのかが分かりました。

長崎大学の先生たちと長崎原爆病院の病院長の情熱的な講義に感謝いたします。

また、放射線影響研究所、長崎原爆ホーム、原爆資料館、原爆被爆者健康管理センターなど訪問先では暖かく迎えてくれましてありがとうございます。

国立長崎原爆追悼祈念館では厳粛なる雰囲気の中で、原爆の傷みを分かち合うきっかけになりました。特に原爆で亡くなられた方々のために6カ所に水が流れる場所を設けたことや、天井を透明にして空を通じて外部世界と共存できるように設計したことを聞いて、平和と愛についてもう一度考えて見ます。

いつも発展し続けるナシムになりますようにお祈りします。



長崎大学のホールボディーカウンター

第９回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者決定

NASHIM では、被爆 50 周年にあたる平成７年に、被爆者の救護に尽力した故永井隆博士の精神を引き継ぐことを目的に「永井隆平和記念・長崎賞」を創設し、以降、隔年でヒバクシャ医療の向上・発展とヒバクシャの福祉の向上に貢献した個人や団体を顕彰しています。第９回目となる今回は、ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長のミコラ・トロンコ博士を本賞受賞者に決定しました。



受賞者に決定したミコラ・トロンコ博士

トロンコ博士は、チェルノブイリ事故が発生する一か月前の 1986 年３月にウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長に就任。以降、一貫してチェルノブイリ事故による住民の甲状腺への影響に関する調査、検診事業に携わり、1995 年にはウクライナにおいて小児甲状腺がんが増加していることを Nature 誌に報告し、世界的な注目を受けられました。

さらには国際共同研究を推進することによってチェルノブイリ事故によって激増した甲状腺がんにおいて、Ret 遺伝子の再配列という遺伝子異常が高頻度にみられることを世界に先駆けて報告するなど、放射線誘発性甲状腺がんの疫学、分子生物学的研究をリードしてこられました。

また、種々の国際プロジェクトにも長年積極的に参画され、WHO（世界保健機関）の国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクプロジェクトにおいても、ウクライナの代表機関として放射線誘発甲状腺がんの摘出標本の管理にあたっておられます。

長崎大学との共同研究も長年にわたって推進されており、1991 年 11 月に外務省主導のチェルノブイリ専門家会議で長崎を訪問して以来、放射線誘発甲状腺がんについての共同研究推進に携わり、2003 年には両機関の間で学術交流協定を締結して、さらなる共同研究、人事交流の推進にあたられています。

授賞式は、来年２月９日（土）に、ベストウェスタンプレミアホテル長崎（長崎市宝町）で開催するナシム設立 20 周年及び長崎大学原研創設 50 周年記念合同シンポジウム実施に際して併せて行います。





参加者募集

ナシム設立20周年及び長崎大学原研創設50周年記念
合同シンポジウムの開催について

入場無料

日　時　平成25年　2月　9日(土)13:00
～2月10日(日)15:00

場　所　ベストウエスタンプレミアホテル長崎　3階

テーマ　長崎とヒバクシャ医療
～ 被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献･そして福島 ～

平成 24 年度は長崎ヒバクシャ医療国際協力会（ナシム）設立 20 周年及び長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設（原研）創設 50 周年の節目の年に当たります。

ナシム及び原研がこれまで蓄積してきたヒバクシャ医療の実績と、放射線障害に関する調査研究の成果を広く世界に発信するとともに、福島原発事故被災地への貢献を目指すため、シンポジウムを開催します。

なお、第 1 日目 (2 月 9 日) に、「第 9 回永井隆平和記念・長崎賞」の授賞式を併せて開催します。

参加者募集

〈一般の方〉

第 1 日目 (2 月 9 日 (土)) のみ参加できます。

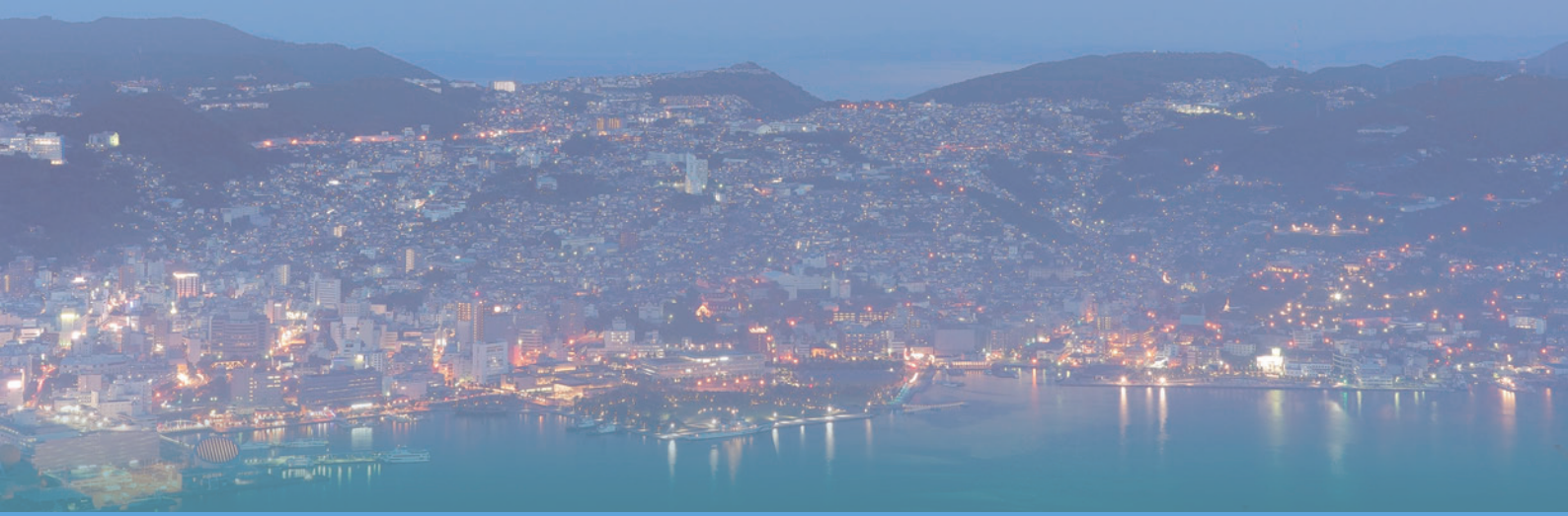
NASHIM ホームページの専用フォーム又は FAX によりお申し込みください。

〈医療関係の方〉

両日とも参加できます。

NASHIM ホームページの専用フォームによりお申し込みください。

ナシム　検索



NASHIM設立20周年及び長崎大学原研創設50周年記念

合同シンポジウム（原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会）

参加者募集
ただし、会場の都合上定員となりましたら、締切とさせていただきます。

入場無料

長崎とヒバクシャ医療

被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島

第1日目　2月9日（土）

13:00〜13:20	開会挨拶
13:20〜13:30	NASHIMと原研の沿革紹介
13:30〜14:10	来賓挨拶
14:10〜14:55	第９回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 賞状等贈呈式 受賞者挨拶
15:10〜17:30	シンポジウム ＜記念講演＞ **「科学技術文明の光と影：原研とNASHIMの世界展望」** 福島県立医科大学 副学長 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 山下　俊一 **「原研における原爆後障害研究の評価と今後の課題」** 日本赤十字社長崎原爆病院 院長 長崎大学名誉教授　朝長万左男 ＜特別講演＞ **「長崎を世界に」** 長崎大学名誉教授 （公財）放射線影響研究所 元理事長 長瀧　重信
17:30	閉会挨拶

第2日目　2月10日（日）

9:30〜 9:40	開会挨拶
9:40〜10:20	**講演「原子爆弾被害者援護行政について」** 講師：厚生労働省健康局総務課 原子爆弾被爆者援護対策室 室長補佐 有賀　玲子
10:20〜11:00	**セミナーⅠ** **「HICAREの活動及び被爆者健康管理について」** 講師：（公財）広島原爆障害対策協議会 健康管理・増進センター 所長 佐々木英夫
11:00〜11:10	休憩
11:10〜12:00	**セミナーⅡ** **「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）：これまでとこれから」** 講師：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 高村　昇
12:00〜13:00	休憩
13:00〜13:50	**セミナーⅢ** **「放射線と甲状腺癌：最近の知見」** 講師：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 原爆後障害医療研究施設長 永山　雄二
13:50〜14:50	**セミナーⅣ** **「放射線被曝の影響」** 講師：（公財）放射線影響研究所 臨床研究部長 赤星　正純
14:50	閉会挨拶

日本医師会生涯教育講座の対象（単位数　第1日目：4.5　第2日目：4.5 ）

募集要項

◎一般の方　2月9日のみ一般公開でのシンポジウムとして参加者を募集します。参加を希望される方は、下記のFAX参加申込書またはNASHIMホームページの専用フォームにてお申込ください。

◎医療関係者の方　2月9・10日の両日とも参加者を募集します。参加を希望される方は、ナシムホームページの専用フォームにてお申込ください。

ナシムホームページ専用申込フォームのURL http://www.nashim.org/jp/symposium/2012/

ナシム　検索

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会　Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care（NASHIM）

事務局へのFAX参加申込書（一般の方のみ）**FAX（095）895−2578**

ふりがな		ご職業・勤務先等	
お名前			
ご住所	〒　　−	電話番号	（　　）　　—

※ご記載の個人情報は、申込内容の確認などでのみ利用します。※入場券等は発行いたしません。当日受付でお名前をお尋ねします。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 第32号
発行／平成24年12月21日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095（895）2475　FAX 095（895）2578
http://www.nashim.org/

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

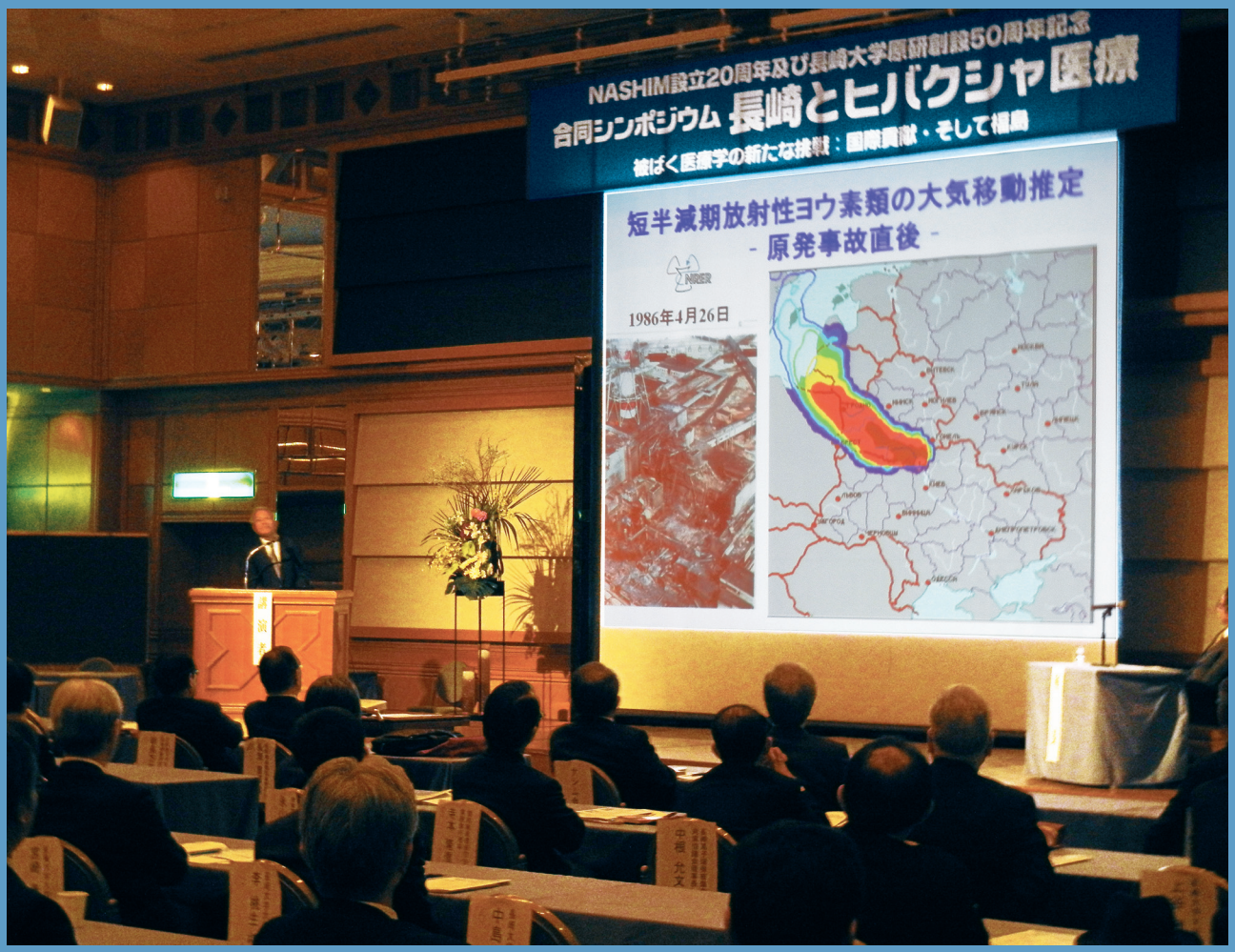
NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力会通信

Vol.33
2013

CONTENTS

■ ナシム20周年・原研50周年合同シンポジウム「長崎とヒバクシャ医療」
■ 第9回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
■ 韓国への専門家派遣事業
■ 韓国医師等の受入研修事業
■ 出前講座



ナシム20周年・原研50周年記念合同シンポジウム「長崎とヒバクシャ医療」での講演の様子

NASHIM設立20周年及び長崎大学原研創設50周年記念

合同シンポジウム（原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会）

長崎とヒバクシャ医療

被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島

開催日時

第1日目　2013年 2月 9日（土）
13:00~17:30（開場12:00）
一般公開

○第９回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
○シンポジウム

第2日目　2013年 2月10日（日）
9:30~15:00（開場9:00）
医療関係者の方が対象です

○ 講演及びセミナー（原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会）

会　場

ベストウェスタンプレミアホテル長崎
3階「プレミアホール」（長崎市宝町2-26）



主催：長崎ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設（原研）、長崎県
共催：長崎県医師会、長崎市医師会　後援：厚生労働省、文部科学省、放射線被曝者医療国際協力推進協議会（HICARE）、長崎市

2013年2月9日と10日の両日、長崎市内で「NASHIM設立20周年・長崎大学原研創設50周年記念合同シンポジウム」を開催しました。

その内容をご紹介いたします。

[開会挨拶]　主催者として、次の３名が挨拶を行いました。

○ 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長　　蒔本　　恭
○ 長崎大学学長　　片峰　　茂
○ 長崎県知事　　中村　法道



ナシム会長　蒔本　恭
（長崎県医師会会長）



長崎大学学長　片峰　茂



長崎県知事　中村　法道

蒔本ナシム会長あいさつ

本日、「ナシム設立二十周年・長崎大学原研創設 50 周年記念合同シンポジウム」を開催いたしましたところ、このように多くの皆様方のご参加を賜り、心からお礼を申し上げます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会、通称ナシムは、在外被爆者及び世界各地で発生した放射線被曝事故による被災者の救済を目的として、長崎大学、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、県・市医師会等の医療機関と県、長崎市が構成メンバーとなり、平成４年４月に設立いたしました。

以来、被爆地・長崎が有する被爆者医療の実績と、放射線障害に関する調査研究の成果を、世界のヒバクシャ医療の向上に有効に活用していただくため、国外の医師の受入研修や海外への専門医師の派遣、医学教科書の出版、小中学校等での出前講座開催などの事業を継続して行い、今年度で設立 20 周年を迎えたところであります。

この間、平成７年に、永井隆博士の崇高な平和希求の精神を受け継ぎ、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承する「永井隆平和記念･長崎賞」を創設し､国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰しております。本日も後ほど、本年度の受賞者であるウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長　ミコラ・トロンコ様の授賞式を実施することとしております。

また、一昨年の東日本大震災に伴う福島第一原発事故に際しては、放射能に対する大きな社会不安が生じたことから、東京において連続３回のシンポジウムを開催するなど、放射能を正しく理解してもらい、風評被害をなくすための啓発活動にも積極的に取り組んでおります。

当協力会といたしましては、20 周年を大きな節目として、引き続きヒバクシャ医療を通じて、長崎から世界への貢献と、国際協力の推進に全力を挙げてまいる所存でありますので、皆様方の変わらぬご支援・ご協力をお願い申し上げます。

さて、本日と明日の２日間にわたり、私どもナシムと、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設の合同記念事業として、「長崎とヒバクシャ医療」をメインテーマとしたシンポジウムを開催いたしますが、この取り組みが、今後のヒバクシャ医療の向上・発展に少しでも役立つものとなれば幸いに存じます。

最後に、シンポジウムへの出席をご快諾いただいた講演者の方々と、開催にご尽力いただいた関係機関の皆様に心からお礼を申し上げます。



会場全体の様子（1 日目）

[ナシムと原研の沿革紹介]

主催者から、設立 20 周年を迎えたナシムと、創設 50 周年を迎えた原研の沿革紹介を行いました。

○ 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会運営部会長　　上谷　雅孝（長崎大学大学院教授）

○ 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原爆後障害医療研究施設長　　永山　雄二

[来賓挨拶]

○ 環境大臣政務官　　秋野　公造　様

○ 衆議院議員　　北村　誠吾　様

○ 文部科学省高等教育局医学教育課長　　村田　善則　様

○ 厚生労働省健康局総務課原子爆弾被爆者援護対策室室長補佐　　有賀　玲子　様

○ 広島大学原爆放射線医科学研究所長　　神谷　研二　様

○ 長崎市長　　田上　富久　様



環境大臣政務官　秋野　公造　様



衆議院議員　北村　誠吾　様



文部科学省　村田　善則　様



厚生労働省　有賀　玲子　様



広島大学　神谷　研二　様



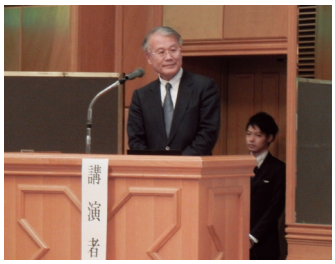
長崎市長　田上　富久　様

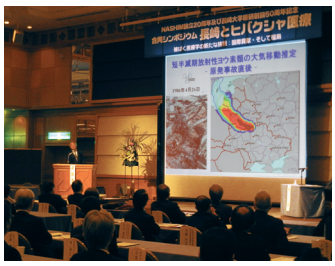
第1日目 2月9日（土） シンポジウム

○ 記念講演

講師 **山下　俊一** 氏
福島県立医科大学副学長、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授

演題 **「科学技術文明の光と影：原研と NASHIM の世界展望」**





山下副学長の講演概要

人類史の中で放射線や放射能の発見からすでに 100 年以上が経過し、この間、常に過剰被ばくによる健康影響が話題となってきた。科学技術文明の進歩が醸し出した光と影が最も鮮明に位置づけられるのが、放射線事故・災害に伴う健康リスクであり、社会リスクである。特に、広島・長崎の原爆被災による急性ならびに慢性の放射線障害への対応には、基礎ならびに臨床医学における後障害医療研究を不可欠としてきた。チェルノブイリ原発事故から福島原発事故の関わり合いを含めて、長崎における原爆医療と医学研究の将来展望を探る。

○ 記念講演

講師 **朝長　万左男** 氏
日本赤十字社長崎原爆病院院長、長崎大学名誉教授

演題 **「原研における原爆後障害研究の評価と今後の課題」**





朝長病院長の講演概要

研究活動は半世紀を超え、放射線の人体影響の「生涯持続性」を明らかにしつつある。急性放射線症による死亡率を明示した長崎医科大学の調来助教授と医師・学生らによる調査研究に淵源をもつ後障害観察が 50 年の長きにわたり続けられてきた。初期後障害である白血病の治療対応に追われる中、原研は創設され、現在もなお癌と白血病の持続および多臓器被ばくによる「多重癌」の実態が明らかにされつつある。1945 年に臓器幹細胞の DNA が傷つき、遺伝子不安定性を引きずり、発がんに至るものと考えられる。被爆者の医療を担うべく創設された原研の業績をふりかえるとともに、今後の課題を展望する。

○ 特別講演

講師 **長瀧　重信** 氏
長崎大学名誉教授、放射線影響研究所元理事長

演題 **「長崎を世界に」**





長瀧名誉教授の講演概要

演者が長崎に赴任した 1980 年は、NASHIM は設立前、原研は創設 17 年目であった。「長崎を世界に」をモットーに、長崎から世界に発信できるテーマを求めて努力するなか、被爆した唯一の大学を再認識し、チェルノブイリ事故調査にも協力した。その経験が福島での長崎と長崎大学の貢献として活用されている。今後も、同じ目線で国内外の様々な組織と密接に協力しながら、人材の育成、知識の共有並びに拡大を通じ、長崎大学が世界のセンターであり続けることを祈っている。

第9回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

ウクライナのミコラ・トロンコ氏に授与



ナシムでは、故・永井隆先生の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、平成7年に永井隆平和記念・長崎賞を創設。原子爆弾による被爆者及び放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体を表彰しています。

今回で第9回となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式を合同シンポジウムの中で行いました。
ウクライナから来日された受賞者ミコラ・トロンコ氏に、蒔本ナシム会長から賞状と賞碑（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金を授与しました。

受賞者紹介





1. 氏名・年齢　Mykola Tronko（ミコラ トロンコ）（68歳　ウクライナ）

2. 主な経歴

・1961年　9月～1967年　6月　キエフ医療研究所内科医
・1967年　9月～1970年　9月　内分泌代謝研究所研究員
・1971年11月　医学準博士号取得（専攻：内分泌学）
・1981年　4月　内分泌代謝研究所副所長
・1984年　7月　医学博士号取得（専攻：内分泌学）
・1986年　3月～現在　ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長
・1989年12月　教授
・1992年11月　ウクライナ科学アカデミー客員（専攻：放射医学）
・1993年　4月　ウクライナ医学アカデミー客員（専攻：内分泌学）
・2010年　9月　ウクライナ医学アカデミー会員（専攻：放射線内分泌学）

3. 主な活動

1986年　4月	チェルノブイリ事故後、最汚染地域から避難した子供たちに対する内分泌検査および治療を実施
1989年　1月	チェルノブイリ事故で被曝し、甲状腺病変、特に甲状腺がんを発症した子供や若者たちを対象に外科治療を実施
1991年　1月	検査対象者に対する甲状腺病変の術前診断プロセスに穿刺吸引生検を導入
1991年　2月	チェルノブイリ事故で被曝したウクライナの子供や若者たちの甲状腺がん臨床形態学記録を作成・管理

1995年　2月	チェルノブイリ事故で被曝した子供や若者たちへの放射性ヨードによる術後療法のための専門の臨床放射線科を創設
1998年10月	ウクライナの国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクを設立
1998年11月	ウクライナのより汚染のひどかった地域の被曝者に対するスクリーニング検査をウクライナーアメリカ甲状腺プロジェクトの枠組み内で実施
2011年　1月	チェルノブイリ事故で被曝したウクライナの子供や若者たちを対象とした甲状腺がんの分子疫学調査を長崎大学と共同で実施



第９回永井隆平和記念・長崎賞受賞者を囲んでの記念写真（前列中央が、受賞者のミコラ・トロンコ氏）

第2日目　2月10日（日）　講演及びセミナー

（原子爆弾被害者指定医療機関等医師研究会）

○講演

講師　**有賀　玲子**　氏

厚生労働省健康局総務課　原子爆弾被爆者援護対策室室長補佐

演題　**「原子爆弾被爆者援護行政について」**



講演概要

本講演においては、原子爆弾の被害及び被爆者援護施策の沿革として、過去の国の施策および現在の被爆者に対する援護の仕組みについて解説する。また、特に原爆症認定について取り上げ、現行の原爆症認定制度の概要やこれまでの経緯、現在開催されている原爆症認定制度の在り方に関する検討会等について紹介する。

○ セミナーⅠ



講師　**佐々木　英夫**　氏
広島原爆障害対策協議会　健康管理・増進センター所長

演題　**「HICARE の活動及び被爆者健康管理について」**

講演概要

放射線被曝者医療国際協力推進協議会（HICARE）は 1991 年に、被爆者治療の実績と放射線障害に関する研究の成果を国内外の被曝者医療に生かしていくために設立された。広島の原爆放射線の医療に関わる 8 つの機関と行政機関の連合体で、受け入れ研修、専門家派遣、講演会の開催、出版などの事業を展開している。本講演では HICARE の事業とともに、被爆者の健康管理の現状および課題を提示する。

○ セミナーⅡ



講師　**高村　昇**　氏
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授

演題　**「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）：これまでとこれから」**

講演概要

長崎ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は 1992 年に、在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として設立されヒバクシャ医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に努めてきた。

本講演では、NASHIM の国内外での活動実績を紹介し、今後の展望について概説する。

○ セミナーⅢ



講師　**永山　雄二**　氏
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　原爆後障害医療研究施設長

演題　**「放射線と甲状腺癌：最近の知見」**

講演概要

長崎・広島原子爆弾被爆者、チェルノブイリ原子力発電所事故周辺住民のデータを基にした放射線誘発甲状腺癌の臨床疫学調査結果、癌遺伝子や甲状腺癌感受性遺伝子の基礎研究を紹介し、福島原発事故後の現状も概説する。さらに放射線誘発癌基礎研究の現状と将来展望も紹介する。

○ セミナーⅣ



講師　**赤星　正純**　氏
放射線影響研究所　臨床研究部長

演題　**「放射線被曝の影響」**

講演概要

一昨年の東日本大震災の際の津波により引き起こされた福島原発事故後、放射線被曝による健康影響に注目が集まった。この放射線被曝による健康影響は、主に原子爆弾被爆者を長期追跡調査することにより明らかにされた。この事を踏まえ、放射線影響研究所で長期追跡調査を行っている被爆者集団の成り立ち、そこから得られた放射線被曝の「がん」及び「がん」以外の疾患に及ぼす影響について説明する。

韓国への専門家派遣
～被爆者医療セミナーの開催～

1回目は12月に、陜川（ハプチョン）の医療機関を訪ねるとともに、陜川原爆被害者福祉会館で被ばく者医療セミナーを行いました。

2回目は2月に、ソウル市内で大韓赤十字社本部を表敬訪問するとともに、韓国で被爆者治療に従事している医師等医療関係者に対し、広島・長崎の被ばく者医療の最新の知見と、福島第一原子力発電所事故への対応や健康影響について講演するため、広島の放射線被曝者医療国際協力推進協議会（HICARE）と初めて合同で実施しました。

各回の日程や講演者及びセミナーの内容は次のとおりです。

1回目

［日程概要］

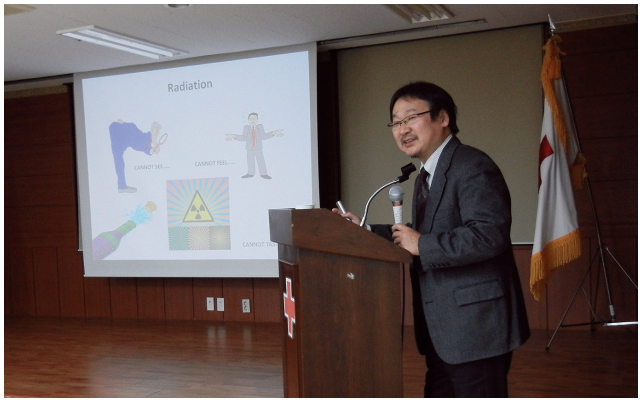
12／ 9　長崎出発
12／10　陜川で関係先訪問、セミナー実施
12／11　帰国

講演者　長崎大学先導生命科学研究支援センター　　教授　松田　尚樹　氏

「放射線とその被ばく影響の基礎」

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　医療科学専攻
リハビリテーション科学講座　精神障害リハビリテーション学分野
教授　中根　秀之　氏

「被ばくの精神健康影響とそのケア」



講演を行う松田教授



講演を行う中根教授


現地コーディネイトをしていただいた大韓赤十字社特殊事業所の呉さんです。
大変お世話になりました。

「NASHIM 専門家派遣事業セミナーに参加して」



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　医療科学専攻
リハビリテーション科学講座　精神障害リハビリテーション学分野
教授　**中根　秀之**

2012年12月9日から11日の日程で、韓国ハプチョンでNASHIMの専門家派遣事業に参加させていただきました。韓国に到着したのが、9日の夜でしたので、翌日10日朝からプサンからハプチョンにむかいました。長崎からの参加者は、私以外に長崎大学先導生命科学研究支援センターの松田尚樹教授と、ナシム事務局の熊さんの3人でした。

現地では大韓赤十字社のスタッフである呉尚恩さんも同行し、10日は、朝よりハプチョンにあるハプチョン原爆被害者福祉会館にて、在韓被爆者現況の説明を受け、同施設の見学も行いました。ここは、日本と韓国両政府が負担してできた被爆者のための施設で、現在101人（男性27人、女性74人）が生活しておられました。福祉サービスの提供とともに、看護師や理学療法士が配置されているため、園芸療法などの様々なリハビリテーション活動も行われていました。身体疾患のみならず、認知症のケアも必要であり、スタッフの研修が実施されていると聞きました。高齢化している被爆者の深刻な問題の一つを垣間見る感じがしました。その後、ハプチョン市内にある被爆者医療にかかわる医療機関を見学させていただきました。



○ハプチョン高麗病院

チュ・チョンジャ理事から施設の説明を受けました。精神科、老年科を現在ある病院で主に治療を継続し、一般診療科を市街地の中心部に新病院を建てて移す計画であることを聞きました。精神科病棟の内部を拝見することはできなかったことは、少し残念でした。しかし、急なお願いであったにもかかわらず、勤務していた医師にお会いして、韓国での精神医療の現状について意見交換できたことは、大変貴重な経験でした。

○ハプチョン病院

キム・ジンテ院長によるこれまでの活動と今後のビジョンについてプレゼンテーションを聴かせていただきました。ハプチョン病院の位置づけは、家庭医の役割を果たす医院と、大規模な総合病院の間に位置する病院としての性格を持っているとのことでした。今後急性期だけではなく、療養病棟の併設も行い、積極的に韓国の被爆者医療について協力していきたいと述べておられました。

6時からは、再び福祉会館に戻り、NASHIMセミナーを行いました。参加者は、30名を越え、用意した座席は満席でした。初めに、大韓赤十字社の呉さんから、このセミナーの説明と講師紹介をしていただきました。

まず長崎大学先導生命科学研究支援センターの松田尚樹教授が、放射線に関する知識について、福島の現状も含めてお話しされました。たいへんわかりやすく、ユーモアを交えた明快なお話だったので、参加者からも専門的な質問が出され興味の高さを感じました。

次に、私から被爆者の精神健康として原爆被爆に関する精神的健康問題とトラウマを抱えた人へのケアの二つのテーマについてお話しさせていただきました。原爆被爆に関する精神的健康問題について、長崎の被爆者に関していくつかの精神健康に関する研究が報告されています。しかし、被爆後自身の国に引き上げた在外被爆者に関する精神的問題に関する研究やサポートに関する報告はほとんど見られないのが現状でした。このため在韓被爆者の精神健康状態の把握の為、大韓赤十字社やキョンヒ大学精神科の協力のもと行った在韓被爆者の精神的健康について実態調査の結果をお話ししました。精神健康に何らかの問題がある人の割合は被爆者群50.7%に対し、対照（非被爆者）群26.8%と有意差がみられました。さらに被爆体験の有無が精神健康の悪化に影響を及ぼしていることが示唆されました。在外被爆者の精神健康に対するケアの必要性が示されたわけです。



続いてトラウマを抱えた人へのケアについて説明しました。原爆被爆者の痛みとは、身体的問題、身体疾患などの身体的痛み、不安、抑うつなどの精神的痛み、偏見や差別、社会的不利などの社会的痛みであり、全人的痛みという理解が必要であることです。被爆者の心理は大変複雑です。被ばく経験に伴う抑うつ、不安、絶望。遺されて感じる罪悪感や怒りもあります。どうして私は生き残ったのか。身体的にも問題を抱えます。自分の身体的不調に加え、家族の身体的不調もとても不安になります。被爆後に、偏見・差別を受けることもあります。その一方で、回復への期待を持っています。こころのケアをどのように行うのかということは大変重要です。こころのケアに対して、魔法のような効果があるのではないかという期待がある一方、精神医学的問題に対する偏見、差別からケアは不要という方がいらっしゃいます。被爆者のケアで重要なことは、安心・安全の保障、正しい知識と対処法、主体性とペースが守られること、治療システムの構築などの事柄であることを説明しました（表1）。

表1　こころのケアのポイント

1. 安心・安全の保証
- ・生命財産の安全や当面の生活基盤の確保
- ・守られている、一人じゃない
- ・周囲が徐々に落ち着いていく
- ・危ない、恐いところには近づかなくてよい
- ・無理の無い範囲で日常生活を回復

2. 正しい知識と対処法
- ・予測される反応と対処法
- ・異常な事態への正常な反応という理解※

3. 主体性とペースが守られること
- ・話したいことを聞いてもらえる
- ・話したくないのに根掘り葉掘り聞かれない
- ・自分なりの方法とペースが尊重される

4. 治療システムの構築
- ・一般科と精神科との連携
- ・医療機関・公的機関との連携

韓国では、現在自殺者の急増が問題となっています。OECDの2010年データでも世界一位の自殺者となっており、特に高齢者の自殺は日本や米国の4-5倍といわれています。このため高齢者のケアは大変重要であり、精神健康の重要さが実感されていると思います。そのため、この時期にこのような機会を得ることができたのはたいへん貴重な経験でした。ご協力いただきましたNASHIM関係者、大韓赤十字社、長崎県をはじめ多くの方々に心より御礼申し上げます。

2回目

主催：HICARE　　共催：NASHIM　　協力：韓国原子力医学院（KIRAMS）、大韓赤十字社
会場：ソウル　プレジデントホテル　　対象：医師等医療関係者

［日程概要］

2／19　長崎出発
2／20　ソウル市内で関係先訪問、セミナー実施
2／21　帰国

講演者　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科（原研内科）　教授　宮﨑　泰司　氏
「原爆被爆者のための医療」

なお、HICAREの講演は次のとおり
講演者　放射線影響研究所　理事長（HICARE会長）　大久保　利晃　氏
「HICARE活動内容の紹介及び原爆放射線の健康影響調査における最近の研究成果」

広島大学救急医学　教授　谷川　攻一　氏
「福島第一原子力発電所事故の対応」

放射線影響研究所　主席研究員　児玉　和紀　氏
「福島の原子力発電所事故による被曝レベルとリスク」


講演を行うNASHIMの宮﨑教授

「韓国での放射線被曝者医療セミナーに参加して」



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　原爆・ヒバクシャ医療部門
血液内科学研究分野（原研内科）
教授　**宮﨑　泰司**

今回、広島のHICAREとの連携事業として、韓国（ソウル）で「放射線被ばく医療セミナー」が開催されました。

HICAREはこれまでに医療関係者を主な対象として、放射線被ばくに関するセミナーを米国などで実施しておられます。一方、長崎県では在韓被ばく者の健康相談事業を、NASHIMでは在韓被爆者の診察・治療などを行う医療関係者に対し、被爆者医療セミナーを行う派遣事業や長崎での受入研修事業を実施してきました。今回、HICAREがソウルでセミナーを開催することになり、韓国でこれまで活動してきたNASHIMとの連携を希望され、こうした形が実現したことになります。セミナー実施に当たっては韓国原子力医学院(KIRAMS)、大韓赤十字社のご協力を得て実施されました。

2013年2月20日にソウルのプレジデントホテルにて70名を超える方が参加しての開催となりました。大久保利晃先生（HICARE会長、放射線影響研究所理事長）、児玉和紀先生（HICARE幹事、放射線影響研究所主席研究員）、

谷川攻一先生（HICARE幹事、広島大学救急医学教授）の3名がHICAREからの演者として、私がNASHIMからの演者として計4名が放射線被ばくに関連することをお話ししました。セミナーではまず、大久保会長がHICAREの説明をなさり、日本での放射線の人体影響研究の代表として放影研での原爆被爆者研究の概要をお話になりました。その後、谷川先生から福島第一原子力発電所の事故に対する医療活動、児玉先生からその事故での被爆に関するお話がありました。私はNASHIMの紹介と、被爆者にみられる主に血液悪性腫瘍（白血病と骨髄異形成症候群）の発生と治療についてお話をし、そのような状況の被爆者の皆さんに対して長崎原爆被爆者対策協議会で行われている検診事業とがん検診の結果をお示しして、原爆被爆者に対する医療の状況を解説しました。


講演を行う HICARE の大久保会長



HICARE と NASHIM の先生方と KIRAMS 関係者
（右から 2 人目が宮﨑教授）

谷川先生、児玉先生のお二人には大変多くの質問があり、福島で実際には何が起こったのか、今何が起こっているのか、放射線被ばく事故にどう対応すれば良いのかなど、韓国で原子力発電所事故を含めて放射線事故に関する大変強い関心があると感じました。また、セミナー後の会食では私のところへも被爆者の血液疾患の治療について数名の方が質問にこられ、一定の興味は持って頂けたのではないかと思います。

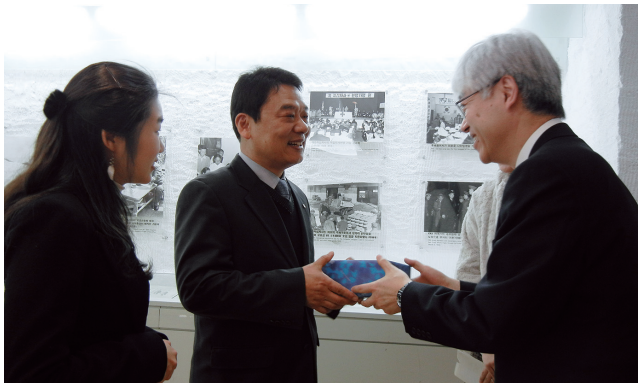
HICAREとの連携事業として韓国で医療関係者に対して講演を行うという試みは初めてでしたが、国外の医療関係者、放射線事故対応の中心となる方々に対してのセミナーも大変意義のあることと感じました。さらに世界のヒバクシャ支援をおこなっているHICAREとNASHIMが今後さらに協力して活動していくことも重要だと思います。

今回、声をかけて頂いた大久保会長始めHICAREの皆様、色々とお世話頂いたNASHIM事務局に御礼申し上げます。



歓迎の挨拶を行う KIRAMS の李院長

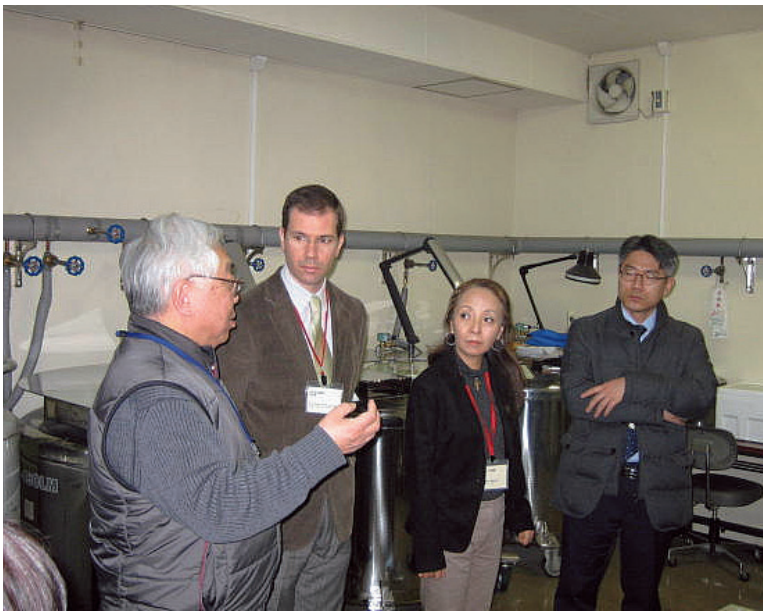

セミナーに先立ち、大韓赤十字社事務総長を表敬訪問する
HICARE と NASHIM の先生方


高事務総長に長崎からのお土産を贈る宮﨑教授



大韓赤十字社本部前にて
（前列中央は高事務総長。事務総長の右は宮﨑教授）

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施



放射線影響研究所で説明を受ける研修生たち

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる韓国医師1名を招いて受入研修を実施した。2月18日から6日間、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関で、被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

なお、今回の研修では、長崎県が在外被爆者支援事業の一環で招へいしたブラジル医師2名（ジョゼ・レナト・ダス・グラサス・アマラル氏及びリディア・ミネ・ミヨシ氏）と一緒に研修を受講しました。

［日程概要］

○2／18	長崎到着
○2／19～22	関係先訪問・見学、 長崎大学（病院）での研修
○2／23	帰国

研修後の感想



嶺南大学病院放射線腫瘍学科専門医

姜　珉珪（カン・ミンギュ）

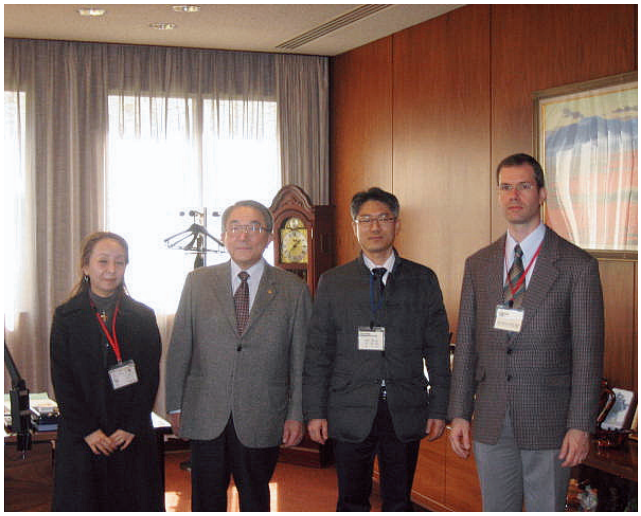
今回、ナシムの受入研修に参加して、原子爆弾の恐ろしさを生々しく感じることができました。以前は原子爆弾の直接的な影響（破壊力や癌の増加など、目に見える影響）しか考えていませんでしたが、今回の研修を通じて被爆者や被爆者の家族の心理的な苦痛まで感じることができ、非常に有益な研修でした。

ただし、研修内容について、ものたりないと感じたのは、ほとんどの講義の内容が今までの研究結果についてだということです。過去の経験を土台にして未来に備えるのが重要だと思います。今後は、過去の経験と研究結果を基にこれからどういう努力（社会的および医学的な研究など）が必要なのかについて考える研修カリキュラムも設けていただければと思いました。もちろん全ての研修対象者が放射線関連の仕事をしているとは限りませんが、そうだとしてもかなり役にたつと思います。

私の専攻が放射線と関連があるため、実際に患者さんを診療するとき、長崎での研究結果を使って放射線の影響について説明したり、放射線に関する漠然とした不安を解消することに努めています。長崎でのこれまでの豊富な研究成果についてとても感謝しています。



長崎大学で講義を受ける研修生のみなさん



ナシムの蒔本会長を表敬訪問



長崎大学病院の増﨑副病院長を表敬訪問



原爆資料館にて



長崎大学医学部良順会館のミュージアムにて

出前講座



NASHIMでは、ヒバクシャ医療を通しての国際協力や放射線被ばく医療等についての知識を普及するため、「平成の鳴滝塾　～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方が各地に出向き講義を行う「出前講座」を実施しています。

今年度は、日本原子力研究開発機構核不拡散・核セキュリティ総合支援センター（茨城県東海村）が世界各国の原子力規制等に係る関係職員等を対象に原子力が核兵器に利用された場合に引き起こされる結果を強く印象づけ、核不拡散の重要性を再認識してもらうための国際トレーニングを行っており、その参加者が被爆地長崎を訪問した際に、出前講座を受講しました。

いずれも、「原爆直後の救護活動と調査」と題して、長崎大学の三根真理子教授が、アニメーションも入れてわかりやすく講義を行いました。

［日程等］ 1回目：平成24年10月20日（土）　参加者数34名
2回目：平成24年12月　1日（土）　参加者数25名



10月20日実施の出前講座を受講された皆さんとの記念撮影（手前中央の女性が三根教授）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信 第33号
発行／平成25年3月27日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570 長崎市江戸町2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL 095（895）2475　FAX 095（895）2578
http://www.nashim.org/



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

〒850-8570 長崎市江戸町 2-13（長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内）
TEL：(095)895-2475　FAX：(095)895-2578

NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHA'S MEDICAL CARE (NASHIM)

ATOMIC BOMB SURVIVOR'S AFFAIRS DIVIDION
HEALTH AND WELFARE DEPARTMENT
NAGASAKI PREFECTURAL GOVERNMENT
2-13 EDO-MACHI,NAGASAKI CITY,850-8570 JAPAN
TEL：(+81)95-895-2475 FAX：(+81)95-895-2578
http://www.nashim.org/
E-Mail:info@nashim.org

発行　2014 年 2 月　第 1 版